秋田県文化財調査報告書第448集

払田柵跡 Ⅲ

── 長　森　地　区 ──

【本 編】

２００９年3月

秋　田　県　教　育　委　員　会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

題字　新　野　直　吉　書

ほったのさくあと

払田柵跡 Ⅲ

―― 長森地区 ――

【本編】

２００９年３月

秋田県教育委員会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

序

大仙市と美郷町にまたがる払田柵跡は、明治35年秋の“埋もれ木”の出土を端緒として、昭和に入ってから後藤宙外・藤井東一らの努力によって古代の城柵跡として知られるようになりました。昭和５年10月には文部省嘱託上田三平による本格的な発掘調査の成果を受けて、翌年には秋田県初の国指定史跡となりました。

秋田県教育委員会が昭和49年４月に現地に払田柵跡調査事務所を設置して、遺跡の保護とその解明に取り組みはじめてから35年が経過しました。発掘面積は約５万㎡に達し、多くの新しい事実が明らかにされ、考古学、古代史等の研究に新資料を提供し続けています。

史跡の管理団体である大仙市では、この調査成果に基づき、遺跡の整備事業を鋭意推進しています。政庁に始まり、外郭南門と石塁・石段、外郭南門東方建物、外柵南門と材木塀・南大路・河川・橋梁、政庁東方の官衙域などで実施した整備により、見学者もますます増加し、遺跡の理解は一段と深められるようになりました。史跡公園は、レクリエーション・憩いの場としても四季折々に活用が図られています。

本書は、払田柵跡の長森地区の調査成果をまとめた正報告書で、昭和59年度に政庁地区をまとめた『払田柵跡Ⅰ』と平成10年度に区画施設をまとめた『払田柵跡Ⅱ』に次ぐものです。本書が古代遺跡・城柵官衙遺跡の研究と保護の一助になれば幸いです。

本書をなすにあたり、日頃より払田柵跡の調査研究に御指導をいただいております調査指導委員、文化庁、独立行政法人奈良文化財研究所、宮城県多賀城跡調査研究所に心より感謝申し上げるとともに、大仙市、大仙市教育委員会、美郷町、美郷町教育委員会、並びに土地所有者・関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成21年３月

秋田県教育委員会
教育長　根　岸　　均

刊行にあたって

秋田県第１号の国指定史跡である払田柵跡の発掘調査が、秋田県教育委員会の払田柵跡調査事務所によって本格的に開始されてから35年の時間が経過した。

この間、史跡の管理団体である大仙市(旧仙北町)、美郷町(旧千畑町)をはじめ、生涯学習課文化財保護室(旧文化課)や秋田県埋蔵文化財センターなどと緊密な連携を取りながら「払田柵跡」の学術究明が進められた。

昭和49年４月に開設された払田柵跡調査事務所は、昭和５年の高梨村(現大仙市)と文部省による二度の調査で「無名不文の遺跡」と記述されて以来、長らく放置状態であったこの遺跡に対して考古学的な手法で調査研究を行うことを責務としてスタートした。各年度の地道な調査の積み重ねは、昭和60年３月に『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』として結実し、従来知られていなかった政庁跡の全容が明らかにされ、他城柵との比較検討も試みられた。また、平成11年３月には『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』が刊行され、柵木の年輪年代測定により、この城柵の構築が９世紀初頭より古くは遡らないことが明確にされたのであった。

この度、正報告書の第３冊目となる長森地区に関する調査研究の成果が一書に纏めらることになった。払田柵跡調査の必要性を早くから主張していた者の一人として、欣快の至りである。

しかし、本書を含めた３冊の報告書の刊行をもっても「払田柵跡」の実態解明が尽されるには至らない。それは多くの新知見が加えられた一方で、関連を持ち或いは独自で新たな少なからぬ疑問も生まれたからである。それが学問研究の常なる在り方である。それら疑問と新たな命題との検討解明は、文化財行政の本則であるから、この後も国指定史跡「払田柵跡」の調査研究は継続されることが文化を大切にし、観光産業を重視する秋田県にとって必要有益であると痛感する次第である。

平成21年３月

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
調査指導委員会
委員長　新　野　直　吉

例　　言

1　本書は、払田柵跡長森地区の正式報告書『払田柵跡Ⅲ』［本編］［別編］のうちの［本編］である。ここでいう長森地区とは外郭線で囲まれた地区内を指し、丘陵部及び外郭北門周辺の沖積地を含む。同地区内には、政庁跡や区画施設の一部（外郭線・門・櫓状建物跡等）も存在するが、これらは『払田柵跡Ⅰ』『払田柵跡Ⅱ』で報告を行っている。従って政庁跡や外郭線に関係する事項は本書には、その概要を紹介することに留め、年報（年次刊行の概報）でのみ取り上げていた地区の様相について詳述することに主眼を置く。年報等で当事務所がこれまで公表したものと見解が異なる場合は、本書の記述内容が優先するものとする。

2　本書作成にあたり、史跡払田柵跡調査指導委員である秋田大学名誉教授　新野直吉氏、国立歴史民俗博物館名誉教授　岡田茂弘氏、富山大学人文学部教授　黒崎　直氏、秋田大学学長特別補佐　熊田亮介氏から御指導いただいた。また、次の方々より有益な教示を得た。記して謝意を表する。

坂井秀弥（文化庁記念物課）、平川 南（国立歴史民俗博物館）、大庭康時（福岡市教育委員会）、岡寺 良（九州歴史資料館）、渡辺晃宏・巽淳一郎・千田剛道・川越俊一・井上和人・高橋克壽・金田明大・山本 崇・神野 恵・馬場 基（奈良文化財研究所）、宮川禎一（国立京都博物館）、井上喜久男（愛知県立陶磁資料館）、鈴木拓也（近畿大学文芸学部）、小嶋芳孝（石川県埋蔵文化財センター）、山本信夫（山本考古学研究所）、北條朝彦（宮内庁書陵部）、鐘江宏之（学習院大学文学部）、田中広明（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、笹生 衛（千葉県安房博物館）、池田敏宏・津野 仁（とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター）、高島英之（群馬県埋蔵文化財調査事業団）、穴澤義功（たたら研究会）、飯村 均・菅原祥夫（福島県文化振興事業団遺跡調査部）、工藤雅樹（福島大学名誉教授）、進藤秋輝（東北歴史博物館）、熊谷公男（東北学院大学文学部）、古川一明・村田晃一・吉野 武（宮城県教育委員会・多賀城跡調査研究所）、長島栄一（仙台市教育委員会）、佐藤敏幸（東松島市教育委員会）、三上喜孝（山形大学人文学部）、阿部明彦・山口博之・高桑弘美・高桑 登（山形県教育委員会・山形県埋蔵文化財センター）、宮本長二郎・北野博司・荒木志伸（東北芸術工科大学歴史遺産学科）、本澤慎輔・八重樫忠郎・及川 司・菅原計二（平泉町・平泉町教育委員会）、伊藤博幸・高橋千晶・及川真紀（奥州市教育委員会）、八木光則（盛岡市教育委員会）、浅利英克（岩手県金ヶ崎町教育委員会）、小山内透（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）、工藤清泰（青森市史編纂室）、宇部則保（八戸市教育委員会）、鈴木 信（北海道埋蔵文化財センター）、仙波伸久（札幌市埋蔵文化財センター）、豊田宏良（千歳市教育委員会）、小松正夫・伊藤武士（秋田城跡調査事務所）、和泉昭一・山崎和夫（能代市教育委員会）、澤谷 敬・信太正樹・島田祐悦（横手市教育委員会）、小西秀典・山崎文幸（大仙市・大仙市教育委員会）、山形博康（美郷町教育委員会）

〔肩書きは指導を受けた時点でのもの、順不同・敬称略〕

3　第４章は、分析委託業者であるパリノ・サーヴェイ株式会社から成果品として納められた報告書に当事務所の見解等を分析業者との協議を重ねた上で加筆・成稿させたものを掲載している。

4　本書の挿図・表・図版の作成は、高橋 学・藤田賢哉のほか、高橋宏子、藤谷和子、新田ひとみ、樫尾智恵子、佐藤かおり、細谷美奈子、柴田祐佳、松本千佳、高田由紀、小西行美、小松加代子、藤原雪子が行った。

5　調査次数は原則として１調査に１次数を付している。昭和５年10月の文部省による調査を第１次調査とし、昭和49年から開始した当事務所による調査は第２次から始まる。

6　本書は、付編を山形大学人文学部の三上喜孝氏に執筆を依頼し、他は主任学芸主事兼調査班長　高橋 学が学芸主事 藤田賢哉の協力のもと執筆し、編集にあたった。

凡　　例

1　遺構等の実測図は、世界測地系(測地成果2000)による平面直角座標系第Ｘ座標系を基準に作成した。実測図・地形図中の方位は座標系を示し、磁北はこれよりＮ７°30′00″Ｗであり、真北はＮ０°10′38″Ｅである。詳細は『払田柵跡調査事務所年報2005』(2006年３月刊、第３章第３節２)を参照いただきたい。

2　土層断面図等の土色の表記は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』に拠った。表記にあたり基本層序はローマ数字(Ⅰ、Ⅱ･･･)を、遺構堆積土はアラビア数字(１、２･･･)を使用した。
　またＭは盛土層を、Ｋは撹乱層を指す略号として使用した。

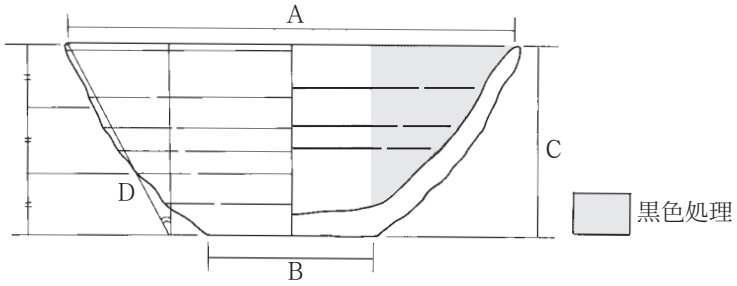
3　遺構・遺物には以下の略記号を使用した。
ＳＡ　柱列・板塀跡　　ＳＢ　掘立柱建物跡　　ＳＤ　溝跡　　ＳＥ　井戸　　ＳＦ　築地
ＳＩ・ＳＫＩ　竪穴建物跡(竪穴住居跡・竪穴状遺構)　　ＳＫ　土坑
ＳＫＰ　柱穴・柱穴掘形　　ＳＭ　道路跡・硬化面　　ＳＮ　焼土遺構　　ＳＱ　配石遺構
ＳＳ　鍛冶炉　　ＳＷ　炭窯跡　　ＳＸ　その他の遺構
ＲＰ　土器・土製品　　ＲＱ　石器・石製品　　ＲＭ　鉄製品　　ＲＶ　布紙製品
ＲＷ　木製品

4　掘立柱建物を構成する柱穴掘形には、原則的に北東隅柱より時計回りに各掘形にＰ１、Ｐ２、Ｐ３・・・と番号を付し記述する。

5　遺構観察表(第４～７表)の「検出位置・重複関係」の項における“切る”“切られる”の用字は次のとおりである。
　例えば遺構番号ＳＫ100の欄、「ＳＫ99を切り、ＳＫ101に切られる」は、３遺構の新旧関係を表し、(旧)ＳＫ99→ＳＫ100→ＳＫ101(新)であることを示す。

6　遺物観察表(第８表)にある「年報挿図番号」とは、本書に掲載の実測図が『年報』に既に収載されている場合、その挿図番号を指す。例えば、99-10-33とは、『年報1999』第10図33に掲載の遺物であることを示す。

7　遺物観察表(第８表)における坏形土器の計測基準は下図のとおりである。なお、歪みのある個体の法量(口径・器高・底径)は、最小値＋最大値÷２の数値で示している。



Ａ：口径　　Ｂ：底径　　Ｃ：器高　　Ｄ：外傾度

底径指数＝$\frac{B}{A}$　　高径指数＝$\frac{C}{A}\times100$

払田柵跡Ⅲ－長森地区－［本編］

目　　次

第１章　遺跡の概要
第１節　遺跡の位置と立地 …… 1
第２節　遺跡の現況と歴史的環境 …… 1
1　遺跡の現況 …… 1
2　史跡整備の状況 …… 3
3　歴史的環境 …… 4
第２章　調査の経過と概要
第１節　調査事務所設立以前の調査・研究 …… 8
第２節　調査事務所による調査・研究 …… 9
1　第１～７次５年計画調査 …… 9
2　発掘調査の成果 …… 10
第３章　遺構と遺物
第１節　長森東方地区 …… 17
第２節　長森西方地区 …… 50
1　政庁西側地区 …… 50
2　外郭西門東側地区 …… 95
第３節　長森北方地区 …… 128
1　ホイド清水周辺地区 …… 128
2　丘陵北側裾部 …… 130
第４章　自然科学的分析
第１節　銅関連遺物の材質分析 …… 156
第２節　長森周辺の古植生と土地利用 …… 158
第５章　考察
第１節　長森東方地区 …… 164
第２節　長森西方地区 …… 171
1　政庁西側地区 …… 171
2　外郭西門東側地区 …… 177
第３節　長森北方地区 …… 183
1　ホイド清水周辺地区 …… 183
2　丘陵北側裾部 …… 184
第４節　出土遺物 …… 188
第５節　外郭区画施設と門・櫓状建物跡 …… 193
第６節　長森地区の歴史的変遷 …… 208
第６章　総括と課題 …… 214
図版
付編　払田柵跡第一二二次調査出土の第六号漆紙文書 ……（1）
払田柵跡調査事務所の沿革
払田柵跡調査事務所要項
報告書抄録
奥付

挿図・表目次

第１図　払田柵跡周辺の地形分類図
第２図　払田柵跡全体図
第３図　払田柵跡周辺の古代～近世の遺跡
第４図　払田柵跡調査実施位置図
第５図　長森東方・北方地区の地形と調査区
第６図　長森東方地区の地形と遺構配置図
第７図　長森東方地区の遺構（１）第90次調査区（１）
第８図　長森東方地区の遺構（２）第90次調査区（２）
第９図　長森東方地区の遺構（３）第90次調査区（３）
第10図　長森東方地区の遺構（４）第90次調査区（４）
第11図　長森東方地区の遺構（５）第90次調査区（５）
第12図　長森東方地区の遺構（６）第95次調査区（１）
第13図　長森東方地区の遺構（７）第95次調査区（２）
第14図　長森東方地区の遺構（８）第100次調査区（１）
第15図　長森東方地区の遺構（９）第100次調査区（２）
第16図　長森東方地区の遺構(10)第100次調査区（３）
第17図　長森東方地区の遺構(11)第100次調査区（４）
第18図　長森東方地区の遺構(12)第105次調査区（１）
第19図　長森東方地区の遺構(13)第100・105次調査区（２）
第20図　長森東方地区の遺構(14)第105次調査区（３）
第21図　長森東方地区の遺構(15)第105次調査区（４）
第22図　出土遺物（１）長森東方地区第90次
第23図　出土遺物（２）長森東方地区第95次
第24図　出土遺物（３）長森東方地区第100次（１）
第25図　出土遺物（４）長森東方地区第100次（２）
第26図　出土遺物（５）長森東方地区第100次（３）
第27図　出土遺物（６）長森東方地区第105次（１）
第28図　出土遺物（７）長森東方地区第105次（２）
第29図　長森西方地区の地形と調査区
第30図　政庁西側地区の地形と遺構配置図
第31図　政庁西側地区南西部の遺構配置図
第32図　政庁西側地区の遺構（１）第115・118次調査区（１）
第33図　政庁西側地区の遺構（２）第115次調査区（２）
第34図　政庁西側地区の遺構（３）第122次調査区（１）
第35図　政庁西側地区の遺構（４）第122次調査区（２）
第36図　政庁西側地区の遺構（５）第122次調査区（３）
第37図　政庁西側地区の遺構（６）第122次調査区（４）
第38図　政庁西側地区の遺構（７）第122次調査区（５）
第39図　政庁西側地区の遺構（８）第122次調査区（６）
第40図　政庁西側地区の遺構（９）第122次調査区（７）
第41図　政庁西側地区の遺構(10)第122次調査区（８）
第42図　政庁西側地区の遺構(11)第122次調査区（９）
第43図　政庁西側地区の遺構(12)第122次調査区(10)
第44図　政庁西側地区の遺構(13)第122次調査区(11)
第45図　政庁西側地区の遺構(14)第122次調査区(12)
第46図　政庁西側地区の遺構(15)第122次調査区(13)
第47図　政庁西側地区の遺構(16)第135次調査区（１）
第48図　政庁西側地区の遺構(17)第135次調査区（２）
第49図　政庁西側地区の遺構(18)第137次調査区（１）
第50図　政庁西側地区の遺構(19)第137次調査区（２）
第51図　政庁西側地区西部の地形と遺構配置図
第52図　出土遺物（８）政庁西側地区第115次
第53図　出土遺物（９）政庁西側地区第120・122次（１）
第54図　出土遺物(10)政庁西側地区第122次（２）
第55図　出土遺物(11)政庁西側地区第122次（３）
第56図　出土遺物(12)政庁西側地区第123・135次
第57図　外郭西門東側地区の地形と遺構配置図（１）
第58図　外郭西門東側地区の地形と遺構配置図（２）
第59図　外郭西門東側地区の遺構（１）第117次調査区（１）
第60図　外郭西門東側地区の遺構（２）第117次調査区（２）
第61図　外郭西門東側地区の遺構（３）第119次調査区
第62図　外郭西門東側地区の遺構（４）第121次調査区（１）
第63図　外郭西門東側地区の遺構（５）第121次調査区（２）
第64図　外郭西門東側地区の遺構（６）第121次調査区（３）
第65図　外郭西門東側地区の遺構（７）第121次調査区（４）
第66図　外郭西門東側地区の遺構（８）第121次調査区（５）
第67図　外郭西門東側地区の遺構（９）第121次調査区（６）
第68図　外郭西門東側地区の遺構(10)第121次調査区（７）
第69図　外郭西門東側地区の遺構(11)第121次調査区（８）
第70図　外郭西門東側地区の遺構(12)第121次調査区（９）
第71図　外郭西門東側地区の遺構(13)第121次調査区(10)
第72図　出土遺物(13)外郭西門東側地区第117・119次（１）
第73図　出土遺物(14)外郭西門東側地区第119次（２）
第74図　出土遺物(15)外郭西門東側地区第121次（１）
第75図　出土遺物(16)外郭西門東側地区第121次（２）
第76図　出土遺物(17)外郭西門東側地区第121次（３）
第77図　ホイド清水周辺地区の地形と遺構配置図
第78図　ホイド清水周辺地区の遺構（１）第49次SE550と出土遺物
第79図　ホイド清水周辺地区の遺構（２）第130次調査区（１）
第80図　ホイド清水周辺地区の遺構（３）第130次調査区（２）
第81図　丘陵北側裾部の遺構　第127・133次調査区
第82図　出土遺物(18)第49次調査区（１）
第83図　出土遺物(19)第49次調査区（２）
第84図　出土遺物(20)第49次調査区（３）
第85図　出土遺物(21)第127・130次調査区
第86図　出土遺物(22)第133次調査区
第87図　土層柱状図、試料採取位置および分析層位(第130次Ａ区北端)
第88図　主要花粉化石群集の層位分析
第89図　竪穴建物に掘立柱建物が接続して一体となる建物跡
第90図　長森東方地区における鍛冶関連遺物出土地
第91図　長森東方地区における遺構群の変遷
第92図　政庁西側地区における遺構群の分布
第93図　外郭西門東側地区における遺構群の分布
第94図　長森北方地区における遺構群の分布
第95図　火山灰降下後の土器群の変遷
第96図　外郭東門北西部の櫓状建物跡
第97図　外郭東門北側の櫓状建物変遷想定図
第98図　外郭西門跡と両脇の築地・材木塀・櫓状建物跡
第99図　外郭南門・北門（Ａ期）と弧状に配される区画施設
第100図　木道に転用された材木塀角材(外郭北門東側地区)
第101図　外郭北門跡北西部の材木塀と結束想定図
第102図　材木塀に使用された角材と結束用部材
第103図　区画施設を跨がないタイプの櫓状建物跡
第104図　長森西方地区における縄文期の遺構・遺物分布状況
第105図　長森西方地区における中世の遺構分布状況
第106図　第122次調査区出土の第６号漆紙文書
第107図　漆紙出土状況と展開模式図
第108図　秋田城跡出土第28号漆紙文書

第１表　払田柵跡周辺の主な古代・中世・近世遺跡一覧
第２表　払田柵跡調査一覧
第３表　払田柵内各施設の変遷と対応・消長表
第４表　遺構観察表（１）長森東方地区
第５表　遺構観察表（２）政庁西側地区
第６表　遺構観察表（３）外郭西門東側地区
第７表　遺構観察表（４）長森北方地区
第８表　遺物観察表
第９表　銅製品と銅塊の成分分析結果
第10表　土師器坏付着物の成分分析結果
第11表　花粉分析結果

第１章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置と立地

史跡払田柵跡は、秋田県内陸南部にある大仙市払田および仙北郡美郷町本堂城回に所在する。その位置は政庁部で、北緯39°28′06″、東経140°32′57″を計測し、横手盆地北側の仙北平野中央部、ＪＲ奥羽本線大曲駅から東方約６㎞の地点にある。

横手盆地は、秋田県の南東部にある東西約15㎞、南北約60㎞の細長い盆地で、県内最大の盆地でもある。盆地の東縁は急峻な奥羽脊梁山脈と接し、西縁は低平な出羽山地によって限られる。盆地西方には雄物川が北上しており、大仙市花館・神宮寺付近で西へ流路を変え、出羽山地を横断して秋田平野へと流下し、日本海に注ぐ。雄物川は山形県境に近い大仙山(標高920ｍ)東側の湯沢市上院内地内を源流とし、流路延長133㎞、約167の支流を集める。4710㎢という流域面積は、秋田県土の約40％を占める県内最大の河川でもある。

払田柵跡は、新第三紀中新世吉沢川層の硬質泥岩からなる真山・長森の小丘陵を中心として、北側を川口川・矢島川(烏川、旧名：駒さり川)、南側を丸子川(鞠子川、旧名：荒川)[1]によって挟まれた沖積低地に立地する。吉沢川層は、横手市北部の吉沢川下流域を模式地とし、沢沿いに小範囲に分布する。その岩相は、硬質で層理の発達した泥岩であり、灰色を呈する細粒凝灰岩や有孔虫化石等を挟むことがある。同層が仙北平野内で分布するのは、長森・真山両丘陵と、真山の北西約800ｍに近接する一ツ森の独立丘３か所のみである。真山周辺でのボーリング調査により、同層厚は150ｍ±と一定しているとされる。なお、本層は男鹿半島などに分布する女川層に対比される。

一方の沖積低地部は、礫・砂がち堆積物からなるが、遺跡の東縁部は扇状地の扇端に位置する。扇状地は、北側を川口川の上流にあたる真昼川により、南側を丸子川上流の釜渕川によって形成されたもので、千屋扇状地と呼ばれる[2]。

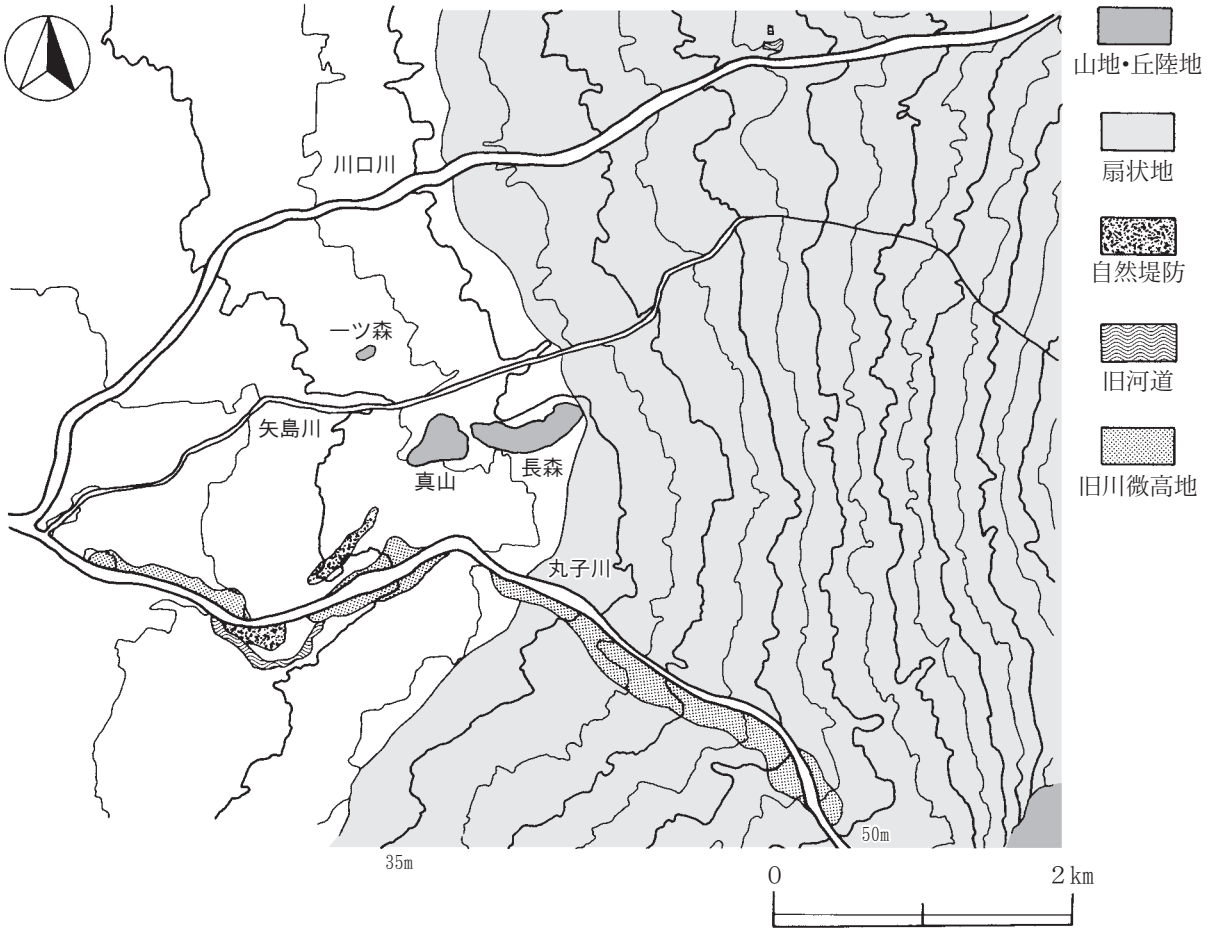
遺跡地内の標高は、最高位は真山山頂の64.97ｍ(国土地理院の二等三角点)であり、長森丘陵部では53.7ｍ、中央の政庁部で42.7ｍである。低地部では、北東部の美郷町百目木集落付近で37.2ｍ、真山南西部では32.0ｍである。

第２節　遺跡の現況と歴史的環境

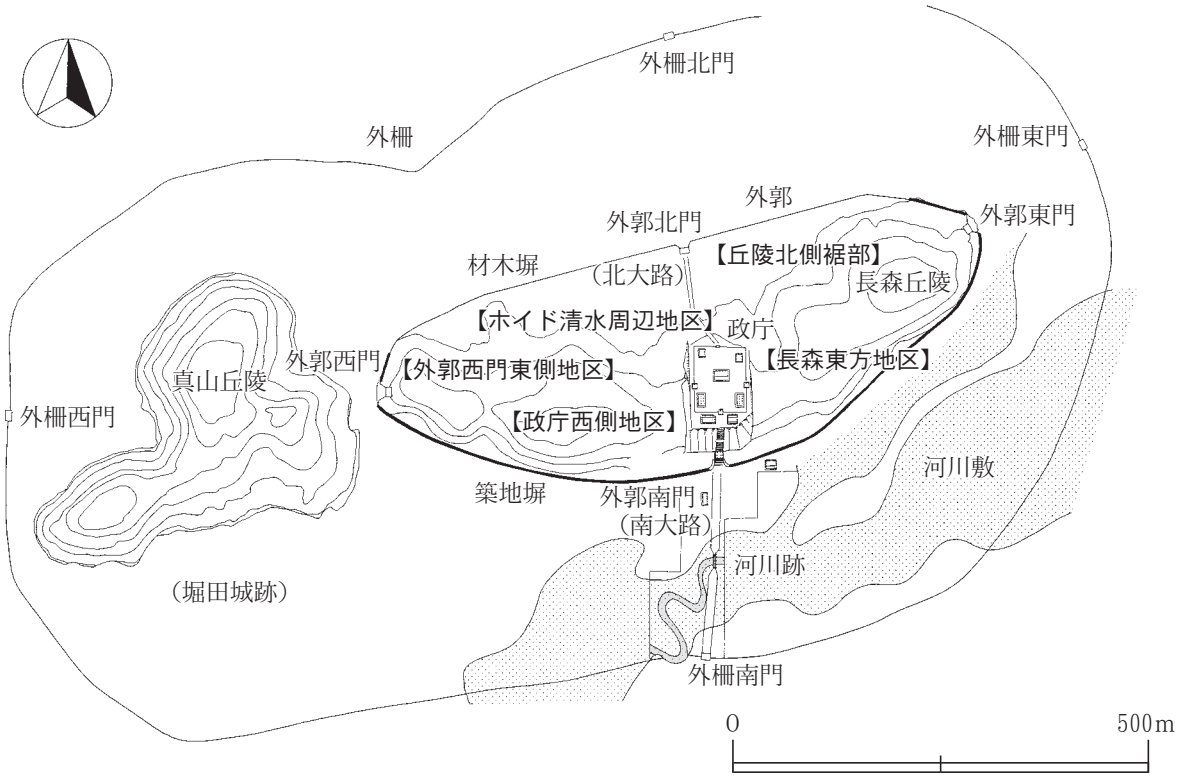
１　遺跡の現況

払田柵跡の外柵材木塀によって囲まれる総面積は、約878,000㎡であり、史跡指定面積は899,380.97㎡(国土調査後)[3]である。これを地目割合で見てみると水田は55.6％、山林は20.3％、雑種地11.8％、宅地4.8％である。住宅等の戸数は31戸である。公・私有地の割合は、公有地(国・県・市町有地に公社・寺社地を含む)45.7％、私有地54.3％である。

長森丘陵部の大半は杉林で覆われているが、中央平坦面は、かつて“払田運動場”[4]として整備されていた。調査の結果、平坦面とは古代における政庁域造成に伴う平場であり、これを再利用して運動場を造っていたことが明らかとなった。地形の改変は、政庁の東側と西側にも認められる。これも



第１図　払田柵跡周辺の地形分類図



第２図　払田柵跡全体図

古代における切土・盛土という土地改変の地業であったことが確かめられた。また同丘陵上の山林地には、政庁を横切って東西に走る古道の面影が今も部分的に残っている。

長森丘陵裾部には、外郭線を構成する築地塀が巡るが、その北東辺と南東辺は良好に保存されていて、地上からその高まりを確認することができる。南辺は近年まで宅地となっていたり、道路が通っていることから部分的な調査ではあるが、削平や撹乱が多く確認された。築地塀に連続する低地部の材木塀は、北東部築地から外郭北門跡間の全域を調査したが、水田耕作の障害となるために材が抜き取られ、遺存状態は良好とは言えない。外郭北門跡の西方では、水田の水路中に材木塀の角材が露出している。なお、長森丘陵の北裾には、ホイド清水(溜井・井戸)が開口し、同南裾の外郭南門西側にも鍛冶清水(あるいは本山清水)が存在していた。

真山丘陵部は、その西側が真山公園、東側が大仙市営仙北スキー場として利用されており、中央北側には大正４年に建立された高梨神社が鎮座している。その他は山林(杉・雑木)である。また同所は中世において「堀田城」が築造されており、丘陵縁辺部に土塁・空堀が良好に保存されている。また丘陵北裾には、菅江真澄も訪れ図絵を残している早坂清水が現存する。

外柵の材木塀は低地にあり、多くは水田の下に位置するが、北東部の百目木集落(美郷町本堂城回)、真山西側の外柵西端部(大仙市払田字森崎)、及び南部の一部(大仙市払田字仲谷地)では宅地の下を通っている。

２　史跡整備の状況

史跡の管理団体である大仙市(旧仙北町)では、昭和54年度から保存管理計画により、土地の買い上げ事業を開始し、昭和57年度より発掘調査成果に基づいた環境整備事業を実施している。土地買い上げ面積は、175,017.07㎡(平成20年12月現在)であり、その進捗率は79.23％に達する。また、整備済み面積は114,909.02㎡(同)であり、史跡面積の12.8％にあたる。

政庁域は、５期ある変遷のうちの10世紀前葉を中心とする時期にあたる第Ⅲ期の姿に復元整備されている。板塀で囲まれた中に正殿、東・西脇殿、正殿後方東・西建物、広場、板塀前方には東・西前殿が表示されている。政庁の南面には、外郭南門と石段、その両脇に連なる石塁が整備されている。これらは昭和58年度から平成元年度にかけて実施された事業である。また平成２年度には外郭東門が両脇の材木塀とともに復元整備された。

平成３年度からは、「史跡等活用特別事業(ふるさと歴史の広場)」による整備が開始され、外柵南門跡やそれに連なる材木塀、大路、河川跡、橋梁、大路東・西建物、及びガイダンス施設(払田柵総合案内所)の設置がなされた。また平成７年度からは、「地域個性形成事業(ふれあいの史跡公園)」により、政庁東方の官衙建物、板塀の表示の他、園路の敷設、貼芝、広葉樹植栽が行われ、政庁から外郭東門に至る見学ルートが整備された。

平成10～12年度には、外郭西門跡の門柱とこれに連なる材木塀が復元され、平成13年度以降は、外郭北門から外郭東門に至る低地部の整備が進行中である。

また、外郭北門周辺の低地部には埋没遺材の保護を目的とした水位計の設置を進めており、平成18年度より６か所の埋設が完了しており、継続的な水位の観察が続けられている。

３　歴史的環境

本項では、払田柵跡周辺域において発掘調査が行われた古代遺跡について紹介する。なお遺跡名の次の(　)内は、遺跡番号を表す。位置等は第１図と第１表を参照されたい。

内村遺跡(54-14)　美郷町千屋

払田柵跡の南東約３㎞に位置する10世紀前半～中頃の集落遺跡である。秋田県教育委員会が昭和55年に調査を行い、竪穴建物跡３棟、土坑、焼土遺構などが検出された。出土遺物は、土師器坏・皿・甕類、須恵器長頸壺・甕、緑釉陶器、青磁皿、和鏡等がある。緑釉陶器は近江産、青磁皿は中国越州窯系、和鏡は直径12.4㎝の瑞花双鳳八花鏡である。出土遺物に緑釉陶器・中国産青磁や和鏡が含まれることから、払田柵に関連の深い集落跡と推測される。

厨川谷地遺跡(54-3)　美郷町土崎

払田柵跡外柵の南東約350ｍの至近距離に位置するが、大正４年(1915)に水田下から約１万2000枚の銭貨が偶然掘り出されたことから中世の遺跡(埋蔵銭出土地)として周知されていた。

秋田県埋蔵文化財センターが平成13年に発掘調査を実施した結果、９世紀後半～10世紀前半代の払田柵で執り行わる祭祀を挙行する場(祭祀遺跡)であったことが判明した。祭祀の実態は、大きく２時期の変遷として把えることができた。９世紀後半代では、複数の小河川とそれに囲まれた微高地上に、目隠し塀(柵列)で囲まれた内部に位置する掘立柱建物を祭祀屋として祭祀が執り行われ、10世紀に入ると建物・柵列は滅失するものの、微高地には新たに土坑や自然の凹地を利用した祭祀が展開する。後者の祭祀には、十和田火山噴火(西暦915年)という天災を契機としている事例も含まれる。一方、祭祀屋・土坑の周囲に広がる小河川や湧水点地においても水辺の祭祀が執り行われ、木製祭祀具(斎串・人形・呪符木簡等)や灯明皿、墨書土器なども多量に出土した。

中屋敷Ⅱ遺跡(54-5)　美郷町土崎

払田柵跡の南東約1.5㎞に位置する。美郷町(旧千畑町)教育委員会が平成14・17年に、秋田県埋蔵文化財センターが平成14・15年に調査を行っているが、その結果、縄文時代中期～晩期、弥生時代、古代・中世・近世の集落跡であることが判明した。古代は竪穴建物が点在する集落跡であり、10世紀前半代を中心とする時期である。

城方小屋遺跡(54-41)　美郷町本堂城回

平成18年に発見された遺跡であり、払田柵跡外柵東門跡の東側約150ｍに位置する。美郷町教育委員会が平成19年に調査を行った結果、柵列跡、掘立柱建物跡、土坑等が検出された。柵列跡は溝内に材を埋設した痕跡(窪み)が認められるもので、軸線方向は北西－南東方向を指す。幅45㎝前後の布掘り溝跡が長軸約85ｍ以上、短軸約60ｍの規模でＵ字状に確認され、楕円形に巡る可能性もある。溝跡堆積土中に十和田ａ火山灰が見られることから、西暦915年以前に柵列として機能していたものの、遺棄され材が抜き取られた後、溝状となった遺構に火山灰が堆積したようである。溝跡の軌跡は、西約100ｍに位置する外柵材木塀角材列のそれと類似する。払田柵跡の外側に別の区画施設が存在していた貴重な発見である。また土坑のうち１基は、形態・堆積土・遺物の出土状況から10世紀代の木棺を伴う伸展葬墓と推測される。払田柵跡の外側隣接地に古代墓が発見されたのは、真山丘陵部での２例(火葬墓)に次ぐものである。

森崎Ⅱ遺跡(54-43)　美郷町本堂城回

城方小屋遺跡の南側に隣接する遺跡である。美郷町教育委員会が平成19年に実施した調査の結果、

９世紀中頃の竪穴建物跡が１棟検出された。払田柵跡周辺の沖積地部における竪穴建物跡の確認は、外柵西門東側(第９次調査)に次いで２例目である。

半在家遺跡(8-67)　大仙市高関上郷

ほ場整備事業に伴い平成19年に新発見された遺跡であり、払田柵跡の北西約3.5㎞に位置する。平成20年に大仙市教育委員会が調査を行い、９世紀後半～10世紀前半代の水田跡・溝跡・トイレ遺構等が検出された。水田跡は明瞭な畦畔が認められ、隣接する河川跡・溝跡からは水辺祭祀を思わせる斎串や桃核も多数出土した。畦畔の中には直線的に盛土施工された痕跡も見つかり、条里制との関連も想定される。

以上の他に、払田柵跡東方２㎞圏内では、墨書土器が出土した下中村遺跡(54-29)・森崎Ⅰ遺跡(54-40)、和鏡と墨書土器が出土した飛沢尻遺跡(54-30)などの古代遺跡も点在する。

註

1　河川の旧名は、後藤寅之助1940『高梨村郷土沿革紀』による。駒さり川と荒川は、文化年中・頃(1804～17)までは呼ばれていたと記されている。

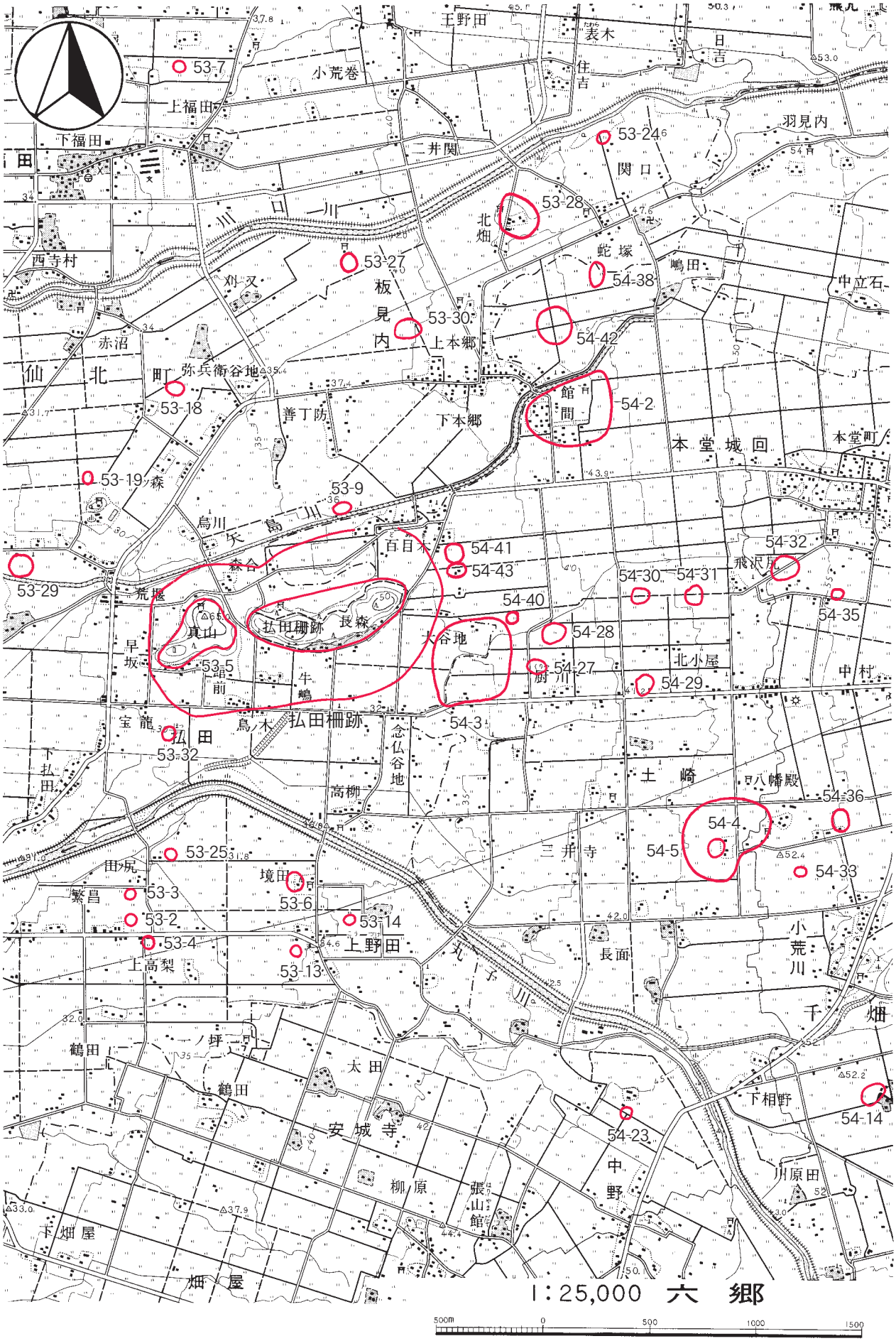
2　地形・地質に関する記述は、秋田県1976『秋田県総合地質図幅　六郷』と秋田県1988『土地分類基本調査六郷』によった。

3　国土調査は、旧仙北町分が昭和59年６月18日～昭和59年７月12日調査、昭和61年１月13日に認証。旧千畑町分は平成４年度調査、平成６年３月29日に認証。

4　大正11年(1922)に学制頒布50年記念事業として「払田運動場の拡張」が行われたという記録が残されている。『高梨』によると、現運動場約1000坪を約1500坪に拡張して南北約50間、東西約30間とする、と記されている。(高梨青年団1922『高梨』第15号)

【第１表の文献・註】

1　秋田県教育委員会1987『秋田県遺跡地図(県南版)』
2　秋田県教育委員会1981『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集
3　千畑町1986「古銭発掘由来記」『千畑町郷土史』
4　秋田県教育委員会1981『内村遺跡』秋田県文化財調査報告書第82集
5　千畑町教育委員会2004『中屋敷Ⅱ遺跡』千畑町文化財調査報告書第６集
　美郷町教育委員会2006『中屋敷Ⅱ遺跡』美郷町埋蔵文化財調査報告書第３集
6　千畑町教育委員会2004『十二遺跡・上飛沢遺跡』千畑町文化財調査報告書第７集
7　秋田県教育委員会2005『厨川谷地遺跡』秋田県文化財調査報告書第383集
8　今村義孝校注1966『奥羽永慶軍記(上)(下)』人物往来社
9　美郷町教育委員会2005『町内遺跡詳細分布調査報告書』美郷町文化財調査報告書第１集
10　山崎文幸2004「秋田・観音堂遺跡」『木簡研究』第26号　木簡学会
11　大仙市教育委員会からの情報提供による。
12　秋田県教育委員会2005『中屋敷Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第384集
13　美郷町教育委員会からの情報提供による。
14　秋田県教育委員会1996『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第267集
15　秋田県教育委員会2007『秋田県遺跡地図(仙北地区版)』
16　島田祐悦・高橋学2007「内村遺跡」『横手市史 資料編 考古』
17　美郷町教育委員会2008『城方小屋遺跡　森崎Ⅱ遺跡』美郷町埋蔵文化財調査報告書第６集
18　美郷町教育委員会2008『町内遺跡詳細分布調査報告書』美郷町埋蔵文化財調査報告書第７集
19　美郷町教育委員会2007『本堂城跡』美郷町埋蔵文化財調査報告書第５集
20　大仙市教育委員会2008『半在家遺跡現地説明会資料』



第３図　払田柵跡周辺の古代～近世の遺跡

第１表　払田柵跡周辺の主な古代・中世・近世遺跡一覧

地図番号	遺跡名	所在地	備　考	註
212-53-1	払田柵跡	大仙市払田	古代城柵官衙遺跡（９世紀初頭～10世紀後半）集落（縄文）、墓地（中世）、城館（堀田城）	
434-54-1		美郷町本堂城回		
212-53-2	繁昌Ⅰ遺跡	大仙市高梨	遺物包含地（木製品）：古代	1
212-53-3	繁昌Ⅱ遺跡	大仙市高梨	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-4	上高梨遺跡	大仙市高梨	遺物包含地（須恵器）	1
212-53-5	堀田城跡	大仙市払田	真山丘陵を利用した中世城館跡（払田柵跡内）	２・８
212-53-6	境田城跡	大仙市払田	中世城館跡：天正18年（1590）破却	2
212-53-7	杉ノ下Ⅰ遺跡	大仙市横堀	遺物包含地（須恵器）	1
212-53-9	鍛冶屋敷遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-13	四十八遺跡	大仙市上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-14	中村遺跡	大仙市上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-18	弥兵谷地遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（須恵器）	1
212-53-19	一ツ森遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（須恵器系陶器壺）	1
212-53-24	堰口遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（鉄滓）	15
212-53-25	田ノ尻遺跡	大仙市払田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-27	観音堂遺跡	大仙市板見内	近世集落跡、掘立柱建物跡、井戸等検出	10
212-53-28	北畑遺跡	大仙市北畑	中世集落・墓地、火葬墓、2005年発掘調査	11
212-53-29	一ツ森Ⅱ遺跡	大仙市堀見内	遺物包含地（須恵器）、2003年発見	11
212-53-30	八幡堂遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（土師器、中近世陶器）	11
212-53-32	下川原遺跡	大仙市払田	遺物包含地（土師器）、1995年発見	14
212-8-67	半在家遺跡	大仙市高関上郷	水田生産遺跡、2008年発掘調査、条理制遺構・トイレ遺構・竪穴建物跡・板塀跡等検出	20
434-54-2	本堂城跡	美郷町本堂城回	本堂氏の居館跡、2004年～調査	19
434-54-3	厨川谷地遺跡	美郷町土崎	埋蔵銭出土地（1915年≪大正４≫出土）	3
			古代祭祀遺跡、2001年発掘調査	7
434-54-4	中屋敷Ⅰ遺跡	美郷町土崎	寺院跡	1
434-54-5	中屋敷Ⅱ遺跡	美郷町土崎	縄文・古代集落跡、2002・03年発掘調査	5・12
434-54-14	内村遺跡	美郷町千屋	古代集落跡、1980年発掘調査、中国産青磁出土	4・16
434-54-23	砂館跡	美郷町中野	城館跡	2
434-54-27	厨川谷地Ⅱ遺跡	美郷町土崎	中世以降？、2000年発見	9
434-54-28	厨川谷地Ⅲ遺跡	美郷町土崎	古代、2001年発見	9
434-54-29	下中村遺跡	美郷町土崎	古代、2002年発見、墨書土器出土	9
434-54-30	飛沢尻遺跡	美郷町土崎	古代、2002年発見、墨書土器・和鏡出土	9
434-54-31	下飛沢遺跡	美郷町土崎	古代、2002年発見	9
434-54-32	上飛沢遺跡	美郷町土崎	古代、2003年発掘調査	6
434-54-33	上館遺跡	美郷町土崎	中近世城館跡か、2002年発見	13
434-54-35	松ノ木遺跡	美郷町土崎	中世～近世、2003年の確認調査で柱穴確認	9
434-54-36	八幡殿遺跡	美郷町土崎	古代集落跡か、2003年確認調査	9
434-54-38	西館遺跡	美郷町本堂城回	縄文・古代、2005年発見	18
434-54-40	森崎Ⅰ遺跡	美郷町本堂城回	古代、2006年発見、墨書土器出土	18
434-54-41	城方小屋遺跡	美郷町本堂城回	古代集落跡、2007年発掘調査、柵列跡、土坑墓	17
434-54-42	北館遺跡	美郷町本堂城回	近世集落跡、2006年発見	18
434-54-43	森崎Ⅱ遺跡	美郷町本堂城回	古代集落跡、2007年発掘調査、竪穴建物跡	17

地図番号の212は大仙市管内、８は旧大曲市域、53は旧仙北町域を、434は美郷町管内、54は旧千畑町域を示す。

第２章　調査の経過と概要

第１節　調査事務所設立以前の調査・研究

遺跡の発見は、昭和15年(1940)に著された『高梨村郷土沿革紀』(後藤寅之助編)によると、明治35年秋から翌年の春(1902～03)にかけて、千屋村(現美郷町)の坂本理一郎(1861～1917)が自己の所有田地に乾田馬耕のため溝渠開削を行った際に200本余りの角材(柵木)が取り上げられたことを端緒とする[1]。この場所は、外柵東門の北西側にあたるが正確な位置は不明である。角材については、不思議な“底木”が出て驚いたと記され、多くは薪材として割られたり、下駄・火鉢側板等に加工されてしまった。その後、明治39年(1906)から開始された高梨村(現大仙市)耕地整理事業の際にも土中から“埋もれ木”が数多く抜き取られた。その後、この埋もれ木について地元の後藤寅之助(宙外、1866～1938)・藤井東一(甫公、1888～1945)らは、角材に刻字が見られることや整然とした配列に注目し、後藤は「奥羽地方の古代史に散見せる柵の遺材」と考えるに至った。そして昭和４年(1929)11月から12月にかけて現地を調査して、昭和５年１月に『仙北郡高梨村拂田柵址略図』(同年４月７日に再調製、奥付上図参照)を作成し、研究者に送っている。

昭和５年３月、高梨村が『高梨村郷土沿革紀』編纂事業として調査を実施したが、その中心となったのは後藤寅之助であり、２日間の調査ではあったものの数箇所の発掘で外柵西門跡や外郭線北側の材木塀列等を新たに確認している。３月の発掘後、高梨村では藤井東一を調査主任として調査に従事させた。藤井は、鉄棒を使用して水田をくまなく探査し、払田柵跡は外柵、外郭の二重構造であることを把握した。さらに藤井は、同年９月にホイド清水から多くの墨書土器とともに文字の書かれた木片を採集し、濱田耕作『通論考古学』の写真図版にあった中国敦煌出土木簡と比較し、「木簡と云うものによく似て居る」との見解を示している。日本で木簡が認知されたのは、昭和36年１月の平城宮跡第５次調査(奈良市佐紀町)での出土が第１号とされることからすれば、それより30年以上前に“木簡”との正しい認識を持っていたことになる[2]。

昭和５年10月には、文部省による発掘調査が行われるが、これは後藤らの発掘成果に触発されてのことであった。文部省嘱託の上田三平(1881～1950)による発掘では、外郭四門跡と外柵列、外殻北側の材木塀列が確認され、柵木の地上高も推定された。調査の成果は『指定史蹟拂田柵址』(昭和６年８月)と『史蹟精査報告第三　拂田柵阯・城輪柵阯』(昭和13年７月)にまとめられた。この学術調査の結果に基づき、昭和６年３月30日付けで秋田県最初の国指定史跡となり、高梨村が管理者に指定された。昭和63年６月29日には、史跡の追加指定がされ現在に至っている。史跡指定面積は899,380.97㎡である。

昭和40年代に入り、史跡指定地域内外の総合整備パイロット事業等の計画が立案された。そこで秋田県教育委員会は地元仙北町と協議の上、この重要遺跡を保護するための基礎調査を実施して、遺跡の実体を把握することとし、昭和49年、現地に「秋田県払田柵跡調査事務所」を設置し、本格的な発掘調査を開始した(昭和61年４月「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称)。さいわい、地元管理団体である仙北町および地域の人々の深い理解により、史跡指定地内は開発計画から除外された。

第２節　調査事務所による調査・研究

払田柵跡調査事務所では、払田柵跡の発掘調査について調査指導委員会(昭和49年度～平成14年度は顧問、平成15・16年度は調査指導研究会、平成17年度以降、現名称)委員の指導のもとに、５年ごとの中期計画を策定して、継続的な調査を実施している。その計画と実績概要は次のとおりである。また、調査次数ごとの調査一覧は、第２表にまとめた。

１　第１～７次５年計画調査

第１次５年計画と実績(昭和49～53年度)

基本計画	実　績	
(１)大規模調査に対応するための基準測量の実施 (２)開発計画に対応し得る基礎調査の促進 (３)現状変更届出に伴う緊急調査の実施 (４)史跡保存のための基礎資料管理計画の策定	(１)発掘調査地 (２)発掘面積 (３)事業費	22地区 8,272㎡ 46,974千円

第２次５年計画と実績(昭和54～58年度)

基本計画	実　績	
(１)中枢施設の全面発掘 (２)外郭線・外柵の位置と構造の把握 (３)現状変更届出に伴う緊急調査の実施	(１)発掘調査地 (２)発掘面積 (３)事業費	34地区 6,222㎡ 59,710千円

第３次５年計画と実績(昭和59～63年度)

基本計画	実　績	
(１)外郭南部・北部の学術調査 (２)外郭東門・西門推定地の学術調査 (３)外柵南部地区の学術調査 (４)現状変更届出に伴う緊急調査 (５)『政庁跡』報告書の刊行 (６)外郭東部の微地形測量調査 (７)ハンド・ボーリングによる遺構確認調査	(１)調査地 (２)発掘面積 (３)ハンド・ボーリング (４)微地形測量面積 (５)『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』刊行 (６)事業費	24地区 6,317㎡ 1,169箇所 55,850㎡ 70,000千円

第４次５年計画と実績(平成元～５年度)

基本計画	実　績	
(１)外柵南部調査の実施 (２)外郭北部調査の実施 (３)外郭東部調査の実施 (４)外郭西門跡の調査 (５)外郭西部の微地形測量調査 (６)ハンド・ボーリングによる遺構確認調査 (７)外柵北部・西部調査の実施	(１)調査地 (２)発掘面積 (３)ハンド・ボーリング (４)微地形測量面積 (５)事業費	19地区 10,003㎡ 819箇所 61,000㎡ 70,000千円

第５次５年計画と実績(平成６～10年度)

基本計画	実　績
(１)外郭東部調査 (２)外郭低地の調査 (３)外郭線材木塀の調査 (４)外郭北門跡の調査 (５)外柵南部の河川跡の調査	(１)調査地　17地区 (２)発掘面積　7,923㎡ (３)『払田柵跡Ⅱ-区画施設-』刊行 (４)事業費　76,400千円

第６次５年計画と実績(平成11～15年度)

基本計画	実　績
(１)政庁西方における官衙域の調査 (２)外郭西門東部地域の遺構分布調査 (３)外郭南門南西地域における官衙域の調査	(１)調査地　10地区 (２)発掘面積　4,327㎡ (３)事業費　80,000千円

第７次５年計画と実績(平成16～20年度)

基本計画	実　績
(１)払田柵跡の各地区における遺構内容及び場の機能の調査 ①外郭地区(長森)の調査 ②外柵地区(沖積地)の調査 ③真山地区の調査、測量基準杭の設置、地形測量 (２)払田柵跡関連遺跡の現況調査及び情報収集	(１)調査地　14地区 (２)発掘面積　5,742㎡ (３)基準測量杭の設置　15箇所 (４)真山地区の地形測量　85,900㎡ (５)関連遺跡の試掘調査 横手市雄物川町　11地点68㎡ (６)『払田柵跡Ⅲ－長森地区－』刊行 (７)事業費　47,000千円

２　発掘調査の成果

調査事務所による発掘調査の成果をまとめると、次のように整理される。

払田柵跡は長森・真山を囲む外柵と、長森を囲む外郭線からなる。長森丘陵中央部には板塀で区画された政庁がある。政庁には、正殿・東脇殿・西脇殿や広場、付属建物群、南前面には東西前殿が配置されている。これらの政庁の建物には５時期(Ⅰ～Ⅴ期)の変遷があり、創建Ⅰ期は９世紀初頭、終末Ⅴ期は10世紀後半である。政庁の調査成果は報告書『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』(昭和60年３月)として公刊された。

一方、区画施設である外柵は、真山・長森の二つの丘陵を囲むようにしてあり、東西1,370ｍ、南北780ｍの長楕円形で、総延長3,600ｍ、外柵によって囲まれる遺跡の総面積は約878,000㎡である。外柵は１時期の造営で杉角材による材木塀が一列に並び、東西南北に八脚門が開くが櫓や溝は伴わない。年輪年代測定では外柵角材の伐採年は、西暦800年・801年と判明した。

外郭は、長森を取り囲むようにしてあり、東西765ｍ、南北320ｍの長楕円形で、面積約163,000㎡である。その延長は約1,760ｍで石塁(南門両脇)、築地塀(東・西・南の山麓)と材木塀が連なり、東西南北に八脚門を配する。外郭線は全体に４時期(Ａ～Ｄ期)にわたる造営が認められる。築地塀は創建Ａ期のみであり、Ｂ期以降は全体が材木塀に変わる。外郭線上には櫓が付設され、北部の材木塀に

は溝と木道が伴う。材木塀は地上高3.6ｍで、上部に貫を通して固定していた。年輪年代測定では、Ａ期が801年、Ｃ期が907年、Ｄ期が917＋α年に伐採した材木を使用していたことが明らかとなった。なお外柵・外郭は、従来それぞれ外郭線・内郭と呼称されていたが、それまでの調査成果を踏まえ、平成７年から呼び替えたものである。これら区画施設の調査成果は、報告書『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』(平成11年３月)として公刊された。

長森丘陵部東側平坦面には掘立柱建物跡や竪穴建物跡からなる官衙域が存在し、創建から終末までの７時期(Ａ期直前、Ａ～Ｆ期)の変遷が認められた。一方の丘陵西側では、主に北向き緩斜面部から鍛冶関係の工房群が検出され、政庁を挟む東西丘陵部での場の利用が異なることも明らかとなった。鍛冶関係工房群は９世紀中頃から10世紀前半代に造営され、創建期と終末期の様相は不明瞭である。官衙域は外郭南門の南東部と南西部の丘陵裾部(微高地上)に展開することが確認された。

外柵内南部の低地には、北東から南西方向に流下する複数の河川が調査及び電気探査により明らかにされた。川幅は６～７ｍであり、河川敷の最大幅は約250ｍに達する。河川と外柵材木塀が交差する箇所のうち少なくとも２地点で開口部があることも判明した[3]。また、外柵南門と外郭南門の間には、長さ17ｍの橋が架けられ、両者を結ぶ南北道路(南大路)の存在も推測された。

真山丘陵部では、中世城館(堀田城跡)として利用される以前の古代の火葬墓２基が検出された。これらは10世紀代と推測され、創建段階の遺構は未確認である。

出土品には、須恵器・土師器・瓦質土器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁(越州窯系)・瓦・硯などのほか、坩堝・羽口・紡錘車・支脚などの土製品、石帯・砥石などの石製品、鉄鏃・鎌・鍬鋤先・刀子・釘・紡錘車・刀装具などの鉄(銅)製品・鉄(銅)滓、斎串・曲物・挽物・鋤・楔などの木製品、および漆紙文書(６点)・木簡・墨書土器・箆書土器・絵馬(２点)などの文字・絵画資料がある。

木簡(刻字をもつ柵木等を含む)は103点確認されており、「飽海郡少隊長解申請」「十火大粮二石八斗八升」「嘉祥二年正月十日」などと記された文書・貢進用木簡があり、「別當子弟大伴寧人」「鹿毛牡馬者」「矢田部弓取」「北門」「狄藻」(以上墨書)、「山本」「最上」「最上四」「禰木田」「行」「全二」「一三□〔柱カ〕木二」(以上刻字)などの文字もある。

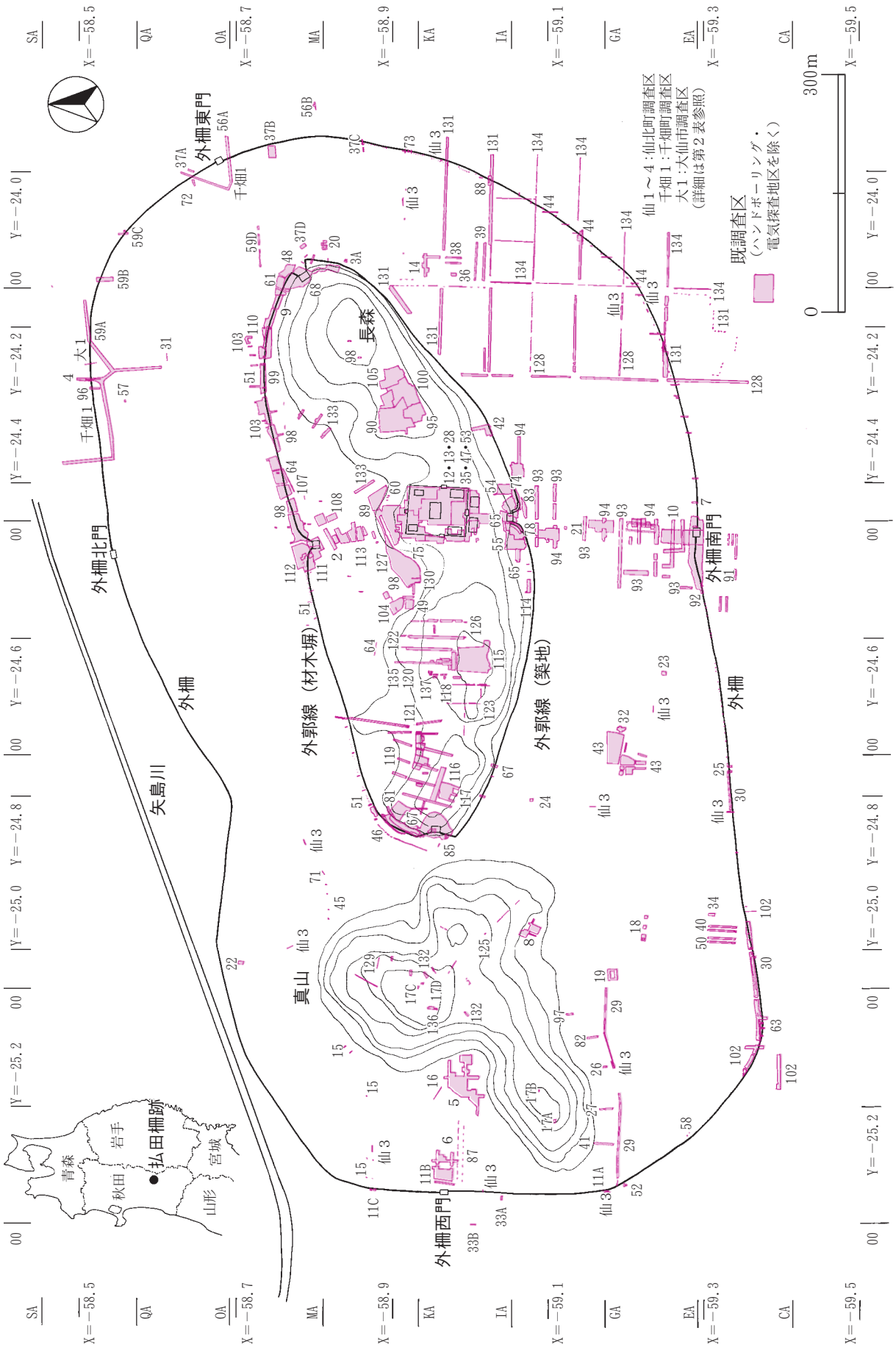
墨書・箆書土器は528点出土・採集されており、一少隊御前下・大津郷・鷹空上・懺悔・小勝・音丸・北門・北預・厨家・靫大・中大・中万・厨・官・舎・館・麿・宅・新・吉・秋・郡・千・主・長・酒・安・賀・全・成・前・伴・部・左・文・名・上・下・矢・車・工・益・山・就・立・生・平・延・圓・集・大・木・中・仲・犬・方・継・廳・舂・又・十・七など(以上墨書)、「出羽□　郡□男賀凡酒坏」(箆書)などの文字が認められる。

註

1　『高梨村郷土沿革紀』によると、200余本の柵木のうち、７本に文字が彫られていたとされ、２本は“最上○○”“一三○木二”(○は欠損して判読不能)と記されている。その所在は不明であったが、平成20年10月に武藤鉄城氏所蔵資料のなかに後者の拓本が軸装の形で保管されていたことが判明した(図版15を参照)。

2　仙北町史談会2005『藤井甫公著「拂田柵址研究日誌」』

3　平成４年の第92次調査と平成18年の第134次Ｕ-2区で確認されており、詳細は第１表下を参照されたい。



第４図　払田柵跡調査実施位置図

第２表　払田柵跡　調査一覧

調査年度	調査次数	調査地区	調査地点	調査方法	調査原因	調査面積（㎡）	報告書・(年報)
昭和５年	1	各地区	外柵南門跡等	発掘調査	文部省調査	－	史跡精査報告第三
昭和49年	2	外郭地区	外郭北門跡	発掘調査	第１次計画	322	払田柵跡Ⅱ
	3	外郭地区	外郭線東部・南部	発掘調査	第１次計画	22	払田柵跡Ⅱ
昭和50年	4	外柵線地	北東部	発掘調査	道路改修	35	払田柵跡Ⅱ
	5	真山地区	西側沖積地	発掘調査	公園整備	1135	(年報1975)
	6	集落水田地区	外柵西門跡東側	発掘調査	第１次計画	585	(年報1975)
	7	大路地区	外柵南門跡	発掘調査	第１次計画	473	払田柵跡Ⅱ
	8	真山地区	丘陵南東部	発掘調査	資料館建設	250	(年報1975)
昭和51年	9	外郭地区	外郭線北東部	発掘調査	第１次計画	993	払田柵跡Ⅱ
	10	大路地区	外柵南門跡北側	発掘調査	第１次計画	433	払田柵跡Ⅱ
昭和52年	11	外柵線地	西辺部	発掘調査	道路整備	103	払田柵跡Ⅱ
	12	外郭地区	政庁	発掘調査	第１次計画	2027	払田柵跡Ⅰ
昭和53年	12補足	外郭地区	政庁	発掘調査	第１次計画	(12次と合算)	払田柵跡Ⅰ
	13	外郭地区	政庁南門跡	発掘調査	第１次計画	1378	払田柵跡Ⅰ
			外郭南門跡			〈1356〉	払田柵跡Ⅱ
	14	集落水田地区	東部	発掘調査	住宅建築	151	(年報1978・79)
	15	集落水田地区	北西部	発掘調査	道路整備	13	(年報1978)
	16	真山地区	西側沖積地	発掘調査	水田造成	39	(年報1978)
	17	真山地区	丘陵北側頂部	発掘調査	公園整備	36	(年報1978)
	18	集落水田地区	南西部	発掘調査	小屋建設	79	(年報1978)
	19	真山地区	南側沖積地	発掘調査	建物建築	117	(年報1978)
	20	集落水田地区	東部	発掘調査	小屋建設	41	(年報1978)
	21	大路地区	外郭南門跡南側	発掘調査	小屋建設	12	(年報1978)
	22	集落水田地区	北西部	発掘調査	住宅建築	28	(年報1978)
昭和54年	23	集落水田地区	南部	発掘調査	小屋建設	20	(年報1979)
	24	集落水田地区	南部	発掘調査	小屋建設	16	(年報1979)
	25	外柵線地	南辺西部	発掘調査	住宅改築	16	払田柵跡Ⅱ
	26	集落水田地区	真山南裾部	発掘調査	住宅改築	13	(年報1979)
	27	集落水田地区	真山南裾部	発掘調査	住宅改築	31	(年報1979)
	28	外郭地区	政庁東前殿	発掘調査	第２次計画	481〈404〉	払田柵跡Ⅰ
	29	外柵～集落水田地区	真山南裾部	発掘調査	道路整備	135	払田柵跡Ⅱ
	30	外柵線地	南辺西側	発掘調査	第２次計画	325	払田柵跡Ⅱ
昭和55年	31	集落水田地区	北東部	発掘調査	住宅改築	10	(年報1980)
	32	集落水田地区	南部	発掘調査	住宅増築	43	(年報1980)
	33	外柵線地	西辺中央部	発掘調査	住宅増築	30	払田柵跡Ⅱ
	34	外柵線地	南西部	発掘調査	建物建築	27	(年報1980)
	35	外郭地区	政庁域北部	発掘調査	第２次計画	1114〈1068〉	払田柵跡Ⅰ
	36	集落水田地区	南東部	発掘調査	住宅建築	29	(年報1980)
	37	外柵～集落水田地区	東部	発掘調査	水路工事	25	払田柵跡Ⅱ
昭和56年	38	集落水田地区	南東部	発掘調査	住宅建築	80	(年報1981)
	39	集落水田地区	南東部	発掘調査	住宅建築	205	(年報1981)
	40	外柵線地	南西部	発掘調査	資材置場造成	153	(年報1981)
	41	集落水田地区	真山南裾部	発掘調査	住宅増築	52	(年報1981)
	42	外郭地区	長森南裾部	発掘調査	第２次計画	160	払田柵跡Ⅱ
	43	集落水田地区	南部	発掘調査	第２次計画	1250	(年報1981)
	44	外柵線地	南辺東～東辺南	発掘調査	第２次計画	185	払田柵跡Ⅱ
	45	集落水田地区	北部	発掘調査	道路整備	10	(年報1981)
	仙１	外柵線地	北部一帯	発掘調査	外柵位置確認	250	払田柵跡Ⅱ
昭和57年	46	外郭地区	外郭西門跡西	発掘調査	水路工事	74	払田柵跡Ⅱ
	47	外郭地区	政庁西脇殿・西前殿	発掘調査	第２次計画	891〈846〉	払田柵跡Ⅰ
	48	外郭地区	長森東端	発掘調査	第２次計画	25	払田柵跡Ⅱ
	49	外郭地区	ホイド清水周辺	発掘調査	第２次計画	115	払田柵跡Ⅲ
	50	外柵線地	南西部	発掘調査	盛土造成	136	(年報1982)
	51	外郭地区	外郭線北西部	発掘調査	第２次計画	83	払田柵跡Ⅱ
	52	集落水田地区	西端部	発掘調査	車庫建設	8	(年報1982)
昭和58年	49－2・3	外郭地区	ホイド清水周辺	発掘調査	第２次計画	(49次と合算)	払田柵跡Ⅲ
	53	外郭地区	政庁北西部	発掘調査	第２次計画	976〈799〉	払田柵跡Ⅰ
	54	外郭地区	外郭南門跡東部	発掘調査	第２次計画	602	払田柵跡Ⅱ
昭和59年	55	外郭地区	外郭南門跡西部	発掘調査	第３次計画	825〈748〉	払田柵跡Ⅱ
	56	外柵～集落水田地区	東部	発掘調査	道路整備	60	払田柵跡Ⅱ
	57	集落水田地区	北東部	発掘調査	住宅改築	2	(年報1984)
	58	外柵線地	南西部	発掘調査	水路工事	16	払田柵跡Ⅱ
	59	外柵線地	北東部	発掘調査	道路整備	180	払田柵跡Ⅱ
昭和60年	60	外郭地区	政庁域北側	発掘調査	第３次計画	1022	払田柵跡Ⅱ
	61	外郭地区	外郭線北東部	発掘調査	第３次計画	617〈348〉	払田柵跡Ⅱ
	62	集落水田地区	南東部	ハンドボーリング	第３次計画	〔対象100000〕	(年報1985)
	63	外柵線地	南西部	発掘調査	水路工事	1	払田柵跡Ⅱ
	64	外郭地区	北部	発掘調査	水路工事	26	払田柵跡Ⅱ
昭和61年	65	外郭地区	外郭南門跡西部	発掘調査	第３次計画	480〈126〉	払田柵跡Ⅱ
	66	集落水田地区	南部～東部	ハンドボーリング	第３次計画	〔409地点〕	(年報1986)
	67	外郭地区	西部	発掘調査	第３次計画	415	払田柵跡Ⅱ
昭和62年	68	外郭地区	外郭東門跡	発掘調査	第３次計画	983〈850〉	払田柵跡Ⅱ
	69	外郭地区	政庁域東側	地形測量	第３次計画	〔対象13500〕	(年報1987)
	70	集落水田地区	南西部	ハンドボーリング	第３次計画	〔420地点〕	(年報1987)

調査年度	調査次数	調査地区	調査地点	調査方法	調査原因	調査面積（㎡）	報告書・(年報)
昭和62年	71	集落水田地区	北西部	発掘調査	水路工事	6	(年報1987)
	72	外柵線地	北東部	発掘調査	道路整備	10	払田柵跡Ⅱ
	73	外柵線地	東部	発掘調査	道路整備	8〈7〉	払田柵跡Ⅱ
昭和63年	74	外郭地区	外郭南門跡東側	発掘調査	第３次計画	182〈127〉	払田柵跡Ⅱ
	75	外郭地区	政庁域北西部	発掘調査	第３次計画	1474	払田柵跡Ⅱ
	76	外郭地区	東部一帯	地形測量	第３次計画	〔対象43500〕	(年報1988)
	77	集落水田地区	北西部一帯	ハンドボーリング	第３次計画	〔340地点〕	(年報1988)
	78	外郭地区	外郭東門西側	発掘調査	第３次計画	10〈0〉	払田柵跡Ⅱ
平成元年	79	外郭～集落水田地区	北部中央一帯	ハンドボーリング	第４次計画	〔369地点〕	(年報1989)
	80	外郭地区	西部	地形測量	第４次計画	〔対象34000〕	(年報1989)
	81	外郭地区	外郭西門跡	発掘調査	第４次計画	883〈608〉	払田柵跡Ⅱ
	82	集落水田地区	真山南裾部	発掘調査	小屋建設	31	(年報1989)
	83	外郭地区	外郭南門跡東側	発掘調査	環境整備関連	99	払田柵跡Ⅱ
平成２年	84	集落水田地区	北東部一帯	ハンドボーリング	第４次計画	〔450地点〕	(年報1990)
	85	外郭地区	外郭西門跡	発掘調査	第４次計画	1008〈963〉	払田柵跡Ⅱ
	86	外郭地区	政庁域西側	地形測量	第４次計画	〔対象17000〕	(年報1990)
	87	集落水田地区	外柵西門跡東側	発掘調査	道路整備	67	(年報1990)
平成３年	88	外柵線地	東辺中央南部	発掘調査	道路整備	49〈44〉	払田柵跡Ⅱ
	89	外郭地区	政庁域北部	発掘調査	第４次計画	401〈390〉	払田柵跡Ⅱ
	90	外郭地区	長森東方地区	発掘調査	第４次計画	1275	払田柵跡Ⅲ
	91	大路地区	外柵南門跡南側	発掘調査	盛土造成	202	(年報1991)
平成４年	92	大路地区	外柵南門跡周辺	発掘調査	第４次計画	1357〈1037〉	払田柵跡Ⅱ
	93	大路地区	南大路周辺	発掘調査	第４次計画	2828〈2701〉	払田柵跡Ⅱ
平成５年	94	大路地区	南大路周辺	発掘調査	第４次計画	1316〈1229〉	払田柵跡Ⅱ
	95	外郭地区	長森東方地区	発掘調査	第４次計画	445〈427〉	払田柵跡Ⅲ
	96	外柵線地	北辺東部	発掘調査	住宅建築	24	払田柵跡Ⅱ
	97	集落水田地区	真山南裾部	発掘調査	建物建築	18	(年報1993)
	千１	外柵～集落水田地区	北東辺部	発掘調査	集落排水事業	723	払田柵跡Ⅱ
平成６年	98	外郭地区	北部沖積地	発掘調査	第５次計画	61	払田柵跡Ⅱ
	99	外郭地区	外郭線北東部	発掘調査	第５次計画	416〈378〉	払田柵跡Ⅱ
	100	外郭地区	長森東方地区	発掘調査	第５次計画	936〈845〉	払田柵跡Ⅲ
	101	集落水田地区	南部一帯	電気探査	第５次計画	〔対象81750〕	払田柵跡Ⅱ
	102	外柵線地	南辺西端部	発掘調査	道路整備	1115	払田柵跡Ⅱ
平成７年	103	外郭地区	外郭線北東部	発掘調査	第５次計画	633	払田柵跡Ⅱ
	104	外郭地区	ホイド清水北側	発掘調査	第５次計画	290〈285〉	払田柵跡Ⅱ
	105	外郭地区	長森東方地区	発掘調査	第５次計画	835〈645〉	払田柵跡Ⅲ
	106	集落水田地区	南東部一帯	電気探査	第５次計画	〔対象134000〕	払田柵跡Ⅱ
平成８年	107	外郭地区	外郭線北部中央	発掘調査	第５次計画	1550〈1544〉	払田柵跡Ⅱ
	108	外郭地区	外郭北門跡南東側	発掘調査	第５次計画	303	払田柵跡Ⅱ
	109	集落水田地区	南部一帯	電気探査	第５次計画	〔対象68000〕	払田柵跡Ⅱ
	仙２・３	外柵～集落水田地区	一帯	発掘調査	集落排水事業	213	払田柵跡Ⅱ
平成９年	110	外郭地区	外郭線北東部	発掘調査	第５次計画	97〈7〉	払田柵跡Ⅱ
	111	外郭地区	外郭北門跡	発掘調査	第５次計画	191〈0〉	払田柵跡Ⅱ
	112	外郭地区	外郭北門跡北西部	発掘調査	第５次計画	635〈597〉	払田柵跡Ⅱ
	仙４	外柵線地	西辺	発掘調査	道路整備	15	払田柵跡Ⅱ
平成10年	113	外郭地区	北大路周辺	発掘調査	第５次計画	773	払田柵跡Ⅱ
	114	外郭地区	外郭線中央西部	発掘調査	第５次計画	88	払田柵跡Ⅱ
平成11年	115	外郭地区	政庁西方地区	発掘調査	第６次計画	1221	払田柵跡Ⅲ
	116	外郭地区	外郭西門東方地区	発掘調査	第６次計画	279	払田柵跡Ⅲ
平成12年	117	外郭地区	外郭西門東方地区	発掘調査	第６次計画	524〈521〉	払田柵跡Ⅲ
	118	外郭地区	政庁西方地区	発掘調査	第６次計画	153	払田柵跡Ⅲ
平成13年	119	外郭地区	外郭西門東方地区	発掘調査	第６次計画	500	払田柵跡Ⅲ
	120	外郭地区	政庁西方地区	発掘調査	第６次計画	146	払田柵跡Ⅲ
平成14年	121	外郭地区	外郭西門東方地区	発掘調査	第６次計画	854〈759〉	払田柵跡Ⅲ
平成15年	122	外郭地区	政庁西方地区	発掘調査	第６次計画	425	払田柵跡Ⅲ
	123	外郭地区	政庁西方地区	発掘調査	第６次計画	143	払田柵跡Ⅲ
	124	集落水田地区	南東部	発掘調査	ほ場整備	19	(年報2003)
平成16年	125	真山地区	真山地区南側一帯	発掘調査	第７次計画	66	(年報2004)
	126	外郭地区	政庁西方地区	発掘調査	第７次計画	146	払田柵跡Ⅲ
	127	外郭地区	北大路周辺部	発掘調査	第７次計画	19	払田柵跡Ⅲ
	128	集落水田地区	南東部	発掘調査	ほ場整備	1450	県438集
平成17年	129	真山地区	丘陵北部	発掘調査	第７次計画	84	(年報2005)
	130	外郭地区	ホイド清水東側	発掘調査	第７次計画	106〈87〉	払田柵跡Ⅲ
	131	集落水田地区	南東部	発掘調査	ほ場整備	2305	県438集
平成18年	132	真山地区	丘陵北部	発掘調査	第７次計画	55	(年報2006)
	133	外郭地区	北東部	発掘調査	第７次計画	262	払田柵跡Ⅲ
	134	集落水田地区	南東部	発掘調査	ほ場整備	868	県438集
平成19年	135	外郭地区	政庁西方地区	発掘調査	第７次計画	152〈108〉	払田柵跡Ⅲ
	136	真山地区	丘陵北側頂部	発掘調査	第７次計画	37	(年報2007)
	大１	外柵線地	北東部	発掘調査	住宅改築	8	(年報2007)
平成20年	137	外郭地区	政庁西方地区	発掘調査	第７次計画	84	払田柵跡Ⅲ
	138	集落水田地区	北東部	発掘調査	ほ場整備	108	(年報2008)

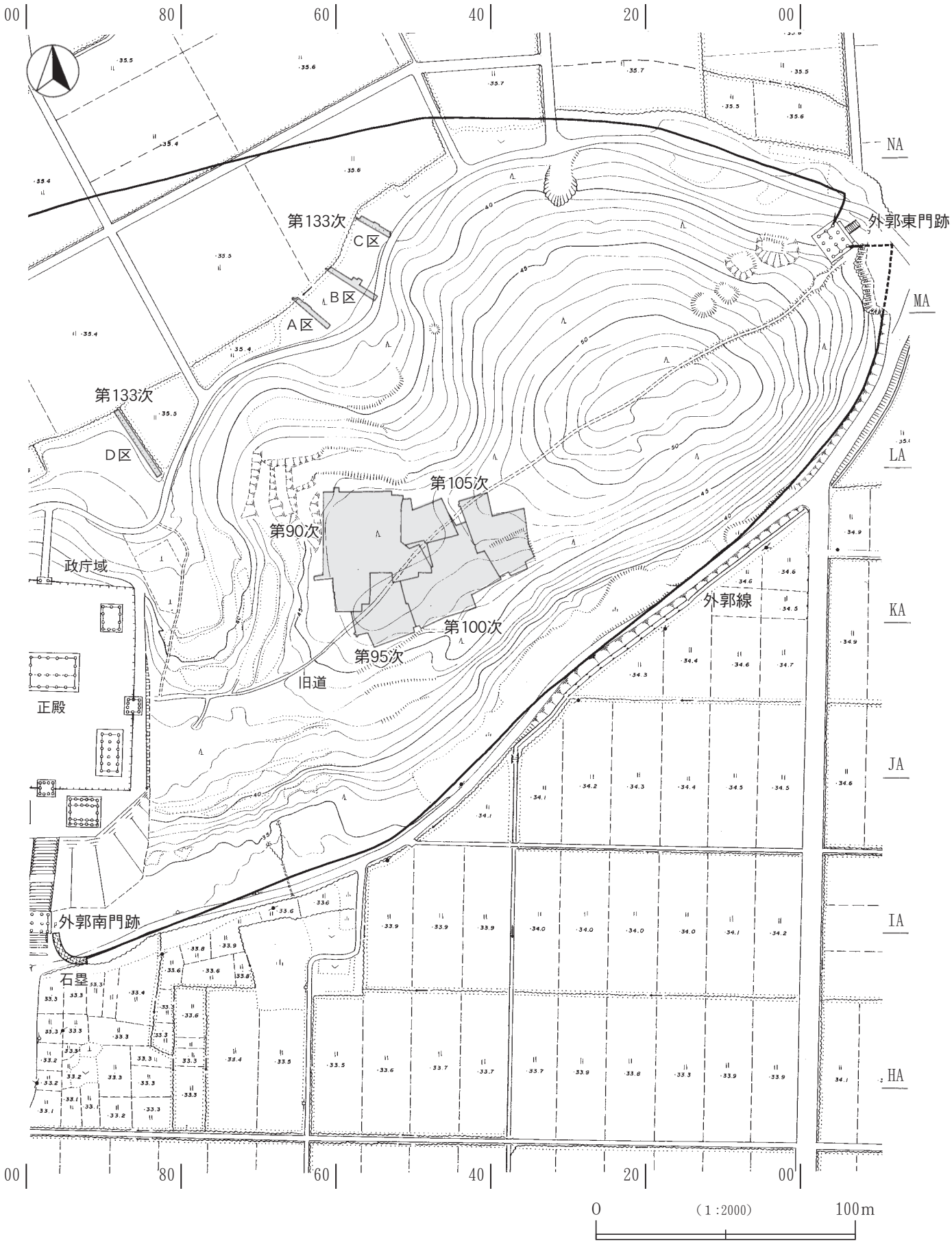
※調査地区は、『史跡払田柵跡第２次保存管理計画書』(2002年仙北町教育委員会)に示された「地区区分図」による
※調査面積のうち、〈　〉内数値は重複調査分を差し引いた面積
※網掛け部が本書掲載の調査区
※仙１～４は仙北町による調査、千１は千畑町による調査、大１は大仙市による調査であることを示す。位置は第４図参照
※調査面積の合計は、51,060㎡で重複調査分(2,964㎡)を差し引いた実質面積は、48,096㎡。史跡面積の5.5%を調査したことになる。

第３表　払田柵内各施設の変遷と対応・消長表

	801年頃か		（850年）	907年	915年	917年+α（10C中）	（10C後）	《中世以降》
政　庁	第Ⅰ期 Ａ期	Ｂ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	→	第Ⅳ期	第Ⅴ期	－
外郭線	Ａ期 築地＋材木塀		Ｂ期 材木塀	Ｃ期 →	→ →	Ｄ期 →	Ｄ期 →	－
外　柵	◎（※１） 材木塀角材列		×	×	×	×	×	－
長森丘陵 東方官衙域	Ａ→Ｂ→Ｃ期 建物→竪穴→建物＋塀		Ｄ期 竪穴（工房？）	Ｅ期 建物＋板塀	→ →	Ｅ期 →	Ｆ期 建物	（遺物散布地）
外郭南門 東方官衙域	◎ 3×5間建物	◎ →	◎　？ 3×3間建物	？	？	？	？	（遺物散布地）
外郭南門 南西官衙域	×		×	○ 2×7間建物	○ →	○　○ →　→	○　○ →　→	（遺物散布地）
外郭南門 周　辺	Ａ期 八脚門＋石塁＋築地		Ｂ期 八脚門＋材木塀	Ｃ期 →	→	Ｄ期 →	Ｄ期 →	－
南大路（外柵南門→外郭南門）	盛土？（側溝なし） 幅員12m以内、橋		（→）	（→）	（→）	（→）	（→）	－
外郭北門 周　辺	Ａ期 八脚門＋材木塀＋櫓		Ｂ期 →	Ｃ期 →	→ →	Ｄ期 →	Ｄ期 →	－
北大路（政庁北門→外郭北門）	盛土（側溝なし） 幅員６～７ｍ		→	木道 幅1～2.5m	→	？	？	－
ホイド清水	◎		→	→	→	→	→	（現存・開口）
長森丘陵 西　側	？		○　◎ 鍛冶工房域	◎ →	○ →	○　？ →	？	13世紀の墓域 15世紀の墓域
祭祀域	？	○　○ 外柵南門周辺	◎　◎ 柵外・厨 川 谷 地 遺 跡		◎	？	？	（埋納銭出土地）
低地部の 居住域	？	○（外柵西門脇の竪穴１棟）	？	？	？	？	？	（遺物散布地）
真山丘陵	（外柵内）		（外郭外）	→	→	→ （墓域、火葬墓）		13世紀以降の 城館（堀田城）

【嘉祥３年の大地震か】　　【十和田ａ火山灰】

※１　外柵を構成する材木塀は、河川と交差する地点で部分的に途切れていることが、平成４年の第92次調査で確認された。その位置は、外柵南門西側柱筋から西に24.5ｍの地点であり、ここから27ｍにわたって材木塀は検出されなかった。開口部については、遺構としての確認ができなかっただけであり、何らかの方法で遮蔽していた可能性が指摘されていた。しかし、平成18年の第134次調査区（Ｕ－２区）でも開口していた可能性が非常に高いことが報告され、やはり当初から材木塀が建てられていない箇所が複数あることが再確認された。Ｕ－２区の開口部は外郭南門の真東方向435ｍ（約４町）であり、その位置関係には作為が想起される。開口部は外柵東門近辺と第92次調査区の西方にも想定されており、少なくとも４か所の可能性を指摘しておきたい。秋田県教育委員会1993『払田柵跡－第92・93次調査概要－』秋田県文化財調査報告書第238集／秋田県教育委員会2008『払田柵跡　第128・131・134次調査報告書』秋田県文化財調査報告書第434集



第５図　長森東方・北方地区の地形と調査区

第３章　遺構と遺物

本書で取り扱う長森地区内の発掘調査は、第49次(昭和57年)、第49-2・3次(昭和58年)、第90次(平成３年)、第95次(平成５年)、第100次(平成６年)、第105次(平成７年)、第115・116次(平成11年)、第117・118次(平成12年)、第119・120次(平成13年)、第121次(平成14年)、第122・123次(平成15年)、第126・127次(平成16年)、第130次(平成17年)、第133次(平成18年)、第135次(平成19年)、第137次(平成20年)の21度にわたる。取り上げる遺構・遺物の分量と報告書の紙数を勘案して、個別のデータは各項末の表にまとめて紹介し、遺構・遺物のうち特記すべき事項のみを文章として掲載することにしたい。

次節以降には、調査地区を大きく長森東方地区、長森西方地区、長森北方地区の３地区に分け、長森西方地区は、政庁西側地区と外郭西門東側地区に細分して報告する。調査地区と調査次数の対応は次のとおりである。

長森東方地区：第90・95・100・105次。

政庁西側地区：第115・118・120・122・123・126・135・137次。

外郭西門東側地区：第116・117・119・121次。

長森北方地区：第49次(49-2・3次含む)・127・130・133次。

第１節　長森東方地区

１　調査の目的と経緯

長森東方地区は、政庁の東側約100ｍの丘陵平坦面部にあたる。ここには政庁に次ぐ広い平坦面が存在し、これを囲むように人為的に造成されたと考えられる多くの段や、それに挟まれて帯状に広がる幅の狭い平坦地がある。

第４次５年計画では、「外郭東部調査の実施」として、「広い平坦地の利用状況の解明を目的」とした調査を行うこととし、平成３年の第90次調査を皮切りに、平成５年の第95次調査、平成６年の第100次調査、平成７年の第105次調査の４度の発掘調査を実施した。なお、調査は当初３度の予定であったが、３度目の第100次調査において、創建期段階の掘立柱建物跡(SB1127)が検出され、更に未調査区域に展開することが予測されたため、次年度に「創建期建物群の配置状況を探ることを主目的」とした調査を行うこととなったものである。４度の調査面積は重複調査分を除く合計で3,192㎡である。

２　調査区の立地

長森丘陵部東側は、政庁東門を起点とすると、丘陵東端部に位置する外郭東門に向かって北東方向に細長く延びる。その長さは約340ｍであり、南北方向の幅は160～170ｍ程である。政庁東門から北東に約160ｍ地点には、開析作用により形成された沢が北に向かって開口し、丘陵を２分している。長森東方地区は、政庁寄りの丘陵部にあたる。

本地区平坦面は、政庁のある平坦面よりもやや北に張り出しており、標高も政庁に比べ約４ｍ高く、政庁を北東からわずかに見下ろす位置となる。外郭東門跡付近から政庁東門に至るまで東西に走る道

路状の凹みが地表から観察され、調査地付近でも丘陵稜線上を北東－南西方向に通っている。このあたりは明治年間には畑地として利用され、近年は杉林であったが、昭和63年に調査予定地の杉立木の大部分が伐採され、若干の杉が残る原野となっていた。

調査地区は北側が平坦であるが、北東側と南東側は緩やかに傾斜している。調査地点での標高は、北東部で50ｍ、北側平坦面で47ｍ、南東側緩斜面部で46ｍである。沖積地との比高は12～16ｍである。

３　検出遺構と遺物

（１）基本層序

本地区の基本層序は、調査区北側壁で観察した結果を掲載する。

第Ⅰ層：黒褐色シルト質土(7.5YR2/2)表土、層厚10～15cm。

第Ⅱ層：暗褐色シルト質土(7.5YR3/3)層厚10～20cm。

第Ⅲ層：黒褐色シルト質土(10YR2/2)炭化物を少量含む。層厚15～25cm。

第Ⅳ層：褐色粘質土(7.5YR4/4)地山漸移層。層厚10cm前後。

第Ⅴ層：褐色粘質土(7.5YR4/6)地山土。

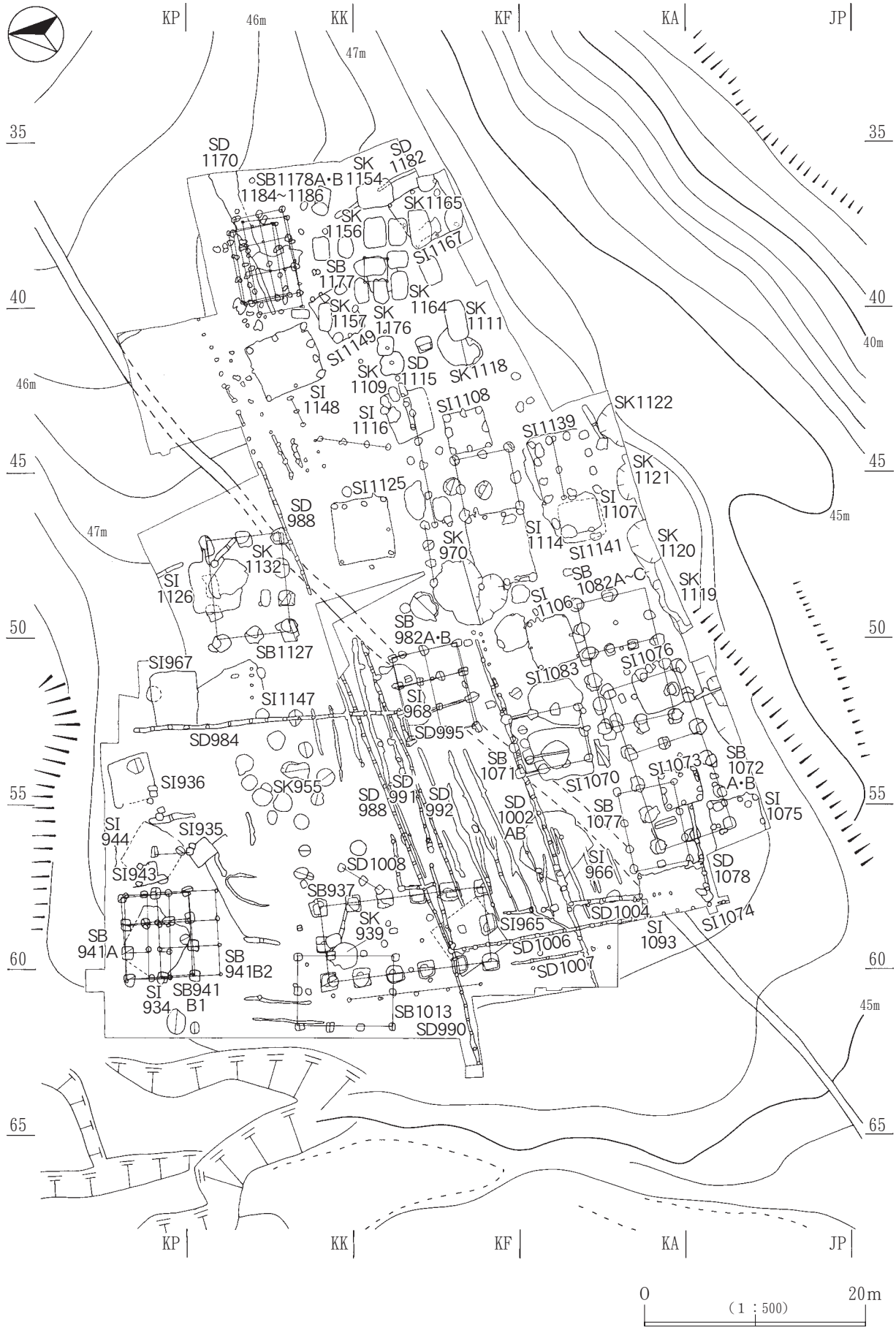
古代の遺物包含層である第Ⅲ層は調査区内全域に分布するが、上位の第Ⅱ層は、調査区西寄り(第90次)でのみ認められた。すなわち、調査区東寄り(第105次)では表土下が第Ⅲ層となる。遺構確認面は第Ⅲ層中あるいは第Ⅳ層面であり、表土から地山面までの深さは25～50cmである。

（２）調査概要

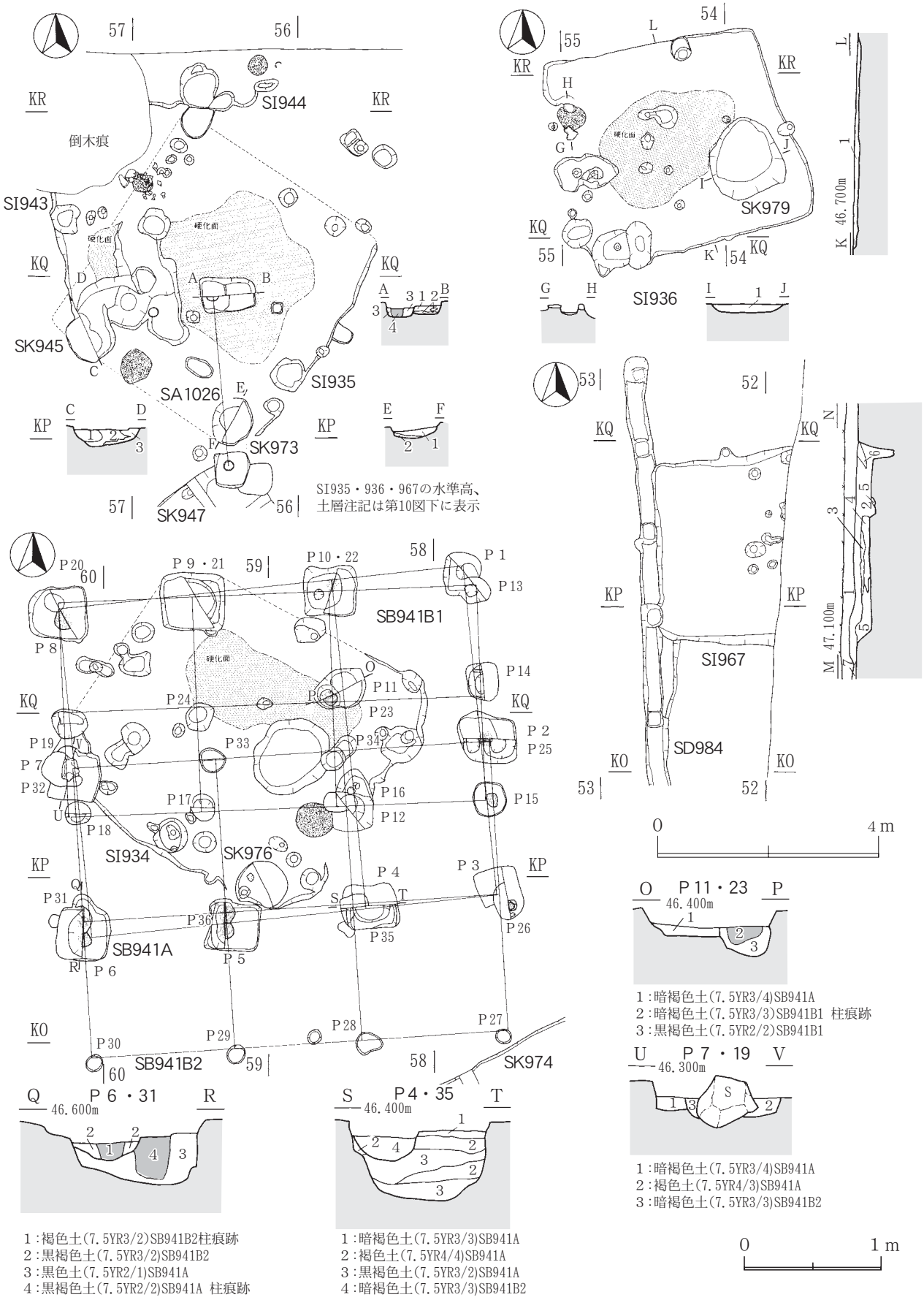
検出遺構と出土遺物の概要は、遺構観察表と遺物観察表にまとめた。本調査で検出された古代の遺構は、竪穴建物跡32棟、掘立柱建物跡25棟、板塀跡・溝跡53条、土坑72基である。その他に縄文時代の土坑12基、Ｔピット10基も確認されている。なお、遺構番号は第90次が934～1026、第95次が1070～1093、第100次が1105～1143、第105次が1147～1187である。

図版１

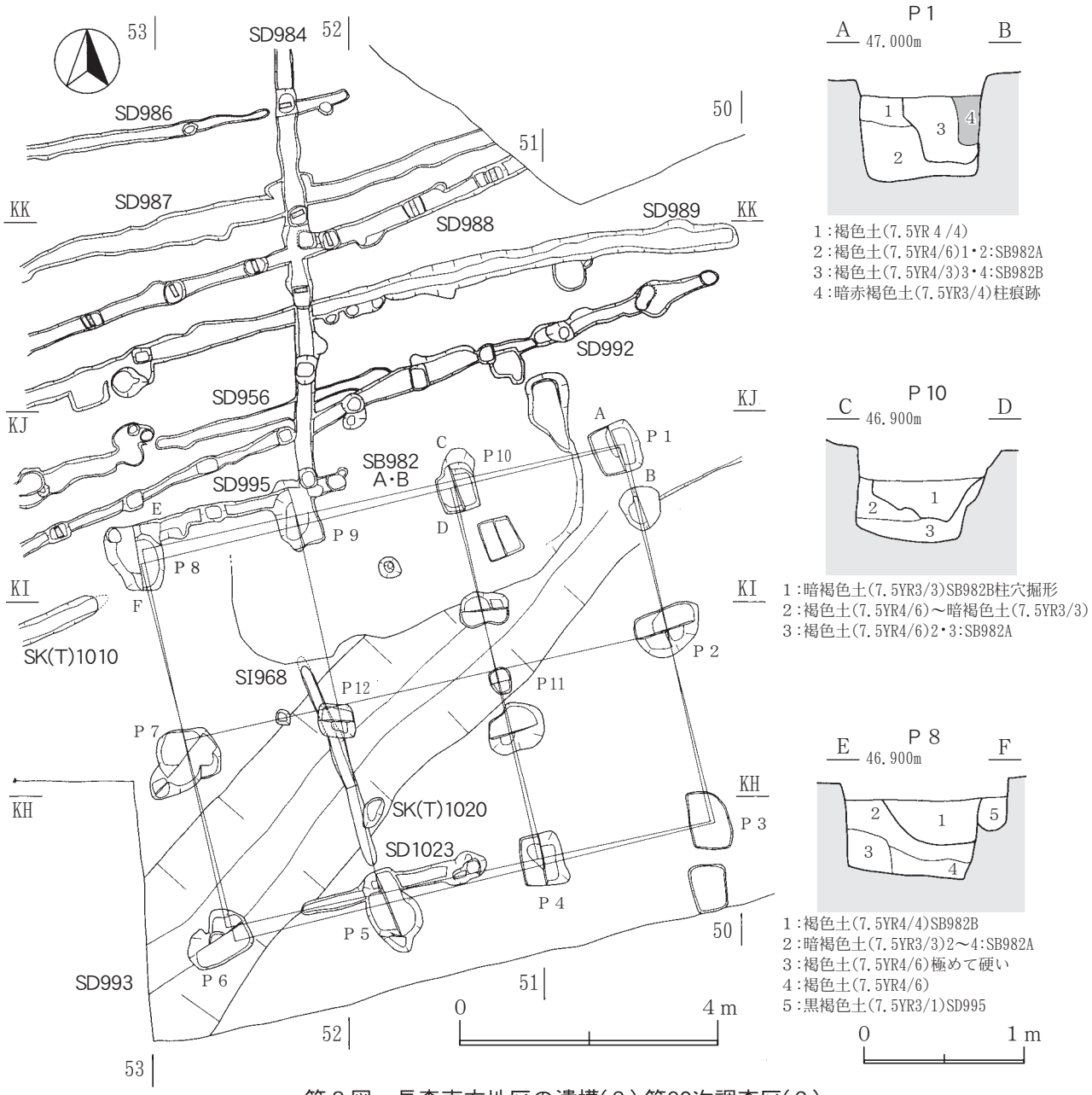
第105次調査風景(北→)
手前の竪穴は、ＳＩ1148
［19950822 撮影］



第６図　長森東方地区の地形と遺構配置図



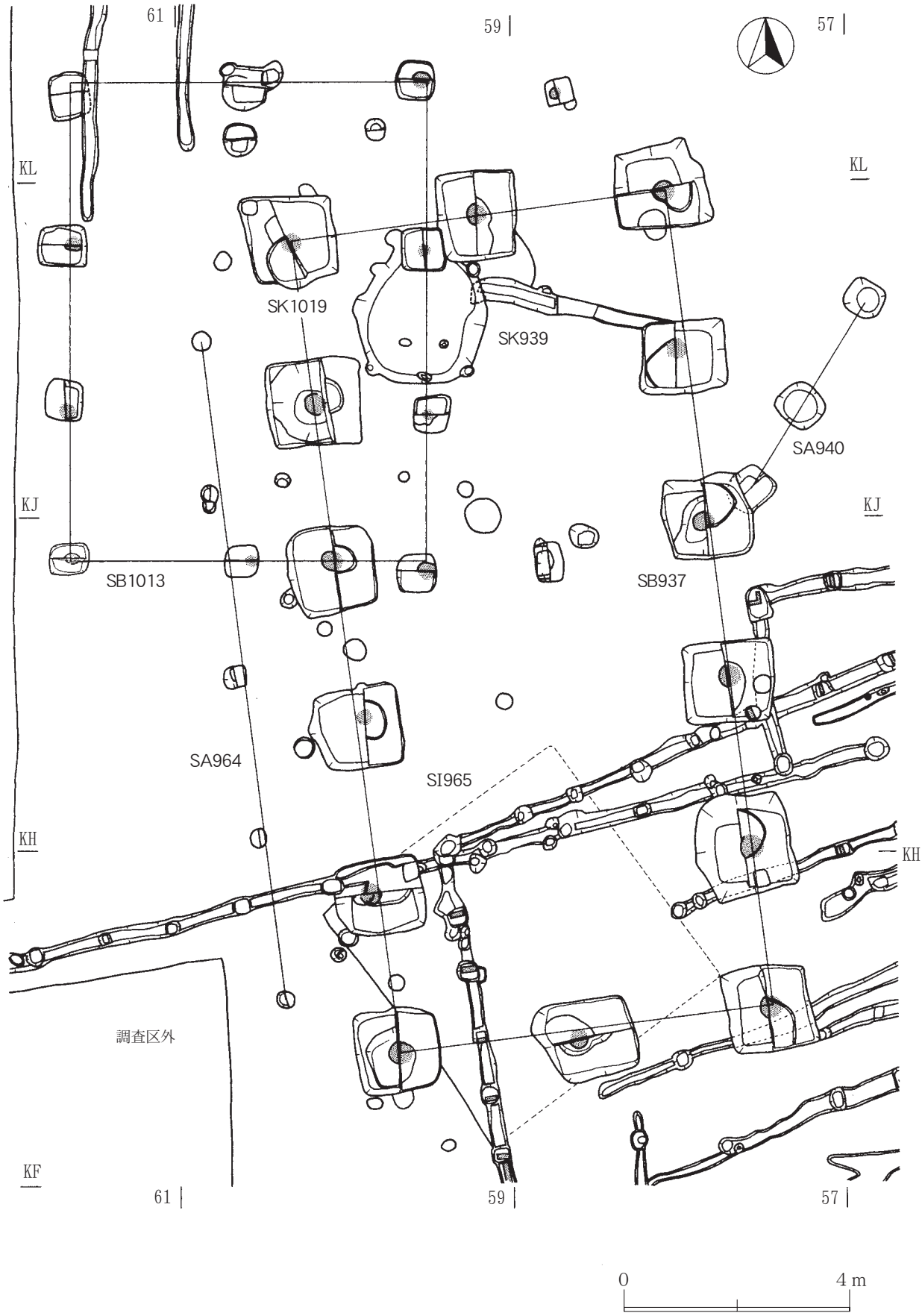
第７図　長森東方地区の遺構(１)第90次調査区(１)



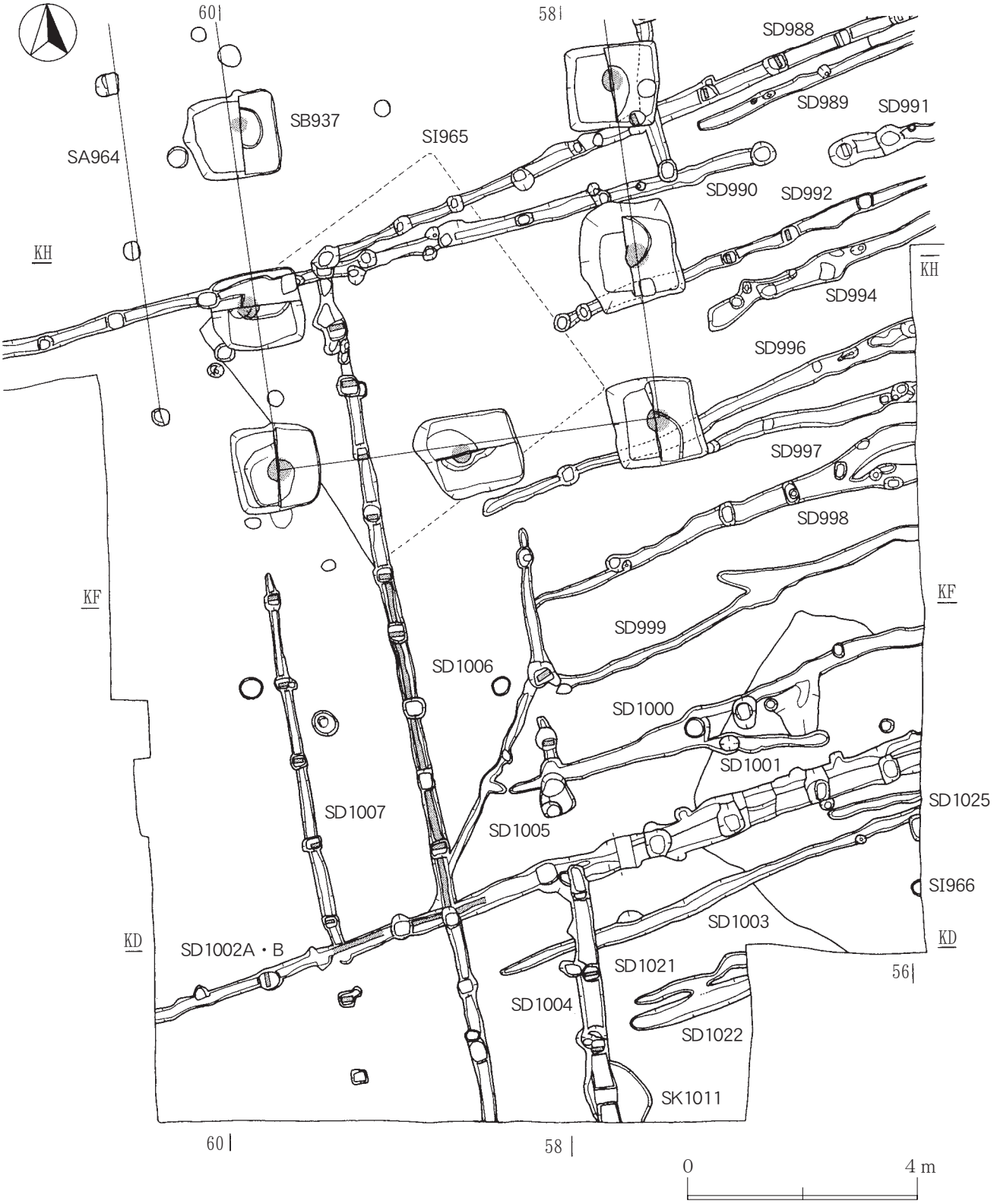
第８図　長森東方地区の遺構(２)第90次調査区(２)

図版２

第90次調査風景(東→)
手前が土坑群、奥にＳＢ
937、林の左手奥に政庁
[19910830 撮影]

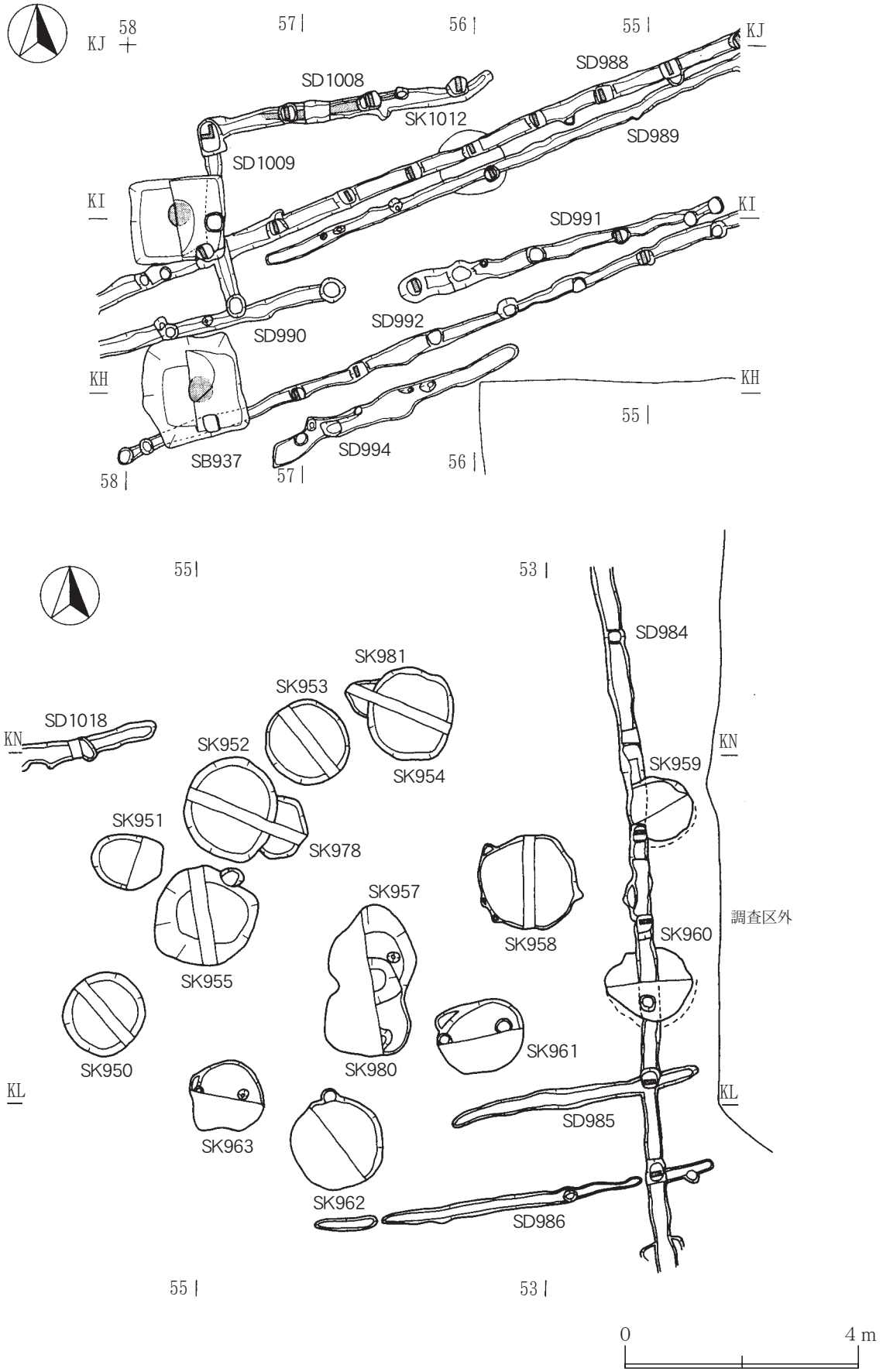


第９図　長森東方地区の遺構(３)第90次調査区(３)

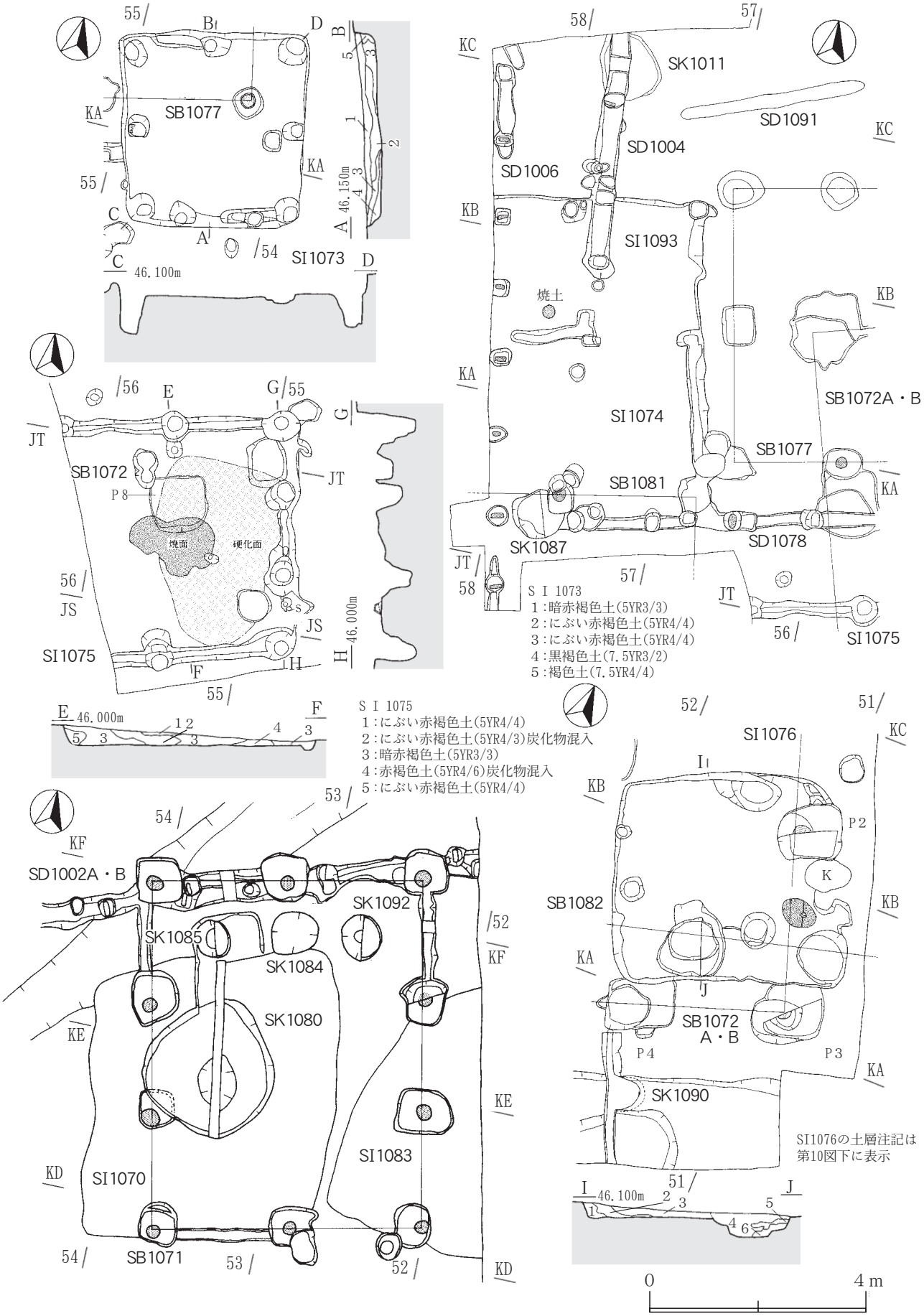


第10図　長森東方地区の遺構(４)第90次調査区(４)

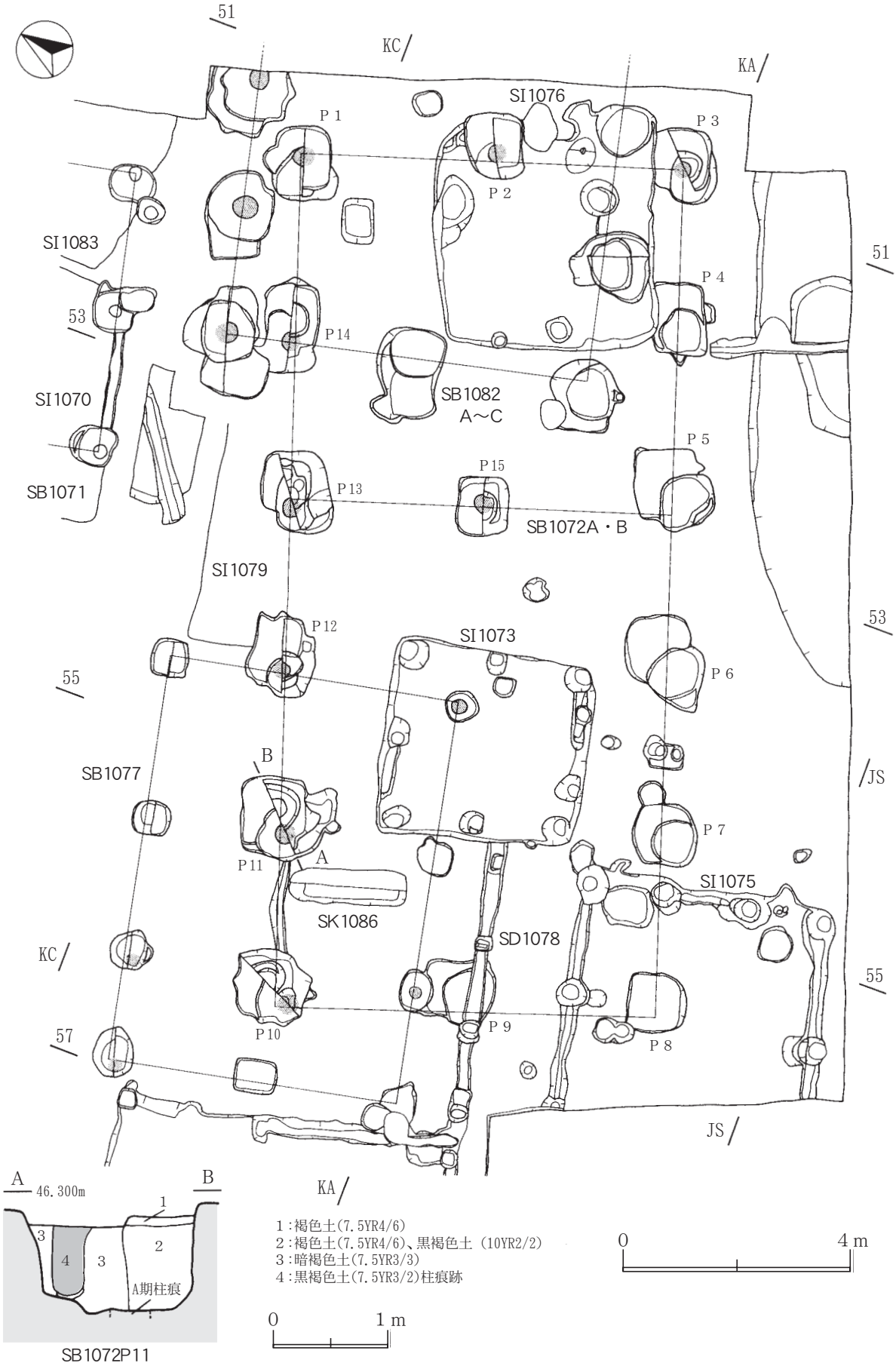
【第７図SI935・936・967の水準高と土層注記】SI935　Ａ－Ｂ間(46.400m)１:黒褐色土(7.5YR2/2)、２:褐色土(7.5YR4/4)、３:褐色土(7.5YR4/3)、４:黒褐色土(7.5YR3/2)柱痕跡。Ｃ－Ｄ間(46.600m)1:暗褐色土(7.5YR3/4)焼土混入、２:黒色土(7.5YR2/1)、３:暗褐色土(7.5YR3/3)。Ｅ－Ｆ間(46.600m)１:暗褐色土(7.5YR3/3)、２:褐色土(7.5YR4/6)、SI936　Ｇ－Ｈ間(46.800m)、Ｉ－Ｊ間(46.700m)１:暗褐色土(7.5YR3/3)、Ｋ－Ｌ間(46.700m)１:黒褐色土(7.5YR3/2)。SI967　１:暗褐色土(10YR3/3)表土、２:黒褐色土(10.5YR2/3)、３:褐色土(7.5YR4/4)全体に火山灰含む、４:暗褐色土(10YR3/4)、５:褐色土(10YR4/4)、６:黒褐色土(10YR3/2)、７:暗褐色土(7.5YR3/4)
【第12図SI1076の土層注記】１:暗赤褐色土(5YR3/3)、２:黒褐色土(7.5YR3/2)、３:暗褐色土(7.5YR3/4)、４:暗褐色土(7.5YR3/4)焼土・炭化物少量混入、５:暗赤褐色土(5YR3/3)、６:暗褐色土(7.5YR3/4)



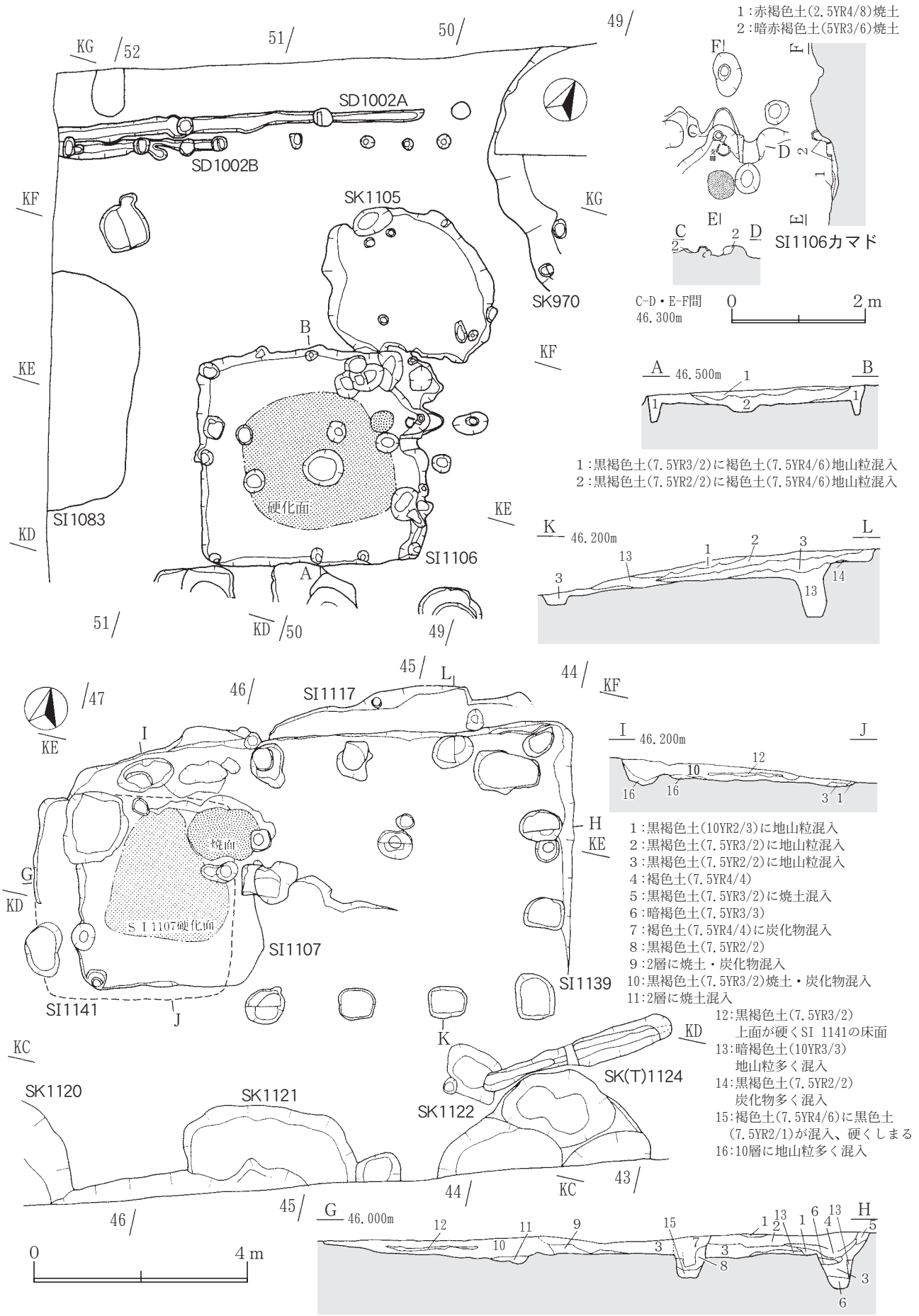
第11図　長森東方地区の遺構(５)第90次調査区(５)



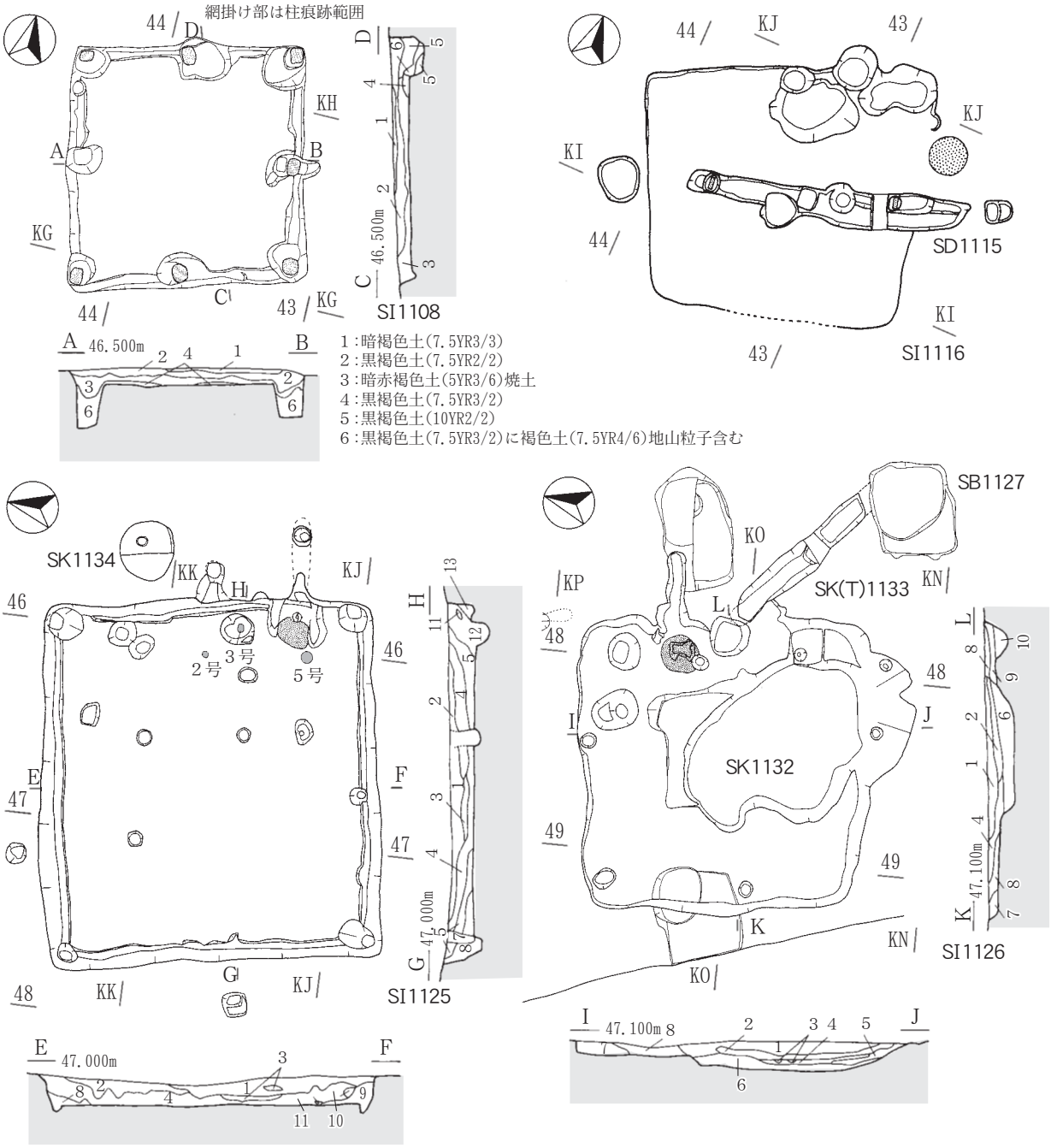
第12図　長森東方地区の遺構(６)第95次調査区(１)



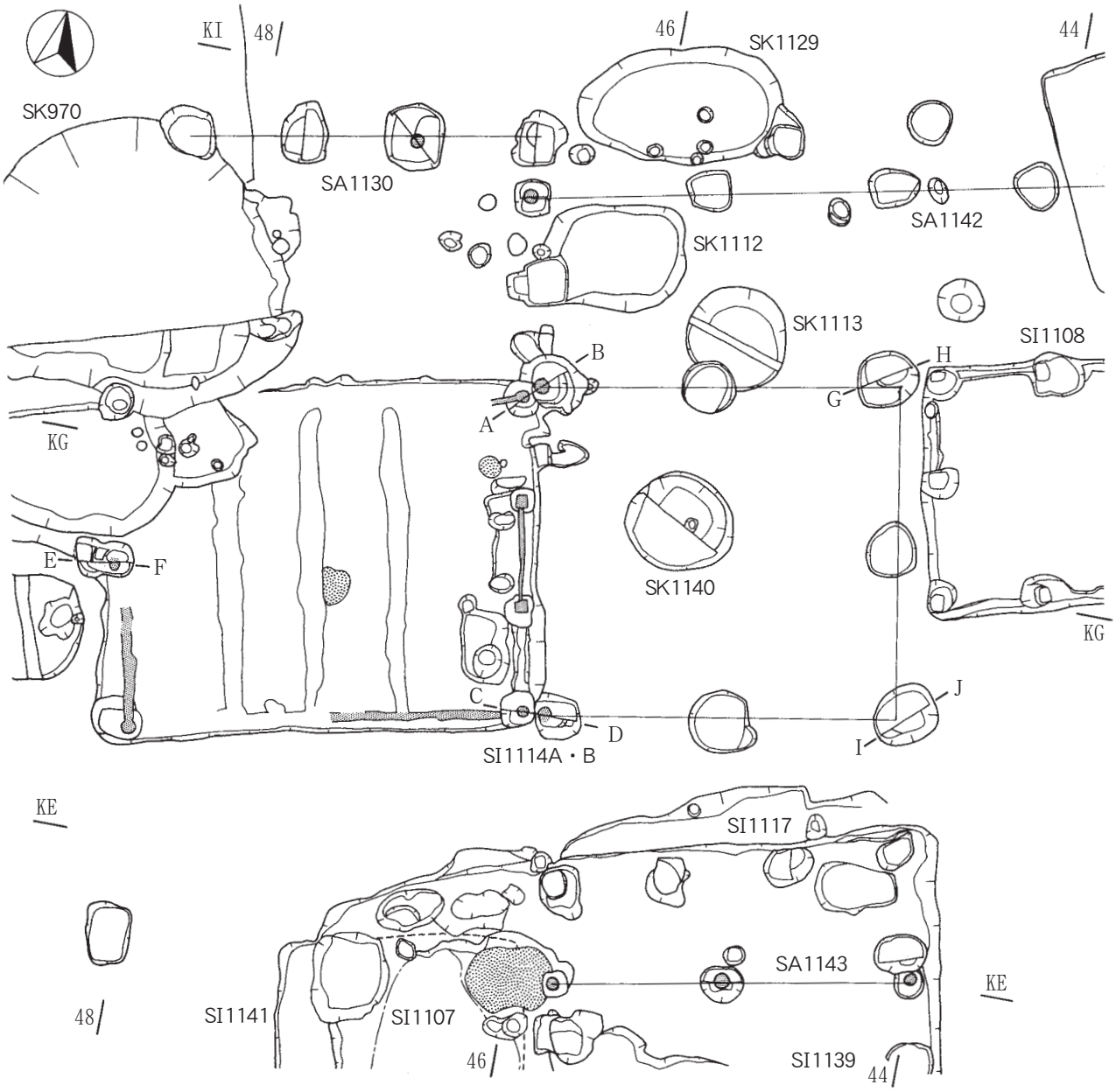
第13図　長森東方地区の遺構(７)第95次調査区(２)

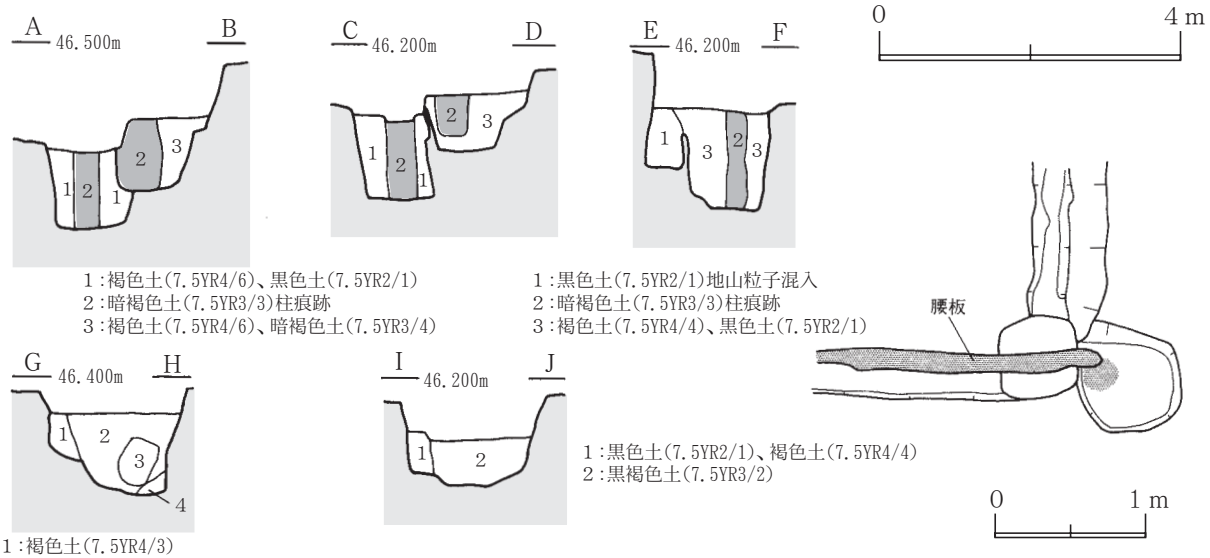


第14図　長森東方地区の遺構(８)第100次調査区(１)

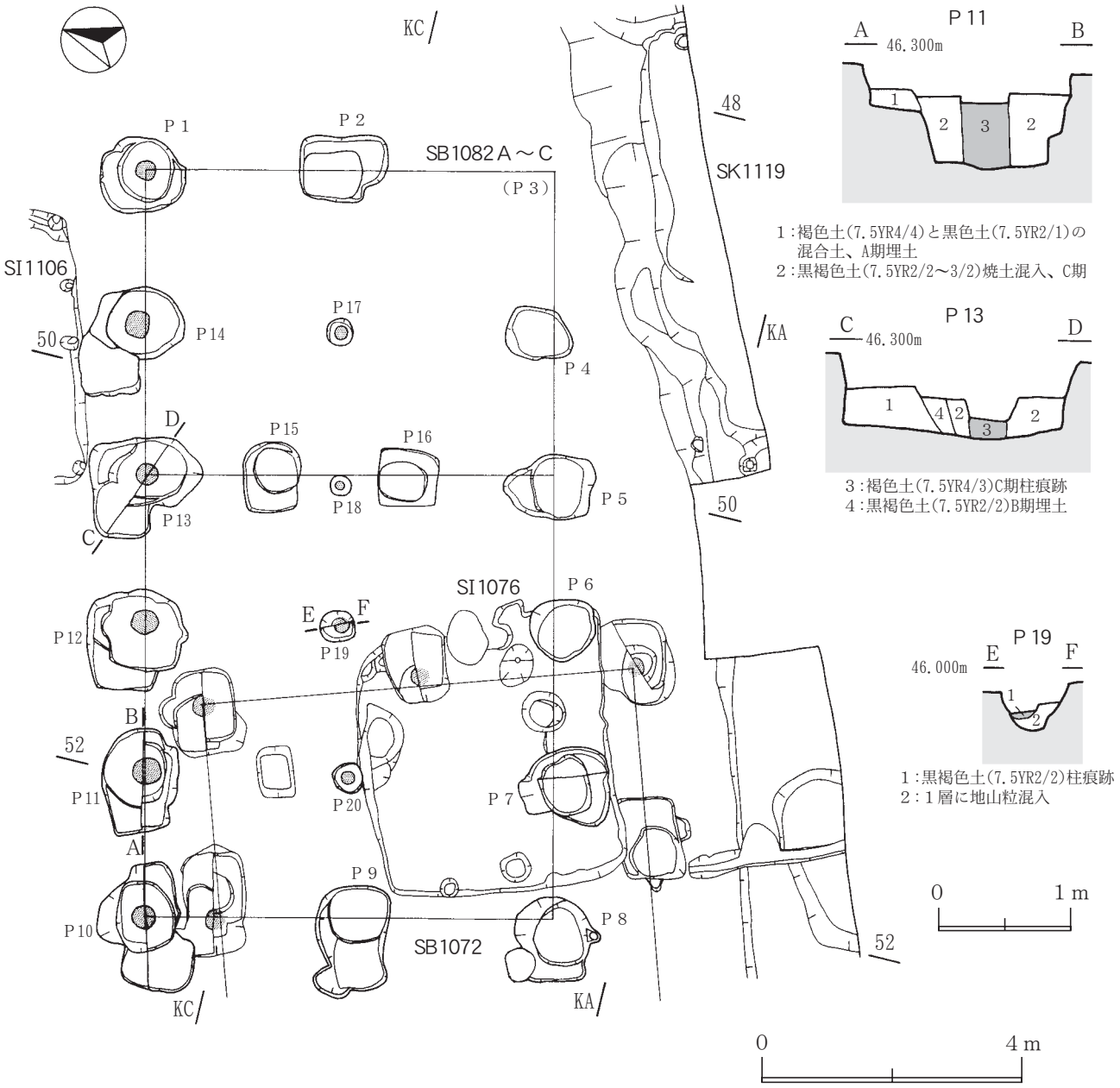


第15図　長森東方地区の遺構(９)第100次調査区(２)





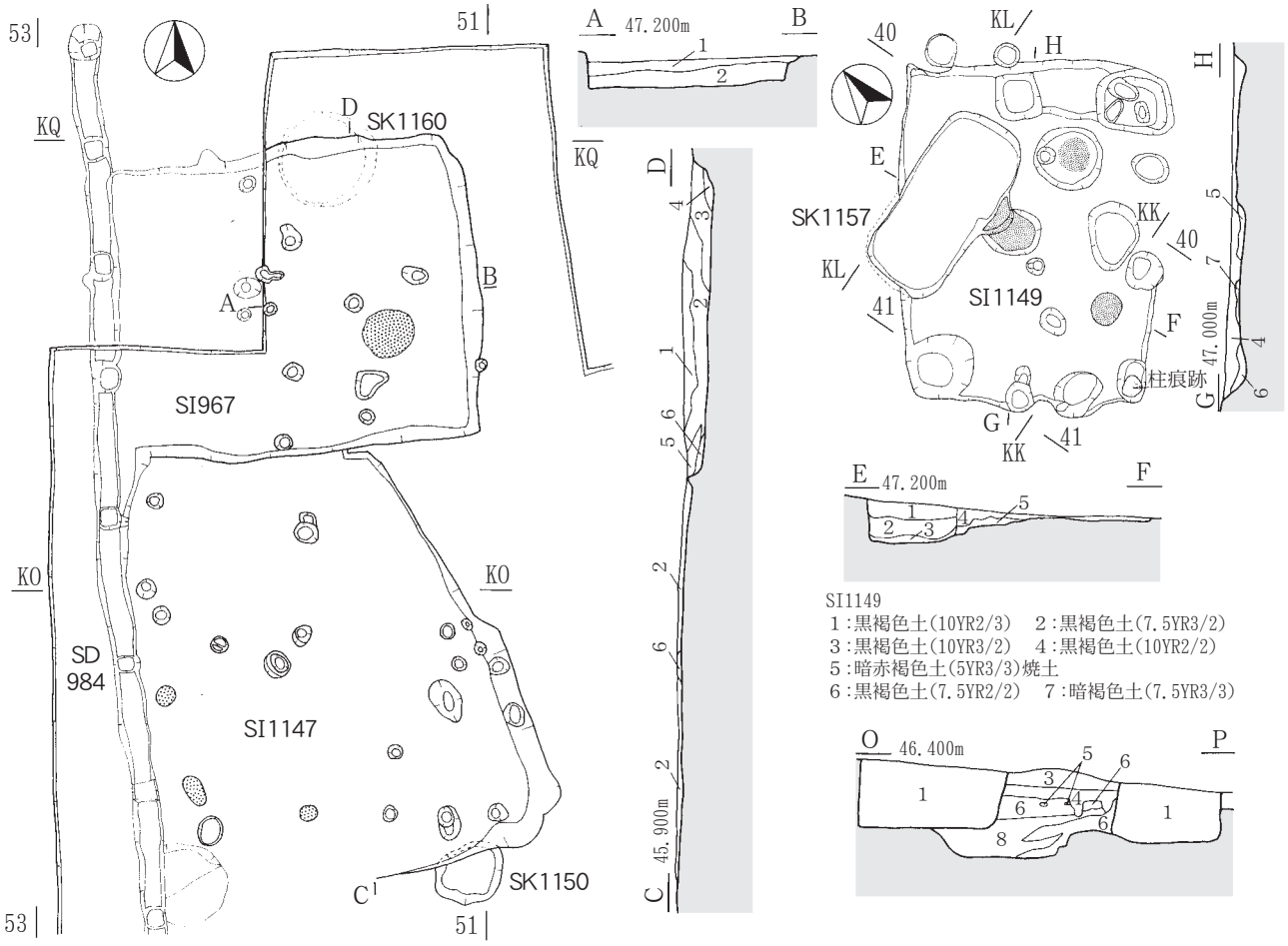
第16図　長森東方地区の遺構(10) 第100次調査区(３)



第17図　長森東方地区の遺構(11) 第100次調査区(４)

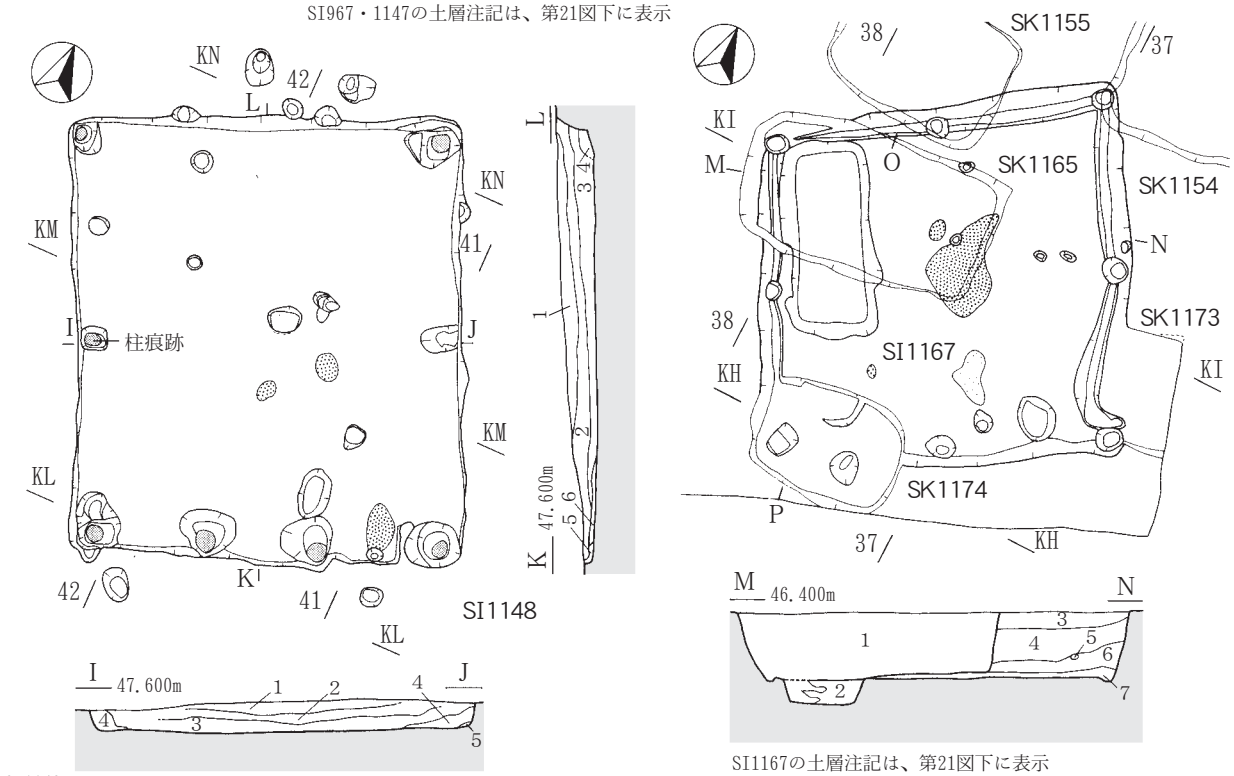
図版３

第100次調査風景(西→)
右手前がＳＢ1082
写真右側(南側)が緩やかに
傾斜している
[19940808 撮影]



SI967・1147の土層注記は、第21図下に表示

SI1149
１:黒褐色土(10YR2/3)　２:黒褐色土(7.5YR3/2)
３:黒褐色土(10YR3/2)　４:黒褐色土(10YR2/2)
５:暗赤褐色土(5YR3/3)焼土
６:黒褐色土(7.5YR2/2)　７:暗褐色土(7.5YR3/3)

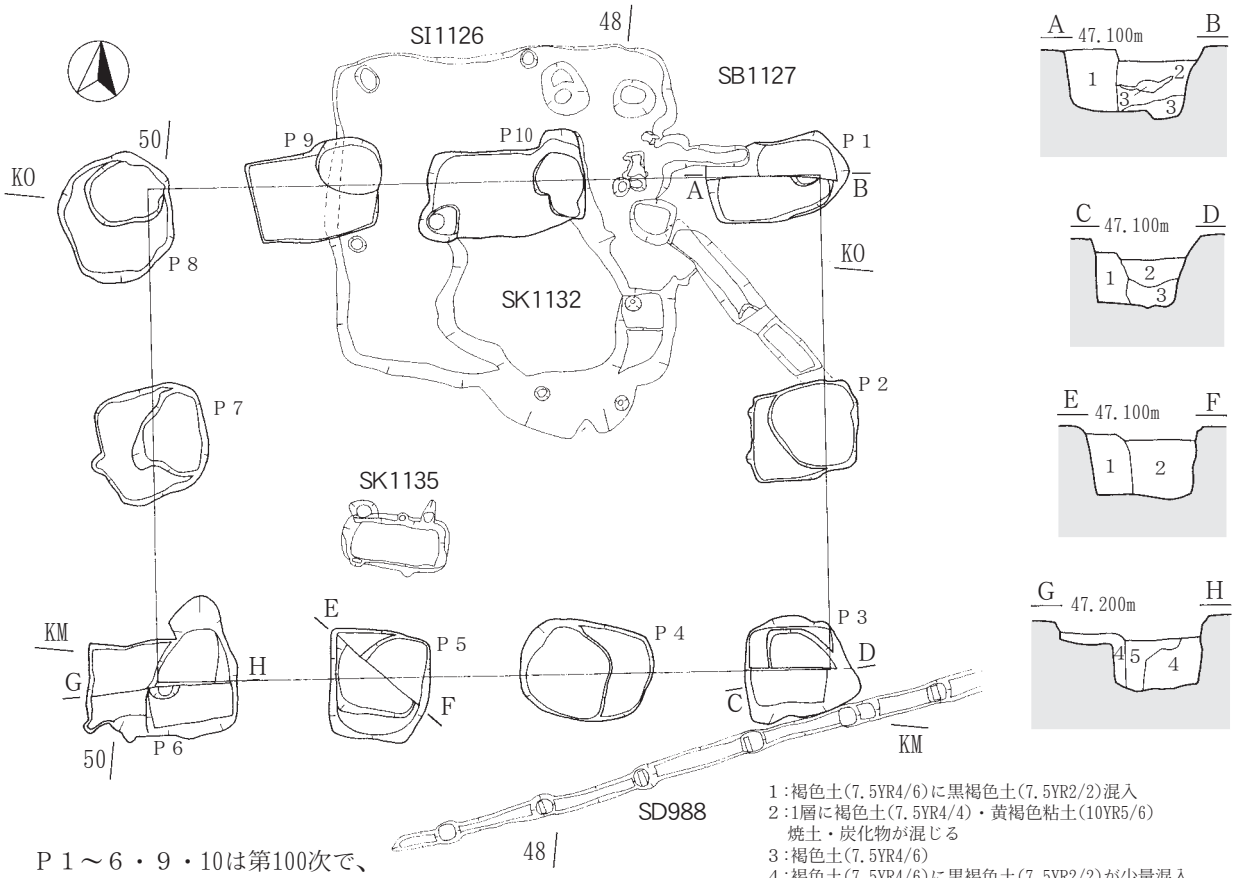


SI1167の土層注記は、第21図下に表示

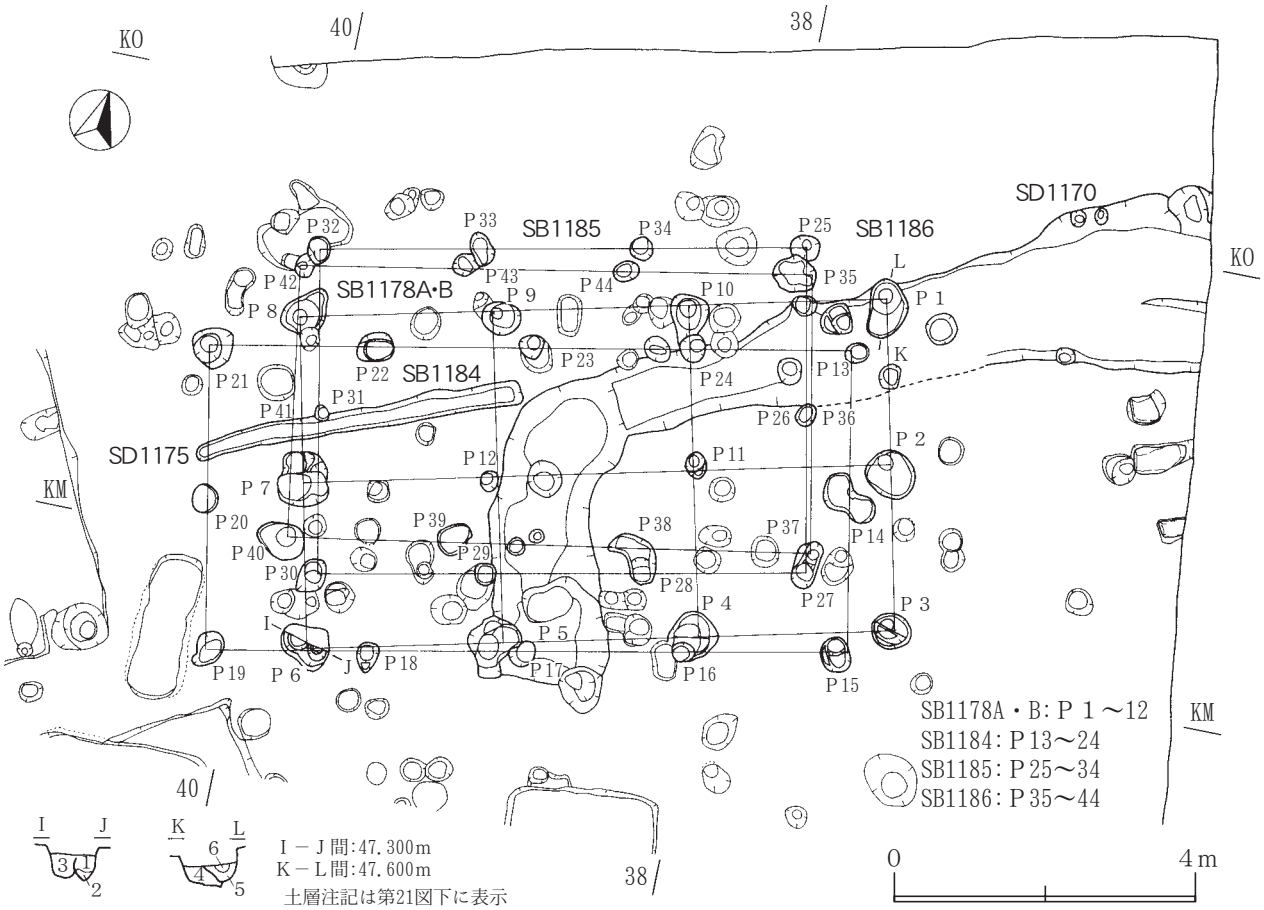
SI1148
１:黒褐色土(7.5YR3/2)
２:黒褐色土(10YR3/2)火山灰少量混入
３:黒褐色土(10YR2/2)
４:黒褐色土(7.5YR2/1)に褐色(7.5YR4/6)地山土混入
５:褐色土(7.5YR4/6)　６:暗褐色土(7.5YR3/3)炭化物多く含む

0　(1:100)　4 m

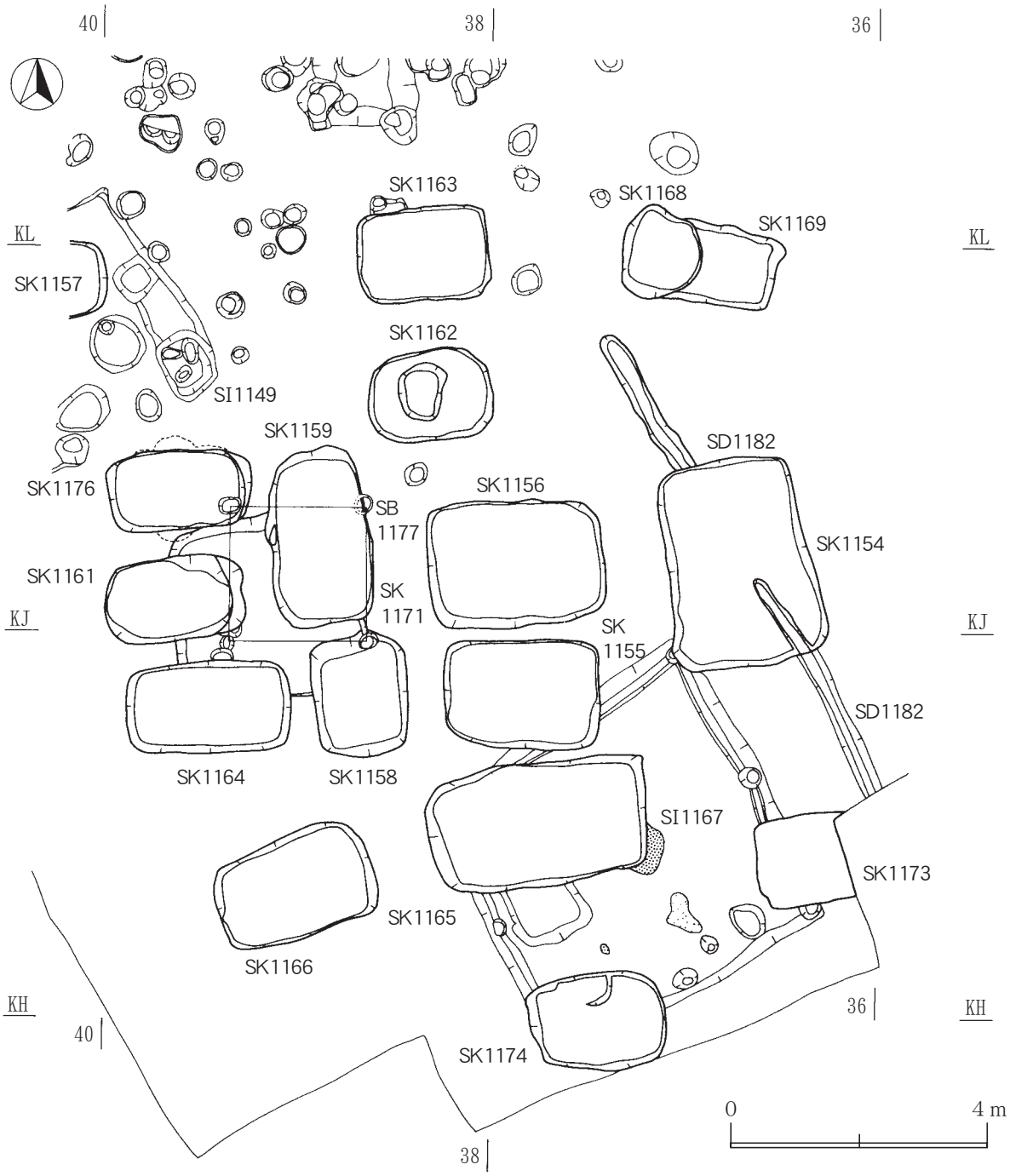
第18図　長森東方地区の遺構(12) 第105次調査区(１)



第19図　長森東方地区の遺構(13) 第100・105次調査区(２)



第20図　長森東方地区の遺構(14) 第105次調査区(３)



第21図　長森東方地区の遺構(15) 第105次調査区(４)

【第15図SI1125・1126の土層注記】SI1125、１:暗褐色土(7.5YR3/3)、２:黒褐色土(7.5YR3/2)、３:黒褐色土(10YR2/2)、４:暗褐色土(10YR3/3)、５:黒褐色土(10YR3/2)、６:褐色土(7.5YR4/4)、７:黒褐色土(7.5YR3/2)、８:褐色土(7.5YR4/3)、９:黒色土(10YR2/1)、黒褐色土(10YR3/2)、10:褐色土(7.5YR4/3)、11:暗褐色土(10YR3/3)火山灰、12:暗褐色土(10YR3/3)焼土混入、13:暗褐色土(10YR3/3)に褐色(7.5YR4/6)地山粒混入。SI1126、１:暗褐色土(7.5YR3/3)、２:黒褐色土(7.5YR2/2)火山灰を含む、３:にぶい黄橙色土(10YR6/3)火山灰、４:暗褐色土(10YR3/4)火山灰含む、５:にぶい黄褐色土(10YR4/3)、６:褐色土(7.5YR4/4)、７:褐色土(7.5YR4/3)、８:褐色土(7.5YR4/4)、９:褐色土(7.5YR4/3)焼土粒含む、10:暗褐色土(7.5YR3/4)焼土粒含む

【第18図SI967・1147・1167の土層注記】SI967・1147、１:暗褐色土(7.5YR3/3)、２:褐色土(7.5YR4/3)、３:黒褐色土(7.5YR3/2)、４:極暗褐色土(7.5YR2/3)、５:にぶい黄褐色土(10YR4/3)、６:褐色土(7.5YR4/4)。SI1167、１:黒褐色土(7.5YR2/2)に褐色(7.5YR4/6)地山粒子混入、２:黒色土(7.5YR2/1)、３:黒褐色土(7.5YR3/2)地山粒子混入、４:黒褐色土(10YR2/2)、５:明黄褐色土(10YR6/6)火山灰を含む、６:黒褐色土(10YR2/2)地山粒子混入、７:黒褐色土(7.5YR2/2)、８:黒褐色土(10YR2/3)地山粒子多く混入

【第20図SB1178・1184～1186の土層注記】１:黒褐色土(10YR2/3)、２:黒褐色土(10YR2/3)地山粒子全体に混入、３:黒褐色土(10YR2/3)、４:黒褐色土(10YR2/3)、５:褐色土(10YR4/6)に黒褐色土(10YR2/3)混入、６:黒褐色土(10YR2/2)柱痕跡

第４表　遺構観察表（１）　長森東方地区

竪穴建物跡

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	規模・形状	床面・柱穴・壁溝など	埋土状況	出土遺物・時期・備考
ＳＩ934	7	第90次調査区北部、SI943の西に位置、SB941・942・972に切られる	南東辺5.0ｍ、南西辺5.5mの方形、床面積約26.9㎡	カマドは南東辺のやや南寄りに付設、火床面の焼土と袖部に使用されていたと見られる塼のみ残存。床面の一部に硬化面が認められる。	削平（整地）を受けている	須恵器坏(墨書あり)・甕、土師器坏・甕、瓦、石製品（側縁に磨痕、敲痕）
ＳＩ935	7	第90次SI936の西に位置、竪穴の西側をSI943、南隅をSK973、中央部をSA1026に切られる	削平により南東辺のみ残存、長さ4.2ｍ程、方形プランとすれば推定床面積約17.6㎡	南西辺のやや西寄りにカマド付設、火床面の焼土は長さ70cm×幅50cm、床面中央部に硬化面あり	削平（整地）を受けている	須恵器坏・甕・蓋・高台付坏、土師器坏
ＳＩ936	7	第90次調査区北部、SI935の東に位置、SK979に切られる	東西4.3m、南北4.0m、東辺は3.6mの方形、床面積約16.1㎡	カマドは西辺の北寄りに位置、袖は塼と石で構成、須恵器坏２個体を重ねて支脚として使用。床面中央部に硬化面		須恵器坏・甕、土師器坏・甕、砥石
ＳＩ943	7	第90次SI935を切る、南西隅をSK945に切られる	東西2.0m、南北2.5m 床面積約4.9㎡	住居北東隅にカマド、火床面と袖部に使用された石や支脚に転用されたと見られる土師器坏あり、床面の一部に硬化面		須恵器坏、土師器坏・甕
ＳＩ944	7	第90次調査区北端、大部分は調査区外	倒木痕によって破壊を受けており、竪穴の規模不明	東辺の南寄りにカマド、径35cmの火床面あり		須恵器坏・甕、土師器坏・甕（底部砲弾形）
ＳＩ965	９・10	第90次調査区南西部、SB937、SD988・990・1006に切られる	南西辺の長さは5.1m	住居西半に床面（貼床）がわずかに残る		なし
ＳＩ966	10	第90次調査で西側を第95次で東側を調査、SD1002に切られる	一辺5.4～5.8ｍ程、床面積約28.5㎡	床面(貼床)が薄く残るのみ		なし
ＳＩ967	７・18	第90次調査で西側を、第105次調査で東側を調査、南にSI1147、西にSD984が接する。縄文時代のSK1160を切る	東西5.1m、南北4.15m、床面積19.3㎡	カマドは付設されていないが、住居南東部に直径70cmの円形の焼土面あり、壁溝なし、明確な柱穴も未確認	堆積土中に火山灰層あり	須恵器坏・壺・甕、土師器坏(墨書あり)・甕、瓦
ＳＩ968	8	第90次調査区南西部、SD991・992・993、SB982・1014などに切られる	東西方向の長さ約5.8m	床面の一部のみ残存		なし
ＳＩ1070	12・13	第95次SI1083の西に位置、SB1071・SK1084・1080に切られる	東辺5ｍ、西辺4.6ｍ、北辺4.4ｍ、南辺4.2ｍで南北に長い方形、床面積約22.7㎡	床面の一部のみ残存		なし
ＳＩ1073	12・13	第95次調査区南部、SB1077柱穴掘形と重複、掘形が新しい	東西3.5ｍ、南北3.6ｍの方形、床面積11.9㎡	カマド、炉なし、壁際に柱穴が配置、南辺のみ４本、他辺は各３本(径33～55cm、深さ56～71cm)、部分的に柱穴を結ぶ壁溝あり(幅35cm、深さ27～35cm)		須恵器坏（体部に「厨」墨書あり）、土師器坏(底部「十」刻線)・高台付坏(内面黒色処理)・甕
ＳＩ1074	12	第95次SI1093を切ってその南に重複	一辺約3.6ｍ、床面積約13㎡	東辺と北辺の一部に壁溝あり(幅25～30cm、深さ７～10cm)		須恵器坏・甕、土師器坏・甕
ＳＩ1075	12・13	第95次調査区南西隅、SI1074の南東に位置	一辺4.6ｍの方形、床面積約21㎡	床面東半部に硬化面、中央部に焼面(長軸1.55m、短軸1.1m)、東壁南端にカマド、柱は北辺・南辺３本、東辺４本(径50～70cm、深さ70～76cm)、壁際に幅20～25cm、深さ5～10cmの壁溝、竪穴北東隅に長軸95cm、短軸70cm、深さ40cmの楕円形の凹み		須恵器坏・甕・蓋、土師器坏・甕（甕下半部を支脚に転用）
ＳＩ1076	12 13 17	第95次調査区南東隅、SB1072・1082により切られる	南北3.85ｍ、東西約4.0ｍの方形、床面積約15.3㎡	東壁やや南寄りにカマド、火床面と支脚の土師器甕のみ、床面に硬化面なし		須恵器坏・蓋・壺、土師器坏・甕（甕下半部を支脚に転用）
ＳＩ1079	13	第95次SB1072の柱穴掘形により切られる	北辺の東西長さ3.8m	床面の一部が残るのみ		なし
ＳＩ1083	12～14	第95次SB1071により切られる	東西4.2m、南北4.9m	床面の一部が残るのみ		第95・100次で調査
ＳＩ1093	12	第95次SB1077の西に位置、SI1074により切られる	北・東壁の一部のみ残存し規模不明	柱穴の径35～54cm、深さ12～20cm、床面に径24cm円形の焼面があるがカマドは残存しない		なし
ＳＩ1106	14・17	第100次調査区西部、SI1083の東に位置	東西4.3ｍ、南北4.0ｍの方形、床面積16.7㎡	床面平坦、中央部に硬化面あり、東壁の北寄りにカマド。土師器甕を支脚に転用。壁際に柱穴、一辺に３本、柱穴の深さ30～40cm		須恵器坏(「館」墨書)・双耳坏、土師器甕、刀子(木質部残)・フイゴ羽口
ＳＩ1107	14・16	第100次調査区南部、SI1114の南に位置する、SI1141が本竪穴の上位に重複	東西約3.4ｍ、南北4.6ｍの方形、床面積15.3㎡	床面中央部に硬化面、東辺の北寄りにカマド、南西隅に柱穴(径約40cm、深さ17cm)		須恵器坏・高台付坏、土師器坏
ＳＩ1108	15・16	第100次調査区東部、SI1114の東に位置、SI1141が本竪穴の上位に重複	一辺3.65～3.90ｍの方形、床面積13.6㎡	四辺に幅15～30cm、深さ5～12cmの壁溝、床面平坦で硬い、炉・カマドの付設なし、柱は一辺に３本で全体に深い、西辺中央にある深さ66cmの柱を除き、柱穴内に柱痕跡が残る	堆積土全体に焼土・炭化物	須恵器坏・甕、土師器坏・石製紡錘車、羽口

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	規模・形状	床面・柱穴・壁溝など	埋土状況	出土遺物・時期・備考
ＳＩ1114 A	16	第100次SI1107の北に位置、竪穴部分と掘立柱部分からなる。両者の接点部では柱を共有していると考えられることから、一連の建物であったと判断される。竪穴・掘立柱部ともに柱穴に重複があり、２時期	《竪穴部分》東西6.8m、南北5.3m、床面積33.7㎡	東辺の北寄りにカマド、袖の一部残存、縦長の石を支脚とする。煙道は壁より掘立柱側に80㎝張り出す。床面には焼土面あり。柱穴は西辺に３本、東辺に４本。東辺の中２本の柱は一辺18㎝の角柱痕跡があり、両者を結ぶ幅５～８㎝の板状痕跡あり。東辺南端の隅柱は深さ55～60㎝の掘形内に径18㎝の円形の柱痕あり		
			《掘立柱建物部分》桁行（東西）２間×梁行（南北）２間の掘立柱建物が竪穴の東に取り付く。柱間距離は東西６m、南北4.8m			竪穴と掘立柱建物部を合わせた規模は、東西12.8ｍ、南北5.3m
ＳＩ1114 B	16	SI1114Ａとほぼ同位置で重複。柱は全体的に東に移動させている。竪穴の北西部はSK970に切られる。掘立柱建物部分の東西方向の柱列と平行して、北約2.8ｍにSA1142、南約４ｍにSA1143が位置	《竪穴部分》東西6.8m、南北5.3m、床面積33.7㎡	カマドはＡ期を踏襲か。床面には並行する南北の溝が３条確認、板敷とするための根太を入れた溝か。溝はＡ期の焼土を切る。柱穴は西辺３本でＡ期柱よりわずかに東に移動させている。柱間には板状痕跡あり、南西隅柱の柱痕は径18㎝。板状痕跡は南辺と北辺の一部でも確認。東辺の柱は両隅の２本になる。Ａ期柱の東に移動し、竪穴の外側に設置		須恵器坏（「小勝」墨書あり）・甕、土師器坏（竪穴部から出土）、鍛冶滓
			《掘立柱建物部分》桁行（東西）２間×梁行（南北）２間の掘立柱建物が竪穴の東に取り付く。柱はＡ期より僅かに東に移動させている。柱間距離は東西5.4m、南北5.0m			竪穴と掘立柱建物部を合わせた規模は、東西12.2ｍ、南北5.3m
ＳＩ1116	15・16	第100次調査区北東部、SI1108の北に位置、竪穴中央部をSD1115が東西に切る	東西4.5m、南北3.6～4mの方形、床面積16.7㎡	東辺北寄りにカマド、壁溝・柱穴なし		土師器坏、須恵器坏・甕、鉄製品（鋤先）、羽口
ＳＩ1117	14・16	第100次SI1139により切られる	東西約4.9m	竪穴の北辺と床面がわずかに残る	炭化物を多く含む	遺物なし、焼失家屋か
ＳＩ1125	15・19	第100次SI1114Ａ・Ｂの北に位置	東西5.65m、南北5.3mの方形、床面積29.2㎡	壁高4辺とも45～55㎝、壁溝幅10～15㎝、深さ約10㎝。東辺南寄りカマド、残存状況良好、煙道はトンネル式。土師器甕を支脚に転用。柱穴は竪穴の四隅に位置（径30～52㎝、深さ47～68㎝）	床面直上に火山灰の堆積層	第2・3・5号漆紙文書、須恵器坏（「春」墨書）、土師器坏（「鷹空上」墨書）・高台付坏・甕、丸瓦、鍛冶滓
ＳＩ1126	15・19	第100次調査区北部、SB1127、SK1132と重複、SB1127北東隅柱掘形をカマド煙道部が切る	一辺約4.5mの方形、床面積20.4㎡	東辺北寄りにカマド、袖は残存しないが心材と見られる石が残る、火床面は径60㎝の焼土		須恵器坏・長頸壺・甕、土師器坏・甕、平瓦・丸瓦、砥石
ＳＩ1139	14・16	第100次調査区南部、SI1107の東に位置、北辺でSI1117を切る、SI1114Ｂに伴うSA1143が、本竪穴の床を切る	東西6.3m、南北5.6mの東西にやや長い方形、床面積30.2㎡	カマド、炉なし。柱穴は西辺のみ３本、他辺は４本壁際に配置、柱穴は径60㎝、深さ85㎝程		須恵器坏・壺、土師器坏・高台付坏・小形鉢、鍛冶滓
ＳＩ1141	14・16	第100次SI1107の西に位置、SI1107の上位に構築	一辺約3.8m	カマドなし		土師器坏、鍛冶滓
ＳＩ1147	18	第105次SI967の南に位置、SD984と重複し切られる、南辺はSK1150を切る	東辺壁のみの確認、一辺約5.5m	カマド・炉未確認、壁溝や明確な柱穴なし		須恵器坏、土師器坏
ＳＩ1148		第105次調査区中央部	東西5.2m、南北6.0mの方形、床面積30.5㎡	南辺東寄りにカマド、床面中央部に焼土面２か所、柱穴は壁直下にあり東西両辺に３本、北辺２本、南辺４本、径20～25㎝の柱痕	堆積土中に火山灰小ブロック	須恵器坏（「厨」墨書）・高台付坏（「官」、「小勝」墨書）・甕、土師器坏・高台付坏・甕、羽口
ＳＩ1149	18・21	第105次SI1148の南東に位置、SK1157に切られる	東西4.5m、南北3.4mの長方形、床面積15.3㎡	カマドなし。床面南西部に長径44㎝、短径38㎝の焼土面。その他、床面上に小土坑あり。柱穴は南西隅部に径55㎝の掘形内に径25～30㎝の柱痕跡あり、他の柱穴不明確		土師器坏・甕、須恵器坏
ＳＩ1167	18・21	第105次調査区南東部、SK1154・1155・1165・1173・1174に切られる	東西4.9m、南北5.0mの方形、床面積22.6㎡	カマド不明。南辺を除いて幅約20㎝、深さ5～10㎝の壁溝あり、床面中央部に長さ1.5m、幅0.9mの焼土面あり。床面北西部に南北2.6m、東西1～1.2m、深さ30～35㎝の土坑付設。柱穴は、壁直下に各辺3本、柱穴径20～40㎝、深さ20～43㎝	堆積土中に火山灰	須恵器坏・高台付坏・壺・甕、土師器坏・甕、漆紙文書細片、鍛冶滓

掘立柱建物跡

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	建物構造・規模	建物方位	柱掘形規模・形状・深さ、柱痕規模等	埋土状況	出土遺物・時期・備考
ＳＢ937	９～11	第90次、SI965を切り、SA940、SD990・1009・992、SK938・939・1019に切られる	桁行５間×梁行２間の南北棟、柱間距離の平均は、桁行総長14.7ｍ(北から2.9＋3.0+2.8+3.1+2.9)、梁行総長6.8ｍ(東から3.35+3.45)、計画尺は桁行50尺(10尺等間)、梁行22尺(11尺等間)と推定	N8°W	柱穴掘形は一辺1.3～1.7ｍの方形、深さは1.5ｍ程、柱痕は径30cm	掘形内埋土は黒色土と褐色土	土師器坏・甕・蓋、須恵器甕・蓋、瓦
ＳＢ941Ａ	7	第90次調査区北西部、SI934を切り、SB941Ｂ1・Ｂ2に切られる	桁行３間×梁行２間の東西棟。柱間距離の平均は、桁行総長7.4ｍ(東から2.4＋2.6＋2.4)、梁行総長6.0ｍ(北から3.0+3.0)、計画尺は桁行25尺(８＋9＋8)梁行20尺(10尺等間)と推定、桁行方向に東１間と西２間に間仕切柱が立ち、建物を桁行１間と２間に分割	N84°E	第７図Ｐ１～12、柱掘形は一辺70～120cmの方形、柱痕跡は４本検出、径約25cm	黒褐色土、黒色土、褐色土が水平に互層	土師器甕、平瓦
ＳＢ941Ｂ1	7	第90次SB941Aを切る	桁行３間×梁行２間の東西棟。柱間距離の平均は、桁行総長7.6ｍ(東から2.7＋2.5＋2.4)、梁総長3.9ｍ(北から2.0+1.9)、計画尺は桁行25尺(9＋8＋8)梁行13尺(6.5尺等間)と推定	N88°E	第７図Ｐ13～24、柱穴掘形は50～60cmの円形、柱痕は、径25cm程		土師器甕
ＳＢ941Ｂ2	7	第90次SB941Aを切る	桁行３間×梁行２間の東西棟。柱間距離の平均は、桁行総長7.6ｍ(東から2.7＋2.3＋2.6)、梁行総長5.3ｍ(北から2.8+2.5)、計画尺は桁行25.5尺(東から9＋8＋8.5)、梁行18尺(北から9.5＋8.5)と推定	N87°E	第７図Ｐ25～36、柱穴掘形は長径70cmほどの楕円形、南側４本は直径25～50cmの円形、柱痕は径20～50cm		土師器甕、須恵器壺
ＳＢ982Ａ	8	第90次調査区南東部に位置	桁行３間×梁行２間の東西棟。桁行方向が間仕切りによって東１間と西２間に分けられる。柱間距離は桁行総長7.6ｍ(東から2.7＋2.5＋2.4)、梁行総長6.0ｍ(東から3.0＋3.0)、計画尺は桁行25尺(東から9＋8＋8)、梁行20尺(10尺等間)と推定	N76°E	掘形は略長方形、長軸方向の北側４本と南側３本は南北方向に、両妻柱と南西隅柱及び間仕切の２本は東西方向に向いている、深さ52～70cm、柱痕跡は認められない	褐色土、黒褐色土が水平に互層	須恵器坏、土師器坏
ＳＢ982Ｂ	8	第90次SB982Aとほぼ同一位置で、掘形に位置が重なる(棟通り中央２本を除く)。SI968を切り、SD993によって切られる。SD1023が本建物の掘形埋土を切る	桁行３間×梁行２間の東西棟。柱間距離は桁行総長7.6ｍ(東から2.7＋2.5＋2.4)、梁行総長6.0ｍ(北から3.0＋3.0)、計画尺は桁行25尺(9＋8＋8)、梁行20尺(10尺等間)と推定	N77°E	柱掘形は北側４本と棟通り３本、南側1本のみ、北側の掘形は楕円形(長軸55～88cm、短軸50～60cm、深さ36～56cm)、棟通り中央の２本は径40～55cm、柱痕跡は認められない		なし
ＳＢ1013	9	第90次SK939・SD1016により切られる。SB937北妻の柱掘形と、本建物東側北から２番目の柱掘形がわずかに重複	桁行３間×梁行２間の南北棟。柱間距離の平均は桁行総長8.6ｍ(北から3.0＋3.0＋2.6)、梁行総長6.4ｍ(東から3.1＋3.3)、計画尺は桁行29尺(10＋10＋9)、梁行21尺(10＋11)と推定	南北基準線にほぼ一致	柱掘形は方形、最小で60ｘ56cm、最大で86ｘ74cm、深さは東側で65cm、径25～30cmの柱痕、建物東側の南北隅柱から約2.4ｍ東へ離れ、掘形１基(径約20cmの柱痕跡)		土師器甕
ＳＢ1071	12 13	第95次SB1072の北に位置	桁行３間×梁行２間の南北棟。柱間距離の平均は桁行総長6.4ｍ(北から2.2＋2.1＋2.1)、梁行総長5.0ｍ(東から2.5＋2.5)、計画尺は桁行21尺(７尺等間)、梁行16尺(8尺等間)、１尺は30.7cm	桁行でN12°W	柱穴掘形は一辺70～90cmの方形で垂直に掘り込まれる、柱痕跡深さ90cm、径20～30cm、掘形の間に幅20～30cm、深さ８cm程の溝あり	暗褐色土	土師器坏・須恵器坏
ＳＢ1072Ａ	12 13 17	第95次SI1075・1076、SD1078、SB1077・1082によって切られる	桁行５間×梁行２間の東西棟。柱間距離は北側桁行総長15.05ｍ(東から3.3＋2.9＋2.85＋2.9＋3.1)、東側梁行総長6.7ｍ(北から3.4＋3.3)、計画尺は桁行50尺(11＋10＋9＋10＋10)、梁行22尺(11尺等間)、1尺は30.3cm、東妻より２間目に間仕切りがあり、建物を東２間と西３間に分かつ	N19°W	柱穴掘形は、方形で一辺1.0～1.2ｍ、深さ0.9～1.06ｍ、径30cm前後の柱痕跡	黒褐色土と褐色土が混じる	須恵器坏、土師器坏
ＳＢ1072Ｂ	12 13 17				Ａ期掘形から南西方向に多少ずらした位置に構築、掘形は長軸1.2ｍ、短軸1.0ｍの楕円形、深さはＡ期と同じ、径30cm前後の柱痕跡		
ＳＢ1077	12 13	第95次SB1072Ａ・Ｂと重複する	桁行３間×梁行２間の東西棟。柱間距離の平均は桁行総長7.2ｍ(東から2.75＋2.45＋2.0)、梁行総長5.1ｍ(北から2.55＋2.55)、計画尺は桁行24尺(9＋8＋7)、梁行17尺(8.5尺等間)と推定	N12°W	柱穴掘形は長軸74～85cm、短軸57～70cmの楕円形、または長軸75cm、短軸60cm程の方形、深さは北側４本は40～66cm、西妻13cm、堀形下部に直径20～25cmの柱痕跡		須恵器坏(墨書、内面を転用硯)、土師器坏破片

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	建物構造・規模	建物方位	柱掘形規模・形状・深さ、柱痕規模等	埋土状況	出土遺物・時期・備考
ＳＢ1081	12	第95次調査区南西隅、SK1087を切り、SI1074により切られる	建物の北側にあたる柱穴掘形２基のみの確認	Ｎ80°Ｅ	西側の掘形は長軸58cm、短軸48cm、径26cmの柱痕跡		なし
ＳＢ1082Ａ	12 13 17	第95・100次で確認、SB1082Ａ掘形はSB1072Ｂの掘形を切る、SI1076を切っているがSI1106とは接するのみ	桁行５間×梁行２間の東西棟。柱間距離は北側桁行総長11.45ｍ（東から2.35＋2.3＋2.3＋2.3＋2.2）、梁行総長6.3ｍ（北から3.0＋3.3）、計画尺は桁行39尺（８＋８＋８＋８+７）、梁行21尺（北から10＋11）と推定、東妻より２間めに間仕切り（建物を東２間と西３間に分ける）		柱穴掘形は方形に近い	埋土上方にわずかに火山灰を含む	須恵器坏（底面「官」墨書）、土師器坏・甕
ＳＢ1082Ｂ							
ＳＢ1082Ｃ					柱穴掘形は長径1～1.4ｍ、短径1ｍ程の楕円形、柱痕跡径約30cm、径30～50cmの円形の掘形の中に、径20cmの柱痕跡		
ＳＢ1127	15 19	第100・105次調査、南側柱列の方位をSB937（第90次調査）の北妻に揃える、両者は関連した建物か	桁行３間×梁行２間の東西棟。桁行総長9.0ｍ、梁行総長6.6ｍ	南側柱列でＮ84°Ｅ	柱穴掘形は方形、一辺1.1～1.8ｍ、深さ0.8～1.0ｍ	地山の褐色土にごく少量黒褐色土が混じる	須恵器坏・甕、平瓦・丸瓦、鉄製品
ＳＢ1177	21	第105次調査区南東部、SK1158・1159・1161を切り込んで構築	桁行１間×梁行１間、柱間距離は2.1ｍ	Ｎ1°Ｗ	柱穴径30cm、深さ北西柱66cm、南東柱47cm		なし
ＳＢ1178Ａ	20	第105次SD1170・1175等と重複するが新旧不明	桁行３間×梁行２間の総柱東西棟。Ｂ期建物の桁行総長7.7ｍ（柱間距離東から2.60＋2.50＋2.60）、梁行総長4.4ｍ（柱間距離2.2ｍ等間）	Ｎ77°Ｅ			須恵器坏破片
ＳＢ1178Ｂ	20				第20図Ｐ１～12、柱穴掘形径40～50cm円形（柱痕跡径20～25cm）、棟通り中２本の柱穴掘形は径20cm		
ＳＢ1184	20	第105次SD1170・1175やSB1178等と重複するが新旧不明	桁行４間×梁行２間の東西棟。桁行総長8.5ｍ（柱間距離は東から2.1＋2.1＋2.05＋2.25）、梁行総長4.0ｍ（柱間距離2ｍ等間）	Ｎ79°Ｅ	第20図P13～24、柱穴掘形は径30～50cmの円形で、深さは北側52～77cm、棟柱10～20cm		なし
ＳＢ1185	20	第105次SD1170・1175やSB1179・1184等と重複するが新旧不明	桁行３間×梁行２間の東西棟。桁行総長6.4ｍ（柱間距離は東から2.15＋2.15＋2.1）、梁行総長4.3ｍ（柱間距離は北から2.2＋2.1）、桁行・梁行とも柱間７尺を計画	Ｎ79°Ｅ	第20図P25～34、柱穴掘形は径20～40cmの円形で、深さ33～71cm、棟柱10～20cm		なし
ＳＢ1186	20	第105次SD1170・1175やSB1178・1184・1185等と重複するが新旧不明	桁行３間×梁行２間の東西棟。桁行総長6.4ｍ（柱間距離は東から2.2＋2.1＋2.1）で７尺等間、梁行総長3.6ｍ	Ｎ80°Ｅ	第20図P35～44、柱穴掘形は径25～40cmの円形や長軸65cm、短軸48cmの楕円形、深さは北側柱列で20～55cm、南西隅部のみ径25cmの柱痕跡		なし

土坑

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	形状・規模	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＫ938		第90次SB937の北妻柱穴掘形を切り、SK939によって切られる	楕円形、長軸1.42ｍ、短軸推定1.2ｍ、深さ３cm		須恵器坏・甕、土師器坏	
ＳＫ939	9	第90次SK938の西に位置、SK938を切っているのでSB937よりは新しい	円形、径2.4ｍ、深さ0.3～0.4ｍ		須恵器坏（墨書）・壺・甕、土師器坏・高台付坏・甕	
ＳＫ945	7	第90次SI943の南に位置	楕円形、長軸約1.2ｍ、短軸86cm、深さ30cm、底面丸く凹む	堆積土中に焼土混じる	須恵器坏、土師器坏・甕（砲弾形）、縄文土器	
ＳＫ946		第90次SI934西に位置、西へ傾斜する斜面に立地	楕円形、長軸約2.3ｍ、短軸1.7ｍ、深さ0.2～0.3ｍ		土師器甕	
ＳＫ947	7	第90次SI935の南に位置、SX974を切り、SA1026柱列によって切られる	方形、長軸2.26ｍ、短軸1.9ｍ、深さ0.22ｍ、底面凹凸が激しい		須恵器甕、土師器坏・甕	
ＳＫ948		第90次SK949の西に位置、SK977を切る	楕円形、長軸1.36ｍ、短軸1.02ｍ、深さ0.3ｍ		なし	
ＳＫ949		第90次SK948の東に位置	円形、径1.1ｍ、深さ0.4ｍ		須恵器蓋	
ＳＫ950	11	第90次SK955の南に位置	円形、径1.4ｍ、深さ0.92ｍ	暗褐色土と黒色土が互層に堆積	須恵器坏、土師器坏	
ＳＫ951	11	第90次SK955の北西に位置	楕円形、長軸1.20ｍ、短軸0.96ｍ、深さ0.06ｍ		なし	
ＳＫ952	11	第90次SK953の南西に位置、SK978により切られる	円形、径1.8ｍ、深さ0.62ｍ		なし	

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	形状・規模	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＫ953	11	第90次SK952の北東に位置	円形、径1.45m、深さ0.15m		なし	
ＳＫ954	11	第90次SK953の東に位置、SK981に切られる	円形、径1.6m、深さ0.25m		須恵器坏	
ＳＫ955	11	第90次SK952の南に位置	略円形、径1.88m、深さ0.2m	北端の埋土中に焼土	須恵器坏・壺、土師器坏・甕	
ＳＫ957	11	第90次SK961の西に位置、２基の重複、新旧不明	楕円形、長軸1.8m、短軸1.5m、深さ0.3m		須恵器坏(墨書)、土師器坏・高台付坏(内黒)・甕	
ＳＫ980	11		円形、径約1.5m、深さ0.24m		須恵器坏	
ＳＫ961	11	第90次SK980の東に位置	楕円形、長軸1.5m、短軸1.2m、深さ0.25m		なし	
ＳＫ962	11	第90次SK980の南に位置	円形、径1.6m、深さ0.27m		なし	
ＳＫ969		第90次ＳＫ970の北西に位置	楕円形、長軸2.70m、短軸2.30m、深さ0.2m		土師器坏	
ＳＫ970	14・16	第90次調査区中央部、SI1114を切る	略円形、径約6.6m、深さ1.2m、底面起伏あり	褐色土、黒褐色土等を底面から25～50cmあたりまで人為的に埋め、その後火山灰を含む暗褐色土などが堆積	須恵器坏・蓋(墨書)・高台付坏・甕、土師器坏・甕、鍛冶滓	第90・100次で調査、土取り穴か(年報ではSX970と報告)
ＳＫ973	7	第90次SK947の北に位置	楕円形、長軸87cm、短軸72cm、深さ25cm		須恵器坏、土師器坏	
ＳＫ974	7	第90次SK947により切られる	楕円形、長軸約4.5m、短軸2.5mの土坑と長さ2.4m、幅30～50cmの溝で構成	暗褐色土	須恵器坏(墨書)・甕、土師器坏・高台付坏・甕	年報ではSX974と報告
ＳＫ976	7	第90次SI934の南側壁付近に位置	円形、径96cm、深さ18cm	埋土に焼土粒を含む	なし	
ＳＫ978	11	第90次SK952の東側を切り込んで構築	楕円形、長軸1.06m、短軸0.87m、深さ0.28m		須恵器坏、土師器小型甕	
ＳＫ979	7	第90次SI936の硬化した床面を切り込んで構築	不整円形、長軸1.52m、短軸1.3m、深さ0.3m		なし	
ＳＫ981	11	第90次SK954の西に位置	略円形、径75cm、深さ８cm		なし	
ＳＫ1011	10・12	第90次調査区最南端に位置、SD1004により切られる	楕円形、推定長軸1.2m、短軸1.05m		なし	
ＳＫ1012	11	第90次SK971の南に位置、SD988・1009により切られる	略円形、径1.2m		なし	
ＳＫ1019	9	第90次SB937の北西隅柱穴掘形を切っている	円形、径1.04m、深さ0.82m		なし	
ＳＫ1024		第90次SK969の北に位置	円形、径95cm、中央部に径28cm、深さ10cmの柱穴あり		須恵器甕、土師器坏(内黒)	
ＳＫ1080	12	第95次SI1070とSB1071西側の南から２番目の柱穴掘形を切る	略円形、径2.3～2.6m、深さ0.36m、底部は摺鉢状に凹む	暗褐色土・炭化物	須恵器壺・甕、土師器坏破片	SX1080として報告
ＳＫ1084	12	第95次SK1092の西に位置、SI1070を切る	楕円形、長軸76cm、短軸66cm、深さ23cm、全体が擂鉢状に窪む		なし	
ＳＫ1085	12	第95次SK1084の西に位置	楕円形、長軸72cm、短軸60cm、深さ40cm	焼土・炭化物が多く含まれる	なし	
ＳＫ1086	13	第95次SI1073の西に位置	長方形、長軸2.06m、短軸0.64m、深さ0.2m	暗褐色土	なし	
ＳＫ1092	12	第95次SK1084の東に位置	楕円形、長軸84cm、短軸72cm、深さ27cm	暗褐色土・焼土・炭化物	なし	
ＳＫ1105	14	第100次SI1106の北に接する	略方形、長軸3.6m、短軸3.0m、深さ0.25～0.3m、北西部に柱穴（深さ37cm）	暗褐色土	土師器坏(体部、底部に墨書)	
ＳＫ1109		第100次調査区東端、SI1116の東に位置、SK1110に切られる	円形、径2.1m、深さ0.2～0.28m	焼土・炭化物を多く含む	須恵器坏・甕、土師器坏・甕、鍛冶滓	
ＳＫ1110		第100次調査区東端、SK1109を切る	略方形、東西1.6m、南北1.4m、深さ0.2～0.26m、南東隅に柱穴	暗褐色土	須恵器坏	
ＳＫ1111		第100次調査区東端、SX1118を切る	隅丸長方形、長軸3.5m、短軸1.8m、深さ0.77m	黒褐色土や暗褐色土で全体に柔らかく、人為的に埋め戻した	須恵器蓋・坏、土師器甕、鍛冶滓	
ＳＫ1112	16	第100次SK1129の南に位置	楕円形、東西2.2m、南北1.6m、深さ0.2m	暗褐色～褐色土	須恵器高台付坏、土師器甕	
ＳＫ1113	16	第100次SI1108の西に位置、SI1114の建物部分の北側の柱掘形により切られる	円形、径1.5～1.58m、深さ0.34m		須恵器坏、土師器坏	
ＳＫ1118		第100次調査区東部	楕円形、長軸4.2m、短軸2.8m、深さ0.65m	黒色土で炭化物を多く含む層と地山粒子を多く含む層が帯状に入る	須恵器坏、土師器坏・高台付坏、羽口	SX1118で報告

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	形状・規模	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＫ1119	17	第100次調査区南端に東西方向に並ぶ遺構、土取り穴か	長さ6.4m、深さ0.6m	褐色土・黒褐色土		SX1119で報告
ＳＫ1120	14		径約4m、深さ0.5m	褐色土・黒褐色土、体積土中位に火山灰		SX1120で報告
ＳＫ1121	14		略円形か、直径3.2m程、深さ0.4～0.6m		鍛冶滓	SX1121で報告
ＳＫ1122	14		東西の長さ約４m、深さ0.5m	褐色土・黒褐色土	土師器坏・甕、須恵器坏・高台付坏・甕、鍛冶滓	SX1122で報告
ＳＫ1129	16	第100次ＳＫ1112の北に位置	楕円形、東西3.1m、南北1.75m、深さ0.12～0.3m		須恵器坏、土師器甕	
ＳＫ1132	15・19	第100次調査区北部、SI1126を切る	楕円形、長軸4m、短軸2.5m、深さ0.43m	堆積土中位に火山灰を含む	須恵器長頸壺・横瓶、土師器坏、平瓦、第４号漆紙文書	SX1132で報告、土取り穴か
ＳＫ1135	19	第100次調査区北部	長方形、東西1.3m以上、南北0.6m、深さ0.55m、底面は平坦、壁ほぼ垂直に立ち上がる、壁面に火熱による硬化面あり、底面も焼けている	明褐色土の単層で少量の炭化物が混じる	なし	SN1135で報告
ＳＫ1138		第100次調査区東端	略方形、一辺1.35m、深さ0.28～0.4m		なし	
ＳＫ1150	18	第105次SI1147により切られる	楕円形、長軸103cm、短軸78cm、深さ10cm	炭化物を少し含む褐色土	なし	
ＳＫ1154	18・21	第105次調査区東端部、SI1167・SD1182を切る	隅丸長方形、長軸3.3m、短軸2.48m、深さ0.25～0.45m	黒褐色土を主体とし、地山の粒子が多く混入	須恵器坏、土師器坏、鉄釘８点	
ＳＫ1155	18・21	第105次SK1154の南西に位置、SI1167を切る	隅丸長方形、長軸2.40m、短軸1.73m、深さ0.2m	黒褐色土が全体に均一に堆積	須恵器坏、土師器坏	
ＳＫ1156	21	第105次SK1155の北に位置、SI1167を切る	隅丸長方形、長軸2.72m、短軸2.0m、深さ0.35～0.48m	黒褐色土が全体に均一に堆積	須恵器坏、土師器坏・甕	
ＳＫ1157	18・21	第105次SK1172の南に位置、SI1149を切る	隅丸長方形、長軸2.5m、短軸1.3m、深さ0.63m	地山粒を多く含む黒褐色土	土師器坏・甕	
ＳＫ1158	21	第105次SK1155の西に位置、SK1171を切る	隅丸長方形、長軸1.9m、短軸1.5m、深さ0.5～0.6m	地山土が多く混じる黒褐色土	須恵器坏・蓋、土師器甕、羽口	
ＳＫ1159	21	第105次SK1158の北に位置、SK1171を切る	隅丸長方形、長軸2.75m、短軸1.60m、深さ0.9m	地山粒子が多く混じる黒褐色土	須恵器坏、土師器坏・甕、羽口	
ＳＫ1161	21	第105次SK1159の西に位置、SK1171を切る	隅丸長方形、長軸2.18m、短軸1.30m、深さ0.82m	地山粒子が多く混じる黒褐色土	須恵器坏、土師器坏・甕、羽口	
ＳＫ1162	21	第105次SK1163の南に位置	楕円形、長軸1.95m、短軸1.45m、深さ0.6～0.7m		土師器高台付坏、羽口	
ＳＫ1163	21	第105次SK1162の北に位置	隅丸長方形、長軸2.06m、短軸1.45m、深さ0.36m	地山粒子を多く含む黒褐色土	須恵器坏、土師器坏	
ＳＫ1164	21	第105次SK1161の南に位置、SK1171を切る	隅丸長方形、長軸2.56m、短軸1.46m、深さ0.79m	下方に地山の褐色土主体の層、その上に黒褐色土	土師器坏・甕、羽口	
ＳＫ1165	18・21	第105次SK1155の南の位置	隅丸長方形、長軸3.50m、短軸1.95m、深さ0.9m	地山粒子が全体に混じる黒褐色土が均一な状態で堆積	須恵器坏・壺、土師器坏・甕、鉄製釘	
ＳＫ1166	21	第105次SK1165の西に位置	隅丸長方形、長軸2.48m、短軸1.60m、深さ.67m	SK1165と同質	須恵器坏	
ＳＫ1168	21	第105次SK1154の北に位置、SK1169を切る	円形、径約1.4m	黒褐色土、地山の褐色土が水平に体積	なし	
ＳＫ1169	21	第105次SK1154の北に位置、SK1168により切られる	長方形、長軸1.7m、短軸1.26m、深さ0.23m	黒褐色土に地山粒子が少し混じる全体に均一な埋土		
ＳＫ1171	21	第105次SK1155・1156の南に位置、SK1158・1159・1161・1164により切られる	方形、東西2.95m、南北2.90m、深さ0.2～0.38m		須恵器坏・高台付坏、土師器甕、羽口	
ＳＫ1172		第105次SK1157の北に位置	隅丸長方形、長軸1.96m、短軸60cm、深さ0.3～0.43m	暗褐色土や黒褐色土がほぼ水平に堆積	土師器坏・甕、鉄釘	
ＳＫ1173	18・21	第105次調査区南東隅、SI1167を掘り込む	隅丸長方形、長軸1.45m以上、短軸1.45m、深さ0.85m	地山粒子が多く混じる黒褐色土が水平に堆積	なし	
ＳＫ1174	18・21	第105次SK1165の南に位置、SI1167を掘り込む	隅丸長方形、長軸2.05m、短軸1.55m、深さ0.8m	地山粒子が全体に混じる黒褐色土	須恵器坏・壺、土師器坏	
ＳＫ1176	21	第105次SK1161の北に位置	隅丸長方形、長軸2.25m、短軸1.26m、深さ0.8m	暗褐色土に地山粒子が全体に混じる	須恵器坏、土師器坏	
ＳＫ1179		第105次SB1127の北東に位置	不整形、長軸1.58m、短軸0.8m	焼土をわずかに含む	須恵器坏（底部「□」墨書）・須恵器高台付坏（底部「□」墨書）	SX1179で報告
ＳＫ1181		第105次SB1127の北東に位置	楕円形、長軸1.08m以上、短軸84cm、深さ0.1m		土師器甕	

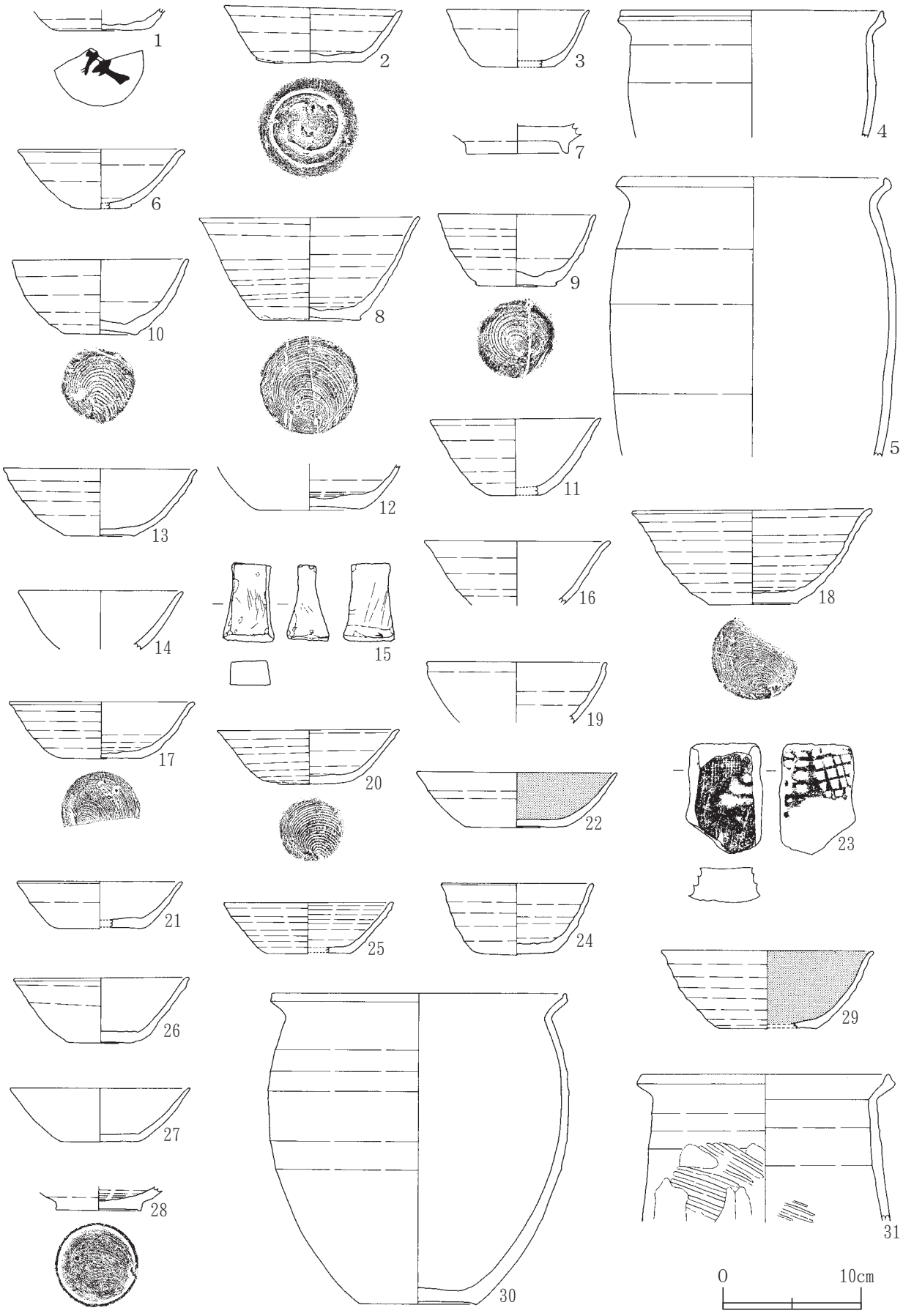
柱列・溝跡・焼土遺構

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	規模（幅・長さ・深さ）	方向・方位	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＡ940	9	第90次SB937の東側北から３番目の柱を切る２間の掘立柱列	掘形は一辺60～80cmの略方形、深さ35cm、総長3.9m(北から2.3＋1.6)、計画尺13尺(北から8＋5)	N32°Ｅ		なし	
ＳＡ964	9・10	第90次SB937の西側柱筋より約2.0m離れて平行して並ぶ南北筋4間の掘立柱列	柱掘形は一辺30cmの略方形、深さ48cm、径15cm程の柱痕跡、総長11.9m(北から2.7＋3.3＋2.95＋2.95)、計画尺40尺(北から9＋11＋10+10)	N7°Ｗ		なし	SB937の目隠し塀か
ＳＡ1026a	7	第90次調査区北部にある南北１間の柱列、SI935・SK947を切る	掘形一辺約60cmの方形、深さは22cm、柱痕跡はないが柱間距離は3.4m程と推定	N5°Ｗ		なし	
ＳＡ1026b	7	第90次調査区北部にある南北１間の柱列、SA1026a柱列より西へ約50cm移動、SI935・SK947を切る	掘形一辺50～60cmの方形、径18～25cmの柱痕跡、柱間距離は3.1m	N5°Ｗ		なし	
ＳＡ1130	16	第100次SI1114の北にある東西３間の柱列	総長5.4m、柱掘形は一辺60～100cmの略方形、深さ50cm、径約35cm、20cmの柱痕跡			なし	
ＳＡ1131		第100次SI1116の北にある南北３間の柱列	総長6.2m、柱穴掘形は長径約60cmの楕円形や径50cmの円形、深さ30～50cm、径18cmの柱痕跡			土師器坏・甕	
ＳＡ1142	16	第100次SI1114Ｂの北にある４間の柱列、SD1115を切る	総長10.2m、柱穴掘形は径50～80cmの円形、深さ55cm、径24cmの柱痕跡			なし	SI1114Ｂに伴う柱列か
ＳＡ1143	16	第100次SI1114Ｂの南にある２間の柱列	総長5.4m、柱穴掘形は径約65cm、径20cmの柱痕跡			なし	SI1114Ｂに伴う柱列か
ＳＡ1187		第105次SI1148の西に位置する東西２間の柱列	総柱2.7m、柱穴掘形は径40～60cmの円形で、深さ24～33cm	N63°Ｅ		なし	
ＳＤ956	8	第90次SD992の北に位置、SD984と重複し、部分的にSD992に接している	長さ7.8m、幅16～40cm、深さは５cm前後	N71°Ｅ		なし	東西方向の溝跡
ＳＤ984	7 8 11 18	第90次調査区東側に位置、SK959・960を切る、東西方向の溝８条とも重複し、SD988を切っている	溝の全長23.85m、幅25～40cm、深さは30～50cm、溝内に径約30cm、深さ70～80cmに及ぶ柱穴16個(柱痕跡の残るもの６個)、柱は幅20cm、厚さ６cmの板状を呈する。柱間距離は1.2～2.0m	Ｎ４°Ｗ		平瓦、須恵器坏	南北方向の板塀跡
ＳＤ985	11	第90次SK960・961の南に位置、SD984と交差する	全長4.34m、幅18～36cm、深さ3～5cm	N78°Ｅ		なし	東西方向の溝跡
ＳＤ986	8・11	第90次SD985の南に位置、SD984と交差する	全長6.92m、幅10～26cm、深さ3～5cm	N80°Ｅ		なし	東西方向の溝跡
ＳＤ987	8	第90次SD986の南に位置、SD984と交差する	長さ8.1m、幅20～58cm、深さ2～6cm	N74°Ｅ		なし	東西方向の溝跡
ＳＤ988	8 10 11 19	第90次SI1148の北に位置	全長61.5m、幅12～20cm、深さ5cm程、柱穴は９本あり一辺30～35cmの方形や、径20～30cmの楕円形(７個に柱痕跡)、柱痕跡は長さ16～23cm、厚さ6～8cmの板状、柱間距離は1.15～1.40m	N67°Ｅ		須恵器坏、瓦	第90・100・105次で調査、東西方向の板塀跡
ＳＤ989	8 10 11	第90次SD988の南に位置、SD984と交差する	全長22.50m、幅20～55cm、深さ7～13cm、溝の西から4.2mと9mの位置に柱穴があり、柱痕跡が認められる	Ｎ68°～74°Ｅ		須恵器坏、土師器坏	東西方向の溝跡
ＳＤ990	10・11	第90次SD991の西に位置、SD988・1006の屈曲点と交差する	長さ19.7m、幅20～30cm、深さ15cm、柱穴14本(東端は径40cm)、柱間平均距離1.4m	Ｎ75°Ｅ		土師器坏	東西方向の板塀跡

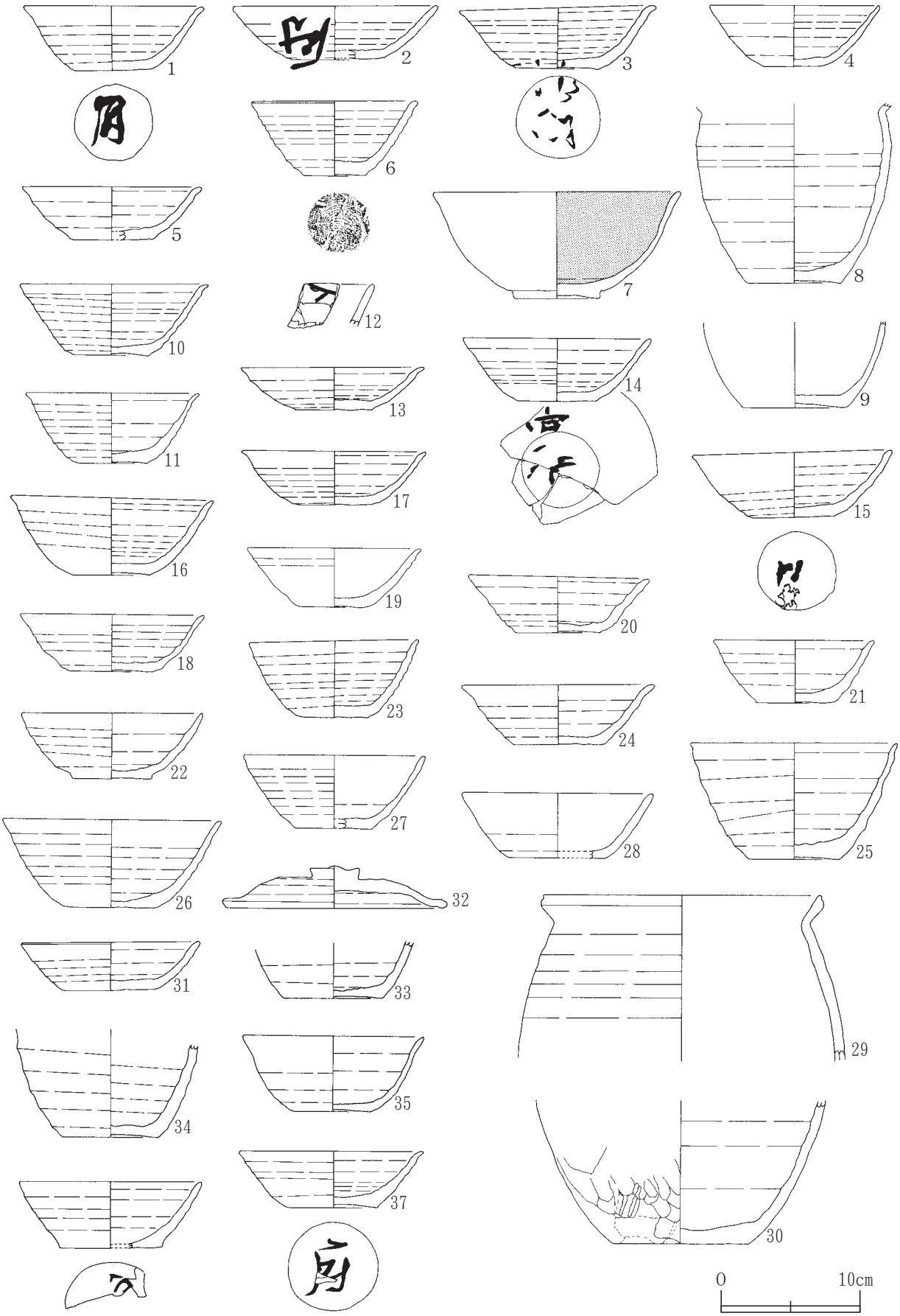
遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	規模（幅・長さ・深さ）	方向・方位	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＤ991	10・11	第90次SD992の北に位置、SD988・1006の屈曲点と交差する	全長5.87ｍ、幅16～48cm、深さ33cm、溝内の柱穴６本(板状の柱痕跡２本)深さ31～56cm、西端の柱穴は径50cm	Ｎ75°Ｅ		不明	東西方向の板塀跡
ＳＤ992	8 10 11	第90次SD991の南に位置し、SD988に平行する板塀SD984と交差する	全長25.5ｍ、幅20～40cm、溝内に円形または略方形の柱穴21本(板状の柱痕跡４本)、柱間距離は1.1～1.4ｍ	Ｎ69°Ｅ		土師器坏	
ＳＤ993	8	第90次調査区、外郭東門から政庁東門にかけて道路状の窪みとして確認	調査した長さ17.2ｍ、幅2.2ｍ前後、深さは東端7cm、西端20cm	北東－南西方向	黒褐色土が硬化	須恵器甕、寛永通宝	現況でも溝状の窪みとして確認される
ＳＤ994	10・11	第90次SD992の南50cmに位置	全長4.6ｍ、幅27～54cm、深さ3～6cm	Ｎ66°Ｅ		なし	東西方向の溝跡
ＳＤ995	8	第90次SD992の南に位置、東端から50cmに位置する柱穴が、SD984南端の柱穴を切る。	全長3.8ｍ、幅22～40cm、深さ25cm、東端・中央部・西端に柱穴、深さ62～74cm	ＮＥ76°Ｅ		なし	東西方向の板塀跡、SD990・991と一連の施設か
ＳＤ996	10	第90次調査区北端に位置	全長13.24ｍ、幅30～76cm、深さ5～10cm	Ｎ68°Ｅ		なし	第90・95次で調査
ＳＤ997	10	第90次SD996の南50cmに位置、西端はSB937の南東隅柱掘形にわずかに重複	長さ約4ｍ、幅20～35cm、深さは2～10cm	ＮＥ75°Ｅ		なし	東西方向の溝跡
ＳＤ998	10	第90次SD996の南1.2mに平行する	全長16.76ｍ、幅24～40cm、深さ10cm	Ｎ66°Ｅ		須恵器・土師器	第90・95次で調査
ＳＤ999	10	第90次SD998の南1.2mに平行する	全長15.55ｍ、幅20～40cm、深さ5～10cm	Ｎ66°Ｅ		なし	第90・95次で調査
ＳＤ1000	10	第90次SD999の南に約1.2m離れて平行する、SI966を切り、SD1004と交わる	長さ7.8ｍ、幅16～50cm、深さ2～7cm、溝内に柱穴３本(東から38cm、67cm、65cmの深さ)	Ｎ67°Ｅ		なし	東西方向の溝跡
ＳＤ1001	10	第90次SD1000の南に接して位置、SI966を切る	長さ2.2ｍ程、深さ4cm	Ｎ88°Ｅ		なし	
ＳＤ1002Ａ	10 12 14	第90次調査区北西部	長さ26.5ｍ、幅20～30cm、深さ10cm。径35cmの柱穴内に長さ25cm、幅8cmの柱痕	Ｎ70°Ｅ		須恵器甕、土師器坏	第90・95・100次で調査、東西方向の板塀跡
ＳＤ1002Ｂ		第90次調査区北西部、SK970によって切られる	長さ33.5ｍ、幅26～40cm、深さ10cm、柱痕あり	Ｎ72°Ｅ			
ＳＤ1003	10	第90次SD1002の南に平行、SD1004と交差、SI966を切る	長さ7.9ｍ、幅18～36cm、深さ6～12cm	Ｎ69°Ｅ		なし	東西方向の溝跡
ＳＤ1004	10・12	第90次調査区南西部に位置	全長15.2ｍ、溝内に柱穴・柱痕あり、幅20～30cm、厚さ６cm、SD999交点での柱穴は径45cm、柱痕は26×10cm	Ｎ８°Ｗ		なし	第90・95次で調査、南北方向の板塀跡
ＳＤ1005	10	第90次SD1004とSD1006の間に位置、SD1006に切られる	長さ4.5ｍ、幅20cm前後、深さ7～10cm	Ｎ26°Ｅ		なし	SI966の軸線方向に沿う
ＳＤ1006	10・12	第90次SD988から曲折し一連となる、SI1074の床面で柱穴を確認	全長25.3ｍ、径30～40cmの柱穴を８本検出(うち７本に厚さ6cm、幅24cmほどの板状の柱痕跡)、柱間距離の平均1.38ｍ	Ｎ10°Ｗ		須恵器坏	第90・95次で調査、南北方向の板塀跡
ＳＤ1007	10	第90次SD1006の西約2.1mに平行する	長さ6.6ｍ、幅12～25cmの溝、柱穴５本、柱間距離ほぼ等間(平均1.41ｍ)	Ｎ10°Ｗ		なし	南北方向の板塀跡

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	規模（幅・長さ・深さ）	方向・方位	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＤ1008	11	第90次SB937の東に位置	全長5.2ｍ、幅20～30cm、深さ25cm、柱穴4本(深さ54～70cm)、西端の柱穴は長径60cm、短径40cm、幅16cm程の板状痕跡	Ｎ80°　Ｅ		須恵器、土師器	東西方向の板塀跡
ＳＤ1009	11	第90次SB937柱穴掘形を切る、SD990・SD1008に対して直角に交わる	長さ3.56ｍ、幅26cm、柱間距離の平均は1.46m	Ｎ８°　Ｗ		なし	南北方向の溝跡
ＳＤ1015		第90次SD1016の東に平行、SB1013と重複	長さ6ｍ、幅20～28cm、深さ10cm	Ｎ４°　Ｅ		土師器	南北方向の溝跡
ＳＤ1016		第90次SD1015の西に1.7m離れて平行する溝、SB1013の北西隅柱穴掘形を切る	長さ6.5ｍ、幅16～28cm、深さ8cm	N3°　E		なし	
ＳＤ1018	11	第90次東西方向の溝では最も北に位置	全長3.0ｍ、幅30～45cm、深さ5～10cm	N79°　E		なし	東西方向の溝跡
ＳＤ1021	10	第90次SD1003の南1mに位置	確認された長さ2.1ｍ、幅20cm前後、深さ5cm	N68°　E		なし	全長３ｍ未満
ＳＤ1022	10	第90次SD1021の南約15cmに並ぶ	全長4.35ｍ、幅36～45cm、深さ10cm	N70°　E		なし	第90・95次で調査
ＳＤ1023	8	第90次調査区南東部、SB982A・Bの柱穴掘形と重複、堀形埋土を切っている	全長2.94ｍ、幅20～40cm、深さ7～13cm、東端に深さ47cmの柱穴	N75°　E		なし	東西方向の溝跡
ＳＤ1025	10	第90次SD1002の南に位置、SI966を切る	長さ1.64ｍ、幅15～20cm、深さ5cm	N78°　E		なし	
ＳＤ1078	12 13	第95次調査区南西部、SB1072B期西妻掘形を切る、SB1077の桁行方向に平行	長さ9.1ｍ、幅20～35cmで溝内に南北方向35～40cm、東西方向27～33cmの南北に長い楕円形の柱穴が1.5mの等間隔に並ぶ、板状柱痕跡厚さ6cm、幅20cm	Ｎ78°　Ｅ		なし	東西方向の板塀跡
ＳＤ1091	12	第95次調査区西部	全長3.4ｍ、幅27cm、深さ7cm	N69°　E		なし	
ＳＤ1115	15	第100次調査区東部、SI1116を切る	長さ8.5ｍ、幅35～55cm、板状柱痕跡長さ20cm、幅6cm	N72°　E		不明	東西方向の板塀跡
ＳＤ1136		第100次SD988の南に2.2m離れて平行	長さ4.1ｍ、幅20cm、深さ10cm、柱穴５本(深さ10～45cm)	N69°　E		不明	東西方向の溝跡
ＳＤ1137		第100次SD1136の南に1.2m離れて平行	長さ2.7ｍ、幅20～40cm、深さ5cm、柱穴(深さ30～45cm)	N69°　E		不明	東西方向の溝跡
ＳＤ1170	20	第105次調査区東部、Ｌ字状に曲折する、SB1178など４棟の掘立柱建物跡と重複	東西方向部分長さ約9ｍ、幅0.9～2.4ｍ、深さは北側で10～35cm。南北方向部分長さ約4ｍ、幅1.2～1.5ｍ、深さ20～35cm		黒褐色土	須恵器坏・甕、土師器坏	
ＳＤ1175	20	第105次SI1148の東に位置、４棟の掘立柱建物跡と重複	長さ4.4ｍ、幅22～37cm、深さ5cm	N68°　E		なし	東西方向の溝跡
ＳＤ1182	21	第105次調査区南東部、SK1154により切られる	長さ8.3ｍ、幅20～38cm、深さ20～68cm	N31°　W		なし	南北方向の溝跡
ＳＤ1183		第105次調査区北部、SK1154により切られる	長さ2.2ｍ、幅45～50cm、深さ約10cm	N32°　W		なし	南北方向の溝跡

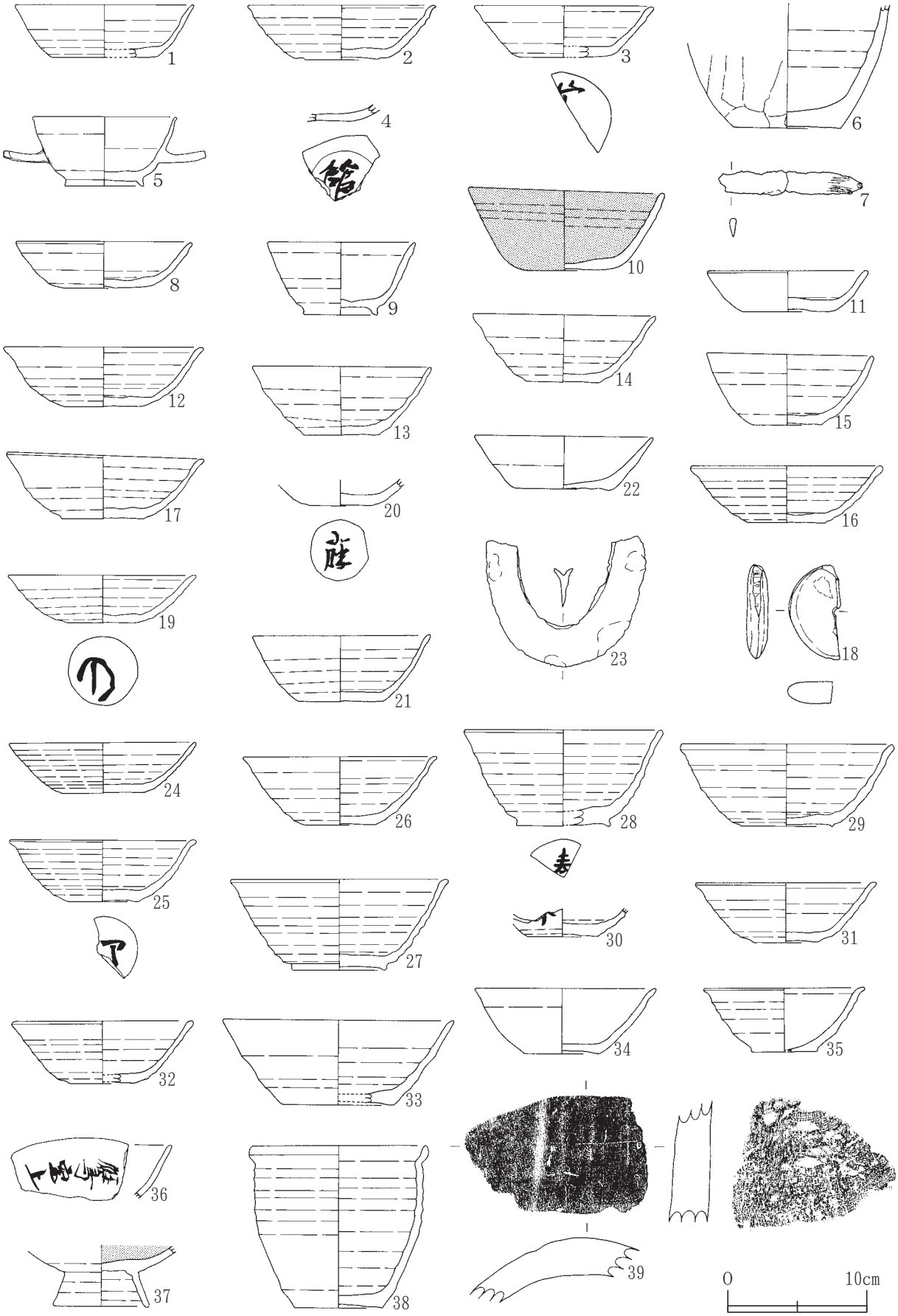
ＳＮ1123		第100次SI1114の西に隣接	略円形、径1.65～1.8ｍの範囲で焼土が分布、焼土の厚さは6～7cm			なし	



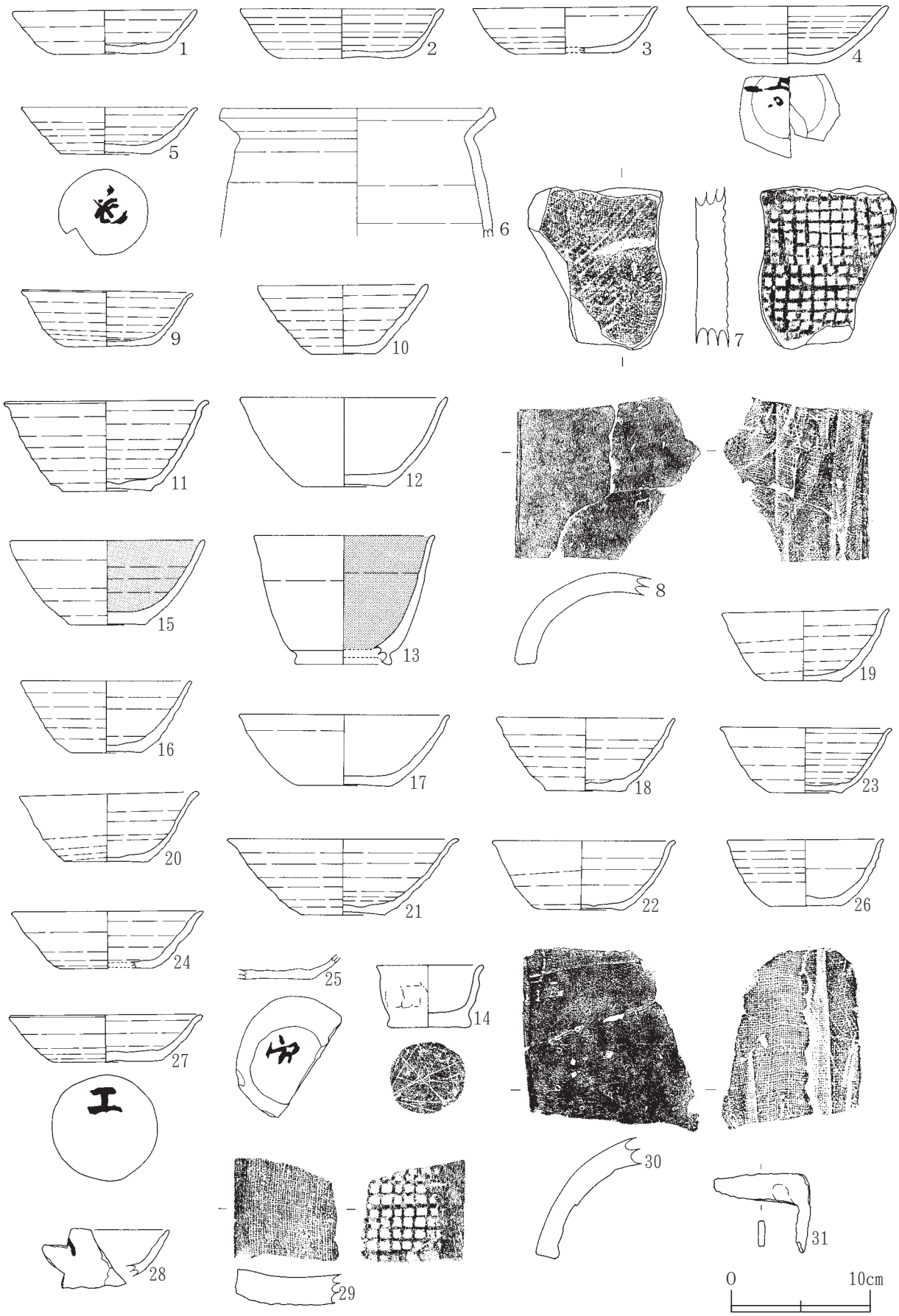
第22図　出土遺物(１)長森東方地区第90次



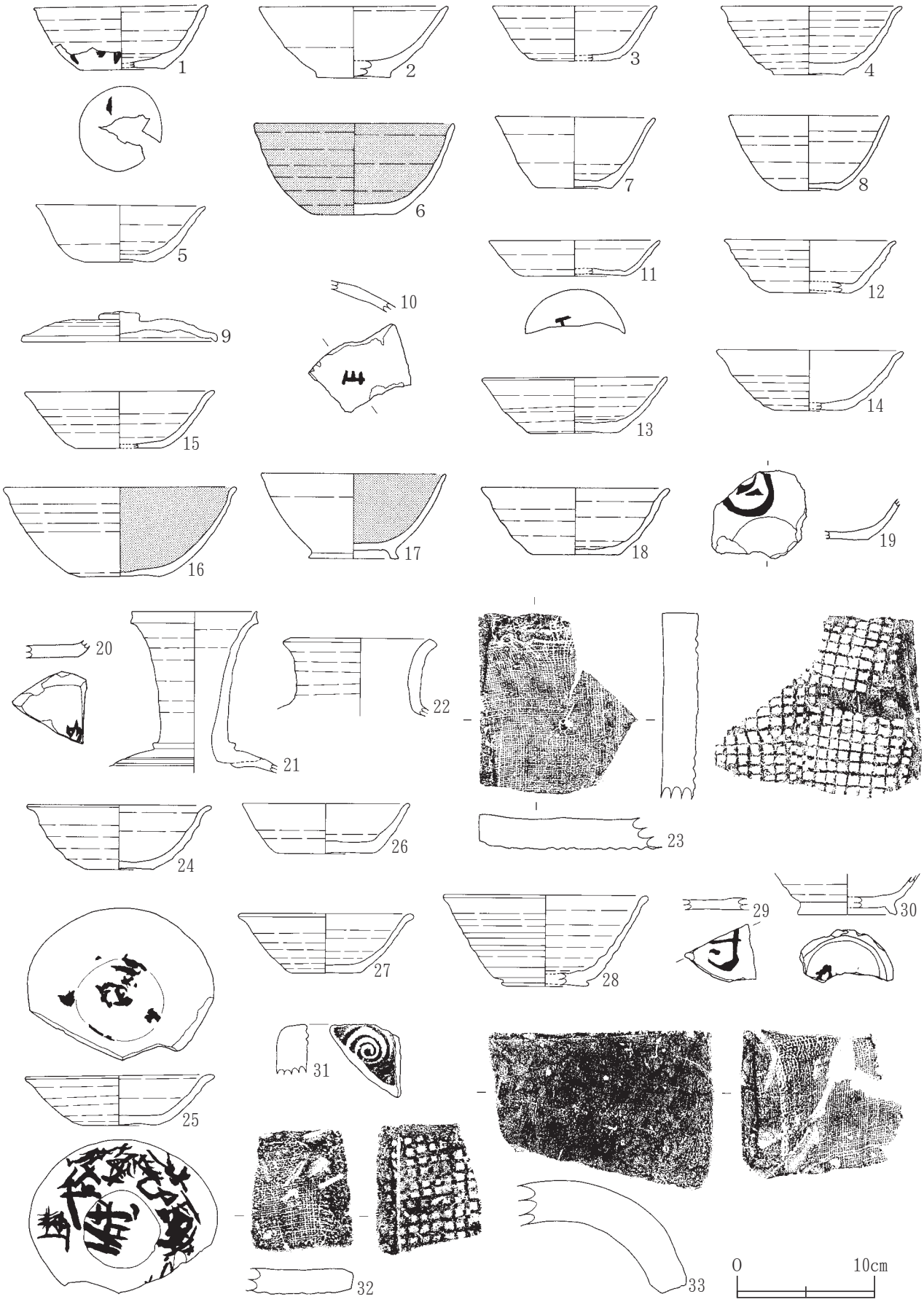
第23図　出土遺物(２)長森東方地区第95次



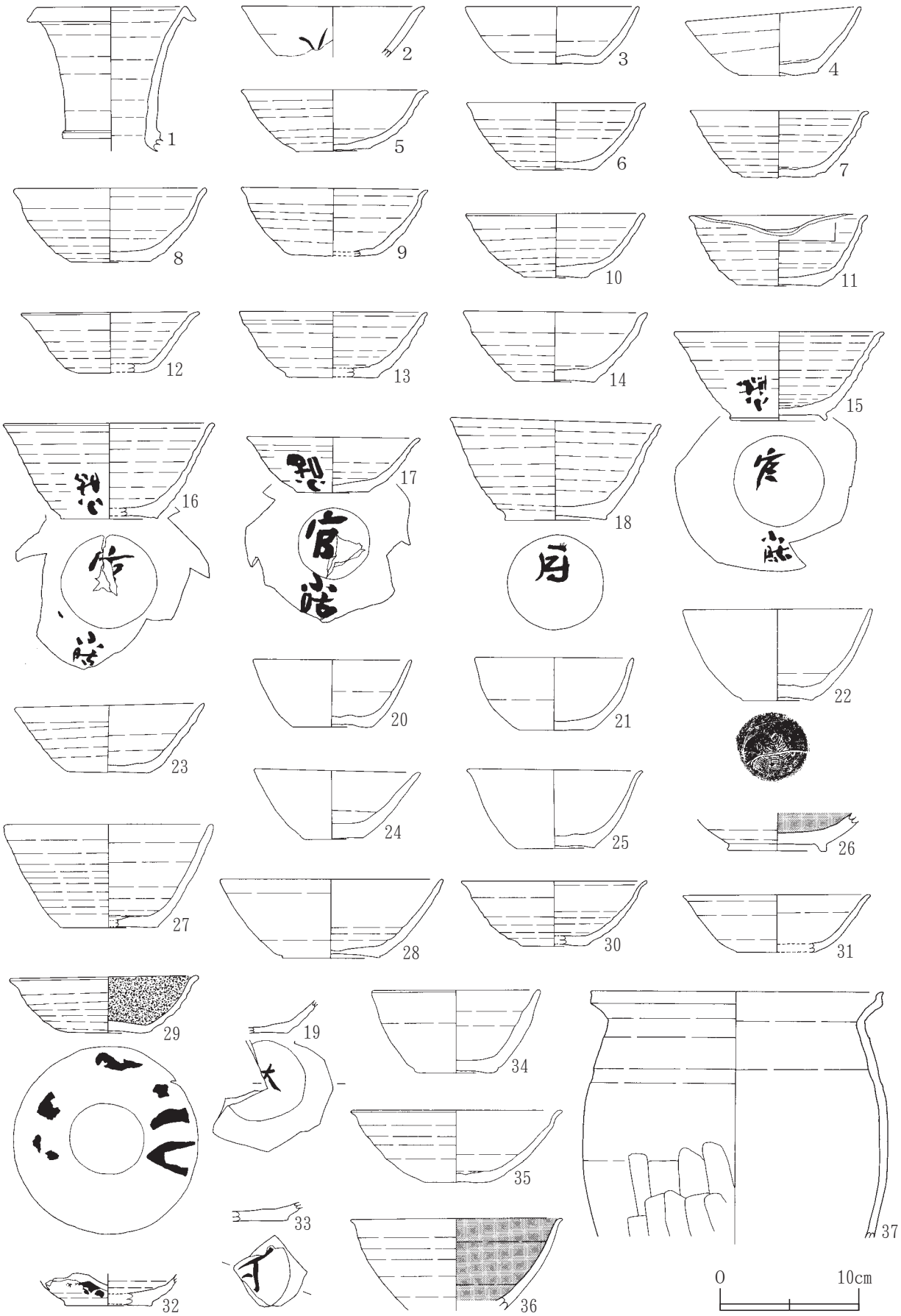
第24図　出土遺物（３）長森東方地区第100次（１）



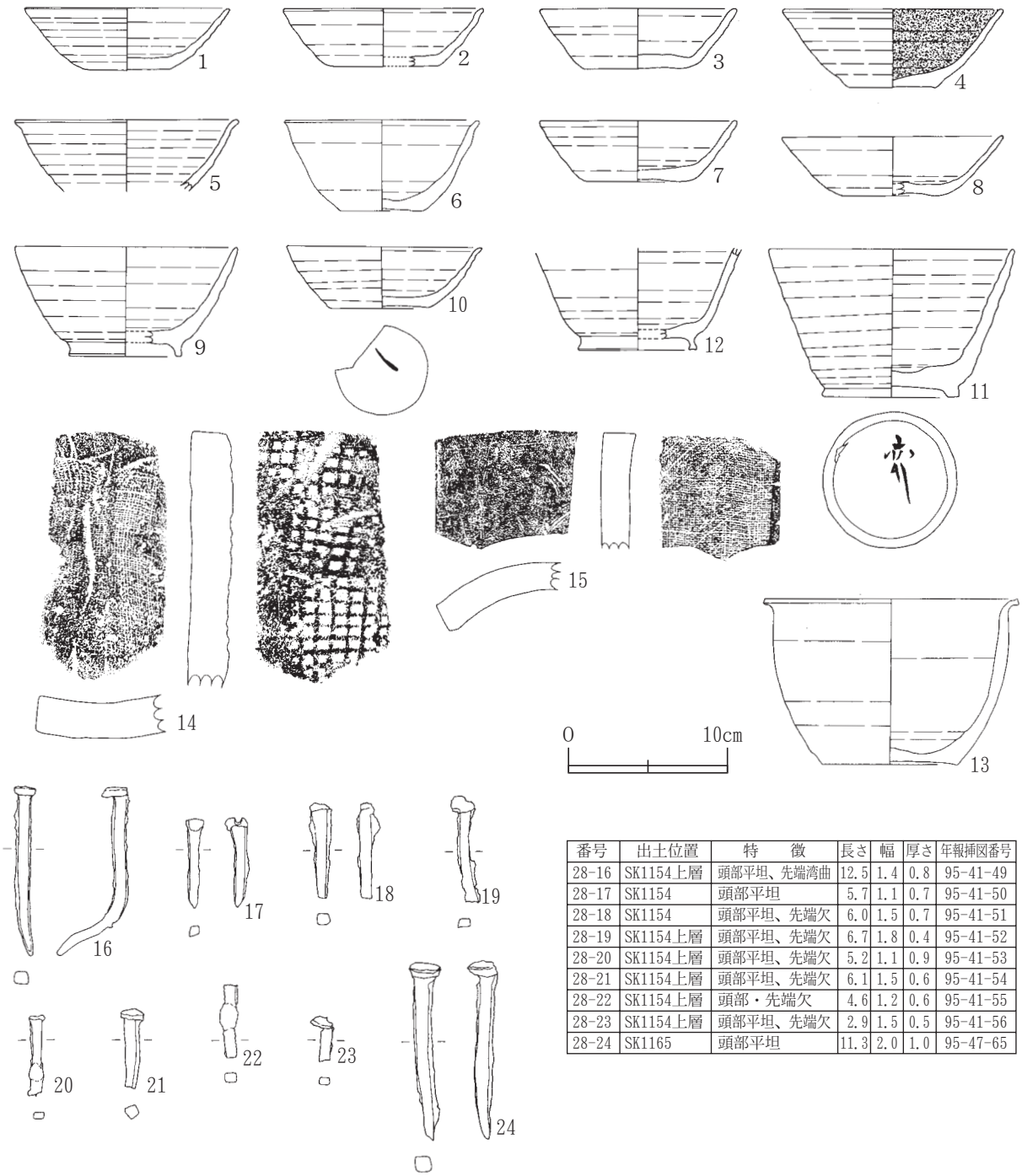
第25図　出土遺物（４）長森東方地区第100次（２）



第26図　出土遺物（５）長森東方地区第100次（３）



第27図　出土遺物(６)長森東方地区第105次(１)



番号	出土位置	特　　徴	長さ	幅	厚さ	年報挿図番号
28-16	SK1154上層	頭部平坦、先端湾曲	12.5	1.4	0.8	95-41-49
28-17	SK1154	頭部平坦	5.7	1.1	0.7	95-41-50
28-18	SK1154	頭部平坦、先端欠	6.0	1.5	0.7	95-41-51
28-19	SK1154上層	頭部平坦、先端欠	6.7	1.8	0.4	95-41-52
28-20	SK1154上層	頭部平坦、先端欠	5.2	1.1	0.9	95-41-53
28-21	SK1154上層	頭部平坦、先端欠	6.1	1.5	0.6	95-41-54
28-22	SK1154上層	頭部・先端欠	4.6	1.2	0.6	95-41-55
28-23	SK1154上層	頭部平坦、先端欠	2.9	1.5	0.5	95-41-56
28-24	SK1165	頭部平坦	11.3	2.0	1.0	95-47-65

第28図　出土遺物(７)長森東方地区第105次(２)

第２節　長森西方地区

長森丘陵西側は、政庁西門を起点とすると、丘陵西端部に位置する外郭西門に向かって西南西方向に細長く延びる。その長さは約390ｍであり、南北方向の幅は120～180ｍ程である。政庁西門から西南西に約250ｍ地点には、開析作用により形成された沢が南に向かって三角状に開口している。この沢地を境界として、丘陵が二分される形をとることから、沢地を含む政庁寄りの丘陵部を「政庁西側地区」として本項１で、以西を「外郭西門東側地区」として本項２で報告する。

１　政庁西側地区

(１)調査の目的と経緯

当該域の丘陵部は、調査がほとんど及んでいなかった地区にあたる。平成11年度を初年度とする第６次５年計画では、「政庁西方における官衙域の調査」を掲げており、ここで初めて地区内の遺構内容を確認する調査に着手したことになる。これに係る調査は、第115・118・120・122・123次である。

また、平成16年度からの第７次５年計画でも「払田柵跡の各地区における遺構内容及び場の機能の調査」を掲げている。このなかでも長森丘陵部を包括する外郭地区は、重点区のひとつとしており、第６次５年計画調査により明確になりつつあった鍛冶関連の工房群の広がりと内容をさらに把握することを目的に、第126・135・137次の３度にわたる調査を実施した。

調査にあたっては、平成11年度の第115次が面的な調査区設定を行い、１区域1221㎡を調査しているが、平成12年度の第118次調査区以降は、原則として幅４ｍ未満のトレンチ(以下表記上では“区”とする)を設定して調査を実施している。８度実施された調査面積の総計は、2470㎡である。

(２)調査区の立地

本地区の丘陵部は、標高51～52ｍ程の馬背状の狭い平坦面が東西に延び、南側は比較的急斜面となるものの、北側は平坦面と緩斜面が交互に観察される段状の様相を示し、沖積地面に至る。頂部平坦面と沖積地面の比高は約17ｍである。段状の地形は、古代における切土・盛土による整地地業によって作り出されたことが判明している。検出された遺構のまとまりは、各整地面と対応していることから、標高にあわせた次のような名称を付して以下に報告する。

【丘陵頂部平坦面】標高51～52ｍライン上の遺構群
【斜面上位平坦面】標高50～51ｍライン上の遺構群〔斜面は北側と南側の２方向にあり〕
【北側斜面上位緩斜面部】標高47～50ｍライン上の遺構群
【北側斜面中位】標高43～47ｍライン上の遺構群〔平坦面・緩斜面部、下位方向では急斜面部あり〕
【北側斜面下位】標高39～43ｍライン上の遺構群〔急斜面から緩傾斜部あり〕

なお、調査区西端には外郭西門東側地区とを区切る沢地が南方向に開口している。ここでは明確な整地の痕跡は認められなかったが、第123次調査において同沢地周辺を対象とした。沢地下部の標高は、43.2ｍ(第123次Ｆ区西端部)である。

（３）検出遺構と遺物

①　基本層序

本地区の基本層序は、第122次調査Ｂ区のJJライン（北側斜面上位緩斜面部、第41図）で観察した結果を掲載する。

第Ⅰ層：暗褐色シルト質土（10YR3/4）。表土、植物根が多くブカブカしている。層厚は10cm前後。

第Ⅱ層：極暗褐色シルト質土（7.5YR2/3）。部分的に炭化物が混入する。層厚15～20cm。

第Ⅲ層：黒褐色シルト質土（10YR2/3～2/2）。炭化物を少量含む。層厚10～15cm。同層は下位ほど土壌の明度がやや高くなる。

第Ⅳ層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）地山漸移層。層厚10cm前後。

第Ⅴ層：黄褐色粘土（10YR5/6）地山土。

本地区での精査（第126・135・137次）に基づけば、おおむね第Ⅱ層面で確認される遺構が中世あるいは中世以降の帰属となり、第Ⅲ層面では古代、第Ⅲ層下面～第Ⅳ層まで掘り下げると縄文時代の遺構が検出される。第Ⅲ層以下より古代、縄文時代の遺構が確認された。第Ⅲ層中には火山灰の堆積が観察された箇所もある。なお、丘陵南側の斜面上位側（第115次調査区南側）では、基盤の礫（硬質泥岩）が地表面に露出している箇所も認められた。

②　調査概要

検出遺構と出土遺物の概要は、遺構観察表と遺物観察表にまとめたが、特記すべき事項について下記に示す。なお、遺構番号は第115次で1217～1260、第118次で1313～1316、第120次で1358～1386、第122次で1481～1630、第123次で1631～1654、第126次で1665～1688、第135次で1855～1916、第137次で1921～1991を付しているが欠番もある。

【第115次調査】

《調査区》丘陵頂部平坦面及び北側斜面・南側斜面上位平坦面である。標高は52～50m。

《遺構》検出した古代の遺構は、掘立柱建物跡４棟、竪穴建物跡３棟、土坑20基、板塀跡５列、溝跡４条、焼土遺構２基、柱穴約880基である。その他に縄文時代の土坑７基を確認している。

《遺物》古代の出土遺物は、須恵器、土師器、鉄製品がある。縄文時代の遺物は土器、石器があり、調査区の南側に集中する。

【第118次調査】

《調査区》第115次調査区の北側隣接地、北側斜面上位平坦面である。標高は50m前後。

《遺構》古代の遺構は、掘立柱建物跡２棟、板塀跡２列、土坑１基である。その他には、縄文時代の土坑１基を確認した。掘立柱建物跡は、第115次調査で検出していたSB1222Ａ・Ｂの柱筋北側部にあたる。

《遺物》古代の遺物には、須恵器、土師器がある。縄文土器・石器も確認された。

【第120次調査】
《調査区》第118次調査区の北側隣接地、北側斜面上位平坦面から斜面中位である。標高は49～43m。トレンチは南北方向に１本(Ａ１～３区)設定し、Ａ１の西側を一部拡張(Ａ４区)して調査を行った。
《遺構》調査で確認した遺構は、土坑17基、溝跡３条であるが、全て平面プランの検出に留まっている。同調査区のうち南側は、第135次調査として遺構精査を実施している。出土遺物の検討から土坑１基(SK1381)が縄文時代であり、他は古代と判断された。
《遺物》出土した遺物には、須恵器、土師器、瓦、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁、土製品(土錘)、石製品(砥石)がある。青磁は越州窯系の坏か皿であり、払田柵跡内では初出の遺物となる。縄文時代の遺物には、土器、石器・石製品があり、うち１点は玦状耳飾である。

【第122次調査】
《調査区》第120次調査区の東側隣接地にトレンチを２本(Ｂ・Ｃ区)設定した。南北方向のトレンチは、丘陵斜面上位平坦面から斜面下位に及び、標高は50.0～38.5mである。
《遺構》検出された遺構は、掘立柱建物跡５棟、竪穴建物跡27棟、鍛冶炉跡13基、焼土遺構41基、土坑59基、溝跡31条である。
《遺物》須恵器、土師器、瓦質土器、青磁、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、鉄・石・土製品等がある。瓦質土器(第55図23)は、小片であるが燻し焼き瓦を想起させる質感をもつものであり、払田柵跡内では初見の資料である。器外面に刀子状工具による焼成前の線刻があるが、器種・部位ともに不明の土器である。

【第123次調査】
《調査区》第115・118次調査区の西側に設定した。トレンチの設定は地形を考慮して、南北方向に２本(Ｄ・Ｅ区)、東西方向２本(Ｆ・Ｇ区)とした。Ｄ区は第122次Ｂ区の西42mに、Ｅ区はＤ区の西24mに設定した。Ｆ区の西側は外郭西門東側地区と画する沢地を横断させた。また、Ｇ区はＤ・Ｅ区間の平坦面(標高50m)に設定した。
《遺構》検出された古代の遺構は、竪穴建物跡２棟、土坑８基、溝跡７条であり、縄文時代の遺構も検出された。Ｇ区東側(74ライン以東)は地山面に基盤の大形礫(硬質泥岩)が露出しており、縄文時代以来この場は使用されることはなかったようである。
《遺物》出土した古代の遺物は、須恵器、土師器、瓦、鉄製品、石製品、土製品である。沢地に造られたSKI1651の出土遺物のうち、第55図27は須恵器台部内を墨用の硯に、内面底部を赤色(ベンガラか)の硯に転用している。

【第126次調査】
《調査区》第122次調査区の東側に設定した。南北方向のＨ区と東西方向のＩ区である。Ｈ区は第122次Ｃ区の東21mにあたり、斜面上位緩斜面部から下位に至るもので、標高は48.7～39.0mである。また、Ｉ区は、Ｃ・Ｄ区間のJN・J0ライン上に設定した。標高は46.6～46.3mである。
《遺構》古代の遺構は、溝跡４条、土坑１基である。その他に、縄文時代の竪穴住居跡１軒、土坑13基、 柱穴３基や中世の土坑墓２基なども確認された。

《遺物》古代の遺物には、須恵器、土師器、瓦、鉄滓があり、縄文時代の土器、石器・石製品(岩偶)、中世の銭貨・木片(土坑墓内)も出土した。

【第135次調査】

《調査区》第118次調査区の北側、第122次調査区の西側に南北方向のトレンチを１本設定した(Ｊ区)。Ｊ区の南側では東に拡張を行い(Ｋ区)、一部は第120次調査区と重複する。トレンチは斜面上位緩斜面部から斜面下位にかけてであり、標高は49.3～39.0ｍである。

《遺構》古代の遺構は、掘立柱建物跡３棟、竪穴状遺構11基、土坑14基、柱穴掘形17基、溝跡７条、鍛冶炉・焼土遺構５基である。

斜面上位では、掘立柱建物跡３棟(SB1866A・B、SB1875)が、斜面中位平坦面部では鍛冶炉を含む鍛冶関連の遺構(SKI1863A～D、SS1855、SN1871・1872等)が重層的に集中する。斜面中位緩斜面部では、斜面上位寄りで竪穴状遺構１基(SKI1896)が、下位寄りでは竪穴状遺構(SKI1892A・B)や土坑等が重複して検出された。また、斜面下位では掘立柱建物跡や鍛冶関係の遺構はなく、土坑３基、溝跡１条、硬化面(道路跡か)１条等が検出されたのみであった。

《遺構内遺物》斜面中位平坦面部のSK1914底面からは須恵器坏(RP632、第56図15)が正立状態で１個体出土した。SK1914は、SKI1863Ａ期鍛冶工房以前相当の土取り穴であり、鍛冶工房を最初に造り出すにあたり、地鎮的な意味合いをもたせて埋置した可能性もある。

《遺構外出土遺物》遺構外出土の遺物は、斜面中位部を中心に多量に認められた。重量で見ると、総計73.13kgに達し、うち土師器が65.31kg(89％)、須恵器7.82kg(11％)であった。このうち、斜面中位緩斜面部にあたるKA～KCグリッド出土総量は43.91kgであり、総量のうち60％を占めている。

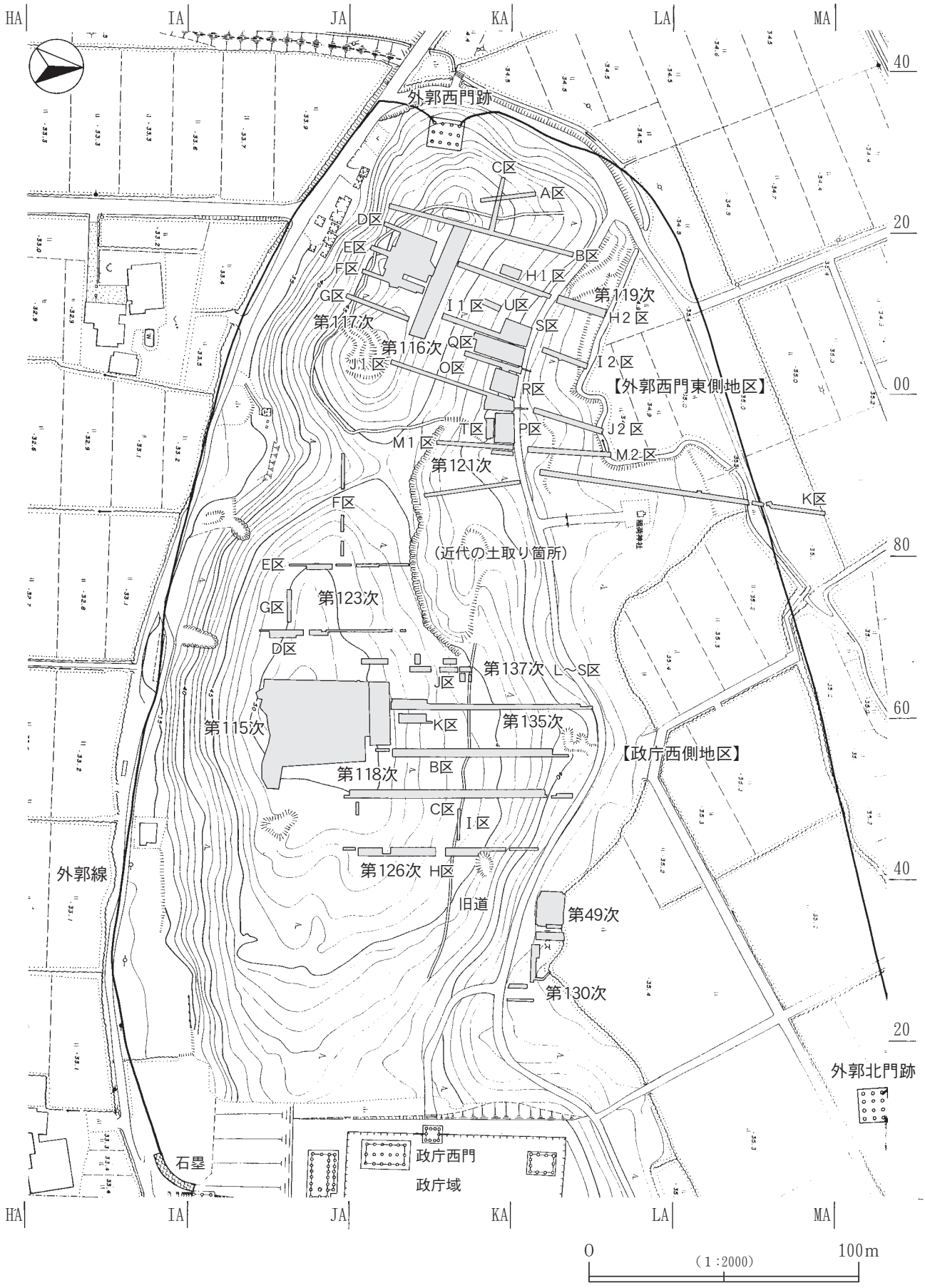
出土の実態を調べるため、出土量の最も多いKB60グリッドの一角(SKI1892北壁の南側)を30㎝四方、深さ30㎝の範囲内全ての土を取り上げ、内容物の確認を行った。その結果は、自然の礫等を除くと土器類と炭化物で占められていた。その総量は950gであり、土器類759g、炭化物191gであった。土器類は一辺１㎝角以上の破片数が455点であり、うち須恵器甕１点、土師器甕５点以外は全て土師器坏類であった。重量比でみると土師器のうち92％が坏類となる。

土師器・須恵器以外の遺物では、少量・小片ながら、緑釉陶器・灰釉陶器・中国産青磁がある。出土位置は、火山灰直上層面に集中する傾向にある。陶磁器類は、遺構内出土を含め、灰釉陶器片７点、緑釉陶器片６点、青磁片４点(RP246・257・284・287)が確認された。青磁は越州窯系と見られる。

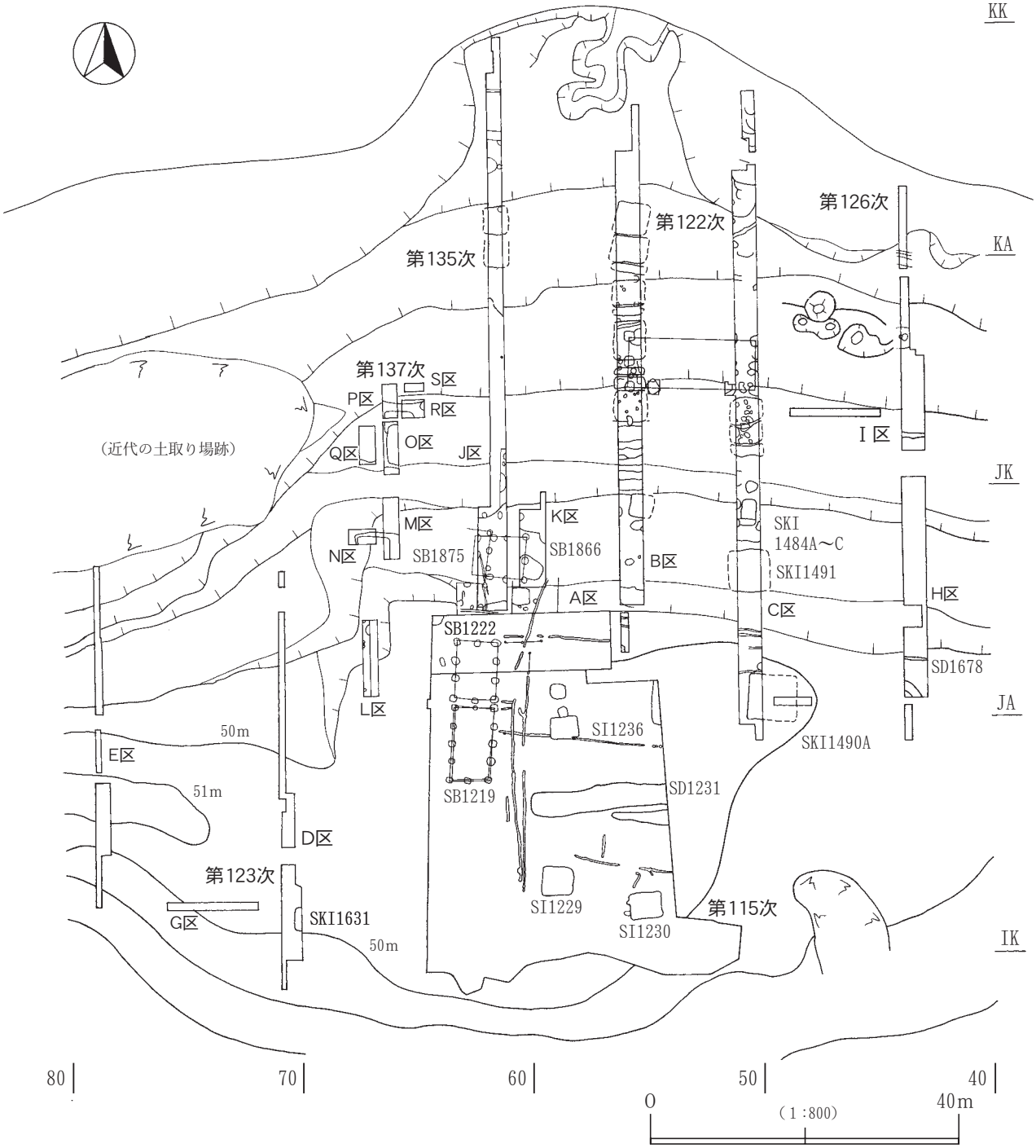
【第137次調査】

《調査区》第135次調査Ｊ区の西側約15ｍに南北方向のトレンチを１本に設定したが、結果的には地形や遺構の広がり、土層観察を考慮して８地区(Ｌ～Ｓ区)に分割する形となった。北側斜面上位平坦面がＬ区、北側斜面上位緩斜面部がＭ・Ｎ区、北側斜面中位がＯ～Ｓ区となる。標高は50.1～45.4ｍであった。

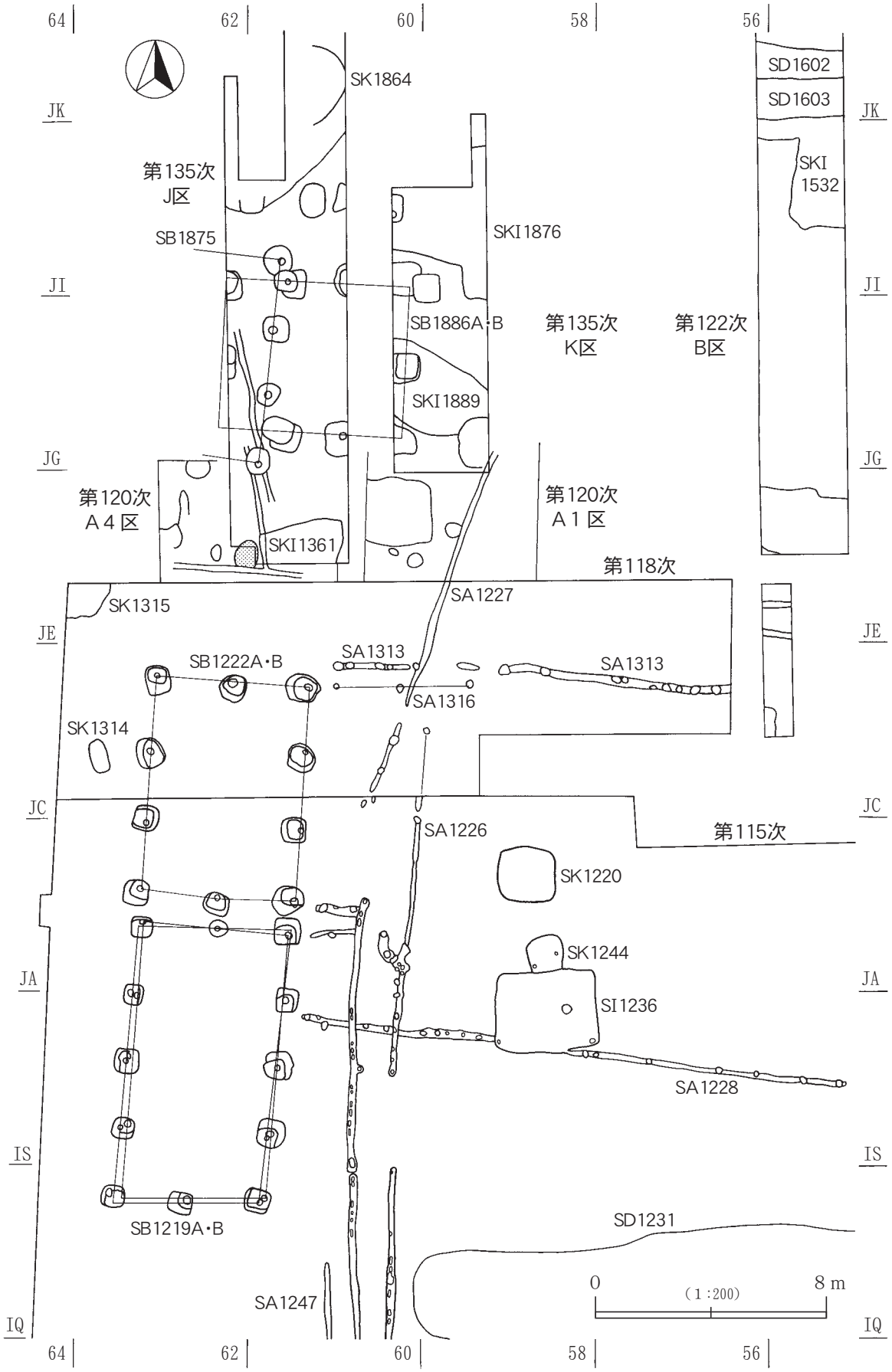
《遺構》確認された古代の遺構は、竪穴状遺構10基、土坑14基、掘立柱建物跡(柱穴堀形)１基２時期、溝状遺構１条、焼土遺構１基、柱穴35基である。北側斜面上位緩斜面部から竪穴建物跡２棟のみ、北側斜面中位では、整地層が複数面検出され、ここを掘り込み面とする遺構や整地層除去後に確認された遺構も重層的に発見された。Ｏ区整地層２の直下で確認されたSKI1924Ａ～Ｆ(第50図)は、当初



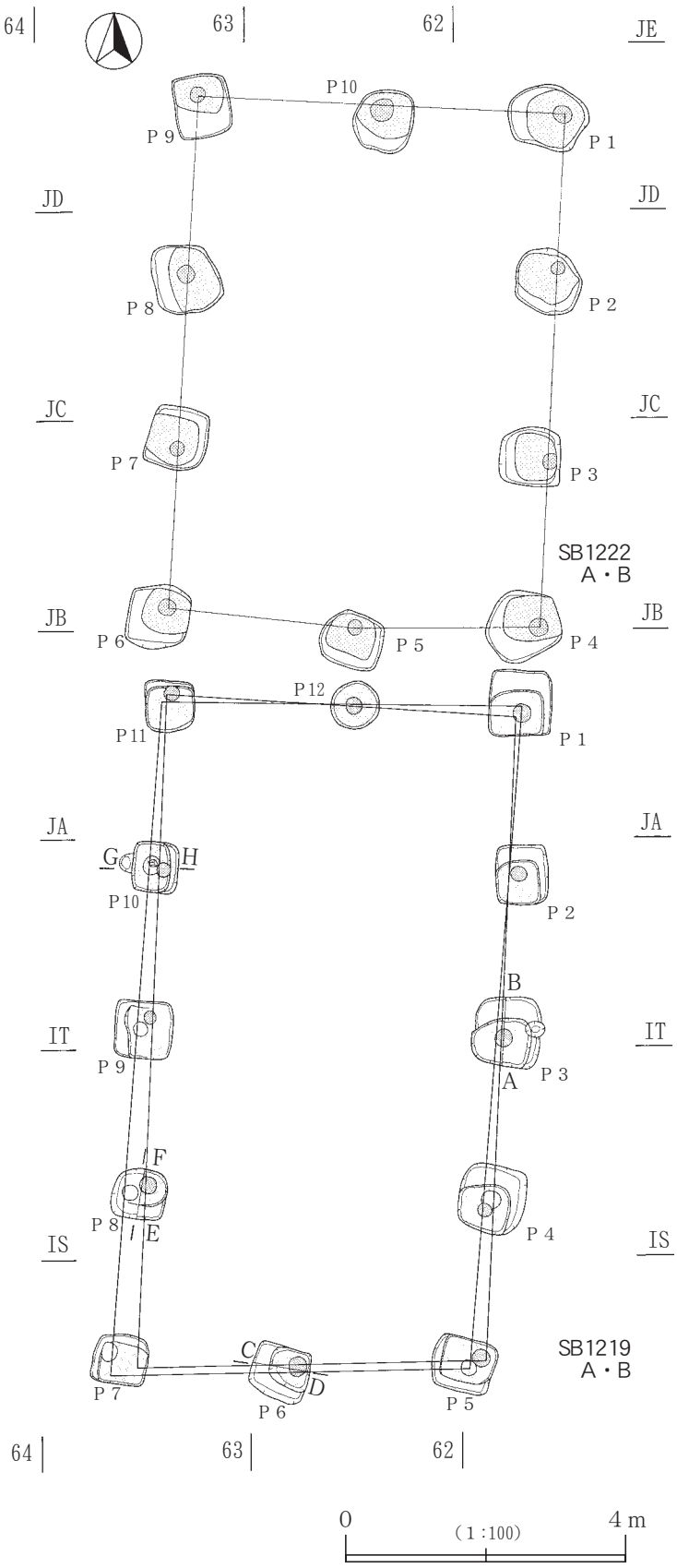
第29図　長森西方地区の地形と調査区

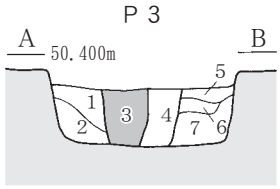


第30図　政庁西側地区の地形と遺構配置図

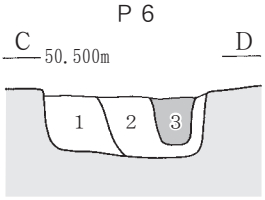


第31図　政庁西側地区南西部の遺構配置図

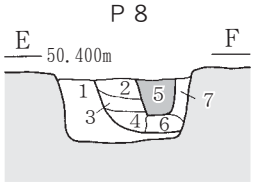


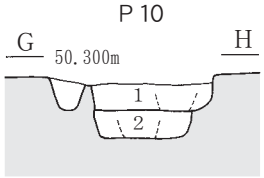


SB1219A・B

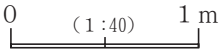


P６
１:黄褐色粘土(10YR5/6)の中に筋状に黒褐色シルト質土(10YR2/2)が互層をなして堆積
２:黄褐色粘土(10YR5/8)
３:黒褐色シルト質土(10YR2/3)地山やや多く含む





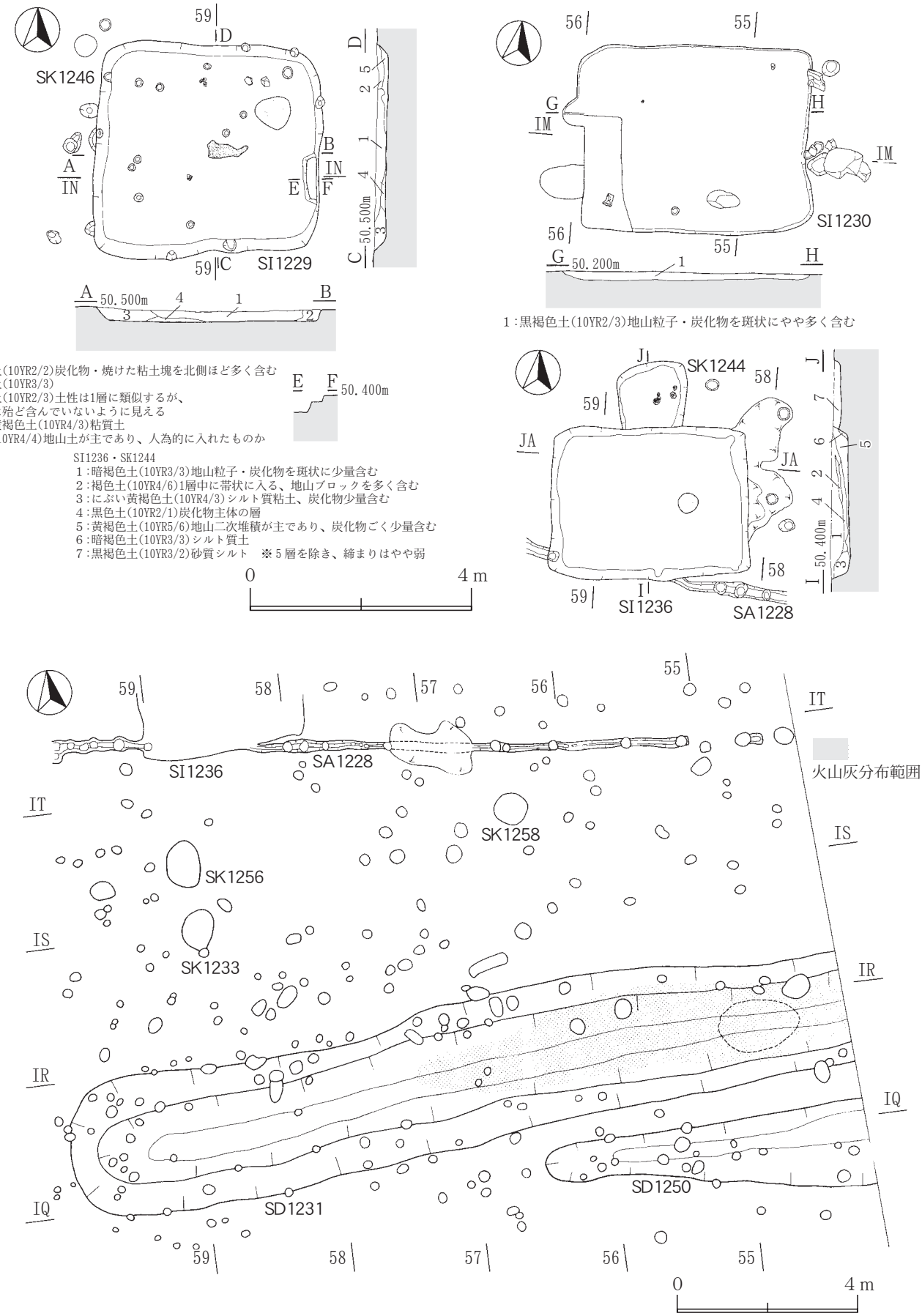
P10
１:黒褐色シルト質土(10YR2/2)地山少量含む
２:黄褐色粘土(10YR5/6)



P３
１:黒褐色シルト質土(10YR2/2)地山少量含む
２:にぶい黄褐粘土(10YR5/4)
３:暗褐色シルト質土(10YR3/3)地山やや多く含む
４:にぶい黄褐色粘土(10YR5/3)土質は2層に類似
５:黒褐色シルト質土(10YR3/1)
６:暗褐色シルト質土(10YR3/4)地山やや多く含む
７:黄褐色粘土(10YR5/6)

P８
１:暗褐色シルト質土(10YR3/4)地山少量含む
２:黄褐色粘土(10YR5/8)
３:黒褐色シルト質土(10YR2/3)地山やや多く含む
４:黒褐色シルト質土(10YR2/2)地山殆ど含まず
５:黒褐色シルト質土(10YR3/2)地山少量含む
６:褐色粘土(10YR4/6)地山ブロック
７:黒褐色シルト質土(10YR2/3)土質は3層に類似

第32図　政庁西側地区の遺構(１)第115・118次調査区(１)

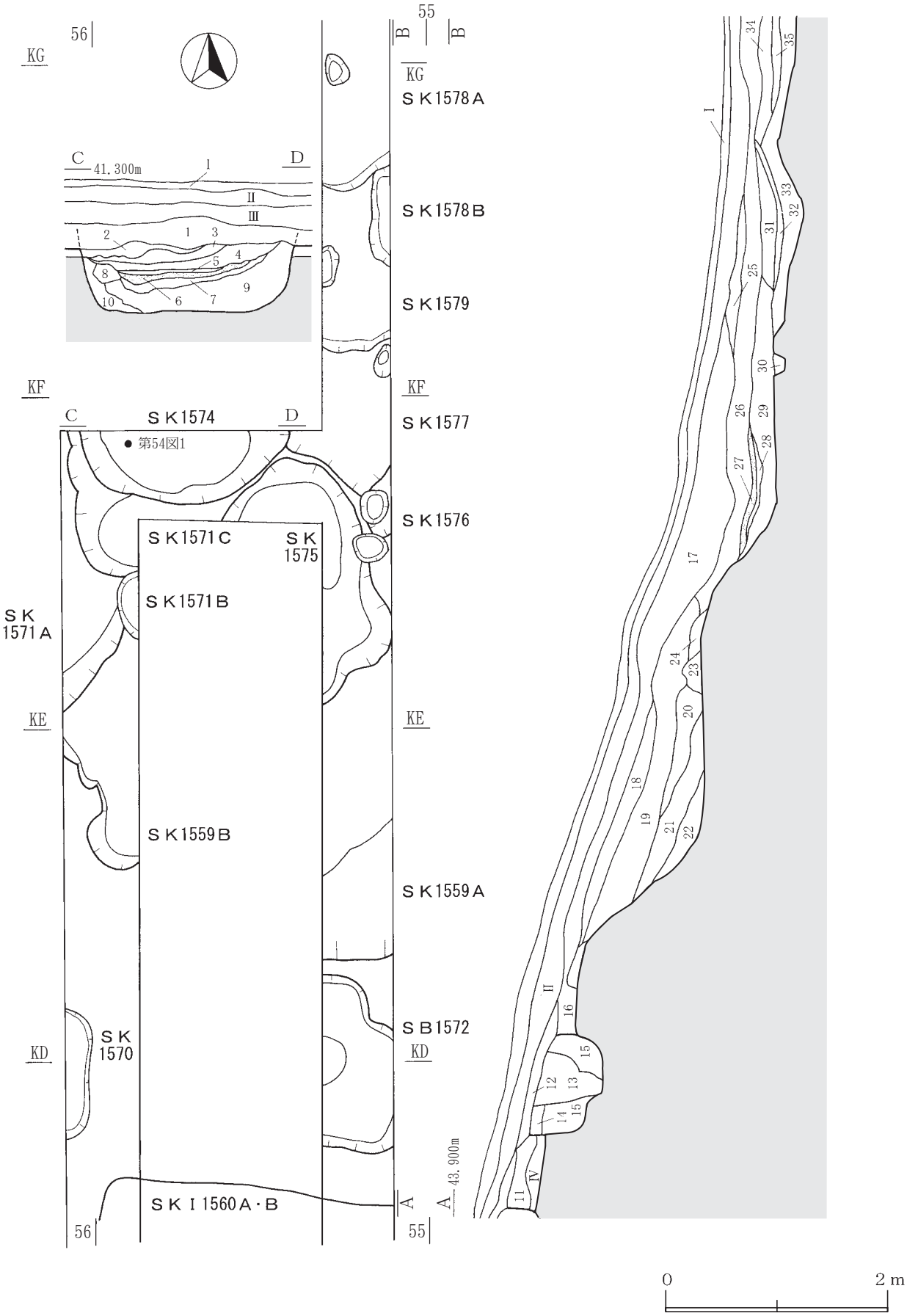


SI1229
１:黒褐色土(10YR2/2)炭化物・焼けた粘土塊を北側ほど多く含む
２:暗褐色土(10YR3/3)
３:黒褐色土(10YR2/3)土性は1層に類似するが、
　混入物は殆ど含んでいないように見える
４:にぶい黄褐色土(10YR4/3)粘質土
５:褐色土(10YR4/4)地山土が主であり、人為的に入れたものか

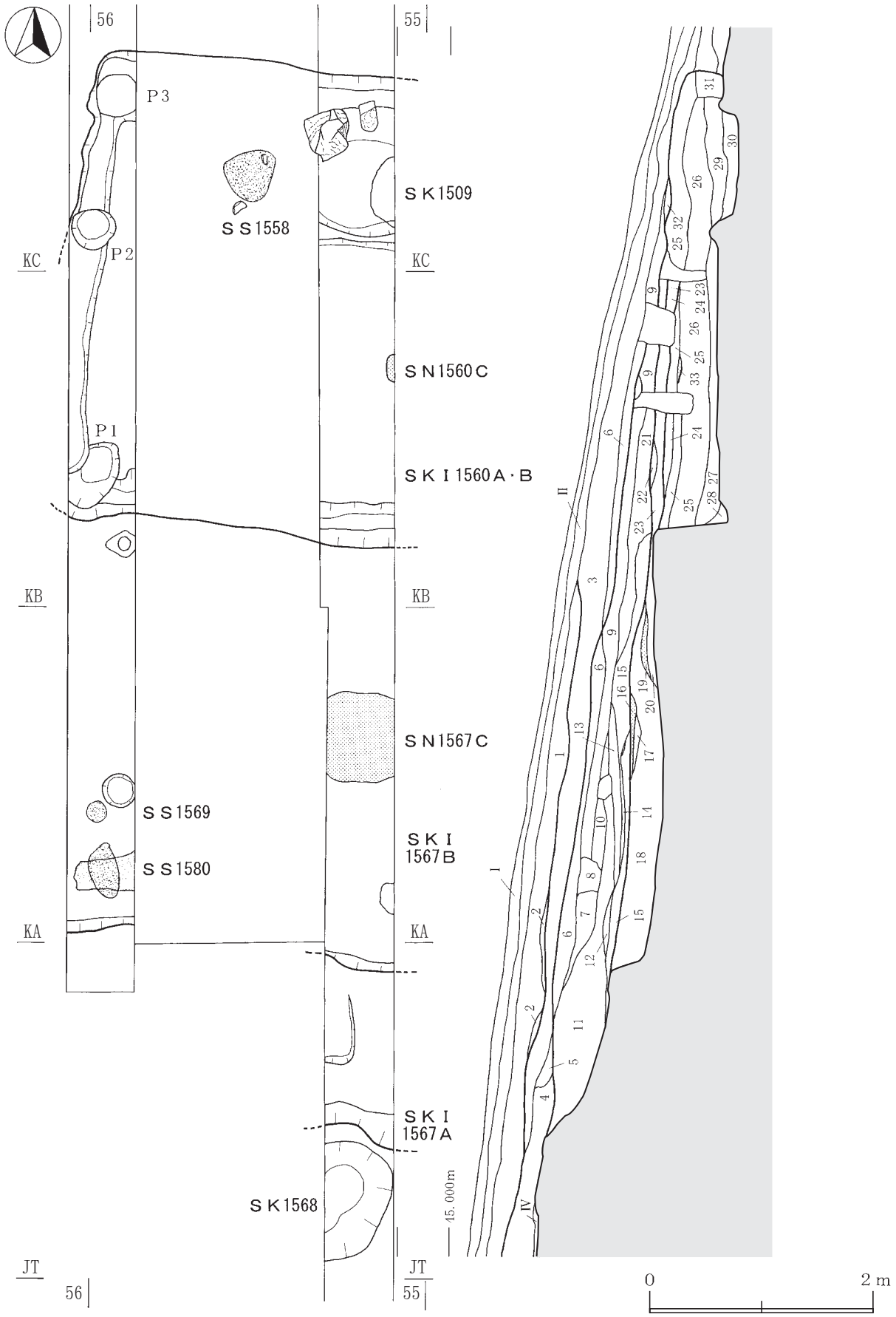
１:黒褐色土(10YR2/3)地山粒子・炭化物を斑状にやや多く含む

SI1236・SK1244
１:暗褐色土(10YR3/3)地山粒子・炭化物を斑状に少量含む
２:褐色土(10YR4/6)1層中に帯状に入る、地山ブロックを多く含む
３:にぶい黄褐色土(10YR4/3)シルト質粘土、炭化物少量含む
４:黒色土(10YR2/1)炭化物主体の層
５:黄褐色土(10YR5/6)地山二次堆積が主であり、炭化物ごく少量含む
６:暗褐色土(10YR3/3)シルト質土
７:黒褐色土(10YR3/2)砂質シルト　※５層を除き、締まりはやや弱

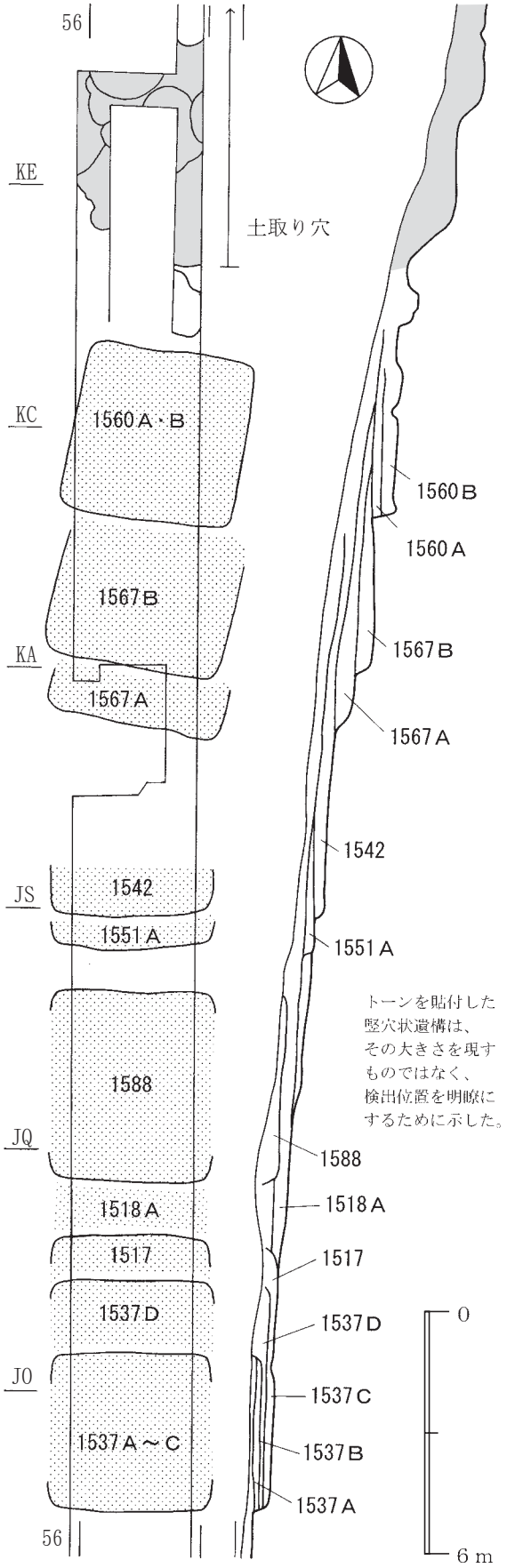
第33図　政庁西側地区の遺構(２)第115次調査区(２)



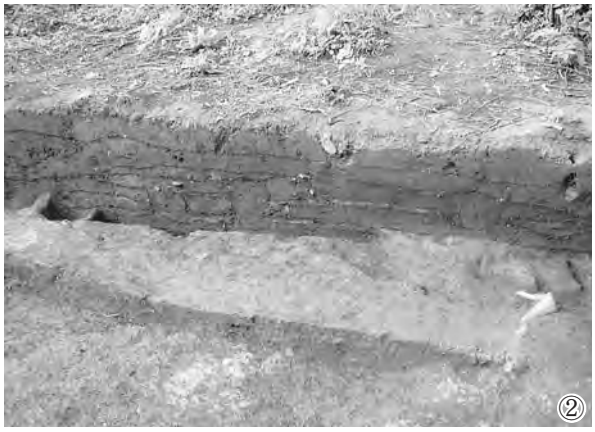
第34図　政庁西側地区の遺構(３)第122次調査区(１)



第35図　政庁西側地区の遺構(４)第122次調査区(２)

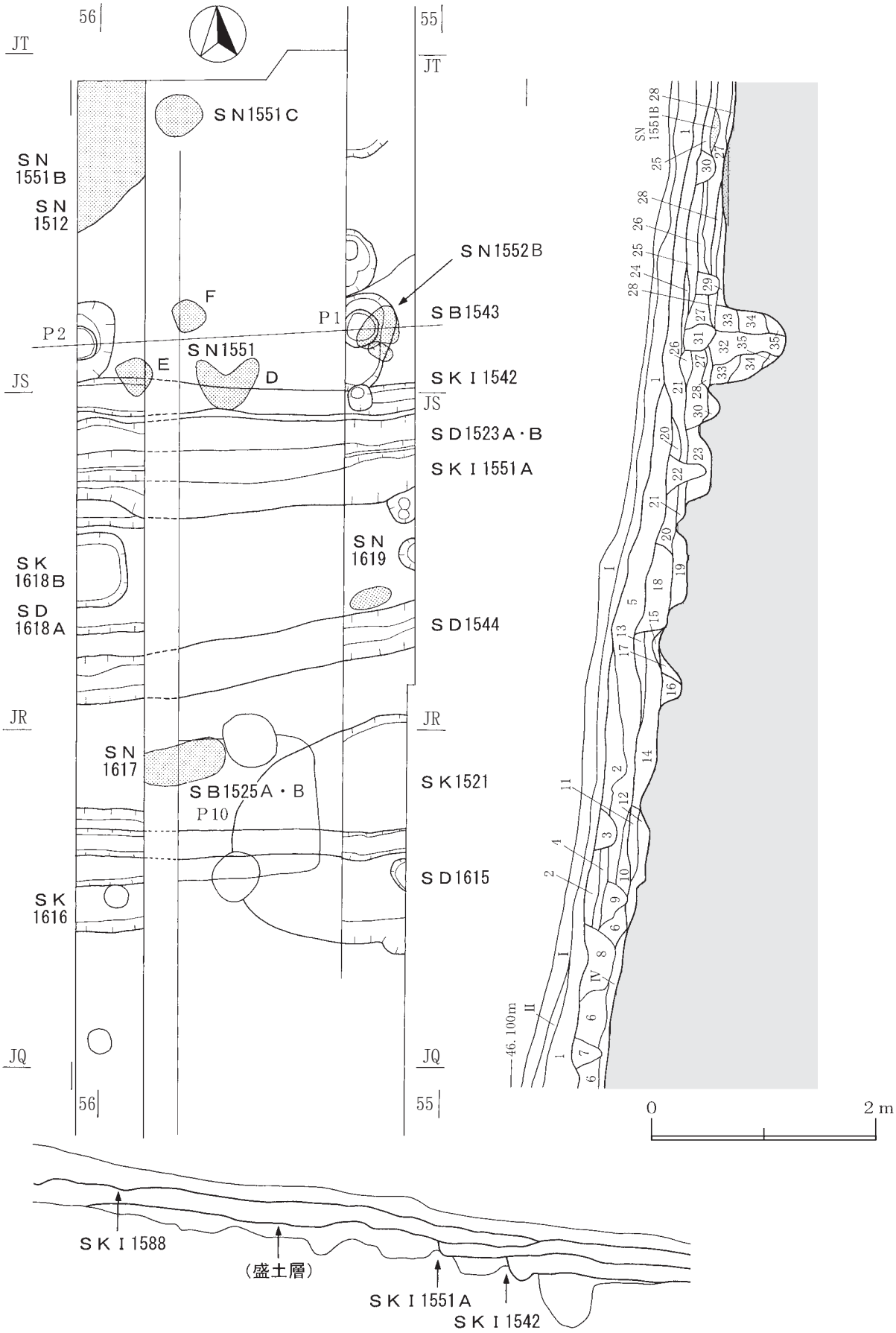


図版４

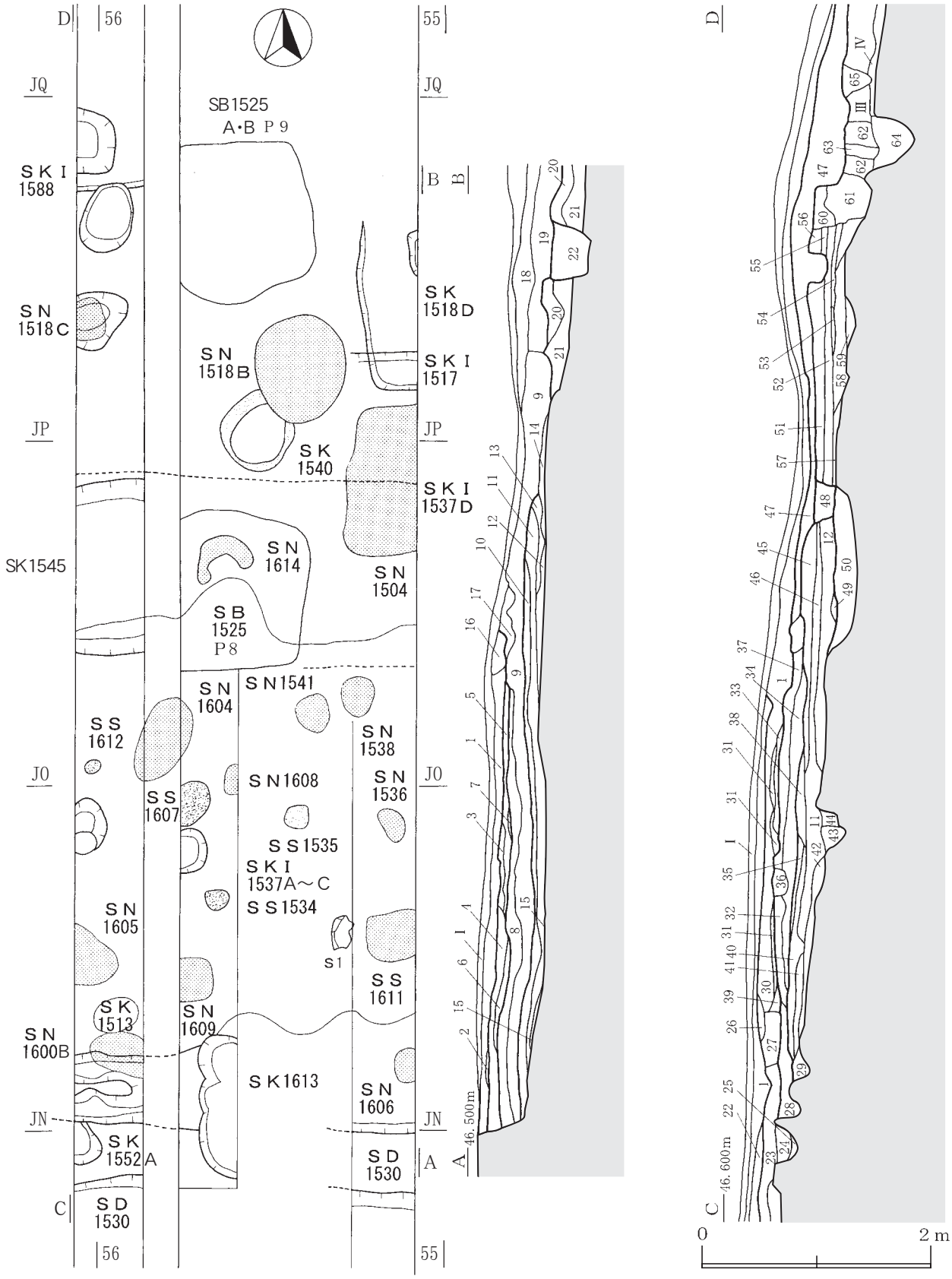


①ＳＫＩ1560Ａ・Ｂ(東→)中央の柱穴は、Ｐ１
　柱穴の左手はＳＫＩ1567Ｂ〔20031001 撮影〕
②ＳＫＩ1542・1551Ａ(東→)右手にSN1512
　その上位にＳＮ1551Ｂ〔20030909 撮影〕
③ＳＫＩ1542・1551Ａ・1588(北西→)
　左奥の柱穴は、ＳＢ1543〔20030911 撮影〕

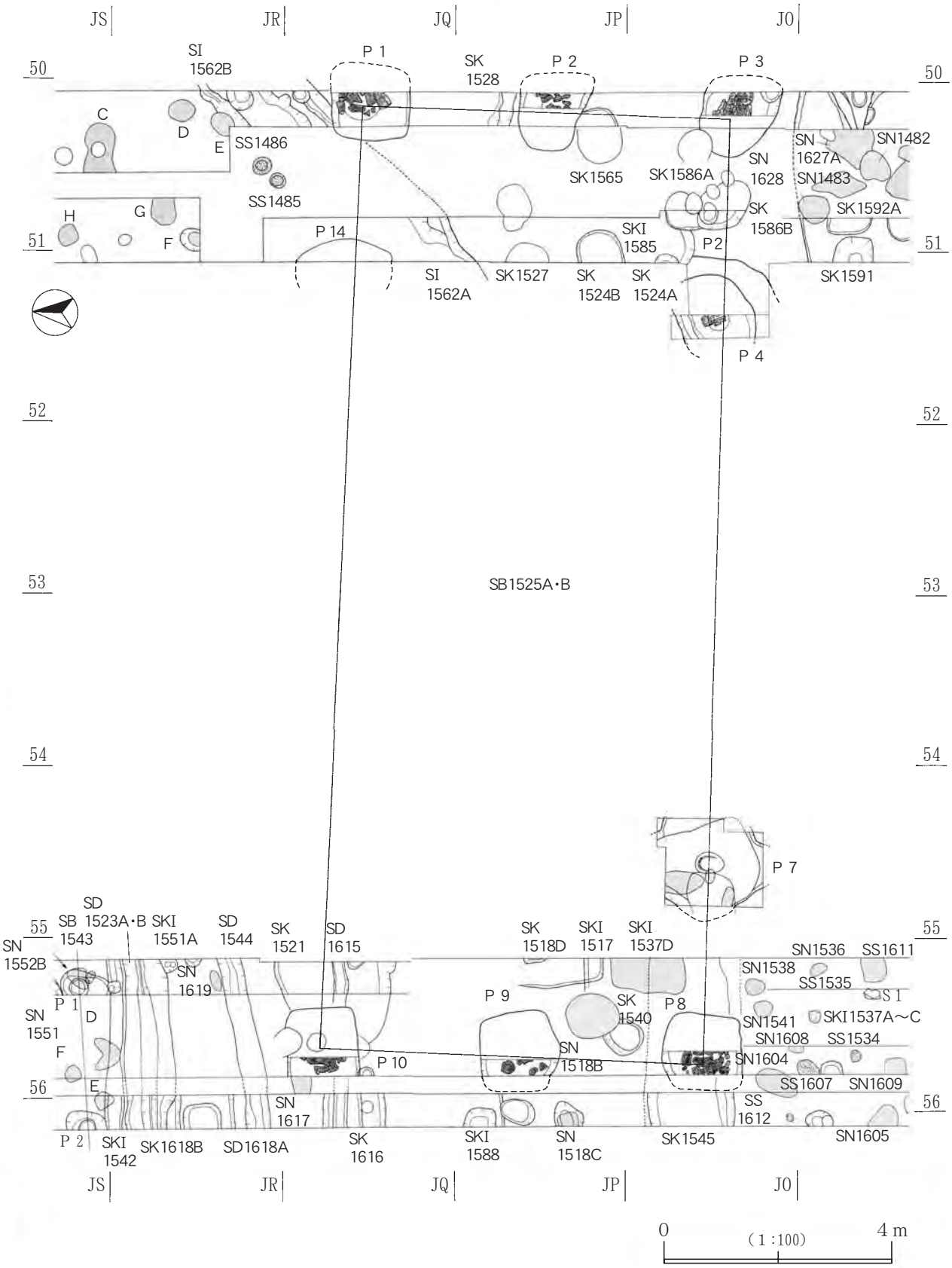
第36図　政庁西側地区の遺構(５)第122次調査区(３)



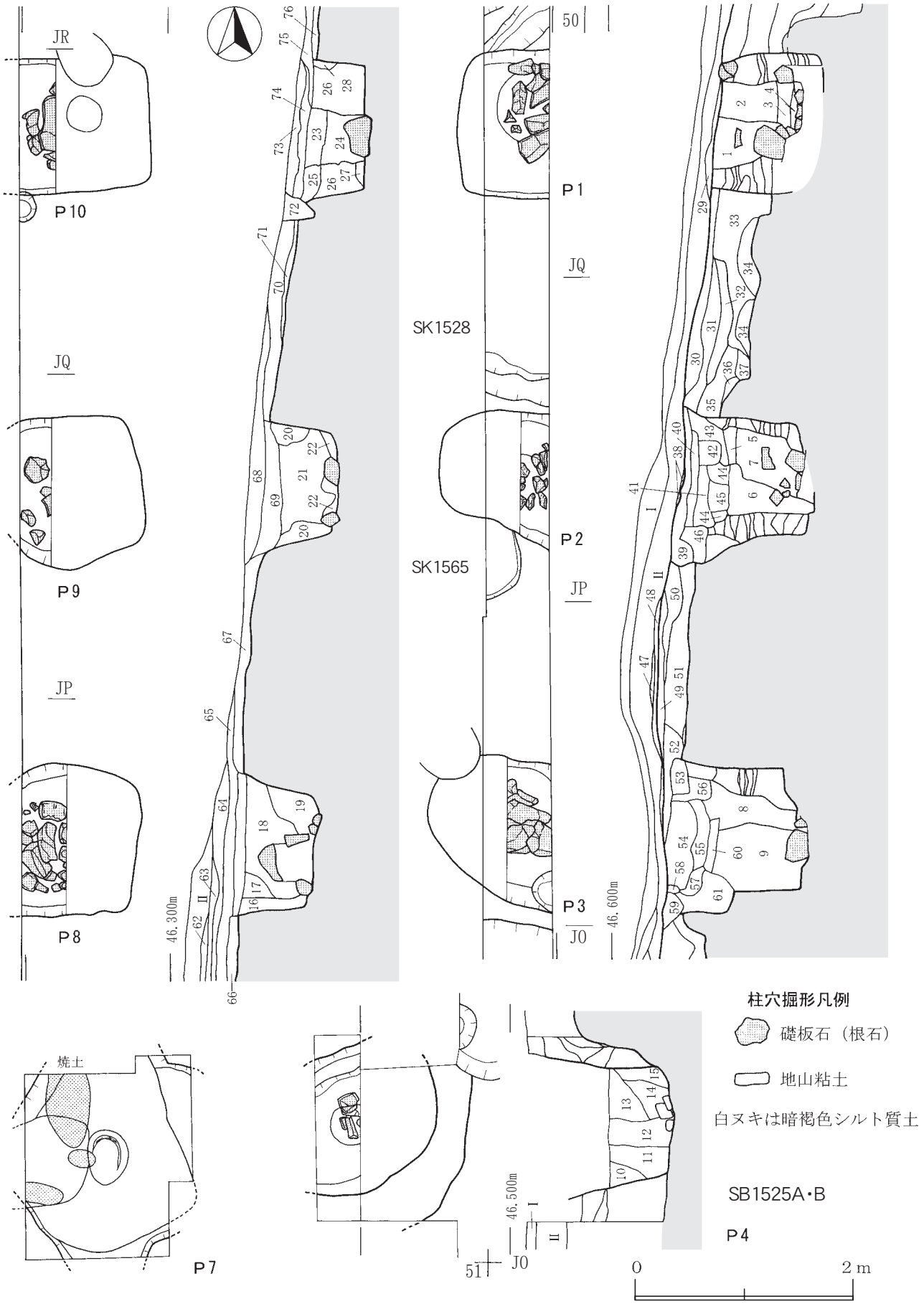
第37図　政庁西側地区の遺構（６）第122次調査区（４）



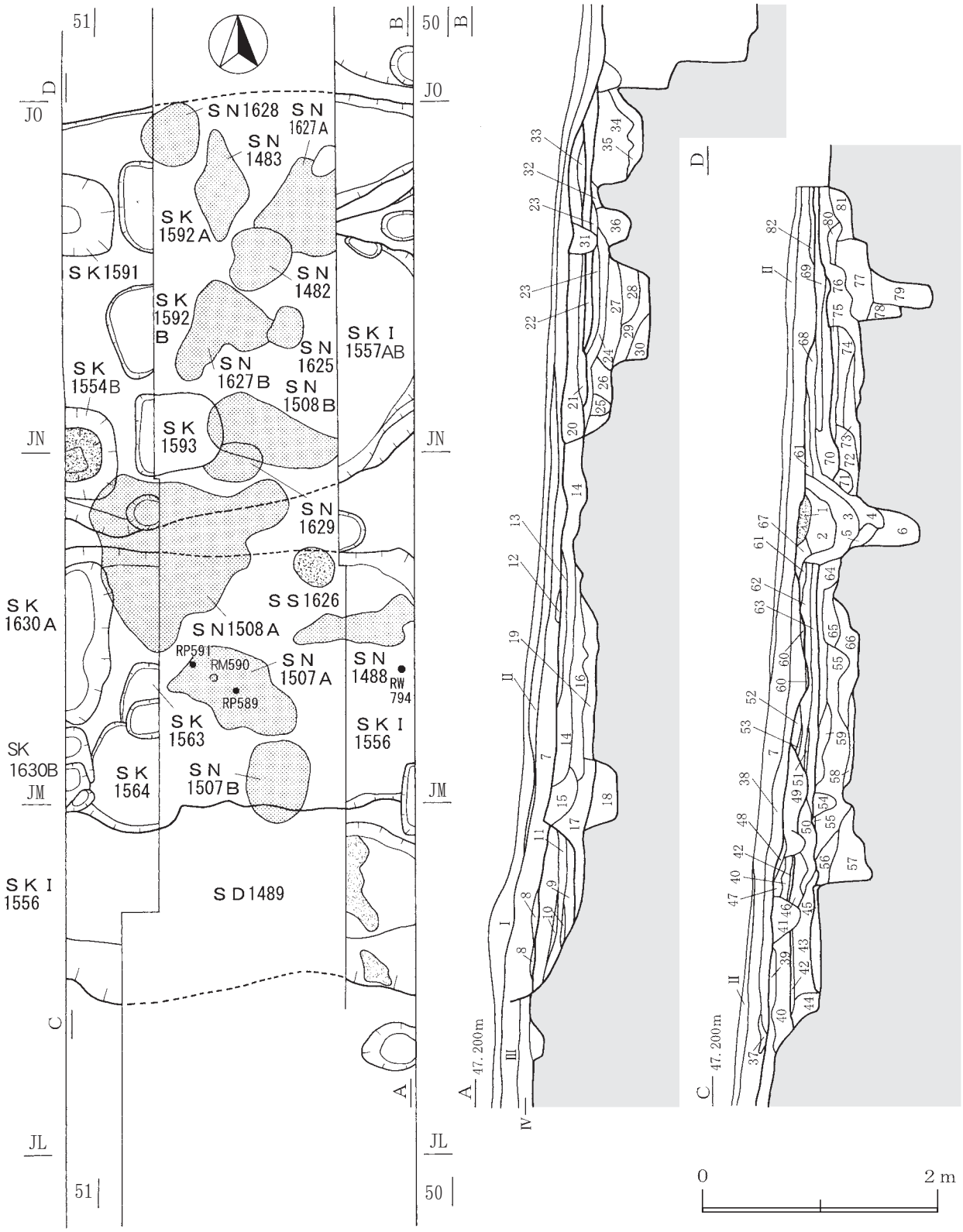
第38図　政庁西側地区の遺構(７)第122次調査区(５)



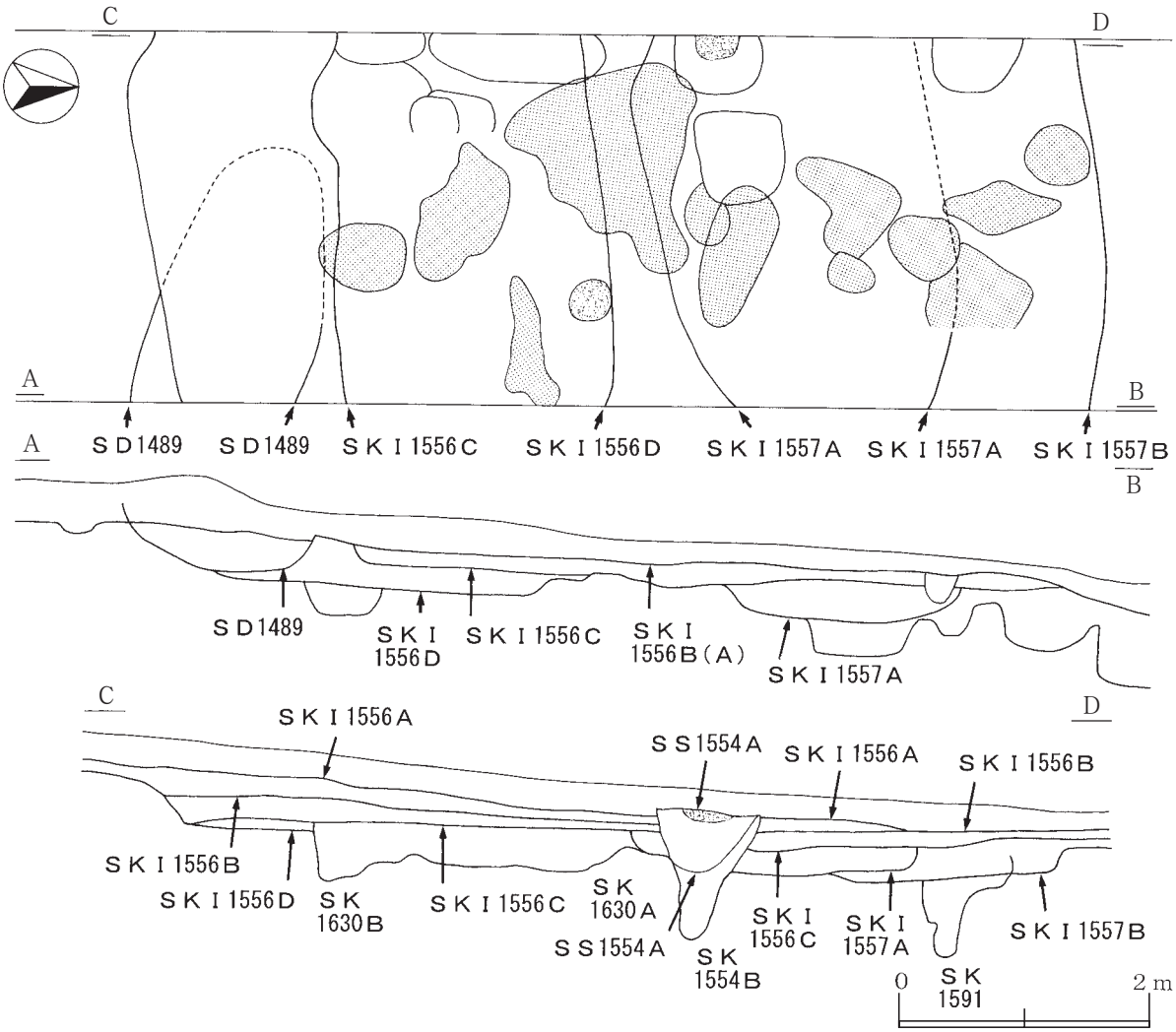
第39図　政庁西側地区の遺構(８)第122次調査区(６)



第40図　政庁西側地区の遺構（９）第122次調査区（７）



第41図　政庁西側地区の遺構(10) 第122次調査区(８)

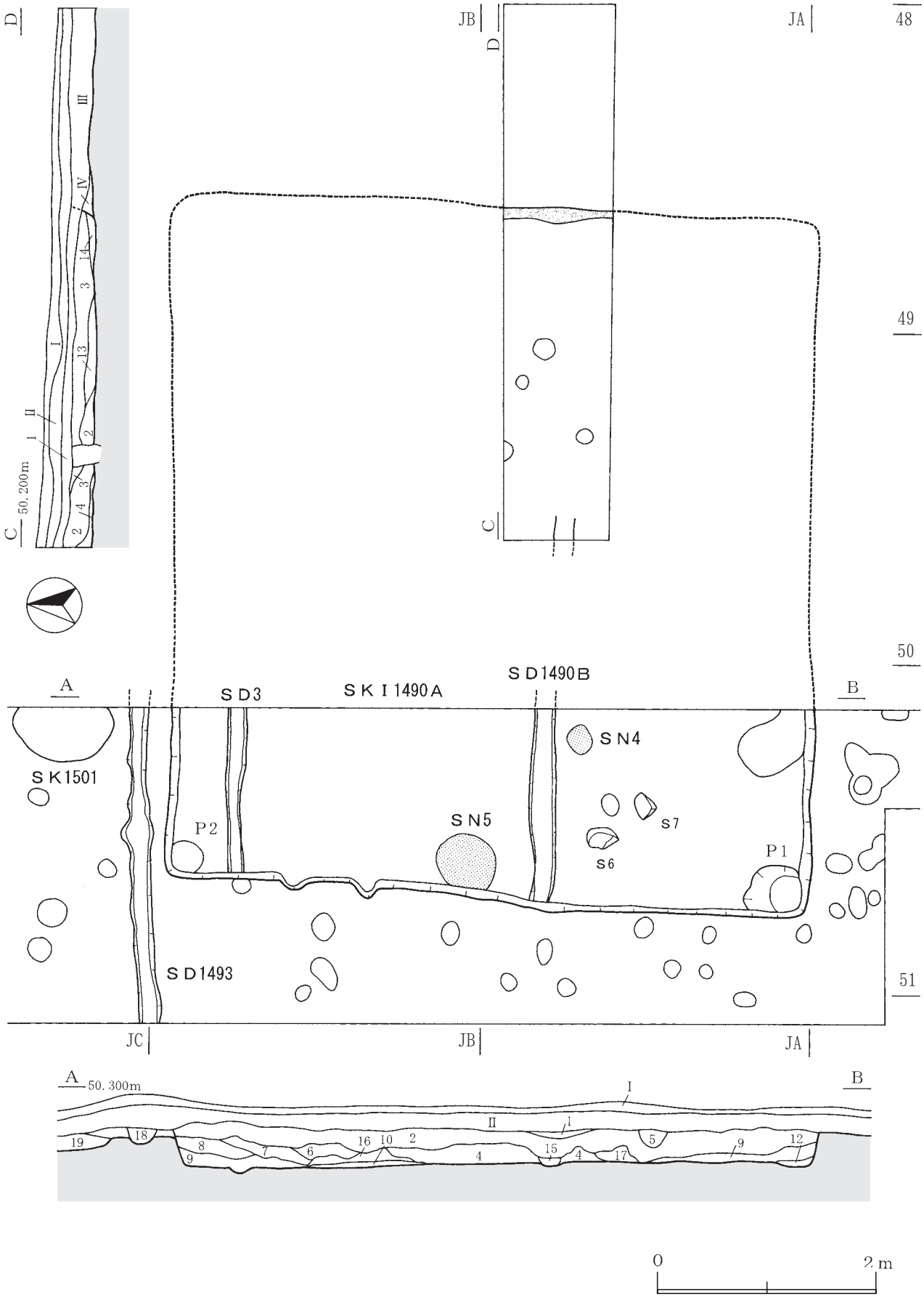


第42図　政庁西側地区の遺構(11) 第122次調査区(９)

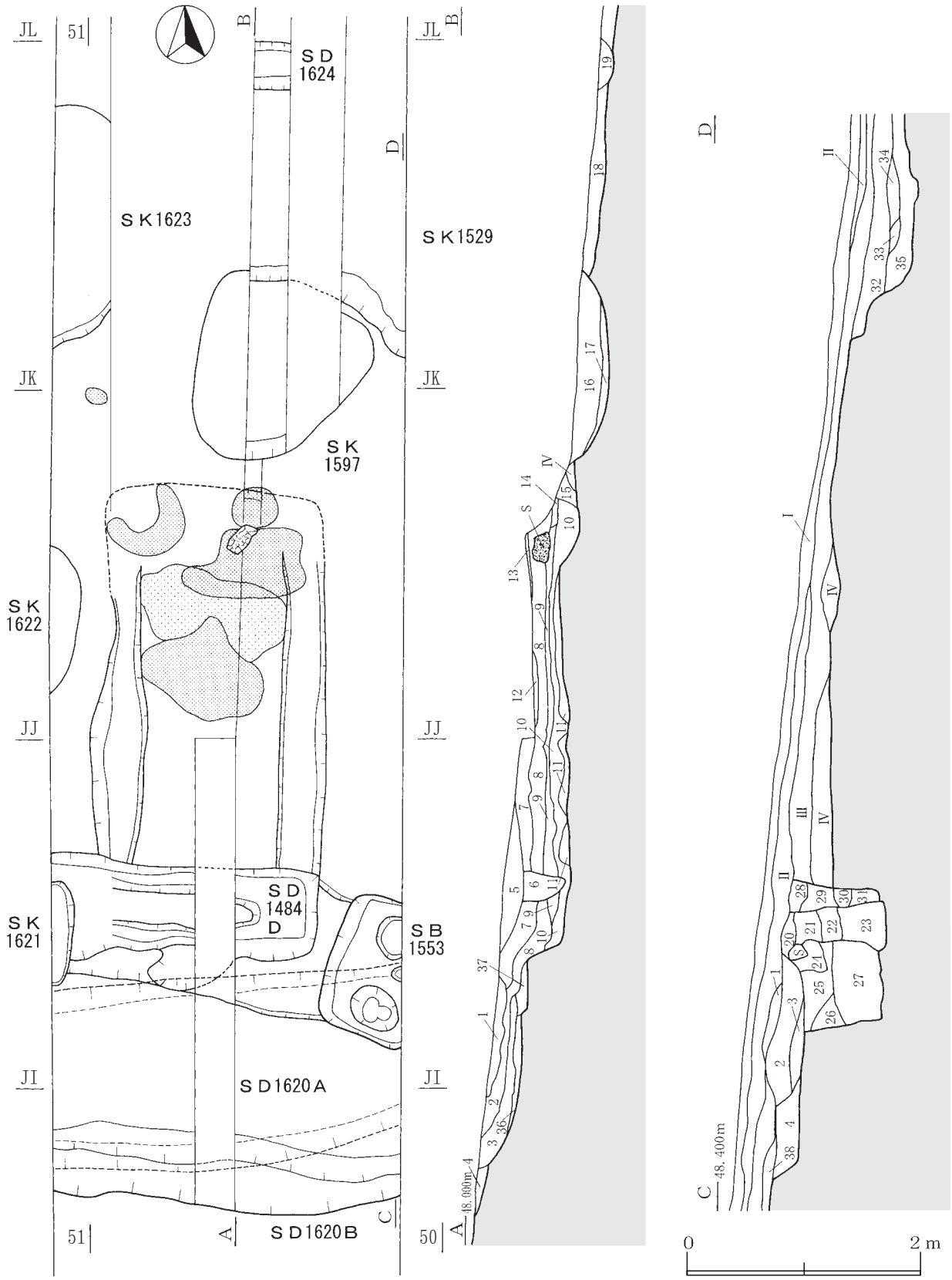
図版５

①ＳＫＩ1556・1557確認状況(西→)〔20030709 撮影〕
②同上(北→)〔20030709 撮影〕
③ＳＫＩ1556Ａ面での遺物出土状況
（右奥RP589、中央ＲＭ590、左手前ＲＰ591）
中央の鉄滓を挟んで坏が倒立状態で置かれている
（ＲＰ591は、第55図14)〔20030723 撮影〕

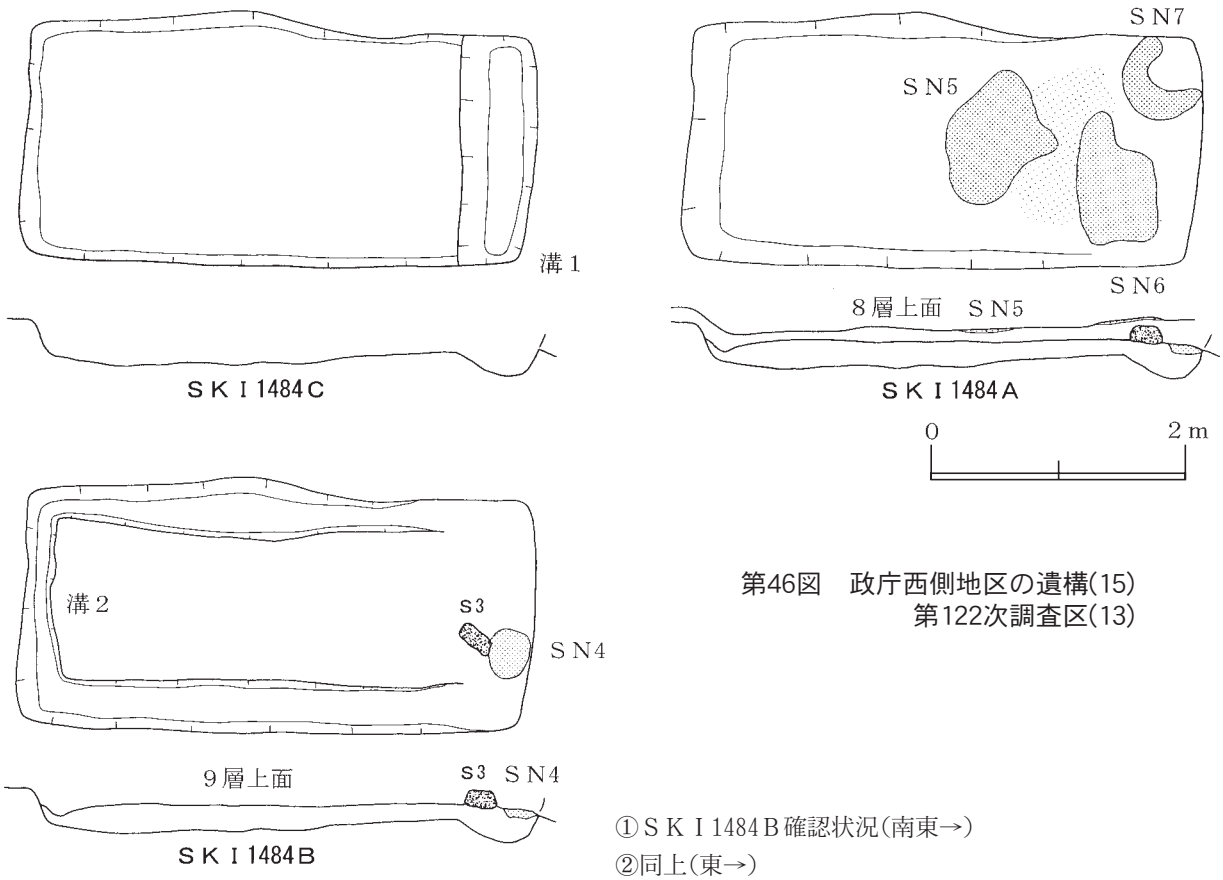
第43図　政庁西側地区の遺構(12) 第122次調査区(10)



第44図　政庁西側地区の遺構(13) 第122次調査区(11)



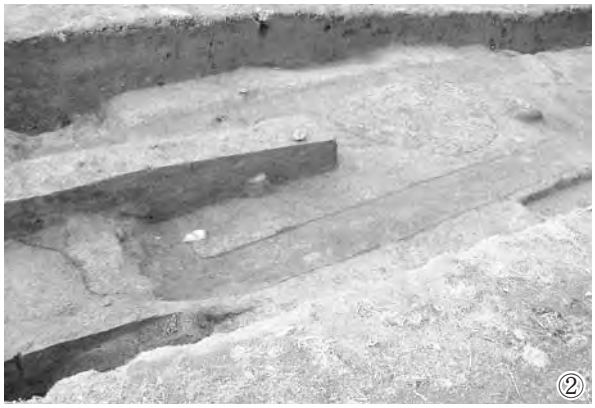
第45図　政庁西側地区の遺構(14) 第122次調査区(12)

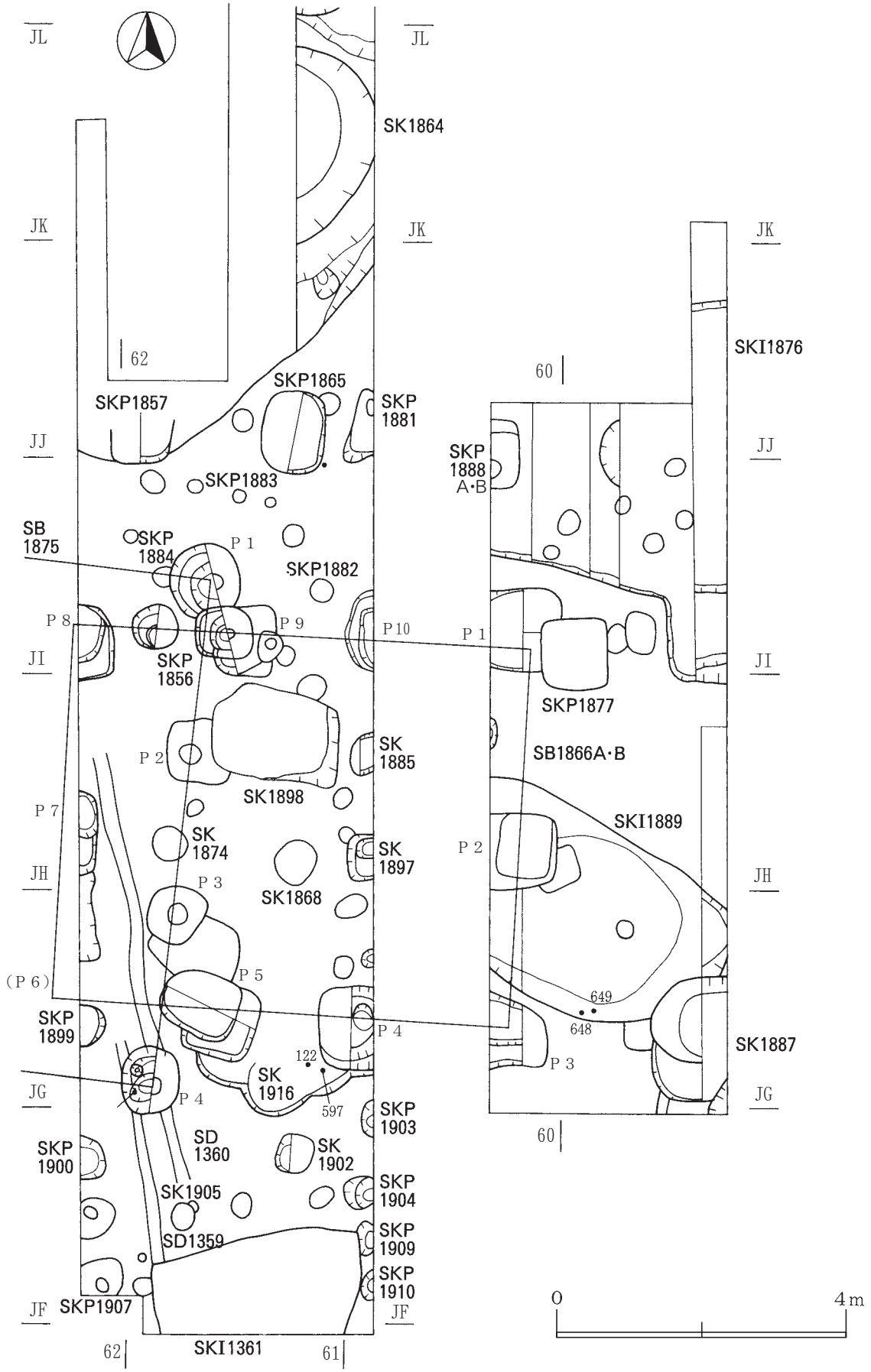


第46図　政庁西側地区の遺構(15)
第122次調査区(13)

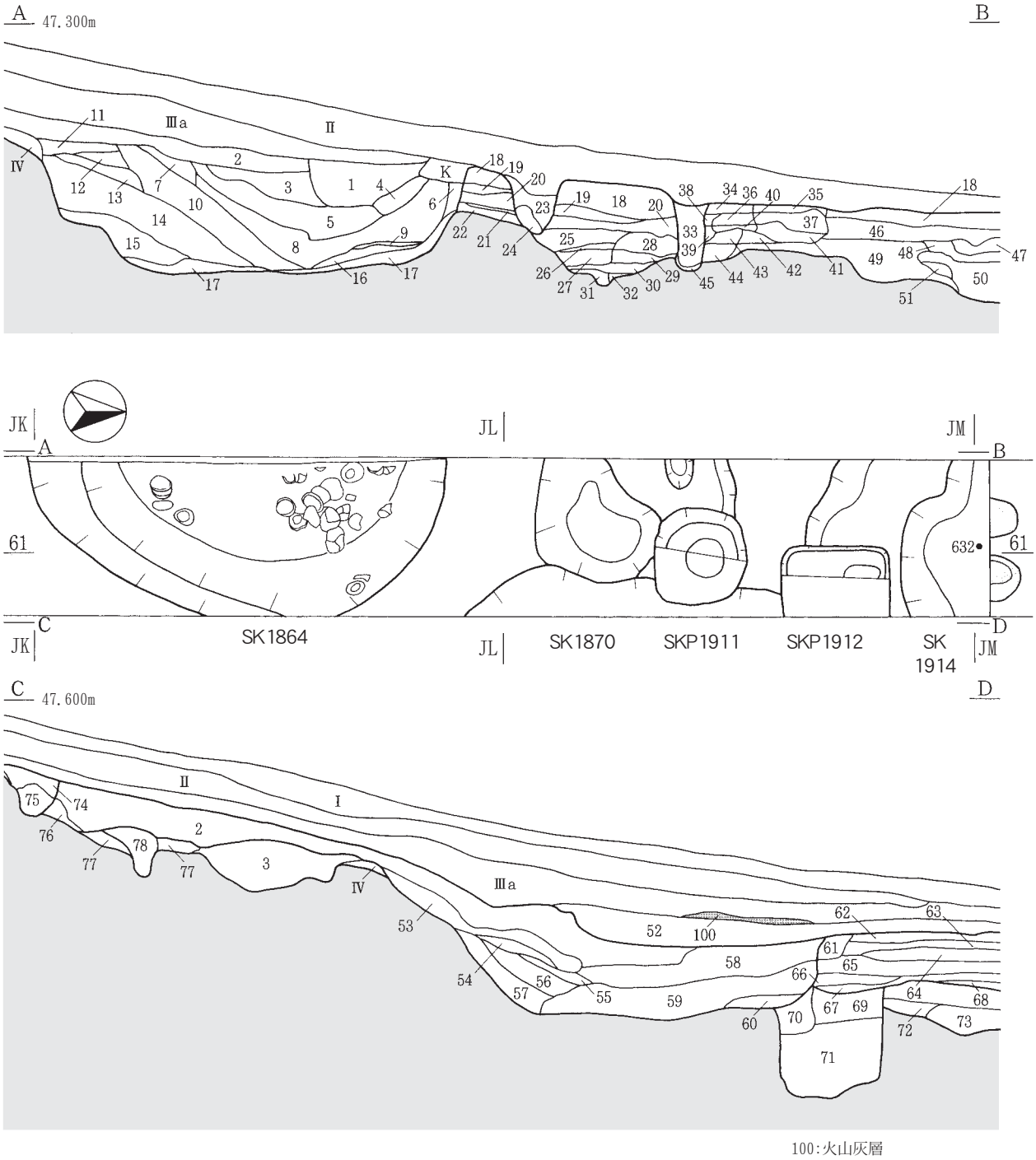
①ＳＫＩ1484Ｂ確認状況(南東→)
②同上(東→)
③同上(北東→)
④ＳＫＩ1484Ｂ精査後の状況(北東→)
〔①～③20031112、④20031130 撮影〕

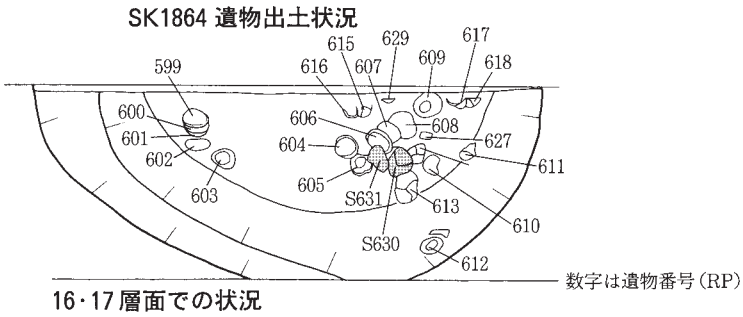
図版６



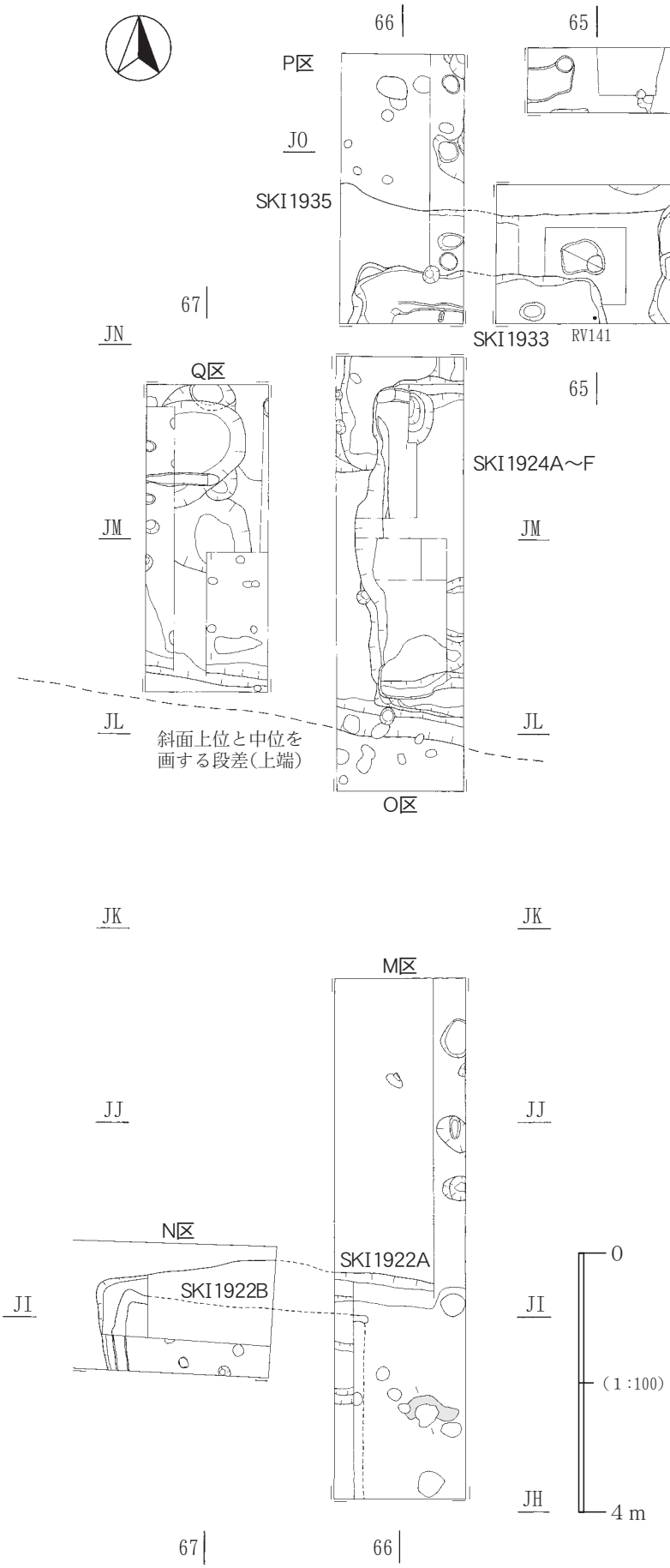


第47図　政庁西側地区の遺構(16) 第135次調査区(１)





第48図　政庁西側地区の遺構(17) 第135次調査区(２)



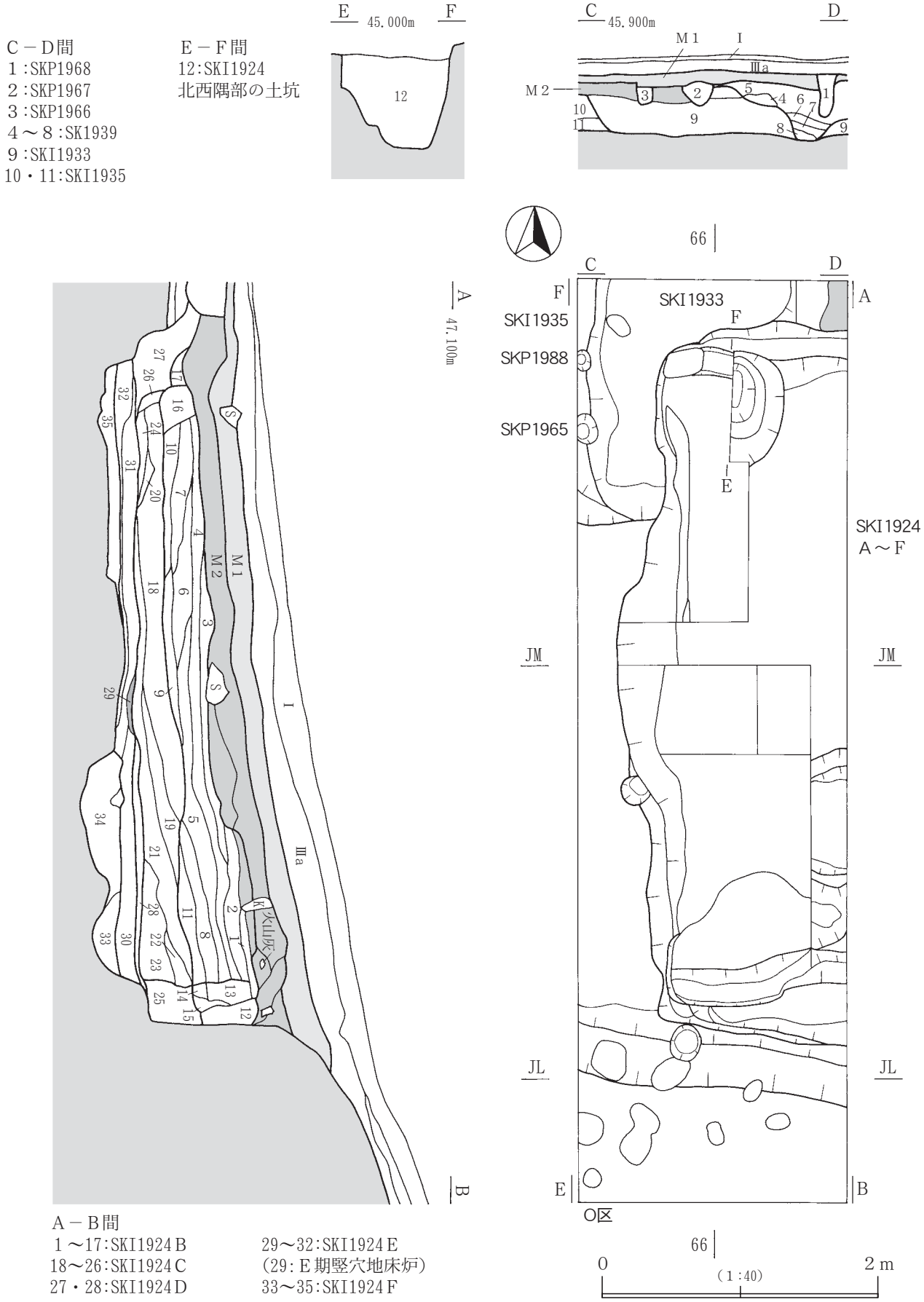
遺物出土状況

上：ＳＫＩ1933床面出土の漆紙（ＲＶ141）文字は確認されなかった〔20080729 撮影〕

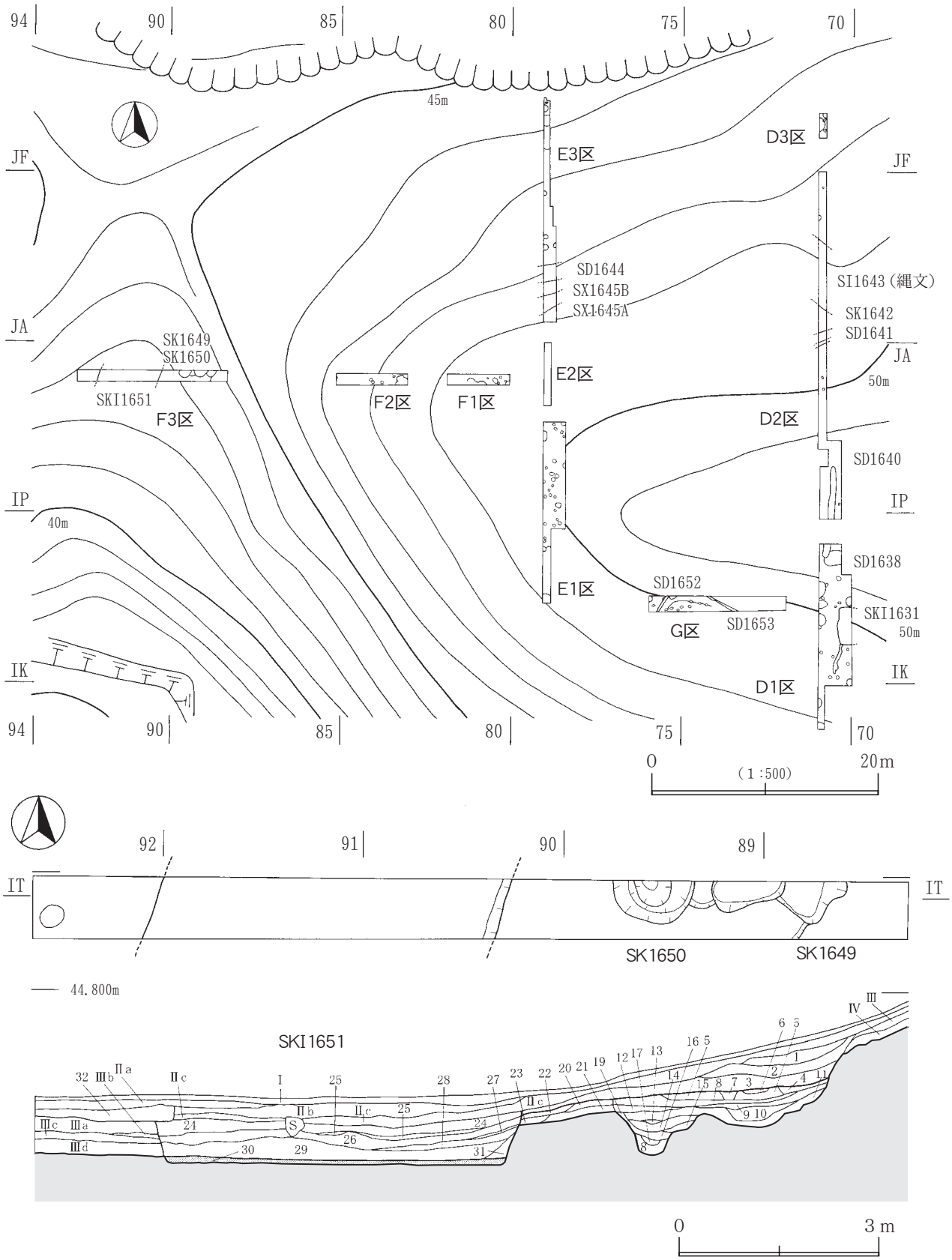
中：ＳＫＩ1924Ａ床面出土右端は倒位、左隣の２個体は正位〔20080626 撮影〕

下：ＳＫＩ1924Ｃ床面出土〔20080703 撮影〕

第49図　政庁西側地区の遺構(18) 第137次調査区(１)



第50図　政庁西側地区の遺構(19) 第137次調査区(２)



第51図　政庁西側地区西部の地形と遺構配置図

第５表　遺構観察表（２）　政庁西側地区

竪穴建物跡

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	規模・形状	建物方位	床面・柱穴・壁溝など	埋土状況	出土遺物・時期・備考
ＳＩ 1229	33	第115次調査区中央南部、IN59で確認	東西4.1ｍ×南北3.9ｍの隅丸方形、深さ22～26㎝	東－西	カマド・壁溝なし、主柱穴配置不明、床面中央部に長さ70㎝、幅20～30㎝の不整形の固結面、北東部寄りに径60㎝程の焼土面	床面直上には少量の火山灰がブロック状に確認	土師器坏、須恵器甕、鉄製品。焼土面周辺に鍛造剥片なし
ＳＩ 1230	33	第115次調査区南東部、IM55で確認	東西4.2ｍ×南北3.4ｍの隅丸長方形	東－西	西側壁南側に長さ80㎝×幅62㎝の焼土の広がり(カマドか)、北側には長さ40㎝×幅52㎝の半円状の張り出しが伴う。壁溝・柱穴未確認		土師器、縄文土器
ＳＩ 1236	31 33	第115次調査区中央北部、IT58で確認、SK1244・SA1228を切る	東西3.6ｍ×南北2.8ｍの隅丸長方形、深さは北側25㎝、南側35㎝		カマドなし、柱穴不明、床面中央東寄りに径35㎝の炭化物・焼土を含む小土坑あり	堆積層は１～６層に分けられ、明確に火山灰を包含する層はない	土師器、須恵器
ＳＫＩ 1369		第120次Ａ１区南西部で確認、SA1227・1358・1359に挟まれる	南北2.25ｍ、東西2.4ｍ以上3.2ｍ未満の隅丸方形		プラン確認のみ		土師器
ＳＫＩ 1560Ａ	34 35	第122次Ｂ区斜面中位、KD～JTライン、Ｂ竪穴を盛土してＡ竪穴を構築	規模はＢ竪穴と同じ	Ｎ７°Ｅ	Ｂ床面上に35～40㎝の厚さで土を盛り、新たな床面を構築、壁溝がなく、柱穴配置も不明、床面上にSN1560Ｃが形成		須恵器、土師器
ＳＫＩ 1560Ｂ	34 35		南北の長さ4.2ｍの方形、深さは南壁側90㎝、北壁側30㎝程	Ｎ７°Ｅ	床面上の南西・北西隅には柱穴が掘り込まれ、柱穴間を結ぶように幅30～40㎝の壁溝が西・南壁直下に巡る		須恵器台付坏・坏、土師器坏、双耳坏
ＳＫＩ 1567Ａ	35	第122次Ｂ区斜面中位、SKI1567Ｂの斜面上位側に隣接して構築	長さ5.5ｍ程		貼床面上にSS1569とSN1567Ｃが設置	Ｂ竪穴の斜面上位側の掘削土でＢ竪穴を埋めてＡ竪穴床面を構築	須恵器坏、土師器坏、土錘
ＳＫＩ 1567Ｂ	35	第122次Ｂ区斜面中位、SKI1560Ａの斜面上位側に構築	長さ約６ｍ、南側壁面の高さは約40㎝		床面上にSS1580が伴う		
ＳＫＩ 1542	37 39	第122次Ｂ区斜面中位JT～JQライン、SB1543を切る	長さ４～4.5ｍ程		南面の壁溝跡(幅25～30㎝、深さ15㎝前後)と、これに連なる床面を確認、床面上にSN1512が伴う	火山灰降下前の構築	須恵器、土師器、鉄製品(鉄斧・絞具)
ＳＫＩ 1551Ａ	37 39	第122次Ｂ区斜面中位JT～JQライン、SKI1542の南面から斜面上位側に１ｍ移動させた所に南側の壁を構築	４ｍ程		貼床面上にSN1551Ｂ～Ｆが形成	ＳＫＩ1542をシルト質土や粘質土で互層に埋め、貼床面を完成、火山灰降下前の構築	
ＳＫＩ 1518Ａ		第122次Ｂ区斜面中位JQ～JNライン、北側をSKI1588に、南側をSKI1517に切られる	長さ2.2ｍ程の床面のみ残る				
ＳＫＩ 1588	38 39	第122次Ｂ区斜面中位JT～JQライン	南側の壁は長さ4.5ｍ程			火山灰降下後の構築	
ＳＫＩ 1517	38 39	第122次Ｂ区斜面中位JQ～JNライン	長さ3.5ｍ程		SKI1537Ｄと同一の床面を共有する形であることから、長さ7ｍの一つの竪穴の可能性あり		SN1504が伴う
ＳＫＩ 1537Ａ	38 39	第122次Ｂ区斜面中位JQ～JNライン　鍛冶工房跡	長さ４ｍ前後		SN1604～1606が伴う		灰釉陶器瓶２点、鉄製品
ＳＫＩ 1537Ｂ	38 39		長さ４ｍ前後		SS1535、SN1536が伴う		
ＳＫＩ 1537Ｃ	38 39		長さ5.5ｍ		SN1541・1608等が伴う		
ＳＫＩ 1537Ｄ	38 39		長さ3.5ｍ程		SN1538が伴う		
ＳＫＩ 1532	31 43	第122次Ｂ区斜面上位JN～JJライン	南北方向の長さ3.1ｍ	Ｎ10°Ｅ	床面上に柱穴・焼土その他の施設未確認		
ＳＫＩ 1556Ａ	41	第122次Ｃ区斜面中位JO～JLラインで確認、(旧)1556Ｄ→1556Ｃ→1556Ｂ→1556Ａ→火山灰降下→1557Ｂ→1557Ａ(新)				床面直上に火山灰が堆積	土師器坏、鉄滓
ＳＫＩ 1556Ｂ	41						
ＳＫＩ 1556Ｃ	41		長さ4.5～５ｍ程				第６号漆紙文書(床面直上)
ＳＫＩ 1556Ｄ	41		南北の長さ3.5ｍ前後				
ＳＫＩ 1557Ａ	41						
ＳＫＩ 1557Ｂ	41						
ＳＫＩ 1484Ａ		第122次Ｃ区斜面上位JL～JIラインで確認、(旧)1484Ｃ→1484Ｂ→1484Ａ(新)、SD1484Ｄに切られる	長さ４ｍ、幅２ｍ前後の長方形であるが、北壁の立ち上がりが不明瞭		壁溝のない竪穴、焼土面が３か所(SN５～７)に形成される		須恵器壺、瓦(平瓦)

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	規模・形状	建物方位	床面・柱穴・壁溝など	埋土状況	出土遺物・時期・備考
ＳＫＩ 1484Ｂ		第122次Ｃ区斜面上位JL～JIラインで確認、(旧)1484Ｃ→1484Ｂ→1484Ａ(新)、SD1484Ｄに切られる			北辺を除く３辺に壁溝が巡らされる、北端近くに長さ30㎝、幅15㎝の凝灰岩製の切石(Ｓ３)が置かれ、隣接して径35㎝程の焼土面(SN４)が形成される		須恵器坏・台付坏、土師器仏鉢、瓦質土器
ＳＫＩ 1484Ｃ			長さ4.05ｍ、幅1.85～2.2ｍ、深さ35㎝の長方形		北辺部にのみ壁溝が作られる		須恵器、土師器坏
ＳＫＩ 1490Ａ	44	第122次Ｃ区斜面上位JAラインで確認	南北5.9ｍ、東西6.4ｍの方形、深さ30～45㎝	南－北	北西・南西隅部には径30㎝程の柱穴が掘り込まれている	火山灰の分布は認められない	無釉の陶器椀(産地不詳)。SD1490Ｂ溝に切られる
ＳＫＩ 1491		第122次Ｃ区斜面上位JG・JHライン	一辺約5.5ｍの方形か、壁高は南側65㎝、北側10㎝	南－北	壁溝はなく柱穴配置も不明	地山粘土・炭化物が混じる暗褐色・黒褐色のシルト質土で人為的に埋められ、その窪地に火山灰が帯状に堆積	須恵器、土師器
ＳＫＩ 1631		第123次Ｄ区	南北の長さ3.1ｍの方形 深さは北側約30㎝、南側20㎝程	南－北	壁溝なし、柱穴不明	主たる堆積層は地山粘土・炭化物を斑状にやや多く含むシルト質土で、人為的に埋められている	須恵器、土師器
ＳＫＩ 1651	51	第123次Ｆ区、沢部最下の平坦面で確認	東西方向の長さ約５ｍ、深さは東壁側0.7ｍ、西壁側0.55ｍ	Ｎ20°Ｅ	床面は貼床で形成、焼土その他の施設は確認できなかった		須恵器台付坏、土師器台付坏、平瓦
ＳＫＩ 1361	31 47	第120・135次調査区斜面上位	東西の長さ2.9ｍ程の方形		確認面上に火山灰の堆積	遺構確認のみ	
ＳＫＩ 1876	31 47	第135次Ｋ区斜面上位	南北方向の長さ約4.0ｍの方形		貼床面の直上に炭化物を多量に含む黒色土の堆積が見られる	鍛冶に関係するような遺物(鍛造剥片等)は未確認	土師器坏・甕、須恵器坏、瓦、縄文土器、石器
ＳＫＩ 1889	31 47	第135次Ｋ区斜面上位	長軸４ｍの楕円形	北西－南東			土師器坏・甕、須恵器坏・蓋、瓦、縄文土器
ＳＫＩ 1863Ａ		第135次Ｊ区斜面中位平坦面部、Ａ～Ｄの４時期の重複、(旧)Ｄ→Ｃ→Ｂ→Ａ(新)	規模不明		床面上にSN1862が形成される	SK1914土取り穴上部に床面を構築、Ｄ～Ａは合計40㎝程床面を嵩上げしたことになる	土師器
ＳＫＩ 1863Ｂ		第135次Ｊ区斜面中位平坦面部	規模不明		床面上にSN1873が形成される		
ＳＫＩ 1863Ｃ		第135次Ｊ区斜面中位平坦面部	規模不明		床面上にSN1871・1872が形成される	SKI1863Ｂ上面に貼床	鍛造剥片
ＳＫＩ 1863Ｄ		第135次Ｊ区斜面中位平坦面部	規模不明		床面上にSS1855が形成される	SKI1863Ｃ上面に貼床	
ＳＫＩ 1896		第135次Ｊ区斜面中位緩斜面部、北側はSKI1892Ａ・Ｂと重複するが前後関係は不明	南北方向の長さ4.2ｍ以上、深さ約0.7ｍ		床面はほぼ平坦であり、南壁面下には幅0.25ｍの溝が東西に延びる	地山粘土や炭化物、土師器細片を含むシルト質土が主であり、斜面上位側から人為的に流入させたと推測	土師器坏類、須恵器坏・甕類、灰釉陶器椀・皿
ＳＫＩ 1892Ａ		第135次Ｊ区SKI1896の北側に位置			床面中央北側に焼土面、南側の床面は凹状に掘り込まれる		土師器・須恵器、灰釉陶器
ＳＫＩ 1892Ｂ		第135次Ｊ区SKI1896の北側に位置	南北の長さ約4.2ｍ		床面上南側に土坑を伴う、北端部の床面上に焼土面		土師器・須恵器、骨片
ＳＫＩ 1922Ａ	49	第137次Ｍ・Ｎ区で確認	東西5.61ｍ以上、南北3.50ｍ以上の隅丸方形か	南－北	最大24㎝厚の貼床	堆積土中に火山灰あり、竪穴の構築時期は火山灰降下前	土師器、床面上から少量の骨片
ＳＫＩ 1922Ｂ	49	第137次Ｍ・Ｎ区で確認、SKI1922Ａ堆積土を切り込んで構築	東西3.84ｍ、南北の現存する長さは2.83ｍ	南－北	幅12～35㎝、深さ40㎝の壁溝内に厚さ10㎝程度の板材の痕跡あり		
ＳＫＩ 1924Ａ	49 50	第137次Ｏ区整地層２の直下で確認、SKI1924Ｂ貼床を切土して構築	南側の壁の立ち上がりを確認したのみであり、長さは3.7ｍ程	南－北	柱穴・壁溝未確認	整地層２形成に伴い人為的に埋められている	土師器・須恵器
ＳＫＩ 1924Ｂ	49 50	第137次SKI1924Ｃ床面上に盛土・貼床して構築	一辺の長さは5.22ｍであるが推定板壁で囲まれた内部の規模は一辺4.85ｍ	南－北	壁溝あり、板材埋設部の幅は15～18㎝、盛土による貼床の厚さは40㎝前後	完形の坏が正位で貼床内から出土していることから、盛土造成時に意図的に埋めた可能性あり	土師器・須恵器
ＳＫＩ 1924Ｃ	49 50	第137次SKI1924Ｄ床面上に盛土・貼床して構築	一辺4.85ｍ	南－北	壁溝あり、貼床の厚さは20～38㎝		土師器・須恵器
ＳＫＩ 1924Ｄ	49 50	第137次SKI1924Ｅ床面上に貼床して構築	一辺4.85ｍ	南－北	壁溝なし、貼床の厚さは5㎝、北側の床面はＥ期床をそのまま使用		土師器・須恵器
ＳＫＩ 1924Ｅ	49 50	第137次SKI1924Ｆ床面上に盛土・貼床して構築	一辺5.23ｍ	南－北	壁溝なし、貼床の厚さは10～15㎝、床面上に焼土面あり	焼土面周辺から鍛造剥片は未確認	土師器・須恵器
ＳＫＩ 1924Ｆ	49 50	第137次SKI1924Ｅ床面除去後に確認	凹凸のある掘形面に盛土を行い床面を構成、一辺4.75ｍ	南－北	浅い壁溝あり、板壁をもつ竪穴	推定掘り込み面から掘形底面までは1.4ｍであることから、構築当初は土取り穴としても機能していたか	土師器・須恵器
ＳＫＩ 1933	49 50	第137次Ｏ・Ｐ・Ｒ区の整地層２直下で確認	東西4.02ｍ、南北3.24ｍの隅丸方形	南－北	床面には厚さ15㎝の貼床、焼土面あり	人為堆積、焼土周辺に鍛造剥片なし	漆紙、土師器・須恵器
ＳＫＩ 1935	49 50	第137次Ｏ・Ｐ・Ｒ区確認、SKI1933に切られる	東西5.44ｍ以上、南北3.45ｍ以上	南－北	床面は15～25㎝の貼床あり	人為堆積層	
ＳＫＩ 1938		第137次Ｏ区整地層２下で確認	残存する規模は、南北2.5ｍ、東西1.44ｍ	南－北		整地層２形成地に埋められたと推定	

掘立柱建物跡

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	建物構造・規模	建物方位	柱掘形規模・形状・深さ・柱痕規模等	埋土状況	出土遺物・時期・備考
ＳＢ1219Ａ	31 32	第115次調査区北西部、２時期の重複、(旧)SB1219Ａ→1219Ｂ(新)	桁行４間×梁行２間の南北棟。東側桁行総長9.4m(北から2.4＋2.3＋2.4＋2.3)、西側桁行総長9.5m(北から2.3＋2.3＋2.3＋2.6)、北側梁行総長5.2m(東から2.5＋2.7)、南側梁行総長5.0m		柱穴掘形は一辺70～90cmの隅丸方形、Ｐ12のみ径70cm程の円形、各柱穴掘形の深さは26～43cm	地山土に近い黄褐色粘土を主とするものや、地山粘土の混入の少ない黒褐色シルト質土が充填、粘質土とシルト質土が互層となるものはＰ６のみ	土師器坏
ＳＢ1219Ｂ	31 32	第115次調査区北西部、２時期の重複、(旧)SB1219Ａ→1219Ｂ(新)	桁行４間×梁行２間の南北棟。東側桁行総長9.1m(北から2.25＋2.3＋2.3＋2.25)、西側桁行総長9.5m(北から2.55＋2.05＋2.35＋2.55)、北側梁行総長5.0m(東から2.4＋2.6)、南側梁行総長4.9m(東から2.65＋2.25)		柱穴掘形は一辺・長軸65～70cm、形状は隅丸方形から楕円・不整円、Ｐ12のみ径70cm程の円形、各柱穴掘形の深さは26～43cm	地山土に近い黄褐色粘土を主とするものや、地山粘土の混入の少ない黒褐色シルト質土が充填	土師器坏
ＳＢ1222Ａ	31 32	第115・118次調査区西部で確認、２時期の重複、(旧)SB1222Ａ→1222Ｂ(新)	桁行３間×梁行２間の南北棟		柱穴掘形は一辺90～110cmの方形を呈する	地山粘土を主とし、黒褐色シルト質土を混入	須恵器坏、土師器坏・甕
ＳＢ1222Ｂ	31 32	第115・118次調査区西部で確認、２時期の重複、(旧)SB1222Ａ→1222Ｂ(新)	桁行３間×梁行２間の南北棟。東側桁行柱間は、北から2.2m＋2.8m＋2.4m、西側は、北から2.6m＋2.5m＋2.3m、梁行は、南北とも東から2.6m＋2.7m(柱間総長は、桁行7.4m、梁行5.3m)		柱穴掘形は一辺65～80cm、方形を基調とするが不整形に近い、径20～25cm柱痕あり	暗褐色シルト質土を主とし、地山粘土小ブロックや炭化物が混じる	須恵器坏、土師器坏・甕
ＳＢ1572	34	第122次Ｂ区斜面下位、KDライン以北	柱穴掘形１基のみの確認		一辺0.9～1.2mの隅丸方形、柱痕跡は径30～45cm		
ＳＢ1543	37 39	第122次Ｂ区斜面中位JT～JQライン	柱穴掘形２基	東－西	Ｐ１は長さ90cm、推定幅70cmの楕円形、柱痕の径約30cm、Ｐ２は長さ70cm、柱痕の径約30cm	火山灰降下前の構築	
ＳＢ1525Ｂ	37～ 39	第122次Ｂ・Ｃ区斜面中位で確認、Ｐ８はSKI1517・1537Ｄを切る	梁行２間×桁行５間の東西棟。桁行総長16.5m、柱間寸法3.3m(11尺)等間、梁行総長6.6m、柱間3.3m(11尺)等間	南側柱列でＥ２°Ｓ	柱穴掘形は一辺1.2～1.4mの隅丸方形・不整方形・楕円形、深さ0.6～1.1m	暗褐色シルト質土と地山粘土を互層に突き固めた版築状、底面には拳大～人頭大の礫を礎板石として埋めている	
ＳＢ1525Ａ	37～ 39	(旧)SB1525Ｂ→SB1535Ａ(新)	平面規模はＢ建物と同じ		柱穴掘形は一辺70～90cm、柱痕跡は東側梁行(Ｐ１～３)で径30cm程	地山粘土を混入させたシルト質土が充填、底面にはSB1525Ｂより多くの拳大～人頭大程の礫が礎板石として埋められている	
ＳＢ1553	45	第122次Ｃ区斜面上位JL～JIラインで確認、西約３mにSK1621	柱穴掘形１基のみ		一辺1.2m程の方形、深さ0.9m、柱痕跡は径約30cm	一部に黒褐色シルト質土と粘質土を互層に積む	
ＳＢ1866Ａ	31 47	第135次Ｊ・Ｋ区斜面上位、JG～JIラインで確認、新旧２時期の重複、本建物跡Ｐ９とSB1875Ｐ１は重複するが、両者を切り込むSKP1856の構築により新旧関係は不明	桁行３間×梁行２間の東西棟。柱間総長は桁行6.3m、梁行5.2m	東側柱列でＮ４°Ｅ	柱穴掘形は、一辺105～115cm程の隅丸方形・不整方形、Ｐ３の掘形一辺約70cm、深さ96cm、Ｐ４の深さ88cm、掘形底面部で円形の柱痕跡が検出、径は28cm	版築状の明瞭な堆積状況は観察されず、堆積土の締まりもやや弱い	(旧)1866Ｂ→1866Ａ(新)
ＳＢ1866Ｂ	31 47	(旧)1866Ｂ→1866Ａ(新)	桁行３間×梁行２間の東西棟。柱間総長は桁行6.3m、梁行5.2m	東側柱列でＮ４°Ｅ	柱穴掘形は、一辺105～115cm程の隅丸方形・不整方形、Ｐ３の掘形一辺105cm、深さ80cm、Ｐ４の深さ65cm	黒褐色のシルト質土と黄褐色粘土が互層をなして版築様に敲き締められている	
ＳＢ1875	31 47	第135次Ｊ区斜面上位、JF～JIラインで確認	柱間総長7.2m	東側柱列でＮ６°Ｅ	柱穴掘形はＰ１が一辺100～105cm程の略円形、Ｐ４が長軸94cm、短軸78cmの楕円形、深さは72cm、掘形中央に径24～28cmの柱痕跡	黒褐色のシルト質土と黄褐色粘土が斑状に入る	

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	建物構造・規模	柱掘形規模・形状・深さ・柱痕規模等	埋土状況	出土遺物・時期・備考
ＳＫＰ1888Ａ	47	第135次Ｊ区斜面上位JJラインで確認 SKI1876を切り込んで構築、新旧２時期、(旧)Ａ→Ｂ(新)	柱穴掘形１基のみ	一辺95㎝程の隅丸方形	黒褐色シルト質土と地山粘土が版築様に入れられている	
ＳＫＰ1888Ｂ	47	第135次Ｋ区斜面上位JJラインで確認	柱穴掘形１基のみ	Ａ期掘形内に作られ一辺75㎝と小さくなる、柱痕は径25㎝	シルト質土が主となり、粘質土は入り込んでいない	
ＳＫＰ1912	48	第135次調査区斜面中位寄り、JLラインで確認	柱穴掘形１基のみ	一辺70㎝程の整った隅丸方形、深さ68㎝	人為的に埋められている	鍛冶関連の整地層形成前の建物柱穴である
ＳＫＰ1911	48	第135次SKP1912の南約30㎝に隣接、SK1870に切られる	柱穴掘形１基のみ	一辺60～63㎝の不整方形、深さ約40㎝		
ＳＫＰ1899	47	第135次調査区斜面上位	柱穴掘形１基のみ	径56㎝、深さ74㎝	黒褐色のシルト質土に地山粘土が混入、柱を抜き取った後に人為的に埋め戻しをおこなっている	
ＳＫＰ1900	47		柱穴掘形１基のみ	径48㎝、深さ82㎝		
ＳＫＰ1904	47		柱穴掘形１基のみ	径50㎝、深さ70㎝		
ＳＫＰ1909	47		柱穴掘形１基のみ	径50㎝、深さ65㎝		
ＳＫＰ1910	47		柱穴掘形１基のみ	径40㎝、深さ57㎝		
ＳＫＰ1865	47	第135次Ｊ区斜面上位JJラインで確認	柱穴掘形１基のみ、２時期あり	一辺が100㎝前後の隅丸方形あるいは楕円状	新旧ともシルト質土を主とする	
ＳＫＰ1877	47	第135次Ｋ区SB1866Ｐ１を切り込んで構築	柱穴掘形１基のみ	一辺100㎝の整った隅丸方形		
ＳＫＰ1881	47	第135次Ｊ区斜面上位JJラインで確認	柱穴掘形１基のみ、２時期あり	一辺が100㎝前後の隅丸方形あるいは楕円状	新旧ともシルト質土を主とする	
ＳＫＰ1856	47	第135次Ｊ区SB1866Ｐ９及びSB1875Ｐ１を切り込んで構築	柱穴掘形１基のみ	一辺が約75㎝の隅丸方形		
ＳＫＰ1857	47	第135次Ｊ区斜面上位JJラインで確認	柱穴掘形１基のみ	一辺が100㎝前後の隅丸方形あるいは楕円状		
ＳＫＰ1903	47	第135次Ｊ区斜面上位	柱穴掘形１基のみ	一辺55㎝、深さ55㎝		掘形の東側は調査区外
ＳＫＰ1907	47	第135次Ｊ区斜面上位	柱穴掘形１基のみ	一辺60㎝、深さ20㎝		
ＳＫＰ1895		第135次Ｊ区斜面下位で確認	柱穴掘形１基のみ	一辺42㎝、深さ32㎝		掘形の東側は調査区外
ＳＫＰ1894		第135次Ｊ区斜面中位緩斜面部、SKI1896の北側に位置	柱穴掘形１基のみ	径約60㎝、深さ82㎝		
ＳＢ1941		第137次Ｒ区整地層３面から掘り込まれる	柱穴掘形１基のみ、２時期あり	一辺92㎝、深さ44㎝、柱痕跡は旧期33㎝、新期20㎝	掘形埋土は版築状を呈する、掘形は新旧共有か	SKI1935、SK1945を切り、SK1953Ａに切られる
ＳＫＰ1932Ａ		第137次Ｒ区で確認、SK20Ｂを切る		径25㎝、深さ12㎝		
ＳＫＰ1953Ｂ		第137次Ｒ区北側土層壁面で確認		径22㎝、深さ35㎝		SK1953Ａに切られる
ＳＫＰ1929		第137次Ｏ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径32㎝、深さ26㎝		SKI1938の上位に位置
ＳＫＰ1930		第137次Ｏ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径14㎝、深さ18㎝		SKI1938の上位に位置
ＳＫＰ1942		第137次Ｐ区で確認		径28㎝、深さ29㎝		SKI1933を切る
ＳＫＰ1957		第137次Ｍ区で確認	SKI1922Ｂと同一面からの掘り込み	径19㎝、深さ31㎝		
ＳＫＰ1958		第137次Ｍ区で確認	SKI1922Ａ１層上面からの掘り込み	径22㎝、深さ22㎝		
ＳＫＰ1959		第137次Ｍ区で確認	SKI1922Ａ１層上面からの掘り込み	径26㎝、深さ23㎝		
ＳＫＰ1960		第137次Ｍ区で確認	第Ⅲa層直下からの掘り込み	径24㎝、深さ23㎝		
ＳＫＰ1964		第137次Ｏ区で確認	整地層１から掘り込まれる	径22㎝、深さ10㎝		
ＳＫＰ1965	50	第137次Ｏ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径17㎝、深さ36㎝		SKI1935を切る

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	掘り込み面	柱穴規模・深さ	埋土状況	出土遺物・時期・備考
ＳＫＰ1966		第137次Ｏ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径12cm、深さ12cm		SKI1933の上位に位置
ＳＫＰ1967		第137次Ｏ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径23cm、深さ18cm		SKI1933の上位に位置
ＳＫＰ1968		第137次Ｏ区で確認	整地層１から掘り込まれる	径15cm、深さ31cm		SK1939の上位に位置
ＳＫＰ1969		第137次Ｑ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径46cm、深さ19cm		
ＳＫＰ1970		第137次Ｑ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径17cm、深さ32cm		
ＳＫＰ1971		第137次Ｑ区で確認	整地層１から掘り込まれる	径17cm、深さ59cm		
ＳＫＰ1972		第137次Ｑ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径17cm、深さ36cm		
ＳＫＰ1973		第137次Ｑ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径34cm、深さ62cm		
ＳＫＰ1974		第137次Ｑ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径17cm、深さ18cm		
ＳＫＰ1975		第137次Ｑ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径21cm、深さ29cm		
ＳＫＰ1976		第137次Ｑ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径13cm、深さ7cm		
ＳＫＰ1977		第137次Ｑ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径15cm、深さ22cm		
ＳＫＰ1978		第137次Ｑ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径23cm、深さ23cm		SK1946を切る
ＳＫＰ1979		第137次Ｑ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径12cm、深さ19cm		
ＳＫＰ1980		第137次Ｑ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径15cm、深さ11cm		
ＳＫＰ1981		第137次Ｒ区で確認	整地層１から掘り込まれる	径23cm、深さ31cm		SN1928を切る
ＳＫＰ1982		第137次Ｒ区で確認	整地層１から掘り込まれる	径13cm、深さ33cm		
ＳＫＰ1983		第137次Ｒ区で確認	整地層１から掘り込まれる	径20cm、深さ18cm		
ＳＫＰ1984		第137次Ｐ区で確認	整地層１から掘り込まれる	径17cm、深さ27cm		SKI1933を切る
ＳＫＰ1985		第137次Ｐ区で確認		径23cm、深さ21cm		SK1949を切る
ＳＫＰ1986		第137次Ｓ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径30cm、深さ21cm		
ＳＫＰ1987		第137次M区で確認	SKI1922Ａ１層上面からの掘り込み	径12cm、深さ23cm		
ＳＫＰ1988	50	第137次Ｏ区で確認	整地層２から掘り込まれる	径31cm、深さ36cm		SKI1935の上位に位置
ＳＫＰ1989		第137次Ｒ区で確認		径38cm、深さ21cm		SKI1935を切る

土坑

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	形状・規模	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＫ1220	31	第115次調査区北部中央、JB58で確認	長さ204㎝、幅190㎝の隅丸方形、深さ28㎝	暗褐色土単層	土師器、風字硯(須恵質)	
ＳＫ1221		第115次調査区北東部、IT55で確認	径50㎝の円形、深さ25㎝		土師器坏類・甕	
ＳＫ1224		第115次調査区北西端部、JB63で確認、SK1225を切り、SB1222Ｐ４に切り込まれる	長さ84㎝、幅78㎝の略円形、深さ30㎝	漆黒色土単層	なし	
ＳＫ1234		第115次調査区北部中央、JB58で確認	長さ82㎝、幅70㎝の略円形、深さ36㎝	人為堆積か	なし	
ＳＫ1237		第115次調査区北西端部、JB63で確認	長さ86㎝、幅70㎝の楕円形、深さ42㎝	ほぼ中央に長さ18㎝、幅８㎝の板状の礫が直立	なし	
ＳＫ1238		第115次調査区北西端部、JA64で確認、土坑北部で小柱穴に切られる	長さ96㎝、幅70㎝の楕円形、深さ28㎝	人為堆積か	なし	
ＳＫ1239		第115次調査区中央部、IR60で確認、SA1226に切られる	長さ120㎝、幅62㎝の楕円形、深さ10㎝	にぶい黄褐色土	なし	
ＳＫ1240		第115次調査区東部中央、IP55で確認	長さ200㎝、幅160㎝の不整楕円形、深さ14㎝	暗褐色土とにぶい黄褐色土の２層	なし	
ＳＫ1241		第115次調査区東部中央、IO54で確認	長さ76㎝、幅64㎝の不整円形、深さ12㎝	暗褐色土単層	なし	
ＳＫ1242		第115次調査区北東端部、JB55で確認、小柱穴に切り込まれる	長さ76㎝、幅60㎝の略円形、深さ38㎝	４層に分けられ、人為堆積	なし	
ＳＫ1243Ａ		第115次調査区北東端部、JB56で確認 ほぼ同一箇所でＡ・Ｂ重複、(旧)Ａ→Ｂ(新)	長さ88㎝、幅66㎝の隅丸長方形、深さ50㎝	４層で地山粘土とシルト質土が互層に観察、人為堆積	なし	
ＳＫ1243Ｂ			径60㎝程の円形、深さ23㎝	にぶい黄褐色土単層		
ＳＫ1244	31 33	第115次調査区中央北部、JA58で確認、SI1236に切られる	東西1.3ｍ、南北は残存部分で1.2ｍ、深さ0.14ｍ	黒褐色砂質シルト土の単層	土師器坏・甕、須恵器長頸壺	
ＳＫ1245		第115次調査区中央南部、IO59で確認	長さ180㎝、幅84㎝の不整楕円形、深さ15～30㎝	３層に分けられる	なし	
ＳＫ1252		第115次調査区北部中央、JB59で確認	長さ64㎝、幅43㎝の楕円形、深さ17㎝	にぶい黄褐色土単層	なし	
ＳＫ1253		第115次調査区北西端部、JA64で確認、SK1254に切られる	長さ62㎝、幅50㎝程の楕円形か、深さ10㎝	にぶい黄褐色土単層	なし	
ＳＫ1254		第115次調査区北西端部、JA63・64で確認、SK1253東端を切る	長さ128㎝、幅80㎝の楕円形、深さ14㎝	暗褐色土単層	なし	
ＳＫ1256	33	第115次調査区中央北部、IS59で確認	長さ106㎝、幅72㎝の楕円形、深さ38㎝	３層に分けられる	なし	
ＳＫ1257		第115次調査区北東部、IT57で確認	長さ46㎝、幅40㎝の不整方形、深さ40㎝	炭化物を多く含む層中に遺物あり	土師器坏６個体	炭化物は上層のみで人為堆積か
ＳＫ1258	33	第115次調査区北東部、IS56で確認	長さ74㎝、幅68㎝の円・隅丸方形、深さ26㎝	にぶい黄褐色土単層	なし	
ＳＫ1314	31	第118次調査区北西部、JC63で確認	長さ115㎝、幅60㎝の楕円形、深さ24～30㎝	７層に分けられ、２層は地山粘土を人為的に入れたもの	なし	
ＳＫ1363		第120次Ａ４区	長さ60㎝、幅50㎝の楕円形	プラン確認のみ		
ＳＫ1364		第120次Ａ４区	長さ75㎝、幅30㎝の楕円形	プラン確認のみ		
ＳＫ1365		第120次Ａ４区	長さ55㎝、幅35㎝の楕円形	プラン確認のみ		
ＳＫ1366		第120次Ａ４区	長さ110㎝、幅40㎝の楕円形	プラン確認のみ		
ＳＫ1367		第120次Ａ４区	長さ80㎝、幅70㎝の円形か	プラン確認のみ		
ＳＫ1368		第120次Ａ１区	径50㎝程の略円形	プラン確認のみ		
ＳＫ1370		第120次Ａ１区	径55㎝程の略円形	プラン確認のみ		
ＳＫ1371		第120次Ａ１区	長さ125㎝、幅75㎝の隅丸長方形	プラン確認のみ		柱穴掘形か
ＳＫ1372		第120次Ａ１区、SK1373・1374を切る	長さ130㎝、幅105㎝の隅丸長方形	プラン確認のみ		柱穴掘形か
ＳＫ1373		第120次Ａ１区、SK1372・1374に切られる	一辺1.4ｍの隅丸方形か	プラン確認のみ		柱穴掘形か
ＳＫ1374		第120次Ａ１区、SK1373を切りSK1372に切られる	長さ105㎝、幅75㎝の楕円形	プラン確認のみ		
ＳＫ1375		第120次Ａ１区	径70㎝の略円形	プラン確認のみ		
ＳＫ1376		第120次Ａ１区	長さ110㎝、幅90㎝の隅丸方形か	プラン確認のみ		
ＳＫ1377		第120次Ａ１区、SK1378を切る	一辺85㎝の隅丸方形か	プラン確認のみ		

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	形状・規模	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＫ1378		第120次Ａ１区、SK1377に切られる	一辺70cmの隅丸方形か	プラン確認のみ		
ＳＫ1380		第120次Ａ１区、SK1381(縄文)を切る	長さ145cm、幅105cmの楕円形	プラン確認のみ		
ＳＫ1382		第120次Ａ１区	長さ135cm、幅100cmの隅丸方形か	プラン確認のみ		
ＳＫ1383		第120次Ａ１区	一辺90cmの隅丸方形か	プラン確認のみ		
ＳＫ1570	34	第122次Ｂ区斜面下位、KDライン以北	長さ1.2m	遺構の東側壁面のみの調査		SB1572を構成する柱穴掘形の可能性あり
ＳＫ1559 Ａ	34	第122次Ｂ区斜面下位、KDライン以北	一辺2.5m超、深さ1.1.m			土取り穴か
ＳＫ1559 Ｂ	34	第122次Ｂ区斜面下位、KDライン以北	形状不明、深さ1.2m程			土取り穴か
ＳＫ1571 Ａ	34	第122次Ｂ区斜面下位、KDライン以北	形状不明、一辺２ｍ以上、深さ0.7m	SK1571Ｂ・Ｃにより切り込まれる		土取り穴か
ＳＫ1571 Ｂ	34	第122次Ｂ区斜面下位、KDライン以北	推定径70cm、深さ30cm			土取り穴か
ＳＫ1571 Ｃ	34		径80～90cm、深さ25cm			土取り穴か
ＳＫ1574	34		径1.9m程の略円形か、深さ0.8m	堆積土中位に火山灰層	土師器坏１個体(完形)	正立した土師器坏が火山灰層直上で検出、降灰直後意図的に置かれたと判断
ＳＫ1575	34	第122次Ｂ区斜面下位、KDライン以北	一辺約２ｍ、深さ0.7m			土取り穴か
ＳＫ1576	34		深さ0.6～0.8m			土取り穴か
ＳＫ1577	34		深さ0.3m	堆積土中位に火山灰の堆積		土取り穴か
ＳＫ1578 Ａ	34	第122次Ｂ区斜面下位、KDライン以北(区北端部)				土取り穴か
ＳＫ1578 Ｂ	34					土取り穴か
ＳＫ1579	34					土取り穴か
ＳＫ1509	35	第122次Ｂ区斜面中位、KD～JTライン	長さ約1.2mの略円形、深さ0.25m			SKI1560Ｂに伴うものか
ＳＫ1568	35	第122次Ｂ区斜面中位、KD～JTライン	長さ1.1m以上の不整円形、深さ0.6m			SKI1567Ａの南に隣接
ＳＫ1618 Ｂ	37 39	第122次Ｂ区斜面中位JT～JQライン	長さ65cm、幅45cm以上の隅丸方形、深さ15cm	SKI1551Ａ整地面を掘り込み面とする		火山灰降下前の構築、第37図19層
ＳＫ1521	37 39	第122次Ｂ区斜面中位JT～JQライン	楕円形、南北の長さ2.1m、幅1.5m以上、深さ0.25m		須恵器坏、土師器坏・皿・台付皿・甑、風字硯、緑釉陶器椀・皿４点	火山灰降下後の構築
ＳＫ1616	37 39	第122次Ｂ区斜面中位JT～JQライン	長さ110cm、深さ20cm	第37図12層		SD1615に切られる
ＳＫ1513	38	第122次Ｂ区斜面中位JQ～JNラインで確認	長さ40cm、幅30cmの略円形、深さ25cm	炭化物を比較的多く含む	須恵器	SKI1537Ａ床面直上に掘り込まれる
ＳＫ1545	38 39	第122次Ｂ区斜面中位JQ～JNラインで確認	長さ1.55m、深さ0.25m			SKI1518Ａに伴う
ＳＫ1552 Ａ	38	第122次Ｂ区斜面中位JQ～JNラインで確認	長さ40cm、深さ20cm	第38図24・25層	なし	
ＳＫ1518 Ｄ	38 39	第122次Ｂ区斜面中位JQ～JNライン	長さ50cm、深さ33cm	第38図22層	なし	
ＳＫ1540	38 39		長さ75cm、幅60cmの楕円形	確認面上に炭化物層あり		SKI1518Ａに切られる
ＳＫ1613	38		長さ125cm	複数の土坑の集合体か		SKI1537Ａを切る
ＳＫ1600 Ａ	43	第122次Ｂ区斜面上位JN～JJライン	長さ1.3m			
ＳＫ1533	43	第122次Ｂ区斜面上位JN～JJライン	径50cmの円形、深さ45cm		なし	SD1530を切り込む
ＳＫ1492 Ａ		第122次Ｃ区斜面下位、KFライン以北	南北の長さ６ｍ以上、深さ１～1.8m	主に粘質系の土で人為的に埋められている	なし	土取り穴か
ＳＫ1492 Ｂ		第122次Ｃ区斜面下位、KFライン以北	南北の長さ５ｍ以上、深さ0.9m	炭化物・地山粘土・遺物を多く含むシルト質土で埋められている	須恵器坏、風字硯、青磁皿	土取り穴か、SK1492Ａを切り込んで構築
ＳＫ1492 Ｃ		第122次Ｃ区斜面下位、KFライン以北	SK1492Ｄに切られ不明確、深さ0.5m程	人為的に埋め立てられる		土取り穴か、SK1492Ｂの上位に構築
ＳＫ1492 Ｄ		第122次Ｃ区斜面下位、KFライン以北	南北の長さ3.5m以上、深さ0.7m	炭化物・遺物破片を多く含む黒褐色シルト質土で一気に埋められている		土取り穴か、SK1492Ｂ・Ｃを切り込んで構築、Ａ～Ｄとも火山灰降下前

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	形状・規模	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＫ1582 A		第122次Ｃ区斜面下位KF～KCライン	長さ３ｍ超、深さ0.4～0.7ｍ	４基が共に埋められている	須恵器、土師器、緑釉陶器	土取り穴か
ＳＫ1582 B					なし	土取り穴か
ＳＫ1582 C					なし	土取り穴か
ＳＫ1583			長さ３ｍ超		須恵器、土師器、緑釉陶器	土取り穴か
ＳＫ1502		第122次Ｃ区斜面中位KC～JTライン	東西方向の長さ2.1ｍ			
ＳＫ1505			南北の長さ95cm、幅70cm以上	地山粘土を含むシルト質土で、人為的に埋められている		
ＳＫ1506		第122次Ｃ区斜面中位KC～JTライン				SK1505の北約３ｍに位置
ＳＫ1584		第122次Ｃ区斜面中位KC～JTライン	径50cm程の不整円形、深さ45cm			SK1505の東約３ｍに位置
ＳＫ1524 A	39	第122次Ｃ区斜面中位JQ～JOライン	径約60cmの円形、深さ70cm	地山粘土とシルト質土が混在した単層であり、人為的な埋土		
ＳＫ1524 B	39	第122次Ｃ区斜面中位JQ～JOライン	径80cmの円形、深さ95cm、円筒状			SK1524Ａの北１ｍに位置
ＳＫ1565	39 40	第122次Ｃ区斜面中位JQ～JOライン	長さ100cm、幅75cmの楕円形		須恵器甕(胎土は土師器)	SB1525Ｐ２を切る
ＳＫ1586 A	39	第122次Ｃ区斜面中位JQ～JOライン	一辺60cm、深さ30cm			
ＳＫ1586 B	39		長さ110cm、幅80cmの楕円形、深さ45cm			
ＳＫ1563	41	第122次Ｃ区斜面中位JO～JLラインで確認、(旧)1563→1564→1630Ａ・Ｂ→火山灰降下→1591→1554Ｂ(新)、1554Ｂは、ＳＫＩ1556Ｂあるいは1556Ｃ段階の鍛冶炉(第41図１層)下部施設の可能性あり	長さ60cm、幅50cm以上			
ＳＫ1564	41		長さ85cm、幅80cmの隅丸方形か			
ＳＫ1630 A	41		長さ140cm、深さ22cm	第41図66層	土師器坏	
ＳＫ1630 B	41		長さ70cm、深さ45cm	第41図57層		
ＳＫ1591	39 41		長さ70cm、深さ85cm	第41図77～79層		
ＳＫ1554 B	41		一辺75cm、深さ105cm	第41図２～６層		
ＳＫ1592 A	39 41	第122次Ｃ区斜面中位JO～JLライン	一辺75cm			SK1591の東に隣接
ＳＫ1592 B	41		一辺75cm			
ＳＫ1593	41		一辺75cmの隅丸方形			
ＳＫ1597	45	第122次Ｃ区斜面上位JL～JIライン	長さ1.6ｍ、幅1.45ｍの不整円形、深さ25cm			
ＳＫ1529	45	第122次Ｃ区斜面上位JL～JIライン	規模・形状は不明、深さ15cm		土師器坏	SK1597に切られる
ＳＫ1501	44	第122次Ｃ区斜面上位JCライン	径約90cmの略円形、深さ15cm			SD1493の北側
ＳＫ1621	45	第122次Ｃ区斜面上位JL～JIライン	一辺85cm			部分的な調査で規模・形状不明
ＳＫ1622	45	第122次Ｃ区斜面上位JL～JIライン	一辺125cm			部分的な調査で規模・形状不明
ＳＫ1623	45		一辺2.05ｍ			部分的な調査で規模・形状不明
ＳＫ1636		第123次Ｄ区	長さ95cm、幅70cm程の楕円形、深さ25cm		なし	SKI1631の北側に近接
ＳＫ1634		第123次Ｄ区	長さ80cm、幅75cm以上、深さ20～30cm		なし	SK1636の西約２ｍに位置
ＳＫ1635		第123次Ｄ区	長さ1.6ｍ、幅0.6ｍ以上、深さ25cm前後			SK1634の北側に隣接
ＳＫ1637		第123次Ｄ区南東端で検出	一辺60cm、深さ30cm、規模・形状不明			
ＳＫ1646		第123次Ｅ区	一辺２ｍ程、深さ30cm前後			
ＳＫ1647		第123次Ｅ区	長さ1.3ｍ、深さ0.3ｍ		土師器台付坏	SK1646の北側に隣接
ＳＫ1649	51	第123次Ｆ区	一辺２ｍ程の不整形、深さ0.3～0.55ｍ	地山粘土、礫を多く含む粘質土で人為的に埋められている	須恵器坏	
ＳＫ1650	51		径約1.2ｍの円形、深さ0.75ｍ			
ＳＫ1654		第123次Ｇ区	径65cm程の円形		なし	プラン確認のみ

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	形状・規模	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＫ1673		第126次Ｉ区	東西方向の長さ60㎝、深さ20㎝		なし	古代の整地層を掘り込み面とする
ＳＫ1898	47	第135次Ｊ区斜面上位JHライン	東西方向の長さ1.8ｍ、幅1.3ｍの隅丸長方形			SB1875Ｐ２を切り込んで構築
ＳＫ1864	31 47 48	第135次Ｊ区斜面中位南端、上位緩斜面部との境界下JKラインで確認	南北方向の長さ2.8ｍの円形、深さ0.9ｍ、底面直上からほぼ完形の土師器坏が正位(一部は倒位)で31個体出土、意図的な埋納と判断される	堆積の初期段階では斜面上位側から地山粘土を主とする土が人為的に入れられ、次いで土器片や炭化物を多く含むシルト質土が流入する	土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓・椀形滓、羽口、縄文土器、石器	出土遺物を重量比でみると、全体の97％が土師器で占められる。また土師器のうち95％は坏類である。
ＳＫ1870	48	第135次Ｊ区SK1864の北東側に隣接	円形			
ＳＫ1893Ａ		第135次Ｊ区調査区斜面中位緩斜面部、SKI1892Ａ埋没後の構築			緑釉陶器片２点	
ＳＫ1893Ｂ						
ＳＫ1858		第135次Ｊ区斜面下位、KEライン上で確認	南北の長さ1.7ｍ、東西の長さ1.2ｍ、深さ0.38ｍ	確認面上で火山灰小ブロックが確認	土師器、緑釉陶器	
ＳＫ1861		第135次SK1858の東に近接	径0.5ｍの円形			
ＳＫ1859		第135次SK1861の北３ｍで確認、SD1860を切る	南北方向の長さ1.3ｍ、深さ0.35ｍ			
ＳＫ1914	48	第135次Ｊ区調査区斜面中位平坦面、JM～JSライン	部分的な調査であり、形状・規模不明、現地表面から底面までの深さは約１ｍ	第48図73層	須恵器坏(正立して出土)	鍛冶工房を造るにあたっての粘土採掘用の土取り穴か
ＳＫ1885	47	第135次Ｊ区斜面上位	一辺65㎝、深さ33㎝			
ＳＫ1897	47	第135次Ｊ区斜面上位	一辺55㎝、深さ45㎝			
ＳＫ1902	47	第135次Ｊ区斜面上位	長さ52㎝、幅47㎝、深さ28㎝			
ＳＫ1905	47	第135次Ｊ区斜面上位	長さ38㎝、幅31㎝の楕円形	プラン確認のみ		
ＳＫ1887	47	第135次Ｋ区斜面上位	長さ170㎝、幅110㎝以上、深さ22㎝			複数の土坑の集合体か
ＳＫ1932Ｂ		第137次Ｒ区SKI1935貼床面上で確認	長さ64㎝、東西48㎝の隅丸方形、深さ10㎝			SKP1932Ａに切られる
ＳＫ1943Ａ		第137次Ｑ区整地層２の下面で確認、Ｂ・Ｃと重複するが新旧不明	長さ1.85ｍの楕円状	形状・土層から土取り穴か、人為的に埋め戻される		SKI1935を切り、SK1946に切られる
ＳＫ1943Ｂ		第137次Ｑ区整地層２の下面で確認	長さ1.32ｍの楕円状	形状・土層から土取り穴か、人為的に埋め戻される		Ａ～ＣともSKI1938構築に伴い埋め戻されたと推定
ＳＫ1943Ｃ		第137次Ｑ区整地層２の下面で確認	長さ34㎝の略円形	形状・土層から土取り穴か、人為的に埋め戻される		
ＳＫ1934		第137次Ｏ区整地層２を掘り込み面とする	長さ53㎝、深さ31㎝			SKI1938を切る
ＳＫ1939		第137次Ｏ区整地層２を掘り込み面とする	長さ82㎝、幅26㎝、深さ37㎝			SKI1924Ｄ・1933を切る
ＳＫ1944		第137次Ｒ区で確認	形状不明、現況での規模は南北46㎝、東西40㎝、深さ38㎝	人為堆積層		SK1945を切り、SK1952に切られる
ＳＫ1945		第137次Ｒ区で確認	形状不明、現況での規模は、南北1.9ｍ、東西0.59ｍ、深さ0.39ｍ	人為堆積、SKI1935構築に伴い埋め戻されたと推定		SKI1935、SB1941、SK1944・1952に切られる
ＳＫ1946		第137次Ｑ区整地層２を掘り込み面とする	東西70㎝、南北28㎝以上の楕円形、深さ31㎝			SKI1935、SK1943を切り、SKP1978に切られる
ＳＫ1947		第137次Ｒ区整地層１下で確認	東西54㎝、深さ27㎝			SK1948を切る
ＳＫ1948		第137次Ｒ区整地層１下で確認	東西62㎝、深さ10㎝			SK1947に切られる
ＳＫ1949		第137次Ｐ区地山直上で確認	不整形で規模不明	人為堆積層		SKP1985に切られる
ＳＫ1952		第137次Ｒ区整地層２を掘り込み面とする	南北102㎝、深さ26㎝	人為堆積層		SB1941、SK1944を切る
ＳＫ1953Ａ		第137次Ｒ区整地層６を掘り込み面とする	東西98㎝、深さ18㎝	上位に整地層５が形成される		SKP1953Ｂを切る
ＳＫ1954		第137次Ｐ区整地層２下で確認	東西108㎝、深さ23㎝			SKI1933・1935を切る

溝跡・柱列

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	規模(幅・長さ・深さ)	方向	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＡ 1226	31	第115次調査区中央からやや西寄りで確認、東のSD1231・1250と西のSB1219・1222を遮断するかのような位置関係	幅20㎝前後、深さ10～25㎝、溝内に小柱穴が掘り込まれている。長さはSA1226が30.7m、SA1247が3.3m	南北方向に延びる板塀跡		なし	溝の途中で3.1ｍ程途切れる箇所あり、出入り口か
ＳＡ 1247	31			南北方向に延びる板塀跡		なし	
ＳＡ 1227	31	第115・118・120次で確認、SA1313と交差するが新旧不明	幅25cm前後、総長40.7m	南北方向に延びる板塀跡			溝の途中で3.2ｍ程途切れる箇所あり、出入り口か
ＳＡ 1228	31 33	第115次調査区中央から北寄りで確認、SA1226・1227、SI 1236に切られる	幅20㎝前後、長さ21.3m、深さ8～15㎝	東西方向に延びる板塀跡		なし	
ＳＡ 1248		第115次調査区中央から南寄りで確認	幅20㎝前後、深さ10㎝前後、長さ18m	東西方向に延びる板塀跡		なし	本溝も2.5ｍ程途切れる箇所あり
ＳＡ 1313	31	第118次調査区中央から東側にかけて確認	幅20～30㎝、長さ13.7m、深さ８～15㎝、溝内の柱穴には長さ22㎝、幅６～８㎝の板状痕跡あり	東西方向に延びる、板材長軸は、溝軸線に対して直交する		なし	位置的にはSB1222との関連が想起される
ＳＡ 1316	31	第118次SA1313の南約70㎝に位置、柱３本で構成される	各柱穴は径25～30㎝の円形、深さは11～26㎝、柱間距離は4.55m	SA1313と同一軸線、西端柱はSA1313の西端柱穴と南北に並ぶ位置		なし	SA1313やSB1222との相関が想定
ＳＤ 1358		第120次Ａ４区で確認	幅15～20㎝、長さ4.4m	東西に延びる		なし	
ＳＤ 1359	47	第120次Ａ４区・第135次で確認	幅20㎝前後、長さ4.5m	SA1358を起点として北に延びる		なし	SB1875Ｐ4・SKI1361を切る
ＳＤ 1360	47	第120次Ａ４区・第135次で確認、SA1359の東側で並行	幅25㎝、長さ6.2m	SA1359と並行するように南北に延びる			SB1875Ｐ4・SKI1361を切る
ＳＤ 1231	31 33	第115次調査区中央から東側にかけて確認	幅３ｍ前後、長さ17.5ｍ、深さ0.2m程	東西方向に延びる	火山灰の堆積層あり	土師器、須恵器、鉄製品、石器	現況でもわずかに窪みとして確認される。道路状の施設か
ＳＤ 1250	33		幅１～２ｍ、長さ7.2ｍ、深さ0.1m			なし	SD1231と同性格か
ＳＤ 1249		第115次調査区中央から南東寄りで確認	幅20㎝前後、長さ約３ｍ、深さ６～８㎝	SA1248から、枝分かれするように南北にそれぞれ延びる			
ＳＤ 1251			幅15～20㎝、長さ2.2ｍ程、深さ５㎝前後				
ＳＤ 1618Ａ	37 39	第122次Ｂ区斜面中位JT～JQライン		東西方向			火山灰降下後の構築
ＳＤ 1615	37 39	第122次Ｂ区斜面中位JT～JQライン	幅25㎝前後、深さ20㎝	東西方向			火山灰降下後の構築
ＳＤ 1523Ａ	37		幅30～35㎝、深さ35㎝				火山灰降下後の構築
ＳＤ 1523Ｂ	37		幅80～90㎝、深さ25㎝				火山灰降下前の構築
ＳＤ 1544	37 39		幅約40㎝、深さ20㎝				火山灰降下後の構築
ＳＤ 1530	38 43	第122次Ｂ区斜面上位JN～JJライン、SKI1532の北側で長さ９ｍの範囲以内に９条の溝が連続して確認、SD1516・1520は他７条より後に構築されたと推測	幅1.8～2.3m、深さ10～20㎝	東西方向		土師器坏、緑釉陶器蓋・花文香炉蓋	
ＳＤ 1516	43		幅90㎝、深さ25㎝	東西方向	埋土中位に火山灰堆積	土師器坏	確認面上に多くの遺物、火山灰層下にも遺物多し
ＳＤ 1547Ａ	43		幅50㎝、深さ20㎝	東西方向		なし	
ＳＤ 1547Ｂ	43		幅60～70㎝、深さ20㎝	東西方向		風字硯	
ＳＤ 1520	43		幅60㎝、深さ20～30㎝	東西方向		なし	
ＳＤ 1601	43		幅60～90㎝、深さ25㎝	東西方向		なし	
ＳＤ 1602	31 43		幅100～120㎝、深さ15㎝	東西方向		なし	
ＳＤ 1603	31 43		幅130～140㎝、深さ20㎝	東西方向		なし	
ＳＤ 1531	43		幅70㎝、深さ25㎝程	東西方向		なし	
ＳＤ 1515Ａ		第122次Ｂ区斜面上位JG～JDライン	幅２～2.2m、深さ40㎝	Ｅ７°Ｓ		土師器	

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	規模(幅・長さ・深さ)	方向	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＤ1515Ｂ		第122次Ｂ区斜面上位JG～JDライン	幅80cm、深さ25～30cm	SD1515Ａの中に収まるように２条並行	底面に火山灰が堆積	なし	
ＳＤ1515Ｃ			幅90cm、深さ10～20cm			なし	
ＳＤ1598		第122次Ｂ区斜面上位JG～JDライン	幅20cm程、深さ20～40cm	東西方向		なし	SD1515Ａの南約1.8ｍに位置
ＳＤ1599			幅20cm程、深さ10～15cm	Ｅ７°Ｓ		なし	SD1598の南約１ｍに位置
ＳＤ1500		第122次Ｃ区斜面中位、KC～JTライン	幅30～50cm、深さ20cm	北東－南西方向			
ＳＤ1526		第122次Ｃ区斜面中位、KC～JTライン	幅50～60cm、深さ約10cm	東－西方向		土師器Ⅲ	
ＳＤ1489	41	第122次Ｃ区斜面中位JO～JLラインで確認			中位に火山灰が堆積	土師器坏、風字二面硯、灰釉陶器長頸瓶	火山灰降下前の構築
ＳＤ1484Ｄ	45	第122次Ｃ区斜面上位JL～JIライン	幅20cm前後、深さ35cm			なし	SKI1484Ａ～Ｃに後続するが、関連性のある施設か
ＳＤ1496		第122次Ｃ区斜面上位JDライン	幅15～20cm、深さ10cm	東－西方向		なし	SKI1491の南約５ｍに位置
ＳＤ1495		第122次Ｃ区斜面上位JDライン	幅20～25cm、深さ約10cm	東－西方向		なし	SD1496の南約50～70cmに位置
ＳＤ1494		第122次Ｃ区斜面上位JDライン	幅25cm前後、深さ10～15cm	東－西方向		なし	SD1495の南約1.7ｍに位置
ＳＤ1490Ｂ	44	第122次Ｃ区斜面上位JAラインで確認	幅20cm、深さ10～15cm	東－西方向		なし	SKI1490Ａが埋め戻された後に構築
ＳＤ1493	44	第122次Ｃ区斜面上位JCライン	幅15～20cm、深さ15cm程	SKI1490Ａと近接して東－西に延びる			
ＳＤ1620Ａ	45	第122次Ｃ区斜面上位JL～JIライン	幅1.4～1.7m、深さ20～30cm	SKI1484Ｂの南側で並行するように東西に延びる			
ＳＤ1620Ｂ	45	第122次Ｃ区斜面上位JL～JIライン	深さ10～20cm	東西方向			SD1620Ａに切られる
ＳＤ1624	45	第122次Ｃ区斜面上位JL～JIライン	幅42cm、深さ15cm	東西方向	第45図19層	なし	
ＳＤ1632		第123次Ｄ区、SKI1631を切り込む	幅20～30cm、長さ2.8m	SKI1631南西隅部を起点として南方向に延びる		須恵器坏・甕、土師器台付坏	
ＳＤ1638		第123次Ｄ区	幅1.3m、東西の長さ1.6m、深さ10cm前後	東西方向		なし	
ＳＤ1639		第123次Ｄ区	幅0.75m、長さ1.25m	南北方向			SD1638を切る
ＳＤ1640		第123次Ｄ区	幅0.4～0.5m、長さ4.7m、深さ10cm前後	南北方向			SD1639と一連の溝か
ＳＤ1644		第123次Ｅ区	幅1.8m、深さ0.3～0.5m	東西方向		なし	
ＳＸ1645Ａ		第123次Ｅ区、SD1644の斜面上位側に位置	段差約30cm、平坦面の幅80cm前後			なし	SD1644に伴う整地地業か
ＳＸ1645Ｂ			段差35cm、平坦面の幅約60cm			なし	
ＳＤ1652		第123次Ｇ区	幅15cm前後、深さ約10cm	北東－南西方向		なし	
ＳＤ1653		第123次Ｇ区	幅15～20cm、深さ10cm	北西－南東方向		なし	
ＳＤ1678		第126次Ｈ区JCラインで確認	上面幅40～50cm、深さ20cm前後	東西方向		土師器坏・甕類	
ＳＤ1681		第126次Ｈ区JBラインで確認	上面幅100cm前後、深さ10cm	北西－南東方向		土師器坏	
ＳＤ1676		第126次Ｈ区、斜面下位側KAライン	上面幅100cm前後、下面幅30～35cm、深さ75cm	東西方向	人為的な埋め戻し後に自然堆積	土師器、縄文土器	
ＳＤ1671		第126次Ｈ区、斜面下位側KAライン	上面幅55cm前後、下面幅約30cm、深さ45cm	東西方向	堆積土はSD1676の１層と土質が類似	なし	SD1676の北側に隣接して構築される
ＳＤ1908Ａ		第135次調査区斜面中位平坦面JO・JPライン上で確認、３時期の重複	幅35cm、深さ28cm	東西に延びる、1908と1901は約３ｍの間隔で位置し、それぞれ３時期あり			工房群を区画する板塀跡か
ＳＤ1908Ｂ			幅60cm、深さ48cm				
ＳＤ1908Ｃ			幅90cm、深さ55cm				
ＳＤ1901Ａ			幅35cm、深さ35cm				
ＳＤ1901Ｂ			幅70cm、深さ48cm				

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	規模(幅・長さ・深さ)	方向	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＤ 1901Ｃ		第135次調査区斜面中位平坦面J0・JPライン上で確認、３時期の重複	幅70cm、深さ45cm				
ＳＤ 1860		第135次斜面下位で確認	幅1.4ｍ程、深さ約0.2ｍ	東西に延びる		土師器、須恵器、灰釉陶器壺	
ＳＤ 1931		第137次Ｑ区整地層２上面で確認	長さ1.12ｍ以上、幅0.19ｍ、深さ0.22ｍ	東西に延びる		なし	

焼土遺構

ＳＮ 1362		第120次Ａ４区SA1358に切られる	長さ95cm、幅80cm				
ＳＮ 1384		第120次Ａ３区	長さ100cm、幅50cm以上				
ＳＮ 1385		第120次Ａ３区	径55cm				
ＳＮ 1386		第120次Ａ３区	長さ50cm、幅40cm				
ＳＮ 1379		第120次Ａ１区	長さ90cm、幅60cm				
ＳＮ 1560Ｃ	35	第122次Ｂ区斜面中位、KD～JTライン	径28cm		第35図33層		SKI1560Ａに伴う焼土面
ＳＮ 1567Ｃ	35		径80cm前後				SKI1567Ａに伴う
ＳＮ 1512	37	第122次Ｂ区斜面中位JT～JQライン	径あるいは一辺が1.3ｍを超す				SKI1542床面上に構築
ＳＮ 1551Ｂ	37	第122次Ｂ区斜面中位JT～JQライン、SKI1551Ａ貼床面上に位置	径40cm				SN1512上位に構築
ＳＮ 1551Ｃ	37		径40cm				SN1551Ｂと同一面
ＳＮ 1551Ｄ	37		長さ58cm、幅48cm				
ＳＮ 1551Ｅ	37 39		長さ32cm、幅25cm				
ＳＮ 1551Ｆ	37 39		径28cm				
ＳＮ 1552Ｂ	37 39	第122次Ｂ区斜面中位JT～JQライン	長さ45cm、幅35cm				
ＳＮ 1617	37 39	第122次Ｂ区斜面中位JT～JQライン	長さ80cm、幅33cm				SKI1588に伴う
ＳＮ 1619	37 39		長さ38cm、幅20cm				SKI1588に伴う
ＳＮ 1504	38	第122次Ｂ区斜面中位JQ～JNライン	長さ130cm、幅60cm			土師器坏	SKI1517に伴う
ＳＮ 1518Ｂ	38 39	第122次Ｂ区斜面中位、JQ～JNライン	長さ122cm、幅85cm				SKI1518Ａに伴う
ＳＮ 1518Ｃ	38 39		径35cm				SKI1518Ａに伴う
ＳＮ 1538	38 39	第122次Ｂ区斜面中位、JQ～JNライン	径35cm				SKI1537Ｄに伴う
ＳＮ 1541	38 39	第122次Ｂ区斜面中位、JQ～JNライン	径33cm				SKI1537Ｃに伴う
ＳＮ 1608	38 39		長さ26cm、幅13cm				SKI1537Ｃに伴う
ＳＮ 1609	38 39		長さ38cm、幅25cm				SKI1537Ｃに伴う
ＳＮ 1614	38		長さ50cm、幅35cm、Ｕ字形を呈する				SKI1537Ｃに伴う
ＳＮ 1536	38 39	第122次Ｂ区斜面中位、JQ～JNライン	長さ30cm、幅18cm				SKI1537Ｂに伴う
ＳＮ 1600Ｂ	38	第122次Ｂ区斜面中位、JQ～JNライン	長さ48cm、幅36cm			須恵器長頸壺	SKI1537Ａに伴う
ＳＮ 1604	38 39		長さ78cm、幅42cm				SKI1537Ａに伴う
ＳＮ 1605	38 39		長さ50cm、幅45cm				SKI1537Ａに伴う
ＳＮ 1606	38 39		長さ30cm、幅18cm				SKI1537Ａに伴う

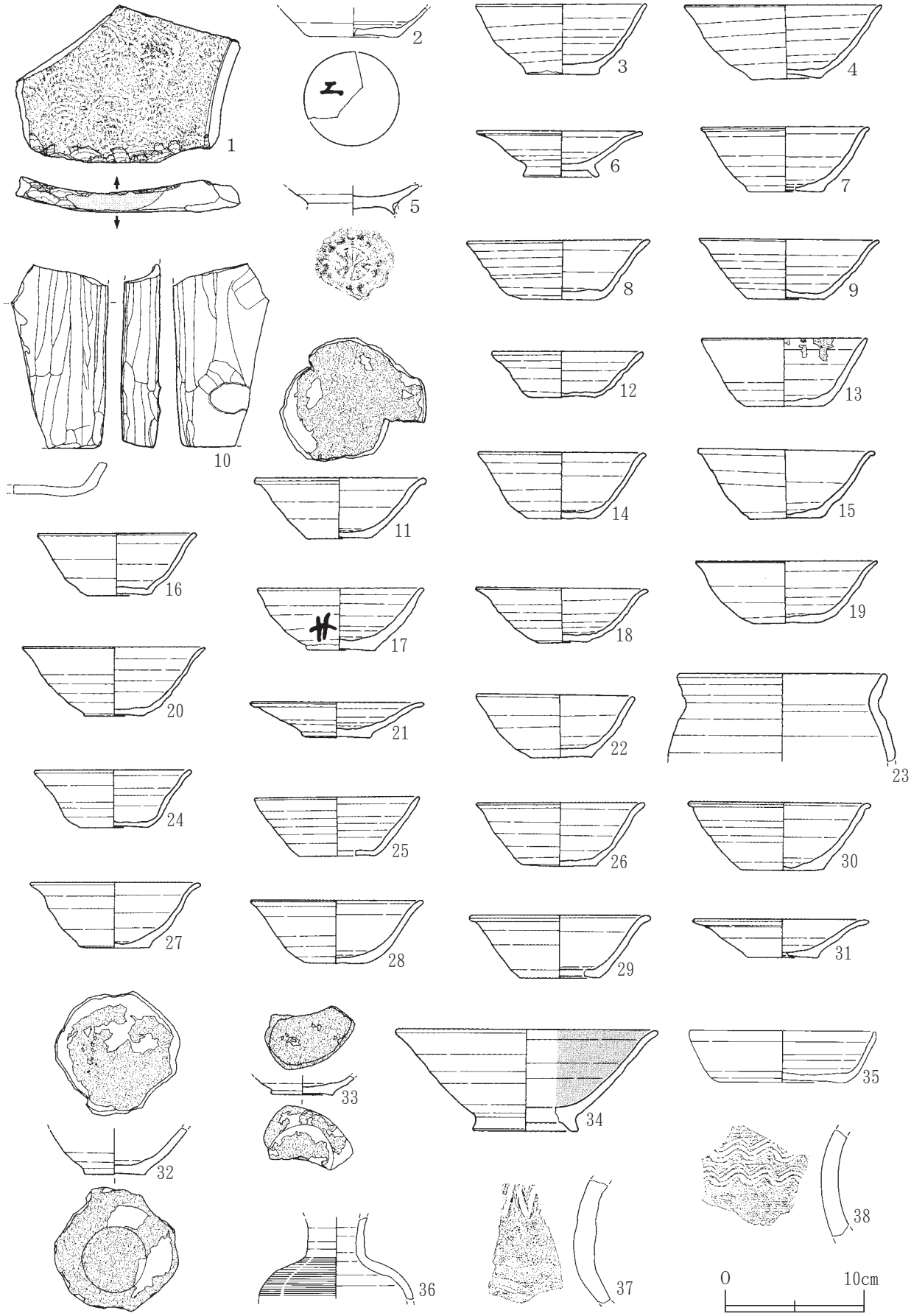
遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	規模(幅・長さ・深さ)	方向	埋土状況	出土遺跡	時期・備考
ＳＮ 1487		第122次Ｃ区斜面中位KC～JTライン	長さ75cm、幅50cm				
ＳＮ 1497Ａ		第122次Ｃ区斜面中位KC～JTライン、焼土面形成後に火山灰降下	長さ60cm、幅40cm			なし	
ＳＮ 1497Ｂ			径55cm			なし	SD1526の上位に構築
ＳＮ 1481		第122次Ｃ区斜面中位JT～JQライン	径約30cmの略円形			なし	SB1525Ｐ１掘形上部の窪地を利用した焼土面
ＳＮ 1507Ａ	41	第122次Ｃ区斜面中位JO～JLライン	長さ114cm、幅66cm				SKI1556Ｃに伴う焼土面
ＳＮ 1507Ｂ	41	第122次Ｃ区斜面中位JO～JLラインで確認、SKI1556Ｂに伴う焼土面	長さ70cm、幅53cm、楕円形				
ＳＮ 1488	41		長さ108cm、幅20～40cm				
ＳＮ 1627Ａ	39 41		一辺80cm				
ＳＮ 1627Ｂ	41		長さ95cm、幅60cm				
ＳＮ 1628	39 41		径55cm				
ＳＮ 1629	41		長さ50cm、幅30cm				
ＳＮ 1482	39 41	第122次Ｃ区斜面中位JO～JLラインで確認、ＳＫＩ1556Ａに伴う焼土面	長さ58cm、幅52cm				
ＳＮ 1483	39 41		長さ96cm、幅47cm				
ＳＮ 1508Ａ	41		長さ173cm、幅135cm				
ＳＮ 1508Ｂ	41		長さ115cm、幅52cm				
ＳＮ 1625	41		長さ34cm、幅30cm				
ＳＮ 1492Ｅ		第122次Ｃ区斜面下位KFライン以北	長さ45cm、幅17cm				SK1492Ｄが埋められ火山灰降下後に形成
ＳＮ 1871		第135次調査区斜面中位平坦面、JM～JSライン	長さ65cm、幅20cm			鍛造剥片	SKI1863Ｃ期に伴う
ＳＮ 1872			長さ70cm、幅48cm			鍛造剥片	SKI1863Ｃ期に伴う
ＳＮ 1873			一辺60cm				SKI1863Ｂ期に伴う
ＳＮ 1862			長さ74cm、幅52cm				SKI1863Ａ期に伴う
ＳＮ 1928		第137次Ｒ区整地層２上面で確認	長さ35cm、厚さ３cm			鍛造剥片	鍛冶炉の可能性あり

鍛冶炉

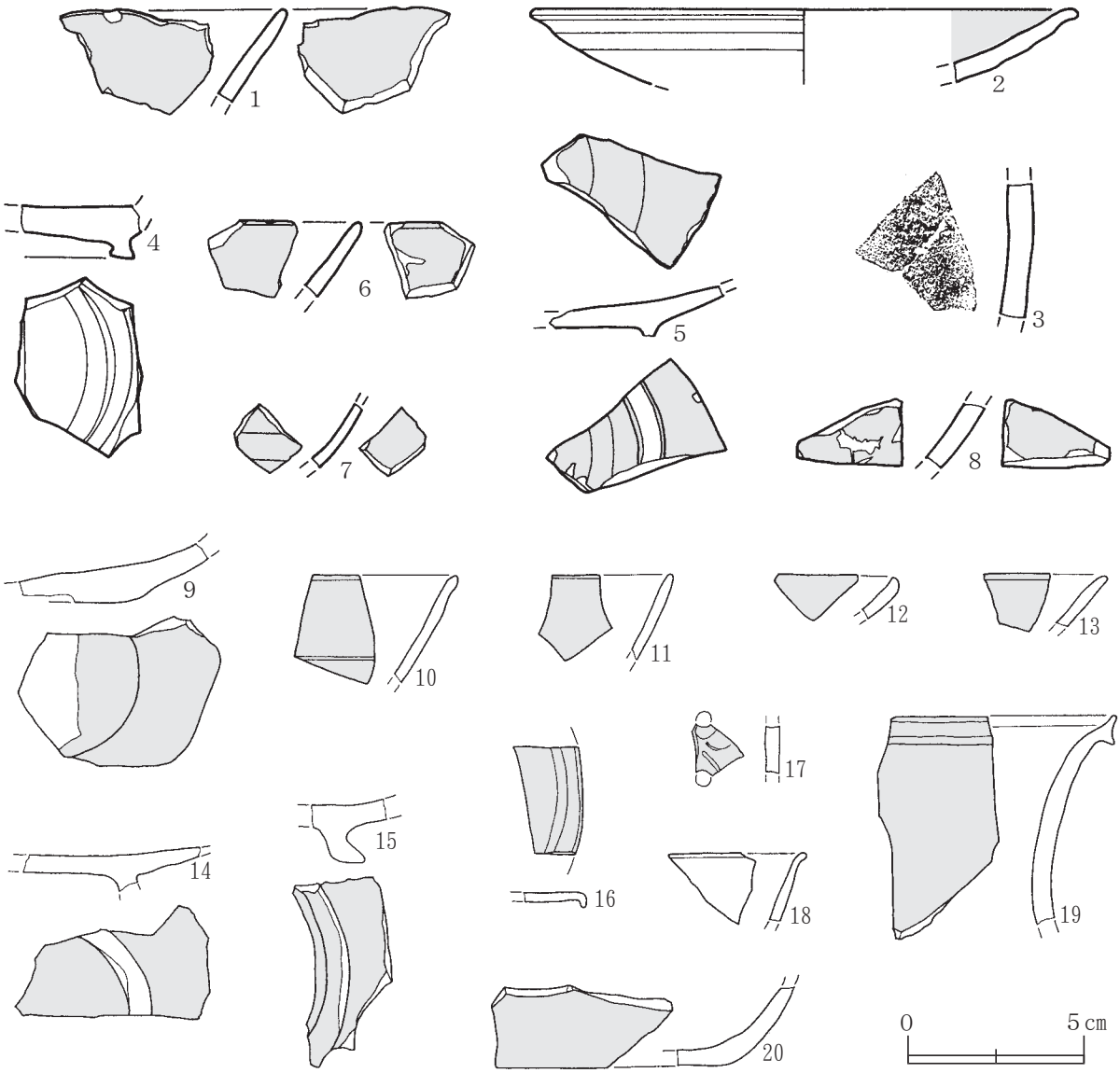
ＳＳ 1569	35	第122次Ｂ区斜面中位	径18cm程の還元面				SKI1567Ａに伴う鍛冶炉
ＳＳ 1580	35	第122次Ｂ区斜面中位	幅25cm、長さ50cmの還元面				SKI1567Ｂに伴う鍛冶炉
ＳＳ 1558	35	第122次Ｂ区斜面中位	径40～50cm程の不整円形の還元面			同一面上に金床石	SKI1560Ａあるいは ＳＫＩ1567Ａ以降の鍛冶炉
ＳＳ 1534	38 39	第122次Ｂ区斜面中位、JQ～JNライン	径20cmの還元面				SKI1537Ｃに伴う
ＳＳ 1612	38 39		径15cmの還元面				SKI1537Ｃに伴う
ＳＳ 1535	38 39	第122次Ｂ区斜面中位、JQ～JNライン	径20cmの還元面				SKI1537Ｂに伴う
ＳＳ 1607	38 39		径35cmの還元面				SKI1537Ｂに伴う
ＳＳ 1611	38 39		径40cmの還元面				SKI1537Ｄに伴う
ＳＳ 1485	39	第122次Ｃ区斜面中位JT～JQライン	径28cmの還元面			鍛造剥片	SS1486と共に掘立柱建物を上屋とすると見られるがその柱穴配置は不明
ＳＳ 1486	39	第122次Ｃ区斜面中位JT～JQライン	径35cm程の還元面			鍛造剥片	SS1485に隣接
ＳＳ 1626	41	第122次Ｃ区斜面中位JO～JLライン	径30cm程の還元面				SKI1556Ｃに伴う鍛冶炉
ＳＳ 1554Ａ		第122次Ｃ区斜面中位JO～JLライン	炉は径25cm、下部構造は径70cm、深さ50cmの土坑				SKI1554Ａに伴う鍛冶炉、下部構造あり
ＳＳ 1855		第135次調査区斜面中位平坦面、JM～JSライン	径22cmの還元面				最上層で検出された鍛冶炉

道路跡・硬化面

ＳＭ 1915		第135次調査区斜面下位、SD1860の北約６ｍで確認	幅約30cmの硬化面	東西方向に延びる			溝状の掘り込みはなし

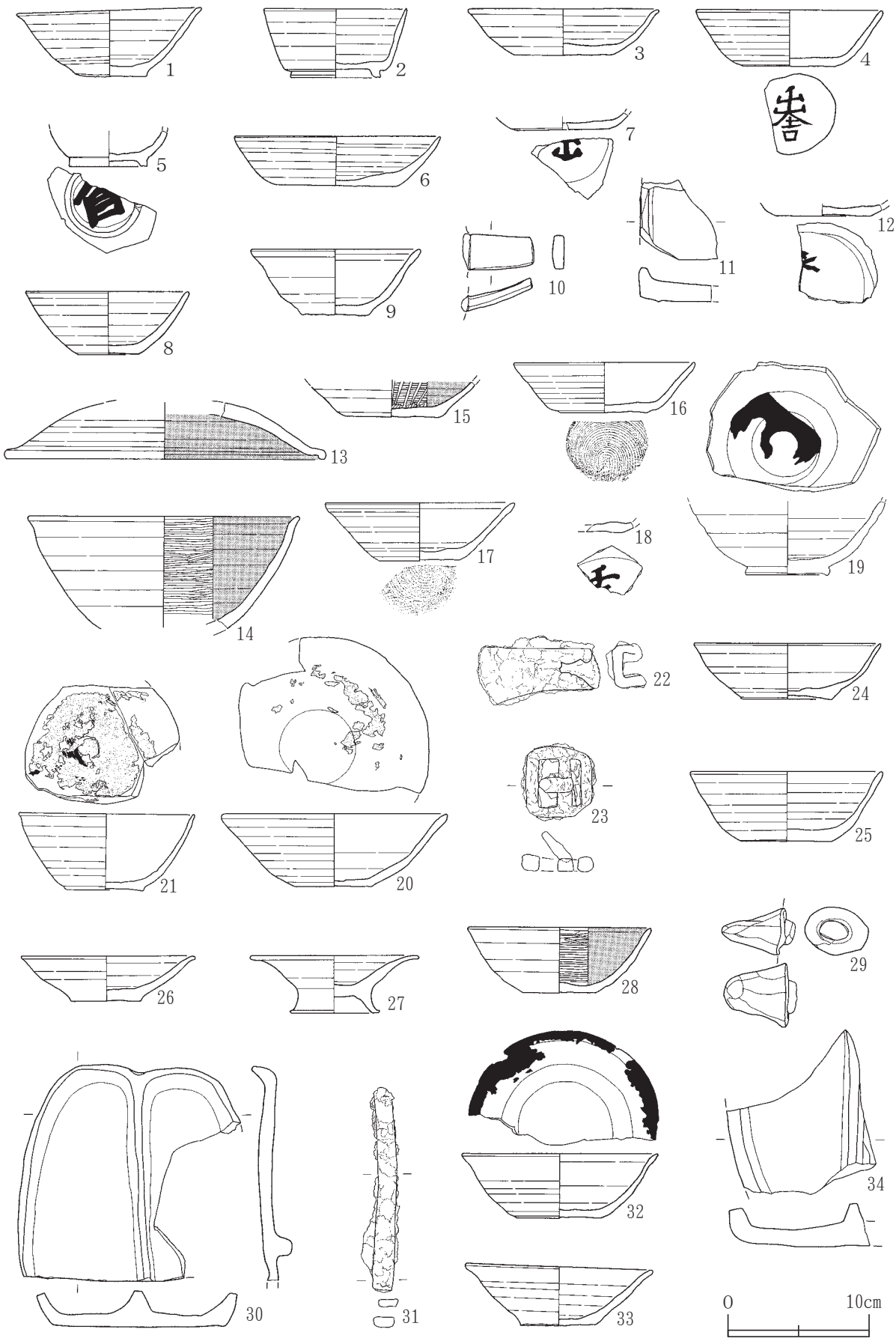


第52図　出土遺物(８)政庁西側地区第115次

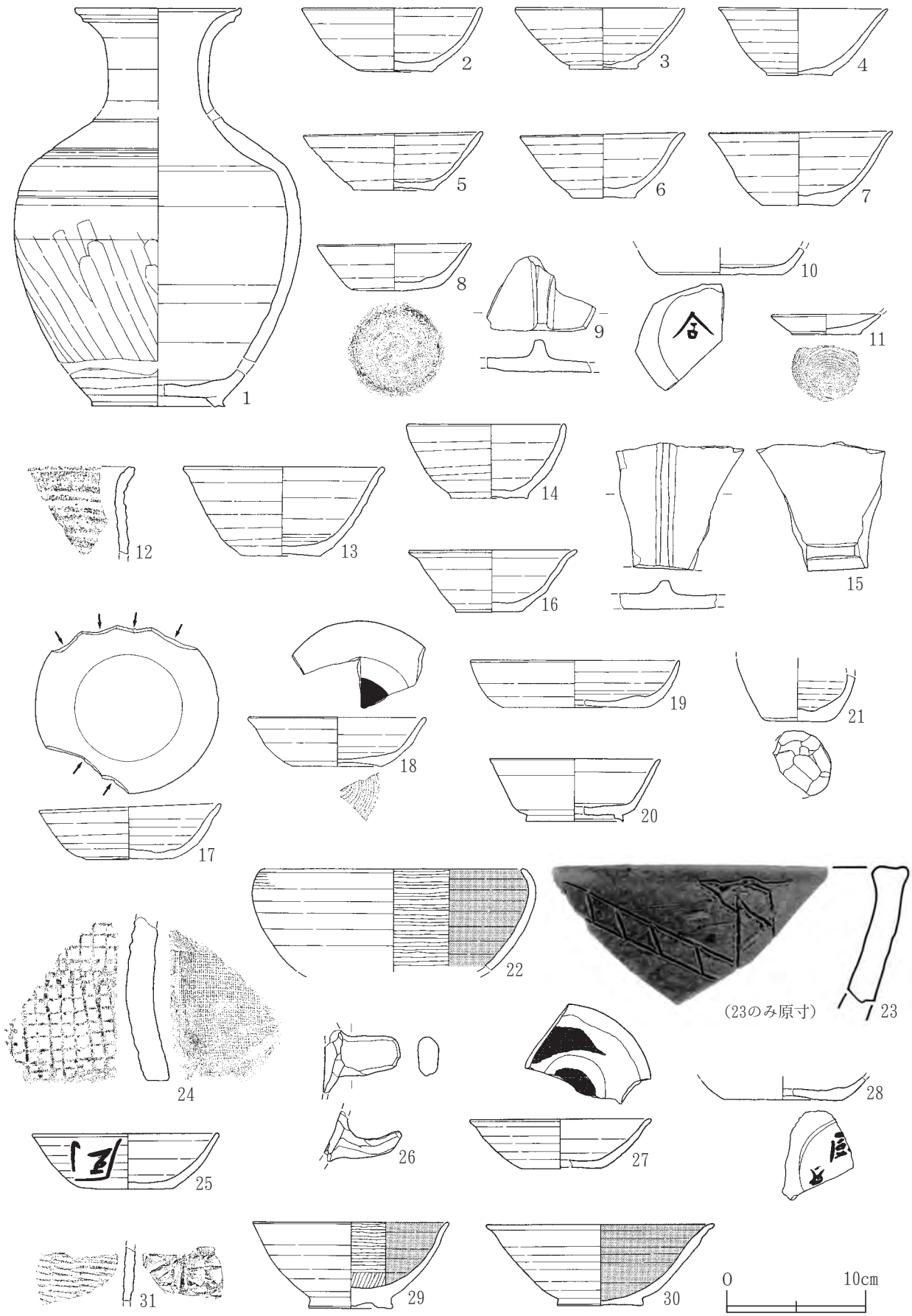


番号	種別	器形	出土位置	産地・時期	年報挿図番号
９－１	青　　磁	坏か皿	120次Ａ２区１層	中国・越州窯系	01－32－27
９－２	灰釉陶器	皿	120次Ａ２区１層	猿投窯Ｋ－14窯式	01－32－28
９－３	灰釉陶器	長頸壺	120次Ａ２区１層	猿投窯Ｋ－14窯式	01－32－29
９－４	灰釉陶器	平　瓶	120次Ａ１区１層	猿投窯Ｋ－14窯式	01－32－30
９－５	緑釉陶器	皿	120次Ａ２区２層	猿投窯Ｋ－90窯式	01－32－31
９－６	緑釉陶器	段　皿	120次Ａ２区１層	猿投窯Ｋ－90窯式	01－32－32
９－７	緑釉陶器	小　椀	120次Ａ２区２層	猿投窯Ｋ－90窯式	01－32－33
９－８	緑釉陶器	椀	120次Ａ２区２層	猿投窯Ｋ－90窯式	01－32－34
９－９	青　　磁	皿　か	122次Ｃ区ＳＫＩ1492Ｂ	中国・越州窯系	03－34－１
９－10	緑釉陶器	椀	122次Ｂ区ＪＲ55－5層	京都・洛西系	03－34－２
９－11	緑釉陶器	椀	122次Ｂ区ＳＫ1521	京都・洛西系	03－34－３
９－12	緑釉陶器	皿	122次Ｂ区ＳＫ1521	猿投窯Ｋ－90窯式	03－34－４
９－13	緑釉陶器	段　皿	122次Ｃ区ＫＡ50Ⅱ層	猿投窯Ｋ－90窯式	03－34－５
９－14	緑釉陶器	皿	122次ＳＫ1583RP450	猿投窯Ｋ－90窯式	03－34－６
９－15	緑釉陶器	椀	122次Ｂ区ＪＱ55RP115	猿投窯Ｋ－90窯式	03－34－７
９－16	緑釉陶器	蓋	122次Ｂ区ＳＤ1530RP229	猿投窯Ｋ－90窯式	03－34－８
９－17	緑釉陶器	花文香炉蓋	122次Ｂ区ＳＤ1530RP307	猿投窯Ｋ－90窯式	03－34－９
９－18	陶　　器	椀	122次Ｃ区ＳＫＩ1490A	無釉、産地不詳	03－34－10
９－19	灰釉陶器	長頸瓶	122次Ｃ区ＳＤ1489	猿投窯Ｋ－14窯式	03－34－11
９－20	灰釉陶器	瓶	122次Ｂ区ＳＫＩ1537ARP29	猿投窯Ｋ－90窯式	03－34－12

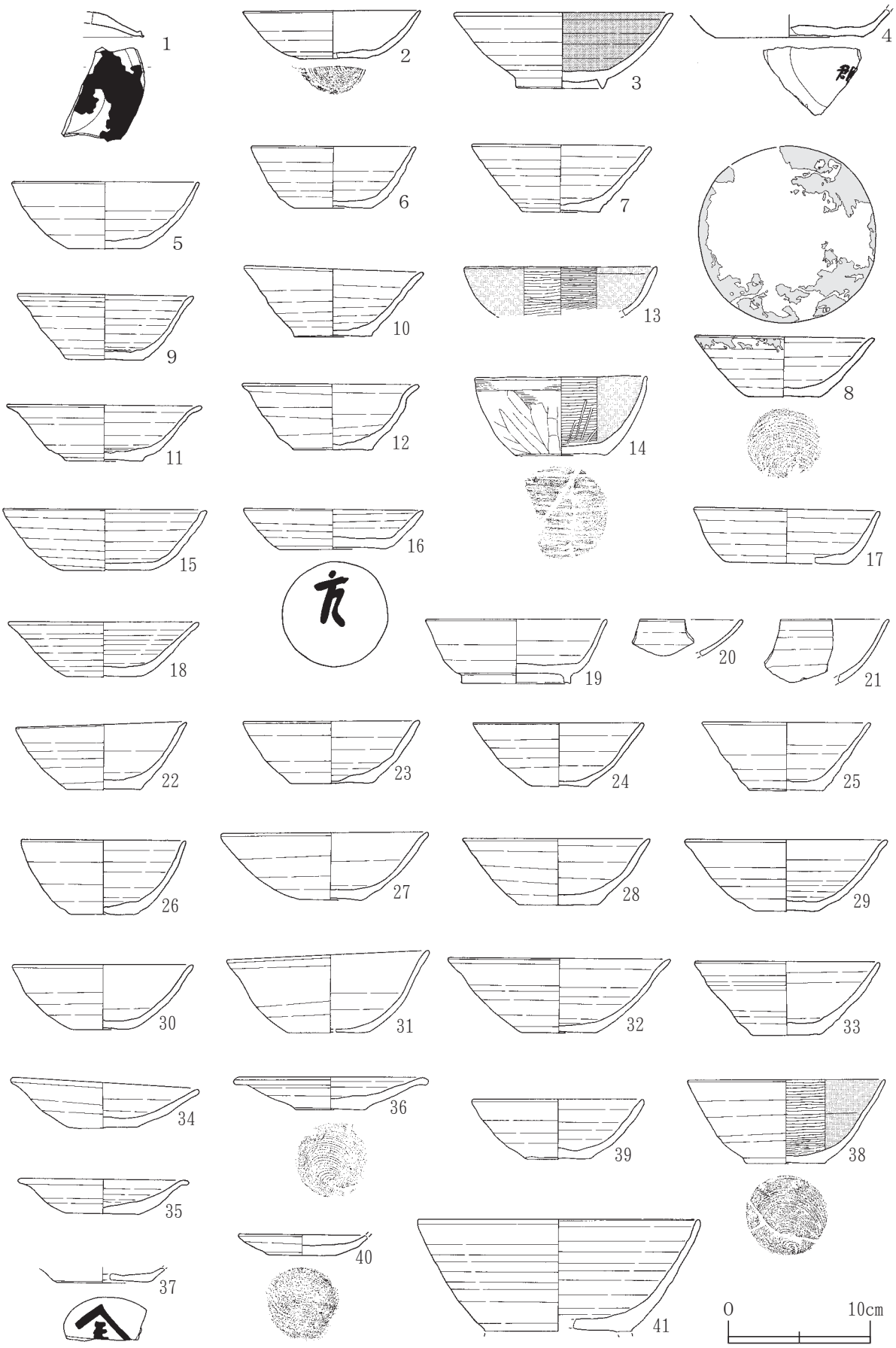
第53図　出土遺物(９)政庁西側地区第120・122次(１)



第54図　出土遺物(10) 政庁西側地区第122次(２)



第55図　出土遺物(11) 政庁西側地区第122次(３)



第56図　出土遺物(12) 政庁西側地区第123・135次

は東壁側が調査区外に及ぶ一辺が５ｍ程の竪穴と想定していたが、土層と平面プランの観察から、ほぼ同位置での重複・嵩上げが６時期ある竪穴建物であることが判明した。嵩上げされた貼床の高さは合計すると100㎝に達する。SKI1924Ａ上に形成された整地層２面からは少量ながら鍛造剥片が発見され、過去における北側斜面中位面での成果(第122・135次)も加味すると、SKI1924Ａ～Ｆは竪穴式の鍛冶工房、整地層２面には掘立柱式の鍛冶工房が置かれていたと判断される。また、同じ斜面中位にあるSKI1933床面上からは細片化した漆紙が出土した。文字は確認されなかったが、鍛冶工房域内に漆塗りを伴う工房あるいは作業工程が含まれていることには注意したい。同様の事例は、第122次Ｃ区SKI1556Ｃでも確認されている(第６号漆紙文書)。

その他に、縄文時代の遺構も確認された。

２　外郭西門東側地区

(１)調査の目的と経緯

本地区に含まれる外郭西門跡及びその周辺域は４度にわたる調査(第46・67・81・85次)が行われているが、これらは第４次５年計画で示された「外郭西門の調査」に沿う精査であった。この特定の区域を除くと、政庁西門から外郭西門に至る約370ｍの丘陵地は、ほとんど調査の手が及んでいなかったことになる。

第６次５年計画では、「政庁西方における官衙域の調査」を掲げており、ここで初めて地区内の遺構内容を確認する調査に着手したことになる。これに係る調査は、第116・117・119・121次の４度である。最終の第121次では、次の３点に留意した調査を行った。

・第119次調査区の隣接地にトレンチを設定して遺構の確認調査をする。

・本区域は３年連続で隣接地を調査しており、調査の状況によっては面的な拡張も視野に入れる。

・第119次調査で確認した整地層と鍛冶関連遺構(鍛冶炉・掘立柱建物跡・竪穴等)の関係・配置等について見極める。

なお、第116次調査は遺構の平面プランを確認したに留まり、精査を行っていないため、時期を含め詳細不明である。従って本項での報告は省略する。

(２)調査区の立地

本地区は、長森丘陵部西端側に位置する。丘陵は馬背状の狭い平坦面が東西方向に延び、その西端に外郭西門が建てられていた。丘陵は南側と北側に向かって標高を減ずるが、前者は比較的急傾斜である。後者はなだらかに下り、平坦面と緩斜面が交互に観察される段状の様相を示し、沖積地面に至る。これは政庁西側地区と同様に整地地業によって作り出されたことが判明している。北側の沖積地部での標高は35.0ｍであり、頂部との比高は約13ｍである。検出された遺構のまとまりは、各段状・整地面と対応していることから、標高にあわせた次のような名称を付して以下に報告する。

【丘陵頂部平坦面】標高48ｍ前後

【南側斜面上位】標高46～47ｍライン上の遺構群

【北側斜面上位】標高46ｍライン上の遺構群

【北側斜面中位、第１段整地面】標高42～43.5ｍライン上の遺構群・整地面

【北側斜面下位、第２段整地面】標高40～41ｍライン上の遺構群・整地面
【第３～５段整地面】標高37～39ライン上の整地面
【北端部最下位平坦面、第６段整地面】標高36ｍ前後の遺構群・整地面

（３）検出遺構と遺物

①　基本層序

本地区の基本層序は、北側斜面中位面にある第121次調査区Ｕ区・西側壁面で観察した結果を代表させる。

第Ⅰ層：暗褐色シルト質土(10YR3/4)表土、植物根が多くブカブカしている。層厚は５～10cm。
第Ⅱ層：極暗褐色シルト質土(7.5YR2/3)部分的に炭化物が混入する。層厚10cm前後。
第Ⅲ層：黒褐色シルト質土(10YR2/3～2/2)炭化物を少量含む。層厚20cm前後。同層は下位ほど土壌の明度がやや高くなり、観察箇所によりⅢａ層：黒褐色土(10YR2/3)Ⅲｂ層：黒褐色土(10YR2/2)となる。
第Ⅳ層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)地山漸移層、層厚10cm前後。
第Ⅴ層：黄褐色土(10YR5/6)地山土

第119次調査により、北側斜面下位部の第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に整地(盛土)層が形成されていたことが明確になった。なお、調査区内を東西に走る現道南側では、近代以降の削平を受け、表土層下が第Ⅳ層あるいは第Ⅴ層となる箇所が存在する。地山は、基本的には粘質土であるが、丘陵頂部・南側斜面上位斜面部にあたる第117次Ｂ区南側では砂質粘土であり、色調もやや明るく明黄褐色(10YR6/8)を示す。また、第117次Ｇ区では第115次調査区南側のような礫(硬質泥岩)が露出しており、人頭大から人力では動かせないような巨石まで様々である。当地区での遺構確認面は、第Ⅱ層面が中世、整地層並びに第Ⅲ層中では古代、第Ⅳ層まで掘り下げると縄文時代の遺構が検出される。

②　調査概要

検出遺構と出土遺物の概要は、遺構観察表と遺物観察表にまとめたが、特記すべき事項について下記に示す。なお、遺構番号は第117次が1261～1312、第119次で1317～1357、第121次で1387～1480である。

【第117次調査】

《調査区》調査区の設定は、主として丘陵頂部平坦面から南側斜面上位、北側斜面上位にかかるように幅1.5ｍのトレンチを南北方向、すなわち等高線に直交させるようにして６本(Ａ・Ｂ・Ｄ～Ｇ区)、東西方向に１本(Ｃ区)設定した。前者は丘陵西端部を南北に縦断させるような位置に、後者は南北方向に延びる土塁・空堀を横断させるようにしたものである。なおＤ～Ｆ区間は古代の遺構・遺物が比較的まとまって検出されたことから、この間を面的に拡張して調査した。この区域を拡張区と表記する。

《遺構》精査の結果、検出された古代の遺構は、竪穴建物跡９棟、土坑10基、溝跡５条であり、中世の墳墓２基、火葬墓３基、焼土遺構６基、土塁２条・空堀１条、縄文時代の竪穴状遺構４軒、土坑

２基等も確認された。竪穴建物跡のうち、カマドをもつ事例は１棟(SI1274)のみであり、他はカマドを持たずに地床炉をもつもの(SI1266)、壁の立ち上がりあるいは壁溝の一部のみの確認に留まる。
《遺物》SI1266竪穴建物跡床面直上には、土師器坏が完形で少なくとも５個体確認された。３個体は倒立状態であり、残り２個体は重なって北側壁に立て掛けるようにして見つかった。これらは竪穴を廃棄する段階で遺物を意図的に置いたものと推測される。

【第119次調査】
《調査区》第117次調査区の北側、北側斜面中位～下位緩斜面部に幅２ｍのトレンチを南北方向に５本(Ｈ～Ｌ区)設定した。Ｈ～Ｊの３区は東西に走る道路で分断されるため、南を１、北を２とし、Ｈ１・Ｈ２区と呼称している。Ｈ区での標高は、47.0～39.2ｍである。
《遺構》調査により検出された古代の遺構は、竪穴建物跡５棟、土坑18基、溝跡11条である。明らかに中世と判断される遺構は、Ｊ１区の土坑１基(SK1325)のみであった。
《第３～５整地面の概要》　北側斜面下位では、掘り下げ以前において段状の地形が観察された。精査の結果、これが10世紀前葉以降に人為的に地形を改変・整地させた施設であったことを確認している。

当該地区では、平成元年度の第80次調査(微地形測量と測量基準点の埋設)において段状の高まりがあることを確認、図示している(『年報1989』第６図参照)。その高まり自体の本文中における記述はないものの、図を見る限りでは２段の高まりが東西方向(北西－南東)に20数ｍにわたり記録されている。この地形は現在でも追認でき、上下段の差は最大で1.6ｍに達している。

本調査では、結果的に第80次調査時の高まりを西端として、ここから東に延びる東西方向の段状地形を確認したことになる。第57・58図に今回測量した段状部の地形図(網点貼付箇所)を示している。これに従うと、丘陵北端部を東西に３段の地形改変痕が約150ｍにわたり連続して観察された(第３～５整地面)。基本的には自然地形(等高線)に沿う形ではあるが、明らかに切土・盛土という整地を行っており、一段の幅は４～10ｍ程であり、段差(高さ)は40～70㎝である。
《Ｈ２区の様相と出土遺物》　トレンチ壁面での土層観察から第３～５整地面の構築時期が明確となった。特に本区では二次堆積ではあるが、十和田a火山灰の介在から上限時期が特定される。第61図にＨ２区の土層断面図を示してある。図中のａ～ｇ層が基本層序第Ⅱ層と第Ⅲ層に挟まれる形で確認された。このうちｅ層以下は火山灰を含んだ自然堆積層であることから、おそらく火山灰降下に伴う流入土と見ることができる。その上位に間層を挟まずａ・ｃ・ｄ層が形成される。これらの堆積層は混入物のあり方から人為堆積土であり、盛土・整地層にあたる。ｃ・ｄ層には微量の火山灰を含むが、ａ層には認められず、整地層形成にあたりｃ・ｄ層期とａ層期の時間差が予想される。整地層の厚さは、25～60㎝程度である。

Ｈ２区内における整地層出土遺物は、土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦・羽口・鉄滓・石器がある。破片の重量比(%)からみた土師器：須恵器：瓦の出土割合は69：27：４であった。出土遺物のうち、第73図２は須恵器坏底部に箆書(焼成前に記入)が認められる。ヘラ切り後の外底面を平滑にケズリ(のちナデか)した面に「出羽□□□／郡□男賀／凡酒坏」(／は改行)と少なくとも８文字が書かれている。第73図６～11は緑釉陶器手付瓶の各部の破片である。
《Ｉ２区の様相と出土遺物》　一方、東に隣接するＩ２区では第３～５整地面形成の下限時期が類推

される。ここではｈ・ｉ・ｊの整地層が認められ、層厚40～105cmを有する。３層とも肉眼では火山灰混入の有無は不明だが、ここでもｉ・ｊ層期とｈ層期の２時期の時間差が考えられる。ｉ・ｊ層期はＨ２区ｃ・ｄ層期に、ｈ層期はａ層期にそれぞれ対比される。同区では整地層ｈを古代の土坑SK1332が切り込んで構築していることから、SK1332の時期を下限期とすることができる。同土坑は出土遺物から10世紀前～中葉段階とすることができ、このことからＨ２・Ｉ２区での観察地点との前提を伴うものの、十和田ａ火山灰降下直後から２時期にわたる比較的短期間に形成されたと推測される。

また、Ｉ２区では第Ⅲ層と整地層ｈ～ｊの層境が非常に明瞭に識別できる。このことは整地層形成にあたり、当時の表土を一旦削土させた上で盛土した結果と類推される。同様のことはＨ２区でも見て取れるが、Ｉ２区ほど明確には観察できない。

Ｉ２区内における整地層出土遺物は、主にｈ層出土であり、ｉ・ｊ層は少量である。土師器・須恵器・瓦・坩堝・羽口・紡錘車・鉄滓・砥石等があり、図示したもの(第73図12～22)は全てｈ層出土である。破片の重量比(%)からみた土師器：須恵器：瓦の出土割合は64：30：６であった。

【第121次調査】

《調査区》第119次調査区の隣接地、北側斜面下位～北端部最下位平坦面に設定したトレンチは、計９本(M～U区)である。その他に、第119次に設定し、第Ｉ層のみを掘り下げていたＫ区も対象とした。また、第119次Ｉ１・Ｊ１区の一部も再調査を行った。

《遺構》調査により検出された古代の遺構は、掘立柱建物跡21棟、竪穴建物跡11棟、鍛冶炉・焼土遺構15基、炭窯跡１基、土坑28基、溝跡11条、柱穴列５列、材木塀跡１列である。また、第119次調査で確認された整地面が本調査でも追認された。その概要は次の通りである。

《第１段整地面と遺構》　最上段の整地面、北側斜面中位に位置する。標高は42～43.5m。視覚的には幅７ｍ前後の平坦面となるが、標高43.5mライン上に沿わせるように各施設(竪穴・土坑・溝等)を構築・配置した結果、段状の地形が現れ出たと解することができる。

本整地面の遺構は、Ｏ・Ｑ・Ｕ区で検出された竪穴建物跡１棟、土坑４基、炭窯跡１基がある。SI1431からは、カマドＢ廃棄段階での埋納遺物が２点出土した(第74図４・８)。８は須恵器台付壺であり、燃焼部奥壁上、最上層において正位あるいは口縁を東に向けるようにして発見された。台部は意図的な打ち欠きにより全てを欠き、その他はほぼ完形を保っていた。４は完形の須恵器坏であり、壺の直下、燃焼部内２層下位で正立状態で出土した。底部に「十」の墨書が見られる。また、カマドＢ火床面周辺の焼土内より少量ながら炭化米が発見された。

整地面・遺構の構築時期は、十和田ａ火山灰降下前、９世紀代に収まる。

《第２段整地面と遺構》　第１段整地面の下段に位置する。標高は40～41m、上位段との差は漸移的だが50～70cm程度である。東西に走る現道は、本段の北端に沿うように作られる。整地面の幅は14m程となり、構築される遺構数も非常に多くなる。ただ、東側域では中世以降現代に至るまで、削平等の土地改変を受けている。

本整地面の遺構のうち、中央部のSKP1443を紹介する。本遺構は、一辺が80cmの隅丸方形を呈し、深さは55cm程の土坑(柱穴掘形)である。本遺構は特異な履歴をもった遺構と判断する。それは遺物の出土状況と堆積土の状況から、次のように推測した。まず掘り上げられた土坑・掘形に須恵器大甕破片を整然と敷くように並べ置く。大甕は意図的に打ち割られ、内面を上にさせて、６層土と共に約20

cmの厚さまで埋める(第67図下のイ)。次いで６層上面を底面として、ここに径13～15cm程の柱をまっすぐに立てる。柱の周りには、にぶい黄褐色の粘質土(５層)を15cm前後の厚さに埋め戻す。同層中には遺物は殆ど含まれない。この上には、土師器坏２個体を正立・並立させて柱の側に置く(３層下面、第67図下のア)。更には土師器・須恵器を中心にして砥石・台石・鉄滓などを比較的雑然と投げ入れる。３層上面から２層にも遺物は含まれるが、上位ほど小破片が多くなる傾向にある。柱痕跡(４層)内、最上層には口縁部から肩部にかけては完形となる須恵器中甕を倒立させ埋めている。これは柱が朽ちた後の穴に入れたか、柱が立っている段階ではめ込まれた可能性もある。本柱穴の周囲には対となるであろう柱穴が見あたらない。また掘形規模に比較して柱が細い点も加味すると、一般的な建物の柱穴とは異質の施設、あるいは単独で存在していた構築物であった可能性がある。

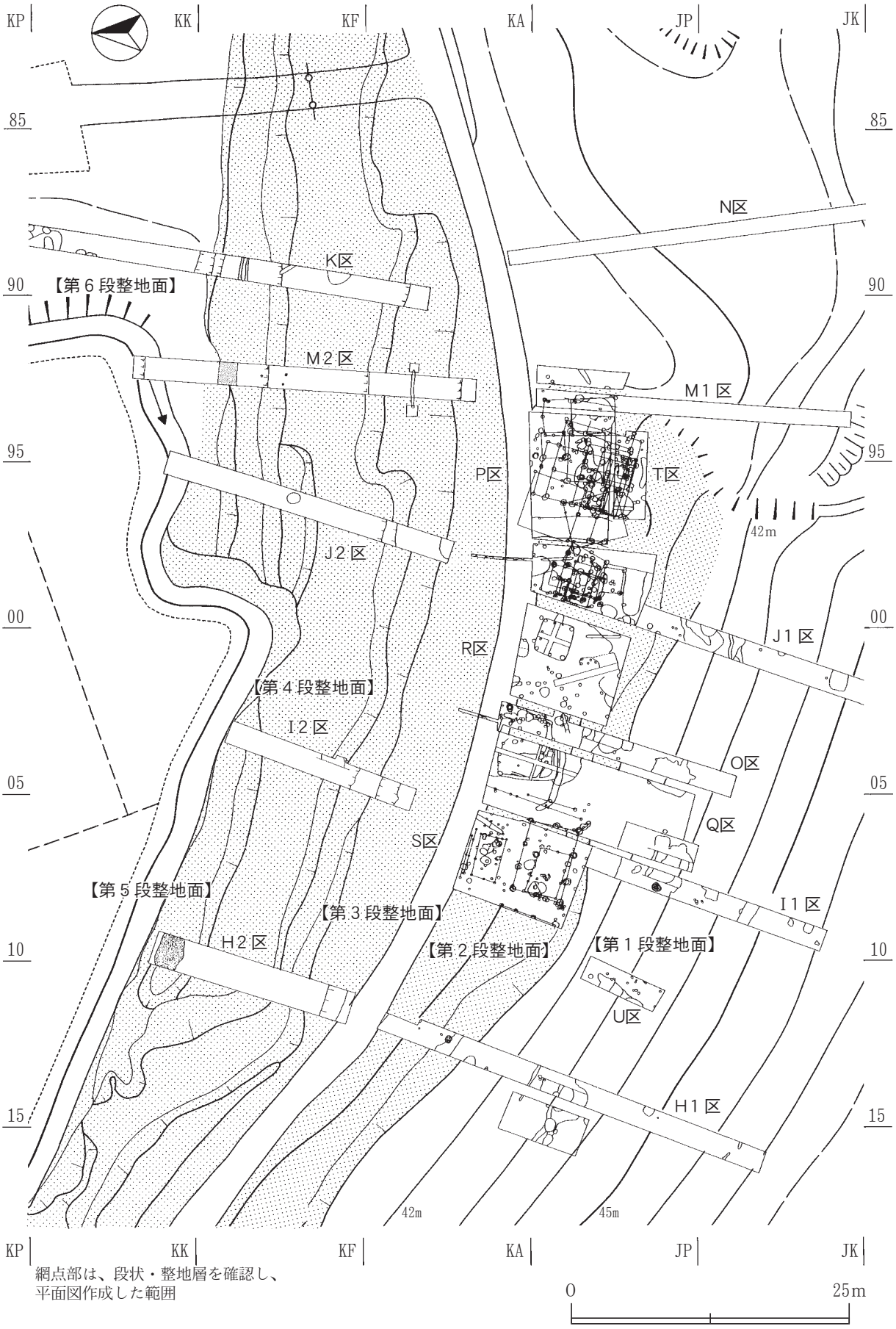
整地面・遺構の構築時期は、鍛冶工房であるSB1440に伴うSK1438Ｂ土坑(足入れ穴)出土の金床石直下出土の須恵器坏から９世紀第３四半期段階と考えられる。

《第３段整地面と遺構》　第２段整地面の下段に位置する。標高は約39ｍ、上位段(現道面)との差は約40cm。その幅は５～７ｍ程となり、確認された遺構は第119次Ｊ２区南端の土坑１基(SK1354)のみである。なお本段北端部には、中世の空堀(SD877・1319)が東西方向に開削される。

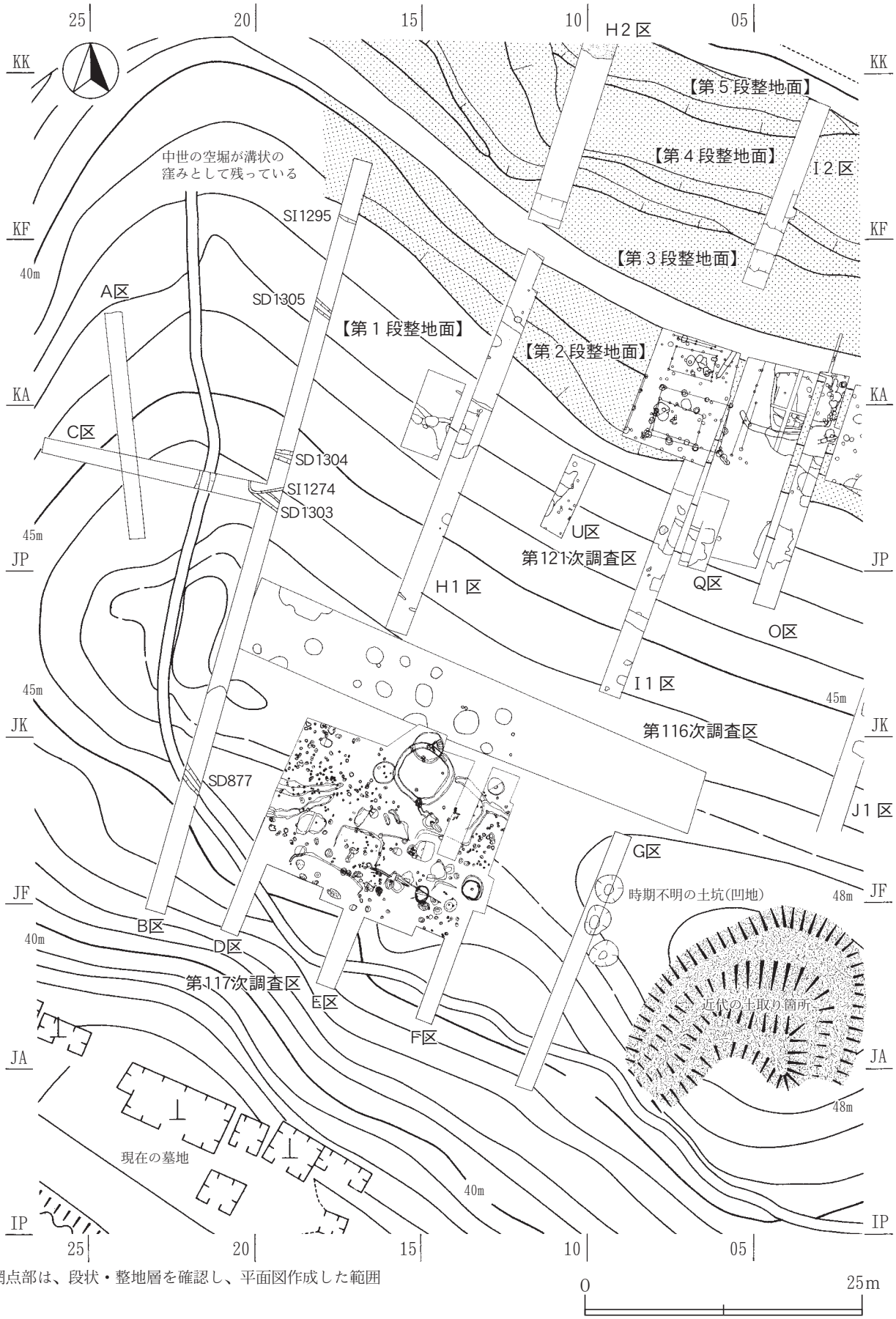
《第４段整地面と遺構》　第３段整地面の下段に位置する。標高は約38ｍ、上位段との差は明瞭であり約55cmとなる。その幅は７～８ｍ程であり、確認された遺構はＫ区内での竪穴建物跡(SKI1389)のみである。本整地面の形成時期は、第119次Ｈ２・Ｉ２区での観察により、十和田ａ火山灰降下・堆積期を上限とし、10世紀中葉を下限とする頃と判断する。

《第５段整地面と遺構》　第４段整地面の下段に位置する。標高は約37ｍ、上位段との差は明瞭であり約90cmとなる。その幅は４～５ｍ程と狭くなり、確認された遺構は、Ｋ区内の溝跡１条(SD1405)のみである。同層面は、昨年度最東端に設定したＬ区の更に東方向に連続して延びる面と同一と考えられる。

《第６段整地面と遺構》　第５段整地面の下段に位置し、丘陵地北端・最下位の整地面となる。標高は約36ｍ、上位段との差はＭ２区では明瞭で約90cmとなるが、東隣のＫ区ではわずか30cmにすぎない。同面で確認された遺構は、Ｍ２区内での溝跡１条、Ｋ区では、竪穴建物跡１棟、土坑９基、焼土遺構３基、溝跡２条である。同層面の構築時期は不明瞭ではあるが、Ｋ区での精査により、十和田ａ火山灰降下期を前後する時期及び中世(13世紀代)に使用されていたことは確実である。

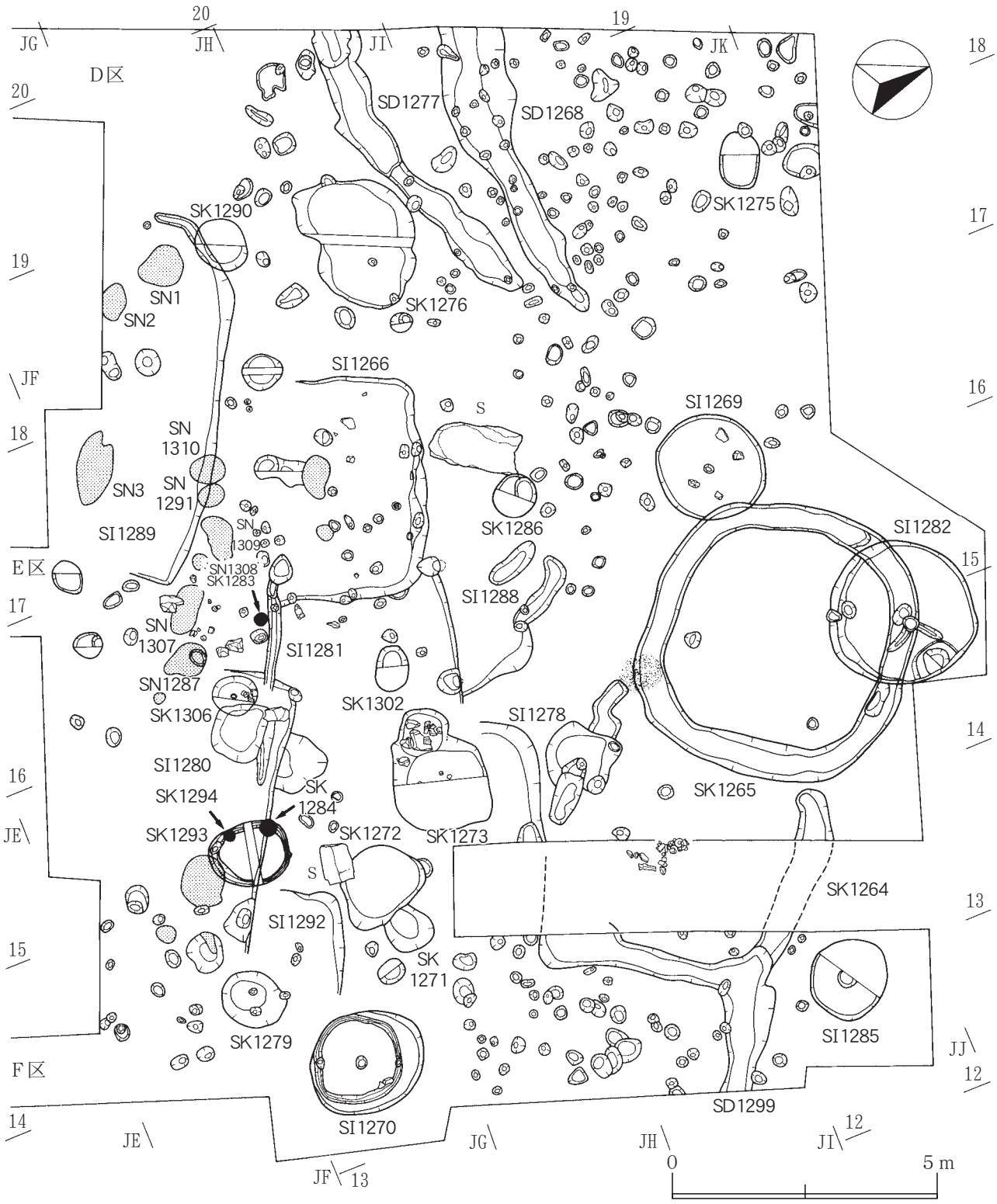


第57図　外郭西門東側地区の地形と遺構配置図(１)

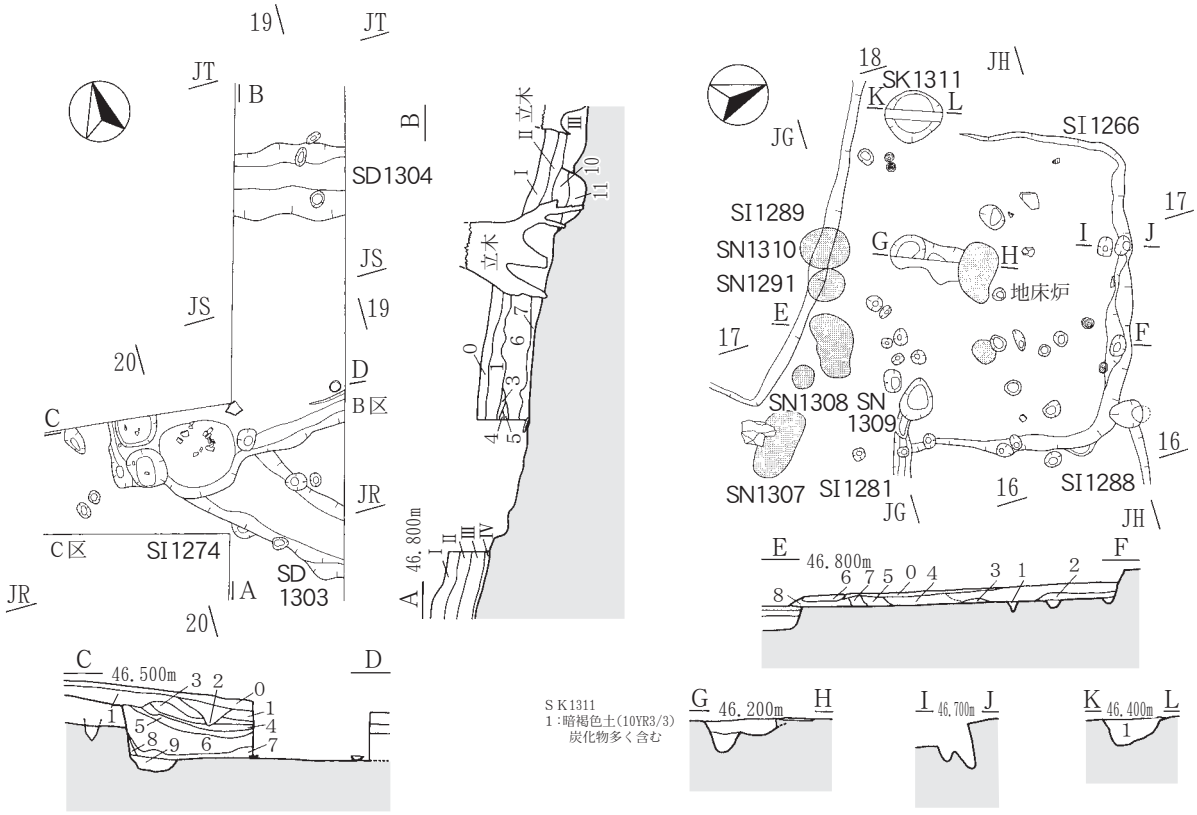


網点部は、段状・整地層を確認し、平面図作成した範囲

第58図　外郭西門東側地区の地形と遺構配置図(２)



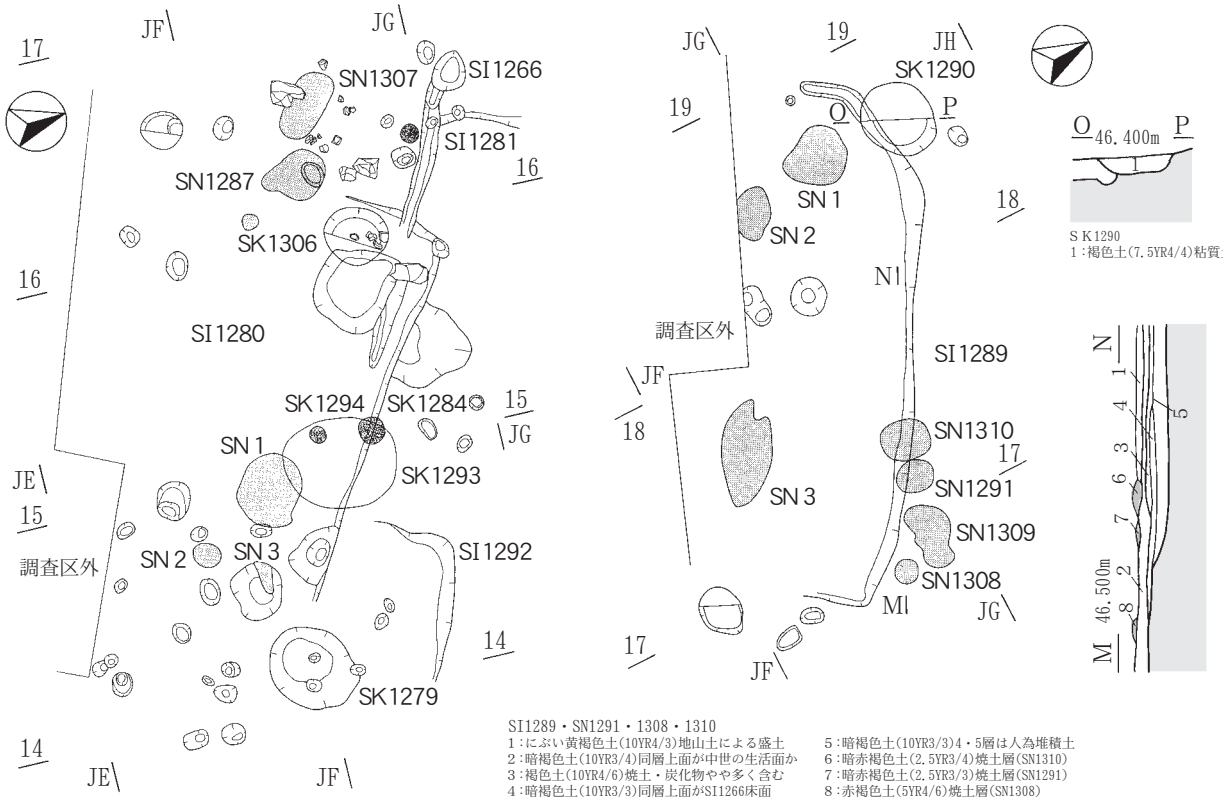
第59図　外郭西門東側地区の遺構(１)第117次調査区(１)



０:にぶい黄褐色土(10YR4/3)盛土
１:褐色土(10YR4/4～4/6)土塁盛土・粘質土
２:暗褐色土(10YR3/4)土塁を切る遺構埋土
３:にぶい黄褐色土(10YR4/3)土塁盛土
４:黄褐色土(10YR5/6)地山盛土
５:黒褐色土(10YR2/3)竪穴堆積土の最上層
６:黒褐色土(10YR2/2)焼土・炭化物やや多く含む
７:暗褐色土(10YR3/3)基本的に６層と同一
８:黒褐色土(10YR3/1)6～9は人為堆積層か
９:暗褐色土(7.5YR3/4)焼土・炭化物混入
10:暗褐色土(10YR3/3)
11:黒褐色土(10YR2/3)

ＳＫ1311
１:暗褐色土(10YR3/3)
炭化物多く含む

ＳＩ1266
０:にぶい黄褐色土(10YR4/3)盛土
１:暗褐色土(10YR3/4)炭化物少量含む
２:にぶい黄褐色土(10YR4/3)炭化物やや多く含む
３:褐色土(7.5YR4/6)焼土・炭化物やや多く含む
４:暗褐色土(10YR3/3)炭化物多く含む
５:褐色土(10YR4/4)炭化物やや多く含む
６:暗赤褐色土(2.5YR3/4)焼土層(SN1309)
７:褐色土(7.5YR4/4)焼土・炭化物少量含む
８:褐色土(7.5YR4/3)炭化物少量含む

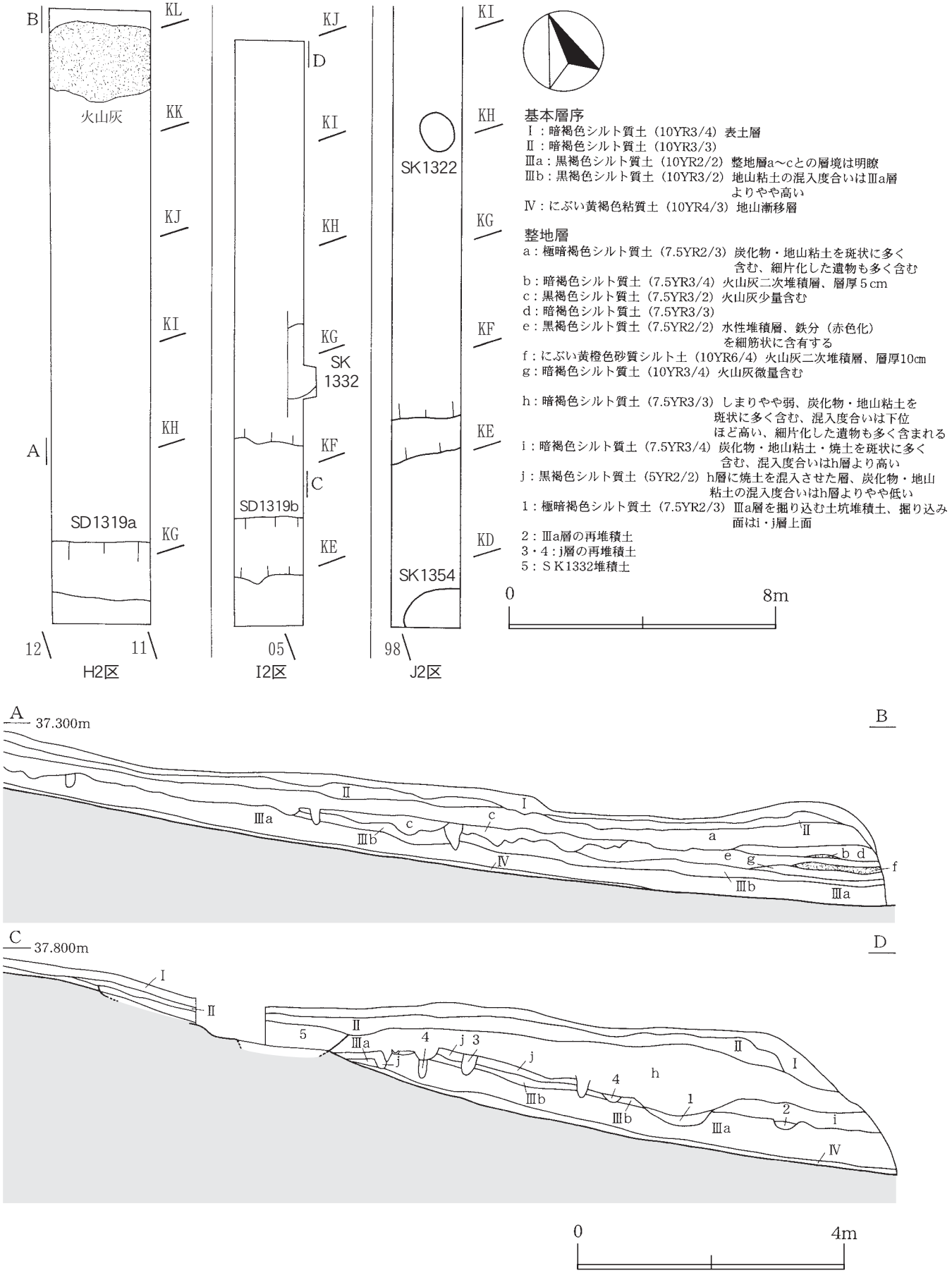


ＳＫ1290
１:褐色土(7.5YR4/4)粘質土

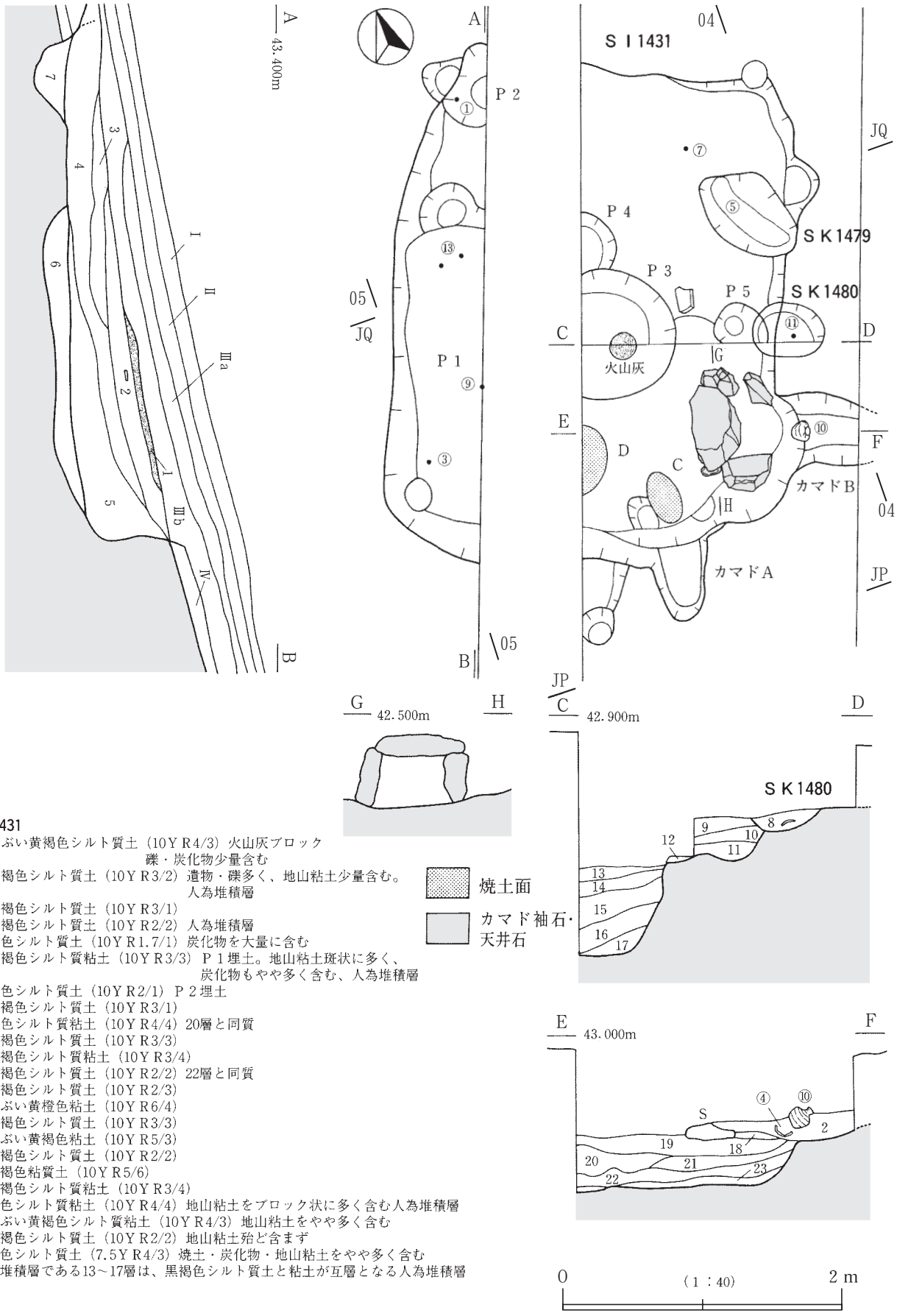
SI1289・SN1291・1308・1310
１:にぶい黄褐色土(10YR4/3)地山土による盛土
２:暗褐色土(10YR3/4)同層上面が中世の生活面か
３:褐色土(10YR4/6)焼土・炭化物やや多く含む
４:暗褐色土(10YR3/3)同層上面がSI1266床面
５:暗褐色土(10YR3/3)4・5層は人為堆積土
６:暗赤褐色土(2.5YR3/4)焼土層(SN1310)
７:暗赤褐色土(2.5YR3/3)焼土層(SN1291)
８:赤褐色土(5YR4/6)焼土層(SN1308)

0　4 m
(1:100)

第60図　外郭西門東側地区の遺構(２)第117次調査区(２)

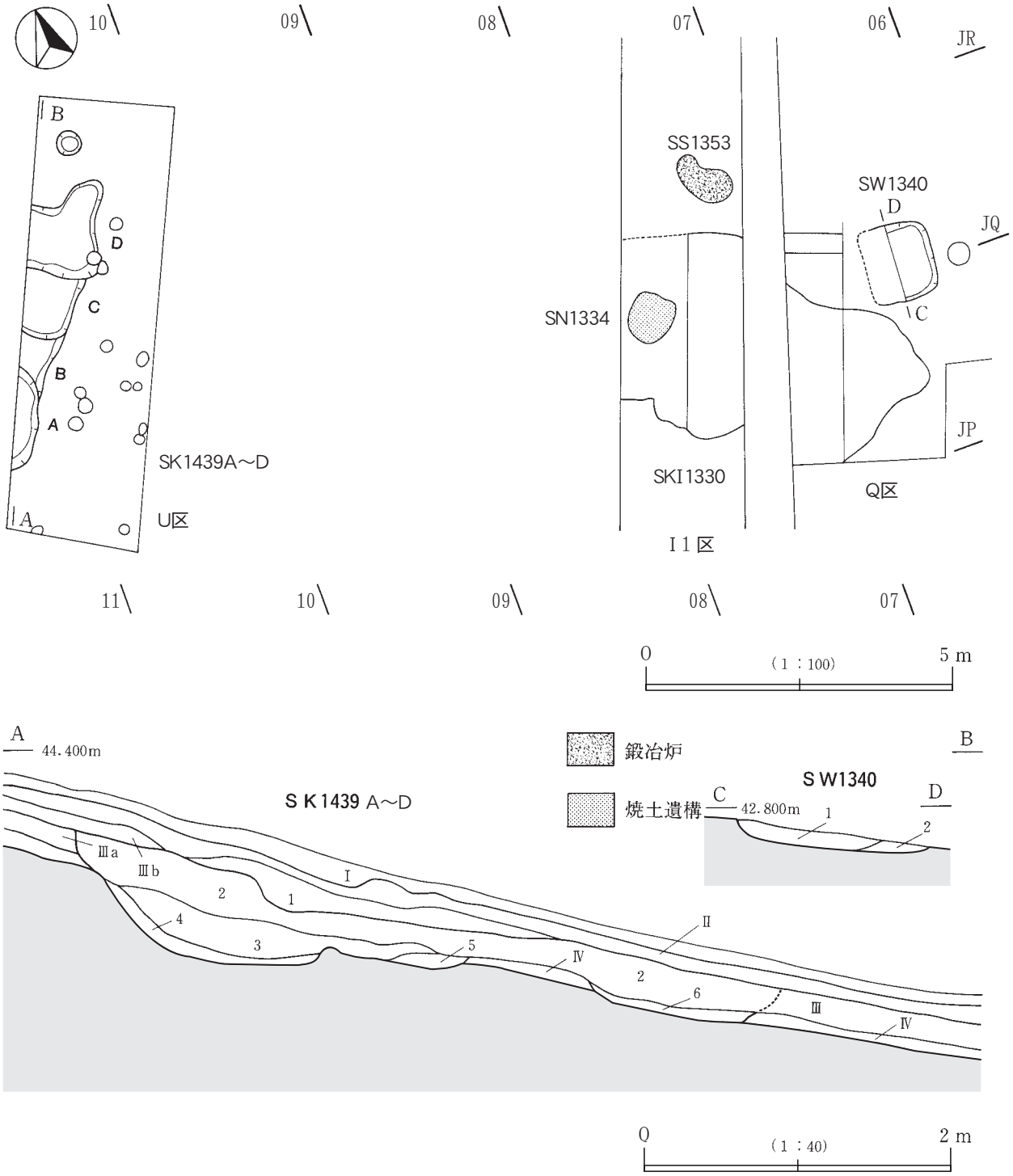


第61図　外郭西門東側地区の遺構(３)第119次調査区



S I 1431
1：にぶい黄褐色シルト質土（10Y R4/3）火山灰ブロック
礫・炭化物少量含む
2：黒褐色シルト質土（10Y R3/2）遺物・礫多く、地山粘土少量含む。
人為堆積層
3：黒褐色シルト質土（10Y R3/1）
4：黒褐色シルト質土（10Y R2/2）人為堆積層
5：黒色シルト質土（10Y R1.7/1）炭化物を大量に含む
6：暗褐色シルト質粘土（10Y R3/3）Ｐ１埋土。地山粘土斑状に多く、
炭化物もやや多く含む、人為堆積層
7：黒色シルト質土（10Y R2/1）Ｐ２埋土
8：黒褐色シルト質土（10Y R3/1）
9：褐色シルト質粘土（10Y R4/4）20層と同質
10：暗褐色シルト質土（10Y R3/3）
11：暗褐色シルト質粘土（10Y R3/4）
12：黒褐色シルト質土（10Y R2/2）22層と同質
13：黒褐色シルト質土（10Y R2/3）
14：にぶい黄橙色粘土（10Y R6/4）
15：暗褐色シルト質土（10Y R3/3）
16：にぶい黄褐色粘土（10Y R5/3）
17：黒褐色シルト質土（10Y R2/2）
18：黄褐色粘質土（10Y R5/6）
19：暗褐色シルト質粘土（10Y R3/4）
20：褐色シルト質粘土（10Y R4/4）地山粘土をブロック状に多く含む人為堆積層
21：にぶい黄褐色シルト質粘土（10Y R4/3）地山粘土をやや多く含む
22：黒褐色シルト質土（10Y R2/2）地山粘土殆ど含まず
23：褐色シルト質土（7.5Y R4/3）焼土・炭化物・地山粘土をやや多く含む
※Ｐ３堆積層である13～17層は、黒褐色シルト質土と粘土が互層となる人為堆積層

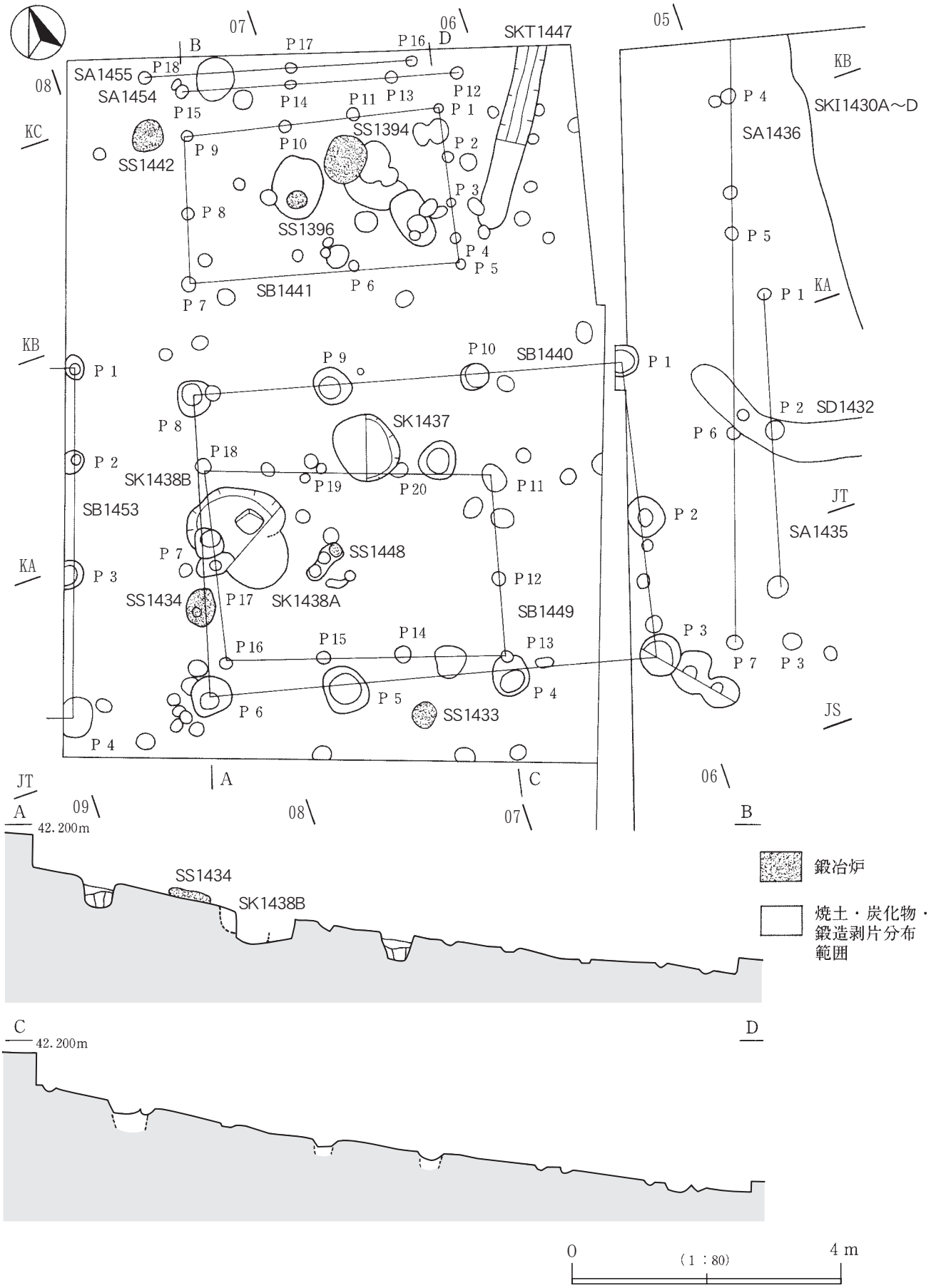
第62図　外郭西門東側地区の遺構（４）第121次調査区（１）



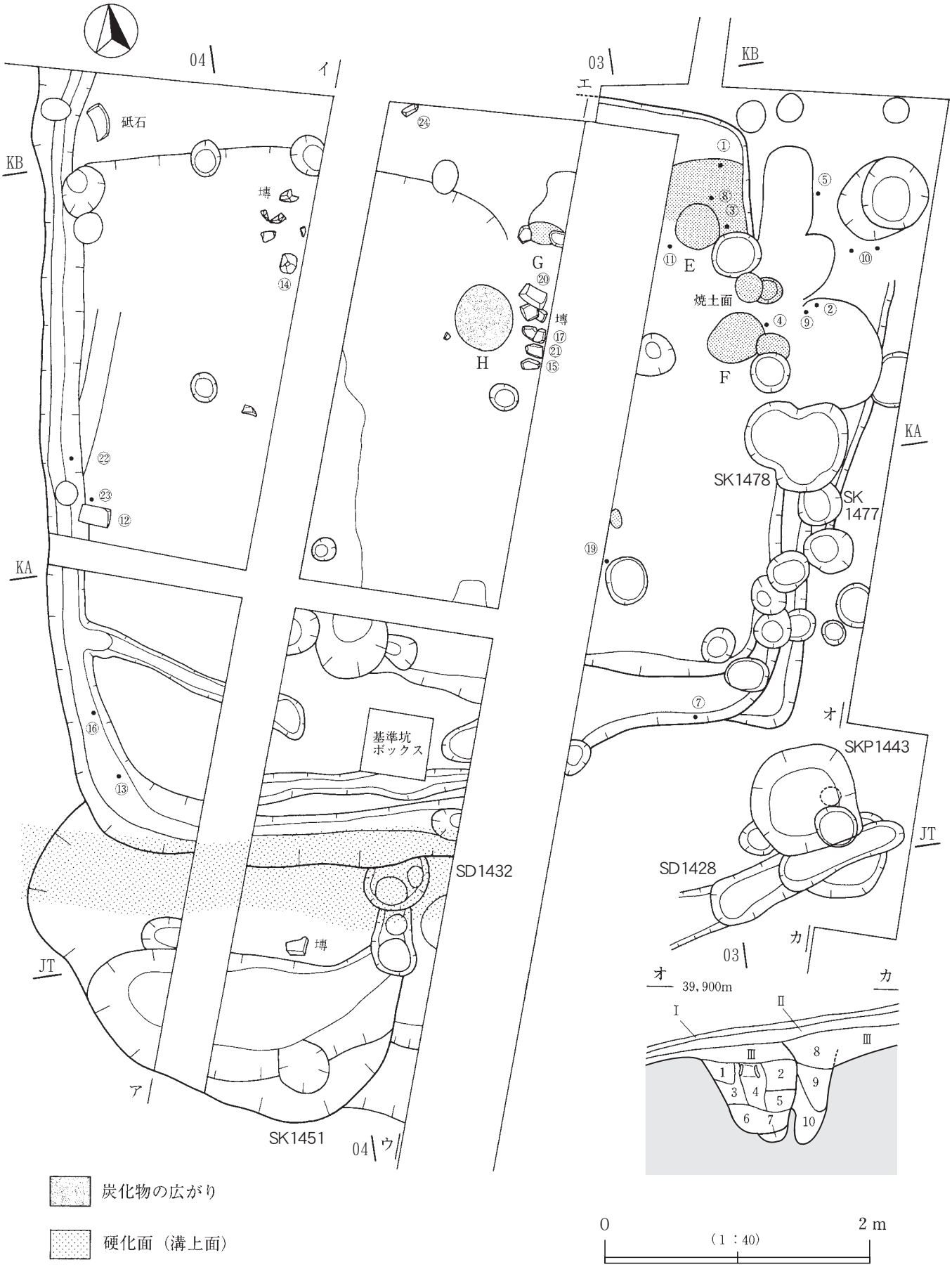
S K 1439 A～D
1：黒褐色シルト質土（10Y R 3/2）地山粘土ほとんど含まず
2：黒褐色シルト質土（10Y R 2/2）地山粘土・炭化物少量含む
3：黒色シルト質土（10Y R 2/1）地山粘土少量含む
4：暗褐色シルト質土（10Y R 3/3）地山粘土やや多く含む
5：暗褐色シルト質土（10Y R 3/4）地山粘土がブロック状に入る
6：にぶい黄褐色シルト質土（10Y R 4/3）地山粘土がブロック状に入る
※下位ほど締まり弱

S W1340
1：黒褐色シルト質土（10Y R 2/3）炭化物・地山粒子多く含む
2：黒色炭化物土（10Y R 1.7/1）
焼面色調：赤褐色（2.5Y R 4/6）

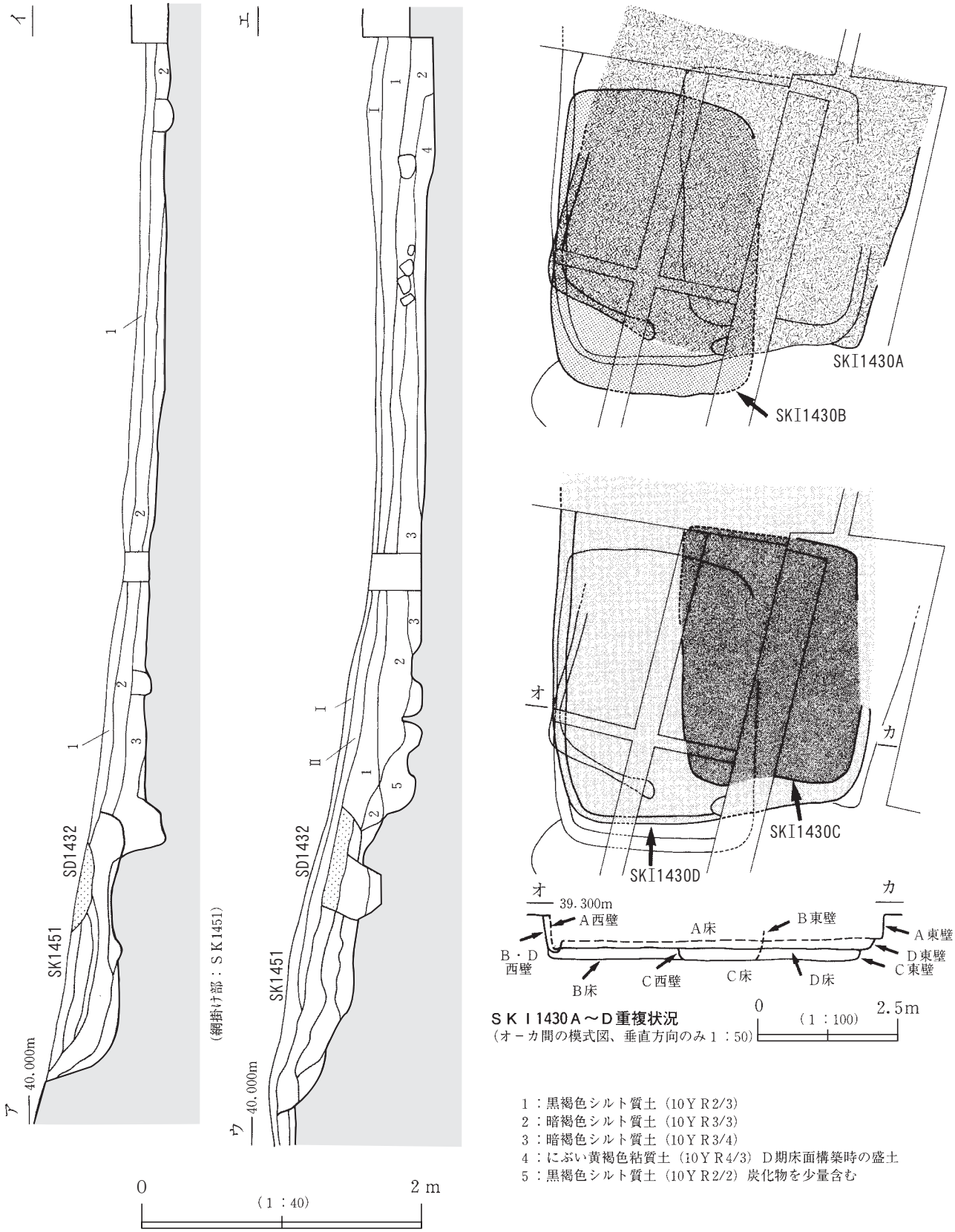
第63図　外郭西門東側地区の遺構（５）第121次調査区（２）



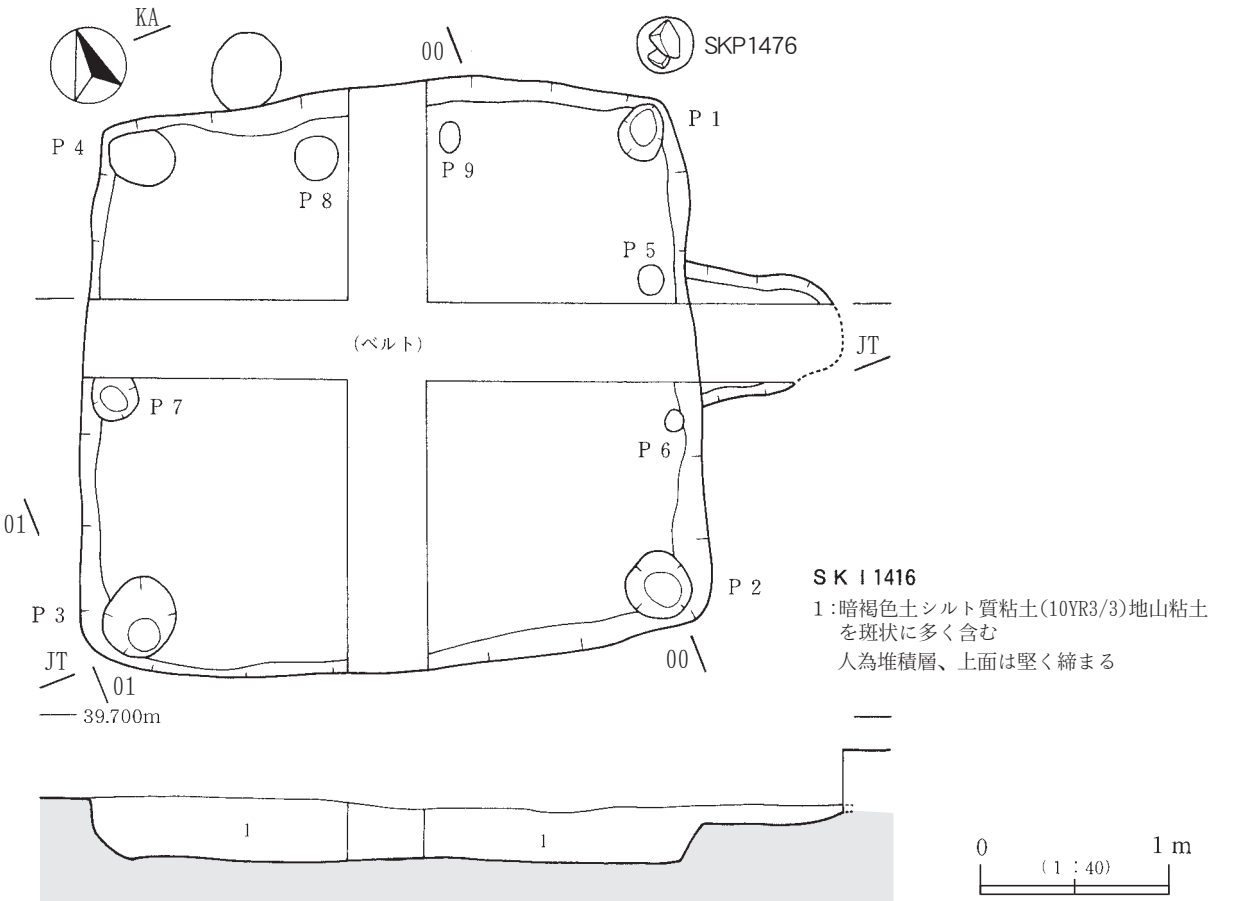
第64図　外郭西門東側地区の遺構(６)第121次調査区(３)

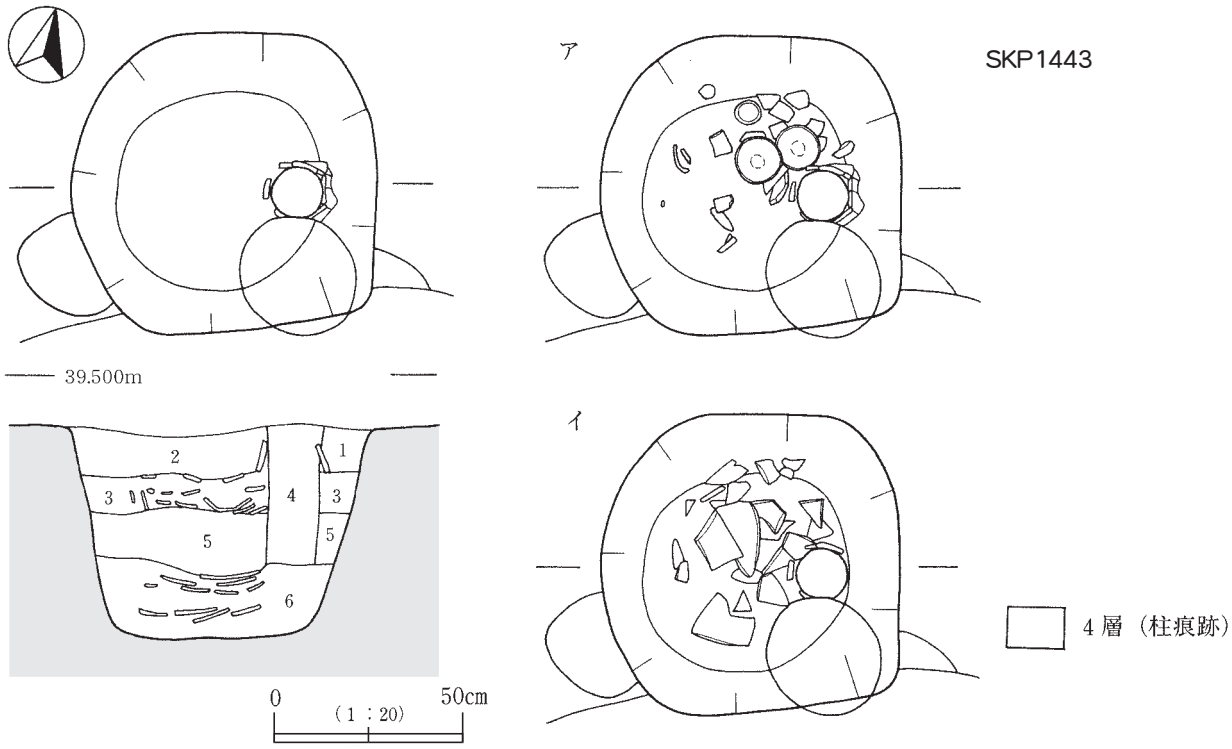


第65図　外郭西門東側地区の遺構(７)第121次調査区(４)

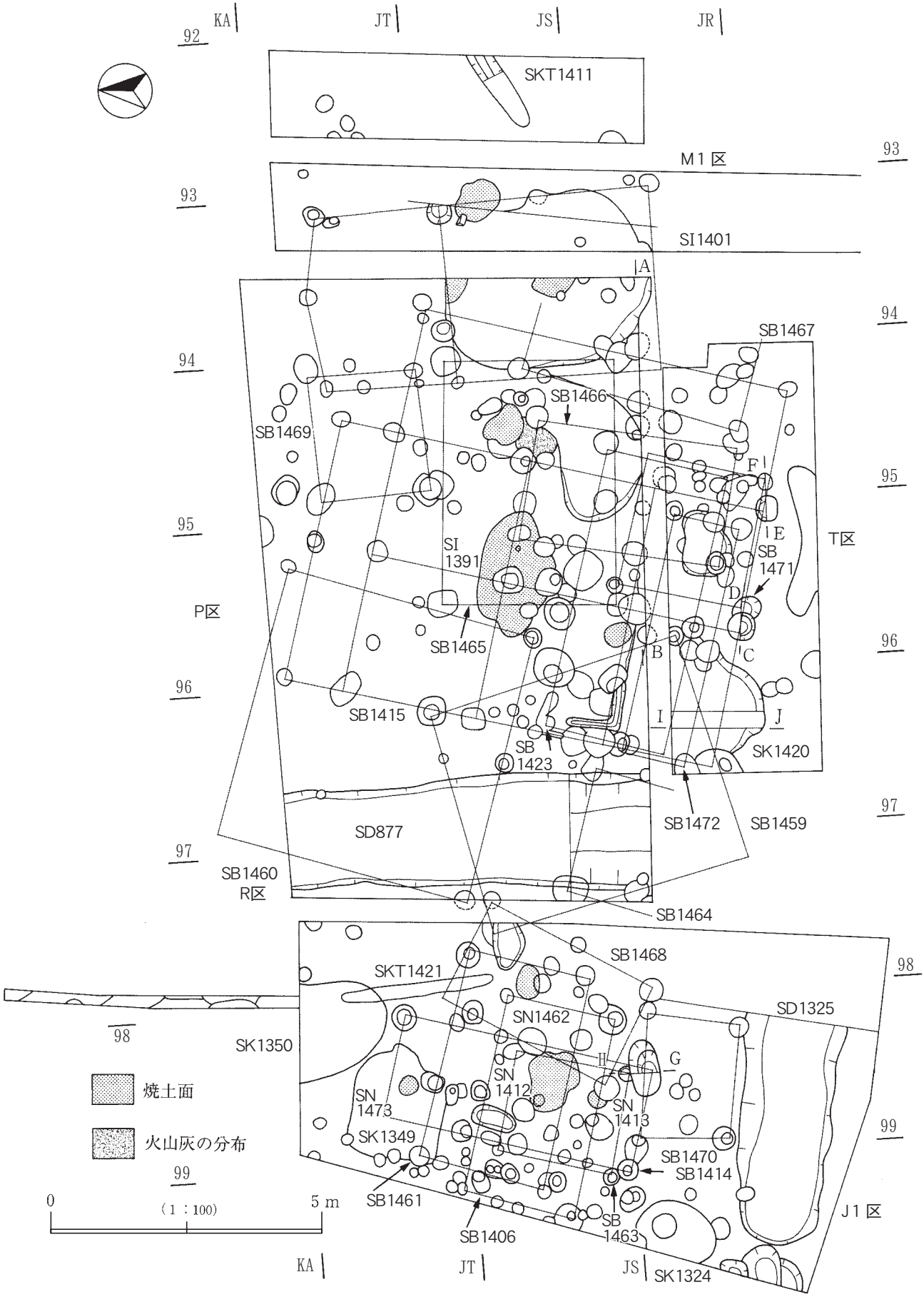


第66図　外郭西門東側地区の遺構(８)第121次調査区(５)

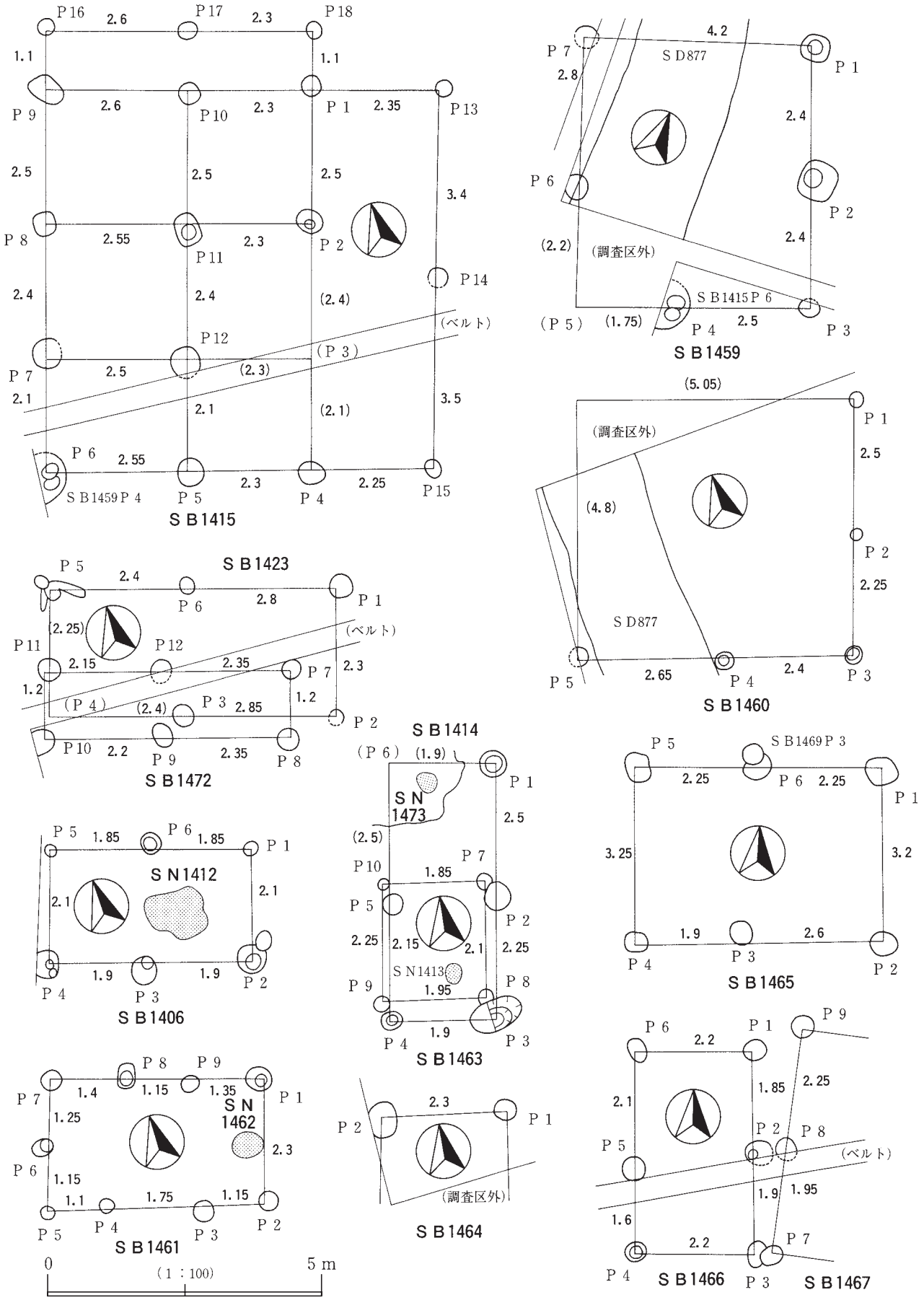




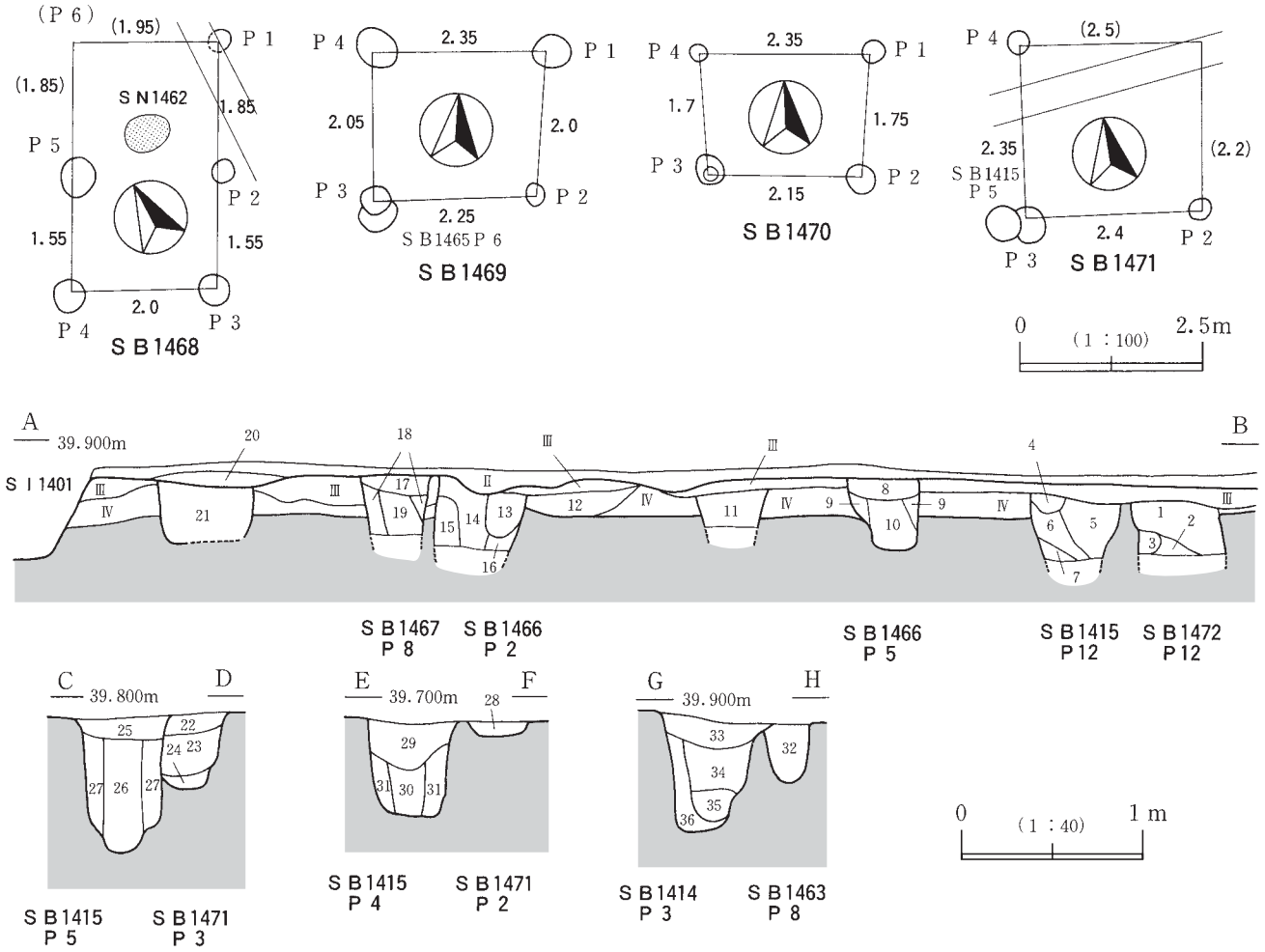
第67図　外郭西門東側地区の遺構(９)第121次調査区(６)



第68図　外郭西門東側地区の遺構(10) 第121次調査区(７)



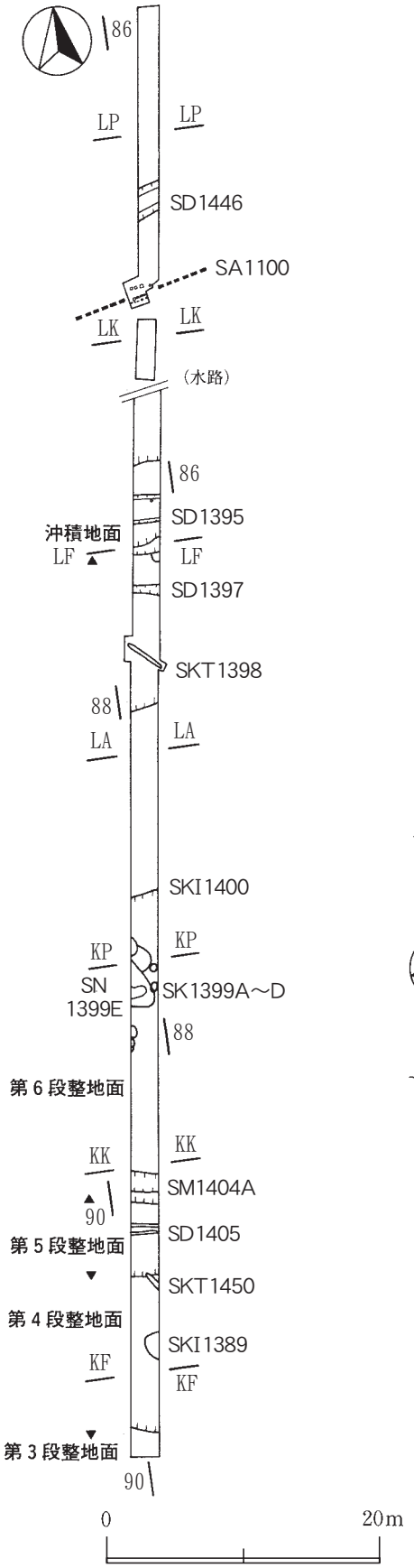
第69図　外郭西門東側地区の遺構(11) 第121次調査区(８)

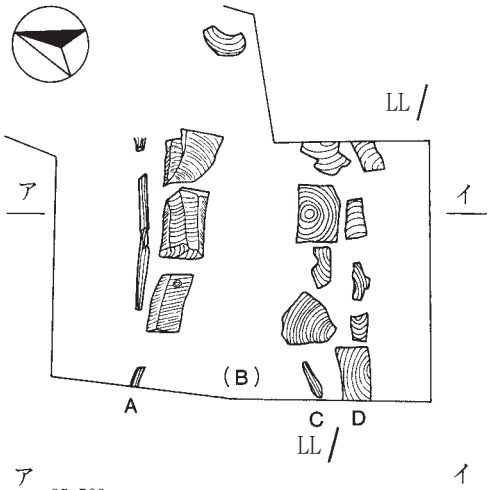


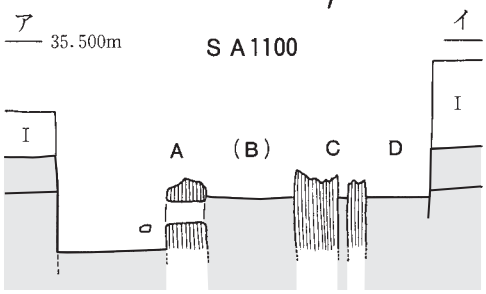
SK1420
１:黒褐色シルト質土(10YR2/2)地山粘土小ブロック少量含む
２:黄褐色粘質土(10YR5/8)地山粘土二次堆積層
３:黄褐色粘質土(10YR5/6)地山粘土二次堆積層
※全体に締まりなく、ボソボソする、人為的堆積層

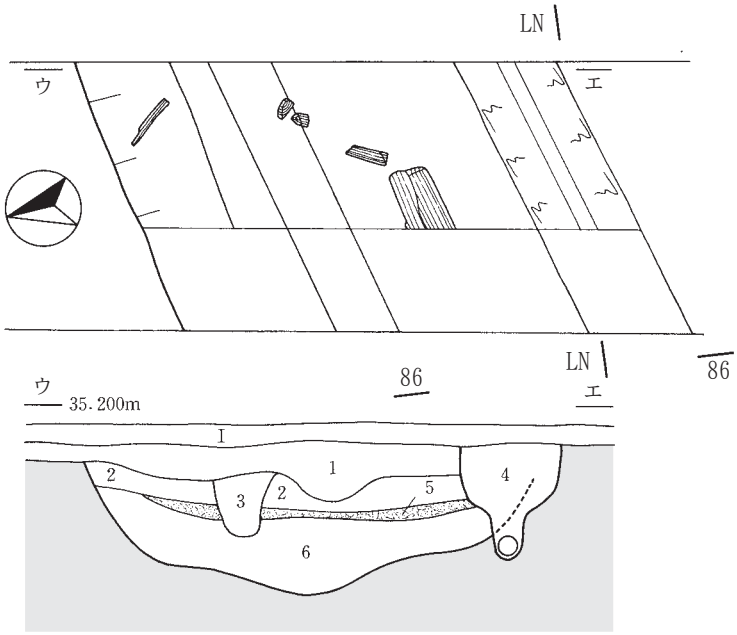
掘立柱建物跡
１:黒褐色シルト質土(10YR3/1)地山粒子・炭化物ごく少量含む
２:黒褐色シルト質土(10YR3/2)地山粒子少量含む、ボソボソする
３:黄褐色粘土(10YR5/6)地山粘土ブロック
４:黄褐色粘土(10YR5/6)地山粘土ブロック
５:暗褐色シルト質土(10YR3/3)地山粒子斑状に多く含む
６:暗褐色シルト質土(10YR3/4)地山粒子斑状に多く含む
７:黒褐色シルト質土(10YR3/2)地山粒子少量含む
８:黒褐色シルト質土(10YR3/2)地山粒子ごく少量含む
９:褐色シルト質粘土(10YR4/4)地山粘土小ブロック多く含む
10:黒褐色シルト質土(10YR3/2)地山粒子少量含む
11:にぶい黄褐色シルト質粘土(10YR4/3)地山粘土小ブロック斑状に多く含む
12:黒褐色シルト質土(10YR2/3)浅い土坑か、地山粒子少量含む
13:黒褐色シルト質土(10YR3/2)P2掘形を切る柱穴
14:黒褐色シルト質土(10YR2/3)地山粒子ごく少量含む
15:暗褐色シルト質土(10YR3/3)地山粒子斑状に多く含む
16:黒褐色シルト質土(10YR3/2)地山粒子ごく少量含む
17:黒褐色シルト質土(10YR3/2)地山粒子少量含む
18:暗褐色シルト質土(10YR3/4)地山粒子斑状に多く含む
19:黒褐色シルト質土(10YR3/1)地山粒子少量含む
20:黒褐色シルト質土(10YR2/3)地山粒子少量含む
21:暗褐色シルト質土(10YR3/4)地山粒子斑状に多く含む、ボソボソする
22:黄褐色粘質土(10YR5/6)地山粘土が主となりシルト質土が混入
23:黒褐色シルト質土(10YR2/2)地山粒子ほとんど含まず
24:黒褐色シルト質土(10YR3/1)底面堅く締まる、柱圧痕
25:にぶい黄褐色シルト質粘土(10YR4/3)地山粘土小ブロック斑状に多く含む
26:黒褐色シルト質土(10YR3/1)地山粒子ごく少量含む、ボソボソする
27:黒褐色シルト質土(10YR2/2)地山粒子やや多く含む
28:黒褐色シルト質土(10YR2/3)地山粒子やや多く含む
29:黒褐色シルト質土(10YR3/2)地山粒子少量含む
30:黒色シルト質土(10YR2/1)地山粒子ごく少量含む
31:黒褐色シルト質土(10YR2/2)地山粒子やや多く含む
32:暗褐色シルト質土(10YR3/4)地山粒子斑状に多く含む
33:黒褐色シルト質土(10YR2/3)地山粒子やや多く含む
34:黒褐色シルト質土(10YR3/1)地山粒子ごく少量含む
35:黒褐色シルト質土(10YR3/2)地山粒子少量含む
36:にぶい黄褐色シルト質粘土(10YR4/3)地山粘土小ブロック斑状に多く含む

第70図　外郭西門東側地区の遺構(12) 第121次調査区(９)









ＳＤ1446
1：オリーブ色粘質土（５Ｙ5/4）旧水田耕作土
2：オリーブ褐色粘質土（2.5Ｙ4/4）
3：暗渠掘削（柴暗渠）
4：暗渠掘削（土管暗渠）
5：黄褐色粘質土（2.5Ｙ5/4）火山灰をブロック状に含む
6：オリーブ色粘質土（５Ｙ5/4）

0　2 m
（1：40）

第71図　外郭西門東側地区の遺構(13) 第121次調査区(10)

第６表　遺構観察表（３）　外郭西門東側地区

竪穴建物跡

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	規模・形状	建物方位	床面・柱穴・壁溝など	埋土状況	出土遺物・時期・備考
ＳＩ1274	60	第117次B・C区交差部、SF1300土塁盛土の直下	南西隅部のみ確認、南側壁長3.1ｍ、西側壁長1ｍ。深さ70㎝、各壁直下に幅20㎝前後、深さ５㎝程の浅い溝		南側壁西寄りにカマド、床面上に柱穴、小土坑が掘り込まれる		須恵器坏・甕、土師器甕
ＳＩ1266	59・60	第117次拡張区中央南側で確認、SI1289を切る	東西方向は4.1ｍの隅丸方形、北側壁高40㎝		カマド・壁溝なし、径20㎝前後の柱穴10数本、床面ほぼ中央には長さ80㎝、幅50㎝の楕円状の地床炉、炉の南側には下部施設の可能性もある土坑が配置、床面中央から東側にも径30㎝程の焼土面あり		土師器坏・皿類、須恵器甕・壺類、鉄滓
ＳＩ1280	59・60	第117次拡張区南東側で確認、SI1281に切られる	北側壁長5.2ｍ、西側残存壁長1.5ｍ、壁高28㎝		壁溝なし、カマド不明、柱穴は壁直下の隅部で３本確認したが配置不明、床面上東側で焼土面３か所あり		土師器坏・甕
ＳＩ1281	59・60	第117次拡張区中央南側で確認、SI1280を切り、SK1306に切られる	北側壁長3.8ｍ		壁溝を伴う、幅15～20㎝、深さ10㎝前後		土師器坏・甕、須恵器壺
ＳＩ1288	59・60	第117次拡張区中央南側で確認、SI1266と重複、新旧不明	北側壁長2.8ｍ、壁高22㎝		北側壁の一部、床面上に位置する小土坑、北側壁に接する柱穴２本のみ確認		土師器坏・甕、須恵器、炭化物
ＳＩ1289	59・60	第117次拡張区中央南側で確認、SI1266に切られる	北側壁長6.9ｍ、壁高35㎝		カマド不明、北西隅に幅15～10㎝、深さ６～８㎝の壁溝、床面上に柱穴３本、焼土遺構３基が位置		土師器坏・甕、須恵器坏
ＳＩ1295		第117次Ｂ区北端部で確認	形態・規模は不明、南側壁高20㎝		床面上に径あるいは一辺が60～100㎝の略円・楕円形の小土坑が５基		土師器坏・甕、須恵器甕
ＳＩ1278	59	第117次拡張区中央東側で確認、SI1288、SK1273・1302と重複するが新旧不明	竪穴の北西隅部のみ確認、壁高12㎝				なし
ＳＩ1292	59・60	第117次拡張区中央東側で確認	竪穴の北西隅部のみを確認、壁高12㎝				なし
ＳＩ1431	62	第121次Ｏ・Ｑ区南東部で確認、SK1479・1480により切られる	南北長3.6ｍ、東西長2.6～2.8ｍのやや歪な長方形、壁高は斜面上位の南側で70㎝、北側で10㎝。明確な柱穴は不明。Ｐ３は径約90㎝、深さ70㎝の円形土坑		カマドは南側壁面東寄り（Ａ）と東側壁面南寄り（Ｂ）に位置、カマドＡは床面上に火床面（Ｃ）と袖部の芯材掘形と思われる小穴が残り、壁から南に煙道が延びる。カマドＢは石組みの両袖部と長さ62㎝、幅34㎝、厚さ15㎝、重量約37kgの原位置を保つ天井石を遺し、幅50㎝の煙道が残る	最上層には十和田ａ火山灰が含まれる	須恵器坏・蓋・壺・甕、土師器椀・坏・甕、砥石、鉄製品、鉄滓、軽石、炭化米、須恵器の壺と坏は埋納遺物（本文参照）

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	規模・形状	建物方位	床面・柱穴・壁溝など	埋土状況	出土遺物・時期・備考
ＳＩ1401	68 70	第121次Ｐ・Ｍ１区で確認、SB1415Ｐ14、SB1467Ｐ９に切られる	竪穴と掘立柱が一体化した建物跡、竪穴を取り囲むように屋外に南北に２間、東西に１間の柱が配置、北壁柱列から北側にもう１間分の張り出しが掘立柱部となる。柱間距離での規模は竪穴部で南北3.95ｍ、東西3.3ｍ、掘立部で南北2.4～2.6ｍ、東西3.2～3.3ｍ	Ｎ－５°－Ｗ	各柱穴は径25～45cm程、東壁北寄り（Ａ）、北壁中央部（Ｂ）、中央部（Ｃ）の３箇所で焼土面を確認、Ａ・Ｂはカマド火床面、Ｃは地床炉として確認、カマドＡは長さ90cm、幅70cm程の焼土面として確認、カマドＢは北側壁中央に接する位置、床面直上で検出、カマドＣは床面直上で検出し、一辺が80cm程	竪穴内の堆積土は12層に分けられ、基本的に人為的埋土	炭化米、種子、須恵器坏・台付坏・蓋・甕、土師器坏・甕・鍋、鉄鎌、鉄滓、砥石
ＳＩ1391	68	第121次Ｐ区中央やや西側で確認、竪穴に伴う焼土面をSB1415・1466が切る	一辺が３ｍ以上で3.5ｍ前後の方形。長さ2.3ｍ、幅1.45ｍの焼土面に支脚（土師器甕転用）が埋められていたことから、東面にカマドを置く竪穴と判断		南西隅部壁・壁溝を確認。東面にカマド、焼土は南壁に接する位置にもあり、東面に先行するカマド火床面の可能性あり		須恵器、土師器甕、※年報ではSI1423・SN1391として報告
ＳＫＩ1317		第119次Ｈ１区北端部、SD1346とSD1347の間約５ｍ			両溝間には明確な遺構は認められないものの、地山面が平坦で固く締まっている		
ＳＫＩ1321Ａ		第119次Ｈ１区で確認、SKP1321Ｂに切られる	南北1.75ｍ、東西1.15ｍ以上の矩形、深さ30cm程				須恵器坏・甕・壺類、土師器坏・甕、瓦、鉄滓
ＳＫＩ1321Ｄ		第119次Ｈ１区で確認、SK1321Ｃを切る	南北4.3ｍ、東西4ｍ以上、深さ110cm			最下層は十和田ａ火山灰の二次堆積土	
ＳＫＩ1330	63	第119次Ｉ１区で確認、SK1340・SD1357・SN1334と重複	南北の長さ3.3ｍ、東西の長さ4.6ｍ以上、深さは最深で1.4ｍ		当初土取り穴、後に鍛冶工房か	人為的に埋め戻された土で占められ、火山灰の混入は認められない	土師器、須恵器、瓦、土製品（坩堝、羽口）、鉄滓
ＳＫＩ1430Ａ	64 66	第121次Ｏ・Ｑグリット北部で確認、４時期の重複、（旧）1430Ａ→1430Ｂ→1430Ｃ→1430Ｄ（新）	東西の長さは5.7ｍ　北側壁不明瞭で規模・形状不明	Ｎ－15°－Ｅ	壁溝は竪穴の西辺から南辺の一部のみ、柱穴配置も不明		須恵器坏・台付坏・蓋・壺・甕、土師器坏・皿・台付坏・甕、瓦、羽口、炉壁片？、鉄滓、塼（遺物の多くはＤ竪穴段階に属する）
ＳＫＩ1430Ｂ	64 66		東側の壁面を除く三辺の壁面を確認、南北5.4ｍ、東西推定3.8ｍの長方形、南側壁高30cm、北側壁高5cm	Ｎ－Ｓ	竪穴の西辺から南辺に幅15～20cm、深さ10cmの壁溝、北側には壁に接して径25～30cmの柱穴が４本		
ＳＫＩ1430Ｃ	64 66		南北4.3ｍ、東西3.2ｍの長方形壁高は南西部で15cm程	Ｎ－Ｓ	壁溝なし、焼土面あり		
ＳＫＩ1430Ｄ	66		東西5.7ｍ、南北は5.8ｍ以上で調査区外北側に延びる	Ｎ－Ｓ	壁溝は幅20cm前後、深さ10～15cm		
ＳＫＩ1416	67	第121次Ｒ区北東部で確認	東西の長さ3.1～3.3ｍ、南北の長さ2.9～3.1ｍのやや歪な方形、東側壁面の中央には幅75cm、推定奥行き80cmの張り出しを伴う		床面までの深さは30cm、周壁に沿って９本の柱穴が掘り込まれ、四隅が主柱穴、主柱穴掘形は径30～40cmの略円形、３本には径15cm程の柱痕跡あり	地山粒子を斑状に多く含む暗褐色土で充填、人為的埋土	須恵器坏・蓋・甕、土師器坏・甕、羽口
ＳＫＩ1389	71	第121次Ｋ区内で確認	西側壁のみの確認、長さ3.3ｍ、幅１ｍ、深さ20～30cm				須恵器坏、土師器坏・甕
ＳＫＩ1400	71	第121次Ｋ区中央部で確認、SK1399に切られる	北側壁の立ち上がりを確認、残存する南北の長さは約４ｍ		壁溝なし、柱穴・カマド不明		須恵器坏、土師器坏・甕、格子目瓦

土坑

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	形状・規模	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＫ1271	59	第117次拡張区南東側で検出。SK1272により一部破壊	長さ85cm、幅82cmの楕円形、深さ30cm		なし	
ＳＫ1272	59	第117次拡張区南東側で検出、SK1271を切る	長さ170cm、幅130cmの不整楕円形		なし	
ＳＫ1273	59	第117次拡張区中央東部で検出、SI1288・SK1302と重複するが新旧不明	長さ180cm、幅160cmの比較的整った隅丸方形、深さ68cm	堆積土は４層に分けられ、最上層（１層）は人為堆積	土師器坏・甕、須恵器甕、平瓦	
ＳＫ1276	59	第117次拡張区西側で検出	長さ270cm、幅170～205cmの不整楕円形、深さ10～25cm	堆積土は暗褐色シルト質粘土で人為的に埋められた	土師器	
ＳＫ1279	59・60	第117次拡張区東側で検出	長さ120cm、幅105cmの略円形、深さ20cm		土師器坏・甕	
ＳＫ1286	59	第117次拡張区中央部で検出	一辺が80cmの円形、深さ35cm		なし	
ＳＫ1290	59・60	第117次拡張区南西部で検出、SI1289を切る	径100cm程の略円形、深さ85cm		なし	
ＳＫ1302	59	第117次拡張区中央東部で検出	一辺が90cm前後の隅丸方形、深さ32cm		須恵器甕	
ＳＫ1306	59・60	第117次拡張区中央南側で検出、SI1281を切る	長さ85cm、幅75cmの略円形、深さ20cm	堆積土中には焼土・炭化物を多量に含む	土師器	
ＳＫ1311	60	第117次拡張区南西部で検出、SI1266を切る	長さ76cm、幅70cmの円形、深さ45cm		土師器	
ＳＫ1321Ｃ		第119次Ｈ１区で検出、SKP1321Ｂを切る	南北1.4m、東西1.15m以上２m未満の楕円形、深さは30cm		いずれも人為的堆積層	土取り穴か
ＳＫ1345		第119次H1区で検出	東西1.25ｍ、南北0.95ｍの楕円形、深さは0.45m			
ＳＫ1351		第119次Ｈ1区で検出、SD1352に切られる	規模・形状は不明だが、SK1345に近似か		SD1345に近接	
ＳＫ1333		第119次Ｈ１区	南北1.1ｍ、東西0.7ｍの円形あるいは楕円形	人為的な埋め戻し土	土師器坏・甕、須恵器坏・甕、羽口	
ＳＷ1340	63	第121次Ｑ区南西部で検出、SKI1330の東側に隣接	一辺が1.55ｍの隅丸方形、深さは10cm前後	炭化物を主とする堆積層であり、壁面が熱を受けて赤化している	なし	炭窯跡、第119次Ｉ区でプラン確認
ＳＫ1326		第119次Ｉ１区で検出	東西１ｍ以上、南北１ｍの隅丸長方形か、深さ0.35m		なし	
ＳＫ1327		第119次Ｉ１区で検出	東西70cm、南北50cmの不整方形、深さ25cm		なし	SK1326の北約1.2ｍに位置
ＳＫ1329		第119次Ｉ１区で検出	南北1.6ｍ、東西0.9ｍ、深さ0.25～0.4m	最上位にはブロック状の火山灰が見られる		
ＳＫ1332	61	第119次Ｉ１区で検出	南北長2.1mの略円形か		土師器坏・皿・甕、須恵器坏、羽口、鉄滓	
ＳＫ1323		第119次Ｊ１区	長さ1.6ｍの略円形か、深さ45cm		土師器坏	土坑の西側は調査区外
ＳＫ1324	68	第119次Ｊ１区	径1.45ｍの楕円形、深さ15cm		土師器坏・甕、須恵器甕	土坑の西側は調査区外
ＳＫ1349	68	第119次Ｊ１区	長さ1.95ｍ、幅1.7ｍの隅丸方形			SK1350と重複、新旧不明
ＳＫ1350	68	第119次Ｊ１区	長さ1.9ｍ以上、幅1.75ｍの楕円形か			土坑の北側は調査区外
ＳＫ1335		第119次Ｊ１区、北側斜面中位上半部	南北1.65ｍ、東西1.3ｍ以上の隅丸長方形、深さ0.7m		なし	
ＳＫ1336		第119次Ｊ1区、北側斜面中位上半部	南北1.75ｍ、東西1.6ｍ以上の隅丸長方形、深さ0.75m		なし	
ＳＫ1322	61	第119次Ｊ２区で検出	南北100cm、東西85cmの略円形深さ25cm	堆積土には焼土を多く含む	土師器坏・皿類、炭化米	壁面が焼けている、SN1322で報告

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	形状・規模	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＫ1354	61	第119次Ｊ２区南端で検出	規模・形状は不明		土師器片	
ＳＫ1331		第119次Ｈ１区、北側斜面中位上半で検出	長さ90cm、幅85cmの隅丸方形か	プラン確認のみ	なし	
ＳＫ1337		第119次Ｊ１区、北側斜面中位上半で検出	径65cmの略円形か	プラン確認のみ	なし	
ＳＫ1339		第119次Ｊ１区で検出	径1.5m程の略円形か	プラン確認のみ	なし	
ＳＫ1479	62	第121次Ｏ・Ｑ区南東部で確認、SI1431を切る	長さ80cm、幅55cmの楕円形、深さ30cm		須恵器坏	
ＳＫ1480	62	第121次Ｏ・Ｑ区南東部で確認、SI1431を切る	長さ50cm、幅40cmの楕円形、深さ15cm		須恵器甕	
ＳＫ1439Ａ	63 64	第121次Ｕ区西側で検出	長さ1.5m程度の不定形土坑が4基(南からＡ～Ｄ)重複、深さは0.3～0.65m	主に地山粒子を殆ど含まないシルト質土で人為的に埋めている	須恵器甕、羽口	土取り穴か
ＳＫ1439Ｂ						
ＳＫ1439Ｃ						
ＳＫ1439Ｄ						
ＳＫ1437	64	第121次Ｓ区中央部で確認	長さ105cm、幅90cmの隅丸方形、深さ15cm		土師器坏	SB1440内に位置するがこれに伴う施設か不明
ＳＫ1451	65・66	第121次Ｑ区東側で確認、SKI1430Ｂを切る、SD1432に切られる	東西の長さ3.1m、南北の長さ約1.9mの歪な楕円形、深さ0.45m		土師器、須恵器、塼	
ＳＫ1427		第121次Ｒ区北端部で確認	東西の長さは1.4m、深さ0.45m	堆積土は地山粒子や炭化物をやや多く含む人為的埋土	須恵器甕、土師器坏・台付皿・鍋、羽口、鉄滓	
ＳＫ1429		第121次Ｒ区北西端部で確認	一辺が90cm以上の楕円形か、深さ40cm	堆積土の状況はSK1427に近似	土師器	
ＳＫ1424		第121次Ｒ区西部で検出	径60cmの略円形、深さ10cm		須恵器長頸壺、土師器坏	
ＳＫ1475		第121次Ｒ区西部で検出	径80cm程の略円形、深さ10cm		なし	
ＳＫ1477	65	第121次Ｏ区北部で確認、SKI1430Ｄを切る	径40cm程の略円形、深さ10cm	炭化物を含むシルト質土が充填、人為的埋土	土師器坏	
ＳＫ1478	65	第121次Ｏ区北部で確認、SKI1430Ｄを切る	平面形は径50cm程と径約70cmの円形土坑が連結したような達磨形		土師器	
ＳＫ1425		第121次Ｏ区中央部で確認、SK1426に切られる	南北の長さ100cm、東西の幅95cm、深さ25cm		土師器、鉄滓	
ＳＫ1444		第121次Ｐ区SN1392の南側で確認	東西約2.5m、南北1.5m程の楕円形、深さ0.15m		須恵器坏・蓋・甕、土師器坏・甕	
ＳＫ1420	68・70	第121次Ｔ区西端部で確認、SB1415・1423・1459・1472の柱穴に切られる	東西約2.3m、南北2.7m以上3.1m未満の歪な円形、深さ0.85m	人為的埋土	なし	
ＳＫ1402		第121次Ｋ区丘陵最先端部で確認、SD1395に切られる	長さ75cm、幅60cm		土師器坏	SD1397とSD1395に挟まれる位置
ＳＫ1399Ａ	71	第121次Ｋ区中央部で確認(旧)Ｃ→Ａ→Ｂ→Ｄ(新)SK1399Ｄを人為的に埋めた面上にSN1399Ｅが造られる	南北の長さ2.3m、深さ0.5m			SN1399Ｅ形成後に火山灰降下
ＳＫ1399Ｂ	71		南北の長さ1.1m、幅0.6m、深さ0.8m			
ＳＫ1399Ｃ	71		長さ1.2m以上、幅0.8mの楕円形、深さ0.15m			
ＳＫ1399Ｄ	71		南北の長さ3.1m、深さ0.5～0.8m	堆積層中位の２層には十和田ａ火山灰が観察	須恵器坏・甕、土師器坏・甕、瓦	
ＳＫ1407		第121次Ｋ区SK1399の南側で確認、SK1408を切る	径40cm程の円形、深さ0.75m		土師器	
ＳＫ1408		第121次Ｋ区、SK1407に切られる	一辺約60cmの隅丸方形、深さ85cm		土師器坏・甕、塼	
ＳＫ1409		第121次Ｋ区SK1399の南側で確認	一辺80cm程の隅丸方形、深さ10cm	炭化物を含む	なし	
ＳＫ1457		第121次Ｋ区SK1407の南側で確認	一辺あるいは径が55cm、深さ70cm		なし	

鍛冶工房跡（第121次）

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	建物構造・規模	建物方位	柱掘形規模・形状・深さ、柱痕規模等	埋土状況	出土遺物・時期・備考
ＳＢ1440	64	第121次Ｓ区南部で確認、SB1449と重複し、これより旧い	第１鍛冶工房跡の建物、桁行３間×梁行２間の東西棟。桁行総長・北側柱列で6.4m、南側柱列で6.65m、梁行総長は東側柱列で4.4m、西側柱列で4.45m	西側柱列を基準にするとN−15°−E	柱穴掘形は北側柱列で一辺が50cm前後の略円形、南側柱列で一辺が60～70cmの隅丸方形深さは約50cm、柱痕跡は径20cm前後		第１鍛冶工房跡として報告、土師器坏
ＳＳ1434	64	SB1440西側柱列上で確認	長さ55cm、幅45cmの楕円形、還元面			鍛造剥片	SB1440内の鍛冶炉
ＳＫ1438Ａ	64	SS1434の北東側約50cmに隣接し、SK1438Ｂと重複	径１m程度の円形、プラン確認のみ			鉄滓、焼土、炭化物	いわゆる足入れ穴、第１鍛冶工房内に位置
ＳＫ1438Ｂ	64	SK1438Ａと重複	一辺が約1.4mの楕円あるいは略円形、深さ0.5m			金床石、須恵器坏・甕、鉄滓	いわゆる足入れ穴
ＳＢ1449	64	第121次Ｓ区南側で確認、SB1440Ｐ４柱穴堀形に切られる	第２鍛冶工房跡の建物、桁行３間×梁行２間の東西棟。桁行総長・北側柱列で4.35m、南側柱列で4.1m、梁行総長は東側柱列で2.7m、西側柱列で2.85m	西側柱列を基準にするとＮ−10°−Ｅ	柱穴掘形は一辺が50cm前後の楕円形、柱痕跡は径15cmの円形、他に径20～25cm程度の柱穴、深さは15～35cm		第１鍛冶工房の中に入り込む形であり、足入れ穴であるSK1438Ａ・Ｂは当工房段階でも使用されていた可能性あり
ＳＳ1448	64	SB1449内ほぼ中央に位置	径15cm程の円形、還元面				SB1449内の鍛冶炉
ＳＢ1441	64	第121次Ｓ区北側に位置	第３鍛冶工房跡、北側桁行３間×西側梁行２間の東西棟。桁行総長・北側柱列で3.8m、南側柱列で4.0m、梁行総長は東側柱列で2.3m、西側柱列で2.2m	西側柱列を基準にするとＮ−15°−Ｅ	柱穴は径15～20cm程の円形で、深さは10cm前後		羽口片、鉄滓
ＳＳ1394	64	SB1441内	長さ70cm、幅60cm程の楕円形			鉄滓、鍛造剥片	SB1441内の鍛冶炉
ＳＳ1396	64	SB1441内	径約30cmの略円形			鉄滓、鍛造剥片	SB1441内の鍛冶炉

掘立柱建物跡

ＳＫＰ1321Ｂ		第119次Ｈ１区で確認	柱穴掘形１基のみ		平面形は推定径60cmの略円形、柱痕跡は径20～25cm、深さ55cm	掘形埋土は褐色粘質土、柱痕は暗褐色シルト質土	SKI1321Ａを切り、SK1321Ｃに切られる
ＳＫＰ1443	65	第121次Ｏ区北部で確認、SD1428に切られる	一辺が80cmの隅丸方形、深さは55cm、柱痕跡は径13～15cm			須恵器甕、土師器坏、砥石、台石、鉄滓	本柱穴に対応する柱穴なし、SKI1430に関連する施設か
ＳＢ1453	64	第121次Ｓ区西端部で確認	東側柱列を３間分検出し、調査区外西側に延びる。柱列の長さは5.2m	Ｎ−18°−Ｅ	柱穴掘形は一辺が40～60cmの楕円・隅丸方形、径15cmの円形柱痕を検出		
ＳＢ1415	68～70	第121次Ｐ・Ｔ区で確認、SI1401・1423を切る	桁行３間×梁行２間の南北棟。東側桁行と北側梁行にそれぞれ１間の庇が付く。平面規模は身舎部桁行総長で7.0m、北側庇部を加えると8.1m、身舎部梁行総長は北側柱列で4.9m、東側庇部を加えると7.25m南側柱列で4.85m、東側庇部を加えると7.1m	西側柱列を基準にするとＮ−10°−Ｅ	柱掘形は身舎部で径・一辺が40～55cmの円あるいは隅丸方形、庇部で径30cm前後の略円形、深さは50～75cm、柱痕跡は径20cm前後		土師器坏、鉄滓
ＳＢ1459	68・69	第121次Ｐ・Ｊ１・Ｔ区で確認、SK1420を切る	桁行２間×梁行２間の南北棟。平面規模は桁行総長・東側柱間で4.8m、西側柱間は推定5.0m、梁行総長は北側柱列で4.2m、南側柱列は推定4.25m	東側柱列を基準にするとＮ−18°−Ｗ	柱掘形は一辺55～70cm程の隅丸方形か径40～50cm程の略円形、柱痕跡は径25cm前後		

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	建物構造・規模	建物方位	柱掘形規模・形状・深さ、柱痕規模等	埋土状況	出土遺物・時期・備考
ＳＢ1468	68・70	第121次Ｊ１・Ｐ区で確認、SN1413を切る、建物内にSN1462が位置	桁行２間×梁行１間の南北棟。平面規模は桁行総長3.4m、梁行総長・南側柱列で2.0m	東側柱列を基準にするとＮ－28°－Ｅ	柱掘形は径30～50cmの略円形		
ＳＢ1414	68～70	第121次Ｊ１区で確認、SB1463を切る、建物内北部にはSN1473が、南側にはSN1413が位置	桁行２間×梁行１間の南北棟。平面規模は桁行総長4.75m、梁行総長1.9m	東側柱列を基準にするとＮ－10°－Ｗ	柱掘形は径40～55cmの略円形、深さは65cm、柱痕跡は径約20cm		土師器坏・甕、格子目瓦
ＳＢ1466	68～70	第121次Ｐ・Ｔ区で確認、SB1467に切られる	桁行２間×梁行１間の南北棟。平面規模は桁行総長・東側柱列3.75m、梁行総長2.2m	Ｎ－10°－Ｅ	柱掘形は径35～45cmの略円形、柱痕跡は径20cm前後		
ＳＢ1467	68～70	第121次Ｐ・Ｔ区で確認、SB1466、SI1401を切る	西側柱間２間の建物、西側柱列の長さは4.2m	Ｎ－16°－Ｅ	柱掘形は径40cm前後の略円形		
ＳＢ1461	68・69	第121次Ｊ１区で確認、建物内東側にSN1462が位置	桁行３間×梁行２間（東側１間）の東西棟。平面規模は桁行総長・北側柱列で3.9m、南側柱列で4.0m、梁行総長・西側柱列で2.4m、東側柱列で2.3m	Ｎ－15°－Ｅ	柱掘形は径あるいは一辺が40cm前後の略円形、隅丸方形		
ＳＢ1406	68・69	第121次Ｊ１区で確認、建物内にSN1412が位置	桁行２間×梁行１間の東西棟。平面規模は桁行総長・北側柱列で3.7m、南側柱列で3.8m、梁行総長は2.1m	Ｎ－15°－Ｅ	柱掘形は径あるいは一辺が25～50cmの略円形、隅丸方形		須恵器坏、土師器坏
ＳＢ1465	68～70	第121次Ｐ区東側で確認、SI1401を切り、SB1469・SK1444に切られる	桁行２間×梁行１間の東西棟。平面規模は桁行総長4.5m、梁行総長は東側柱列で3.2m、西側柱列で3.25m	Ｎ－Ｓ	柱掘形は径あるいは一辺が40～55cmの略円形、隅丸方形		
ＳＢ1460	68・69	第121次Ｐ区北西側で確認	桁行２間×梁行２間の東西棟。平面規模は桁行総長5.05m、梁行総長・東側柱列4.75m	Ｎ－15°－Ｅ	柱掘形は径40cm前後の略円形		
ＳＢ1423	68・69	第121次Ｐ・Ｔ区で確認、SK1444・1420を切る	桁行２間×梁行１間の東西棟。平面規模は桁行総長5.2m、梁行総長・東側柱列2.3m	Ｎ－15°－Ｅ	柱掘形は径40～50cmの略円形		
ＳＢ1472	68～70	第121次Ｐ・Ｔ区で確認、SK1420を切る	桁行２間×梁行１間の東西棟。平面規模は桁行総長・北側柱列で4.5m、南側柱列で4.55m、梁行総長は1.2m	Ｎ－15°－Ｅ	柱掘形は径35～40cmの略円形		
ＳＢ1471	68・70	第121次Ｐ・Ｔ区で確認、SB1415に切られる	１間四方の建物跡。平面規模は南側柱列2.4m、西側柱列2.35m	Ｎ－12°－Ｅ	柱掘形は径35～45cmの略円形、深さは40cm		
ＳＢ1469	68～70	第121次Ｐ区北東側で確認、SB1465を切る	１間四方の建物跡。平面規模は北側柱列2.35m、南側柱列2.25m、東側柱列2.0m、西側柱列2.05m	Ｎ－6°－Ｗ	柱掘形は径35～50cmの円・楕円形		
ＳＢ1463	68～70	第121次Ｊ１区で確認、SB1414に切られる	１間四方の建物跡。平面規模は北側柱列1.85m、南側柱列1.95m、東側柱列2.1m、西側柱列2.25m	Ｎ－10°－Ｗ	柱掘形は径30cm前後の略円形、深さは約30cm		
ＳＢ1470	68・70	第121次Ｊ１区で確認	１間四方の建物跡。平面規模は北側柱列2.35m、南側柱列2.15m、東側柱列1.75m、西側柱列1.7m	Ｎ－Ｓ	柱掘形は径35～40cmの略円形		
ＳＢ1464	68・69	第121次Ｐ区南西側で確認	北側柱間１間の建物跡。柱間2.3m	Ｎ－10°－Ｗ	柱掘形は一辺が50～60cmの隅丸方形		

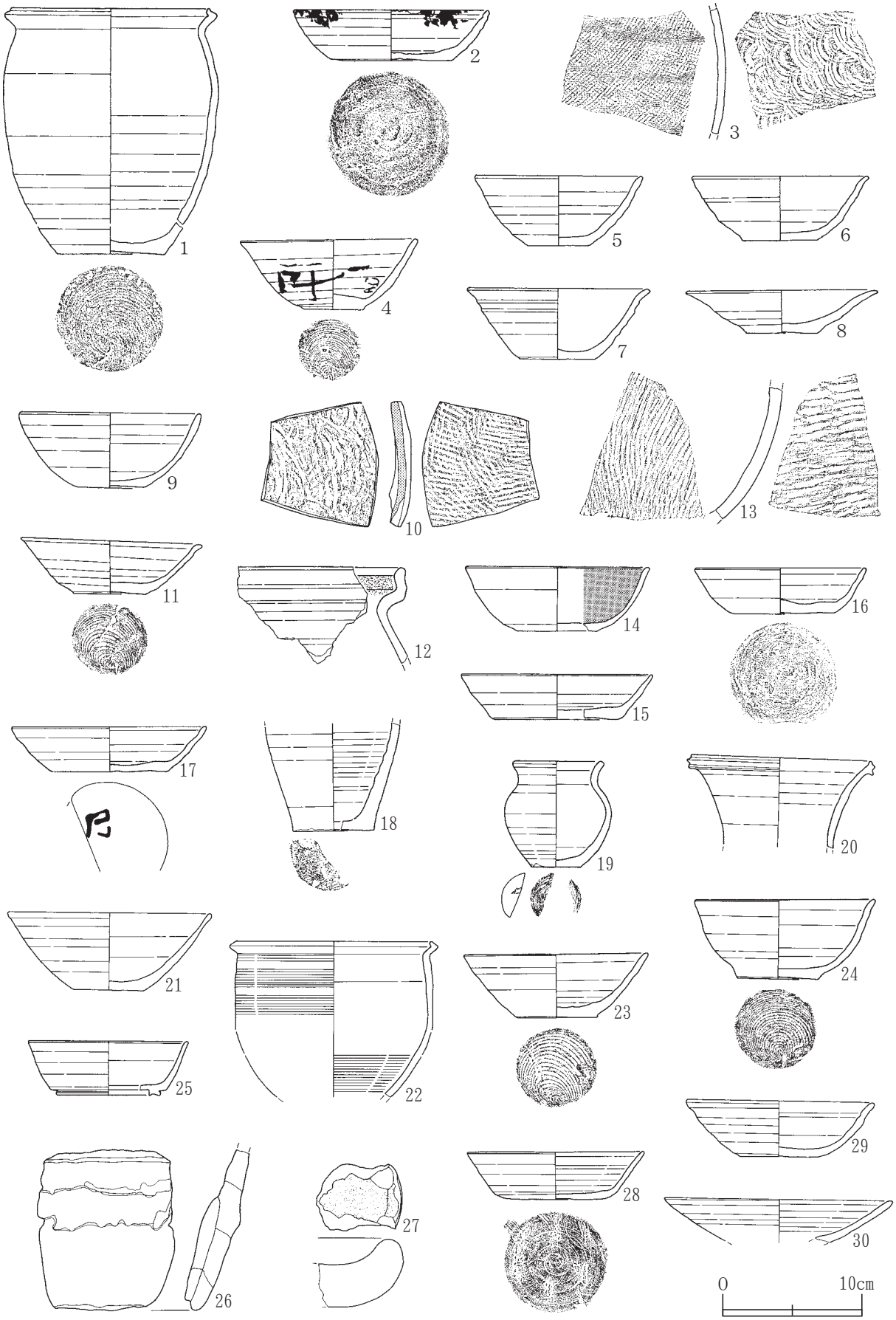
溝跡・柱列

遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	規模(幅・長さ・深さ)	方向・方位	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＤ1303	60	第117次Ｂ・Ｃ区の交差部で確認、SI1274を切る	幅90～110cm、深さ30～42cm	北西－南東方向			
ＳＤ1304	60	第117次Ｂ区で平坦面から北側にやや下る位置で確認	幅80～90cm、深さ50cm、断面形状は緩い逆台形	東－西方向			
ＳＤ1305		第117次Ｂ区北側緩斜面で確認	幅80cm前後、深さ20～32cm	北西－南東方向			SD1303と同一方向
ＳＤ1268	59	第117次拡張区西端、斜面上位に位置	最大幅1.3m、長さ６m、西端での深さ0.5m	東西方向		土師器	
ＳＤ1277	59	第117次拡張区西端で確認、SD1268より１m離れた斜面下位に位置	最大幅0.9m、長さ6.3m、西端での深さ0.28m	東西方向		土師器 平瓦	
ＳＤ1352		第119次Ｈ１区、SKI1321Ｄを切る	幅30～50cm、長さ3.6m、深さ15cm前後	東西方向			
ＳＤ1341		第119次Ｈ１区、SD1352・SS1320の北に位置	幅20～40cm、長さ3.8m、深さ10cm前後	東西方向			
ＳＤ1346		第119次Ｈ１区	幅50～140cm	東西方向		須恵器	
ＳＤ1347		第119次Ｈ１区北端部で確認	南側壁面の一部のみの確認で規模・形状不明	東西方向			
ＳＤ1343		第119次Ｉ１区で確認	幅30cm前後	東西方向			SD1344の南約1.4mに位置
ＳＤ1344		第119次Ｉ１区で確認	幅30cm前後	東西方向			
ＳＤ1357		第119次Ｉ１区、SKI1330の北側に位置する	幅30cm前後、深さ22cm	東西方向			Ｈ区のSD1341かSD1352に接続していた可能性あり
ＳＤ1328		第119次Ｉ１区で確認	幅1.1～1.2m程、深さは最深で0.55m	東西方向			第117次Ｂ区SD1304に接続していた可能性あり
ＳＤ1338		第119次Ｊ１区で確認、溝３条の重複 (旧)1356→1355→1338(新)	深さ20cm	東西方向	SD1305・1341・1352・1357と接続していた可能性あり		これらの溝は標高42～43mに位置
ＳＤ1355			幅60cm～140cm、深さ15cm前後	東西方向			
ＳＤ1356			幅25cm～55cm	東西方向			
ＳＤ1410		第121次Ｏ区中央部で確認、SK1426に切られる	幅1.1～1.9m、長さ２m以上3.4m未満、深さ15cm程、底面に幅40cm前後、深さ10cmの溝が東西に掘り込まれる	東西方向		なし	
ＳＤ1428	65	第121次Ｏ区北部で確認、SKP1443を切る	幅20～35cm、長さ約２m、深さは80cm	東西方向		須恵器甕、土師器坏・甕、瓦、鉄滓	
ＳＤ1432	64～66	第121次Ｑ区中央部で確認、SKI1430ＢとSK1451を切る	幅50～70cm、長さ5.7m、深さ20cm程	東西方向		土師器	
ＳＤ1325	68	第121次Ｊ１区南部で確認	幅1.7m前後、長さ4.2m以上の長円状、深さは南側で45cm	Ｅ－Ｗ	７層に分けられ、最上層は地山粘土の二次堆積土	土師器坏・甕、須恵器坏	119次に土坑として登録
ＳＤ1405	71	第121次Ｋ区SM1404Ａの南約３mに位置	幅1.1m程	東西方向	上面が硬化しており道路跡の可能性あり		現地表でも僅かに窪んでいる
ＳＤ1397	71	第121次Ｋ区北端部で確認	幅90cm前後、深さ約60cm	東西方向		なし	
ＳＭ1404Ａ	71	第121次Ｋ区で確認	幅1.2mの硬化面	東西方向	SD1404Ｄの窪地を利用した道路跡か	なし	
ＳＤ1404Ｂ	71	第121次Ｋ区SM1404Ａの下層で確認	幅40cm、深さ15cm程	東西方向		なし	SD1404Ｃ・Ｄに切られる
ＳＤ1404Ｃ	71	第121次Ｋ区、SD1404Ｄに切られる	幅60cm、深さ25cm	東西方向		なし	
ＳＤ1404Ｄ	71	第121次Ｋ区、SD1404Ｂ・Ｃを掘り込んで構築	幅約1.6m、深さ20cm	東西方向		須恵器坏、土師器甕	

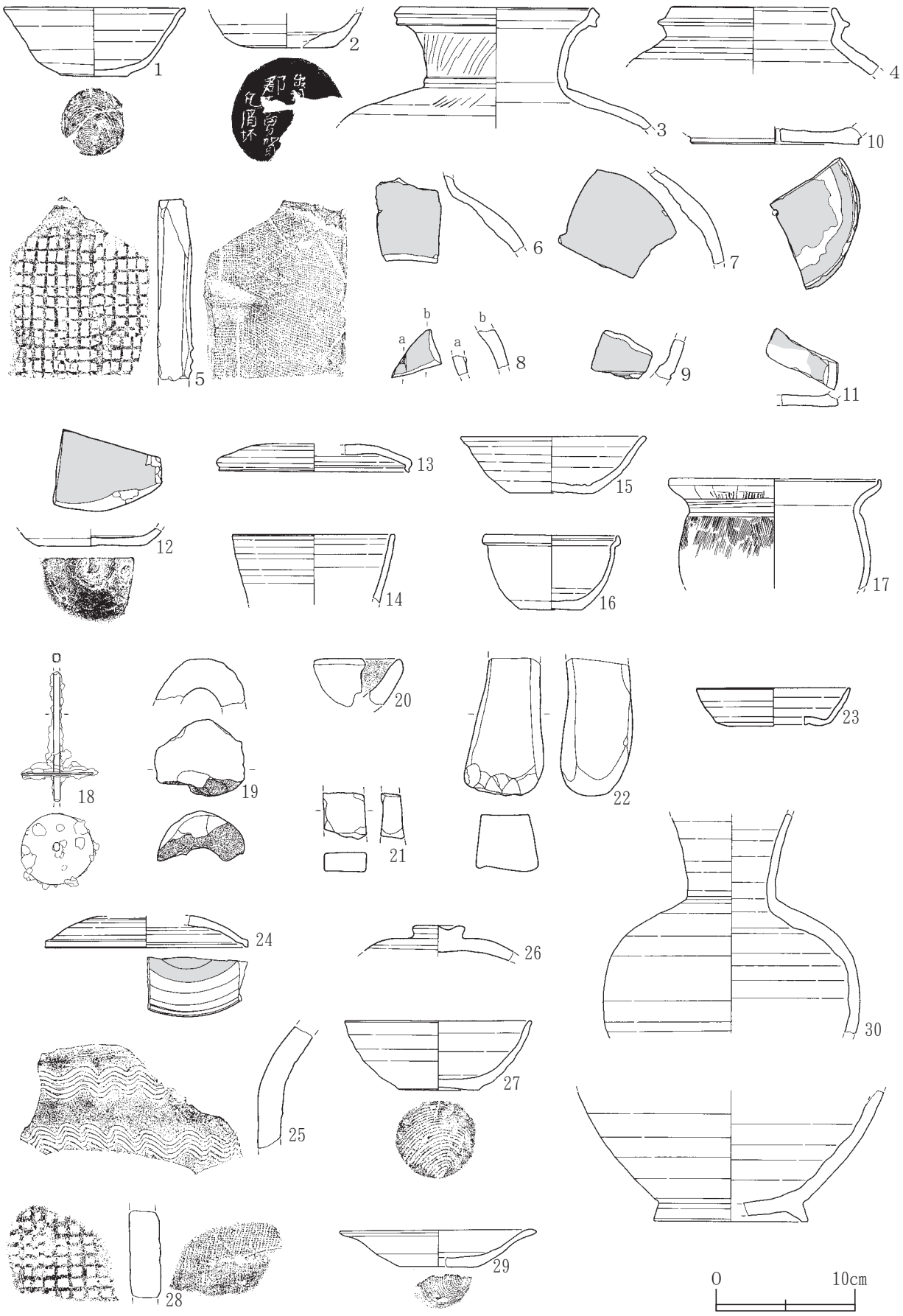
遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	規模(幅・長さ・深さ)	方向・方位	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＭ1458		第121次Ｍ２区で確認	幅約1.7ｍの硬化面	東西方向	硬化面を覆う土層に火山灰が含まれる		火山灰降下前の道路跡か
ＳＤ1446	71	第121次Ｋ区SA1100の北側約6ｍの位置	上面幅2.3ｍ程、深さ0.65ｍ	Ｗ－15°－Ｓ	埋土中位に十和田ａ火山灰が帯状に入る	木製品、平瓦	
ＳＤ1395	71	第121次Ｋ区SA1100の南約16ｍに位置	河川あるいは湿地を粘質土で埋めた後に幅2.5ｍ程の東西方向の溝を開削、深さは60cm	東西方向	最上層には十和田ａ火山灰を含む帯状堆積層が観察	須恵器坏・甕、土師器坏	
ＳＡ1435	64	第121次Ｑ区西端で確認、SB1440建物跡東側柱列の東2.1ｍに位置	径20～30cmの柱穴３本で構成、柱列の長さは4.35ｍ	Ｎ－14°－Ｅ			SB1440の東を遮蔽する施設か
ＳＡ1436	64	第121次Ｑ区西端で確認、SA1435の西に近接する	径25cm前後の柱穴４本で構成、柱列の長さは8.1ｍ、さらに北側に延びる可能性あり	Ｎ－17°－Ｅ			SB1440・1441の東側を遮蔽する施設か
ＳＡ1454	64	第121次Ｓ区北端で確認、SB1441北側柱列の外側に位置	径20cm前後の柱穴４本で構成、柱列の長さは4.1ｍ	東西方向			SB1441北側柱列の北50～65cm
ＳＡ1455	64	第121次Ｓ区北端で確認、SB1441北側柱列の外側に位置	径20cm前後の柱穴３本で構成、柱列の長さは3.95ｍ	東西方向			SB1441北側柱列の北75～90cm
ＳＡ1100	71	第121次Ｋ区北端部で確認、外郭を構成する材木塀列	材木塀列は３条確認、北側が外郭線Ａ期(創建段階)で、最も南が外郭線Ｄ期、Ｂ期は材が抜かれており、確認できた３列はＡ・Ｃ・Ｄ期の材木	東西方向に延びるが、西側が南(外郭西門方向)を向き、W－15°－Ｓ	角材はＡ期30cm×25cm程、Ｃ期30cm×20cm、Ｄ期20～25cm×15cm		

鍛冶炉・焼土遺構

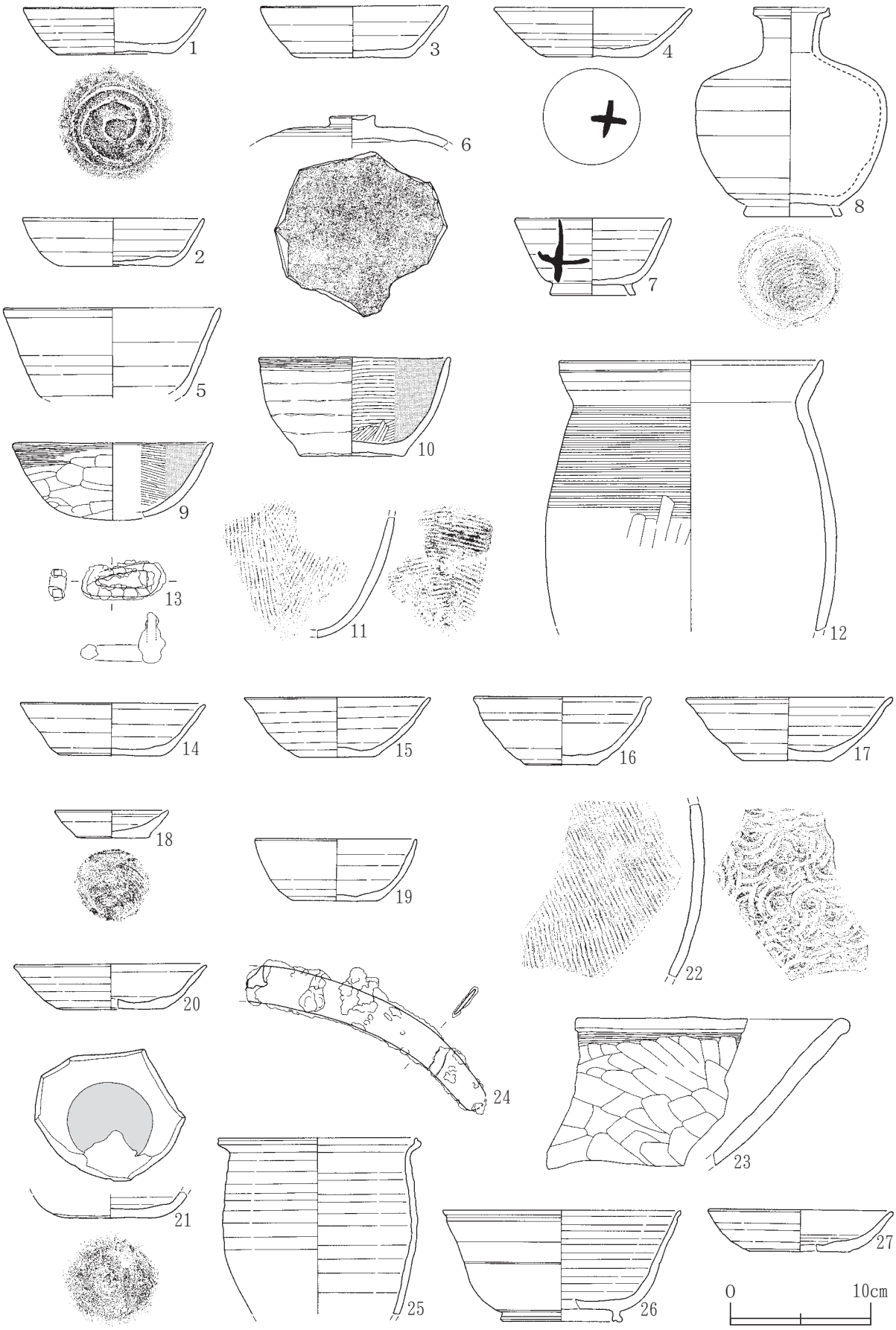
ＳＳ1320		第119次Ｈ１区で確認	径25cmの円形、還元面		SKI1321Ｄに伴う可能性あり	鉄滓、礫、鍛造剥片	
ＳＳ1353	63	第119次Ｉ１区SKI1330の北側に隣接	長さ95cm、幅50cm程の焼土面、一部還元			鉄滓、礫、鍛造剥片	
ＳＳ1433	64	第121次Ｓ区南側で確認	径約40cmの略円形			羽口片、土師器甕、鍛造剥片	
ＳＳ1442	64	第121次Ｓ区北西部で確認、SB1441の北西側に位置	径45～50cmの略円形			鉄滓、鍛造剥片	
ＳＮ1318		第119次Ｈ１区	東西75cm、南北60cmの不整円形		掘り込みなし、旧地表面での火の使用	なし	
ＳＮ1334	63	第119次Ｉ１区、SKI1330を人為的に埋め戻した上面に構築	長さ80cm、幅70cm程の略円形				
ＳＮ1474Ａ ＳＮ1474Ｂ ＳＮ1474Ｃ ＳＮ1474Ｄ		第121次Ｒ区北西側で確認	Ａ～Ｃで径25cm前後、Ｄが径10cm程の略円形		いずれも地山漸移層面での火の使用に伴う痕跡で掘り込みなし		SKI1416の西側に点在する
ＳＮ1392		第121次Ｐ区中央やや東側で焼土の広がりと火山灰の分布を確認、SB1466を切る	長さ80cm、幅60cmの焼土面			須恵器坏・蓋・甕、土師器坏・甕	本焼土面をカマド火床面とする竪穴が存在していた可能性あり
ＳＮ1412	68・69	第121次Ｊ１区で確認	長さ1.2ｍ、幅1ｍ程の不整円形				SB1406内に収まる
ＳＮ1413	68・69	第121次Ｊ１区で確認	径35cm程の略円形				SB1414・1463内に収まる
ＳＮ1462	68～70	第121次Ｊ１区で確認	長さ60cm、幅50cm程の略円形				SB1461・1468内に収まる
ＳＮ1473	68・69	第121次Ｊ１区で確認、SK1349埋土最上位に構築	径40cmの略円形				SB1414内北側に位置
ＳＮ1399Ｅ	71	第121次Ｋ区中央部で確認	径50～60cm程の不整形				SK1399Ｄの上位に形成
ＳＮ1387		第121次Ｋ区で確認、SN1388と約70cmの間隔をおいて南北に配置	径50cm程の不整円形		火山灰降下後の構築	須恵器坏、土師器坏・甕、炭化米	SK1399Ａ～Ｄの東に隣接
ＳＮ1388		第121次Ｋ区で確認	長さ75cm、幅40cmの楕円形		火山灰降下後の構築	須恵器坏、土師器坏・甕、炭化米	SK1399Ａ～Ｄの東に隣接



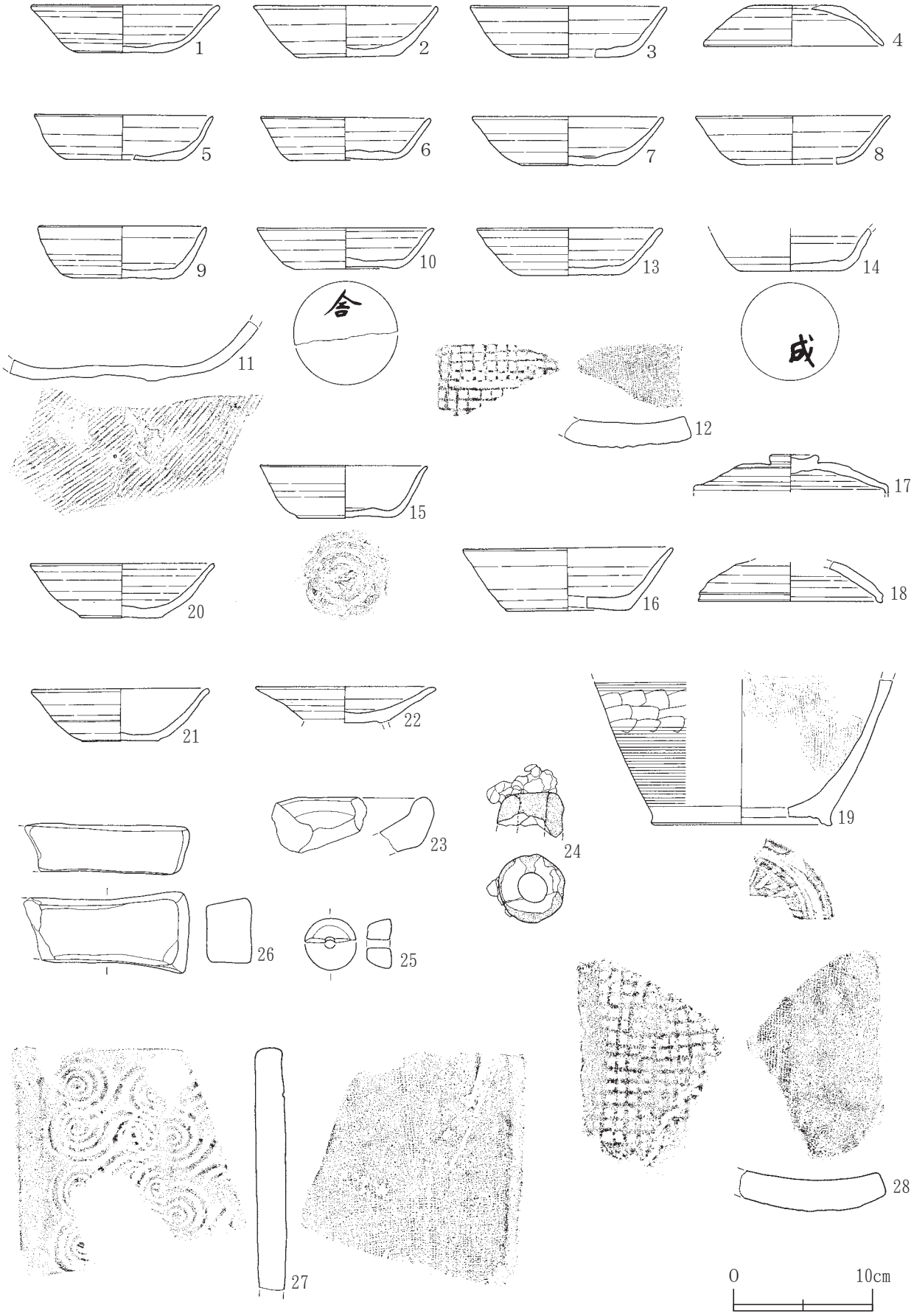
第72図　出土遺物(13) 外郭西門東側地区第117・119次(１)



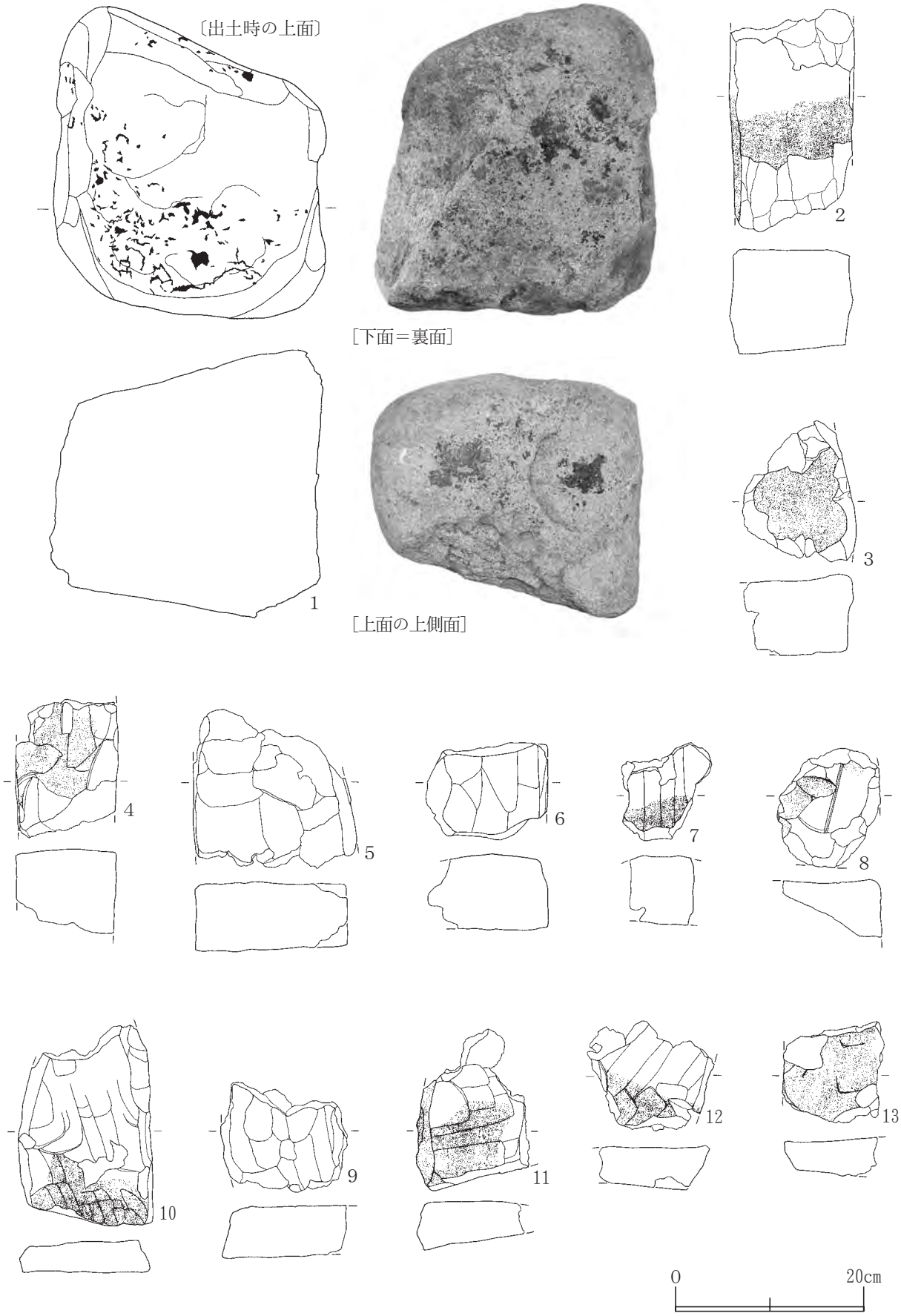
第73図　出土遺物(14) 外郭西門東側地区第119次(２)



第74図　出土遺物(15) 外郭西門東側地区第121次(１)



第75図　出土遺物(16) 外郭西門東側地区第121次(２)



第76図　出土遺物(17) 外郭西門東側地区第121次(３)

第３節　長森北方地区

１　ホイド清水周辺地区

(１)調査の目的と経緯

本地区は、第49次調査(昭和57年実施、昭和58年の補足調査を含む)と第130次調査(平成17年)の２調査区からなる。

第49次調査区は、いわゆる“ホイド清水”(あるいは“ホイド井泉”)が開口している箇所周辺を対象としており、調査は第２次５年計画において、「長森北部地区の調査の起点」として実施された。

具体的な調査に至る経緯は、「当事務所では、以前から長森丘陵北裾に帯状に位置する緩傾斜地の古代における使われ方とその機能について問題視してきた。内郭(現在は外郭)北門から長森丘陵間の水田には多量の古代建築遺材が埋れており、多くの建造物の存在が考えられる。また本年度(昭和57)第47次発掘調査によって長森丘陵上の政庁域の全貌がほぼ把握できた現在、内郭(外郭)北門と政庁域間の位置・性格・機能を究明することによって、より一層払田柵の実態を解明する手がかりとすることができるのではないかと考えた。このような経緯から第49次発掘調査は昔から遺物の多いことで知られている「ホイド井泉」を選定した。「ホイド井泉」の現状は、荒廃していると言っても過言ではない。長年の落葉の堆積が、清水を浅く、そして飲用できないものとしていたし、開墾による水田の拡張によって清水の規模が年々小さくなっている。一方では「ホイド井泉」を訪れる人々によって貴重な遺物の発見が後を絶たないのも事実である」(『年報1982』P37)。

なお、同調査は昭和57年10月から12月にかけて実施されたが、ホイド清水(SE550)の遺構確認や遺物取り上げなど慎重な調査が必要とされたものの降雪期を迎えたことから、翌年に補足調査を行うことにした。昭和58年には、４月から５月にかけて第49-2次調査としてSE550内及び周辺部の精査を実施した。さらに、調査区の北側には水路が走っていることからSE550の北側部の精査は水位の低い時期に行うこととし、10月に第49-3次調査として実施された。

第130次調査は、第７次５年計画の「払田柵跡の各地区における遺構内容及び場の機能の調査」に基づいて実施された。本計画のうち、長森丘陵部を包括する外郭地区には重点をおいており、第６次５年計画でも、主に西側丘陵部の平坦面から北側緩斜面部を対象に調査を実施してきた。第７次５年計画では同丘陵部の中央から東側にも視野を広げ、かつ丘陵末端部から沖積面に至る区域も対象とし、遺構の有無・内容及び場の機能解明を目指すことにした。左記の方針のもと第130次調査は、政庁域の北西側にあたる丘陵北端部のホイド清水の東側隣接地を対象とし、当地区の遺構内容の解明を目的として実施することにしたものである。この中での具体的目標は、“清水”に関連する遺構の有無と分布を探ることである。

なお、当地区を選地した理由のひとつには、管理団体の大仙市が進めている外郭北門跡周辺を対象とする環境整備事業の基礎資料となる遺跡情報を得ることへの呼応も含まれている。

(２)調査区の立地

調査対象地区は、政庁域の北西側にあたる長森丘陵北端部であり、南側から北側に向かって標高が漸減し、沖積地面に至る。南側の丘陵地での標高は37.0m、“ホイド清水”は、丘陵の最末端に立地

しており36.0ｍ、沖積地面では35.4ｍである。なお、第130次調査区の東隣には昭和63年に行った第75次調査区がある。調査区の現況は雑木林であったが、元々は杉林(人工林)であり、第75次調査に先立ち伐採したところである。

（３）検出遺構と遺物

①　基本層序

当調査区の基本層序は、第49次調査区SE550西側で観察した結果を代表させる。

第Ⅰ層：暗褐色シルト質土(7.5YR3/3)表土層、一部撹乱を受けている。層厚は５～15㎝。

第Ⅱ層：黒褐色シルト質土(7.5YR2/3)古代の遺物包含層、一部撹乱を受けている。層厚10～20㎝。

第Ⅲ層：暗褐色シルト質土(10YR3/3)木製品を主とした古代の遺物包含層。層厚15㎝前後。

第Ⅳ層：黒褐色シルト質土(10YR3/2)植物遺体層。泥炭質土。層厚10～15㎝。

第Ⅴ層：黒褐色シルト質土(10YR2/2)縄文土器を包含する層、部分的に欠落する。層厚５～15㎝。

第Ⅵ層：にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)地山漸移層。層厚５～10㎝。

第Ⅶ層：黄褐色粘質土(10YR5/6)地山。

第130次調査区では、第Ⅲ層相当層内から火山灰が検出されている。その下位に層厚25㎝以上の泥炭層〔褐色シルト質土(10YR4/4～4/6)〕も確認された。また、第Ⅱ層相当層上位には、地山粘土の二次堆積層〔褐色シルト質粘土(10YR4/4)〕が認められ、丘陵部斜面上位側から流入した地山土由来の可能性がある。同層は第130次Ｂ区では層厚が50㎝に達する箇所も観察された。

②　調査概要

検出遺構と出土遺物の概要は、遺構観察表と遺物観察表にまとめたが、特記すべき事項について下記に示す。

【第49次調査】

《遺構》　第49次調査区は、ホイド清水を含む近辺一帯である。補足調査を含め115㎡が調査され、古代の遺構ではホイド清水(SE550)をはじめ、土坑９基、溝跡４条、柱列１条、配石遺構３基等が検出された。なお、同調査区内からは縄文時代の土坑２基や前期・晩期の土器、石器も出土した。各遺構・遺物の詳細は、第７表を参照されたい。

《遺物》　本項では、絵馬と木簡について紹介する。

絵馬は、SE550堀形内から出土した。長さ15.1㎝、幅2.3㎝、厚さ0.3㎝で、表・裏共に墨痕鮮明な絵が描かれている。観察によって上端と右側端は確認しており、下部及び左側部は欠損している。中央部は折損寸前で、表面は剥離折損している。描かれている絵の詳細は不明であるが、観察の結果次のように推測される。表面は、笠をかぶり衣をまとった人物が姿勢正しく乗馬している絵であろう。人物は後半身、馬は胴部～臀部・尾・後足が明確である。馬には、鞍や尻繋・杏葉もしくは馬鈴らしきものも認められる。裏面は中央から上下に運筆が分かれており、下方に２本の弧が描かれているが、何を意味するものかは不明である。

木簡は、SE550内及び周辺から７点が出土・採集されている。第１～３号・15号木簡は採集資料であり、第15号は調査区北側の現水路面北壁から突出していたものである。第16号木簡はSE550北側板

近くから、第17号木簡はSE550北西のKF37グリッド出土である。第23号木簡はSE550掘形内から幅４㎜程に縦割りし、さらに折られた状態で確認された。釈読等は『払田柵跡Ⅱ』を参照されたい。

【第130次調査】

《遺構》　本調査の結果、確認された遺構は土坑１基、溝跡２条、硬化面４箇所である。土坑を除く溝跡・硬化面については、おおむね東南東－西北西方向という同一軸線上に延びており、重複関係はあるものの、それぞれが関連をもった施設であったと推測される。硬化面は、溝のように明確な掘り込みを伴うものではないが、特定の範囲内(帯状)が周囲同一面との土層色調と明らかに異なり、かつ土壌硬化が観察されたものについて称した。

各遺構の重複と火山灰との関係を整理すると、次のような新旧関係が成立する。

(旧)SM1771硬化面・SM1772硬化面→(火山灰降下)→SD1769溝跡→SD1768溝跡→SM1767硬化面・SM1770硬化面→SK1766土坑(新)である。

《遺物》　古代の出土遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器があり、コンテナ(容積18㍑)数にして６箱弱の出土である。このうち、土師器が90％、須恵器が10％を占める。また、土師器について見れば坏類が全体の90％を占め、甕類は10％にすぎない。一方、重量比で見ると、出土総重量36.7kgのうち、土師器が31.8kg(87％)、須恵器が4.9kg(13％)となる。また土師器のうち坏類は29.6kg(93％)、甕類が2.2kg(７％)であった。土師器坏類の個体数は、底部が１／２以上残存するものを１個体として数えると、124個体であった。

第85図23は、灰釉陶器椀である。井上喜久男氏によると、「外側面腰部から底部に篦削り整形を施し、貼付高台を設けたものである。灰釉は内外の側面部のみに施釉され、直重ねによる焼成が行われている」と報告を受けた。編年的年代は、９世紀後半の猿投窯Ｋ-90号窯期である。

２　丘陵北側裾部

(１)調査の目的と経緯

本地区は、第127次調査(平成16年)と第133次調査(平成18年)の２調査区からなる。両調査とも第７次５年計画による「払田柵跡の各地区における遺構内容及び場の機能の調査」に基づいている。

第127次調査は、政庁北門跡から外郭北門跡に至る道路(仮称：北大路、総長約125ｍ)の位置・構造を確認することを目的に実施した。過去において当該道路跡の有無、位置を追跡した調査は、政庁北門寄りの丘陵部を対象とした第60次調査(昭和60年)と外郭北門寄りの沖積地を対象とした第113次調査(平成10年)がある。今回の発掘調査対象地区には、両者の中間にあり、丘陵地から沖積地に移行する地域を選定した。

第130次調査も上記の方針のもと、政庁域の北側及び北東側丘陵北端部を対象とし、この地区の遺構内容の解明を目的に実施することにしたものである。

なお、当地区を選地した理由のひとつには、管理団体の大仙市が進めている外郭北門跡周辺を対象とする環境整備事業の基礎資料となる遺跡の情報を得ることへの呼応も含まれている。

（２）調査区の立地

第127次調査区は、政庁北門から北西側約50ｍの丘陵地最北端にあたる。標高は36.0ｍであり、北側の沖積面との比高はわずか0.5ｍである。調査区は民有地であったが、平成16年度に大仙市(当時は仙北町)が買い上げを行い、公有地化していた箇所にあたる。現況は杉林であったが、調査前に伐採が行われた。

第133次調査区は、政庁域の北側及び北東側の長森丘陵北端部であり、北側に広がる沖積地面との接点部にもあたる。丘陵北端部での標高は、35.7～37.1ｍであり、沖積地面との比高は0.6～2.0ｍである。トレンチは、２地区に４本設定した。両地区とも平成16年度に大仙市が史跡の公有化計画に基づく用地買収を行ったところである。東側地区(払田字百目木56)には南北方向に３本のトレンチ(Ａ～Ｃ区)を設定した。また西側地区(払田字百目木35)は、東側地区の西約85ｍに位置し、１本のトレンチ(Ｄ区)を設定した。Ｄ区の西約15ｍには、平成３年度に第89次調査として実施した調査区が位置する。

調査区の現況は雑木林であったが、元々は杉林であり、公有地化後に伐採したところである。

（３）検出遺構と遺物

①　基本層序

当調査区の基本層序は、第133次Ｄ区中央南側の東壁面(第81図下SM1823周辺部、Ｇ－Ｈ間)で観察した結果を代表させる。

第Ⅰ層：黒褐色シルト質土(10YR3/2)表土・盛土層。層厚は20cm前後。

第Ⅱ層：灰褐色シルト質土(5YR4/2)層厚10～15cm。

第Ⅲ層：黒褐色シルト質土(10YR3/2)層厚12～30cm。

第Ⅳ層：にぶい黄褐色砂質シルト土(10YR5/3)火山灰を含む層。層厚５～10cm。

第Ⅴ層：暗褐色シルト質土(10YR3/3)層厚５～10cm。

第Ⅵ層：褐色シルト質土(10YR4/4)泥炭質層。層厚15cm前後。

第Ⅶ層：灰白色粘質土(10YR7/1)層厚10cm前後。

第Ⅷ層：黒褐色シルト質粘土(10YR3/1)層厚15～25cm。

第Ⅸ層：にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)地山漸移層。層厚10cm前後。

第Ⅹ層：褐色～黄褐色粘質土(10YR4/4～5/6)地山。

長森丘陵北端部における土層の堆積状況は、丘陵部と沖積地との境界部にあたることから、観察地点毎に異なる。基本層序として示した本地点は沖積地部にあたるが、丘陵縁辺部(Ａ～Ｃ区)や第130次調査区での観察記録とも照合すると、次のようにまとめられる。

第Ⅱ層は、丘陵部寄りに厚く堆積を示し、沖積地面では薄いか認められない箇所もある。第130次調査区第Ⅱ層相当層では、地山粘土の二次堆積層の様相を示しており、丘陵部斜面上位側から流入した地山土由来の可能性がある。第Ⅲ層は、“黒色バンド”状の堆積を示す。本層は沖積地面で明瞭に観察されるが、丘陵部面では不明瞭あるいは欠落する箇所もある。

第Ⅳ層は火山灰層であり、主に沖積地面で断続的に観察される。火山灰直下の第Ⅴ層は、観察地点では暗褐色シルト質土であるが、Ａ区では第Ⅲ層のような“黒色バンド”状の堆積を示していた。第

Ⅵ層は、泥炭質土層であり、沖積地面では厚く堆積を示すものの、丘陵部では観察されない。第Ⅶ層は灰白・灰黄褐色・にぶい黄橙色を示す粘質土層である。本層は泥炭質土の下層に見られる層序であり、丘陵部では観察されない。第Ⅷ層は粘質の強い黒褐色土層である。第130次調査区等の成果に従えば、本層は縄文時代の遺物包含層に相当する層序にあたる。第Ⅸ層は地山漸移層、第Ⅹ層は地山である。地山は、丘陵部では黄褐色の粘質土であるが、沖積地部では第Ⅶ層のような灰白・灰黄色を呈する箇所もある。

第127次調査区では、標高35.3～35.4ｍラインに湧水面があり、以下は帯水層となる。トレンチは部分的に地表面から1.7ｍ下まで掘り下げたが、いわゆる硬化した粘質土面、あるいは基盤の礫層の確認はできなかった。

②　調査概要

検出遺構と出土遺物の概要は、遺構観察表と遺物観察表にまとめたが、特記すべき事項について下記に示す。

【第127次調査】

《遺構》　推定される道路跡は南北方向に走っていることから、調査は東西方向のトレンチを１本設定して行うことにした。トレンチの幅は1.5ｍとし、長さは10.5ｍに設定した。なお、調査の過程で、未掘区を挟んで西側にトレンチを拡張(長さ3.2ｍ)させ、サブトレンチ(幅0.5ｍ)や一部箇所での深掘りを行った。調査面積は19㎡である。精査の結果、検出された遺構は道路跡２条であった。

《遺物》　出土した遺物は、道路跡内上記の遺構内を含め39点(個体)であった。内訳は土師器29点(坏、甕)、須恵器(坏、甕、壺)９点、灰釉陶器(長頸壺)１点である。出土層序は、須恵器甕(RP19)が第Ⅵｂ層、土師器坏(RP02・07)が第Ⅴ層である他は、第Ⅳ層(火山灰層)上面あるいは同層中である。第85図31・32は完形、正立状態で出土した土師器坏であるが、32は火山灰層直上で、31は火山灰層中で確認された。いずれも意図的に埋置されたものと推測される。31は外面底部に判読不能の墨書が見られる。火山灰降下直後に土師器坏を埋置した事例は、第122次調査区斜面最下位側のSK1574土坑にも認められる。

【第133次調査】

《遺構》　精査の結果、確認された遺構は、土坑１基、溝跡１条、道路跡３条、粘土貼り面１か所、柱穴４基である。その他に、明確な遺構としての確認はできなかったものの、過年度の調査事例やその配置から、Ｂ区の地層のうねりが認められた箇所を道路跡(SM1821)と類推した。

《SX1820粘土貼り面》　Ｂ区SM1821の北側で確認された特異な遺構について紹介する。

遺構は南北約2.5ｍ、東西約1.5ｍの範囲に粘土が貼られた状態で確認された。これは、火山灰降下直後、当時の地表面上に粘土を運び入れ、10～15㎝程の厚さに貼り付ける。その厚さは均等ではなく、丁寧な作業とは見受けられない。粘土面の少なくとも３カ所(Ｐ１～３)には、径や一辺が30～40㎝程の掘り込みを行う。掘り込みは柱穴のような整った形ではなく、不整形であり雑と観察された。Ｐ１は、旧表土面まで掘り込んだ後に２個体の土師器を埋納する。それは北西側には坏を正位に、南東側に隣接させて台付皿を倒立させてである(第86図20・21、図版42下)。埋納後には粘質土ではなく暗褐

色のシルト質土で埋めている。一方のＰ２・３は、旧表土面下まで掘り込んだ後に、粘質土で埋め戻している。内部に遺物は認められなかった。粘土面の周囲には、火山灰直上の層位で遺物が比較的多く分布していた。その資料は、第86図22・24・26・27である。トレンチの南西壁寄りにサブトレンチを設定して、掘り下げを行ったが、火山灰層下の遺構や遺物は認められなかった。

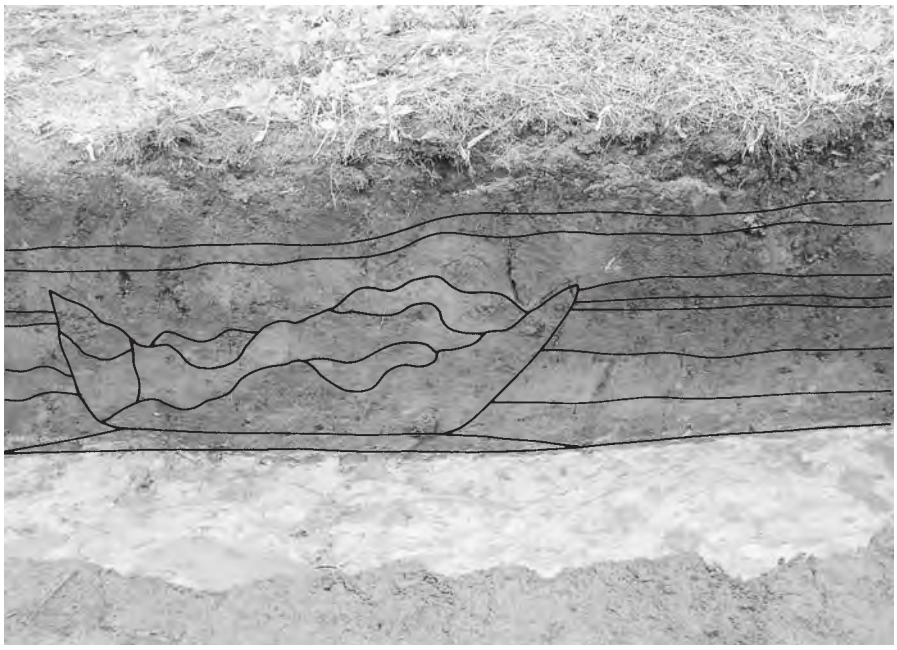
《SM1823道路跡》　Ｄ区で確認された道路跡と推測した溝状遺構についても紹介する(第81図下)。

本遺構は、明確な平面プランを確認することはできなかったが、土層断面観察により認定された。

溝は上幅約２ｍ、下面幅約1.3ｍであり、逆台形を示す壁面は緩く立ち上がる。堆積土は、５層に分けられた。ブロック状を呈する１・４層土(灰黄色粘質)は第Ⅶ層あるいは地山粘土に、２層土(暗褐色シルト質)は第Ⅴ層土に、３層土(泥炭質)は第Ⅵ層に、５層土(黒褐色シルト質)は第Ⅷ層土にそれぞれ由来する土と見られる。以上の状況を総合すると、次のような作業手順が推測される。

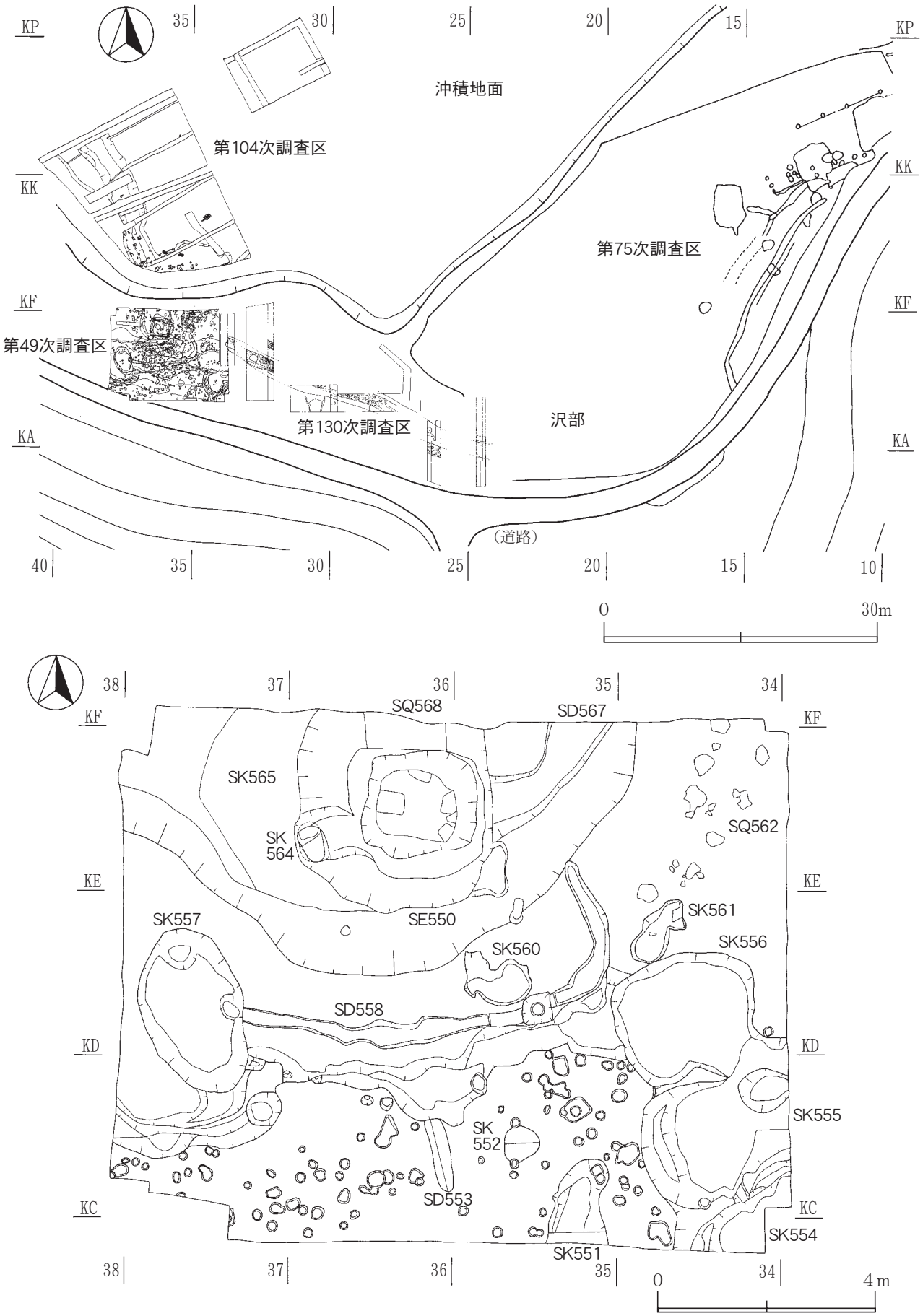
道路面の構築にあたり、まず溝を掘り下げた。おそらく溝は一定期間開口させ、湿気を除く工程を経ている可能性もある。その後、溝内には第Ⅷ層土や第Ⅴ層土のような黒褐色系のシルト質土を埋土に使用し、上位に粘質土(第Ⅶ・Ⅹ層)を埋め戻し路面を作り上げた。路面自体は当時の表土面より幾分高く設定されていたかもしれないが、側溝などの付属施設は見られない。本地区は、未発達ではあるが泥炭層(第Ⅵ層)が認められる軟質な地盤である。ここに路面を造成して歩行を繰り返した結果が、土層のうねりという形で残されたと見たい。これは本地点以外のＤ区内土層の堆積状況が、基本的に水平な自然堆積であることからも、歩行ルートが限定されていたと推測される。本道路跡は、溝跡の掘り込み面から、火山灰降下後に造成されたと推測される。溝跡・路面内出土の遺物は一切見られなかった。

《遺物》Ｄ区内出土の遺物は、南端部第Ⅳ層直上で確認された土師器・須恵器である。第86図28・29は、土師器の坏である。29は火山灰層直上に正立状態で検出されたことから、火山灰降下に伴い意図的に置かれたと見られる。

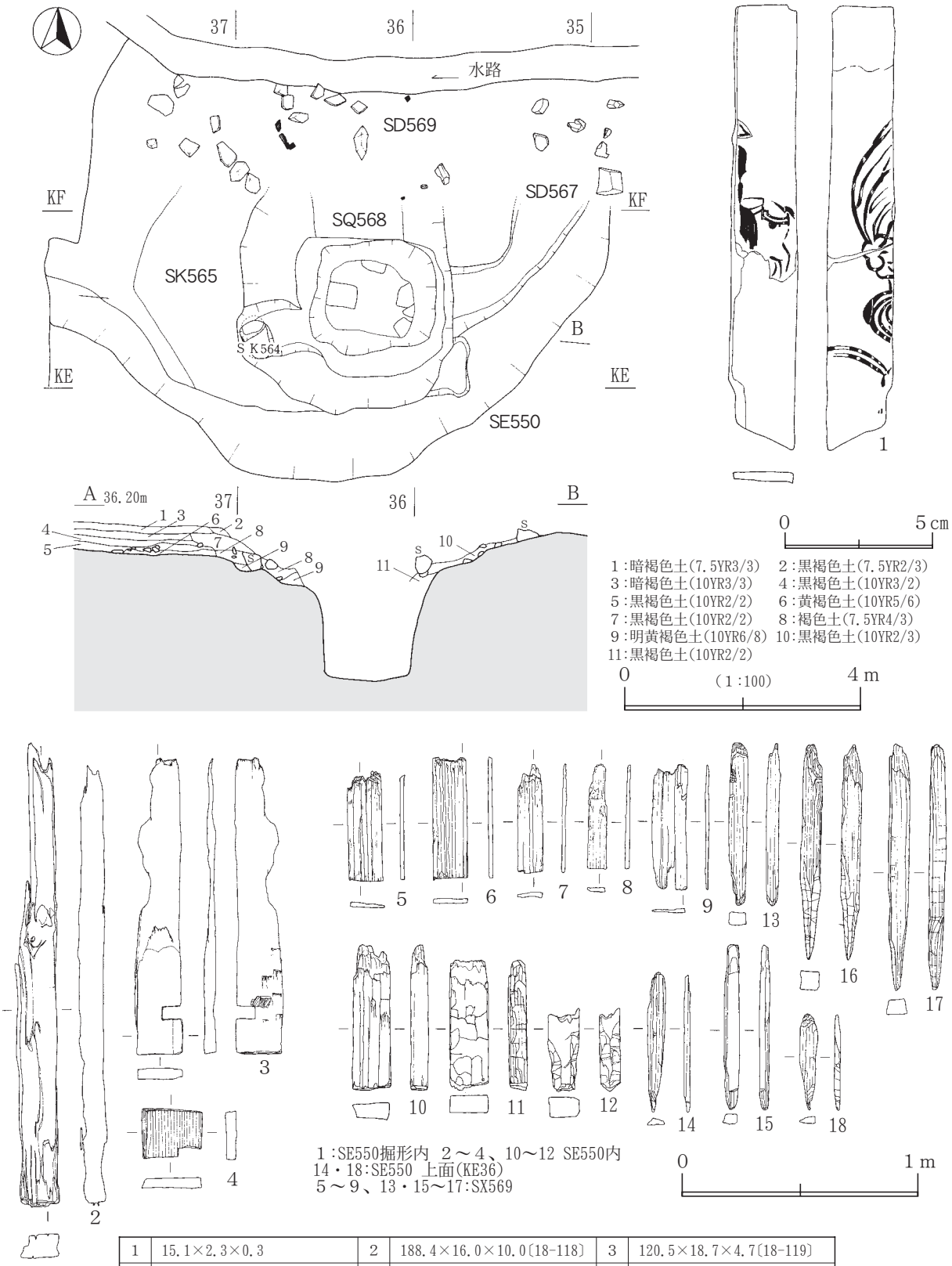


図版７

第133次Ｄ区土層堆積状況とＳＭ1823(南西→)
第81図Ｇ-Ｈ間土層に対応する[20060801 撮影]



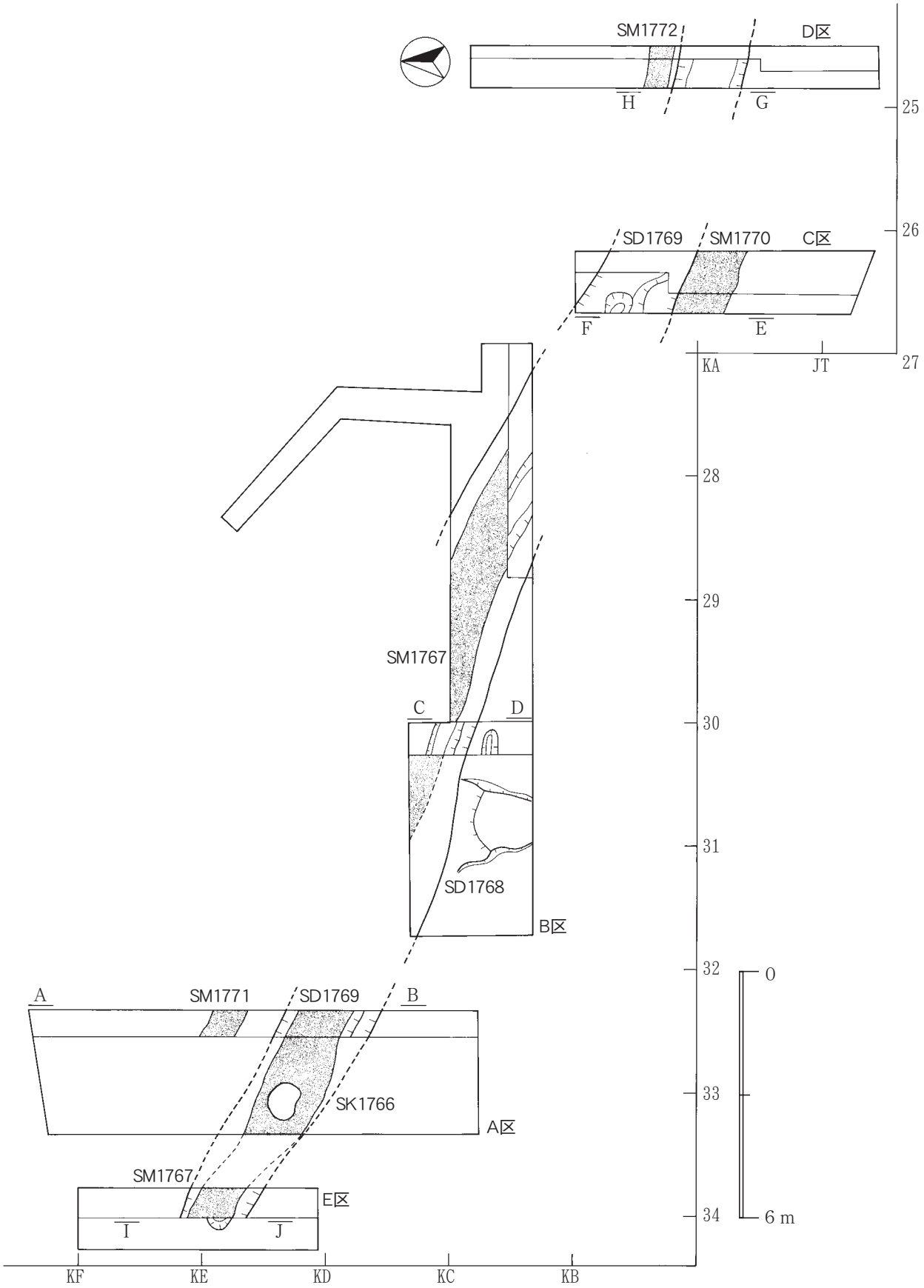
第77図　ホイド清水周辺地区の地形と遺構配置図



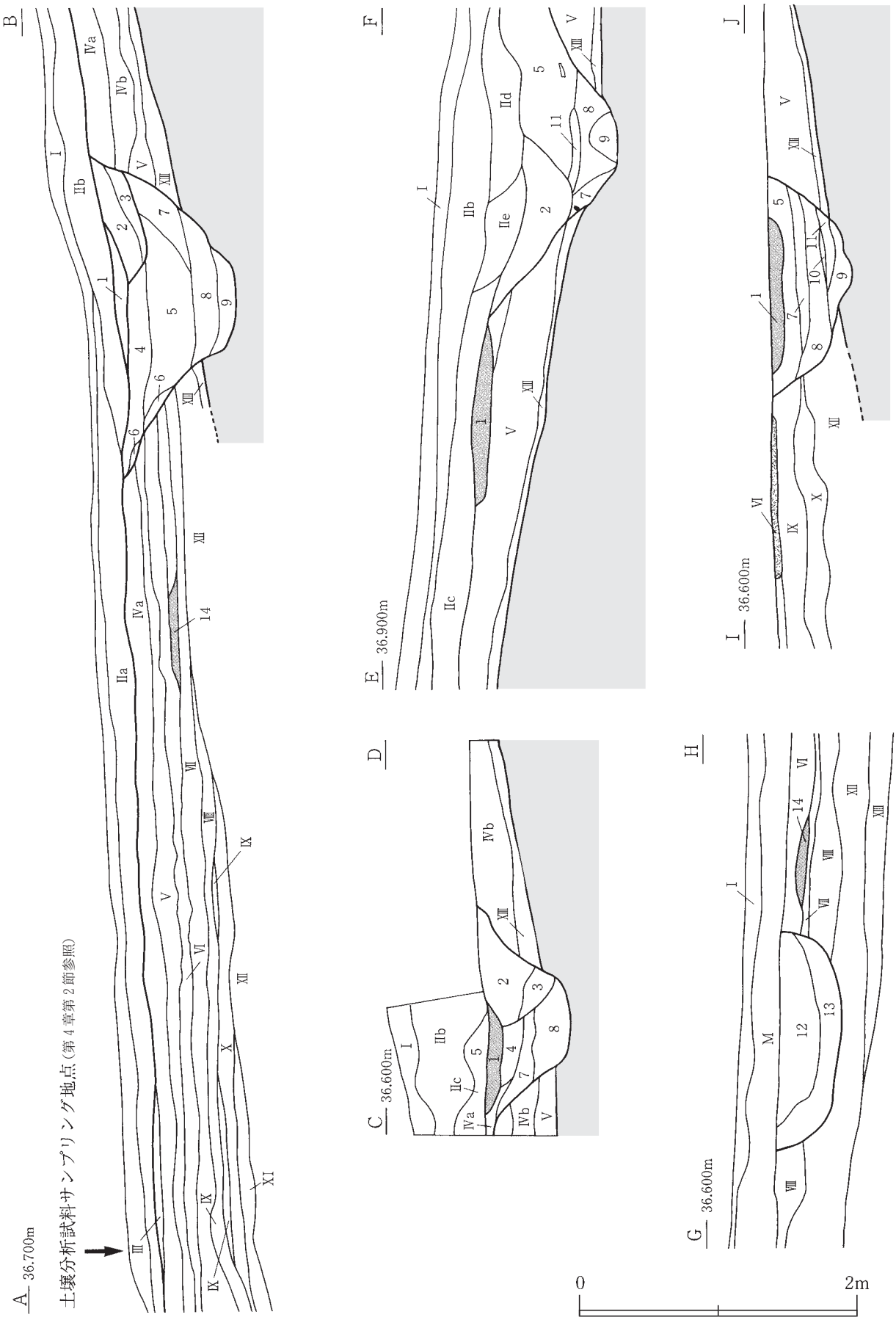
1	15.1×2.3×0.3	2	188.4×16.0×10.0〔18-118〕	3	120.5×18.7×4.7〔18-119〕
4	20.4×24.7×4.3〔18-120〕	5	44.5×13.9×1.8〔17-104〕	6	50.2×14.0×2.1〔17-105〕
7	44.7×10.2×2.3〔17-106〕	8	43.0×7.5×2.0〔17-107〕	9	51.6×14.0×1.8〔17-108〕
10	59.2×15.7×7.2〔17-109〕	11	53.0×15.8×7.2〔17-110〕	12	33.9×12.8×8.3〔17-111〕
13	66.4×7.5×5.4〔17-112〕	14	57.2×7.0×2.8〔17-113〕	15	67.5×6.2×4.2〔17-114〕
16	87.8×8.0×7.7〔17-115〕	17	100.7×8.1×6.2〔17-116〕	18	39.0×6.5×2.8〔17-118〕

表内の数字は、遺物の法量（長さ×幅×厚さ、cm）、〔　〕内は年報掲載図番号

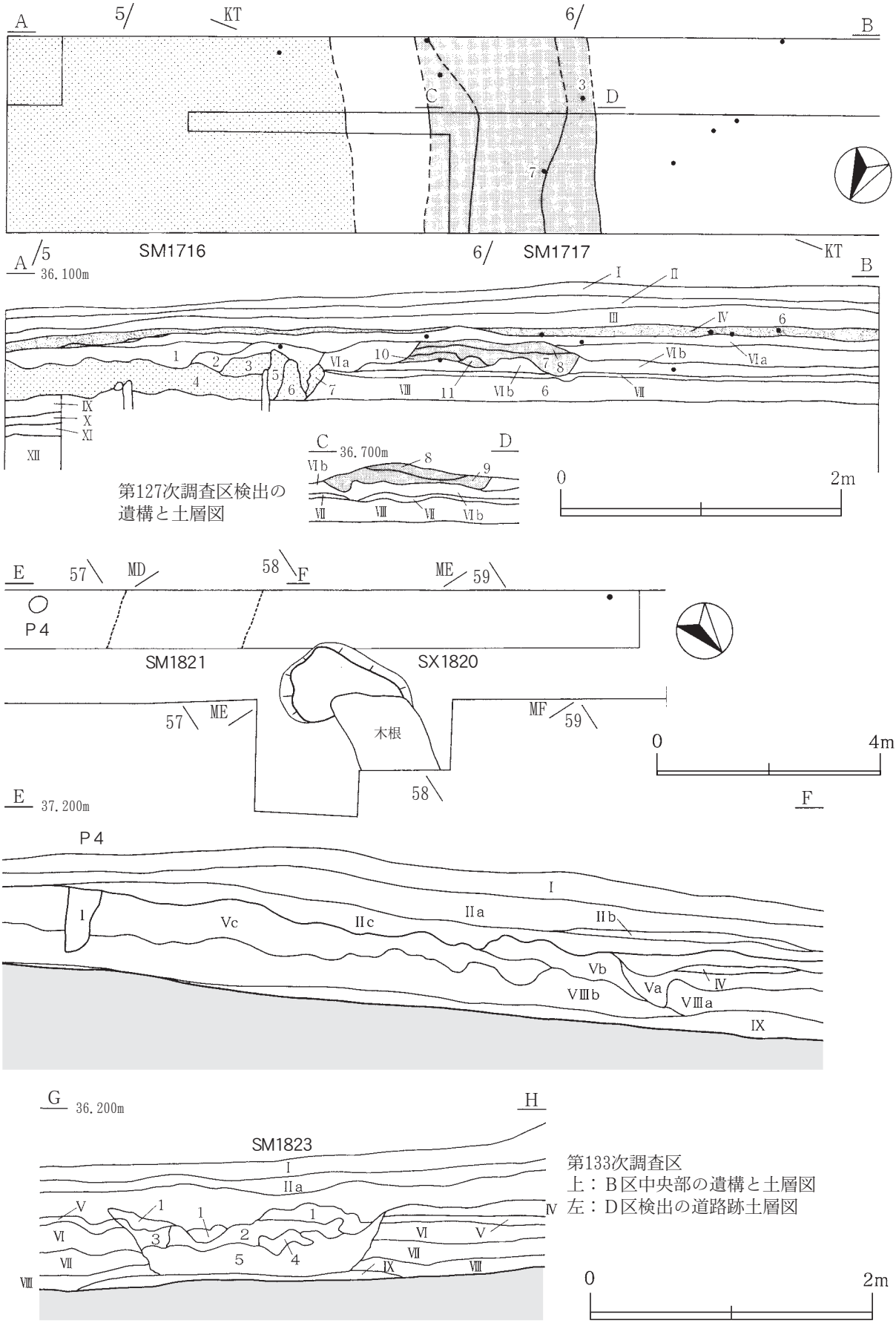
第78図　ホイド清水周辺地区の遺構(１)第49次ＳＥ550と出土遺物



第79図　ホイド清水周辺地区の遺構(２)第130次調査区(１)



第80図　ホイド清水周辺地区の遺構（３）第130次調査区（２）



第81図　丘陵北側裾部の遺構 第127・133次調査区

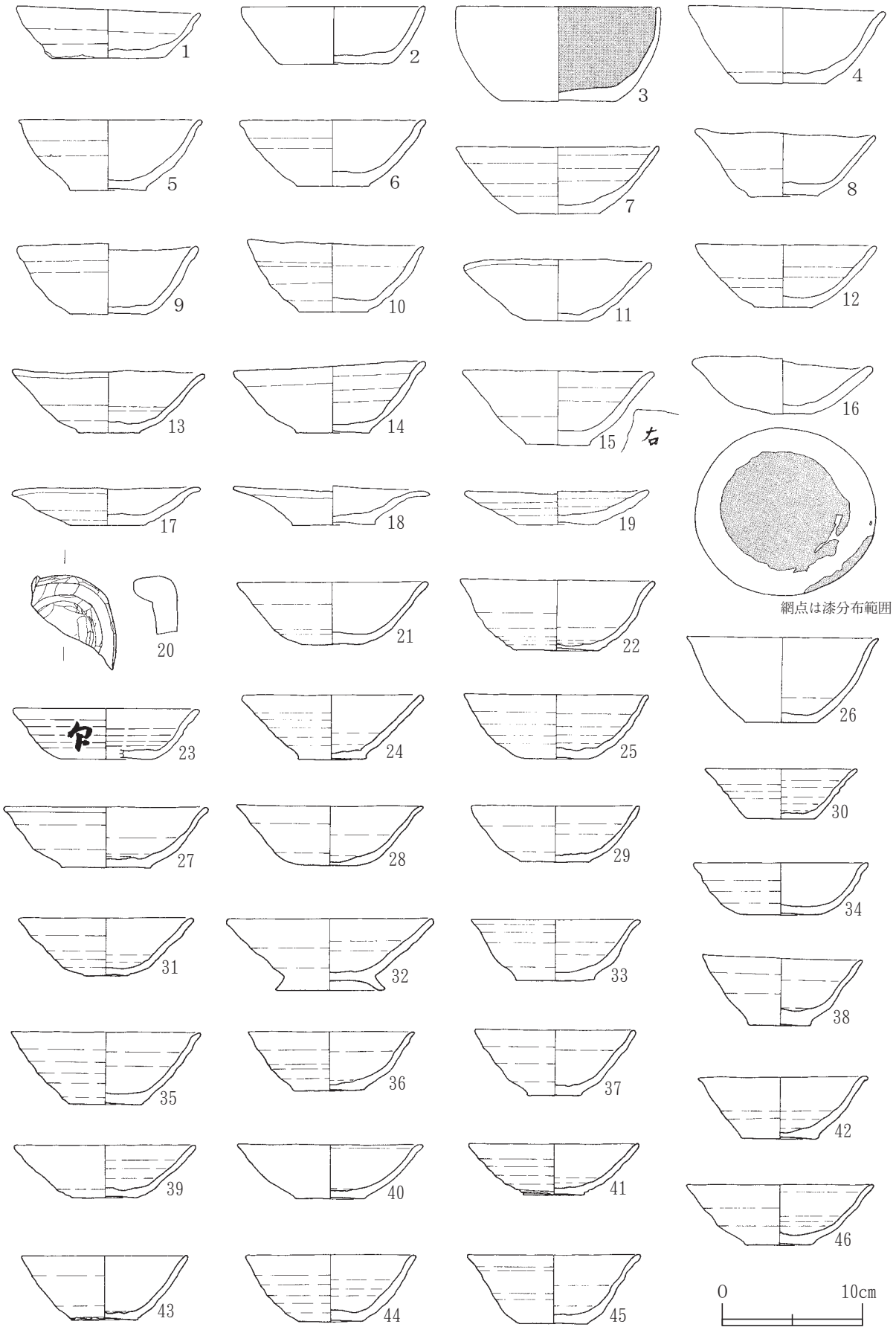
第７表　遺構観察表（４）　長森北方地区

第49次調査

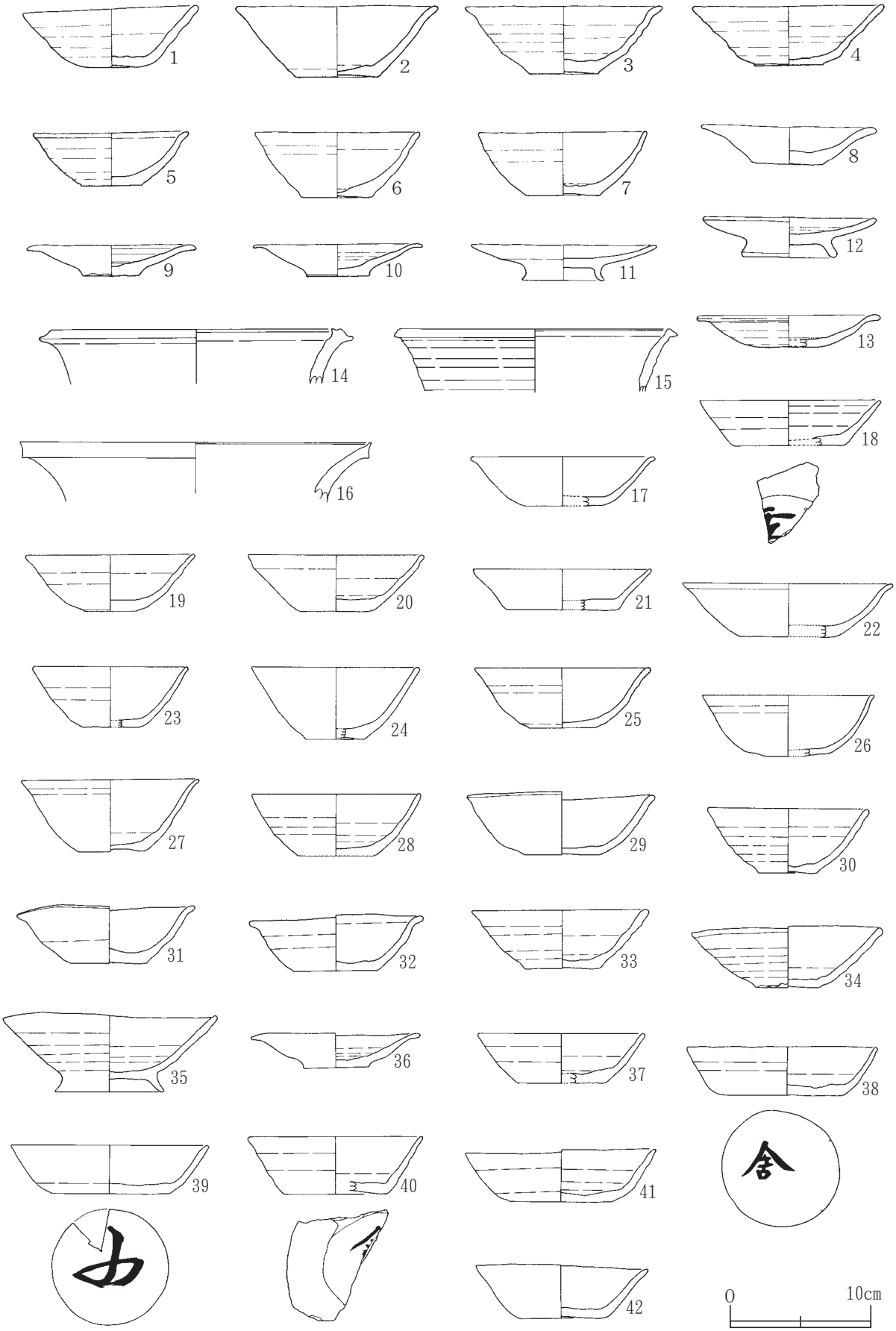
遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	形状・規模	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＥ550	77・78	第49次KE36内で確認、近代以降の撹乱が認められる、49-2次でも調査	掘形は約４ｍ四方、内部に約２ｍの井戸枠プランを確認、深さは約２ｍ、井戸枠材の一部が残り、板材の端に仕口が設けられている(第78図２)	掘形埋土は赤色化した砂礫や粘土を含む。井戸底面下の掘形の中に頁岩の角礫と砂がぎっしり詰まっている	土師器、須恵器、木製品、縄文土器、石鏃、土製品(土玉)、木簡(第16号)、絵馬(第78図)	掘形下部に上面幅約２ｍ四方、深さ２ｍの掘り込み(SK570)あり
ＳＫ551	77	第49次調査区南壁際に位置	不整形、東西1.15m×南北1.51m、深さ0.2m	第１層は黒褐色土で炭化物をわずかに含む。第２・３層は黒褐色土と明黄褐色土の混合土		旧SX551
ＳＫ552	77	第49次SK551の北西に位置	円形、径約65㎝、深さ６㎝	黒褐色土中に炭化物をわずかに含む		旧SX552
ＳＤ553	77	第49次SX552の西に位置	東西0.33ｍ×南北1.46ｍ、深さ0.12m	暗褐色土中に炭化物をわずかに含む		旧SX553
ＳＫ554	77	第49次調査区南東隅で確認。SK555と接しているが、新旧関係は不明	不整形、東西1.35m×南北1.52m、深さ0.54m	第５層上面に火山灰が堆積		旧SX554
ＳＫ555	77	第49次SK554の北に位置。SK554・556と重複するが新旧は不明	不整形、東西2.9m×南北2.04m、深さ0.3m	埋土中位に火山灰層あり		旧SX555
ＳＫ556	77	第49次SK555の北に位置。SK555との新旧は不明	不整形、東西2.13m×南北2.7m、深さ0.12m	小礫を多量に含む		旧SX556
ＳＫ557	77	第49次火山灰層下で確認、SD558西端に位置しこれを切る	楕円形、東西1.85m×南北3.15m、深さ0.21m		土師器坏(内黒)、平瓦片	旧SX557
ＳＤ558	77	第49次SE550を囲むようにして東西方向に確認。SK557・559に切られる	延長約8.8m、幅25～50㎝、深さ5～17㎝	暗褐色土		SE550に雨水が流入するのを防ぐための溝ではないかと推測
ＳＫＰ559	77	第49次SK560の南東に位置。SD558を切り、SK560に切られる	掘形は一辺50㎝の方形、中央に径25㎝、深さ23㎝の柱痕あり	柱痕は、極暗褐色土と黒褐色土		旧SX559
ＳＫ560	77	第49次火山灰層下で確認、SKP559の北西に位置	不整形、東西1.22m×南北0.75m、深さ0.12m	にぶい黄橙色土と暗褐色土中に小礫を含む		旧SX560
ＳＫ561	77	第49次SE550の南東に位置、49-2次でも調査	不整形、1.4m×0.35m、深さ0.17m	黒褐色土		旧SX561
ＳＱ562	77	第49次SE550の東に位置、49-2次でも調査	２条の列石遺構。20～50㎝大の角礫が20～60㎝間隔で配置。２条の列石の長さ約3.7m、列石間は幅40～60㎝			井戸と他施設を区別する区画施設、あるいは井戸に向かう通路の可能性もある、旧SX562
ＳＱ563	77	第49次SE550周囲に密接して広範囲に確認、49-2次でも調査	東西９ｍ、南北６ｍ、５～30㎝大の礫群が分布			SE550構築時に掘り上げられた礫を粘土等と混ぜ、排土処理を兼ねた整地か、旧SX563
ＳＡ566	77	第49次SE550南に位置する東西１間の柱列、Ｐ1とＰ2で構成。柱間距離は3.11m	Ｐ1柱掘形は径25㎝の円形、径10㎝の柱痕を検出。Ｐ2柱掘形は径18㎝、径８～９㎝の柱痕あり	掘形埋土は、Ｐ1が暗褐色土、Ｐ2は黒褐色土		SE550上屋に伴う柱穴の可能性あり
ＳＤ567	77・78	第49-2次で確認、SE550の東に隣接	上面幅0.6～1.2m、深さ0.1～0.23m、長さ約3.1m			旧SX567
ＳＱ568	77・78	第49-2次で確認、SE550北に隣接し、北へ約60㎝延びる	敷石遺構、東西幅1.45～1.5m			SE550の排水施設か、旧SX568
ＳD569	78	第49-3次で確認、SQ568に接続	杭と矢板５枚で構成			SE550の排水施設か、旧SX569
ＳK570	77・78	第49-2次で確認、SE550底面で検出	上面幅２ｍ四方、深さ２ｍ	掘形内は５～30㎝大の頁岩角礫および砂礫で埋まっている	縄文土器片、石鏃、土師器小破片	SE550の掘形下部施設であり、導水・浄化の機能を担っていたか、旧SX570

第127・130・133次調査

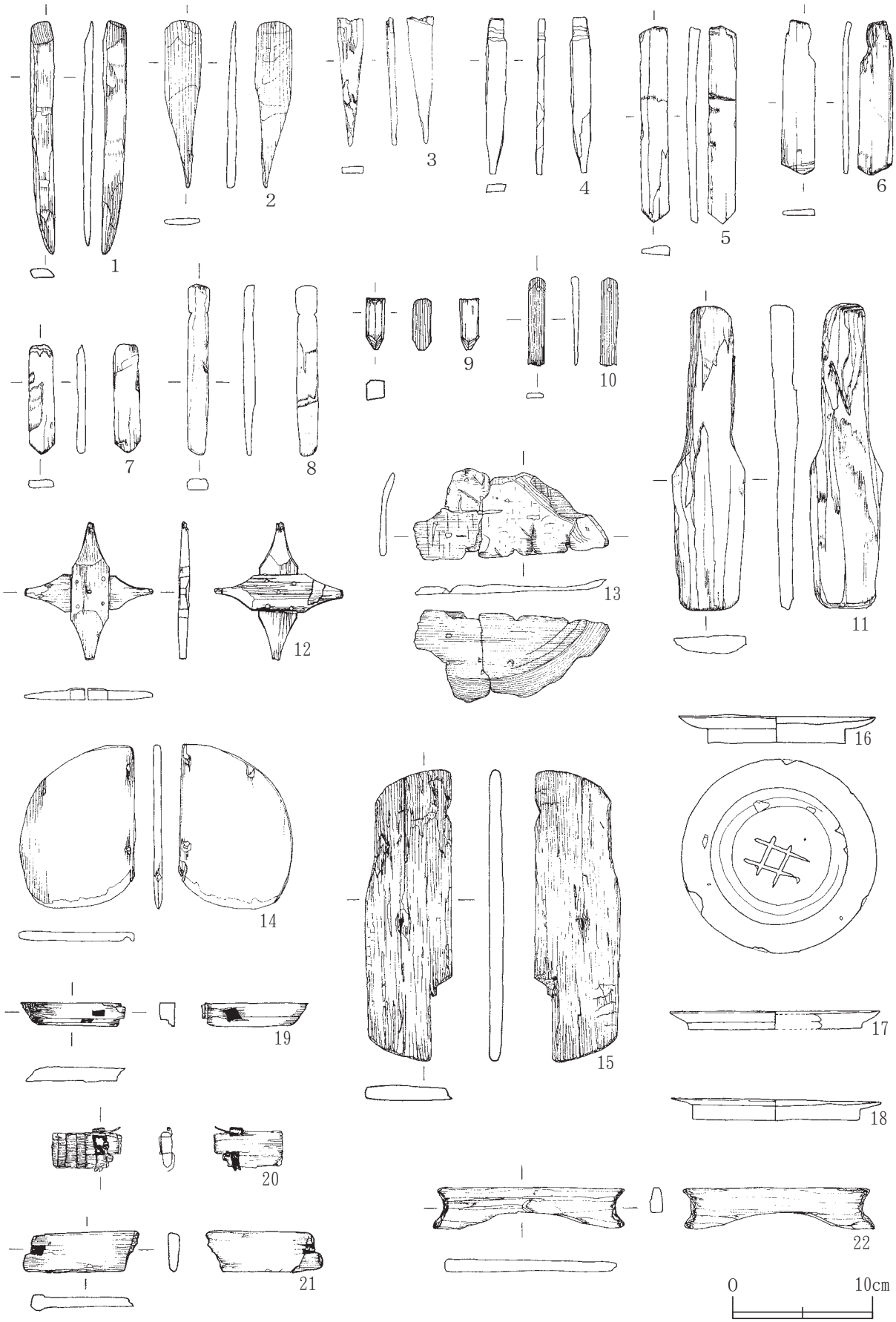
遺構番号	挿図番号	検出位置・重複関係	形状・規模	埋土状況	出土遺物	時期・備考
ＳＭ1716	81	第127次区東端部	東西方向の幅2.3m以上、推定路面の東端は調査区外	堆積土層のうねりを、人の往来に伴う痕跡と推測	土師器坏（路面上部の２層出土）	路面上に火山灰層が認められることから、火山灰降下時には道路としては機能していなかった
ＳＭ1717	81	第127次、SM1716の西端の西約0.5mに位置、SM1716との重複は見られない	厚さ10～15cm、幅約1.2m	盛土による路面形成か、灰黄褐色粘土に泥炭質土を混成	土師器甕（盛土下層出土）	火山灰の堆積状態は、SM1716と同じ
ＳＫ1766	79	第130次Ａ区中央部、SM1767を切り込む形で確認	長さ85cm、幅70cm程の略円形	掘り下げを行っておらず不明	なし	
ＳＭ1767	79	第130次Ａ・Ｂ・Ｅ区で確認。埋まりきった後のSD1769の内側に入り込むように延び、SD1769を切り込んで構築されるSD1768の上位に位置	硬化面の幅１～1.2m程、確認された長さは約20m	地山粘土の二次堆積土を主体とする褐色シルト質粘土で、表面はいくらか白光りの状態		SD1769とほぼ同一のルートを通る硬化面。このことからSD1769も本硬化面に先行する通路跡の可能性もある
ＳＤ1768	79	第130次Ａ～Ｃ区で確認、SD1769とほぼ同位置における２条の重複	溝幅は１ｍ程、深さ0.4～0.5ｍ	堆積土２・３層は黒褐色～暗褐色シルト質土が主となるが、SD1769の堆積土と酷似	土師器	
ＳＤ1769	79	第130次Ａ～Ｅ区で確認、SD1768とほぼ同位置における２条の重複	長さ約32ｍ、幅1.6～2.3ｍ、確認面からの深さ0.7～0.9ｍ程	堆積土４～13層は主に黒褐色シルト質土（５層）や暗褐色シルト質土（８層）が占める、６層は火山灰を含む第Ⅳ層由来	土師器坏、風字硯（須恵質）	
ＳＭ1770	79	第130次Ｃ区、SD1768・1769の南側で確認	硬化面の幅1.2～1.45m	土性・色調はSM1767に類する		位置的にはSM1767の南側を通る硬化面、隣接する区では未確認
ＳＭ1771	79	第130次Ａ区で確認、SD1768・1769の北側に位置	硬化面の幅約70cm	褐灰色砂質シルト土		SM1767の北側を通る硬化面。SM1772と一連の施設か
ＳＭ1772	79	第130次Ｄ区で確認、SD1768・1769の北側に位置する	硬化面の幅約70cm	褐灰色砂質シルト土		SM1771と一連の施設か
ＳＭ1818		第133次Ａ区中央部	等高線に沿うように東西方向に延びる	火山灰降下直後に基盤層に含まれる硬質泥岩の礫がまとまって敷かれた状態	須恵器甕、瓦	丘陵末端部における東西方向の道路施設か
ＳＫ1819		第133次Ａ区SM1818の北側に隣接	径70cm程の円形、深さ20～23cm	土坑底面は第Ⅲ層下面に収まる	なし	
ＳＸ1820	81	第133次Ｂ区中央部	南北約2.5m、東西約.1.5mの範囲に粘土を貼っていた、厚さ10～15cm	火山灰降下直後に粘土が貼り付けられていることを確認	土師器坏・台付Ⅲ（粘土貼り付け後に土器を埋納）、周囲にも土器多数	粘土を貼り付けること、土器を埋納していることから、何らかの祭祀に係わる施設か
ＳＭ1821	81	第133次Ｂ区SX1820の南側で確認	土層のうねりを歩行による踏み跡と推定、幅約2.5m		なし	踏み跡の形成時期は、火山灰層の堆積直後か
ＳＤ1822		第133次Ｃ区中央部、第Ⅷ層面で確認	上面幅52cm、深さ65cm、北東-南西方向の等高線に沿うように延びる		なし	火山灰降下前に構築された遺構である
ＳＭ1823	81	第133次Ｄ区、溝状の掘り込み内の堆積土が強いうねりを示す状態で確認	溝の上面幅約２ｍ、下面幅約1.3m、逆台形を示す壁面	堆積土の観察から火山灰降下後に造成	なし	最初に溝を掘り湿気を抜く工程を経てから溝内に土を充填させて道路面の形成を行ったものか



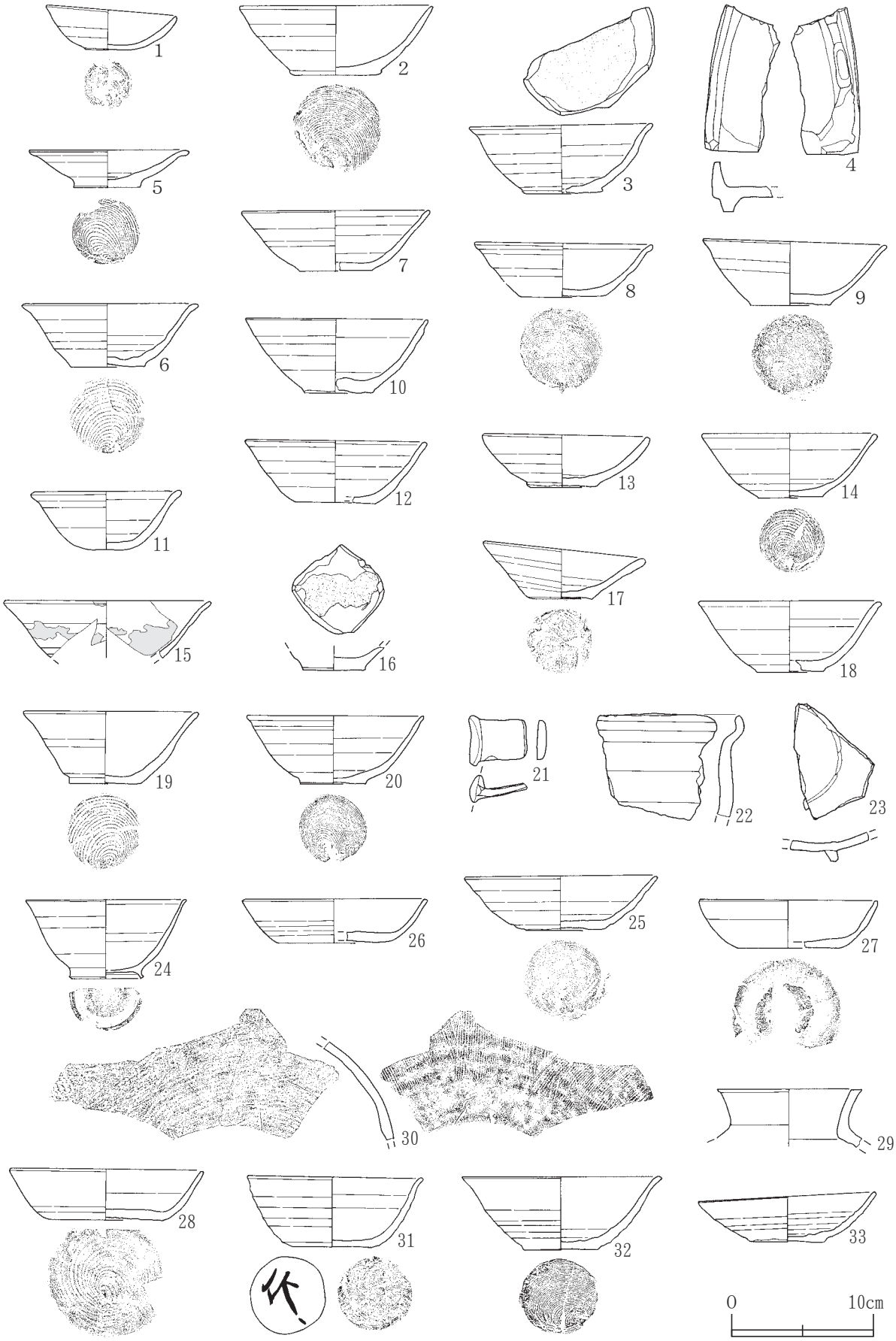
第82図　出土遺物(18) 第49次調査区(１)



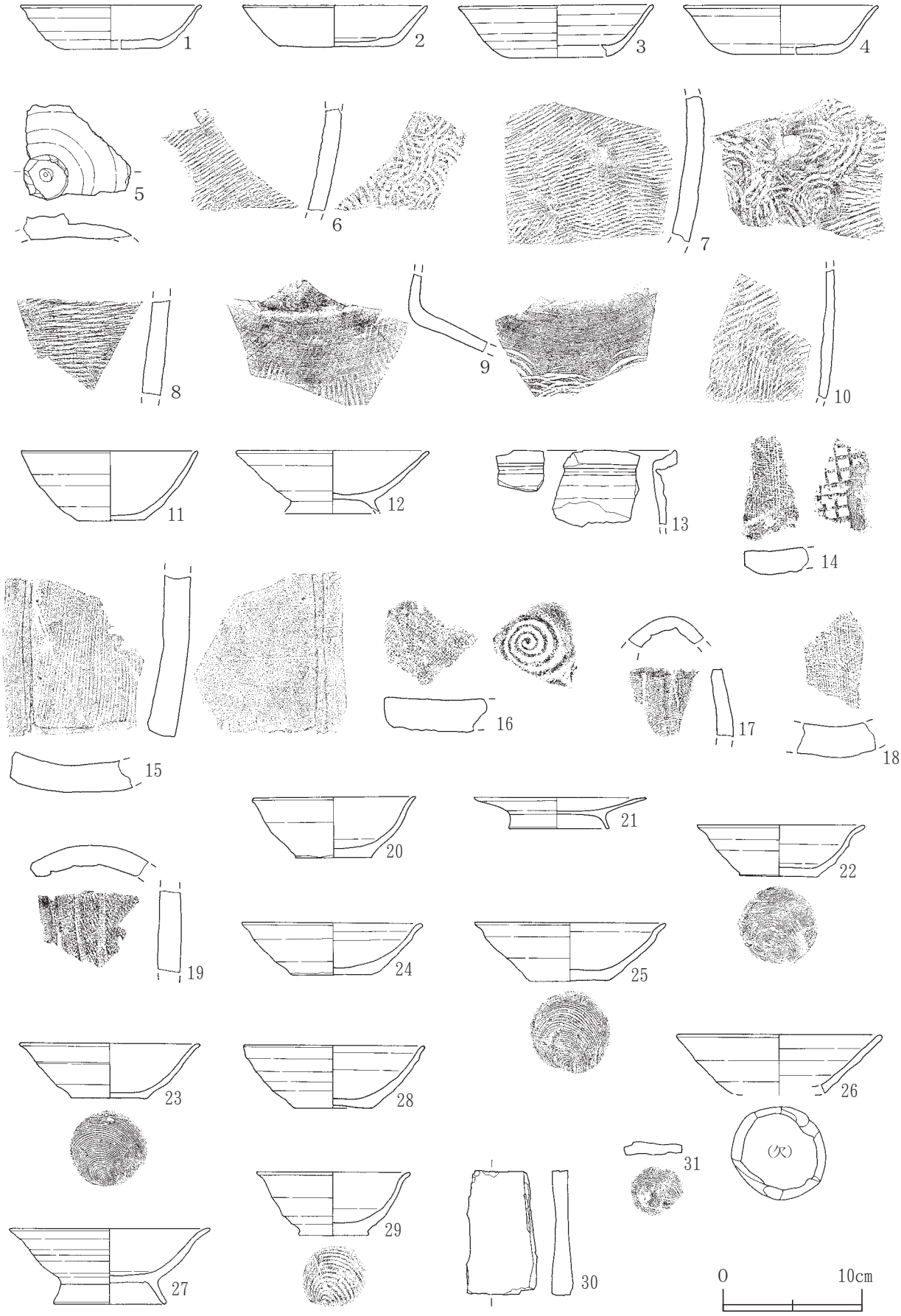
第83図　出土遺物(19) 第49次調査区(２)



第84図　出土遺物(20) 第49次調査区(３)



第85図　出土遺物(21) 第127・130次調査区



第86図　出土遺物(22) 第133次調査区

第８表　遺物観察表

第22図　長森東方地区・第90次

番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径cm	底径cm	器高cm	底径指数	高径指数	外傾度	年報挿図番号
22-1	須恵器	坏	SI934	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書		6.0	(1.6)				91-44-1
22-2	須恵器	坏	SI934炉北側柱穴	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、完形	12.9	7.4	4.2	0.57	32.6	28	91-44-2
22-3	土師器	坏	SI934カマド	ロクロ調整、底:回転糸切り	10.4	5.4	4.2	0.52	40.4	25	91-44-3
22-4	土師器	甕	SI934カマド	ロクロ調整	19.0		(9.2)				91-44-4
22-5	土師器	甕	SI934	ロクロ調整	19.0		(20.2)				91-44-5
22-6	須恵器	坏	SI935	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.0	4.4	4.2	0.37	35.0	37	91-45-7
22-7	須恵器	台付坏	SI935	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り		7.4	(2.1)				91-45-8
22-8	須恵器	坏	SI936カマドRP2	ロクロ調整、底:回転糸切り、完形	15.9	7.0	7.5	0.40	47.2	27	91-45-9
22-9	土師器	坏	SI936	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.4	5.4	5.2	0.47	45.6	24	91-45-10
22-10	土師器	坏	SI936南西隅柱穴	ロクロ調整、底:回転糸切り、完形、意図的な埋置か	12.8	5.4	5.5	0.42	43.0	25	91-45-11
22-11	土師器	坏	SI936カマド	ロクロ調整	12.4	3.4	5.5	0.27	44.4	30	91-45-12
22-12	土師器	坏	SI936	ロクロ調整、底:回転糸切り		7.4	(3.2)				91-45-13
22-13	土師器	坏	SI936	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.0	5.2	4.8	0.37	34.3	33	91-45-14
22-14	土師器	坏	SI936カマドRP3	ロクロ調整、内:墨痕あり(墨容器か)	12.0		(4.3)				91-45-15
22-15	石製品	砥石	SI936RQ1	長さ5.8cm、幅3.7cm、厚さ3.0cm							91-45-16
22-16	須恵器	坏	SI943カマド	ロクロ調整	13.4		(4.6)				91-45-17
22-17	須恵器	坏	SI943カマド南柱穴	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	5.8	4.1	0.43	30.6	34	91-45-18
22-18	土師器	坏	SI943カマド南柱穴	ロクロ調整、底:回転糸切り、RP4	17.4	6.4	6.8	0.37	39.1	32	91-45-19
22-19	土師器	坏	SI943カマド南柱穴	ロクロ調整、内:煤付着、RP6	13.0		(4.5)				91-45-20
22-20	須恵器	坏	SI944	ロクロ調整、底:回転糸切り、完形	13.1	4.4	3.9	0.34	29.8	38	91-45-21
22-21	須恵器	坏	SI944	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.0	6.0	3.4	0.50	28.3	33	91-45-22
22-22	土師器	坏	SI967	ロクロ調整、内:黒色処理	14.6	7.0	4.0	0.48	27.4	36	91-45-23
22-23	瓦	平瓦	SI967	凸面:正格子叩、凹面:布目痕							91-45-24
22-24	土師器	坏	SK938	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.0	5.2	5.2	0.47	47.2	20	91-49-30
22-25	須恵器	坏	SK939	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	6.0	3.7	0.49	30.3	35	91-49-31
22-26	土師器	坏	SK939	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.6	4.8	4.8	0.38	38.1	34	91-49-32
22-27	土師器	坏	SK939	ロクロ調整	13.0	5.8	3.9	0.45	30.0	37	91-49-33
22-28	土師器	台付坏	SK939	ロクロ調整、底:回転糸切り		6.0	(1.8)				91-49-35
22-29	土師器	坏	SK939	ロクロ調整、内:黒色処理、底:回転ケズリ	15.4	7.0	5.7	0.45	37.0	30	91-49-36
22-30	土師器	甕	SK947	ロクロ調整、内:ヨコ方向のミガキ、外:タテ方向のケズリ	21.4	8.6	22.7				91-49-38
22-31	土師器	甕	SK947	ロクロ調整、内:アテ具、外:タタキ→タテ方向のケズリ	18.0		(10.7)				91-49-39

第23図　長森東方地区・第95次

23-1	須恵器	坏	SI1073	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書「厨」	12.7	5.6	4.6	0.44	36.2	30	93-42-1
23-2	須恵器	坏	SI1073	ロクロ調整、底:回転糸切り、外:墨書「厨」	14.6	6.2	3.8	0.42	26.0	41	93-42-2
23-3	須恵器	坏	SI1073	ロクロ調整、底:回転糸切り、外～底部:墨書、完形	14.1	6.0	4.6	0.43	32.6	31	93-42-3
23-4	須恵器	坏	SI1073	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.1	4.2	4.4	0.35	36.4	33	93-42-4
23-5	須恵器	坏	SI1073	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:内面硯に転用	12.8	6.0	3.8	0.47	29.7	37	93-42-5
23-6	土師器	坏	SI1073	ロクロ調整、底:回転糸切り→刻書「＋」	12.0	4.4	5.4	0.37	45.0	29	93-42-6
23-7	土師器	坏	SI1073	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:黒色処理	17.7	6.0	7.7	0.34	43.5	27	93-42-7
23-8	土師器	甕	SI1073	ロクロ調整、底:回転糸切り		6.8					93-42-8
23-9	土師器	甕	SI1073	ロクロ調整、底:切り離し不明		7.4					93-42-9
23-10	須恵器	坏	SI1074	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	5.4	5.1	0.40	38.1	31	93-44-10
23-11	土師器	坏	SI1074	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.5	5.0	5.1	0.40	40.8	28	93-44-11
23-12	土師器	坏	SI1074東壁溝	ロクロ調整、内:墨書							93-44-12
23-13	須恵器	坏	SI1075	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.1	5.4	3.1	0.41	23.7	44	93-44-13
23-14	須恵器	坏	SI1075北東隅柱穴	ロクロ調整、底:回転糸切り、外～底:墨書「官口」	13.6	5.6	4.5	0.41	33.1	32	93-44-14
23-15	須恵器	坏	SI1075北東隅柱穴	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書	14.3	5.8	4.7	0.41	32.9	35	93-44-15
23-16	須恵器	坏	SI1075北東隅柱穴	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.6	5.4	5.7	0.37	39.0	28	93-44-16
23-17	須恵器	坏	SI1075北東隅柱穴	ロクロ調整、底:回転糸切り、完形	13.2	5.4	3.9	0.41	29.5	35	93-44-17
23-18	土師器	坏	SI1075	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.2	5.9	4.1	0.45	31.0	31	93-44-18
23-19	土師器	坏	SI1075	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.4	5.2	4.3	0.42	34.7	34	93-44-19
23-20	土師器	坏	SI1075	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.1	6.0	4.2	0.46	32.1	34	93-44-20
23-21	土師器	坏	SI1075床直	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:赤色物質付着	11.6	5.6	4.5	0.48	38.8	29	93-44-21
23-22	土師器	坏	SI1075	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	5.6	4.8	0.43	36.9	31	93-46-22
23-23	土師器	坏	SI1075北東隅柱穴	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	4.8	5.7	0.39	46.7	24	93-46-23
23-24	土師器	坏	SI1075北東隅柱穴	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.8	6.2	4.4	0.45	31.9	36	93-46-24
23-25	土師器	坏	SI1075北東隅柱穴	ロクロ調整、底:切り離し不明、完形	14.9	6.4	8.4	0.43	56.4	18	93-46-25
23-26	土師器	坏	SI1075北東隅柱穴	ロクロ調整、底:回転糸切り	15.6	6.6	6.4	0.42	41.0	28	93-46-26
23-27	土師器	坏	SI1075北東隅柱穴	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.9	5.4	5.3	0.42	41.1	28	93-46-27
23-28	土師器	坏	SI1075北東隅柱穴	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.8	7.0	4.7	0.51	34.1	29	93-46-28
23-29	土師器	甕	SI1075北東隅柱穴	ロクロ調整、内:ヘラミガキ、胴部径23.8cm	19.8		(12.0)				93-46-29

番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径cm	底径cm	器高cm	底径指数	高径指数	外傾度	年報挿図番号
23-30	土師器	甕	SI1075カマド支脚	ロクロ調整、外:ヘラケズリ→ヘラミガキ、内:ヘラミガキ		9.7	(10.5)				93-46-30
23-31	須恵器	坏	SI1076	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、完形	12.8	7.0	3.5	0.55	27.3	34	93-48-31
23-32	須恵器	蓋	SI1076	ロクロ調整、内:全体に墨痕、完形	16.1		3.0				93-48-32
23-33	土師器	甕	SI1076	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:煤付着		7.0					93-48-33
23-34	土師器	甕	SI1076	ロクロ調整、底:回転糸切り		6.8	(7.8)				93-48-34
23-35	土師器	坏	SB1071	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	5.5	5.5	0.42	42.3	23	93-48-35
23-36	須恵器	坏	SB1077南東隅柱	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書	13.0	7.2	4.8	0.55	36.9	27	93-48-36
23-37	須恵器	坏	KH53地山面	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書「厨」、完形	13.2	6.2	4.1	0.47	31.1	33	93-48-37
第24図　長森東方地区・第100次（１）											
24-1	須恵器	坏	SI1106	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.6	7.4	3.8	0.60	30.2	26	94-18-1
24-2	須恵器	坏	SI1106	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	5.2	3.9	0.40	29.1	33	94-18-2
24-3	須恵器	坏	SI1106	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書、内:全面に墨あり	12.8	6.4	3.7	0.50	28.9	35	94-18-3
24-4	須恵器	坏	SI1106	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書「館」							94-18-4
24-5	須恵器	双耳坏	SI1106	ロクロ調整、底:回転糸切り	10.2	5.6	5.0				94-18-5
24-6	土師器	甕	SI1106カマド	ロクロ調整、外:ヘラケズリ		7.6	(9.0)				94-18-6
24-7	鉄製品	刀子	SI1106	木質部あり、長さ10.3cm、刃部幅1.4cm、厚さ0.4cm							94-18-7
24-8	須恵器	坏	SI1107床	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.4	6.3	3.4	0.50	27.4	31	94-19-8
24-9	須恵器	台付坏	SI1107下	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書（墨線）	10.6	5.3	5.2				94-19-9
24-10	土師器	坏	SI1107床	ロクロ調整、内・外:ヘラミガキ→黒色処理、漆付着、完形	14.1	5.0	6.0	0.35	42.6	24	94-19-10
24-11	須恵器	坏	SI1107床	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→ヘラケズリ	11.4	6.6	3.0	0.60	26.3	30	94-19-11
24-12	須恵器	坏	SI1108下	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.2	5.4	4.3	0.40	30.3	30	94-22-12
24-13	土師器	坏	SI1108下	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.7	5.2	4.9	0.40	38.6	30	94-22-13
24-14	土師器	坏	SI1108上	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.1	5.2	4.8	0.40	36.6	32	94-22-14
24-15	土師器	坏	SI1108下	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.0	4.8	5.1	0.40	42.5	22	94-22-15
24-16	土師器	坏	SI1108下	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	5.4	4.1	0.40	30.6	35	94-22-16
24-17	土師器	坏	SI1108下	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:煤付着、完形	14.2	5.8	4.6	0.40	32.4	29	94-22-17
24-18	石製品	紡錘車	SI1108	全体が研磨、半欠、長さ6.8cm、幅3.7cm、厚さ1.7cm							94-22-18
24-19	須恵器	坏	SI1114下	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書、内:墨痕あり	13.4	5.0	3.4	0.37	25.4	40	94-27-19
24-20	須恵器	坏	SI1114下	ロクロ調整、底:回転糸切り→底部に「小勝」		4.2	(1.9)				94-27-20
24-21	土師器	坏	SI1114床直	ロクロ調整、切り離し不明	13.6	5.8	4.8	0.40	35.3	25	94-27-22
24-22	須恵器	坏	SI1116	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.8	7.0	3.8	0.55	29.7	33	94-29-23
24-23	鉄製品	鋤先	SI1116	長さ9.4cm、幅11.3cm、厚さ2.8cm							94-29-24
24-24	須恵器	坏	SI1125上	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:硯に転用	13.2	5.8	3.6	0.40	27.2	38	94-31-25
24-25	須恵器	坏	SI1125上	ロクロ調整、底:回転糸切り、底部に墨書	13.4	5.0	4.4	0.37	32.8	35	94-31-26
24-26	須恵器	坏	SI1125カマド	ロクロ調整、底:回転糸切り	15.8	5.0	4.9	0.32	31.0	33	94-31-27
24-27	須恵器	台付坏	SI1125上	ロクロ調整、底:回転糸切り	15.6	6.6	6.5	0.42	41.7	29	94-31-28
24-28	須恵器	坏	SI1125上	ロクロ調整、底:回転糸切り、→墨書「春」	14.2	6.8	6.9	0.48	48.6	23	94-31-29
24-29	須恵器	坏	SI1125上	ロクロ調整、底:回転糸切り、外面体下半ケズリ	15.4	6.6	5.9	0.43	38.3	27	94-31-30
24-30	須恵器	坏	SI1125上	ロクロ調整、底:回転糸切り、外:墨書		5.0	(2.0)				94-31-31
24-31	土師器	坏	SI1125上	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	4.6	4.3	0.35	33.1	36	94-31-32
24-32	土師器	坏	SI1125	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	4.6	4.5	0.40	34.6	33	94-31-33
24-33	土師器	坏	SI1125床	ロクロ調整、底:回転糸切り	16.6	8.0	6.1	0.48	36.7	30	94-31-34
24-34	土師器	坏	SI1125下	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.1	5.4	4.7	0.41	35.9	30	94-31-35
24-35	土師器	坏	SI1125上	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.6	4.6	4.6	0.40	39.7	32	94-31-36
24-36	土師器	坏	SI1125下	ロクロ調整、外:墨書「鷹空上」							94-32-37
24-37	土師器	台付坏	SI1125	ロクロ調整、内:黒色処理		6.8	(4.4)				94-32-38
24-38	土師器	甕	SI1125カマド支脚	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.4	6.2	11.7				94-32-39
24-39	瓦	丸瓦	SI1125上	凸面:無文、凹面:布目痕、長さ13.2、幅9.8、厚2.8							94-32-40
第25図　長森東方地区・第100次（２）											
25-1	須恵器	坏	SI1126床	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.0	8.4	3.1	0.60	23.8	31	94-35-41
25-2	須恵器	坏	SI1126床	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	14.4	8.8	3.6	0.60	25.0	29	94-35-42
25-3	須恵器	坏	SI1126	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.2	7.2	3.3	0.50	25.0	30	94-35-43
25-4	須恵器	坏	SI1126床	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書「上○」	14.4	5.3	4.1	0.36	28.5	39	94-35-44
25-5	須恵器	坏	SI1126	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書	12.6	6.4	3.4	0.51	27.0	37	94-35-45
25-6	土師器	甕	SI1126カマド煙道	ロクロ調整	19.4		(9.5)				94-35-46
25-7	瓦	平瓦	SI1126	凸面:正格子叩、凹面:布目痕、長さ11.8、幅9.0、厚2.1							94-35-47
25-8	瓦	丸瓦	SI1126下	凸面:無文、凹面:布目痕、長さ12.2、幅11.9、厚1.6							94-36-48
25-9	須恵器	坏	SI1139上	ロクロ調整、底:回転糸切り、完形	12.3	6.4	4.0	0.50	32.5	28	94-37-50
25-10	土師器	坏	SI1139	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.3	4.8	5.0	0.40	40.7	33	94-37-51
25-11	土師器	坏	SI1139	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.8	6.4	6.5	0.43	44.0	26	94-37-52
25-12	土師器	坏	SI1139上	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.8	6.0	6.5	0.40	43.9	26	94-37-53
25-13	土師器	台付坏	SI1139	ロクロ調整、内:黒色処理	13.0	7.0	9.3				94-37-54
25-14	土師器	鉢	SI1139	非ロクロ調整、底・木葉痕	7.7	5.6	4.5				94-37-55
25-15	土師器	坏	SI1141	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:黒色処理	13.8	5.4	6.1	0.40	44.2	27	94-38-56
25-16	土師器	坏	SI1141	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	6.2	5.2	0.51	42.6	25	94-38-57
25-17	土師器	坏	SI1141	ロクロ調整、底:回転糸切り	15.0	6.6	5.1	0.40	34.0	30	94-38-58
25-18	土師器	坏	SI1141	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.8	5.8	5.3	0.50	41.4	28	94-38-59
25-19	土師器	坏	SI1141	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.0	5.4	5.0	0.45	41.7	25	94-38-60
25-20	土師器	坏	SI1141	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.9	5.8	4.9	0.40	38.0	29	94-38-61
25-21	土師器	坏	SI1141	ロクロ調整、底:回転糸切り	16.6	6.0	5.5	0.40	33.1	39	94-38-62

番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径cm	底径cm	器高cm	底径指数	高径指数	外傾度	年報挿図番号
25-22	土師器	坏	SI1141	ロクロ調整、底:回転糸切り、完形	13.2	6.2	5.0	0.50	37.9	25	94-38-63
25-23	土師器	坏	SI1141	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.3	5.2	4.7	0.40	38.2	28	94-38-64
25-24	須恵器	坏	SB1082Ｃ－Ｐ11	ロクロ調整、底:回転糸切り、掘形内出土	13.6	6.6	4.1	0.49	30.1	35	94-41-65
25-25	須恵器	坏	SB1082	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書「官」		5.7	(1.7)				94-41-66
25-26	土師器	坏	SB1082Ｃ－Ｐ14	ロクロ調整、底:回転糸切り、掘形内出土	11.2	5.2	4.8	0.46	42.9	21	94-41-67
25-27	須恵器	坏	SB1127　Ｐ5	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書「工」	13.8	7.2	3.4	0.50	24.6	34	94-43-68
25-28	須恵器	坏	SB1127　Ｐ5抜穴	ロクロ調整、外:墨書「口」							94-43-69
25-29	瓦	平瓦	SB1127　Ｐ5抜穴	凸面:正格子叩、凹面:布目痕、長さ7.6、幅7.3、厚2.0							94-43-70
25-30	瓦	丸瓦	SB1127　Ｐ5掘形	凸面:無文、凹面:布目痕、長さ13.6、幅11.4、厚1.8							94-43-71
25-31	鉄製品	鎌か	SB1127　Ｐ5掘形	長さ7.0、幅5.8、厚1.9							94-43-72
第26図　長森東方地区・第100次（３）											
26-1	土師器	坏	SK1105	ロクロ調整、底:回転糸切り、外～底:墨書	12.6	6.0	4.6	0.48	36.5	26	94-46-73
26-2	土師器	坏	SK1105	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.6	5.2	5.2	0.40	38.2	35	94-46-74
26-3	須恵器	坏	SK1109	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.8	5.0	4.0	0.42	33.9	29	94-46-75
26-4	須恵器	坏	SK1109	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.1	5.0	5.0	0.38	38.2	31	94-46-76
26-5	須恵器	坏	SK1109	ロクロ調整、底:回転糸切り、完形	12.3	5.0	4.2	0.41	34.1	28	94-46-77
26-6	土師器	坏	SK1109	ロクロ調整、底:回転糸切り、内外:ヘラミガキ→黒色処理	14.4	5.8	6.7	0.40	46.5	21	94-46-78
26-7	土師器	坏	SK1109	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.6	5.4	5.2	0.47	44.8	25	94-46-79
26-8	土師器	坏	SK1109	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.5	4.2	5.5	0.40	47.8	24	94-46-80
26-9	須恵器	蓋	SK970中	ロクロ調整	14.2		2.2				94-55-84
26-10	須恵器	蓋	SK970下	ロクロ調整、外:墨書「山」							94-55-85
26-11	須恵器	坏	SK1118	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書	12.4	7.2	2.6	0.60	21.0	35	94-56-86
26-12	須恵器	坏	SK1118	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.4	6.0	3.9	0.50	31.5	33	94-56-87
26-13	須恵器	坏	SK1118	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	6.3	4.0	0.50	29.9	34	94-56-88
26-14	須恵器	坏	SK1118	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.6	5.2	4.4	0.40	32.3	35	94-56-89
26-15	須恵器	坏	SK1118-3層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.6	6.4	4.2	0.50	30.9	35	94-56-90
26-16	土師器	坏	SK1118	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:ヘラミガキ→黒色処理	16.8	6.0	6.5	0.36	38.7	28	94-56-91
26-17	土師器	台付坏	SK1118	ロクロ調整、内:ヘラミガキ→黒色処理	13.4	6.4	6.2				94-56-92
26-18	土師器	坏	SK1122	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.6	6.4	4.9	0.50	36.0	30	94-58-93
26-19	土師器	坏	SK1122	ロクロ調整、底:回転糸切り、外:墨書							94-58-94
26-20	土師器	坏	SK1122	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書「内」、内:墨痕							94-58-95
26-21	須恵器	長頸壺	SK1122	ロクロ調整、頸部にリング（段）あり	9.0		(11.7)				94-58-96
26-22	須恵器	横瓶	SK1132	ロクロ調整	10.1		(5.7)				94-58-97
26-23	瓦	平瓦	SK1132	凸面:正格子叩、凹面:布目痕、長さ15.3、幅13.9、厚2.5							94-58-99
26-24	土師器	坏	SK1132	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	5.0	4.7	0.37	35.1	34	94-58-98
26-25	須恵器	坏	KG42-2層	ロクロ調整、底:回転糸切り、外面全体と内面一部に習書	13.7	5.6	3.7	0.41	27.0	42	94-60-100
26-26	須恵器	坏	KI42-2層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、底部・体部に墨痕	12.2	7.2	3.7	0.60	30.3	28	94-60-101
26-27	須恵器	坏	KI44-2層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	5.0	4.4	0.41	36.1	34	94-60-102
26-28	須恵器	坏	KE46-2層	ロクロ調整、底:回転ケズリ	14.8	5.8	6.6	0.40	44.6	28	94-60-103
26-29	須恵器	坏	KG41-2層	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書							94-60-104
26-30	須恵器	台付坏	KF42-2層	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書		6.8	(3.0)				94-60-105
26-31	瓦	平瓦	KL48-2層	凸面:渦巻叩、凹面:不明、長さ5.2、幅5.1、厚2.3							94-61-110
26-32	瓦	平瓦	表採	凸面:正格子叩、凹面:布目痕、長さ9.9、幅8.1、厚2.3							94-61-109
26-33	瓦	丸瓦	KH47-2層	凸面:無文、凹面:布目痕、長さ14.4、幅11.9、厚3.0							94-61-111
第27図　長森東方地区・第105次（１）											
27-1	須恵器	長頸壺	SI967	ロクロ調整、頸部にリング（段）あり	12.0		(9.7)				95-23-1
27-2	土師器	坏	SI967	ロクロ調整、外:墨書	13.0		(3.6)				95-23-2
27-3	須恵器	坏	SI1148柱穴内	ロクロ調整、底:回転糸切り、南壁面西から２本目の柱穴	12.5	6.4	4.2	0.50	33.0	28	95-25-3
27-4	須恵器	坏	SI1148床面	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.5	5.6	5.0	0.45	40.0	30	95-25-4
27-5	須恵器	坏	SI1148床直	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.3	5.8	4.5	0.43	33.0	32	95-25-5
27-6	須恵器	坏	SI1148下層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.8	5.4	4.8	0.40	37.5	30	95-25-6
27-7	須恵器	坏	SI1148床面	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.8	5.2	4.8	0.41	37.5	30	95-25-7
27-8	須恵器	坏	SI1148床面	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.8	5.6	5.3	0.41	38.4	29	95-25-8
27-9	須恵器	坏	SI1148床面	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	6.0	4.9	0.44	36.0	28	95-25-9
27-10	須恵器	坏	SI1148床面	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.8	4.4	4.7	0.34	36.7	29	95-25-10
27-11	須恵器	坏	SI1148	ロクロ調整、底:回転糸切り、外:片口状、完形	12.8	5.8	5.2	0.45	40.0	23	95-25-11
27-12	須恵器	坏	SI1148上	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.8	4.6	4.3	0.36	33.6	35	95-25-12
27-13	須恵器	坏	SI1148下	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	6.2	4.7	0.46	35.1	30	95-25-13
27-14	須恵器	坏	SI1148床面	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.2	5.4	5.0	0.40	37.0	31	95-25-14
27-15	須恵器	台付坏	SI1148床直	ロクロ調整、底:回転糸切り、外～底部:墨書「官　小勝」	15.0	6.6	6.4				95-26-17
27-16	須恵器	坏	SI1148床面	ロクロ調整、底:回転糸切り、外～底部:墨書「官　小勝」	15.0	6.8	6.9	0.45	46.0	25	95-26-18
27-17	須恵器	坏	SI1148床面	ロクロ調整、底:回転糸切り、外～底部:墨書「官　小勝」	12.4	5.2	4.0	0.42	32.3	35	95-26-19
27-18	須恵器	坏	SI1148カマド上部	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書「厨」、完形	15.0	7.0	7.4	0.46	49.0	23	95-26-20
27-19	須恵器	坏	SI1148下層	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書「大」			(2.4)				95-26-21
27-20	土師器	坏	SI1148床面	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.4	5.6	4.9	0.49	42.0	23	95-27-24
27-21	土師器	坏	SI1148下層	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.4	5.0	5.2	0.44	45.6	18	95-27-25
27-22	土師器	坏	SI1148	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.6	5.0	6.6	0.40	48.0	23	95-27-26
27-23	土師器	坏	SI1148床直	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.6	5.7	5.1	0.41	37.0	33	95-27-27
27-24	土師器	坏	SI1148床直	ロクロ調整、底:回転糸切り、口縁部煤付着	12.0	4.2	5.2	0.35	43.0	26	95-27-28
27-25	土師器	坏	SI1148下層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.6	5.6	5.8	0.44	46.0	24	95-27-29

番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径cm	底径cm	器高cm	底径指数	高径指数	外傾度	年報挿図番号
27-26	土師器	台付坏	SI1148中・上層	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:ミガキ→黒色処理		6.6	(3.0)				95-27-30
27-27	土師器	坏	SI1149	ロクロ調整、底:回転糸切り	15.0	7.0	7.5	0.47	50.0	22	95-30-34
27-28	土師器	坏	SI1149	ロクロ調整、底:回転糸切り	16.0	6.8	5.7	0.43	84.0	31	95-30-35
27-29	須恵器	坏	SI1167床面	ロクロ調整、底：回転糸切り、外：墨痕、内：墨・漆付着、完形	13.5	5.4	4.2	0.40	31.0	33	95-32-36
27-30	須恵器	坏	SI1167床面	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.2	4.6	4.7	0.35	35.6	32	95-32-37
27-31	須恵器	坏	SI1167床面	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.4	5.8	4.1	0.51	36.0	35	95-32-38
27-32	須恵器	坏	SI1167床面	ロクロ調整、底:回転糸切り、外:墨書、内:全体に墨		6.2	(2.3)				95-32-39
27-33	須恵器	坏	SI1167	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書							95-32-41
27-34	土師器	坏	SI1167床面	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	5.4	6.0	0.44	50.0	20	95-32-42
27-35	土師器	坏	SI1167床面	ロクロ調整、底:回転糸切り	15.2	4.4	5.2	0.28	34.2	35	95-32-43
27-36	土師器	坏	SI1167床面	ロクロ調整、内:ミガキ→黒色処理	15.2		(6.5)				95-32-46
27-37	土師器	甕	SI1167	ロクロ調整、外:ヘラケズリ	21.0		(18.0)				95-33-48
第28図　長森東方地区・第105次（２）											
28-1	須恵器	坏	SK1158	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.8	5.5	3.9	0.43	30.5	36	95-43-58
28-2	須恵器	坏	SK1158	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.6	7.0	3.7	0.56	29.4	31	95-43-59
28-3	須恵器	坏	SK1161	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.2	7.0	3.8	0.57	31.0	30	95-46-61
28-4	須恵器	坏	SK1165	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:漆付着	13.8	5.5	4.9	0.40	35.5	33	95-47-62
28-5	須恵器	坏	SK1165	ロクロ調整	14.0						95-47-63
28-6	土師器	坏	SK1165	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	5.2	5.7	0.43	46.7	23	95-47-64
28-7	須恵器	坏	SK1166	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.4	7.2	4.8	0.58	38.7	29	95-48-66
28-8	須恵器	坏	SK1171	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.8	6.4	3.7	0.46	26.8	38	95-50-67
28-9	須恵器	台付坏	SK1171	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.8	7.0	6.9				95-50-68
28-10	須恵器	坏	SK1179	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書	12.1	6.0	4.0	0.50	33.0	29	95-52-70
28-11	須恵器	台付坏	SK1179	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書	15.2	8.5	9.3				95-52-71
28-12	須恵器	台付坏	SK1179	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り		7.4					95-52-72
28-13	土師器	小甕	KJ39地山面	ロクロ調整、底:回転糸切り	16.0	8.4	10.5	0.50	65.6		95-53-73
28-14	瓦	平瓦	KJ38-2層	凸面:正格子叩、凹面:布目痕、長さ7.5、幅2.1、厚2.0							95-53-74
28-15	瓦	丸瓦	KI35-2層	凸面:無文、凹面:布目痕、長さ16.3、幅2.7、厚2.3							95-53-75
第52図　政庁西側地区・第115次											
52-1	須恵器	甕	SI1229	外:平行叩、内:青海波アテ具、図示面下端に擦面形成							99-8-1
52-2	須恵器	坏	SI1236	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書「工」		6.6	(2.2)				99-11-1
52-3	土師器	坏	SI1236	ロクロ調整、底:回転糸切り、被熱	12.2	5.3	5.1	0.43	41.8	31	99-11-2
52-4	土師器	坏	SI1236	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.1	4.9	5.5	0.35	39.0	32	99-11-3
52-5	土師器	台付坏	SI1236	ロクロ調整、底:回転糸切り→菊花状ケズリ		6.4					99-11-4
52-6	土師器	台付皿	SI1236	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.6	4.9	3.4	0.42	28.9	52	99-11-8
52-7	土師器	坏	SK1244	ロクロ調整、底:回転糸切り、被熱	11.7	5.2	4.7	0.44	40.2	30	99-11-9
52-8	土師器	坏	SK1244	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.6	5.5	4.35	0.44	34.5	35	99-11-10
52-9	土師器	坏	SK1244	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.9	5.7	4.3	0.44	33.3	34	99-11-11
52-10	須恵質	硯	SK1220	長さ13.2cm、幅6.8cm、高さ2.4cm、脚部欠落							99-14-1
52-11	土師器	坏	SK1220	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:全体に漆付着、漆容器か	11.8	4.6	4.4	0.39	37.3	36	99-14-2
52-12	土師器	坏	SK1220	ロクロ調整、底:回転糸切り	10.8	4.8	3.3	0.44	30.6	37	99-14-3
52-13	土師器	坏	SK1220	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:漆付着、被熱	11.6	5.8	4.9	0.50	42.2	25	99-14-4
52-14	土師器	坏	SK1220	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.7	5.2	4.75	0.44	40.6	30	99-14-5
52-15	土師器	坏	SK1220	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.3	5.0	5.2	0.41	42.3	28	99-14-6
52-16	土師器	坏	SK1221	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.2	4.2	4.45	0.38	39.7	29	99-15-1
52-17	土師器	坏	SK1221	ロクロ調整、底:回転糸切り、外:墨書「廾」、被熱	12.0	5.1	4.5	0.42	37.5	33	99-15-2
52-18	土師器	坏	SK1221	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.3	3.9	4.1	0.32	33.3	37	99-15-3
52-19	土師器	坏	SK1221	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.9	4.5	4.5	0.35	34.9	31	99-15-4
52-20	土師器	坏	SK1221	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.1	4.4	5.0	0.34	38.2	37	99-15-5
52-21	土師器	皿	SK1221	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.5	4.9	2.5	0.39	20.2	59	99-15-6
52-22	土師器	坏	SK1257	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.2	4.3	4.7	0.38	42.0	29	99-15-9
52-23	土師器	甕	SK1221	ロクロ調整	14.7		(6.3)				99-15-7
52-24	土師器	坏	SD1231	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.0	4.8	4.2	0.44	38.2	33	99-18-1
52-25	土師器	坏	SD1231	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.6	5.3	4.2	0.46	36.2	32	99-18-2
52-26	土師器	坏	SD1231	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.8	5.4	4.55	0.46	38.6	33	99-18-3
52-27	土師器	坏	SD1231	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.8	5.0	4.7	0.42	39.8	33	99-18-4
52-28	土師器	坏	SD1231	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.0	4.5	4.5	0.38	37.5	36	99-18-5
52-29	土師器	坏	SD1231	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	5.6	4.5	0.46	36.9	35	99-18-6
52-30	土師器	坏	SD1231	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.6	5.8	4.9	0.46	38.9	32	99-18-9
52-31	土師器	皿	SD1231	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.1	5.0	2.75	0.41	22.7	54	99-18-12
52-32	土師器	坏	SD1231	ロクロ調整、底:回転糸切り、内外面に漆付着、漆容器か		4.5	3.2				99-19-18
52-33	土師器	坏	SD1231	ロクロ調整、底:回転糸切り、内外面に漆付着、漆容器か		4.5	(3.2)				99-19-19
52-34	土師器	坏	SD1231	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:ロクロ→ミガキ→黒色処理	18.2	7.1	7.3	0.39	40.1	38	99-19-20
52-35	須恵器	坏	IM63Ⅱ層下	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.2	9.2	3.7	0.70	28.0	19	99-22-2
52-36	須恵器	長頸壺	IM63Ⅱ層	ロクロ調整、外面は沈線状			(6.0)				99-22-5
52-37	須恵器	甕	表採	ロクロ調整、外:波状沈線							99-22-6
52-38	須恵器	甕	表採	ロクロ調整、外:３条１組の波状沈線２段施文							99-22-7
第54図　政庁西側地区・第122次（２）											
54-1	土師器	坏	SK1574	ロクロ調整、底:回転糸切り、完形正位で出土	12.8	5.0	4.7	0.39	36.7	39	03-9-1
54-2	須恵器	台付坏	SKI1560B　RP474	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	10.1	6.3	4.8				03-9-2

番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径cm	底径cm	器高cm	底径指数	高径指数	外傾度	年報挿図番号
54-3	須恵器	坏	SKI1560B　RP435	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.1	6.9	3.3	0.53	25.2	35	03-9-3
54-4	須恵器	坏	SKI1560B　RP449	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書「口舎」	12.9	6.5	4.0	0.50	31.0	29	03-9-4
54-5	須恵器	台付坏	SKI1560B	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書		5.5	(2.5)				03-9-5
54-6	須恵器	坏	SKI1560　RP473	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	14.4	8.3	3.5	0.58	24.3	32	03-9-6
54-7	須恵器	坏	SKI1560B	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書		6.4	(0.9)				03-9-7
54-8	土師器	坏	SKI1560B	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.4	4.3	4.5	0.38	39.5	32	03-9-8
54-9	土師器	坏	SKI1560A	ロクロ調整、底:回転糸切り、内面墨付着	11.8	4.3	4.7	0.36	39.8	32	03-9-9
54-10	土師器	双耳坏	SKI1560B	耳部ケズリ、内面黒色処理							03-9-10
54-11	須恵質	硯	SKI1560A	脚部剥落							03-9-12
54-12	須恵器	坏	SKI1567A	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書		6.5	(0.7)				03-9-14
54-13	土師器	蓋	SKI1560A　RP108	ロクロ調整、外:ミガキ、内:ミガキ→黒色処理	22.3		(4.0)				03-9-13
54-14	土師器	坏	SKI1567A　RP76	ロクロ調整、外:口縁部ミガキ、内:ミガキ→黒色処理	18.8		(8.0)				03-9-15
54-15	土師器	坏	SKI1567A	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:放射状ミガキ→黒色処理		6.4	(2.6)				03-9-16
54-16	須恵器	坏	SKI1542	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:墨・煤付着	12.7	6.0	3.5	0.47	27.6	36	03-10-18
54-17	須恵器	坏	SKI1542	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:墨付着	13.3	5.5	4.1	0.41	30.8	40	03-10-19
54-18	須恵器	坏	SKI1542	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書「壬」							03-10-20
54-19	須恵器	台付坏	SKI1542　RP269	ロクロ調整、底:回転糸切り、口縁意図的打ち欠き、内:墨付着		5.7	(5.2)				03-10-21
54-20	土師器	坏	SKI1542　RP426	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:漆付着	15.7	5.4	5.2	0.34	33.1	37	03-10-23
54-21	土師器	坏	SKI1542	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:墨・漆付着	12.2	5.4	5.4	0.44	44.3	25	03-10-24
54-22	鉄製品	鉄斧	SKI1542　RM385	長さ8.1cm、幅4.7cm、厚さ2.2cm							03-10-25
54-23	鉄製品	紋具	SKI1542	長さ5.5cm、幅3.3cm							03-10-26
54-24	土師器	坏	SK1521　RP331	ロクロ調整、底:回転糸切り、二次的に火熱を受ける	13.1	6.3	3.9	0.48	29.8	35	03-11-27
54-25	土師器	坏	SK1521	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.3	6.0	5.0	0.45	37.6	25	03-11-30
54-26	土師器	坏	SK1521	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.0	4.9	3.2	0.41	26.7	46	03-11-34
54-27	土師器	台付坏	SK1521　RP212	ロクロ調整、底:回転糸切り→付高台	11.3	6.2	4.1				03-11-35
54-28	土師器	坏	SK1521RP51・145	ロクロ調整、内:ミガキ→黒色処理	12.8	5.0	4.7	0.39	36.7	29	03-11-36
54-29	土師器	甑か	SK1521　RP230	把手部ケズリ							03-11-37
54-30	須恵質	二面硯	SK1521　RP387	脚付、長さ15.1cm、幅14.1cm、高さ2.6cm							03-11-38
54-31	鉄製品	板状	SKI1537A RM365	長さ14.4cm、幅2.9cm、厚さ1.4cm							03-12-42
54-32	土師器	坏	SN1504　RP345	ロクロ調整、底:回転糸切り、内外:一部にタール付着	13.7	5.9	4.6	0.43	33.6	33	03-12-40
54-33	土師器	坏	SD1516　RP198	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	5.3	4.1	0.41	31.5	40	03-12-44
54-34	須恵質	二面硯	SD1547B　RP194								03-12-45
第55図　政庁西側地区・第122次（３）											
55-1	須恵器	長頸壺	SK1513	ロクロ調整	11.8	9.5	(28.7)				03-13-46
55-2	土師器	坏	SD1530　RP520	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.8	5.4	4.6	0.42	35.9	33	03-18-47
55-3	土師器	坏	SD1530　RP509	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.0	4.7	4.4	0.39	36.7	36	03-18-48
55-4	土師器	坏	SD1530　RP516	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.9	4.7	4.8	0.39	40.3	31	03-18-49
55-5	土師器	坏	SD1530　RP493	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.7	5.6	4.1	0.44	32.3	38	03-18-50
55-6	土師器	坏	SD1530　RP507	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.7	4.3	4.6	0.37	39.3	35	03-18-51
55-7	土師器	坏	SD1530　RP491	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	5.2	5.3	0.40	40.8	31	03-18-52
55-8	須恵器	坏	SKI1492B	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	10.9	5.8	3.4	0.53	31.2	32	03-27-1
55-9	須恵質	二面硯	SKI1492B								03-27-2
55-10	須恵器	坏	SK1582A	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り		8.8	(2.0)				03-27-3
55-11	土師器	皿	SD1526　RP612	ロクロ調整、底:回転糸切り、坏を加工して皿に形成	7.6	4.9	1.5	0.64	19.7	45	03-27-4
55-12	須恵器	甕	SK1565	ロクロ調整、胎土は土師器、還元、土師器を須恵器窯で焼成か							03-27-6
55-13	土師器	坏	SK1630A　RP833	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.1	5.5	6.4	0.39	45.4	26	03-27-7
55-14	土師器	坏	SKI1556A　RP591	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.2	5.4	5.4	0.48	48.2	22	03-27-8
55-15	須恵質	二面硯	SD1489	脚付							03-27-11
55-16	土師器	坏	SK1529　RP160	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.9	4.8	4.5	0.40	37.8	36	03-27-12
55-17	須恵器	坏	SKI1484B	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、口縁部意図的に打ち欠き	12.9	6.2	3.7	0.48	28.7	32	03-27-13
55-18	須恵器	坏	SKI1484B	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:底部に墨塗	12.5	6.3	3.5	0.50	28.0	30	03-27-14
55-19	須恵器	坏	SKI1484B　RP888	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	14.9	10.5	3.4	0.70	22.8	21	03-27-15
55-20	須恵器	台付坏	SKI1484B　RP922	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→付高台	12.0	6.9	4.5	0.58	37.5	25	03-30-16
55-21	須恵器	壺	SKI1484A	ロクロ調整、底:ケズリ、壺Gか		4.9	(4.4)				03-30-17
55-22	土師器	仏鉢	SKI1484B	ロクロ調整、内:横位ミガキ→黒色処理、ＲＰ942・947	18.6		(7.3)				03-30-18
55-23	瓦質土器	不明	SKI1484B	ロクロ調整、ミガキ、外:刀子状工具による線刻							03-30-19
55-24	瓦	平瓦	SKI1484A　RP308	凸面:正格子叩、凹面:布目痕							03-30-20
55-25	須恵器	坏	SKI1491　RP383	ロクロ調整、底:回転糸切り、外:墨書「厨」	13.2	6.2	4.0	0.47	30.3	33	03-31-22
55-26	須恵器	甑か	SKI1491　RP383	把手部							03-31-23
55-27	須恵器	坏	JN50　RP378	ロクロ調整、底:回転糸切り、内面朱用（赤色）転用硯	12.8	5.5	3.6	0.43	28.1	39	03-33-24
55-28	須恵器	坏	JS50	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書「厨/口」		8.4	(1.7)				03-33-26
55-29	土師器	台付坏	JR50	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:横位ミガキ→黒色処理	13.9	6.0	6.2				03-33-28
55-30	土師器	坏	JK50	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:横位ミガキ→黒色処理	16.2	6.1	5.9	0.38	36.4	38	03-33-29
55-31	須恵器	甕	JR50	外:平行叩、内:原体不明アテ具							03-33-27
第56図　政庁西側地区・第123・135次											
56-1	須恵器	蓋	D区SKI1631　RP9	ロクロ調整、内:転用硯							03-41-1
56-2	須恵器	坏	D区IK70	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	4.6	3.3	0.38	27.0	36	03-41-2
56-3	土師器	台付坏	D区IK70	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:ミガキ→黒色処理	15.2	6.0	5.4	0.39	35.5	38	03-41-3
56-4	須恵器	坏	D区表面採集	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書「郡」		10.3	(1.6)				03-41-6
56-5	土師器	坏	SK1864	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	5.0	4.7	0.38	36.2	31	07-11-7

番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径㎝	底径㎝	器高㎝	底径指数	高径指数	外傾度	年報挿図番号
56-6	土師器	坏	SK1864　RP595	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.4	5.4	4.3	0.47	37.7	26	07-11-9
56-7	土師器	坏	SK1864	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.4	5.4	4.7	0.44	37.9	34	07-11-10
56-8	土師器	坏	SK1864　RP613	ロクロ調整、底:回転糸切り、漆状付着物あり	12.4	5.2	4.2	0.42	33.9	36	07-11-11
56-9	土師器	坏	SK1864　RP605	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	5.4	4.6	0.44	37.7	35	07-11-17
56-10	土師器	坏	SK1864　RP599	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.3	5.4	4.8	0.44	39.0	32	07-12-24
56-11	土師器	坏	SK1864　RP612	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	5.2	3.9	0.39	29.1	43	07-12-31
56-12	土師器	坏	SK1864　RP617	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	5.6	4.7	0.46	38.5	33	07-12-32
56-13	土師器	坏	SK1864	非ロクロ、内外:ミガキ→黒色処理	13.3		(3.5)				07-13-37
56-14	土師器	坏	SK16　RP598	非ロクロ、底:簾状圧痕、内:ミガキ→黒色処理、外:ケズリ→ナデ	11.8	6.4	5.5	0.54	46.6		07-13-39
56-15	須恵器	坏	SK1914　RP632	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.1	5.8	4.3	0.41	30.5	35	07-14-40
56-16	須恵器	坏	SKI1896　RP555	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書「官」	12.5	7.4	3.9	0.59	31.2	32	07-15-45
56-17	須恵器	坏	SKI1896	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.9	8.6	3.8	0.67	29.5	22	07-15-46
56-18	須恵器	坏	SKI1896　RP549	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.2	5.5	3.8	0.42	28.8	41	07-15-47
56-19	須恵器	台付坏	SKI1896	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、RP393・558	12.6	7.5	4.5	0.60	35.7	23	07-15-48
56-20	灰釉陶器	皿か椀	SKI1896　RP500	ロクロ調整→施釉			(2.6)				07-15-49
56-21	灰釉陶器	椀	SKI1896　RP498	ロクロ調整→施釉(刷毛塗りか)			(4.4)				07-15-50
56-22	土師器	坏	SKI1896　RP460	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.8	5.2	4.6	0.44	39.0	29	07-15-51
56-23	土師器	坏	SKI1896　RP414	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	5.8	4.4	0.48	36.1	30	07-15-53
56-24	土師器	坏	SKI1892　床直	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.9	4.2	4.5	0.35	37.8	34	07-16-55
56-25	土師器	坏	SKI1892	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.2	5.4	4.8	0.48	42.9	33	07-16-56
56-26	土師器	坏	SKI1892	ロクロ調整、底:回転糸切り、被熱	11.4	5.0	5.2	0.44	45.6	23	07-16-57
56-27	土師器	坏	SKI1892　床直	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.3	4.6	4.8	0.32	33.6	35	07-16-58
56-28	土師器	坏	SKI1892　RP260	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	5.6	4.7	0.43	36.2	35	07-16-59
56-29	土師器	坏	SKI1892　RP522	ロクロ調整、底:回転糸切り、被熱	14.0	4.6	5.0	0.33	35.7	36	07-16-62
56-30	土師器	坏	SK1893　RP654	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.6	4.6	4.6	0.37	36.5	31	07-17-64
56-31	土師器	坏	SK1893　RP653	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.0	5.8	5.5	0.41	39.3	27	07-17-65
56-32	土師器	坏	SK1893	ロクロ調整、底:回転糸切り	15.4	5.2	5.2	0.34	33.8	40	07-17-66
56-33	土師器	坏	SK1893　RP281	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.8	5.0	5.2	0.39	40.6	34	07-17-67
56-34	土師器	皿	SK1893	ロクロ調整、底:回転糸切り、RP652・653	13.0	4.9	3.2	0.38	24.6	41	07-17-68
56-35	土師器	皿	SK1893　RP653	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.8	5.2	2.4	0.44	20.3	48	07-17-69
56-36	土師器	皿	SK1893	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.6	4.9	2.8	0.36	20.6	56	07-17-70
56-37	須恵器	坏	SK1893	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書「舎」か		7.0	(1.1)				07-17-71
56-38	土師器	坏	SK1859　RP525	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:ミガキ→黒色処理	13.8	5.8	5.9	0.42	42.8	28	07-18-72
56-39	土師器	坏	SKI1859　RP344	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.8	4.8	4.2	0.41	35.6	33	07-18-73
56-40	土師器	皿	KI61　RP411	ロクロ調整、底:回転糸切り、坏を皿に再加工		4.8	(1.5)				07-18-75
56-41	須恵器	台付坏	KD61　RP258	ロクロ調整	19.6		(7.8)	0.52	39.8	26	07-18-77
第72図　外郭西門東側地区・第117・119次（1）											
72-1	土師器	甕	SI1274床直	ロクロ調整、底:回転糸切り、被熱	14.1	7.8	(17.7)				00-6-1
72-2	須恵器	坏	SI1274	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、内外:タール付着→燈明皿転用	13.8	8.7	3.7	0.63	26.8	27	00-6-3
72-3	須恵器	甕	SI1274 RP1	外:格子叩→ナデ、内:青海波アテ具							00-6-4
72-4	土師器	坏	SI1266 RP3・4	ロクロ調整、底:回転糸切り、外:墨書「厨口」	12.6	4.4	5.2	0.35	41.3	34	00-9-1
72-5	土師器	坏	SI1266	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.9	4.3	5.0	0.36	42.0	29	00-9-2
72-6	土師器	坏	SI1266	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.6	5.3	4.6	0.42	36.5	32	00-9-3
72-7	土師器	坏	SI1266	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.9	5.3	5.1	0.41	39.5	34	00-9-5
72-8	土師器	皿	SI1266	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.5	5.1	3.1	0.38	23.0	52	00-9-11
72-9	土師器	坏	SI1281	ロクロ調整、底:回転糸切り、被熱	12.9	4.6	5.4	0.36	41.9	26	00-15-1
72-10	須恵器	甕	SI1288	外:平行叩、内:青海波アテ具、破片を再整形して転用硯							00-15-4
72-11	須恵器	坏	SI1289	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.9	5.1	4.0	0.40	31.0	39	00-15-5
72-12	土師器	甕	SI1295	ロクロ調整、内:全体に煤状炭化物付着							00-17-1
72-13	須恵器	甕	SI1295	外:平行叩、内:平行アテ具							00-17-2
72-14	土師器	坏	JF16・Ⅱ層	ロクロ調整、内:ミガキ→黒色処理	13.0	5.8	4.6	0.45	35.4	25	00-36-1
72-15	須恵器	坏	E区・Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、転用硯	13.7	9.2	3.3	0.67	24.1	32	00-36-9
72-16	須恵器	坏	E区・Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、転用硯	12.2	7.7	3.3	0.63	27.0	28	00-36-10
72-17	須恵器	坏	SKI132ID-3層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書「厨」か	13.8	8.4	3.2	0.61	23.2	34	01-7-1
72-18	須恵器	壺G	SKI132ID-3層	ロクロ調整、底:回転糸切り		5.8	(7.7)				01-7-2
72-19	須恵器	小壺	SKI132ID-2層	ロクロ調整、底:回転糸切り→箆書(焼成前)	6.0	3.6	7.6				01-7-3
72-20	須恵器	長頸壺	SKI1321	ロクロ調整、内:自然釉	12.7		(6.4)				01-7-4
72-21	土師器	坏	SKI1321C-10層	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.4	5.0	5.6	0.35	38.9	33	01-7-6
72-22	土師器	甕	SKI1321	ロクロ調整、煤付着、被熱	14.0		(11.2)				01-7-10
72-23	土師器	坏	SK1333-2層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	5.8	4.6	0.45	35.4	34	01-9-1
72-24	土師器	坏	SK1333-2層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.7	5.9	5.7	0.46	44.9	21	01-9-2
72-25	須恵器	台付坏	SK1330-1層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り(？)→ナデ	11.3	7.4	3.9	0.65	34.5	20	01-13-1
72-26	土師器	不明	SKI1330-6層	非ロクロ、粘土積み上げ痕顕著に残る、外:縦位のケズリ							01-13-3
72-27	土師質	坩堝	SKI1330-1層下面	内面に黒色化したガラス質の付着物あり、底部の厚さ3.1㎝							01-13-4
72-28	須恵器	坏	SK1332-6層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→擦痕あり	12.5	7.3	3.4	0.58	27.2	31	01-13-5
72-29	土師器	坏	SK1332-6層	ロクロ調整、底:回転糸切り、完形	13.2	5.5	4.0	0.42	30.3	38	01-13-6
72-30	土師器	皿	SK1332-6層	ロクロ調整、被熱	16.0		(3.1)				01-13-8
第73図　外郭西門東側地区・第119次（2）											
73-1	土師器	坏	H2区a層	ロクロ調整、底:回転糸切り、被熱	12.9	4.8	4.9	0.37	38.0	30	01-20-1
73-2	須恵器	坏	H2区a層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→ケズリ→箆書(焼成前)		7.2	(2.5)				01-20-2

番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径cm	底径cm	器高cm	底径指数	高径指数	外傾度	年報挿図番号
73-3	須恵器	壺	H2区a層	ロクロ調整	13.8		(8.7)				01-20-4
73-4	須恵器	壺	H2区a層	ロクロ調整	11.4		(4.8)				01-20-6
73-5	瓦	平瓦	H2区d層	凸面:正格子叩、凹面:布目痕							01-21-18
73-6	緑釉陶器	手付瓶	H区北	肩部、6～11は同一個体							01-22-23
73-7	緑釉陶器	手付瓶	H区北	肩部							01-22-24
73-8	緑釉陶器	手付瓶	H区北	胴部上半、把手部							01-22-25
73-9	緑釉陶器	手付瓶	H区北	胴部下半部							01-22-26
73-10	緑釉陶器	手付瓶	H区北	底部、底面中央に焼成前の孔あり		11.8					01-22-27
73-11	緑釉陶器	手付瓶	H区北	底部							01-22-28
73-12	須恵器	坏	I2区h層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、内面磨面あり		7.6	(1.2)				01-23-3
73-13	須恵器	蓋	I2区h層	ロクロ調整	13.6		(3.0)				01-23-5
73-14	須恵器	坏	I2区h層	ロクロ調整	11.6		(4.9)				01-23-4
73-15	土師器	坏	I2区h層	ロクロ調整、底:回転糸切り、完形	13.0	6.0	4.1	0.46	31.5	33	01-23-8
73-16	土師器	小形甕	I2区h層	ロクロ調整、底:回転糸切り	9.5	4.4	5.4				01-23-11
73-17	土師器	甕	I2区h層	非ロクロ、外:ハケメ、頸部に弱い段、内:横ナデ	14.8		(7.9)				01-23-13
73-18	鉄製品	紡錘車	I2区	径5.2cm、全長9.3cm							01-24-18
73-19	土師質	羽口	I2区	推定外径7cm、内径3cm							01-24-20
73-20	土師質	坩堝	I2区								01-24-21
73-21	石製品	砥石	I2区	長さ3.3cm、幅3.0cm、厚1.7cm							01-24-23
73-22	石製品	砥石	I2区	長さ10.0cm、幅5.6cm、厚5.0cm							01-24-22
73-23	須恵器	坏	I1区Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	10.8	6.5	2.7	0.60	25.0	26	01-25-1
73-24	須恵器	蓋	I1区Ⅲ層	ロクロ調整、内面を転用硯に使用か	14.6		2.3				01-25-3
73-25	須恵器	甕	Ⅰ区	外：５条１組の波状文							01-25-4
73-26	須恵器	蓋	I1区Ⅲ層	ロクロ調整			(2.5)				01-25-2
73-27	土師器	坏	J1区北端	ロクロ調整、底:回転糸切り、被熱	13.2	5.8	5.0	0.44	37.9	27	01-26-17
73-28	瓦	平瓦	J区	凸面:正格子叩、凹面:布目痕							01-26-18
73-29	土師器	皿	SN1322周辺	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.6	5.6	2.6	0.41	19.1	57	01-26-20
73-30	須恵器	長頸壺	J2区Ⅲ層中	ロクロ調整			(15.7)				01-26-22
73-31	須恵器	長頸壺	J2区Ⅲ層中	ロクロ調整		10.9	(9.4)				01-26-21

第74図　外郭西門東側地区・第121次（１）

74-1	須恵器	坏	SI1431 P2床直	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、RP1	12.7	8.2	3.3	0.64	26.0	28	02-5-1
74-2	須恵器	坏	SI1431-2層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.9	7.9	3.4	0.61	26.4	26	02-5-2
74-3	須恵器	坏	SI1431 P1床直	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、RP12	13.2	7.9	3.6	0.60	27.3	27	02-5-3
74-4	須恵器	坏	SI1431 カマド2層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書「十」、完形、正位で出土	13.8	6.8	3.6	0.49	26.1	40	02-5-4
74-5	須恵器	坏	SI1431	ロクロ調整	15.2		(6.4)				02-5-5
74-6	須恵器	蓋	SI1431-2層	ロクロ調整、内面転用硯に使用→周縁部打ち欠き			(2.4)				02-5-9
74-7	須恵器	台付坏	SI1431-5層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、台部内に墨付着、外:墨書「十」	11.0	6.0	5.5				02-5-8
74-8	須恵器	台付壺	SI1431 カマド2層	ロクロ調整、底:回転糸切り	5.2	7.0	(14.9)				02-5-10
74-9	土師器	坏	SI1431 P3内	非ロクロ、外:ケズリ→口縁横ナデ、内:ミガキ→黒色処理	14.1	丸底	5.6				02-6-12
74-10	土師器	坏	SI1431 P1内6層	非ロクロ、外:ナデ、内:ミガキ→黒色処理、底:ナデ	13.4	7.5	7.1	0.56	53.0	14	02-6-13
74-11	土師器	長胴甕	SI1431	砲弾型底部、外:平行叩、内:平行アテ具			(8.4)				02-6-15
74-12	土師器	甕	SI1431 カマド周辺	ロクロ調整、外:ケズリ、被熱・煤状炭化物付着	18.8		(19.4)				02-6-16
74-13	鉄製品	不明	SI1431	長さ6.0cm、幅2.5cm、厚0.7cm							02-6-18
74-14	須恵器	坏	SK1438B RP1	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.0	7.2	3.7	0.56	28.5	32	02-10-2
74-15	須恵器	坏	SKI1430C・D	ロクロ調整、底:回転糸切り、灯明皿に使用か	13.0	5.5	4.4	0.42	33.8	33	02-14-1
74-16	土師器	坏	SKI1430A	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.4	5.1	4.9	0.41	39.5	30	02-14-3
74-17	土師器	坏	SKI1430D	ロクロ調整、底:回転糸切り、煤状炭化物付着	14.3	6.1	4.6	0.43	32.2	37	02-14-4
74-18	土師器	皿	SKI1430D	ロクロ調整、底:回転糸切り、坏を再成形して皿に転用	8.0	5.2	2.0				02-14-7
74-19	土師器	坏	SI1401	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→体部下半ケズリ	11.3	6.0	4.4	0.53	38.9	21	02-25-1
74-20	須恵器	坏	SI1401 RP9	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.4	7.3	3.2	0.54	27.6	37	02-25-2
74-21	須恵器	坏	SI1401	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、体部打欠、内面底部に擦面		6.4	(1.9)				02-25-3
74-22	須恵器	甕	SI1401 RP7	外:平行叩、内:青海波アテ具			(12.3)				02-25-8
74-23	土師器	鍋	SI1401	外：ケズリ、煤状炭化物付着			(10.5)				02-25-9
74-24	鉄製品	鎌	SI1401床面	長さ19.2cm、幅2.0～2.7cm、厚さ0.2cm、柄部側欠損							02-25-10
74-25	土師器	甕	SI1423	ロクロ調整、被熱	13.9		(12.5)				02-26-1
74-26	須恵器	台付坏	SN1391＋SI1401	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→付高台、体部に２条の沈線	16.7	8.5	7.9				02-26-2
74-27	須恵器	坏	ＳＩ1391	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.9	7.3	3.0	0.57	23.3	30	02-26-3

第75図　外郭西門東側地区・第121次（２）

75-1	須恵器	坏	SK1444	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.4	6.9	3.4	0.51	25.4	36	02-27-1
75-2	須恵器	坏	SK1444	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.0	7.0	3.8	0.54	29.2	34	02-27-2
75-3	須恵器	坏	SK1444	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.9	8.2	3.7	0.58	26.6	30	02-27-3
75-4	須恵器	蓋	SK1444	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、天井部ケズリ	12.8		3.0				02-27-4
75-5	須恵器	坏	SB1406 P6	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.8	8.4	3.2	0.66	25.0	27	02-27-6
75-6	須恵器	坏	SKI1389	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.1	7.8	3.2	0.64	26.4	27	02-31-1
75-7	須恵器	坏	SKI1389	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.7	7.0	3.5	0.51	25.5	36	02-31-2
75-8	須恵器	坏	SKI1389	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.8	6.4	3.5	0.46	25.4	32	02-31-3
75-9	須恵器	坏	SKI1400	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り、煤状炭化物付着	12.0	7.6	3.8	0.63	31.7	20	02-31-4
75-10	須恵器	坏	SK1399D	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書「舎」	12.7	7.6	2.9	0.60	22.8	32	02-32-1
75-11	須恵器	甕	SK1399D	ロクロ調整、外:平行タタキ			(4.4)				02-32-2
75-12	瓦	平瓦	SK1399D	凸面:正格子叩、凹面:布目痕、黄白色を呈し、焼きあまい							02-32-4

番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径cm	底径cm	器高cm	底径指数	高径指数	外傾度	年報挿図番号
75-13	須恵器	坏	M1区Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.3	7.0	3.4	0.53	25.6	35	02-38-1
75-14	須恵器	坏	M2区Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→「成」墨書		7.4	(3.1)				02-38-2
75-15	須恵器	坏	P区Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	11.8	6.8	3.7	0.58	31.4	25	02-38-3
75-16	須恵器	坏	P区Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	15.0	8.7	4.5	0.58	30.0	32	02-38-4
75-17	須恵器	蓋	P区Ⅲ層	ロクロ調整、天井部ケズリ			(2.7)				02-38-5
75-18	須恵器	蓋	I2区	ロクロ調整、天井部ケズリ	13.0		(2.8)				02-38-6
75-19	須恵器	壺	K区Ⅲ層	ロクロ調整、底:菊花状ケズリ		12.6	(10.5)				02-38-7
75-20	土師器	坏	M1区Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	5.8	3.9	0.45	30.0	36	02-39-10
75-21	土師器	坏	S区	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.7	5.5	3.7	0.43	29.1	36	02-39-11
75-22	土師器	台付皿	S区	ロクロ調整、底:回転糸切り→付高台、内面煤付着	12.8	(6.2)	(2.6)				02-39-12
75-23	土師質	坩堝	S区	厚さ1.9cm、緑青付着							02-39-14
75-24	土師質	羽口	O区	推定内径2cm							02-39-15
75-25	石製品	紡錘車	S区	推定径3.7cm、厚さ1.8cm							02-39-18
75-26	石製品	砥石	R区	長さ11.8cm、幅5.8cm、厚さ3.2cm、重量309.6ｇ							02-39-17
75-27	瓦	平瓦	表面採集	凸面:渦巻文叩、凹面:布目痕							02-40-21
75-28	瓦	平瓦	O区	凸面:正格子叩、凹面:布目痕							02-40-22

第76図　外郭西門東側地区・第121次（３）

番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	長さ	幅	厚さ				年報挿図番号
76-1	石製品	金床石	SK1438B	鉄片付着	33.0	29.0	28.5				02-10-1
76-2	土製品	塼	SKI1430Ｄ床面	煤付着	(23.7)	13.2	11.1				02-15-12
76-3	土製品	塼	SKI1430Ｂ壁溝	煤付着	(14.9)	(11.9)	8.7				02-15-13
76-4	土製品	塼	SKI1330-6層	煤付着	(15.8)	10.8	(8.9)				02-15-14
76-5	土製品	塼	SKI1330-1層下		(17.0)	17.3	7.3				02-15-15
76-6	石製品	塼	SK1332-6層	凝灰岩製	(10.3)	(12.9)	8.2				02-15-16
76-7	土製品	塼	SK1332-6層	煤付着	(10.5)	(9.6)	7.4				02-15-17
76-8	土製品	塼	SKI1430Ｄ床面	煤付着	(12.1)	(11.0)	(6.2)				02-15-18
76-9	土製品	塼	SKI1430Ｄ床面		(11.7)	(13.2)	5.6				02-15-19
76-10	土製品	塼	SKI1430Ｄ床面	煤付着	(21.4)	14.3	3.4				02-15-20
76-11	土製品	塼	SKI1430Ｄ床面	煤付着	(17.3)	(12.0)	5.2				02-15-21
76-12	土製品	塼	SKI1430Ｄ壁溝	煤付着	(11.8)	(13.5)	4.6				02-15-22
76-13	土製品	塼	SKI1430Ｄ床面	煤付着	(10.8)	(10.7)	4.1				02-15-24

第82図　長森北方地区・第49次（１）

82-1	須恵器	坏	SE550	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.1	8.0	3.5	0.61	26.7	30	82-42-42
82-2	須恵器	坏	SE550	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.0	7.8	4.1	0.60	31.5	28	82-42-43
82-3	土師器	椀	SK557	ロクロ調整、底:切り離し不明→ナデ、外:ミガキ→黒色処理	14.4	8.2	6.8	0.57	47.0	14	82-42-44
82-4	土師器	坏	KC34Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.6	6.2	5.4	0.42	37.0	27	82-42-45
82-5	土師器	坏	KC36Ⅱ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	5.4	5.1	0.40	38.0	32	82-42-46
82-6	土師器	坏	KC36Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	5.2	4.8	0.39	36.0	35	82-42-47
82-7	土師器	坏	KC37Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.4	5.8	4.9	0.40	34.0	36	82-42-48
82-8	土師器	坏	KC37Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.9	5.0	4.6	0.39	35.7	33	82-42-49
82-9	土師器	坏	KC37Ⅲ層RP8	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	5.4	4.9	0.42	37.7	31	82-42-50
82-10	土師器	坏	KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.6	5.1	4.9	0.40	38.9	27	82-42-51
82-11	土師器	坏	KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	4.6	4.4	0.34	32.8	46	82-42-52
82-12	土師器	坏	KD35Ⅳ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	4.2	4.7	0.31	35.0	40	82-42-53
82-13	土師器	坏	KD35Ⅳ層RP7	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.7	4.5	4.4	0.33	32.1	38	82-42-54
82-14	土師器	坏	KD36Ⅲ層RP2	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.7	5.2	4.8	0.38	35.0	40	82-42-55
82-15	土師器	坏	KD37Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り、外:墨書「右」	13.6	4.6	5.3	0.34	39.0	35	82-44-56
82-16	土師器	坏	KD36Ⅳ層	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:漆付着、完形	12.9	5.0	3.8	0.39	29.5	40	82-44-57
82-17	土師器	皿	KC37Ⅳ層RP6	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.5	5.6	2.7	0.41	20.0	54	82-44-58
82-18	土師器	皿	KD35Ⅲ層RP1	ロクロ調整、底:回転糸切り、完形	14.0	5.9	2.6	0.42	18.6	61	82-44-59
82-19	土師器	皿	KD36Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.1	5.6	2.4	0.43	18.3	55	82-44-60
82-20	須恵質	硯	KE37	二面硯か							82-44-61
82-21	土師器	坏	KC34Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.8	4.4	4.5	0.32	32.6	37	83-8-1
82-22	土師器	坏	KC36Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.0	6.2	5.1	0.44	36.5	28	83-8-2
82-23	須恵器	坏	KC・KD37Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り、外:墨書「官」	13.2	6.6	3.6	0.50	27.3	34	83-8-3
82-24	土師器	坏	KC36、KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	4.9	4.7	0.38	36.2	40	83-8-4
82-25	土師器	坏	KC・KD37Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.2	4.6	4.7	0.35	35.6	32	83-8-5
82-26	土師器	坏	KC・KD37Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.8	5.2	6.1	0.38	44.2	27	83-8-6
82-27	土師器	坏	KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.3	6.4	4.4	0.45	30.7	35	83-8-7
82-28	土師器	坏	KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	4.8	4.3	0.36	32.1	39	83-8-8
82-29	土師器	坏	KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.0	5.0	4.0	0.42	33.3	30	83-8-9
82-30	土師器	坏	KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	10.8	4.8	3.65	0.44	33.8	39	83-8-10
82-31	土師器	坏	KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.6	3.6	4.2	0.29	33.3	42	83-8-11
82-32	土師器	台付坏	KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:切り離し不明	14.9	7.8	5.2				83-8-12
82-33	土師器	坏	KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.0	5.6	4.4	0.45	36.7	32	83-8-13
82-34	土師器	坏	KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.6	5.8	3.7	0.46	29.4	31	83-8-14
82-35	土師器	坏	KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.6	5.4	5.2	0.40	38.2	35	83-9-15
82-36	土師器	坏	KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.9	5.0	4.4	0.42	40.0	30	83-9-16
82-37	土師器	坏	KD35Ⅲ層上	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.6	4.0	4.8	0.34	41.4	32	83-9-17
82-38	土師器	坏	KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.5	4.4	5.0	0.38	43.5	31	83-9-18

番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径cm	底径cm	器高cm	底径指数	高径指数	外傾度	年報挿図番号
82-39	土師器	坏	KD35・36Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	4.8	3.8	0.37	29.2	43	83-9-19
82-40	土師器	坏	KD36Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	5.0	3.9	0.37	29.1	40	83-9-20
82-41	土師器	坏	KD36Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	4.4	3.7	0.36	30.3	41	83-9-21
82-42	土師器	坏	KD36Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.3	5.5	4.6	0.45	37.4	35	83-9-22
82-43	土師器	坏	KD36Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.0	4.8	4.6	0.40	38.3	35	83-9-23
82-44	土師器	坏	KD36Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	4.6	4.9	0.38	40.2	30	83-9-24
82-45	土師器	坏	KD36Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.4	5.0	5.0	0.40	40.3	32	83-9-25
82-46	土師器	坏	KD35Ⅳ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	4.8	4.4	0.36	32.8	38	83-9-26

第83図　長森北方地区・第49次（２）

83-1	土師器	坏	KD36Ⅳ層	ロクロ調整、底:回転糸切り、1～16:第49次出土	12.5	3.8	4.4	0.30	35.2	40	83-9-27
83-2	土師器	坏	KD35Ⅳ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.4	5.8	5.1	0.40	35.4	38	83-9-28
83-3	土師器	坏	KD35Ⅳ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.0	5.0	4.9	0.36	35.0	39	83-9-29
83-4	土師器	坏	KD36Ⅳ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.6	4.8	4.3	0.35	31.7	40	83-9-30
83-5	土師器	坏	KD36Ⅳ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.0	4.4	3.8	0.40	34.5	38	83-10-31
83-6	土師器	坏	KD37Ⅳ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.8	5.0	4.9	0.42	39.8	31	83-10-32
83-7	土師器	坏	KE37Ⅳ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.0	5.2	4.6	0.43	38.3	30	83-10-33
83-8	土師器	Ⅲ	KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.7	5.0	2.8	0.39	22.0	57	83-10-34
83-9	土師器	Ⅲ	KD35Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.0	4.2	2.2	0.35	18.3	63	83-10-35
83-10	土師器	Ⅲ	KD36Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.8	4.4	2.3	0.37	19.5	64	83-10-36
83-11	土師器	台付Ⅲ	KD35Ⅳ層	ロクロ調整、底:回転糸切り→菊花状ケズリ→付台	13.2	2.9	2.6				83-10-37
83-12	土師器	台付Ⅲ	KD36Ⅳ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.4	6.8	2.9				83-10-38
83-13	土師器	Ⅲ	KE37Ⅳ層 下面	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.5	4.5	2.3	0.33	17.0	60	83-10-39
83-14	須恵器	甕	KE36Ⅱ層	ロクロ調整	20.4		(3.9)				83-10-40
83-15	須恵器	甕	KD37Ⅳ層	ロクロ調整	19.0		(4.5)				83-10-41
83-16	須恵器	甕	KC37Ⅱ層	ロクロ調整	24.8		(4.2)				83-10-42
83-17	須恵器	坏	KF36Ⅱ層	ロクロ調整、底:回転糸切り、17～42:第49-3次出土	13.0	5.5	3.5	0.42	26.9	40	83-11-44
83-18	須恵器	坏	KF36Ⅱ層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書	12.7	8.0	3.2	0.62	25.2	35	83-11-45
83-19	土師器	坏	KF34Ⅰ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.8	3.6	4.0	0.25	33.8	37	83-11-46
83-20	土師器	坏	KF36Ⅱ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	5.0	4.0	0.41	32.7	38	83-11-47
83-21	須恵器	坏	KF37Ⅱ層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.5	8.0	2.9	0.64	23.3	40	83-11-48
83-22	土師器	坏	KF37Ⅱ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	14.8	7.0	3.8	0.47	25.6	44	83-11-49
83-23	土師器	坏	KF36Ⅱ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	10.7	4.0	4.3	0.37	40.2	34	83-11-50
83-24	土師器	坏	KF37Ⅱ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.8	4.3	5.10	0.36	43.6	32	83-11-51
83-25	土師器	坏	KF37Ⅱ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.3	4.7	4.3	0.38	34.9	37	83-11-52
83-26	土師器	坏	KF37Ⅱ層	ロクロ調整、切り離し不明	12.4	6.0	4.9	0.48	39.5	33	83-11-53
83-27	土師器	坏	KF37Ⅱ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.5	4.6	5.1	0.37	40.8	32	83-11-54
83-28	土師器	坏	KF36Ⅱ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.9	5.4	4.4	0.45	37.0	32	83-11-55
83-29	土師器	坏	KF37Ⅱ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.2	5.4	4.5	0.41	34.1	34	83-11-56
83-30	土師器	坏	KF37Ⅱ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.4	4.2	4.6	0.37	40.3	33	83-11-57
83-31	土師器	坏	KF37Ⅱ層	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.6	5.4	4.1	0.43	32.5	42	83-11-58
83-32	土師器	坏	KF37Ⅱ層 RP4	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.3	6.0	4.8	0.49	39.0	37	83-12-59
83-33	土師器	坏	KF37Ⅱ層 RP6	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.6	5.4	4.2	0.43	33.3	40	83-12-60
83-34	土師器	坏	KF37Ⅱ層 RP7	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.1	4.6	4.2	0.35	32.1	43	83-12-61
83-35	土師器	台付坏	KF37Ⅱ層 RP2	ロクロ調整、底:回転糸切り	15.0	7.8	5.6				83-12-62
83-36	土師器	Ⅲ	KF36Ⅱ層	ロクロ調整、底:回転糸切り、完形	12.0	4.6	2.5	0.38	20.8	60	83-12-63
83-37	須恵器	坏	KF36Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書	11.7	6.2	3.5	0.53	29.9	34	83-13-64
83-38	須恵器	坏	KF36Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書「舎」	13.3	7.8	3.4	0.59	25.5	30	83-13-65
83-39	須恵器	坏	KF36Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→墨書	14.0	8.2	3.4	0.58	24.3	35	83-13-66
83-40	土師器	坏	KF36Ⅲ層	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書	12.4	7.2	4.1	0.58	33.1	31	83-13-67
83-41	須恵器	坏	KF36Ⅲ層 RP1	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.5	7.6	3.8	0.56	28.1	35	83-13-68
83-42	土師器	坏	KF36Ⅲ層 RP3	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	5.9	4.9	0.48	40.1	32	83-13-69

第84図　長森北方地区・第49次（３）

84-1	木製品	木札	SE550	長さ16.6cm、幅1.7cm、厚0.7cm							83-14-79
84-2	木製品	木札	KF36Ⅲ層中	長さ11.8cm、幅2.6cm、厚0.6cm							83-14-80
84-3	木製品	木札	SE550堀形内	長さ9.1cm、幅1.8cm、厚0.5cm							83-14-81
84-4	木製品		KE35 RW8	長さ11.1cm、幅1.5cm、厚0.6cm							83-14-82
84-5	木製品	木札	KF37Ⅱ層	長さ14.0cm、幅2.0cm、厚0.7cm							83-14-83
84-6	木製品	木札	KE36Ⅳ層 RW15	長さ11.0cm、幅2.4cm、厚0.4cm							83-14-84
84-7	木製品	木札	KF37Ⅱ層	長さ7.8cm、幅1.8cm、厚0.6cm							83-14-85
84-8	木製品	木札	KF37Ⅱ層	長さ12.2cm、幅1.5cm、厚0.8cm							83-14-86
84-9	木製品	棒状	KF36Ⅱ層	長さ4.7cm、幅1.4cm、厚1.3cm							83-14-87
84-10	木製品	木札	KF37Ⅱ層	長さ6.3cm、幅1.1cm、厚0.3cm							83-14-88
84-11	木製品	杓子	KF34Ⅱ層	長さ21.7cm、幅5.2cm、厚1.6cm							83-15-89
84-12	木製品	糸枠横木	KF36Ⅳ層	長さ9.9cm、幅9.2cm、厚0.7cm							83-16-97
84-13	木製品	挽物Ⅲ	KF36Ⅲ層	ロクロ調整	(13.8)		1.0				83-16-99
84-14	木製品	曲物底板	SE550	長さ11.6cm、幅8.2cm、厚0.7cm							83-15-91
84-15	木製品	曲物底板	SE550	長さ20.8cm、幅6.2cm、厚1.0cm							83-15-92
84-16	木製品	挽物Ⅲ	KF37Ⅱ層	ロクロ調整、底:刻字「井」	14.2	9.9	1.9				83-16-101
84-17	木製品	挽物Ⅲ	KF37Ⅱ層	ロクロ調整	15.0	12.5	1.3				83-16-102
84-18	木製品	挽物Ⅲ	KF37Ⅱ層 RW8	ロクロ調整	15.1	12.0	1.5				83-16-103

番号	種別	器形	出土位置・層位	特　　徴	口径cm	底径cm	器高cm	底径指数	高径指数	外傾度	年報挿図番号
84-19	木製品	曲物側板	KF36Ⅱ層	長さ7.5cm、幅1.6cm、厚1.1cm							83-15-93
84-20	木製品	曲物側板	KE35 RW11	長さ5.0cm、幅2.6cm、厚0.7cm							83-15-94
84-21	木製品	曲物側板	SE550	長さ8.4cm、幅2.8cm、厚0.7cm							83-15-95
84-22	木製品	糸巻	KF37	長さ13.7cm、幅3.0cm、厚0.9cm							83-15-96
第85図　長森北方地区・第127・130次											
85-1	土師器	坏	C区SD1769 RP400	ロクロ調整、底:回転糸切り	9.0	3.2	3.1	0.36	34.4	29	05-16-1
85-2	土師器	坏	B区SD1769 RP265	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.3	6.2	4.8	0.47	36.1	33	05-16-3
85-3	土師器	坏	B区SD1769 RP276	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:煤付着	12.6	5.6	4.8	0.44	38.1	32	05-16-4
85-4	須恵質	風字硯	C区SD1769 RP429	脚部剥落、重量:90.1ｇ							05-16-5
85-5	土師器	皿	A区KF34 RP119	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.0	4.7	2.6	0.43	23.6	56	05-17-1
85-6	土師器	坏	A区KG33	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.9	5.3	4.4	0.45	37.0	34	05-17-2
85-7	土師器	坏	A区RP447・449	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	5.0	4.2	0.38	32.3	36	05-17-3
85-8	土師器	坏	A区KF33 RP181	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.4	6.0	3.8	0.48	30.6	35	05-17-4
85-9	土師器	坏	A区KD34 RP266	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.6	5.6	4.6	0.44	36.5	32	05-17-5
85-10	土師器	坏	A区KF33 RP185	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.5	4.8	5.2	0.38	41.6	32	05-17-6
85-11	土師器	坏	A区KG33 RP244	ロクロ調整、底:回転糸切り	10.1	3.1	4.1	0.31	40.6	33	05-17-8
85-12	土師器	坏	B区KC32 RP189	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.5	5.6	4.4	0.45	34.8	33	05-17-9
85-13	土師器	坏	B区KC32 RP263	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.3	4.8	3.8	0.42	33.6	33	05-17-10
85-14	土師器	坏	D区KC25 RP426	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.9	4.5	4.5	0.38	37.8	32	05-17-12
85-15	土師器	坏	B区KC29	ロクロ調整、外:漆付着	14.2		(4.0)				05-17-13
85-16	土師器	坏	D区KA25	ロクロ調整、底:回転糸切り、内:煤付着		4.4	(1.7)				05-18-1
85-17	土師器	坏	E区KF34 RP457	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.1	4.5	4.0	0.41	36.0	35	05-18-3
85-18	土師器	坏	E区KF35 RP478	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.6	4.6	5.0	0.37	39.7	32	05-18-4
85-19	土師器	坏	E区KF35 RP482	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.1	5.3	5.0	0.44	41.3	33	05-18-5
85-20	土師器	坏	E区KF35 RP481	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	4.6	4.7	0.38	38.5	32	05-18-6
85-21	土師器	双耳坏	A区KG33	耳部、ケズリ整形							05-18-8
85-22	土師器	甕	B区KC28	ロクロ調整							05-18-9
85-23	灰釉陶器	台付椀	B区RP79・355	ロクロ調整							05-19-1
85-24	須恵器	台付坏	A区KF34 RP286	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り→付高台	11.1	4.9	5.6	0.44	50.5	27	05-19-2
85-25	須恵器	坏	A区KF33 RP47・95	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.3	5.1	3.8	0.38	28.6	37	05-19-3
85-26	須恵器	坏	A区RP287～290	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.5	7.7	3.1	0.62	24.8	29	05-19-4
85-27	須恵器	坏	E区KF35	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	12.4	7.1	3.4	0.57	27.4	26	05-19-5
85-28	須恵器	坏	E区RP492・493	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.4	8.0	3.5	0.60	26.1	27	05-19-6
85-29	須恵器	横瓶	C区KA27 RP361	口縁部～肩部、30と同一個体か	9.9						05-19-8
85-30	須恵器	横瓶	C区	外：平行叩、内：平行アテ具、RP378・379・394							05-19-9
85-31	土師器	坏	第127次 RP12	ロクロ調整、底:回転糸切り→墨書、完形、正位出土	12.1	5.7	5.0	0.47	41.3	21	04-34-1
85-32	土師器	坏	第127次 RP10	ロクロ調整、底:回転糸切り、完形、正位出土	13.7	5.3	5.2	0.39	37.9	35	04-34-2
85-33	土師器	坏	第127次 RP9	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.2	5.2	3.2	0.43	29.5	46	04-34-3
第86図　長森北方地区・第133次											
86－1	須恵器	坏	A区SM1818 RP128	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.0	7.0	3.2	0.54	24.6	35	06-20-1
86－2	須恵器	坏	B区 153RP	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.2	8.0	3.0	0.61	22.7	38	06-20-2
86－3	須恵器	坏	B区SX1820 RP171	ロクロ調整	14.0	7.0	3.7				06-20-4
86－4	須恵器	坏	C区 RP170	ロクロ調整、底:回転ヘラ切り	13.8	7.0	3.5	0.51	25.4	35	06-20-5
86－5	須恵器	蓋	A区 RP131	ロクロ調整、天井部ケズリ							06-20-7
86－6	須恵器	甕	A区 RP279	ロクロ調整、外:平行叩き、内:青海波アテ具			(6.9)				06-20-8
86－7	須恵器	甕	A区SM1818 RP130	ロクロ調整、外:平行叩き、内:青海波アテ具			(10.3)				06-20-9
86－8	須恵器	甕	A区SM1818 RP278	ロクロ調整、外:平行叩き、内:ナデ			(6.8)				06-20-10
86－9	須恵器	甕	A区SM1818 RP197	ロクロ調整、外:平行叩き、内:青海波アテ具			(4.7)				06-20-11
86－10	須恵器	甕	A区SM1818 RP62	ロクロ調整、外:平行叩き、内:ナデ			(9.2)				06-20-12
86－11	土師器	坏	A区SM1818 RP143	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.5	4.8	5.0	0.38	40.0	32	06-20-13
86－12	土師器	台付坏	A区SM1818 RP128	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.6	6.7	4.5				06-21-15
86－13	土師器	長胴甕	A区RP122・263	ロクロ調整							06-21-16
86－14	瓦	平瓦	A区RP242	凸面:正格子叩、凹面:布目痕							06-21-17
86－15	瓦	平瓦	A区SM1818 RP149	凸面:ケズリ、凹面:糸切り・布目痕							06-21-18
86－16	瓦	平瓦	A区SM1818 RP291	凸面:渦巻文叩、凹面:布目痕							06-21-19
86－17	瓦	丸瓦	A区 RP290	凸面:ケズリ、凹面:布目痕							06-21-21
86－18	瓦	平瓦	A区SM1818 RP121	凸面:ナデかケズリ、凹面:布目痕							06-21-22
86－19	瓦	丸瓦	A区SM1818 RP79	凸面:ケズリ、凹面:布目痕							06-21-23
86－20	土師器	坏	B区SX1820 RP292	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.8	5.5	4.3	0.47	36.4	32	06-21-24
86－21	土師器	台付皿	B区SX1820 RP293	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.3	7.2	2.2				06-21-25
86－22	土師器	坏	B区SX1820 RP111	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.0	5.5	3.7	0.46	30.8	41	06-22-26
86－23	土師器	坏	B区 RP95	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.9	5.4	3.9	0.42	30.2	41	06-22-27
86－24	土師器	坏	B区SX1820 RP102	ロクロ調整、底:回転糸切り	12.8	5.5	3.8	0.43	29.7	39	06-22-28
86－25	土師器	坏	B区 RP98	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.7	5.7	4.0	0.42	29.9	43	06-22-29
86－26	土師器	坏	B区SX1820 RP136	ロクロ調整、底:意図的な打ち欠き	14.6						06-22-30
86－27	土師器	台付坏	B区SX1820	ロクロ調整、底:回転糸切り、ＲＰ108・110	14.3	8.0	5.4				06-22-32
86－28	土師器	坏	D区RP10	ロクロ調整、底:回転糸切り	13.0	5.6	4.5	0.43	34.6	32	06-22-33
86－29	土師器	坏	D区RP3	ロクロ調整、底:回転糸切り	11.0	4.8	4.5	0.44	40.9	33	06-22-34
86－30	石製品	砥石	B区RQ63	長さ8.8cm、幅5.0cm、厚さ1.5cm、重量80ｇ							06-22-35
86－31	土師器	坏	C区RP179	ロクロ調整、底:回転糸切り、円盤状土製品に再加工か		4.2					06-22-31

第４章　自然科学的分析

第１節　銅関連遺物の材質分析

払田柵跡内各調査区より出土した銅製品、銅塊、坩堝として使用された可能性のある土師器坏内面付着物を対象として金属成分分析を行い、原料推定と考察を加えたい。

１　試料

試料は、払田柵跡各調査区より出土した銅製品(試料番号１)、銅塊(試料番号２)、土師器坏付着物(試料番号３)の３点である。以下に試料の状態を示す。

・第85次調査区出土銅製品(試料番号１)

長さ40㎜、幅10㎜、厚さ３㎜の平板状で、かなり錆化している。端部の一部を切り取り、分析試料とする。第85次(平成２年調査)は、外郭西門跡周辺を対象とした調査区。

・第53次調査区出土銅塊(試料番号２)

長さ40㎜、幅20㎜、厚さ12㎜の塊状で、重量感のある遺物である。端部の一部を切り取り、分析試料とする。第53次(昭和58年調査)は、政庁域北西部を対象とした調査区。

・第128次調査区(Ａ区Ⅳ層)出土土師器坏内面付着物(試料番号３)

復元口径117㎜の坏であり、二次的な火熱による変形が著しい。口縁部周辺には赤褐色の、底部には灰色を呈する付着物が存在する。赤褐色および灰色BUT薬物の一部を採取し、分析試料とする。第128次(平成16年調査)は、外柵内南東部の沖積地面を対象とした調査区。

分析試料の外観および試料採取箇所を図版８に示す。

２　分析方法

デジタルカメラ(Finepix　F401)にて外観的特徴を観察・記録する。その後、分析用に採取した試料をカーボンテープ上に固定し、伝導処理を施した後、Ｘ線マイクロアナライザー(EPMA　JXA-8100型)にて構成元素を測定する。なお分析にあたっては、(株)日鐵テクノリサーチの協力を得た。

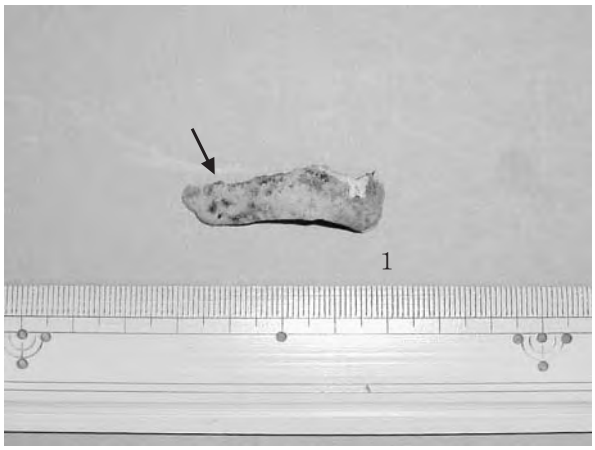
３　結果

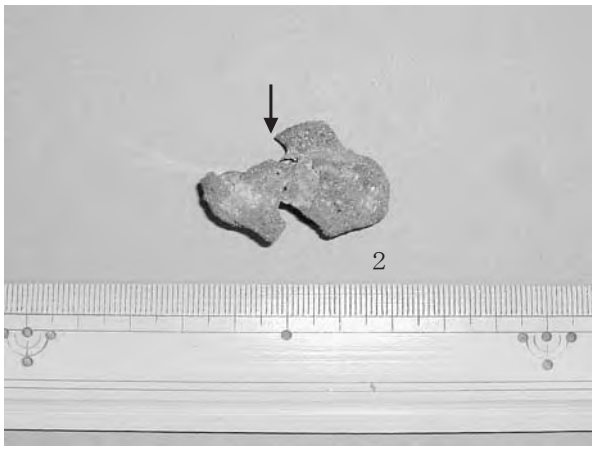
金属質が採取できた銅製品と銅塊の分析結果を第９表に、坩堝付着物(酸化物)の分析結果を第10表に示す。金属成分分析によって得られた主要元素は以下の通りである。

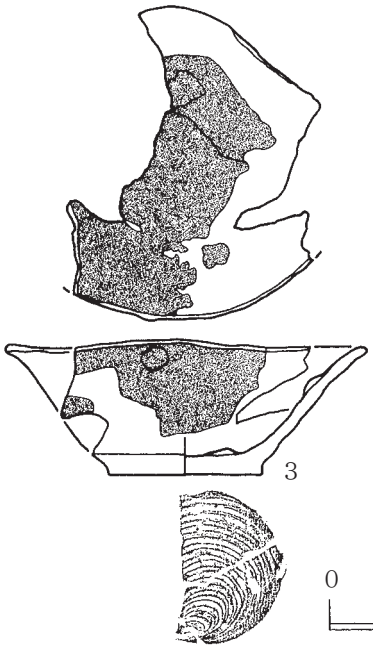
試料番号１の銅製品と試料番号２の銅塊は、検出元素および濃度に若干の相違はあるものの、ほぼ燐(Ｐ)・砒素(As)・金(Au)・鉄(Ｆe)・アンチモン(Ｓb)の不純物を含んだ銅である。

一方、土師器付着物のうち赤色付着物は、酸化銅(ＣuＯ)・酸化鉄(Fe_2O_3)に坩堝成分が混ざったもので、赤色層の主体は酸化銅と酸化鉄である。恐らく、坩堝で溶解した銅素材を他に移す際に残渣として付着したものと考えられる。また、灰色付着物は錫(Ｓn)が15％も含まれる。

図版８　分析遺物の外観および試料採取箇所







矢印は、試料採取箇所

第９表　銅製品と銅塊の成分分析結果

（重量%）

試料番号	試料名	Al	Si	P	S	Fe	Cu	As	Ag	Sb
1	銅製品	0.07	0.05	0.93	0.04	0.07	93.9	4.51	0.33	0.10
2	銅　塊	0.07	0.64	0.91	－	－	94.2	3.45	0.55	0.11

※検出元素のうち、Al・Siは錆層中に含まれている土壌成分

第10表　土師器坏付着物の成分分析結果

（重量%）

試料番号	試料名	Na	Mg	Al	Si	P	S	K	Ca	Ti
3－1	赤色付着物	0.18	1.65	5.96	17.2	0.22	0.13	1.39	4.88	0.52
3－2	灰色付着物	0.13	1.35	8.37	5.04	4.02	－	0.17	3.96	0.73

試料番号	試料名	Cr	Mn	Fe	Co	Ni	Cu	Sn	Pb	O
3－1	赤色付着物	1.88	0.30	8.13	0.17	1.26	6.3	1.45	－	48.1
3－2	灰色付着物	－	0.12	6.08	0.10	0.53	2.43	15.5	0.51	51.0

４　考察

分析試料とした銅製品と銅塊は、数種の不純物を含む銅材質で、ほぼ同様の組成を有していた。したがって、銅塊は銅製品の素材を鋳込む際に、溶融した素材が何らかの理由で外部にこぼれ、固化した産物の可能性がある。

一方、土師器付着物のうち、赤色付着物は酸化銅と酸化鉄を主体とするものであり、灰色付着物は錫を15％も含むものであった。よって、本試料内部において錫を含んだ銅合金を溶解したことが指摘できる。なお、今回分析試料とした銅製品や銅塊には錫が含まれていないことから、この土師器は銅だけではなく、他の銅合金も溶解していたと推測される。

以上のように、今回調査対象とした３点の金属遺物の分析結果から、払田柵では銅製品の鋳造が行われていたことや、同じ銅でも組成の異なる種類が生産されていたこと、さらに土師器の坏が坩堝として使用されていたことなど、当時の柵内における生業活動の一端を知ることができた。今後さらに分析事例を蓄積することで、その実態を明らかにできるものと期待される。

第２節　長森周辺の古植生と土地利用

本節では、払田柵が成立していた時期前後の土地利用状況と古植生の復元を行うことを目的として、長森北方地区の第130次調査区の堆積物について花粉分析を実施し、古植生と土地利用について考察する。

１　試料

分析試料は、第130次調査区のＡ区KG32グリッド杭付近より採取した。本地点での土層は第Ⅰ層～ⅩⅡ層の12層に分層される。最下位のⅩⅡ層は黒灰色シルト～粘土からなる有機物を多く含む層で、縄文時代の遺物包含層である。ⅩⅠ層・Ⅹ層は灰色粘土からなり、下位のⅩ層の方がやや暗色になる。Ⅸ層は灰白色粘土からなる。Ⅷ層は褐色泥炭からなり、未分解の植物遺体を多量に含む。その上位のⅦ層は褐色シルトで、本層も植物遺体を含む。Ⅵ層は灰褐色シルトからなり、十和田ａテフラ（To-a）をブロックで包含する。Ⅴ層は暗褐色シルト、Ⅳ層は灰褐色シルトからなる。Ⅳ層は中世の可能性が指摘されている。Ⅲ層は暗褐色シルトからなり、部分的にレンズ状に途切れる。Ⅱ層は灰褐色シルトで、旧水田層であり、最上位のⅠ層は地表面である。

これらの土層より、試料番号１-11の計11点の土壌試料を採取した。このうち花粉分析を行う試料は、試料番号２、４-７、10の計６点である。本地点の模式柱状図、試料採取位置、分析層位を第87図（図版９）に示す。

２　分析方法

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９、濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

３　結果

結果を第11表、第88図に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。花粉化石の保存状況は概ね良好であり、産出個体数も多い。

分析試料中最下位の試料番号10では、花粉化石の保存状態が悪く、花粉外膜が破損・溶解しているものが多く認められる。産出花粉は主に木本花粉が中心であり、ハンノキ属が最も多く産出する。その他ではマツ属、サワグルミ属、クルミ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、トチノキ属などを伴う。草本花粉はイネ科、カヤツリグサ科、ミズバショウ属、ヨモギ属などがわずかに検出されるのみである。また、シダ類胞子が多産する。

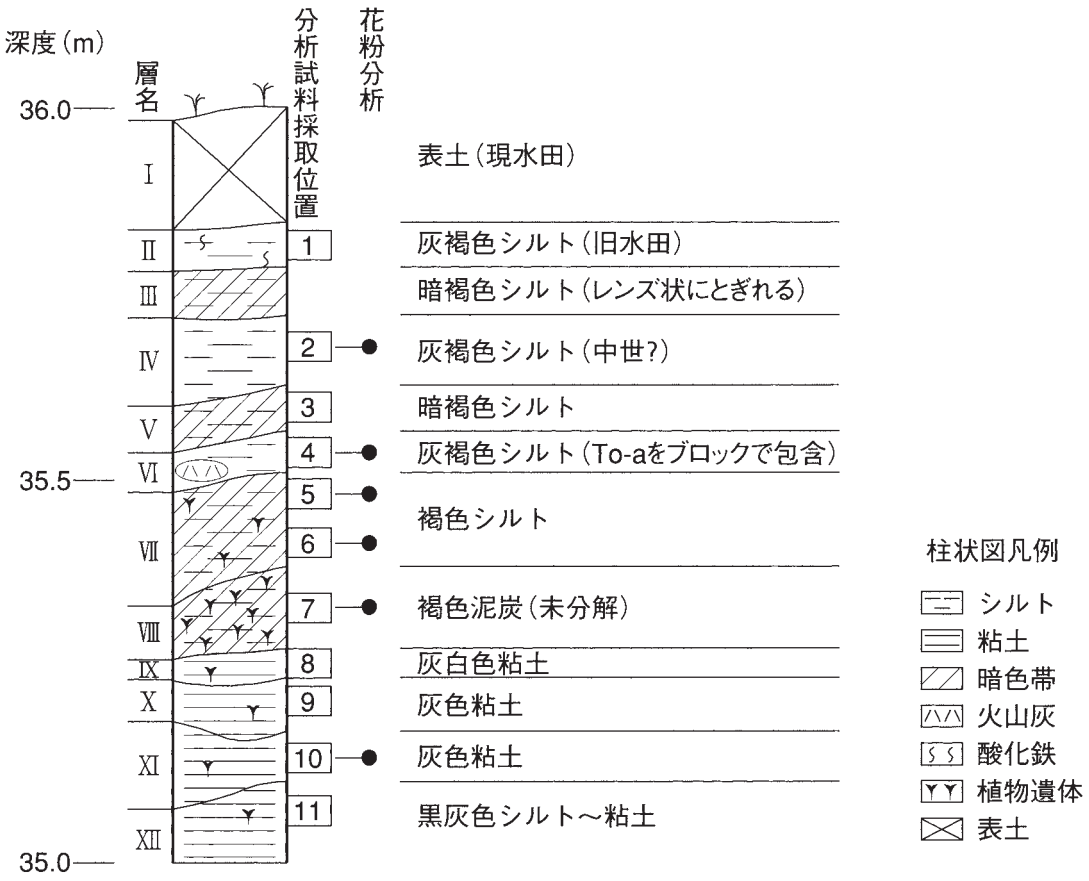
試料番号７-４では木本花粉が卓越し、草本花粉の検出はわずかである。木本花粉をみると多産する花粉も類似しており、スギ属、ハンノキ属、コナラ亜属、クリ属、トチノキ属などが認められる。ただし、試料番号６と試料番号５を境として多産する種類が異なる。試料番号７、６ではコナラ亜属が最も多く産出し、ハンノキ属、スギ属などを伴う。これに対し、試料番号５、４ではハンノキ属が最も多く産出し、スギ属、コナラ亜属、クリ属、ウルシ属も比較的多く検出される。また、トチノキ属は試料番号７-５に多く認められる。草本花粉は試料番号10と同様検出量は少なく、イネ科、カヤツリグサ科、ミズバショウ属、ヨモギ属などが産出する。また、試料番号４では、ミズバショウ属の他にもヒルムシロ属、ツリフネソウ属、ミツガシワ属などの水湿地生植物に由来する花粉の種類数が多く、栽培種であるソバ属なども検出される。

分析試料中最上位の試料番号２では、下位層準と異なり草本花粉の割合が高くなる。木本花粉ではスギ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属などが多産し、マツ属、サワグルミ属、クマシデ属－アサダ属などを伴う。草本花粉はイネ科が優占し、カヤツリグサ科、アリノトウグサ属、ヨモギ属、キク亜科などを伴う。また、ミズバショウ属、ガマ属、ホシクサ属、モウセンゴケ属、ツリフネソウ属、ミツガシワ属などの水湿地生植物や、ソバ属などの栽培種も検出される。

４　考察

(１)古植生

広域の森林植生を反映する木本類についてみると、試料により優占する種類が異なるものの、産出する種群はいずれの試料も類似しており、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属が多産し、スギ属、サワグルミ属、クルミ属、ブナ属、クリ属、ウルシ属、トチノキ属などを伴う。コナラ亜属はブナ属などとともに冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素であり、ハンノキ属はサワグルミ属、クルミ属、ニレ属－ケヤキ属などとともに、河畔や低湿地などの適湿地を好む種を含む分類群である。本地域の潜在自然植生(人間の影響を一切停止したときに、現在の気候、地形、土壌条件下で成立すると考えられる自然植生)をみると、真昼山地などの後背山地・丘陵ではチシマザサ－ブナ群団であり、丘陵縁辺部などはオオバクロモジ－ミズナラ群集、低地や河畔沿いなどはハルニレ群集、エゾエノキ－ケヤキ群集、ハンノキ－ヤチダモ群集とされている[(1)]。このことから、当時の後背山地・丘陵にはブナ属を主



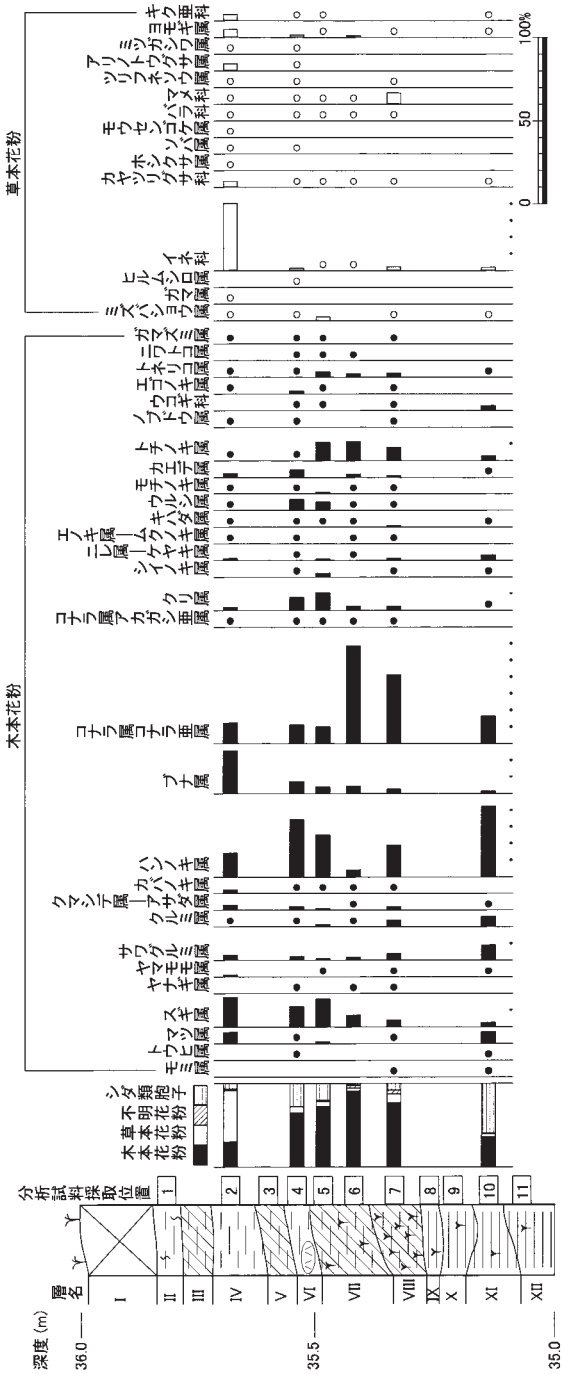
第87図　土層柱状図、試料採取位置および分析層位(第130次Ａ区北端)

図版９

第130次Ａ区北側の土層堆積状況(西→)
第87図は写真のポール右側で採取されたデータを基に作成[20050708 撮影]

第11表　花粉分析結果

種　類 ／ 試料番号	2	4	5	6	7	10
木本花粉						
マキ属	2	-	-	-	-	-
モミ属	-	-	-	-	1	1
トウヒ属	-	1	-	-	-	1
マツ属単維管束亜属	1	-	1	-	1	-
マツ属複維管束亜属	8	-	-	-	-	3
マツ属（不明）	6	1	2	-	1	14
スギ属	40	29	49	21	11	6
ヤナギ属	-	2	-	1	2	-
ヤマモモ属	3	-	1	-	1	2
サワグルミ属	7	6	3	5	11	22
クルミ属	1	2	5	3	11	15
クマシデ属－アサダ属	7	5	3	1	6	1
カバノキ属	5	1	2	1	2	-
ハンノキ属	32	82	73	13	53	103
ブナ属	58	18	12	13	7	4
コナラ属コナラ亜属	28	27	29	177	115	40
コナラ属アカガシ亜属	1	1	1	2	1	-
クリ属	4	19	31	8	7	1
シイノキ属	-	1	7	-	2	2
ニレ属－ケヤキ属	3	2	3	1	3	8
エノキ属－ムクノキ属	1	1	-	1	1	-
ヤドリギ属	-	1	1	-	-	-
キハダ属	1	1	2	2	3	2
ウルシ属	1	16	15	2	1	-
モチノキ属	2	2	3	2	1	-
カエデ属	5	11	-	6	3	2
トチノキ属	1	1	32	34	22	7
ブドウ属	-	-	-	1	1	-
ノブドウ属	1	1	-	-	1	-
シナノキ属	1	-	-	-	-	-
ウコギ科	-	1	2	-	1	7
ツツジ科	1	-	-	-	-	-
エゴノキ属	1	4	2	-	1	-
トネリコ属	1	1	9	6	7	2
ニワトコ属	-	1	2	2	-	-
ガマズミ属	2	1	1	-	1	-
タニウツギ属	1	-	-	-	-	-
スイカズラ属	1	-	-	-	-	-
草本花粉						
ミズバショウ属	1	1	9	-	1	3
ガマ属	1	-	-	-	-	-
ヒルムシロ属	-	1	-	-	-	-
イネ科	304	5	3	3	8	14
カヤツリグサ科	28	2	2	1	2	4
ホシクサ属	2	-	-	-	-	-
ユリ属	1	-	-	-	-	-
アヤメ科	1	-	-	-	-	-
クワ科	1	-	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	4	3	1	-	-	1
タデ属	1	-	-	-	-	-
ソバ属	1	1	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	1	1	-	-	-	-
ナデシコ科	2	1	1	-	-	1
カラマツソウ属	1	-	1	-	2	1
キンポウゲ属	1	-	-	-	-	-
アブラナ科	1	1	-	-	-	-
モウセンゴケ属	1	-	-	-	-	-
ウメバチソウ属	1	-	-	-	-	-
バラ科	1	1	1	1	1	-
マメ科	3	1	3	2	23	-
ツリフネソウ属	2	1	-	-	1	-
ミツハギ属	2	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	32	1	-	-	-	-
セリ科	3	-	-	1	-	-
ミツガシワ属	2	1	-	-	-	-
ヒルガオ属	1	-	-	-	-	-
シソ科	1	-	-	-	-	-
オオバコ属	1	-	-	-	-	-
オミナエシ属	1	-	-	-	-	-
ヨモギ属	35	6	3	4	2	2
キク亜科	29	1	2	-	-	1
タンポポ亜科	6	-	-	-	-	-
不明花粉	14	-	3	11	16	6
シダ類胞子						
ゼンマイ属	2	3	5	-	-	14
他のシダ類胞子	54	103	79	7	30	399
合　計						
木本花粉	226	239	291	302	278	243
草本花粉	472	28	26	12	40	27
不明花粉	14	0	3	11	16	6
シダ類胞子	56	106	84	7	30	413
総計（不明を除く）	754	373	401	321	348	683



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は1％未満を示す。

第88図　主要花粉化石群集の層位分析

体とした冷温帯落葉広葉樹林が成立しており、部分的にスギ属やマツ属などの針葉樹も林分を形成していたと考えられる。また、標高のやや低い部分や丘陵縁辺などにはコナラ亜属、トチノキ属、トネリコ属などが、川口川・烏川・丸子川の河畔や本遺跡周囲の低湿地などにハンノキ属、サワグルミ属、クルミ属、ニレ属－ケヤキ属など木本類、ミズバショウ属、イネ科、カヤツリグサ科、マメ科、ヨモギ属などの草本類が生育していたと思われる。

第92・93次調査で実施された平安時代河川堆積物の花粉分析結果を見ると、検出量は少ないものの今回と同様の種類が検出されているほか、外柵南門跡の門柱の樹種同定結果は、クリ、ハリギリ(ウコギ科)、トネリコ属に同定されている[2]。いずれも今回想定される周辺植生と調和的であり、門柱については周辺で入手しやすい樹種を利用していたと推測することができる。

なお、Ⅷ層(試料番号７)およびⅦ層下部(試料番号６)でコナラ亜属の割合が高くなり、ハンノキ属の割合が低くなる。同層準における草本類の産出には大きな変化が認められないことから、低地部でハンノキ属が減少したわけではなく、より後背域の植生を強く反映しているだけと推測される。その原因については現段階で不明である。

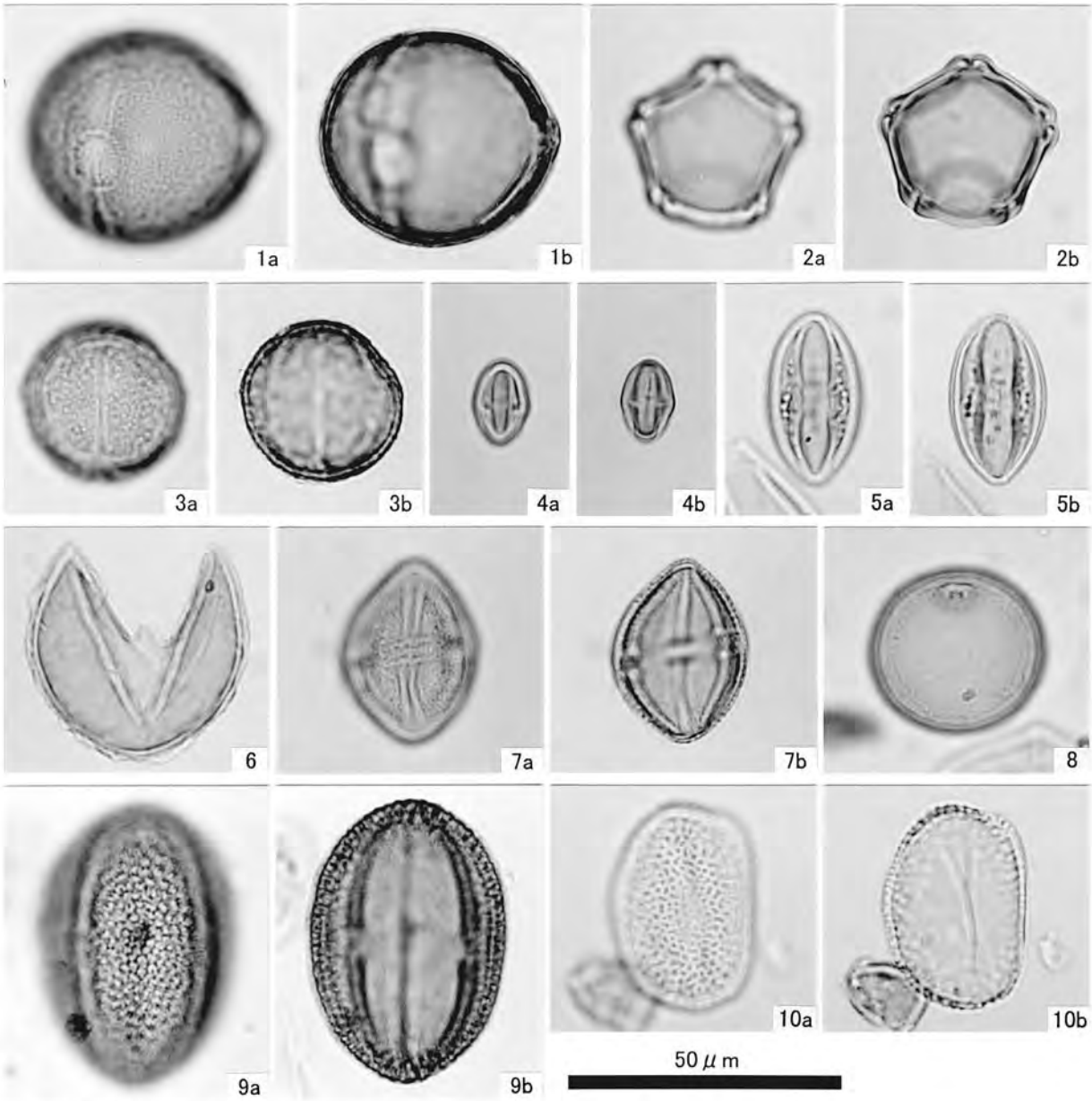
一方、Ⅳ層堆積時になると、ブナ属の割合が高くなる。同時に草本類の割合が増加することから、低地や丘陵縁辺などの木本類が減少することにより、相対的にブナ属などの後背山地の植生が強く反映されたものと推測される。下位のⅥ層に含まれる十和田ａテフラ(To-a)は、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている[3]。また、その噴出年代については、早川由紀夫・小山真人[4] による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。よって、Ⅳ層にみられた急激な植生の変化は、少なくとも西暦915年以降に起こったと推測される。

(２)土地および植物利用状況

To-aを含むⅥ層以深の試料では草本類の検出は少ないことから、本遺跡周辺低地には前述のようにハンノキ属を主体とする湿地林が形成されていた可能性がある。ところが、Ⅳ層堆積時になると、草本類の割合が木本類を上回り、そのほとんどがイネ科により占められる。今回イネ属同定は実施していないが、多産するイネ科の中にはイネ属に類する形状を示すものが多数認められた。このことから、Ⅳ層堆積時に認められる草本類の増加は、人為的な植生干渉により低地部の森林が減少したことを示唆しており、稲作の拡大などの可能性が想定される。周辺地域における既存の研究結果を見ると、約2500年前以降にハンノキ属が卓越するようになるが、約500年前以降になるとハンノキ属が減少し、湿地林が衰退したと考えられている。その原因は人による平地の利用、すなわち稲作などの人間活動の結果とされている[5]。このことを考慮すると、今回の調査地点周辺でも同様なことが起こったと思われる。しかし、より確実にするためには植物珪酸体分析などを実施し、検証することが望まれる。

なお、Ⅵ層・Ⅳ層からは、わずかではあるがソバ属の花粉が検出されることから、周辺でのソバ栽培も示唆される。

図版10　花粉化石



1．ブナ属(試料番号4)　2．ハンノキ属(試料番号4)
3．コナラ属コナラ亜属(試料番号4)　4．クリ属(試料番号4)
5．トチノキ属(試料番号4)　6．スギ属(試料番号4)
7．ウルシ属(試料番号4)　8．イネ科(試料番号4)
9．ソバ属(試料番号4)　10．ミズバショウ属(試料番号4)

註・引用文献

1　宮脇昭(編著)1987『日本植生誌　東北』至文堂

2　秋田県教育委員会1993『払田柵跡－第92・93次調査概要－』

3　町田洋・新井房夫・森脇広1981「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51

4　早川由紀夫・小山真人1998「日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－」『火山』43

5　日比野紘一郎・竹内貞子1998「東北地方の植生史」『図説　日本列島植生史』朝倉書店

第５章　考察

第１節　長森東方地区

長森東方地区で検出された遺構は、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、板塀・溝跡、土坑などがある。本項ではそれぞれの遺構の概要・時期変遷を示し、地区内の施設群の変遷について検討したい。

１　竪穴建物跡

竪穴建物跡は30棟検出された。竪穴の主軸方向と重複・出土遺物から、次の３時期の変遷が類推される。

【９世紀初頭直前】竪穴の軸線方向がＮ30°～55°Ｅを示すSI934・935・965・966・1083が該当する。掘立柱建物との重複や、５棟のうち３棟は竪穴壁面が削平されて床面のみとなっていたことは、当該地区を整地して創建期の掘立柱建物(SB937・1127)構築以前の施設と判断されることから、出土遺物は極めて少ないものの、９世紀初頭直前と推定した。

【９世紀第２四半期】竪穴の軸線方向がＮ10°～20°Ｗを示し、出土遺物からSI1107・1116・1126の３棟が本期に該当する。

【９世紀後半期】竪穴の軸線方向がＮ10°～20°Ｗを示し、出土遺物からSI1075・1125・1148などが該当する。堆積土中に十和田ａ火山灰を含む竪穴もあり、廃絶時期は西暦915年以前に求められる。

２　掘立柱建物跡・板塀

掘立柱建物跡は16棟検出された。竪穴建物跡との重複状況、建物方位の同一性、板塀との関係などからその４時期の変遷が想定される。

【９世紀第１四半期】SB937とSB1127は、規模や柱筋の方向性、柱穴掘形規模・埋土に共通性があることから同時に存在していた建物と推定される。両者とも建て替えはなく、一時期の造営であり、柱が抜き取られている。SB1127柱抜き取り穴出土土器や、本建物を切るSI1126出土土器が９世紀第２四半期であることからも、２棟の建物は当該地区で最も旧い段階の造営であり、９世紀第１四半期の時期が与えられる。ただし、この２棟に対応する他の施設は未確認である。

【９世紀中頃】９世紀後半のSI1075竪穴に切られる建物としてSB1072A･Bがある。この建物は北側柱列で見ると、軸線方向がＮ81°Ｅを示している。これと方位が近似する建物は他にないが、SD1002A･B、SD1115板塀が建物の桁行方向と合致し、ことに２時期あるSB1072A･Bの北側部分では板塀も明確に２時期あることから、建物、板塀ともに２時期あることになり、SB1072A･BとSD1002A･B、SD1115は伴うものと考えられる。３列の板塀は９世紀第２四半期頃のSI1116を切り、10世紀前半～中頃のSB1071に切られている。SB1072A･Bは９世紀後半代のSI1075に切られることから、これらの建物と板塀の年代を９世紀中頃とみなすことができる。

【10世紀前半期】９世紀後半代の竪穴建物を切る掘立柱建物にSB1077・SB1082A～Cがあり、これと方位が近似する掘立柱建物にSB982AB・1171・1178AB・1184～1186がある。これらは建物方位の振れが相互に最大４°の範囲に収まっていて共通性がある。この中で、SB982は２期、SB1082は３期、SB1178

AB・1184～1186は同一場所での５期にわたる造営がある。時期は10世紀前半頃と推定される。

これらの建物の南北方向の柱筋には３期の建て替えと考えられるSD1004・1006・1007板塀の方位がおおよそ近似し、東西方向の柱筋には、一連となるSD990・991・995板塀あるいはSD1078板塀の方位がほぼ共通することから、これらの建物と板塀は伴うものと考えられる。

ただし、板塀には、東西・南北方向ともに少なくとも３期があり、建物にも建て替えがあることや、SB982A･Bの北側の柱穴掘形とSD995板塀は重複する位置にあって、これらは併存しないと考えられることもあり、掘立柱建物と板塀の組み合わせにも変遷がありそうである。

これらの掘立柱建物跡と、９世紀後半に位置付けたＢ-2類の竪穴建物の方位は近似しているので、それらに併存するものがないとは言い切れないが、両者が重複する場合はSB1077がSI1073を、SB1082がSI1076をそれぞれ確実に切っている。掘立柱建物跡をＢ-2類の竪穴建物よりも新しく位置付けておく根拠はこの点である。

【10世紀中頃】SB1013とSB1171は建物方位が調査基準線とほぼ一致している。SB1177は10世紀前半頃の土坑群を切って構築しているが、その方位は土坑の長軸・短軸の方位におおよそ合致していて、土坑に近い時期と推定される。南北方向のSD984板塀は、前述の板塀群との重複関係から最も新しく位置付けられる。９世紀第１四半期のSB937・1127建物には位置的に伴わないことが明らかである。また、９世紀中頃のSB1072AB建物とSD1002AB板塀の組み合わせにも伴わない。さらに10世紀前半～中頃の建物群や板塀とは、方位が全く異なることや、SD988・992板塀と交差してSD988を切っていることから、これらとの併存も考えがたい。SD984とSB1013とは方位に４°ほどの違いがあるが、最も併存の可能性の高いものはSB1013と考えることができ、その東方を区画する性格を推定したい。

以上の建物群のいずれとも方位が異なるものに、調査区北西にあるSB941Ａ・941B1・941B2の３期にわたる建物がある。SB941Ａの柱穴掘形の埋土は、10世紀前半としたSB982Ａによく似ており、SB941B1・B2のそれも同時期のSB982ＢやSB1178A･B、SB1184～1186に類似性がある。時期は相互に近いものと思われ、方位の相違は、板塀で仕切られる建物群と、そうでないものとの違いに基づくものかと考えられる。

３　板塀跡の構造

これまでに調査された板塀施設としては政庁跡板塀があり、これを見ると１辺26×21㎝の角材や、直径20㎝の丸太材がほぼ3.6ｍ等間に並び、この間に密接する厚さ10㎝、幅15㎝の板材が直立して板塀を構成する。創建当初から終末まで常に四周する構造物として、政庁域を画する重要な役割を担っていたものである。

長森東方地区の板塀群の特徴は、柱が厚さ６～10㎝、幅20～27㎝の板状であること、SD1002Ａ期溝を除き、柱間距離が1.1～2.0ｍの間に変異があり、かつ短いこと、板塀に平行して溝状遺構が多数造られていることなどである。板材を柱とした柵の例は北秋田市胡桃館遺跡にあり(1)、厚さ５㎝、幅20㎝の柱に40㎝間隔で３段に貫孔を穿ち、これに厚さ５㎝、幅15㎝の板材を通したものである。この場合は柱間距離が４～4.5ｍとかなり広いが、本調査の板塀もこれに類する構造が考えられる。一方、構内に厚さ10～16㎝の板状痕跡が見られる部分があり、柱の間に横板材を通し、政庁板塀のように溝内に板材を並立させた構造となる可能性もあり、今後検討の余地を残している。

４　竪穴建物に掘立柱建物が接続して一体となる建物跡

第100次SI1114A･Bはカマドを伴う竪穴部と掘立柱部が連続して一体となる建物跡であり、払田柵跡内では初めて検出された遺構である。

東北地方北部を中心とする古代集落内には、カマドをもつ竪穴建物に軸線を追わせた掘立柱建物が接続する形状の遺構が認められる。管見では、宮城県を除く東北５県の約55遺跡で300棟以上の検出例がある。その95％以上の建物は、カマドの設置された壁面側に掘立柱を近接させる共通点がある。また建物の外側に溝を巡らせたり、周堤を築く事例も存在する(2)。

竪穴部はカマドの存在から居住空間と見られ、掘立柱部は竪穴部の補助的な施設、あるいは何らかの生産活動に係る作業場と推測される。建物構築の時期は、８世紀後半から11世紀前半代までであるが、主体は９世紀後半から10世紀後半に集中する。

分布の中心は、青森県中西部の津軽地方(特に青森市域)にあり、全体の75％以上の棟数を占める。次いで秋田県北部の米代川流域(3)が15％程である。他地域では青森県東部(4)から岩手県北部の馬淵川流域、秋田平野、横手盆地、盛岡市周辺の北上川上流域(5)、山形盆地北部(6)などでも検出例があるが、点的な分布を示し、南限は福島県南部の中通り地方にある(7)。

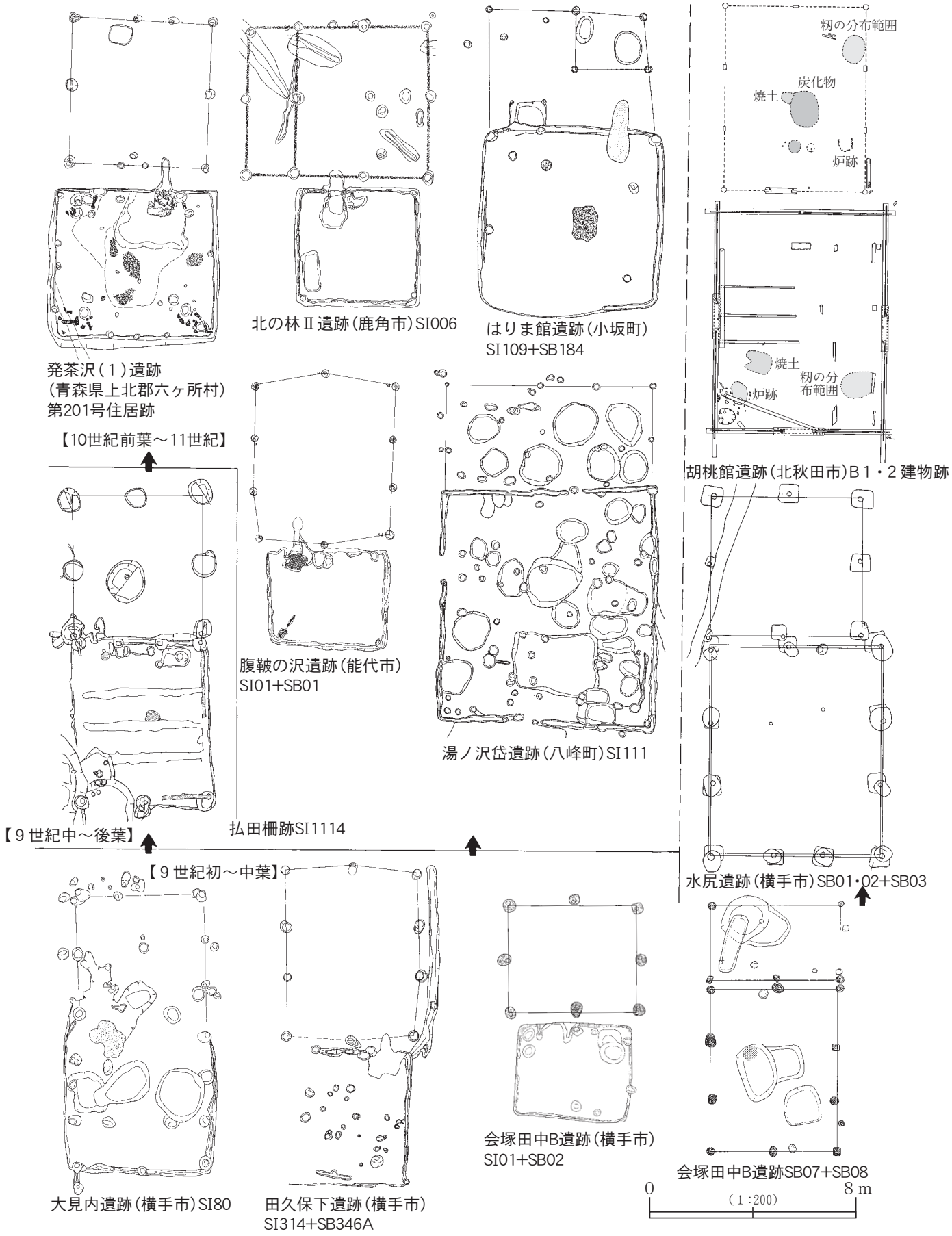
竪穴と掘立柱が一体化した建物の出自は、主たる分布域の周辺部にあたる横手盆地内に求めることができそうである。同地内での建物構築時期は、９世紀初頭から第２四半期に限定される(8)のに対し、分布の中心である津軽地方や米代川流域での構築事例は９世紀後半を上限とするからである。

横手盆地内には759年(天平宝字３)に雄勝城が造営される。それまでは竪穴建物のみによる集落も律令政府主導の造作を契機として集落内に掘立柱建物が導入され、それが主体となる集落も成立する。その先鞭をつけたのが須恵器生産工人集団であり、それは９世紀初頭段階である。横手市田久保下遺跡の事例が該当する。

工人集団は、作業場と居住空間を確保する方策として、竪穴と掘立柱部を合体させた施設を生み出した。これには、城柵官衙における桁行の長い建物や、東北南部から関東地方などの一般集落に認められる官衙風建物群、竪穴外柱穴をもつ壁立式の竪穴建物の存在も無視できないと思われる。事実、竪穴と掘立柱を合体もしくは近接させた建物は、払田柵跡や盛岡市志波城跡の城柵官衙域でも確認され、竪穴外柱穴をもつ竪穴建物跡は横手盆地の９世紀前半代の集落内(横手市前通遺跡)(9)に存在する。

竪穴と掘立柱部が一体となった建物建築技術は、９世紀後半以降、北方の米代川流域、津軽地方に伝えられる。当該域で受け入れられ、分布の中核にまで成長した主因は、これら集落の生業が製鉄・鍛冶や須恵器生産に係わっていたことに求めることができよう。

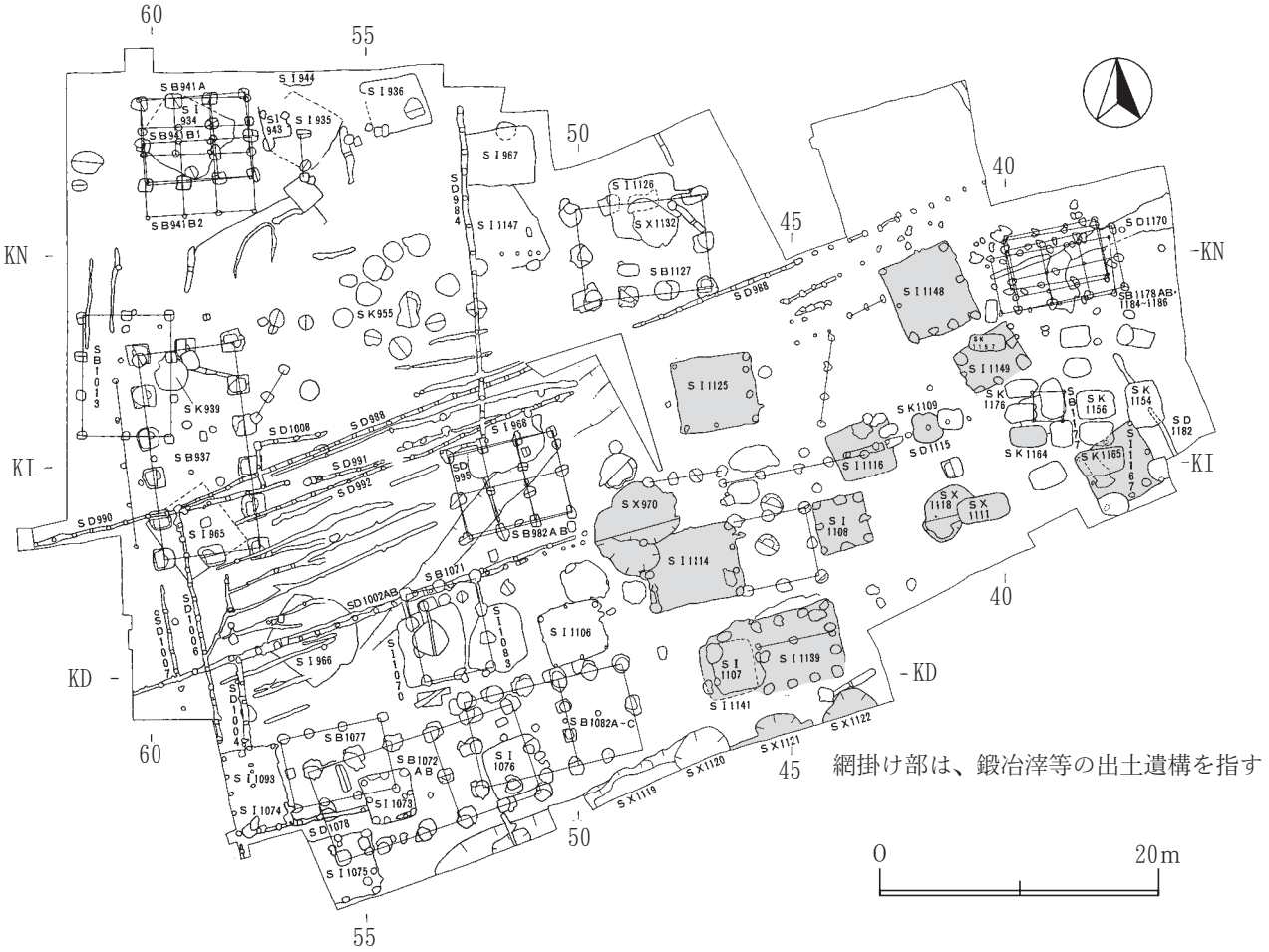
一方の横手盆地では９世紀後半以降には、竪穴に掘立柱が接続する建物は認められなくなる。ただし、竪穴部を掘立柱に置き換えた掘立柱＋掘立柱式の建物が散見されることから(10)、一棟内に居住空間と作業場を確保した建物は存続していたと推測される。11世紀以降の様相は不明確ではあるが、同種の居住形態は以後も引き継がれ、近世の直屋に繋がる可能性も想定しておきたい。



第89図　竪穴建物に掘立柱建物が接続して一体となる建物跡

５　鍛冶関連遺物

当該地区内の鍛冶関連遺物は、椀形鍛冶滓・鍛冶滓18点、羽口14点、羽口溶解物10点にすぎない。その分布範囲は、調査区の南東部の竪穴建物・土坑内に限定的に認められ、SD988以南、50ライン以東である。他では遺構外を含め出土例は皆無である(第90図参照)。椀形鍛冶滓の厚さは１～３㎝程度、羽口の内径は２～３㎝であり、鍛錬鍛冶に係わる遺物と推測される。遺構内からの出土点数は１点程度であり、竪穴建物内での恒常的な鍛冶作業は考えにくい。ただし、SI1139は５点の鍛冶滓が出土しており、他との比較の上では鍛冶工房としても利用されていた可能性がある。



第90図　長森東方地区における鍛冶関連遺物出土地

６　遺構群の変遷

以上に述べてきた竪穴建物跡、掘立柱建物跡、板塀、土坑、その他の遺構の新旧関係から、それらの変遷についてまとめることにする。

【Ａ期直前】SI934・935・965・966・1083竪穴建物跡５棟が該当する。この時期の竪穴は、政庁域内にも３・４棟存在し、創建にあたっての盛土整地地業や政庁等建物の造営工事に携わった工人の居住施設と理解される。

【Ａ期】掘立柱建物２棟で構成される。南北棟桁行５間×梁行２間のSB937と、東西棟桁行３間×梁行２間のSB1127で、柱間距離などに共通性があり、いずれも柱を抜き取って再利用している。本期は創建期、９世紀第１四半期で政庁Ⅰ－Ａ期、外郭線Ａ期に相当する。

【Ｂ期】SI1107・1116・1126竪穴建物３棟で構成される。時期は９世紀第２四半期で、Ａ期建物とＣ期建物の間の仮設的なものである。本期は政庁Ｉ－Ｂ期、外郭線Ａ期に相当する。

【Ｃ期】Ａ期の２棟の建物が解体されて、その南に、東西棟桁行５間×梁行２間で間仕切のあるSB1027A･B掘立柱建物が建てられる。これに東西方向の板塀SD1002A･B、SD1115が伴い、それぞれ２期にわたって造営される。本期は９世紀中頃で、政庁Ｉ－Ｂ期、外郭線Ａ期に相当する。

【Ｄ期】SI1075・1125・1148など17棟の竪穴建物で構成される。漆紙文書(第２・３・５号)を出土したSI1125・1167や、床面に焼面の拡がりがあるSI1075・1167、竪穴部分と掘立柱建物部分が連続する構造となるSI1114A･Bなどがあり、これらは漆塗作業等の工房的な使い方を推測させる。SI1114A･B、SI1148からは「小勝」「官　小勝」の墨書土器も出土した。

土器の時期や、堆積土に火山灰を含むことから、これらの時期は９世紀後半であるが、全てが同時に存在したものではない。SK939・955・1109・1118・1119～1122土坑もこの時期に含まれる。SK1119～1122は土取り穴と想定される。本期は政庁Ⅱ期、外郭線Ｂ期に相当する。

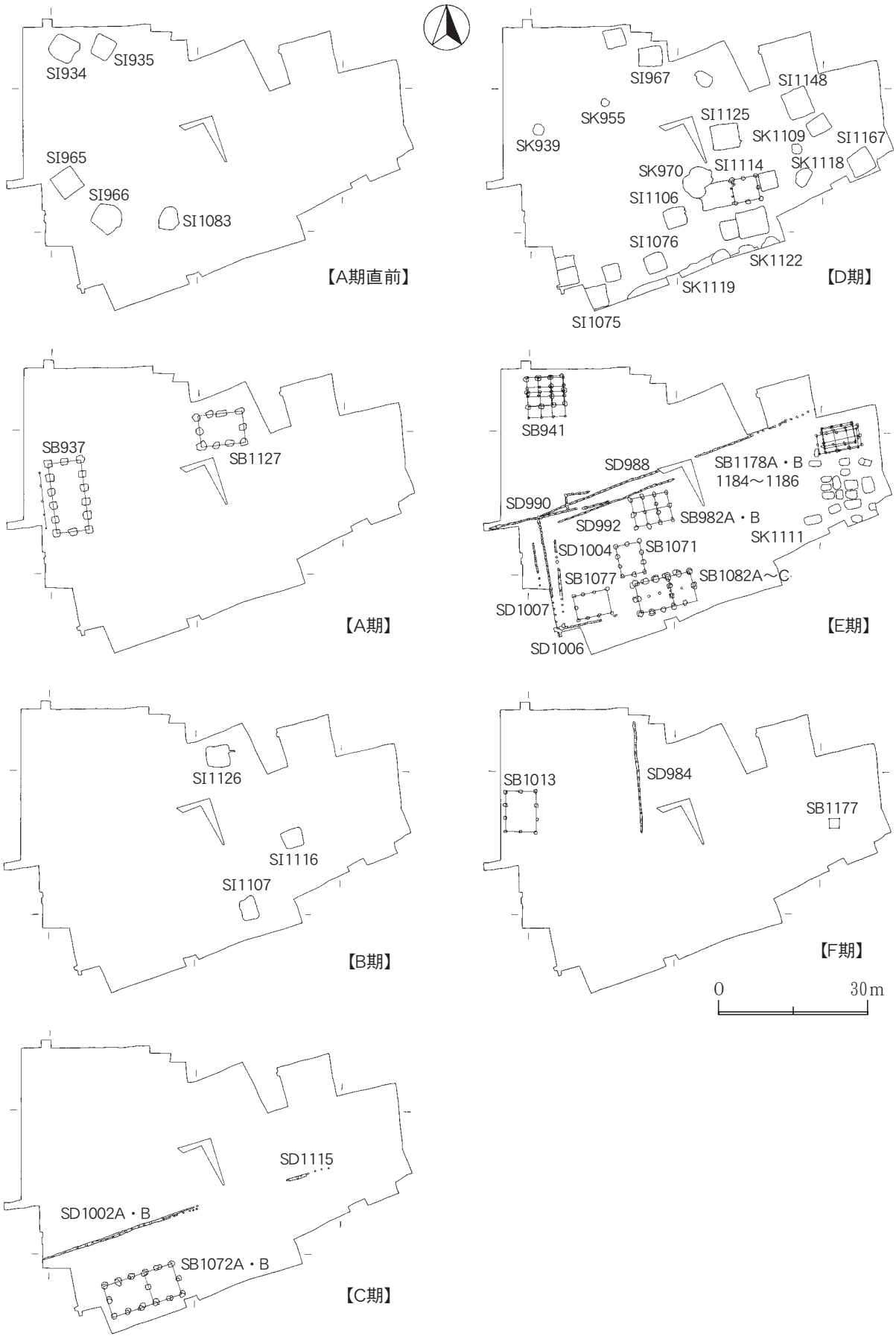
【Ｅ期】掘立柱建物が増加する時期で、６棟が確認される。東西・南北方向の板塀が伴い、それに区画された中に５棟の建物が並ぶ。建物には、東西棟で桁行５間×梁行２間で間仕切りのあるSB1082A～Cや、南北棟で桁行３間×梁行２間のSB1071などがある。

板塀外にも３期にわたるSB941Ａ・941Ｂ1・941Ｂ2がある。板塀に３期、建物に５期の造営があるものがあり、これらには最大５期の変遷が考えられる。

時期は10世紀前半～中頃で、政庁のⅢ～Ⅳ期、外郭線のＣ期に相当する。SK1111・1154・1164・1165・1176などの土坑群もこの時期に含まれる。

【Ｆ期】調査区東方に桁行、梁行ともに１間のSB1177掘立柱建物、西方に南北棟桁行３間×梁行２間のSB1013掘立柱建物が建てられる。これに南北方向のSD984板塀が伴う。本期は10世紀中頃～後半頃と考えられ、おおよそ政庁Ｖ期、外郭線Ｄ期に位置付けられる。

<table>
<tr><th rowspan="2">遺構期</th><th colspan="3">主な遺構</th><th rowspan="2">政　庁</th><th rowspan="2">外郭線</th><th rowspan="2">時　期</th></tr>
<tr><th>竪穴建物跡</th><th>掘立柱建物跡・板塀</th><th>土　坑</th></tr>
<tr><td>Ａ期
直前</td><td>SI934・935・
965・966・1083</td><td></td><td></td><td>SI331・
332・571</td><td>－</td><td>９世紀
初頭直前</td></tr>
<tr><td>Ａ期</td><td></td><td>SB937・1127</td><td></td><td rowspan="2">Ｉ－Ａ期</td><td rowspan="3">Ａ期</td><td>９世紀初頭</td></tr>
<tr><td>Ｂ期</td><td>SI1107・1116・
1126</td><td></td><td></td><td>９世紀前半</td></tr>
<tr><td>Ｃ期</td><td></td><td>SB1072AB
SD1002AB・1115</td><td></td><td>Ｉ－Ｂ期</td><td>９世紀中頃</td></tr>
<tr><td>Ｄ期</td><td>SI1075・1125・
1148など</td><td></td><td>SK939・955・
970・1109・1118・
1119・1122など</td><td>Ⅱ期</td><td>Ｂ期</td><td>９世紀後半</td></tr>
<tr><td>Ｅ期</td><td></td><td>SB941・982AB・
1071・1077・1082A～C・
1178AB・1184～1186、
SD990・988・1006など</td><td>SK1111・1154など</td><td>Ⅲ期</td><td>Ｃ期</td><td>10世紀前半
～中頃</td></tr>
<tr><td>Ｆ期</td><td></td><td>SB1013・1177、
SD984</td><td></td><td>Ⅳ期
Ⅴ期</td><td>Ｄ期</td><td>10世紀中頃
～後半</td></tr>
</table>



第91図　長森東方地区における遺構群の変遷

註

1　秋田県教育委員会1969『胡桃館埋没建物遺跡第２次発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第19集

2　①高橋学1989「竪穴住居と掘立柱建物が併列して構築される遺構について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第４号／②高橋玲子2001「平安時代東北地方における掘立柱施設付竪穴住居について」『秋田考古学』第47号／2001年以降の事例は高橋学が収集

3　米代川流域で第89図に掲載した遺跡は次のとおり。鹿角市北の林Ⅱ遺跡：秋田県教育委員会1992「北の林Ⅱ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ』秋田県文化財調査報告書第90集／小坂町はりま館遺跡：秋田県教育委員会1990『はりま館遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第192集／能代市腹鞍の沢遺跡：秋田県教育委員会1982『腹鞍の沢遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第97集／八峰町(旧峰浜村)湯ノ沢岱遺跡：秋田県教育委員会1998『湯ノ沢岱遺跡』秋田県文化財調査報告書第273集

4　青森県東部の事例として、上北郡六ヶ所村発茶沢(１)遺跡を第89図に掲げた。青森県教育委員会1989『発茶沢(１)遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第120集

5　盛岡市周辺では、註２②文献で集成されている盛岡市志波城跡・本宮熊堂Ｂ遺跡、矢巾町館畑ｂ遺跡の他に、盛岡市大島遺跡を追加する。盛岡市教育委員会1998『大島遺跡第１・２次発掘調査現地説明会資料』

6　山形盆地での検出例は、北部の村山市西原Ｃ遺跡にある。村山市教育委員会1996『西原Ｃ遺跡発掘調査報告書』

7　南限の事例は、福島県西白河郡矢吹町の上宮崎Ａ遺跡と小又遺跡にある。福島県教育委員会1998「上宮崎Ａ遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告１』福島県文化財調査報告書第352集／福島県教育委員会1998「小又遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告２』福島県文化財調査報告書第353集

　小又遺跡の事例については、菅原祥夫2000「平安時代における北方系土器の南下」『阿部正光君追悼集』阿部正光君追悼集刊行会で紹介されている。

8　横手盆地での９世紀初頭から第２四半期に限定される遺跡は、横手市田久保下遺跡・大見内遺跡・会塚田中Ｂ遺跡にある。秋田県教育委員会1992「田久保下遺跡」『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第220集／秋田県教育委員会2004『大見内遺跡』秋田県文化財調査報告書第374集／横手市教育委員会2007『会塚田中Ｂ遺跡』横手市文化財調査報告第７集

9　前通遺跡のSI112Ａ。秋田県教育委員会2003『前通遺跡』秋田県文化財調査報告書第351集

10　横手市水尻遺跡・中村Ｉ遺跡などで検出例がある。雄物川町教育委員会2005『水尻遺跡　柄内遺跡』雄物川町文化財調査報告書第８集／横手市教育委員会2006『中村Ｉ遺跡』横手市文化財調査報告第２集

　同例は、米代川流域の北秋田市胡桃館遺跡Ｂ１・Ｂ２建物跡でも確認されている。註１文献

第２節　長森西方地区

１　政庁西側地区

当該地区の８度に及ぶ調査により、丘陵北側の平坦面から緩斜面部において視認された段状の地形は、古代における整地による地業であることが明確となった。また、遺構の検出位置(標高)において遺構の種別・配置が明瞭に異なることも確認した。

これら遺構群は、出土遺物から９世紀第４半期から10世紀前半代を中心とした比較的限定された時期の構築である。出土遺物のピークは、10世紀初頭から前半の火山灰降下前後の時期に求められ、創建段階あるいは終末期にあたる時期の遺物は認められない。

（１）遺構群の概要

その様相は大きく４つに分けられる。標高の高い南側から順を追って説明する。

【丘陵頂部～斜面上位平坦面】標高50～52ｍライン上の遺構群

ここでは馬背状の狭い頂部平坦面(標高51～52ｍ、幅10ｍ未満)から北側と南側にわずかに傾斜する斜面上位平坦面部からなる。頂部平坦面は、一見すると施設建設には好立地のように思える。しかし幅の広い東西方向の溝跡(第115次SD1231・1250)や南側斜面上位側に位置する東西方向の板塀跡(第115次SA1248)等がわずかに認められる程度である。ここは政庁から外郭西門に至る線上にあたることから、通路として確保され、上屋をもつ構築物を排除する規制が働いていたと推測される。

SD1231は調査前からわずかに凹状に窪んでおり、これを東側に延長させた先には政庁前殿が位置する。精査の結果、溝の堆積土中には火山灰が検出されたことから、10世紀前半以前には溝状を呈していたことが確かめられており、道路状の施設もしくは道路側溝の可能性が高い。

頂部平坦面の南側は丘陵縁辺部にあたり、ここには硬質泥岩の基盤層が露出しており、施設を置く空間は南北方向の幅数ｍ程しかない。それでも竪穴建物が３棟(第115次SI1229・1230、第123次Ｄ区SKI1631)整然と配されている。

北側斜面上位平坦面には、南北棟となる掘立柱建物が２棟(第115次SB1219A･B、SB1222A･B、それぞれ２時期)並列する。その西側に位置する第123次Ｄ区北側及び第137次Ｌ区では古代の遺構が確認されなかったことから、南北棟の建物が本域における西端の施設と推測されよう。建物跡の東側には、南北の板塀跡(第115次SA1226・1227)を挟んで竪穴建物(第115次SI1236、第122次Ｃ区SKI1490Ａ等)が整然と配される。南北棟建物がそれぞれ２時期であること、板塀も開口部(出入り口か)を伴いながら複数時期の想定がなされることから、両者が関連をもち一定期間存続していたことが類推される。

斜面上位平坦面の竪穴建物のうち、SI1229・1236はカマドをもたず、浅い掘り込みを伴う炉をもつことから何らかの工房跡であった可能性がある。しかし、堆積土の篩掛けや磁着の結果では、これを鍛冶関係の炉と断定することはできなかった。

なお、南北方向の板塀跡は通路と想定した頂部平坦面を遮断するように配置される。これは板塀及び南北棟建物が複数時期にわたることや板塀に開口部が認められることも考慮し、通路を政庁から外郭西門方向に向かうと仮定すれば、平坦面部をまっすぐに西進する時期と、板塀に遮断され北側斜面上位のどちらかの建物を経由して進む経路が複数時期存在していた可能性がある。この推測に従えば、南北棟の建物とは、政庁から外郭西門に至る経路上に必要とされ、板塀に画されていた施設と見なすことができよう。

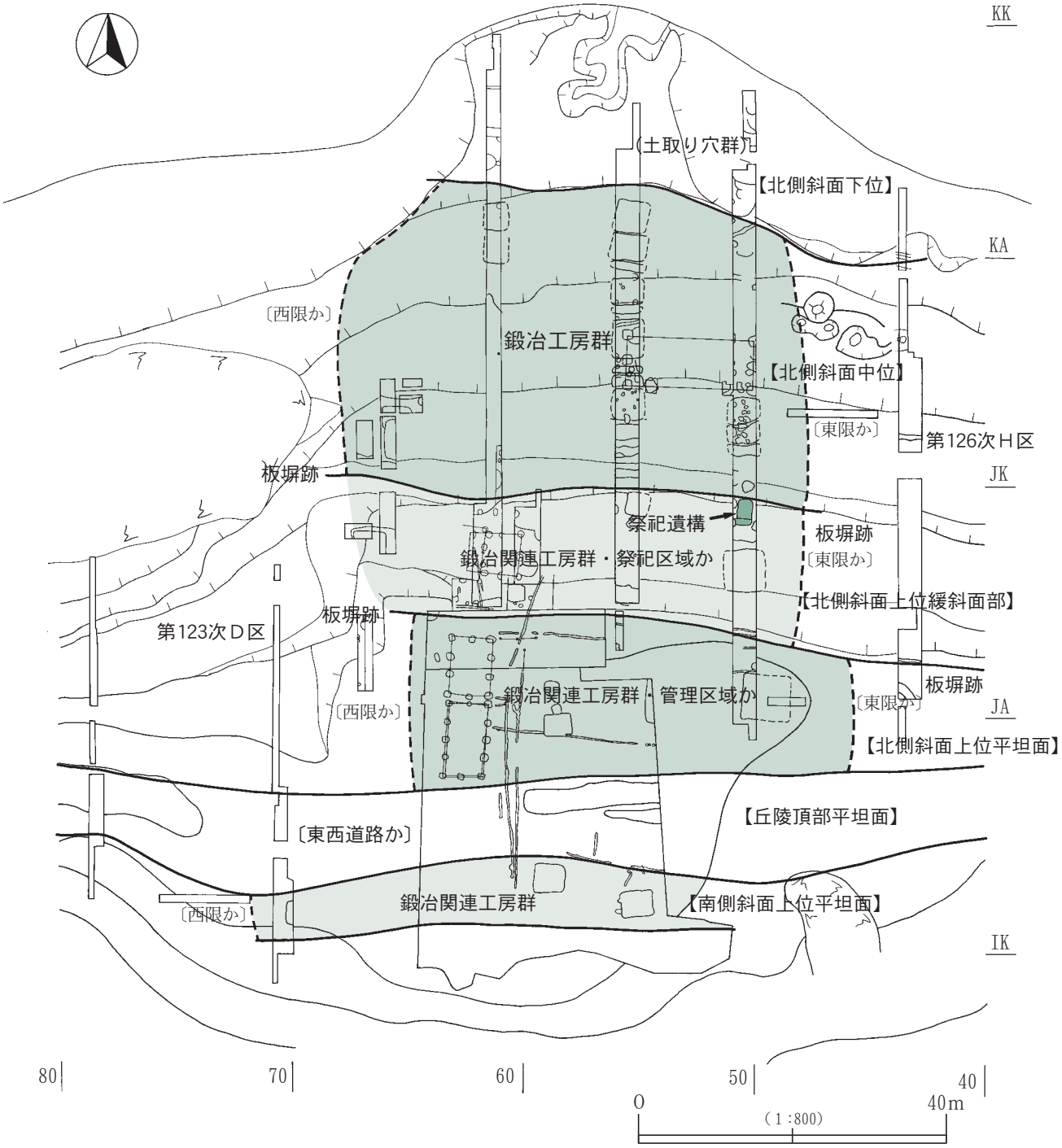
【北側斜面上位緩斜面部】標高47～50ｍラインの遺構群

標高50ｍラインには現況でもわずかな段差が認められ、同所下からは東西方向の板塀跡(第118次SA1313、第120次Ａ４区SA1358等)が検出された。SA1358は、南北棟建物のうちの北側建物であるSB1222北面梁間と並行する位置で検出され、南約３ｍにはこれと並行するSA1313も確認されている。両者間約３ｍの空隙は東西の通路とみなすことも可能である。

本域の遺構は、東西棟の掘立柱建物跡(第135次SB1866A･B、SB1875等)や竪穴建物跡(第122次SKI1491・1532、第135次SKI1876、第137次Ｍ・Ｎ区SKI1922A･B)、祭祀施設とも想定される竪穴遺構(第122次SKI1484A～C)等で構成される。これら遺構群は、上位の遺構群が整然と配置されるのに対し、本域で

は特に西側において重複が著しい。また、遺構群の広がりは上位遺構群より西側に延びることも確かめられた。

SB1866・1875の柱穴掘形は一辺が100㎝を越すような規模であり、これは政庁域あるいは長森東方地区における掘立柱建物跡の柱穴掘形と遜色ない。同等の掘形規模をもつ建物跡は北側斜面上位平坦面のSB1219A･B、SB1222A･Bでも確認されている。これら建物跡の軸線方向が今回検出されたSB1866・1875と一致することから、それぞれが関連をもって計画・構築された施設群と推測されよう。ただし、今まで同類建物の構築時期が不明瞭であったが、SB1866・1875と近似する柱穴掘形であるSKP1911・



第92図　政庁西側地区における遺構群の分布

1912が鍛冶関連の整地層に先行する時期であることが判明した。このことから、同種の掘立柱建物のうちの一部は、一連の鍛冶関連の施設に先立つ構築である可能性が生じたことになる。また、竪穴建物跡には、焼土(地床炉)を伴う例もあるが、鍛冶に直接関連する鍛造剥片等は未確認である。これは、斜面上位平坦面における竪穴建物と同様である。

【北側斜面中位】標高43～47ｍラインの遺構群

標高47ｍラインには、明確な段差が見られ上位面との比高は60㎝である。ここには第122次Ｂ区のSD1516・1530等の東西方向の溝跡が確認されていることから、上位斜面部の標高50ｍライン同様に遺構群を画する板塀等の施設が存在していたと推測される。

本区域は、標高43～45ｍ程の急斜面部と標高45～47ｍの緩斜面部からなる。前者には竪穴建物構造の鍛冶工房跡、後者では掘立柱建物構造の鍛冶工房跡や規模の大きな掘立柱建物跡・土坑等が激しい重複を伴い検出された。鍛冶関連の工房跡については後述する。

斜面中位の緩斜面部第122次Ｂ・Ｃ区から検出されたSB1525Ａ・Ｂは、規模の大きな東西棟掘立柱建物跡である。旧期のSB1525Ｂは、桁行５間×梁行２間で総長16.5ｍ×6.6ｍである。本建物の南側柱列を東側に延長すれば、政庁正殿の北側柱列とほぼ同一線上にのる。鍛冶工房跡との重複を整理すれば、本建物は鍛冶工房が存続する期間中のある時期に構築されていたことになる。

また、大型の円形土坑(第135次SK1864・1870)は、北側斜面下位で確認されていた“土取り穴”に類似するものの、SK1864は壁面・底面とも整った掘り込みを有し、土を取るだけの穴とは思えない。土取り穴とは異なる性格を想定する必要がある。なお、SK1864の遺物の出土状況(図版34下)は、地鎮等の祭事に係る事例と判断されよう。

【北側斜面下位】標高39～43ｍラインの遺構群

北側斜面下位は、その東部で斜面が比較的急であり、西部では緩傾斜～平坦である。前者には土取り穴群が形成され(第122次Ｂ・Ｃ区)、後者には土取り穴とは異質の土坑や溝跡が確認された(第135次Ｊ区)。土取り穴は、斜面上位側の鍛冶関連の施設構築に伴う可能性と、斜面下位側の外郭北門周辺の低地部における整地等の用土を供給するための両者の想定をしておきたい。斜面最下位の平坦面(丘陵縁辺部)は、丘陵最上位の平坦面と同様に、東西間の道路として利用されていたのかもしれない。

(２)鍛冶関連遺構群の様相

北側斜面中位で集中的・重層的に検出された鍛冶関連の遺構群についてまとめる。

①　鍛冶工房の構築方法

斜面中位で集中的に検出された鍛冶工房(以下、竪穴建物内あるいは掘立柱建物内に鍛冶炉をもつものを鍛冶工房とする)は、その構築・改築において次の方法を採用している。斜面地においてできるだけ広い平坦面を確保する観点から、斜面上位側を削り下位側に盛ることを基本に、工房が斜面上位側に移動する場合と、同一箇所での嵩上げを行う場合が混在する。これは第122次Ｂ区において顕著に観察された(第36図参照)。ここでは29ｍ程の範囲内に13棟もの鍛冶工房が重複していた。

Ｂ区斜面中位では、SKI1560Ｂが鍛冶工房として最初に作られる。それが機能を失い、新たな工房が必要になった時には斜面上位側の土を削り、1560Ｂ床面上に土を盛る。貼床面上には新しく鍛冶炉

が設けられ、上屋を支える柱も更新される。これでSKI1560Ａ鍛冶工房の完成である。２時期目の鍛冶工房も役割を終え、次なる工房が必要になった場合には、また上部の土を削り、窪地となっているSKI1560Ａ鍛冶工房を埋める。このことで上位側を含めたより広い平坦面が確保され、上屋を設け鍛冶炉を置く。これがSKI1567Ｂ鍛冶工房である。次いで、同様の手法で斜面上位側に新たなSKI1567Ａ鍛冶工房が構築される。工房はさらに斜面上位側に向かって連続的に造られ、SKI1567Ａの次にSKI1542→SKI1551Ａ→SKI1588→SKI1518Ａ→SKI1517→SKI1537Ｄの変遷をたどる。SKI1537Ｄ鍛冶工房も更新される。Ｄ床面の上に土を盛り、貼床を形成し鍛冶炉を設置する。これがSKI1537Ｃ鍛冶工房である。同様の嵩上げの方法でSKI1537Ｂ→SKI1537Ａと新たな工房が作られる。SKI1537ＤからSKI1537Ａまでの４時期の間に床面は45㎝前後嵩上げされ、当初は竪穴式の工房だったものが、最終段階には掘立柱建物内に鍛冶炉を設けたと推測される。

同一箇所での鍛冶工房の嵩上げは、第135次SKI1863Ａ～Ｄや第137次SKI1924Ａ～Ｆでも確認されており、第122次の事例が特別ではなく、本区域内では通例と見なすことができる。SKI1863Ａ～Ｄは４時期で40㎝程、SKI1924Ａ～Ｆは６時期で100㎝の嵩上げが認められた。さらに、後者では最も新しいSKI1924Ａの上位に盛土整地がなされ、この面上に鍛冶炉が置かれていたことから、工房のプランは不明瞭ながら、掘立柱建物構造の工房が存在していた可能性が高い。整地面は２時期であることから、竪穴式の工房から合算すると８時期にわたる鍛冶工房の変遷が想定される。また、前者では最下位に土取り穴の可能性のある土坑(SK1914)が掘り込まれ、底面から須恵器坏が正位状態で１個体出土した。須恵器は、鍛冶工房を最初に造るにあたり、地鎮的な意味合いをもたせて埋置した可能性も考えられる。

②　鍛冶工房が重層する理由とは

鍛冶工房は、なぜ狭い範囲内で重複しながら繰り返し構築され続けたのか。それは斜面中位、標高43～47ｍライン内に鍛冶工房を置くことが規制・強要されていたことが一つの理由であるのかもしれない。もう一つは次のように推測した。

鍛冶炉は一般的には下部構造を伴うが、それは防湿という炉としての機能に係わる根本的な要素である。しかしながら、今回の調査において、下部構造(掘り込み)を伴う鍛冶炉跡は、第122次Ｃ区のSS1554Ａのみである。一方、工房内の鍛冶炉は一部の例外を除くと、貼床面上に設置されている。貼床を構成するのは斜面上位側の土ではあるが、粘土(地山)あるいはシルト質土(第Ⅲ層)をそのまま使用することはない。混入量に多寡はあるものの、炭化物、焼けた粘土ブロック、砕片化させた土器を含む土等を用いている。これらの状況から、貼床そのものが工房の床面であると同時に鍛冶炉の下部構造の施設の役割を担っていたのではないか。新たに鍛冶炉が必要になった場合には、鍛冶炉の下部施設構築を兼ねた貼床をすれば良かったものと思われる。

なお、払田柵跡内における“鍛冶”に関連する記述としては、藤井甫公が著した『払田柵址研究日誌』の昭和５年３月29日付けに、「長森方面を調査し陶土師の破片及び長森の畑にて鍛冶屋の址を発見し(金くそあり)又排水溝にてチヤスの石炉等発見せられたる」とある[(1)]。また、外郭南門に接続する東側石塁の西側(長森丘陵の南縁下)には、「鍛冶清水」と称される井戸が存在する。当地点は第65次Ｂ地区のSE794井戸跡として昭和61年に調査されている[(2)]。

（３）鍛冶に関連した祭祀遺構

北側斜面上位緩斜面部には、鍛冶工房とは明らかに異質な竪穴状の遺構が検出された。

第122次Ｃ区で確認されたSKI1484Ａ～Ｃ竪穴状遺構は、長さ約４ｍ、幅約２ｍの長方形を呈する。焼土面が長方形プランの竪穴内にあるものの、鍛造剥片は全く認められず、鍛冶工房とは判断できない。検出位置も鍛冶工房域に隣接するが、エリア外（斜面上位側）となる。これに出土遺物の特異性を加えると、この１基のみが他の遺構とは明らかに異なると推測される。

出土遺物の特異性とは、口縁部を意図的に打ち欠いたり、内面底部に墨を塗った須恵器坏が見つかったことであり、払田柵跡では検出例が非常に少ない鉄鉢模倣の仏鉢（第55図22）、壺Ｇの可能性のある須恵器（同21）、そして初見となる瓦質土器（同23）である。これらの遺物が焼土遺構周辺の限定された箇所にあったことも特異性を強調している。これらの遺物を残しうる長方形プランの竪穴状遺構とは、その位置や焼土遺構の存在から鍛冶作業に関係をもつ何らかの祭壇的な施設と推測できないだろうか。しかも遺構の変遷から３時期にわたることは明確であり、同一箇所で同一プランを継承させつつ、特異な遺物を残すような祭祀的な行為が鍛冶関連工房域の最南東端で継続していたと考えられる。

一方、瓦質土器については、各地域の古代土器を専門とする研究者に実見していただいたが、器質・器種を含め明快な位置づけができないまま現在に至っている[(3)]。胎土・焼成・器面調整・文様に質感も加え、どれをとっても見慣れない焼物である[(4)]。その製作時期は不明といわざるを得ないが、廃棄・埋置の上限時期は共伴の須恵器坏（第55図19など）から９世紀中頃を前後する段階と推測される。

（４）長森東方地区との対比

長森東方地区の遺構は、創建にあたっての盛土整地地業や建物の造営工事に携わったであろう工人等の竪穴建物が構築される８世紀最終末～９世紀初頭（Ａ期直前）から、政庁Ｖ期・外郭線Ｄ期相当の掘立柱建物と板塀が作られる10世紀中頃（Ｆ期）まで７時期の変遷が認められる（第91図）。まさに払田柵の創建から終末期まで、当地区平坦地が連綿と利用されていたことが明確となった。

政庁西側地区の遺構群を長森東方地区の時期区分の中に位置づけると、Ｄ期・Ｅ期にあたる。Ｄ期は９世紀後半であり、主に竪穴建物で構成される。「小勝」の墨書土器が出土したのも本期竪穴内である。竪穴はカマドをもたず地床炉・焼土をもつものや漆紙文書の出土などから、漆塗作業を伴う工房的な使い方が推測される。Ｅ期は10世紀前半～中頃であり、南北・東西に延びる板塀と、これに画された内部に整然と建物が並ぶ。このように見ると、西側地区の遺構群は東方域Ｅ期の遺構配置のあり方に近似する。建物配置・規模・検出数等に差異はあるものの、Ｅ期にのみ類似する施設を政庁西側地区にも構築していた可能性はあろう。

（５）遺構群の分布範囲

本地区における古代遺構群の西限は、現況では第123次Ｄ区に求められる。Ｄ区北側では整地層も鍛冶関係の遺物もなく、縄文時代に竪穴住居が構築された後には現代まで場の利用がなされていない。ただし、Ｄ区の北側延伸部は、近代において土取りされた箇所であり、調査不能地区でもある。第137次調査の北側斜面中位面では鍛冶関連の工房跡（SKI1924Ａ～Ｆ）が確認されており、厳密には、丘陵頂部～斜面上位平坦面及び北側斜面上位緩斜面部の遺構はＤ区が西限であり、以下の遺構群すなわち鍛冶工房が集中する区域の西限については不明と言わざるを得ない。なお、第123次Ｆ３区は西側の

沢地内であり、２種類の遺構が検出された。土坑(SK1649・1650)は斜面下位側(南側)である外郭線南西域を指向した土取り穴としての機能を類推できる。しかし、隣り合う竪穴建物跡(SKI1651)は、火山灰降下後、払田柵にとっては終末に近い段階に造られたはずである。壁面や丁寧な貼床の状況を観察する限りでは、急造ではなく計画的に構築されたことを想起させる。条件の良くない沢地内に竪穴建物を配置させた目的は何なのか、残された課題である。

一方の東限は、第126次Ｈ区で斜面上位平坦面と緩斜面部を画する東西方向の溝跡(板塀跡)SD1678等が検出された(図版32中)に留まることから、鍛冶関連の遺構群や整地層は、西側の第122次Ｃ区近辺と判断することができる。これ以東、政庁域までの約100ｍの区間は遺構がほとんどない空閑地であった可能性が生じたことになる。

以上のように一覧すると、本地区における古代遺構群の分布範囲は、点的な配置を示す第123次Ｆ３区の竪穴等を除外すると、東西方向の長さ85ｍ(第123次Ｄ区から第126次Ｈ区間)に限定される。このなかで北側斜面中位の鍛冶関連工房群の分布域は西限が不明瞭ではあるが、東西約60ｍ、南北約40ｍで面積にして約2400㎡と推測される。この範囲内では計345㎡(14％)のトレンチ調査を行い、鍛冶工房あるいは鍛冶炉を36基検出している。単純な比較はできないことを承知で比例計算すると、鍛冶工房範囲内には250基[5]もの鍛冶工房・炉が重複を伴いながら存在していた可能性も考えられる。

２　外郭西門東側地区

(１)丘陵部の様相

本地区丘陵部の調査により明らかになったことは、政庁西側地区と同様に段状の地形が古代における整地に伴う地業の結果であり、検出位置(標高)において遺構の種別・配置が異なることである。

【頂部平坦面】標高48ｍ前後

頂部平坦面には基本的に古代の遺構は認められない。ここでは縄文時代の竪穴住居と中世の墳墓が重複する。平坦面の空閑地化は政庁西側地区におけるあり方と呼応しており、通路としての確保と規制があったことを補強するものである。

【南側斜面上位】標高46～47ｍライン

南側斜面上位は、第117次Ｄ～Ｆ区(拡張区)で検出された竪穴建物跡６棟(SI1266・1280など)である。一辺４～６ｍ台の方形プランをなし、狭い範囲で重複する。SI1266は、カマドはなく、床面中央に地床炉を持つ。炉周辺では数は少ないものの、鉄滓と鍛造剥片が得られており、鍛冶工房跡あるいは鍛冶に関連する何らかの工房跡と判断されよう。出土遺物には土師器坏、須恵器甕等があるが、完形の坏を床面上に置いたり、壁際に立て掛けるような状況にあることから、竪穴廃棄時において祭祀儀礼が執り行われたと考えられる。また、SI1266周辺に立地する複数の竪穴建物跡は、その軸線方向・配置・重複から、時期差はあるものの、鍛冶に関係した工房跡であったと推測される。このことは地区は異なるものの、政庁西側地区第115次調査区におけるSI1229・1236にも当てはまる。以上の施設は、出土した土師器坏等から９世紀後半・末～10世紀前半代に構築・廃棄されたと考えられる。

【北側斜面上位】標高46ｍライン

ここにはＢ区SI1274が位置している。周壁・壁溝・カマドの一部を確認しているが、その詳細は不明である。床面直上出土の須恵器坏を見れば南側斜面上位のSI1266等より旧い段階、９世紀中頃の廃棄時期を導き出すことができる。

東西方向の溝跡であるＢ区SD1303、Ｈ１区SD1342は、本面と頂部平坦面を画する板塀等の施設であった可能性もある。

【北側斜面中位、第１段整地面】標高42～43.5ｍライン

標高43.5ｍライン上には竪穴状の落ち込みが３か所で確認されたが、精査の結果、土取り穴(Ｈ１区SKI1321、Ｕ区SK1439Ａ～Ｄ、Ｉ１区SKI1330)の複合体であったことが類推された。土取り穴の隣接地・斜面下位側には鍛冶炉・炭窯が構築される。Ｈ１区では土取り穴の北側にSS1320鍛冶炉が作られる。Ｉ１区では、SKI1330に隣接してSS1353鍛冶炉とSW1340炭窯が構築される。明確な炭窯跡の検出は、政庁西側地区を含めてSW1340が唯一例である。

以上の点からSK1321とSKI1330は、形状は不明確ながら最終的には鍛冶工房として機能させていた可能性がある。また、土取り穴構築ラインよりやや下位側、標高42ｍ地点には竪穴建物が作られる。Ｑ・Ｏ区内のSI1431である。床面直上より複数の鉄滓が出土しており、鍛冶に関連をもつ建物と推測することができる。

本面遺構の構築時期は、遺構内の火山灰のあり方や出土遺物から判断して、９世紀代に納まると考える。SKI1321は堆積土中位に、SI1431はその上位にそれぞれ十和田ａ火山灰が帯状に堆積する。SI1431出土遺物には、非ロクロで丸底を呈する内黒土師器坏(第74図９)や、須恵器にも底径の比較的大きな回転ヘラ切り坏(第74図１：底径指数0.64など)が含まれることから、本竪穴建物は９世紀中頃段階まで遡る。

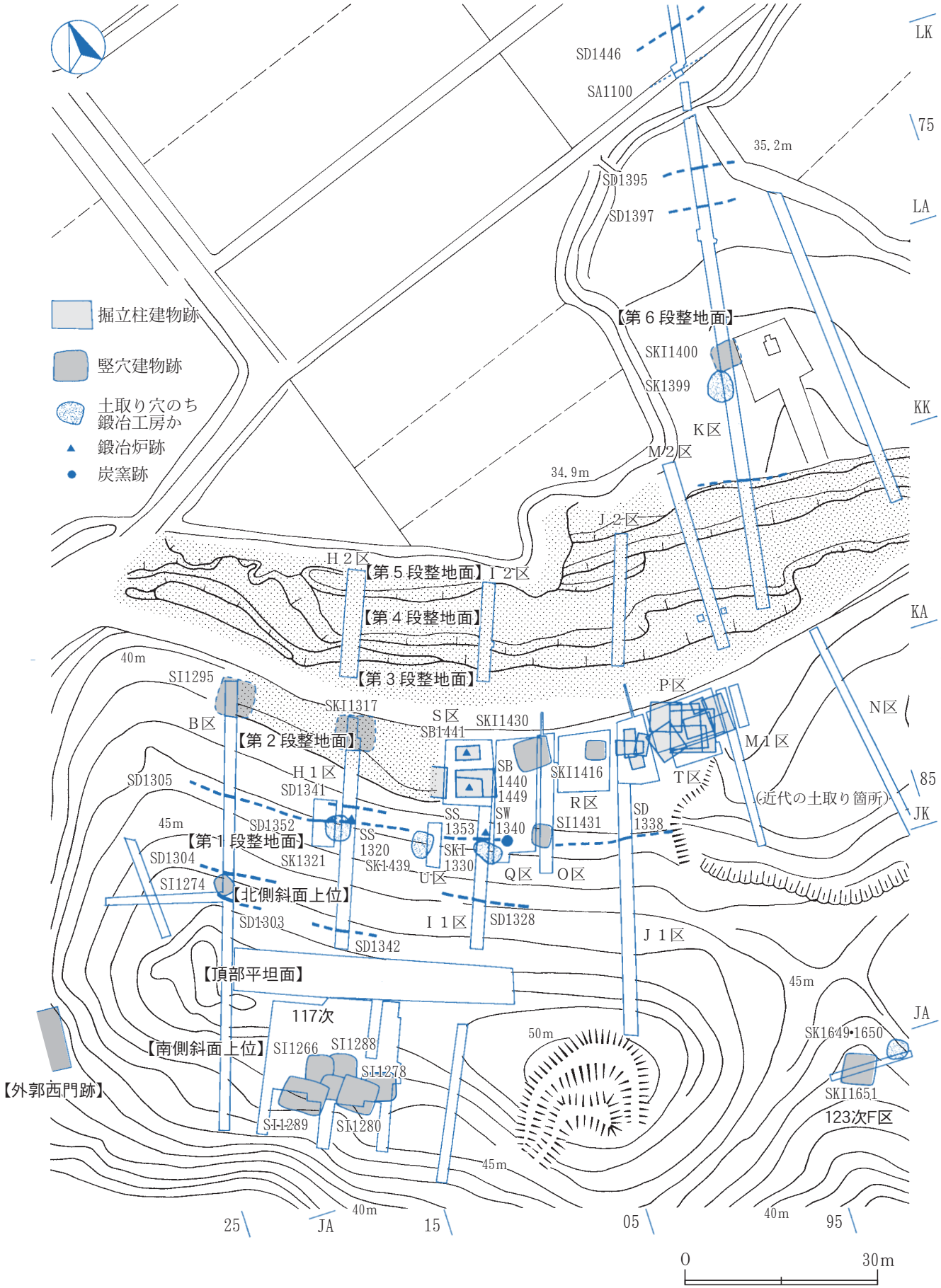
また、東西方向の溝跡であるＢ区SD1304、Ｉ１区SD1328は、本面と北側斜面上位面を画する板塀等の施設であった可能性もある。

なお、本面の南限と上位の段差は、３か所の土取り穴(凹地)が等高線に沿うように連続して掘削させた結果、見かけ上生じた可能性もあり、本来的には整地面とは呼べないのかもしれない。

【北側斜面下位、第２段整地面】標高40～41ｍライン

本区域には、整地による比較的幅広の平坦面(幅約14ｍ)が形成され、ここに掘立柱建物・竪穴状遺構が構築される。遺構の分布、重複は外郭西門東部域では最も顕著である。掘立柱建物には、鍛冶炉・足入れ穴[6]・金床石を取り込んだもの(第121次Ｓ区、SB1440等)と鍛冶炉・焼土遺構を取り込まないもの(同Ｐ区、SB1460等)がある。前者は鍛冶工房跡と判断され、後者は前者の東側で集中的に認められ、規模・柱穴掘形にばらつきがあり、一概に規定することはできないが、桁行き２間以上の建物については、工人集団を管理するような施設であったと推測したい。

また、鍛冶工房の東側には南北の板塀(柱列)を挟んで竪穴建物跡(SKI1430Ａ～Ｄ)が存在する。一辺が４～５ｍ台の方形・長方形プランを示し、ほぼ同一箇所で４時期の変遷がある。本竪穴内には、鍛冶炉はなく焼土面が形成される。多くの塼が出土し、鉄滓・鍛造剥片は少ない。隣接する箇所での銅滓及び緑青の付着した坩堝の出土から勘案すると、本竪穴内あるいは隣接地に銅の鋳造に係わる施



第93図　外郭西門東側地区における遺構群の分布

設が存在していたことも類推される。

東西方向の溝跡であるＢ区SD1305、Ｈ１区SD1341あるいはSD1352、Ｉ１区SD1357、Ｊ１区SD1338・1355は、本面と北側斜面中位・第１整地面を画する板塀等の施設であった可能性が高い。

【第３～５段整地面】標高37～39ｍライン

第３段整地面は、第２段整地面の下段に位置する。上位面(現道面)との差は約40㎝。その幅は５～７ｍ程となり、確認された遺構は第119次Ｊ２区南端の土坑１基(SK1354)のみである。

第４段整地面は、第３段整地面の下段に位置する。上位面との差は明瞭であり約55cmである。その幅は７～８ｍ程であり、確認された遺構はＫ区内での竪穴建物跡(SKI1389)のみである。本整地面の形成時期は、第119次Ｈ２・Ｉ２区での観察により、十和田ａ火山灰降下・堆積期を上限とし、10世紀中頃を下限とする頃と推測される

第５段整地面は、第４段整地面の下段に位置する。上位段との差は明瞭であり約90cmである。その幅は４～５ｍ程と狭くなり、確認された遺構は、Ｋ区内の溝跡１条(SD1405)のみである。

【北端部最下位平坦面、第６段整地面】標高36ｍ前後

最下位平坦面には、第121次Ｋ区で検出された竪穴建物跡(SKI1400)と土坑(SK1399Ａ～Ｄ)、焼土遺構(SN1399Ｅ)がある。土坑は土取り穴と見られる。遺構の変遷は、(旧)竪穴建物跡→土坑→(火山灰降下)→焼土遺構(新)である。ここでは明確な鍛冶関係の遺構は認められないが、土坑が人為的に埋められた後のわずかな窪地に火山灰が堆積し、自然堆積層を挟み焼土遺構が形成される。

(２)鍛冶関連遺構群と遺物

本地区のうち第119・121次調査で出土した鍛冶滓・椀形鍛冶滓は約32kgである。出土位置は、第１・２整地面にあるＳ・Ｑ区と斜面下位側の第３整地面Ｈ２・Ｉ２区に特に集中する。椀形鍛冶滓の大きさは様々であるが、政庁西側地区と比較すると大振りな滓(径12㎝、厚さ３～４㎝程度)が目につく。

第２段整地面中央部、Ｏ・Ｑ区で確認したSKI1430Ａ～Ｄは、銅(製品)生産に係わりをもつ工房跡と推測する。断定すべき材料には欠けるが、推測の状況証拠として次の点を掲げる。

①鉄滓・鍛造破片の少なさ

本竪穴の西側に隣接するＳ区内の鍛冶工房域では、鉄滓・鍛造剥片が出土している。例えば第２鍛冶工房跡・SX1394鍛冶炉周辺では一部取り上げただけで約４Kgの鉄滓が得られている。一方、その東側約４ｍに位置するSKI1430Ａ～Ｄは堆積土を土層観察ベルトを除いて全量掘り上げた結果、約1.4Kgの鉄滓が出土した。そのうちの約９割が竪穴埋土上位にあり、床面直上出土はわずか140ｇ(４点)にすぎない。また部分抽出した焼土・炭化物を含む土壌の中からは鍛造剥片は発見されなかった。

②坩堝・銅滓の出土

本竪穴出土ではないが、隣接するＳ・Ｉ区内より坩堝片10数点、銅滓１点が確認された。坩堝には緑青の付着が見られることから、銅鋳造に係わる容器と判断される。第119次出土の坩堝は、Ｓ区の南側・SKI1330(第１段整地面Ｉ１区)や北側となる第４段整地面・Ｉ２区にある。SKI1330出土例は１層内であり、遺構が埋没する最終段階で流入されたものと考えられる。

また、本竪穴内の出土遺物には、羽口片や炉壁の可能性のある小片がごく少量ながら出土している。

③塼の出土とその位置

塼とは長方形を呈する土製レンガであり、政庁跡出土例から復元すれば、長さ20㎝以上、幅13～17㎝、厚さ７～９㎝である。

SKI1430Ｄ段階の床面直上には、少なくとも42個体の塼が分布していた。いずれも二次的な火熱を受けている。その集中する位置(炭化物の広がり：第66図Ｈ周辺)は、床面の中央部にあたることと、東側壁寄りのカマド火床面と推測される焼土面(Ｅ～Ｇ)周辺には塼の分布は認められないこと。以上の点から塼は、カマドを構成する部材とは考えられない。

それでは塼を銅生産に係わる溶解炉の炉体とすることができるのか。炉とした場合、塼以外の炉残片(炉壁)が少なすぎる。逆に溶解炉ではないとすればどのような施設であったのかが、課題として残る[7]。

本竪穴の構築時期は、底部に回転糸切り痕を留める土師器坏が主体となり、須恵器坏も回転ヘラ切りの個体は少ない。明らかに鍛冶工房跡が構築される時期より新しく、９世紀後半・末から10世紀に入る段階かもしれない。

(３)調査区東部の遺構群と鍛冶・鋳造工房の関係

Ｊ１区以東の遺構群には、直接的に鍛冶・鋳造の生産施設はない。それはＪ１・Ｐ区内複数の焼土面周辺から鍛造剥片が認められなかったことを根拠とする。ここでは竪穴建物と掘立柱建物が集中的に重複するが、建物が後出となる。遺物を見ると、SI1401竪穴建物跡の土師器坏(第74図19)は古手の様相を示す。19は小振りで身の深い椀状を呈する。底面には回転ヘラ切り痕を留め、体部下半にはケズリが加えられている。この種の土器は、秋田城跡における赤褐色土器坏Ｂタイプとされるもので、９世紀第１四半期に編年される[8]。遺物は竪穴堆積土中出土であり、構築時期を示す指標とはならないが、床面直上出土の須恵器坏(第74図20)は、前述の第１段整地面SI1431出土須恵器坏と同時期あるいはやや後段階と見る。

以上の状況から、本区域では最初にSI1401竪穴建物が９世紀第３四半期代に構築される。ここを拠点として当初は西側区域に鍛冶工房を作り、生産活動を開始する。次いで９世紀末頃に中央区域に鋳造の工房を作る。この段階で鍛冶工房と鋳造工房が同時に操業していた可能性がある。鍛冶については、第１段整地面における竪穴構築後の一連の動きとも結びつくのかもしれない。東部区域の竪穴は次第に掘立柱建物に置き換わる。その建物は火の使用を伴う場合もあるが、鍛冶工房とはならない。建物の規模・柱穴掘形にはばらつきがあり、一概に規定することはできないが、桁行２間以上の建物の一部は、工人集団を管理する何らかの施設であったと想定しておく。

今まで述べてきたように、第２段整地面には、それぞれ関連はもつものの、性質の異なる３種の施設が並列する[9]。排他的とも思える配置及び重複には、その場でなければならない規制が働いていた可能性が強い。

（４）沖積地部の様相

外郭西門跡の北東部、第121次Ｋ区北部の沖積地面では、SA1100材木塀跡(外郭線)と、その北と南に位置するSD1446溝跡、SD1395溝跡の３遺構が検出された。当該地区の外郭材木塀跡は、昭和57年の第51次調査において、ボーリング探査及び小トレンチ発掘による所在・位置確認が実施されており[10]、今回はその追認をした形となる。材木塀はＢ期段階の材が綺麗に抜き取られている。過去の調査において、抜き取られたＢ期材はＣ期外郭線の南側約4.5～7.5ｍに位置する木道として使用されているが、本次調査ではその痕跡は確認できなかった[11]。

また、材木塀跡の北約６ｍに位置するSD1446溝跡は、外郭北門及びその東に延びる材木塀列の北側で確認されたSD1145溝跡と同一遺構と考えられる(平成７年の第103次調査)。SD1145は、材木塀の北約５～10ｍに位置し、上面幅3.5～4.3ｍ、深さ0.6～1.0ｍと報告され、堆積土中位には十和田ａ火山灰の堆積層がある。このことから今回確認した溝跡は、過去にSD1145と登録していた溝跡の西側延伸部と推測される。

註

１　仙北町史談会2006『藤井甫公著「拂田柵址研究日誌」』

２　秋田県教育委員会1987『払田柵跡－第65～67次調査概要－』払田柵跡調査事務所年報1986

３　この瓦質土器については、「渤海産の可能性がある」あるいは「渤海産ではない」との指摘もある。これらに対する当否を判断することはできないが、渤海使が古代出羽国に来着していることは事実であり、時期的な乖離はあるものの、渤海産であることを全く否定する材料はないことになる。仮に渤海産とすれば、過去にその可能性が高い土器として報告された事例は次にある。

①　両面黒色(黒陶)の合子蓋・壺破片　平城宮跡東大溝SD2700出土(巽淳一郎1994「平城宮東大溝SD2700出土の黒陶片」『奈良国立文化財研究所年報1993』奈良国立文化財研究所、小嶋芳孝1996「古代日本と渤海」『考古学ジャーナル』411)

②　両面黒色(黒陶)の高杯　平城宮跡第274次調査SD3410出土(奈良国立文化財研究所1999「式部省東方　・東面大垣の調査－第274次」『奈良国立文化財研究所年報1998-Ⅲ』)

４　出羽国内では秋田城跡第35次調査(鵜ノ木地区、昭和57年調査)SK651土取り穴群から台付壺が１個体出土している。報告では“土師器壺”とされていたが、実見の限りでは燻し焼き風の須恵器に近い土器(酸化炎焼成)であった。払田柵跡の瓦質土器と比較して、器形、胎土、文様の有無など相違点は多いが、焼成・色調や器面の質感(ミガキ調整を含む)は身近さを感じるものがあった。このような質感の土器は、同発掘調査事務所の伊藤武士氏によれば、秋田城跡(昭和47年より継続調査)から出土した膨大な量の土器のなかでも唯一例だそうである。秋田市教育委員会1983『昭和57年度秋田城跡発掘調査概報』

なお、秋田城跡では第63次調査(鵜ノ木地区、平成６・７年調査)において、水洗トイレ遺構が検出されている。沈殿槽から採取された土壌を分析した結果、「豚を常食とする食習慣の人間が感染する有鉤条虫卵がまとまって検出され」たことから、トイレの使用者を「その習慣のある大陸(渤海)の人間」であると指摘している。秋田市2001「秋田城跡の発掘調査」『秋田市史第７巻　古代史料編』

５　鍛冶工房等250基の根拠は次のとおり。トレンチ調査で検出された工房等は約200㎡の範囲内から36基である。これはトレンチ調査範囲345㎡のうちの58％にあたる。このことから、本域2400㎡の58％にあたる1392㎡に鍛冶工房等が分布する範囲と仮定する。工房等の㎡あたりの分布数は0.18(36÷200＝0.18)とこれも仮定すれば、

本域の鍛冶工房等の数は1392㎡×0.18≒250となるのである。数値はあくまでも参考にすぎない。

6　“足入れ穴”とは鍛冶工人が鍛錬作業時の効率化を図るために足を入れる土坑を指す。県内での検出事例は三種町(旧琴丘町)小林遺跡にある。平成12年に発掘調査され、古代の竪穴建物跡兼鍛冶工房跡から鍛冶炉・金床石と共に検出。時期は10世紀代。秋田県教育委員会2004『小林遺跡Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第376集／また、隣県では岩手県宮古市島田Ⅱ遺跡にもある。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2004『島田Ⅱ遺跡第２～４次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第450集

7　銅製品の出土例は、第85次調査(外郭西門域)において刀柄頭が、政庁域から原形を復元し得ないものの各１点が報告される。前者の出土地点はSN909焼土遺構内であり、ここは外郭西門Ⅳ期建物を構築する直前に行われたSX923盛土整地地業の上に位置する。焼土はⅣ期門柱穴掘形により切られることから、遺物が遺された時期は、10世紀初頭から前半の限られた時間内に納まる。また後者は形態が不整形で全体に小気孔が見られることから銅滓の可能性がある。秋田県教育委員会1991「第85次調査」『払田柵跡－第84～87次調査概要－』／秋田県教育委員会1985「遺物」『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』

なお、第85次調査出土の刀柄頭は目貫孔付きであり、津野仁氏によると同形態の事例としては「初現期」にあたると報告されている。津野仁2005「毛抜形太刀の系譜」『國學院大學考古学資料館紀要』第21輯

なお、同形の刀柄頭は、能代市上ノ山Ⅱ遺跡(平成14・15年調査)の遺構外からも出土している。秋田県教育委員会2005『上ノ山Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第397集

8　秋田市2001「秋田城跡の発掘調査」『秋田市史　第７巻　古代史料編』

9　鍛冶工房跡(建物)と鋳造工房跡(竪穴)の間に位置する南北の柱列SA1435・1436は、両者を区画する板塀などの施設であった可能性が高い。

10　秋田県教育委員会1983「第51次調査」『払田柵跡－第46～52次調査概要－』

11　外郭北門から西方向に延びるSX1202木道は、材を３～４列並べ、幅約1.5ｍの路面としている。外郭北門から東方向に延びるSX1180木道は、材を３列並べ、幅１ｍ程の路面とする。両木道とも部分的ではあるが、東西方向の主たる材木列に直交させる別の短い材を並べている。これは木道の沈下防止のためと考えられる。

秋田県教育委員会1999「外郭線」『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』

第３節　長森北方地区

１　ホイド清水周辺地区

(１)ホイド清水

第49次調査で精査を行ったホイド清水(SE550)は、立地やその深さを考慮すれば湧水を利用した溜井であったと判断される。設置の際には湧水周辺を平坦地にするための切土を行い、溜井の周囲には雨水の流入を防ぐ溝(SD558)や排水施設(SQ568、SD569)を設けている。ただし、同所には縄文期の“水場”的な土坑も確認されていることから、古代以前から開口していた湧水地を再整備したとも想定される。SE550が整備された時期は明確ではないが、その掘形や関連するSD558、SK563が火山灰層下で検出されたこと、出土遺物から見て創建段階と推測しておきたい。

昭和５年に発掘調査を行った上田三平、藤井東一の記録によれば[(1)]、溜井の四方に長さ７尺の側板が残っていて、側板細部の記録内容に“井籠(せいろ)組”の特徴がうかがえる。今回の調査によってSE550は現存する側板２枚のうち、北側板西端に残る切り込みから判断して、横板井籠組と呼称される構造の

可能性が高い。宇野隆夫「井戸考」[2]によれば横板井籠組井戸の確実な出現時期は７世紀代とされる。

なお、伝承によれば「ホイド清水」に接する北側の開墾は太平洋戦争後であり、開墾時に多量の建築遺材が出土したという。

（２）ホイド清水東側の様相

第130次調査で検出された一連の溝跡及び硬化面は、東南東－西北西方向に延びるが、これは政庁西門からホイド清水を結ぶライン上に位置する（第94図）。これらの遺構は、第127次調査において確認されたSM1716・1717道路跡の事例を参照し、その位置から類推すれば、政庁からホイド清水に向かう排水路であり、通路であったと想定することができよう。これを受けて、次のような変遷案を示す。

①　火山灰降下前には、幅70cm程の通路（SM1771・1772）が形成される。盛土などの明確な整地は認められなかったが、硬化面下の土壌が異地性の砂質系を示すことから、小規模な整地を行っていた可能性は高い。通路の形成時期は不明であるが、火山灰降下前の遺物に下限時期を９世紀第２四半期の須恵器坏（第85図28）が含まれることから、政庁第Ⅰ期（９世紀初～中頃）のいずれかの段階に形成されたと見ることができよう。

②　火山灰降下後、幅２ｍ前後の溝（SD1769）が新たに作られる。その位置は、かつてのSM1771・1772の南側に移動するが、軸線方向は同じである。溝はホイド清水の北側（斜面下位側）に向かうことから、排水が直接清水に入り込むのを防ぐ役割を担っていたはずである。また、遺構としての確認はできなかったが、溝に並行して通路も存在していた可能性がある。溝の廃絶時期は、最下層（７層）から10世紀第３四半期代の土師器坏（第85図１）が出土していることから、政庁第Ⅴ期（10世紀中～後半）に入る可能性もある。なお、本溝が丘陵部と低地部を分ける境界域に位置することにも着目しておきたい。

③　SD1769埋没後、新たに幅１ｍ程の溝（SD1768）が作られる。その位置は、かつてのSD1769の南側壁をなぞるように掘り込まれる。SD1768の堆積土は、ベースであるSD1769に酷似し、かつ層境も不明瞭であることから、溝として完成後まもなく埋没が始まり、比較的短期間で役割を終えたものと見られる。この段階にも溝と並行して通路が設けられていた可能性がある。

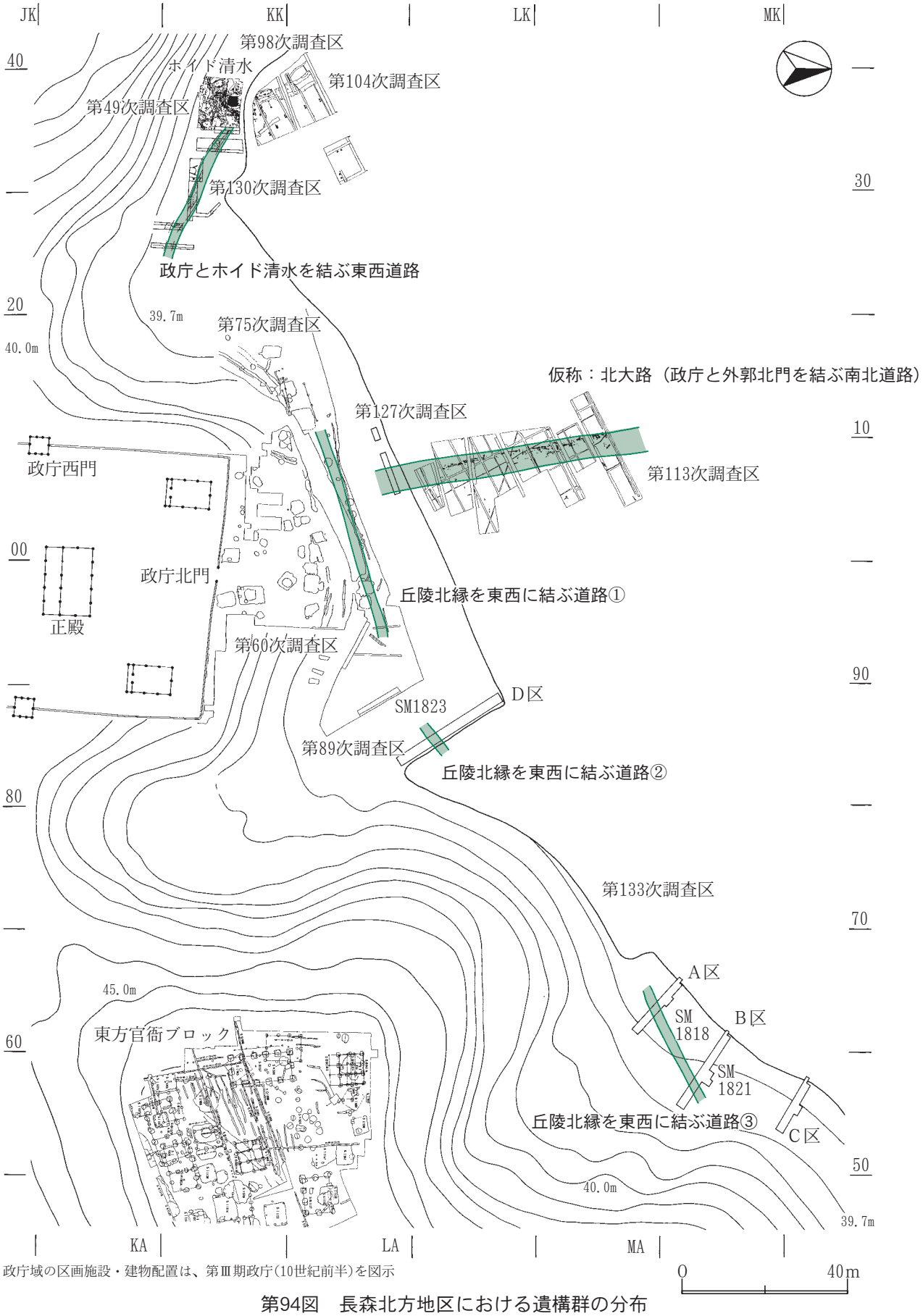
④　SD1768埋没後、幅１～1.2ｍ程の通路（SM1767）が新設される。その位置は、かつてのSD1768・1769の上部にあたる。SD1768の東側延伸部がSM1770と接続すると仮定すれば、本通路は南側に曲がり政庁西門に向かっていたのかもしれない。

SD1768及びSM1767の段階は、その存続時期は不明確ながらも払田柵の最終末である政庁第Ⅴ期に含まれる。このことは“ホイド清水”自体が政庁第Ⅰ期段階から終末期に至る間、その機能を保持し続けていたことを明確した。

２　丘陵北側裾部

（１）仮称：北大路南端部の様相

第127次調査で確認された２条の遺構は、政庁北門から外郭北門に至る２本の道路跡と推測された。それは第113次調査で検出された道路跡（SM1213Ａ・Ｂ）の存在が前提にある。



政庁域の区画施設・建物配置は、第Ⅲ期政庁(10世紀前半)を図示

第94図　長森北方地区における遺構群の分布

SM1213Ａは、外郭北門の桁行方向に対して直交するライン上に作られ、その幅員は６～７ｍである。路面は黒褐色泥炭層の上に盛土・整地をするものであるが、明確な硬化面や側溝は認められなかった。盛土は、自然堆積の泥炭層と区分される黒色土であり、同層には暗緑灰色粘土粒子、細かい木片、硬質泥岩の角礫、小石、川原石、火山灰とは明らかに異なる川砂などがごく少量含まれる。盛土の厚さは北側(外郭北門寄り)で最大40cm、南側では25cm程である。

SM1213Ｂは、SM1213Ａ盛土面上の西寄りに作られた、いわゆる木道である。木道の遺存状態は良好ではないが、外角線材木塀の角材を転用し、材の長軸を主に南北方向に２～３列並べることで路面とさせている。その幅は１～2.5ｍ程である。

SM1213Ｂ木道の構築時期は、土層断面の観察により、火山灰降下前であるが、盛土によるSM1213Ａの構築時期や両者の存続期間などは不明確である。類似の構造をもつ木道は、外郭線材木塀の内側(南側)にも見られる(SX1180・1202木道)。SX1180・1202は、外郭線Ｂ期(９世紀中頃～10世紀初頭)の材木を抜き上げて使用したもので、その時期は火山灰降下前であり、外郭線Ｄ期(917年＋α)まで存続したと考えられている。また外郭北門は創建段階から、設置されていることを勘案すると、SM1213Ａは創建期(外郭線Ａ期)に作られＢ期まで存続し、SM1213Ｂ木道はＣ期(907年)に入り作られＤ期にも使用された、と推定することができる。盛土による道路から木道への変化は、周辺河川の流路の移動に伴う水位の上昇が原因と考えられている。

第127次調査で検出のSM1716とSM1717は、その位置と規模の上から、それぞれSM1213ＡとSM1213Ｂに対応可能ではあるが、細部では相異も認められる。SM1716は、SM1213Ａのような盛土層の確認はできなかった。SM1717は粘質土による盛土であり、SM1213Ｂのような木道ではない。これらの相異は、道路面の立地に起因すると推測される。すなわち、SM1716・1717は泥炭層面に載るものであるが、そこはSM1213Ａ・Ｂ面ほど泥炭化が進んでいなかったと見られる。従って当初の道路は盛土を行わなくとも通行が可能と判断され、木道に切り替えられた時期も、粘質土による盛土対応とされたのではないかと思われる。

SM1716・1717は、低地(泥炭層面)と丘陵地の境界域で検出した道路跡である。外郭北門の桁行きに直交させた道路は、第127次調査区近辺で向きを南東方向に変え、丘陵地に向かう。丘陵地斜面では道路状の遺構は検出されなかったが、竪穴建物の存在しない空閑地を想定道路跡とした。このラインは、等高線に直交しており、政庁北門に至る。

いずれにしろ不明確な点もあるが、払田柵内の基幹道路である南大路、北大路とも、側溝を持たないタイプの道路であったことになる。

(２)長森丘陵北側裾部の様相

第133次調査の４本のトレンチから得られた情報と過年度の周辺域調査事例も加味して整理すると、次の３点にまとめられる。

①東西道路跡の発見

政庁から長森北側縁辺部を通り外郭東門方向に延びる東西道路跡が発見されたこと。これは、西からＤ区のSM1823、Ａ区のSM1818、Ｂ区のSM1821で構成される。三者をつなぐと、ほぼ直線的な配置を示し、構築時期も火山灰降下直後であることから、一本の道路として機能していたものと推測した。路面の状況は、SM1823が溝掘り込みのち盛土、SM1818が礫敷き面、SM1821が掘り込みをもたないタイ

プと、三者とも異なるが、これは当時の地盤状況の差に基づくと想定される。SM1823は、泥炭層が形成される沖積地面にあたることから、粘土による盛土路面とした。SM1818とSM1821は、丘陵地と沖積面との境界線上に位置することから、前者は礫敷きとし、後者は掘り込みや礫敷きを伴わない路面(盛土の可能性はある)とした。路面状況の差はあるものの、道路跡周辺の土層の状況は、明らかに自然堆積を示していることから、路面幅２～３ｍという狭いエリアを歩行用の通路として規定し、それが厳守されていたことをも意味する。

今回発見された道路跡の西側には、政庁北側の第60次調査区(昭和60年調査)と第89次調査区(平成３年調査)が位置する。ここでは、SD767溝跡とSD774溝跡等が検出されている。両溝跡は幅20㎝前後、深さ10～20㎝であり、東西方向に伸びる。この延長上に今回の道路跡が位置することから、遡って見ると、過去に調査した溝とは、道路側溝であった可能性も考えられよう。加えて、第130次調査区では、政庁からホイド清水方向に伸びる東西方向の道路跡も確認されている。以上の状況を総合すれば、政庁北側の長森丘陵北縁辺部には、路面状況は異なるものの、火山灰降下後の時期には東西道路が形成され、人びとの往来があったと推測されるに至った(第94図参照)。

②道路脇での地鎮などの祭祀行為

Ｂ区では推定東西道路の北脇で、粘土貼り面が検出された。作業自体は丁寧とは言えないが、他所から持ち込んだ粘土を利用して道路脇の地表面に貼り付け(盛土)ている。粘土面には少なくとも３箇所に小穴が穿たれ、１箇所(Ｐ１)では土器を埋納する行為がなされていた。他２箇所では掘られた小穴に粘土が詰められていることから、Ｐ１とは異なる祭祀が行われていた可能性もある。また粘土面の周辺では、土器類が比較的多く分布することから、粘土面を祓場として、遺物を撒くような行為がなされていたのかもしれない。

粘土面と道路の位置や時期(火山灰降下直後)を考慮すると、一連の行為とは、火山灰降下後に新設された道路脇での地鎮等の祭祀と想定されよう。火山灰降下直後の祭祀行為については、払田柵の祭祀場である美郷町厨川谷地遺跡が知られるが、払田柵跡内でも小規模ながら遺構・遺物が散見される。道路脇の事例では、第127次調査区のSM1717道路脇の火山灰層直上でも土師器坏が正立して発見されている。また、第122次調査区では、SK1574土坑内に堆積した火山灰層の直上に土師器坏を正立状態で埋められているのが発見された。土器の底面には火山灰が付着していることから、土坑に火山灰が堆積した直後に埋納したことが判明している。

③火山灰降下前段階の様相

東西道路跡やこれに関連する遺構群は、火山灰降下後に新設された。火山灰層を除去して下部を掘り下げた結果、溝跡(SD1822)や柱穴がいくらか認められるものの、総じて遺構は少ない。これらの時期の遺物も皆無に等しく、創建時から10世紀初頭段階の“場の利用”は極めて低いと言わざるを得ない。

註

１　上田三平1938「払田柵阯」『史蹟精査報告』第３号

　　藤井東一1930「払田柵」『秋田考古会会誌』第２巻４号

２　宇野隆夫1989「井戸考」『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』真陽社

第４節　出土遺物

長森地区から出土した遺物のうち、特徴的な事例を抽出して紹介する。なお、緑釉・灰釉陶器の産地・窯式は、愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏による。

１　越州窯系青磁

越州窯系青磁は、政庁西側地区の北側斜面中位～下位部から計６点出土している。

①　第120次Ａ２区の斜面中位表土層から１点出土。山本信夫氏の実見によると、坏Ｉ1-2か皿Ｉbで５輪花の可能性が高いとのことであった。時期的には９世紀第３四半期から10世紀中頃となるようである。

②　第122次Ｃ区の斜面下位側SK1492Ｂから皿１点出土。SK1492Ｂは土取り穴と見られ、火山灰降下前に埋められている。

③　第135次Ｊ区の斜面中位遺物包含層から小片４点出土。

秋田県内における越州窯系青磁の出土例は次のとおり。美郷町内村遺跡で皿１点[1]、三種町小林遺跡で椀１点[2]、にかほ市立沢遺跡で椀２点[3]、秋田市秋田城跡第90次調査区で壺１点[4] である。第90次調査区は秋田城外南側の大小路地区である。越州窯系青磁は、「官衙など国家と深いつながりのある遺跡からしか出土しない」[5] という貴重な焼物とされる。なお、青磁以外の古代の舶来遺物には秋田城跡出土の白磁２点(托、椀)がある。

２　緑釉陶器

払田柵跡内出土の緑釉陶器は、次の８調査区36点から出土している。

①　政庁西側地区

・第120次Ａ２区の斜面中位遺物包含層から皿・段皿・小椀・椀の４点出土。いずれも猿投窯Ｋ-90号窯式。

・第122次Ｂ・Ｃ区の斜面上位緩斜面部から下位にかけて18点出土。内訳は斜面上位SD1530から蓋と花文香炉蓋２点、斜面中位SK1521から椀・皿４点、斜面下位SK1583から皿１点出土。遺物包含層からは段皿・稜椀・輪花椀・椀など11点。18点中３点が京都洛西窯で、他は猿投窯Ｋ-90号窯式。

・第135次Ｊ区から６点出土。内訳は斜面中位SK1893Ａ最上層から２点、斜面下位SK1858から１点、その他包含層から３点出土。

②　外郭西門東側地区

・第119次Ｈ２区　整地層から手付瓶１個体(４点)出土。猿投窯Ｋ-90号窯式の古式の様相を示し、９世紀中～後半にかけての時期である。

③　長森北方地区

・第75次調査区表土層内より深椀の口縁部小破片が出土。東濃産大原２号窯式。同調査区は、政庁外北西部で第130次調査区の東側隣接地にあたる。

④　その他の地区

・第２次調査区では外郭北門に伴う盛土整地層内より小椀の底部片が出土。京都洛西窯の製品と推定され、年代は９世紀後半にあたる。

・第47次調査区の第１層中(政庁域西前殿脇)から皿が１個体出土。猿投窯。

・第128次調査区から小片１点。SL1736河川跡上位撹乱層内出土。同調査区は外柵内南東部沖積地面にあたる。

県内の緑釉陶器出土例は次のとおり。秋田城跡で22点(椀・皿)、能代市上の山Ⅱ遺跡で輪花椀・椀３点(近江系)[6]、能代市鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡で椀６点(東濃産大原２号窯式３点、近江系３点)[7]、美郷町内村遺跡で椀３点・皿１点(椀：尾北産折戸53号窯式、皿：京都洛西窯)[8]、美郷町川端山Ⅲ遺跡で椀１点[9]、大仙市小鳥田Ⅰ遺跡で椀２点(近江系)[10]、にかほ市立沢遺跡で椀１点、にかほ市前田表Ⅱ遺跡で椀１点[11] 出土している。

３　灰釉陶器

払田柵跡内出土の灰釉陶器は、次の９調査区から28点出土している。

①政庁西側地区

・第120次Ａ１・２区の遺物包含層から３点出土。内訳は灰釉皿・長頸壺・平瓶各１点であり、猿投窯Ｋ-14号窯式。

・第122次Ｂ・Ｃ区斜面上位緩斜面部から中位にかけて５点出土。内訳は、斜面中位のSKI1537Ａから瓶２点、同SD1489内から長頸瓶、遺物包含層から長頸瓶と瓶各１点、猿投窯Ｋ-14号とＫ-90号窯式。その他に無釉の陶器椀が斜面上位SKI1490Ａから出土。産地不詳。

・第135次Ｊ区から７点出土。内訳は斜面中位SKI1892Ａ上層から小片１点、遺物包含層から６点。

②長森北方地区

・第127次調査区から長頸壺１点出土。

・第130次調査区から椀１点出土、猿投窯Ｋ-90号窯式。

③その他の地区

・第35次調査(政庁域内北東部)で長頸瓶破片６点(同一個体か)出土。尾北産Ｋ-90号窯式。

・第94次調査(外郭南門東北地区)で長頸瓶破片２点出土。東濃産光ケ丘１号窯式。

・第94次調査(外郭南門南西地区)でSD1041から無台の段皿１点出土。東濃産虎渓山１号窯式。同地区遺物包含層(十和田ａ火山灰下層)より椀１個体出土。東濃産光ケ丘１号窯式。

・第125次調査(真山丘陵部)６トレンチから１点出土。猿投窯Ｋ-14号窯式。

県内の灰釉陶器出土例は次のとおり。秋田城跡で61点(皿、段皿、三足盤、椀、蓋、壺瓶類)、男鹿市小谷地遺跡で椀１点(底部に「福」の墨書)[12]、横手市江原嶋１遺跡で約10点(同一個体の広口壺か)[13]。産地は不明ながら、猿投窯との比較から９世紀前半代のものと推定。三種町小林遺跡で椀１点(東濃産虎渓山１号窯式)、由利本荘市樋ノ口遺跡で皿２点、壺１点(猿投窯Ｋ-90号窯式)[14]。由利本荘市猿田遺跡で壺１点[15]、大仙市小鳥田遺跡で長頸壺２点(猿投窯Ｋ-90号窯式)である。

４　須恵器壺Ｇ

その形態が一輪挿しの花瓶に類似する須恵器壺Ｇは、高台はなく底部に回転糸切り痕跡を残す特徴をもつ。生産地は静岡県内２箇所の窯であり、出土地は静岡県内と平城京・長岡京・平安京に集中する。時期は８世紀後半から９世紀初頭に限られる。器の用途は、堅魚の煮汁運搬容器説、兵士の携帯用水筒説、仏具としての花瓶説などが示されている[16]。

払田柵跡では、外郭西門東側地区の第119次Ｈ１区SKI1321Ｄの３層より１個体(胴部～底部にかけての破片、第72図18)が出土した。３層は十和田ａ火山灰層より上位に位置する。また、政庁西側地区北側斜面上位緩斜面部の第122次Ｃ区SKI1484Ａ出土例(第55図21)も壺Ｇであった可能性がある。さらに、外柵南門北側地区の第10次調査遺物包含層から２個体の出土が報告されている。

秋田県内では、他に秋田城跡から４個体出土している。また、宮城県では20点以上あり[17]、栗原市伊治城跡、多賀城市市川橋遺跡・新田遺跡・山王遺跡、加美町壇の腰遺跡・東山遺跡などで出土例がある。市川橋遺跡は多賀城跡に隣接する大集落であり、南北大路・東西大路等で区画された古代の町並みが姿を現したことで知られる。この遺跡からだけでも15点以上の出土である。

以上のように壺Ｇの出土地は、全て城柵・官衙あるいはこれに関連する遺跡に限られる。

５　「出羽」箆書土器

外郭西門東側地区の第119次Ｈ２区整地層より「出羽□□□／郡□男賀／凡酒坏」(／は改行)の箆書須恵器坏が出土した(第73図２)。４片の接合個体であり、他破片は見つけることができなかった。三行の文字の解釈については、調査指導委員である新野直吉氏の見解を得ているので紹介する。

「古代出羽国(秋田)郡のそれなりの地位にある地方官人で男賀(鹿)氏を氏の称とする人の酒坏(盃)を初めから予定して造られた土器」である。

なお「凡」については、「おおし」「おおよそ〔凡・大凡〕」等の用例から「大」として次の文字と合わせ「大酒坏」と解しておきたい。

墨書・箆書の類による「出羽」の文字は、秋田・山形県域を含めて管見の限りでは初出と思われる。ただ、漆紙文書では秋田城跡に出土例がある。第54次調査出土の第９号文書には、紙継ぎ目裏書として「出羽国出羽郡井上□□□□天平六年・・・」と記されている。一方、「酒坏」の文字は墨書資料として秋田城跡第84次調査区で出土例がある[18]。

６　火山灰降下後の土器群の様相

払田柵跡出土の土器類は、他の城柵官衙遺跡と比較して非常に少ないと言わざるを得ない。特に時期推定が可能な土器のうち、火山灰降下後から終末期に属する資料は、出土地が政庁域、外郭南門南西地区、ホイド清水周辺域に限定される。本項目では当該時期の土師器坏類を秋田城跡との比較[19]から整理してみたい(第95図)。

【火山灰降下後の土器群】10世紀前半(915年以降)段階

払田柵跡第94次の外郭南門南西地区第４層出土の土師器を掲げた。第４層は火山灰直上堆積層である。坏(１・２)は前段階(９世紀後半～10世紀初頭)と法量・形態に大きな差は認められない。その一方で、台(脚)部のやや長い台付坏・皿(３)が新たに組成に加わる。秋田城跡では同時期に足高高台皿(10)が出現する。８～10は、第60次調査SK1270土器溜め出土である。

【政庁Ⅳ期の土器】10世紀前半(917年＋α)～中頃段階

払田柵跡政庁第Ⅳ期正殿(SB111Ｃ)の南廂柱列(SA114)柱穴掘形出土の土器を掲げた。４は、底部のみの資料であるが、柱状高台タイプの皿となるようである。同様の事例は、秋田城跡第24次調査SI370出土にも認められる(11・12)。柱状高台の坏・皿類は秋田城跡ではこの時期から組成に加わる。第24次調査区は南側外郭線部とその南側(城外)であり、SI370は外郭区画施設が廃絶後の竪穴である。なお、917年＋αは政庁第Ⅳ期の成立時期であり、年輪年代測定から導かれた数値である。

【政庁Ｖ期の土器】10世紀中頃段階

払田柵跡政庁第Ｖ期正殿(SB112)柱穴掘形出土の土器を掲げた。５は、口径9.0㎝、器高2.5㎝の小型坏である。秋田城跡でも第28次調査SX478段階において小型坏が登場する。10世紀中頃は、政庁Ｖ期の設立時期とされる。

【終末期の土器】10世紀後半段階

払田柵跡第130次SD1769出土の土器を掲げた。６は小型坏であり、法量は５に近似するものの、５と比較して底部からの立ち上がりが不明瞭であり、作り自体も稚拙である。同時期とみられる秋田城跡の資料は、第24次SI369出土の土器(15～18)に求められる。

７は、第94次外郭南門南西部で検出された掘立柱建物跡(SB1060Ａ)を取り囲む溝跡内(SD1041)出土の灰釉陶器段皿である。東濃産虎渓山１号窯式。掘立柱建物跡は、２×７間の南北棟で火山灰降下前から終末期にかけて６時期の変遷をたどることができる。

註

1　島田祐悦・高橋学2007「内村遺跡」『横手市史資料編　考古』　なお本資料は当初、湯沢市(旧雄勝町)鵜沼城跡出土として報告(橿原考古学研究所・土橋理子氏が実見、橿原考古学研究所編1993『貿易陶磁』臨川書店)がされていたが、払田柵跡出土を受けて、鵜沼城跡出土とされる資料を再度見直したところ、注記(遺跡略記号と出土年月日)から内村遺跡出土と判明した経緯をもつ。

2　秋田県教育委員会2004『小林遺跡Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第376集

3　仁賀保町教育委員会1987『立沢遺跡発掘調査報告』報告書には詳細な記載なし、高橋学が実見。

4　秋田市教育委員会2007「第90次調査報告」『秋田城跡調査事務所年報2006』以下の白磁・緑釉陶器・灰釉陶器・壺Ｇの点数は、秋田城跡調査事務所・伊藤武士氏の教示による(平成20年12月現在)。

5　八重樫忠郎2000「東日本における青磁の出現時期」『貿易陶磁研究』第20号

6　秋田県教育委員会1986『上の山Ⅱ遺跡第２次発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第137集

7　秋田県教育委員会2007『鴨巣館跡・鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第422集

8　秋田県教育委員会1981『内村遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第82集

9　美郷町教育委員会2008『町内遺跡詳細分布調査報告書』美郷町埋蔵文化財調査報告書第７集

10　秋田県教育委員会2005『小鳥田Ⅰ遺跡』秋田県文化財調査報告書第385集

11　前田表Ⅱ遺跡は2008年に秋田県埋蔵文化財センターが調査を実施。遺構外より緑釉陶器椀１点出土。

12　三嶋隆儀・庄内昭男1987「男鹿市小谷地遺跡の墨書土器」『秋田県立博物館研究報告』第12号

13　秋田県教育委員会2001『江原嶋１遺跡』秋田県文化財調査報告書第310集

14　秋田県教育委員会2007『樋ノ口遺跡・芋種坂Ⅲ遺跡』秋田県文化財調査報告書第424集

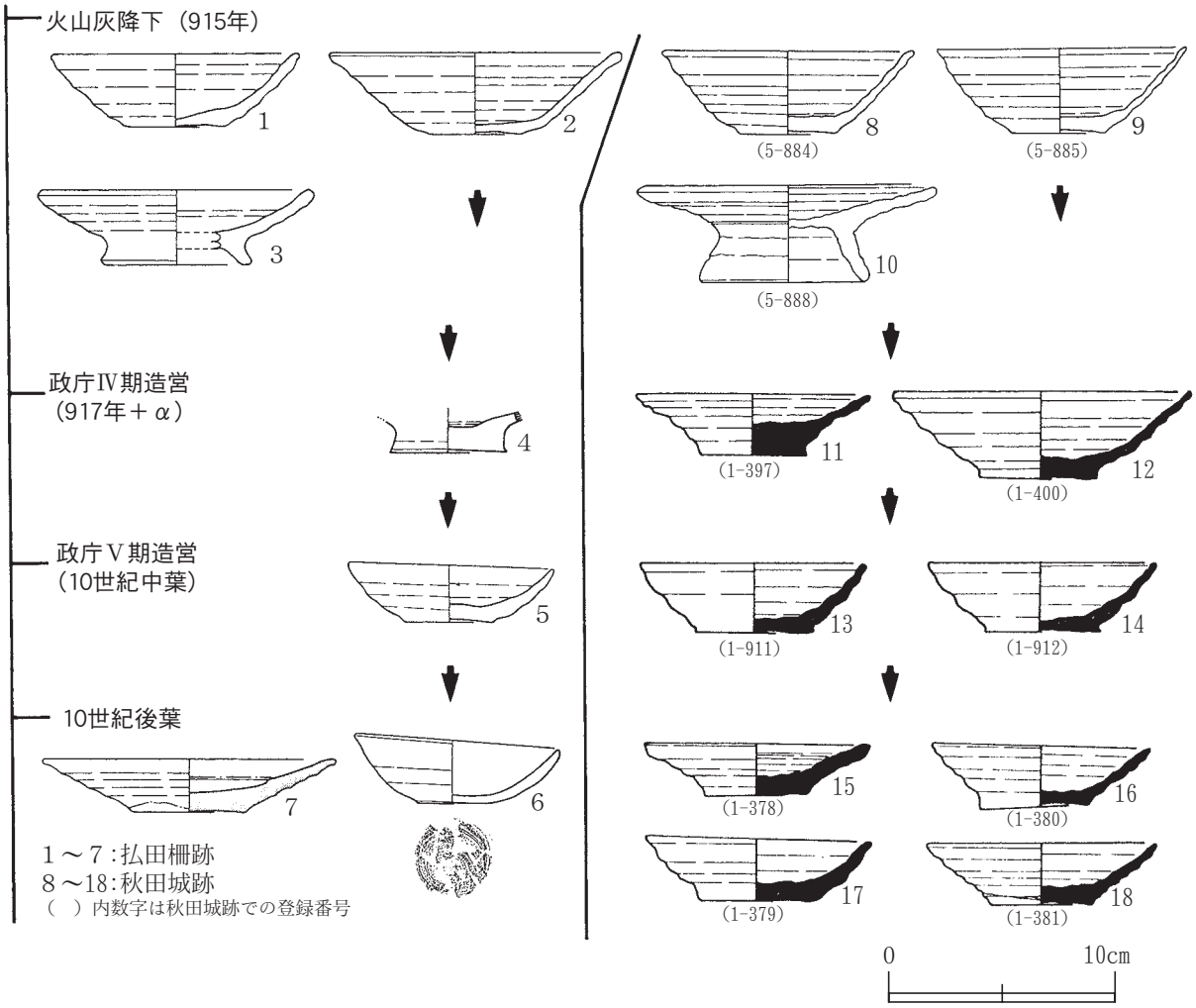
15　西目町教育委員会1994『猿田遺跡－遺構確認調査報告書－』

16　佐野五十三1999「壺Ｇの成立と伝播」『静岡県考古学研究』31

17　宮城県内の事例は、宮城県多賀城跡調査研究所・吉野武氏の教示による(平成20年12月現在)。

18　第84次調査区は、秋田城内の東側にあたる大畑地区東部である。秋田市教育委員会2005「第84次調査報告」『秋田城跡調査事務所年報2004』

19　伊藤武士2008「秋田城跡における10世紀・11世紀の土器様相－清原氏の時代への土器様相の変遷－」『清原氏から藤原氏へ』平成20年度秋田考古学協会研究会資料集



第95図　火山灰降下後の土器群の変遷

第５節　外郭区画施設と門・櫓状建物跡

本節は、事務所事業のひとつである「調査成果の普及と関係活動」の一環として行った払田柵跡の外郭線上に設置された櫓状建物及び材木塀について調査成果を踏まえて再検討を行った報告である。検討するに至った経緯は次のとおりである。

史跡の管理団体である大仙市は、平成17～18年にかけて『史跡払田柵跡第３次環境整備基本計画』[1]の基幹をなす「外郭北東部環境整備復元検討資料」を作成していた。作成資料には、外郭東門北西側における、創建段階の築地塀・材木塀と櫓状建物の立体復元が盛り込まれている。この復元については、建築学的見地から、永井規男氏(建物設計監修者；払田柵跡環境整備審議会副会長)と、秋山邦雄氏(復元検討資料作成の委託業務受託者；歴史環境計画研究所長)が検討をしているところである。しかし、櫓状建物跡の形態・規模と時期変遷及び材木塀の上部構造や角材の連結方法等については、従来の発掘調査でも十分に明らかにされていないため、大仙市を通じて、その検討が求められていたものであった。当調査事務所では、本案件について検討を加えた結果、次によりその要約と経過及び結果を報告する。

１　要約

(１)外郭東門北西部に設置された創建段階〔外郭線Ａ期〕の櫓状建物は、一方の桁行柱列が区画施設である築地塀を利用する構造を採る。いわば、一列の桁行柱が築地塀上端に乗りかかる形態を示す。また同様の構造を採る櫓状建物は、外郭線Ａ期の外郭西門・南門の両脇部にも認められる。

(２)外郭東・西門脇の外郭線Ａ期の櫓状建物は、２間×２間の建物であり、設置された箇所、規模、柱間がそれぞれ酷似する。このことは、両者が同一の設計のもとに造られたことを裏付けるものである。

(３)外郭南門脇の弧状を描く区画施設(石塁)は、外郭北門脇の弧状をなす施設(材木塀)と全く同じライン上にのる。このことは、南門・北門が同一の設計のもとに造られたと判断されると共に、北門脇のＡ期櫓状建物(柱穴掘形)が、区画施設の内側に収まることをもって、南門脇の櫓状建物も石塁上に収まる形態であったと類推される。また各門脇にこのような形態の櫓状建物を設置させた起点には、正門である南門脇に石塁という強固な構造物を採用したことと期を一にしていると考えられる。

(４)創建段階各門の櫓状建物が、外郭線からはみ出さない構造を採ることは、この時期には、外郭線の外側に外柵という区画施設が存在していたからであり、外柵が機能を停止したＢ期以降は全ての櫓状建物が外郭線を跨ぐ構造に移行することからもその妥当性があろう。

(５)材木塀の角材(全長4.65m、地上高約3.6m)は、上端から下に約1.2～1.35mの位置に幅0.24～0.3m程の貫木を通すことで連結させており、上端は平坦に加工されているのみである。また、弧状を描く北門部周辺での観察により、材木塀角材は３本を一組として連結させているように見える。貫木そのものの確認例はないが、角材幅３～４本程度の長さをもつ板材を貫木とし、楔で補強しながら隣りあう角材組と接続させることで、弧状部の連結を可能にしたと推測される。

２　櫓状建物跡の再検討作業の経過と結果

外郭線上に設置された櫓状建物については、『払田柵跡Ⅱ』において防御的施設としての機能に加え「外郭線全体の荘厳化、装飾的効果も大きい」[2] とされ、「櫓状建物・柱列」の項目では次のような記述がある。

外郭線には櫓状建物と柱列が伴う。(中略)・・対応する柱が検出されないので、これらは櫓状建物とはせずに柱列とみなした。しかし、築地塀の存続期間中の場合、対応する柱列が築地塀に乗りかかる形態の建物である可能性はあろう。このことは外郭南門の東西石塁に伴う、ＳＡ８００・８０１、ＳＡ８７２・８７３や外郭東門西側のＳＡ８４・８５も同じである。(『払田柵跡Ⅱ』ｐ２２２)

ここでは、「築地塀に乗りかかる形態」の櫓状建物の存在を示唆したものであったが、結論的には、「柱列」としての記述と挿図が示されるに留まっていた。それでは、復元の対象となっている外郭東門北西部の様相から検討を開始する。

(１)外郭東門北西部の櫓状建物跡(第96図)

東門北側の外郭線上には、材木塀から築地塀に切り替わる接点部(築地塀端部)に櫓状建物跡４棟と柱列４条の存在が報告されている(第96図上)。本箇所を調査時の原図(第９・61・68次調査)を基に、柱穴掘形・柱痕の配置、柱間距離、重複、土層注記等を再検討したところ、次の５棟(時期)の建物が存在していたと類推されるに至った。

それは、(旧)SB85建物跡→SB84建物跡→SB79建物跡→SB80Ａ建物跡→SB80Ｂ建物跡(新)である。なお、『払田柵跡Ⅱ』本文中〔p33〕には、SB79Ａ・Ｂとして２棟の建物跡を記載しているが、図を含め２棟に分離した裏付け資料がなく、ここではSB79の１棟として表示した。

①外郭線Ａ期の櫓状建物跡

５棟のうち、SB85・84は確認された柱列としては、各２条の検出であるが、北側の柱筋を築地塀列に位置させることで、梁行２間の建物に復元される。すなわちSB85は、柱列としていたSA85とSA78Ａの２条であり、SB84は、同じくSA84とSA78Ｂの２条の柱列からなる。一方、検出された４条の柱列のうち、SA85及びSA84はそれぞれ対になるSA78Ａ及びSA78Ｂの柱穴掘形に比べ大きい。SA85柱穴掘形は、一辺が約1.3～1.5ｍの隅丸方形を示し、SA84は径が1.2～1.5ｍ程の略円形を呈する〔柱痕は径0.3～0.35ｍ〕。対となるSA78Ａは、一辺が約0.5～0.8ｍの隅丸方形であり、SA78Ｂは、径0.9～1.1ｍ程の略円形である。掘形規模の小さい柱列とは、２間×２間に復元させた建物の中柱列となるものである(第97図上段参照)。

以上のことから、SB85は創建時の外郭東門北側の櫓状建物であり、後続するSB84も築地が区画施設として存在していた段階(外郭線Ａ期後半)の櫓状建物と判断されるのである。

なお、Ａ期段階における築地と東門北東隅柱を結ぶ材木塀は、SD812と推測した。SD812は平面プランとしての確認はできなかったものの、溝の幅は約80㎝、溝内には幅20㎝程の角材痕跡が残るものである。本遺構をＡ期段階の材木塀跡とした根拠は、角材痕跡を残すSD77材木塀跡直下で検出されたことと、東門南東隅柱から南東方向の築地に連なる最も古い材木塀跡であるSD813の埋土(角材裏込め土)と酷似している点による[3]。

②外郭線Ｂ期以降の櫓状建物跡

次段階以降の櫓状建物は、築地塀崩壊後(外郭線Ｂ～Ｄ期)の区画施設である材木塀列を跨ぐ構造物とされる。この見解については、既に報告されているが、再検討作業の過程で、築地塀崩壊後の土塁状の高まり(SF75築地跡の遺存する高さは、1.15m)を考慮する必要が生じた。それは外郭線Ｂ期には、材木塀が外郭施設となるが、かつての築地塀は整地されて平坦化されたわけではなく、土塁状に残存していることに注意が払われていなかったことによる。櫓状建物跡と土塁状の高まり、材木塀の位置関係を整理すると、次のような想定が可能である。

SB79段階では、土塁状高まりの北端に沿うように材木塀(SD76)が建てられる(第97図中段)。材木塀の配置は、土塁と化した盛土が北側である外郭線の外側に崩落させないような構築意図を類推させると共に、土塁の存在を消去する目隠しとしての役割も予測される。

SB80Ａ・Ｂ段階では、土塁の中軸線上に材木塀(SD77)が配置される(第97図下段)。これは土塁状の高まり上端に材木塀が建て並べられる景観が推測される。このような構築法を採用することで、材木一本あたりの長さは前段階塀の材より短くて済むことになる。

(２)外郭西門脇の櫓状建物跡(第98図、図版12)

築地塀を利用した構造をもつ櫓状建物跡は、他の外郭門部で認められるのだろうか。次に外郭西門部の様相を検討する。

外郭西門は、外郭東門と同様に外郭線が直線的「ハ」字状に内側に入り込む位置に作られる。門と区画施設の関係は、門に築地塀が直結するのではなく、門隅柱から約12～14m間には材木塀が建てられる。既報告によると西門両脇の築地に並行するように複数の柱列が示されている。東門跡と同じように、調査時の原図(第81・85次調査)をもとに、柱穴掘形・柱痕の配置、柱間距離、重複、土層注記等を再検討したところ、柱列の一部は、創建段階の櫓状建物を構成するものと類推されるに至った。

それは、西門南側ではSB919であり(第85次調査)、西門北側ではSB901である(第81次調査)。SB919は、SA919とその西側の柱列(遺構番号なし)の２条、SB901は、SA903とSA901の２条の柱列からなる。それぞれ２棟の西側桁行の柱筋は、築地塀(SF920・855)の中軸線上に沿うように存在していたとすると、外郭東門北側の櫓状建物跡(SB85・84)と同じ２間×２間の建物としての景観が想定される。しかもこれらの建物は、設置された箇所(築地と材木塀の接点部から、約１m築地塀寄りに位置)、規模・柱間距離がそれぞれ酷似する。このことは、外郭東門と西門両脇の櫓状建物が同一計画のもとに設計・施工されたことを裏付けるものである。

(３)外郭南門・北門周辺の区画施設と櫓状建物跡

次に外郭南門部の様相を見てみる。南門は、東・西門と同様に外郭線が内側に入り込んだ位置に建設されるが、その外郭線の形状は、東・西門が直線的に「ハ」字形であるのに対し、南門は弧状に「八」字形を示す。弧状の区画施設は、北門にも認められる。また門隅柱との接続は、東・西・北門が材木塀であるのに対し、南門は石塁である(図版11)。

その一方で、南門と北門両脇の区画施設が弧状を描く点に着目すると次のような同一性が浮かび上がってくる。弧状をなす区画施設の構造物は、南門と北門では明らかに異なるものの、そのカー

ブは、ある特定の基準点から半径18ｍの円弧を描くことで、両者が同一の設計によるものと理解された。これを第99図上に示した南門部で検証してみる。なお、北門との対比の必要から同図は南を上に、すなわち門内寄り(政庁寄り)を下にして図示している。各部の呼称は、この置き方を基準として、門の右手(方向)・左手(方向)と呼ぶ。

南門右手石塁の設計は、まず門外寄りの柱列・桁行ラインを右方向に延ばし、Ａ点(右端の柱)から、18ｍの地点(Ｂ点)を選定する。次いでＢ点を中点としてＡからＣまでの弧を描く。Ｃ点の設定は、石塁と右手側に連続する築地塀との接点部にあたることからである。ＡＣ間の角度(∠ＡＢＣ)は約70°で、線分ＡＣ間の距離は21ｍとなる。相対する左手側の設計は、石塁が失われていて不明確ではあるが、まず門内寄りの柱列・桁行ラインを左方向に延ばし、Ｄ点(左端から２本目の柱)から、18ｍの地点(Ｅ点)を選定する。次いでＥ点を中点としてＤからＦまでの弧を描く。ＤＦ間の距離はＡＣ間と同じとした。

この設計図を第99図下の北門両脇の外郭線Ａ期材木塀列に当てはめてみると、図上ではぴったりと重なる。しかも線分ＢＣとＥＦの設定は、区画施設の弧状部と直線部の境界線ともなっているのである。すなわち、門とこれに取り付く弧状部(南門は石塁、北門は材木塀)、そして連続する直線部(南門は築地塀、北門は材木塀)という三者の配置は、門の位置を基準として半径18ｍ(線分ＡＢとＤＥ)、線分ＡＣ間とＤＦ間のそれぞれの距離21ｍ(あるいは∠ＡＢＣ＝∠ＡＤＥＦ≒70°)という数値をもって設計されていたと言えるであろう。

既報告に従うと、外郭南門両脇の石塁内側(北側)には複数の柱列が示されている(第99図上)。南門及び北門周辺施設が同一の設計によるとすれば、北門脇のＡ期櫓状建物が、区画施設の内側に収まることをもって、南門脇の柱列とは櫓状建物であって、これが石塁上に収まる形態であったと認められるであろう。区画施設に隣接して検出された柱列を櫓状建物の一方の桁行柱列と見なす検証作業は、外郭東門・西門でも実証済みであり、南門においても同様の手法を援用することも可能である。

また各門脇に類例のない形態の櫓状建物を設置させた起点には、正門である南門に石塁という強固な構造物を採用したことに期を一にしている。さらに論を加えるならば、創建段階の櫓状建物が、外郭線からはみ出さない構造を採ることは、この時期には、外郭線の外側に外柵という区画施設が存在していたからであり、外柵が機能を停止したＢ期以降は全ての櫓状建物が外郭線を跨ぐ構造に移行することからもその妥当性があろう。

(４)区画施設を跨がないタイプの櫓状建物跡の類例(第103図)

払田柵跡で類推した区画施設を跨がないタイプ(区画施設の内側に近接する、あるいは乗りかかる)の櫓状建物跡は、他の城柵遺跡で認められるのであろうか。管見では、秋田城跡(秋田市)、多賀城跡(多賀城市)、郡山遺跡(仙台市)、宮沢遺跡(大崎市)、壇の越遺跡(宮城県加美町)、桃生城跡(石巻市《旧河北町・桃生町》)で可能性の高い事例を見いだすことができた。

検出地区は、秋田城跡では外郭線東辺北端・第23次調査区[4]。多賀城跡では外郭線西辺中央・第10次調査区[5]、東辺中央・第55次調査区[6]、東辺南端・第24次調査区[7・8]。郡山遺跡ではⅡ期官衙の外郭南辺東側・第74次調査区[9]、宮沢遺跡では愛宕山地区・外郭線西辺[10]、壇の越遺跡では北西から南東方向に延びる築地塀跡(一部材木塀跡)に沿った19・26・34区など[11]、桃生城跡では外郭線北

辺・第１次調査区[12] と城内の区画線・第９次調査区[13] の２箇所である。建物に近接する区画施設とは、宮沢遺跡・壇の越遺跡・桃生城跡が築地塀(桃生城跡第１次は土塁)である他は、材木塀である[14]。建物の構築時期は、秋田城跡が９世紀初頭、多賀城跡では第55次調査区が８世紀代、第24次調査区が９世紀初頭、第10次調査区が９世紀代、郡山遺跡は７世紀末～８世紀初頭、壇の越遺跡は９世紀代、桃生城跡第９次調査区が８世紀後半代であるが、宮沢遺跡は時期不明とされる。

３　材木塀跡の再検討作業の経過と結果

外柵(創建期＝外郭線Ａ期相当期のみ)及び外郭線(Ａ期は北側低地部のみ、Ｂ期以降は全域)の区画施設として利用された材木塀角材については、従来までの調査成果に基づけば、布掘り内に残された遺材のみの情報しかなかった[15]。それは、遺存部材の加工痕跡の観察、角材の地下に埋設された平均の深さが約１ｍであったこと、角材列の下端面には高低差があること、外郭線では各期(Ａ～Ｄ期)における角材の樹種・法量の違いが報告されていた[16] 程度であった。ところが、外郭北門周辺の低地部を対象とした第107次調査(平成８年)において、木道に転用されていた材木塀角材が上下端を遺したまま検出されたことを端緒として[17]、次年度の第112次調査を含めた複数の検出角材の観察から[18]、復元不能と見られていた材木塀の上部構造及び角材の結束方法が推測されるに至ったのである。

第107次調査で検出された上下端の遺る角材は、SX1190木道に転用されていたものである(第100図ａ材、第102図左)。SX1190は外郭線Ｄ期とされることから、角材が材木塀として使用されていたのは、Ｃ期と見られる。第102図の材は、全長が4.65ｍ、幅0.28ｍ、最大厚0.2ｍである。上下端面は平坦に加工され(現状では上端面の大部分が欠落)、両面の直下にはそれぞれ目途穴が穿たれている。上端から下に1.35ｍの箇所には、幅0.3ｍの貫穴が認められる。貫穴の奥行き(貫木の厚さ)は、材の欠損により不明確ではあるが、６～８㎝程と推定される。なお貫穴部には、「山本」の刻字が確認された。両端の遺る材は、これ１本のみの確認ではあるが、上端から貫穴部が認められる材は、もう２本見つかっている(第100図ｂ・ｄ材)。ｂ材はａ材の南西側に接続するSX1190木道に転用され、またｄ材はSX1180木道に転用されていた。SX1180は、外郭線Ｃ期の木道とされることから、本材が材木塀として使用されていたのは、Ｂ期の可能性が高い。ｂ材は、残存長3.85ｍ、貫穴の位置とその幅はａ材と全く同じである。ｄ材は残存長4.5ｍ、上端から1.2ｍ下には幅0.3ｍの貫穴がある。

その他の材には、上端は遺存してはいないものの、貫穴が観察される材も複数存在する(第100図ｃ材など)。外郭線Ｂ・Ｃ期とされる材の貫穴は上記例を含め、幅28～30㎝程であるが、Ｄ期とされる角材は、幅24㎝程度のものも見られる(第99図下のｅ材)。

以上のように数少ない事例ではあるが、材木塀上部の構造が少しずつ明確になってきた。すなわちそれぞれの角材は上端から1.2～1.35ｍ下に貫木を通し、上端面を平坦に加工していたと類推される。端面上に傘木状の構造物が付加されていたか否かは全く不明である。しかし、地下部分における材の高低差は従来から認められていたが、これが上端面を揃えることと、材自体の長さのばらつきを解消させるものであったことを改めて確認できたと言える。

一方、角材の結束はどのように行われていたのであろうか。北門部周辺での観察により、少なくとも弧状部では、角材３本を一組として貫木で連結させているようにも見える(第101図、第102図右下)。貫木そのものの確認事例はないが、出土部材を検討すると、長さ120～130㎝、幅15㎝前後、幅５～６㎝程の規格性の高い板材が一定量発見されている。これを２～３本貫穴に差し込み、楔で補強しなが

ら隣あう角材組と接続させていたと推測しておきたい(第101図)。

註

1　仙北町教育委員会2004『史跡払田柵跡第３次環境整備基本計画』

2　秋田県教育委員会1999『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』払田柵跡調査事務所

3　SD812・813を創建段階の材木塀とすることは、調査時(第68次、『年報1987』)及び『払田柵跡Ⅱ』(註２文献)において既に言及されている。なおSD812という遺構名は、『年報1987』でSD835と表記していたものを、『払田柵跡Ⅱ』作成時に呼び変えたものである。

4　秋田市教育委員会1978「第23次発掘調査」『昭和52年度秋田城跡発掘調査概報』

5　宮城県多賀城跡調査研究所1985「第47次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1984』

6　宮城県多賀城跡調査研究所1989「第55次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1988』

7　宮城県多賀城跡調査研究所1975「第24次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1974』

8　なお多賀城跡では外郭線北東隅部を対象とした第17次調査において、外郭線築地の外側にのみ柱穴掘形を配置させる櫓状建物跡が検出されている(第39図)。本例は払田柵跡とは内外が逆転するが、区画施設を利用した(乗りかかる)タイプの建物であった可能性がある。

①宮城県多賀城跡調査研究所1973『多賀城跡－昭和47年度発掘調査概報－』／②古川雅清1979「東北地方古代城柵官衙の外郭施設－所謂「櫓」跡について－」『研究紀要Ⅵ』宮城県多賀城跡調査研究所

9　仙台市教育委員会1988「第74次発掘調査」『郡山遺跡Ⅷ』

10　宮城県教育委員会1980「宮沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』

11　①宮城県教育委員会2003「壇の越遺跡」『壇の越遺跡ほか』／②宮城県教育委員会2005「壇の越遺跡」『壇の越遺跡ほか』／③宮崎町教育委員会2003『壇の越遺跡Ⅳ－平成11年度発掘調査報告書－』

壇の越遺跡は、東山官衙遺跡と密接な繋がりをもつ官衙関連遺跡であり、８世紀後半から10世紀前半頃の存続時期が想定されている。特筆すべき遺構には、１町(約109ｍ)間隔で造られた東西・南北の直線道路による方割地割が検出されたことと、地割内には築地塀による区画施設が見られ、門跡や櫓跡が付設される。

12　①宮城県多賀城跡調査研究所1975『桃生城跡Ⅰ』／②宮城県多賀城跡調査研究所1976『桃生城跡Ⅱ』／③註８②文献

13　宮城県多賀城跡調査研究所2001『桃生城跡Ⅸ』

14　本稿では上部構造(築地塀や材木塀)を伴う区画施設を対象としているが、区画溝に取り付く櫓状の建物跡を見れば、大崎市名生館官衙遺跡でも複数の検出事例がある。これは小館地区政庁の北辺区画溝(８世紀後半～９世紀初頭)の内側(南側)に取り付く「コ状建物」と表記された櫓状建物跡である。

古川市教育委員会2004『名生館官衙遺跡ＸＸⅣ－平成15年度発掘調査概報－』

15　上田三平は、外郭北側低地部での調査(昭和５年)において、角材が倒壊した状況を観察し、材木塀の地上高を10ないし12尺、地下部分を加えた全長を14ないし15尺と推定していた。また、角材には貫穴があることも記録しており、材木塀の高さと構造はこの時の調査において、既に明らかにされていたのであった。

文部省1930「拂田柵阯」『史蹟精査報告　第三』／上田三平1931『指定史蹟拂田柵阯』

16　材木塀角材の法量は、外郭線北側低地部における数次の調査結果から、次のようにまとめることができる。

Ａ期：長辺27～29cm×短辺22～23cm(平均値)、最大のものは長辺46cm。材は長辺を塀の軸線に合わせて建て並べる(基本的にはＢ期以降も同じ)。

Ｂ期：長辺27～30cm×短辺26～27cm(平均値)。その一方で23×22cm規模のものも一定量存在するが、概して本期の材の大きさ、掘り込みの深さ、材と材の間隔は狭く、他期に比較して丁寧な仕事のように観察される。

Ｃ期：長辺26～27cm、短辺20cm(平均値)。Ｄ期構築時に抜き上げられ、木道に転用される例も多い。

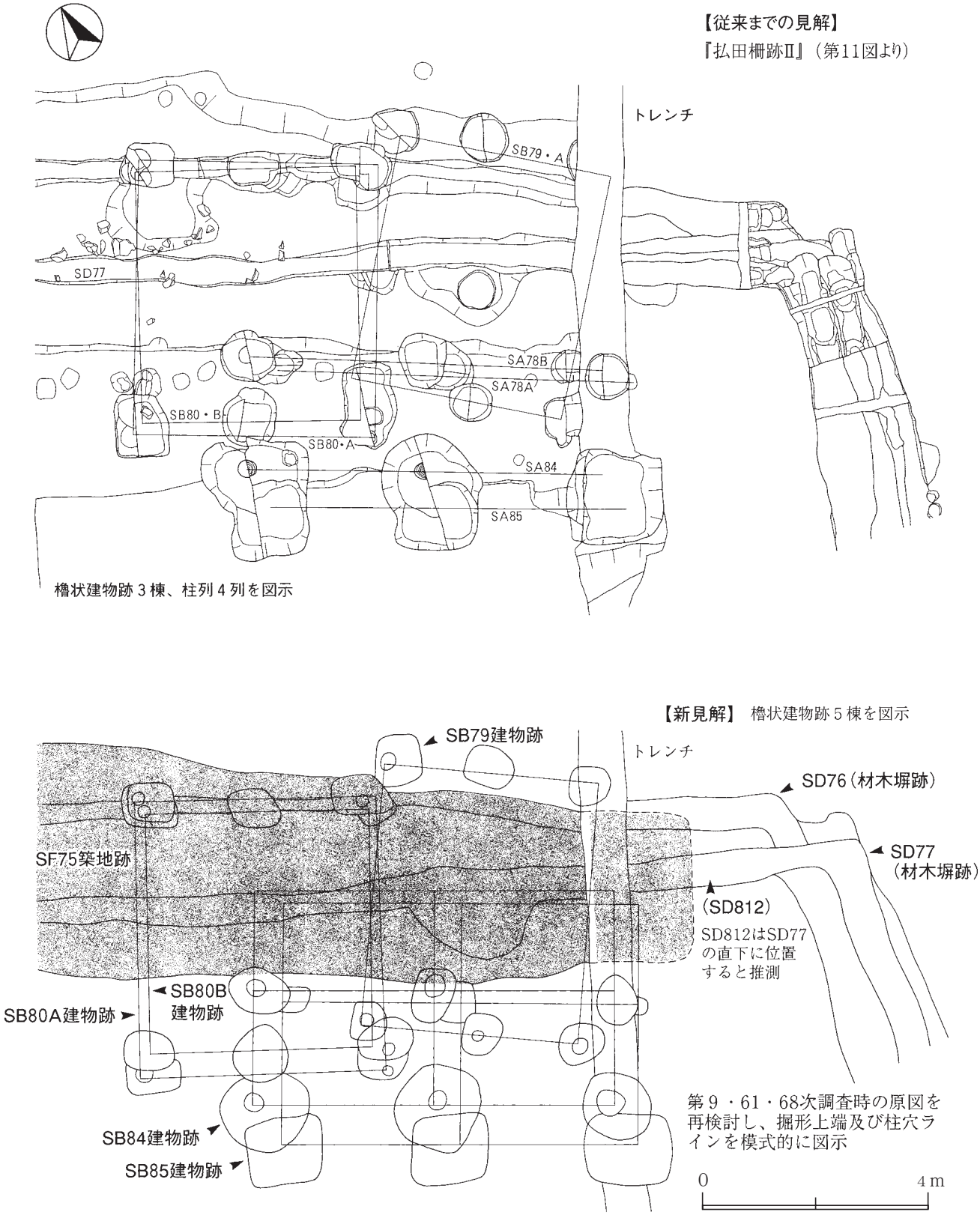
Ｄ期：長辺26～27cm、短辺20cm(平均値)。材のばらつきは、Ｃ期よりも大きい。
また材の樹種は、Ｃ期まではスギ材のみであるが、Ｄ期には広葉樹(クリ、キハダ)も一部に利用される。
さらに、それまで直線・曲線的に整然と建て並べられていた材木塀は、Ｄ期に入ると、全体的に蛇行を示す。

17　秋田県教育委員会1997「第107次調査」『払田柵跡調査事務所年報1996』

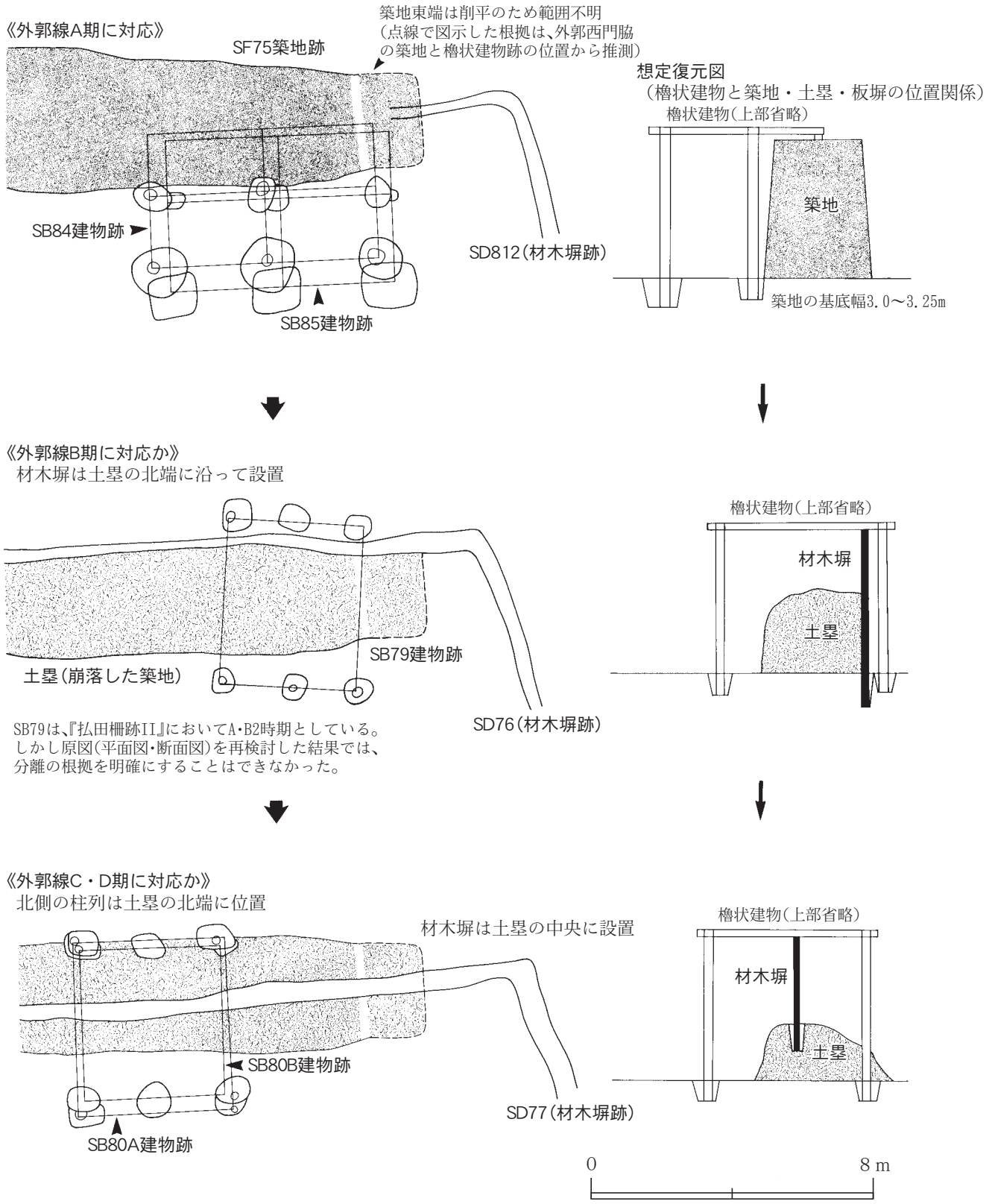
18　秋田県教育委員会1998「第112次調査」『払田柵跡調査事務所年報1997』

図版11

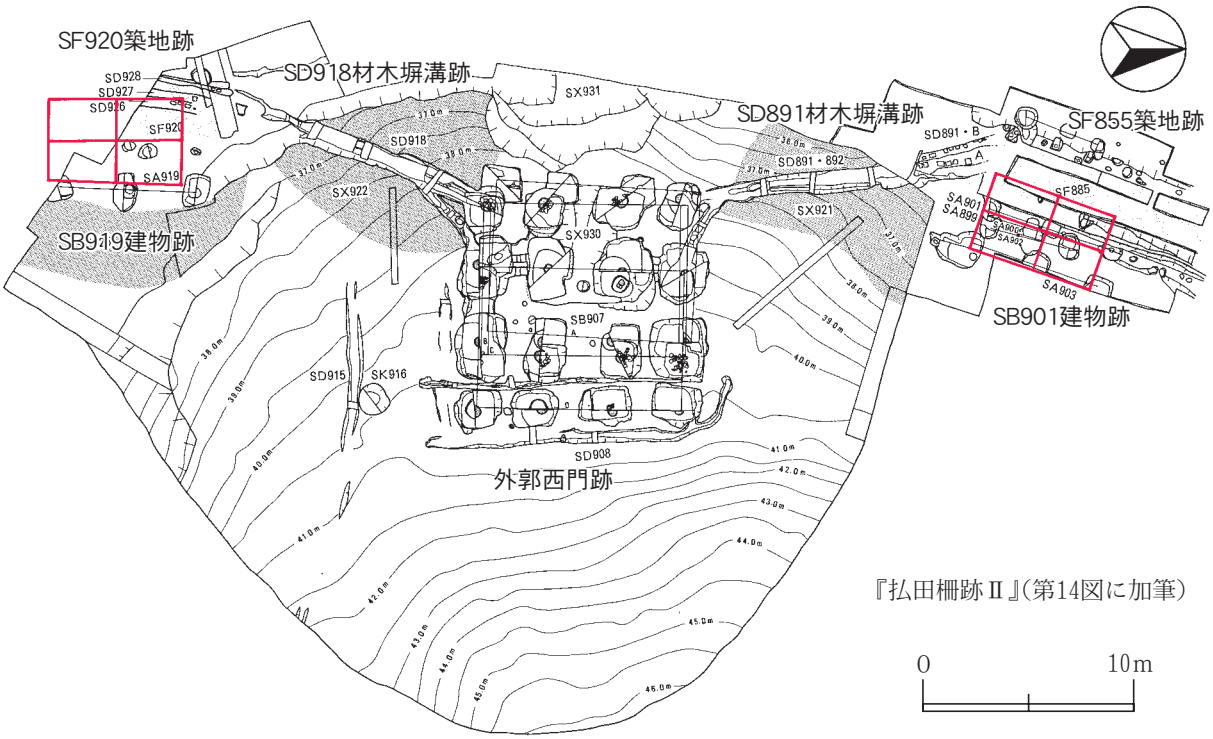
上:外郭南門西側の石塁検出状況(北→、政庁側から)第65次調査〔19860924 撮影〕
下:復元された外郭南門の門柱と石塁(北→)〔20051006 撮影〕



第96図　外郭東門北西部の櫓状建物跡



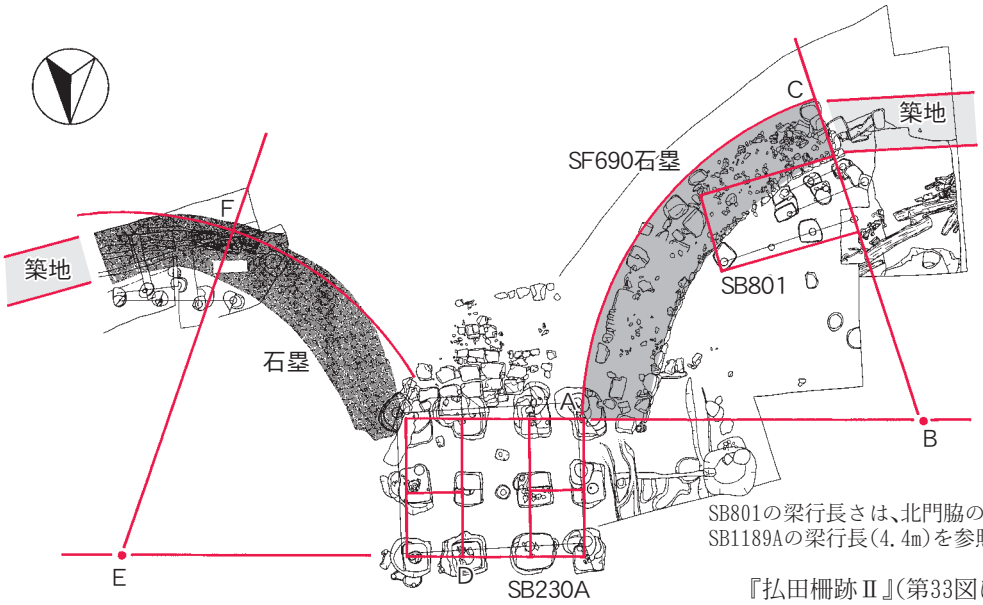
第97図　外郭東門北側の櫓状建物変遷想定図



第98図　外郭西門跡と両脇の築地・材木塀・櫓状建物跡

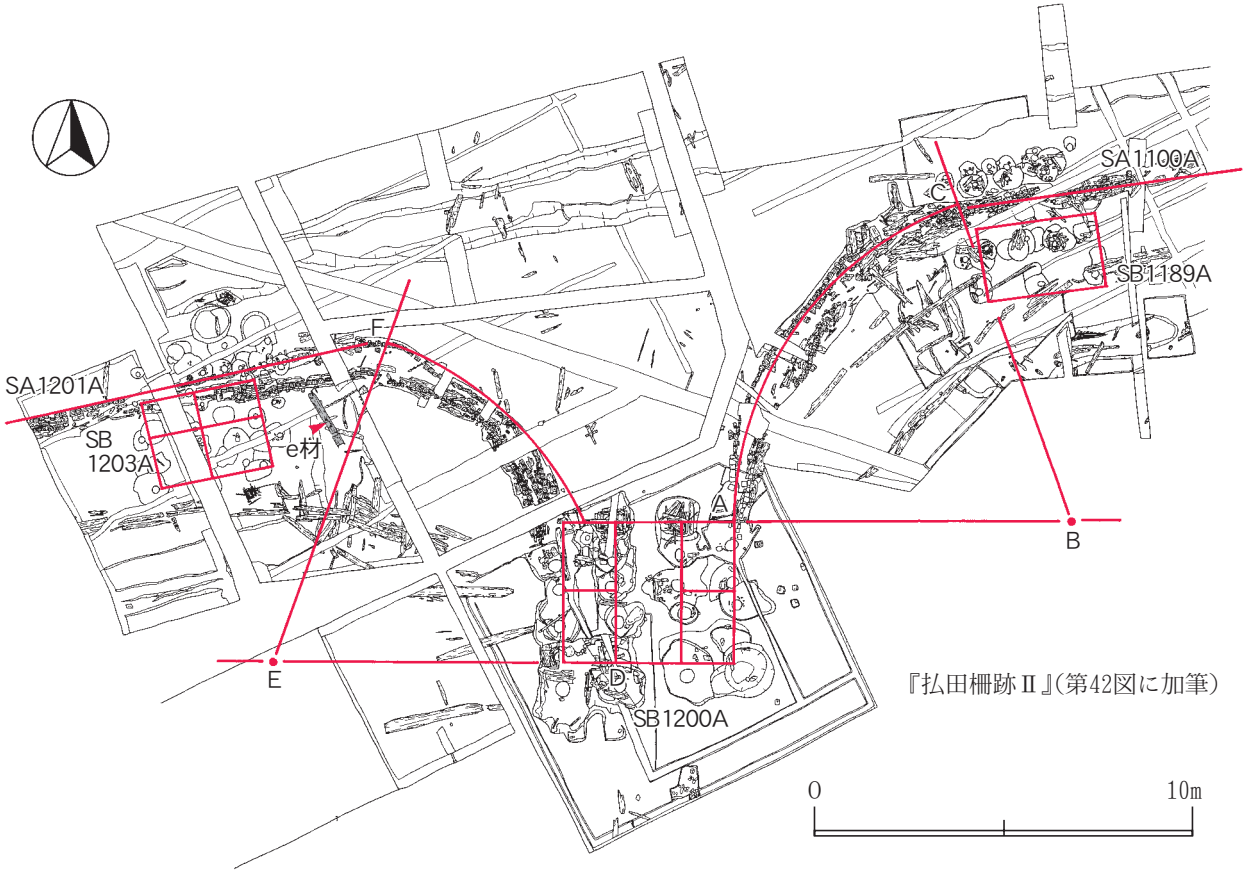
図版12

発掘された外郭西門跡(第85次調査区)(南西→、真山丘陵部東端から)〔19900917 撮影〕



SB801の梁行長さは、北門脇の櫓状建物SB1189Aの梁行長(4.4m)を参照に作図

『払田柵跡Ⅱ』(第33図に加筆)

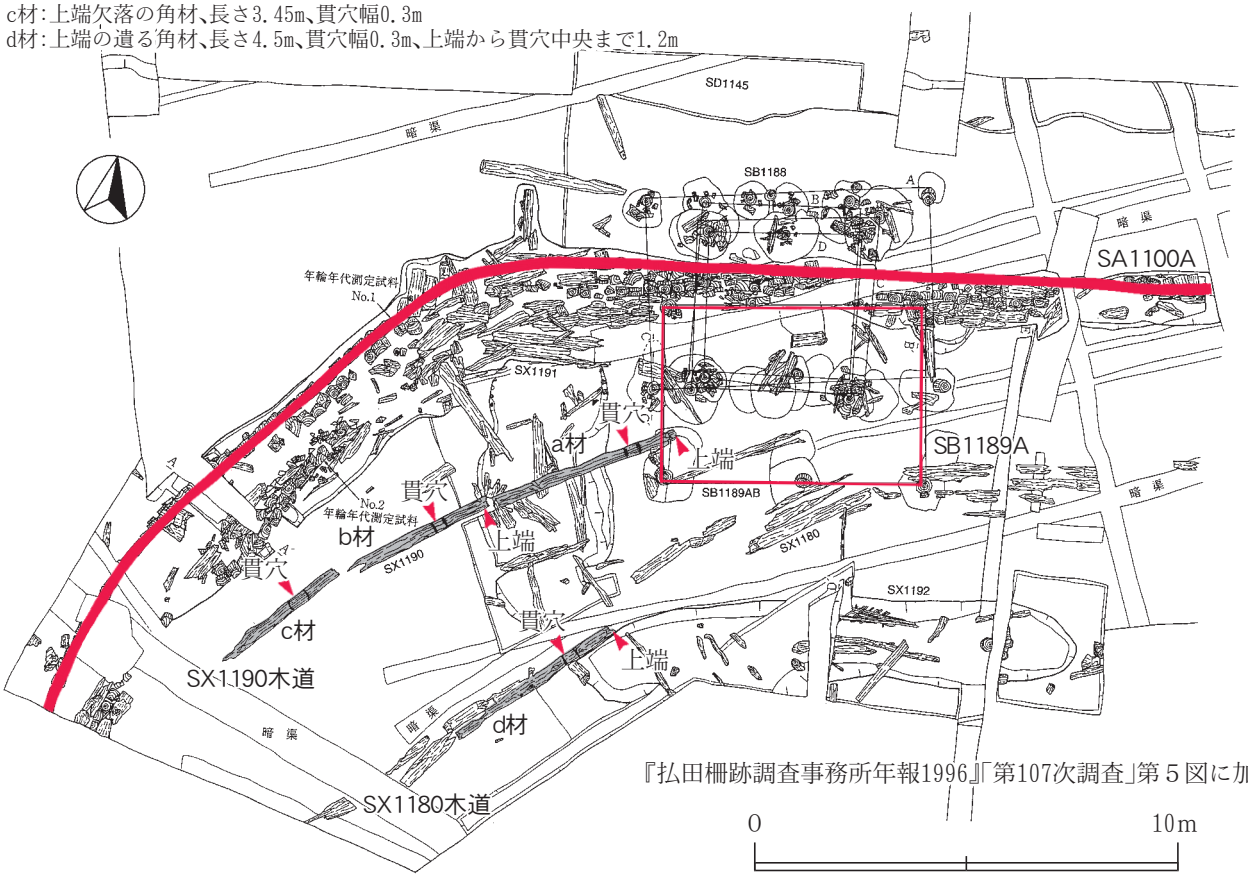


『払田柵跡Ⅱ』(第42図に加筆)

e材:D期材木塀角材(現存長3.33m、貫穴幅0.24m)

第99図　外郭南門・北門(Ａ期)と弧状に配される区画施設

a材:上下端の遺る唯一の角材(全長4.65m、別添実測図あり)
b材:上端の遺る角材、長さ3.85m、貫穴幅0.28m、上端から貫穴中央まで1.35m
c材:上端欠落の角材、長さ3.45m、貫穴幅0.3m
d材:上端の遺る角材、長さ4.5m、貫穴幅0.3m、上端から貫穴中央まで1.2m

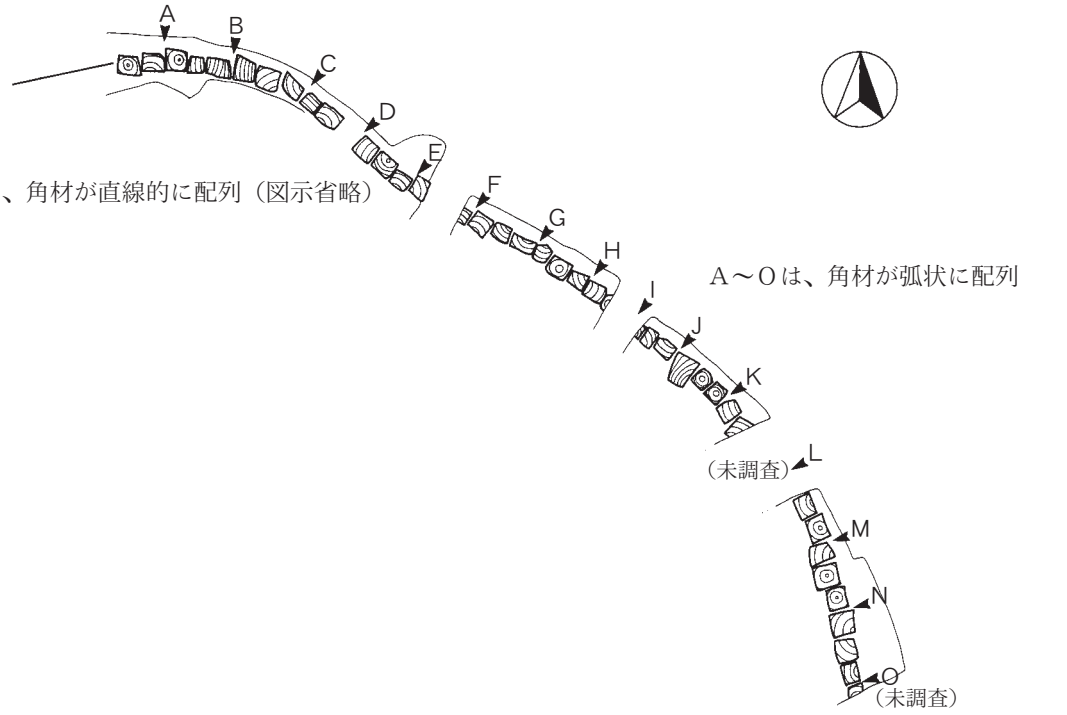


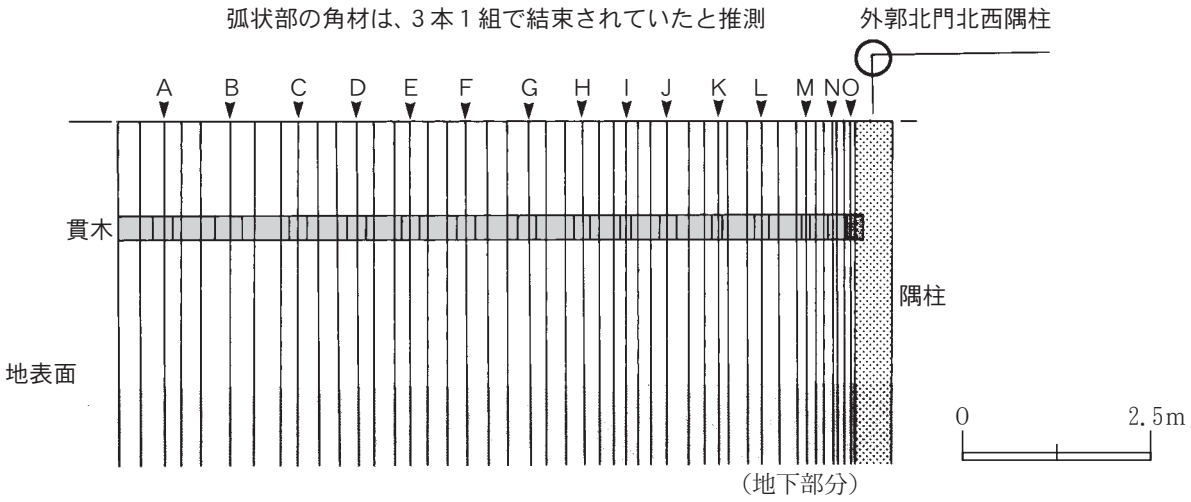
『払田柵跡調査事務所年報1996』「第107次調査」第５図に加筆

第100図　木道に転用された材木塀角材(外郭北門東側地区)

図版13

外郭北門東側の材木塀と木道(第107次調査区、西→)
写真中央手前３本の角材が上図ａ～ｃ材に対応する〔19960821 撮影〕



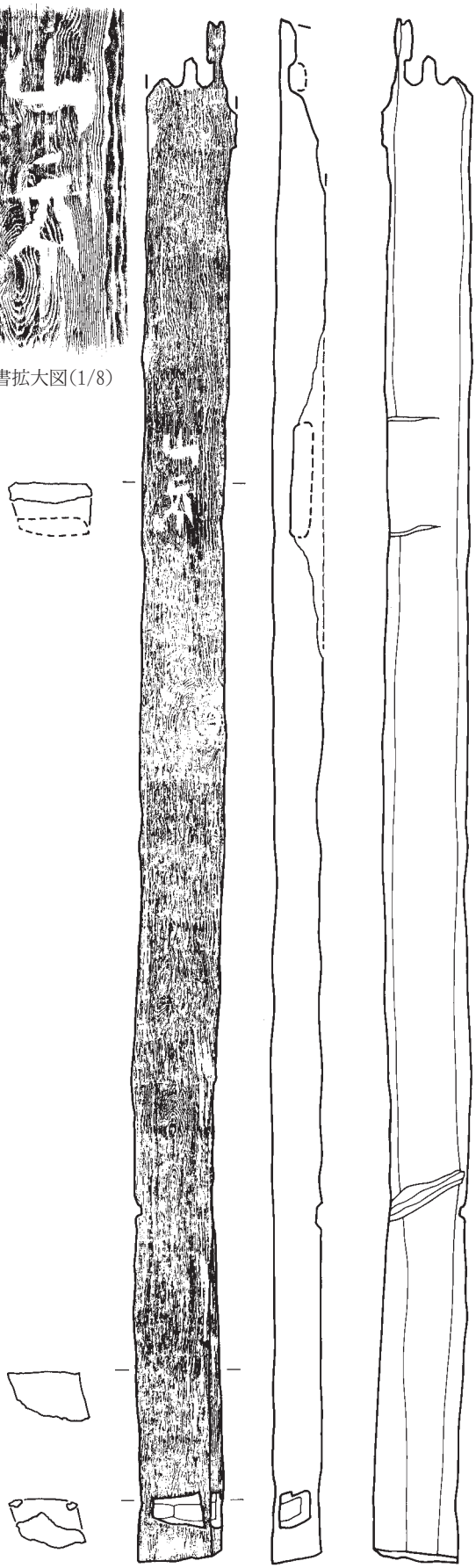


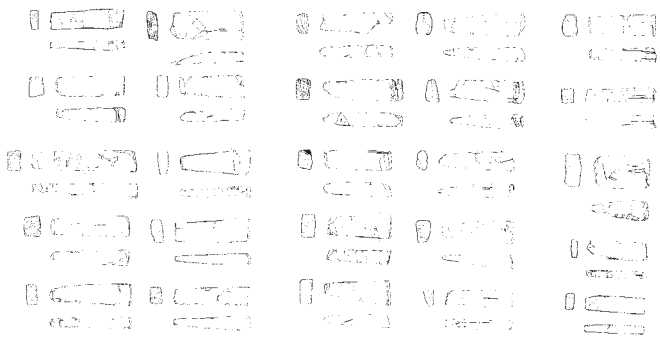
第101図　外郭北門跡北西部の材木塀と結束想定図

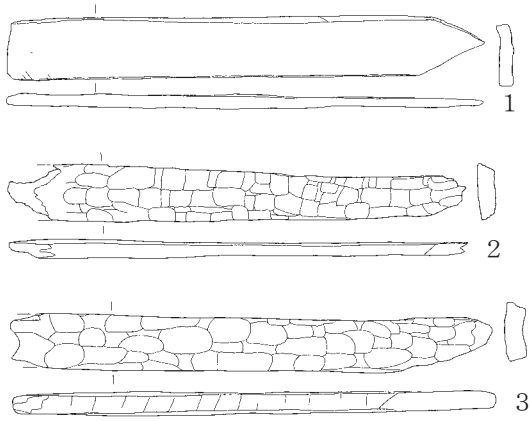
図版14

外郭北門跡と北西方向弧状に延びる材木塀角材列（第112次調査、南→）上図に対応
〔19970922 撮影〕

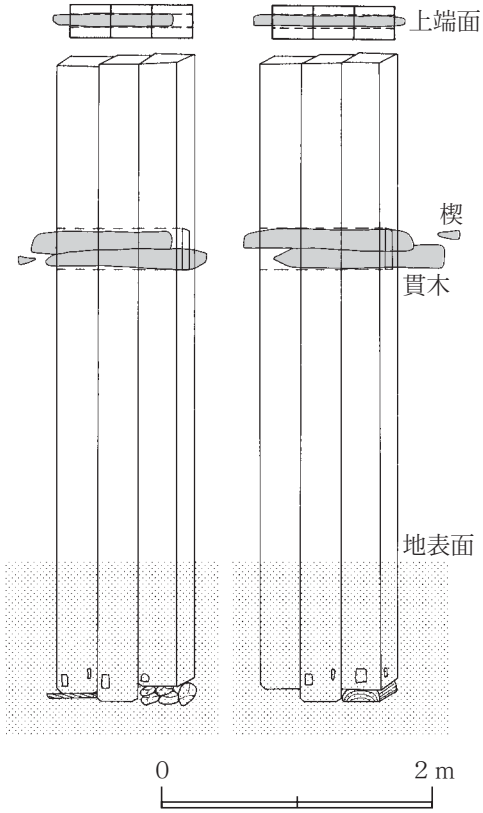
刻書拡大図(1/8)



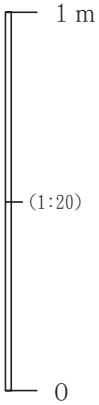




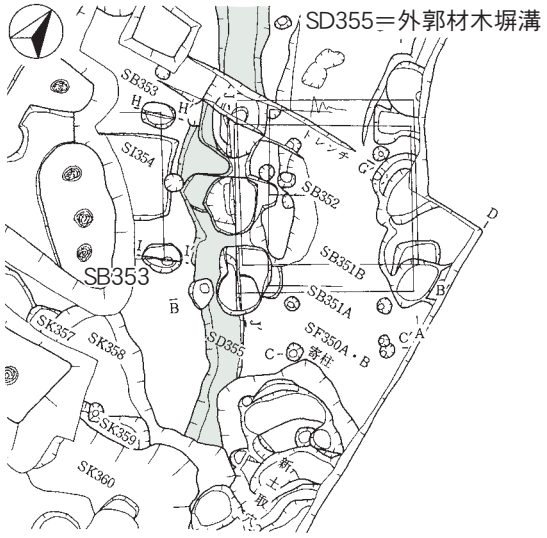
角材を連結させるための部材であった可能性のある木製品
(長さ×幅×厚さ、cm)
上段:木製楔　第107次調査SX1192出土(左下で、21.6×5.6×2.9)
下段:1　第111次SB1200南側西2B期掘形(127.2×16.5×5.0)
　　2　第111次SB1200北側西2CD期掘形(122.0×15.0×4.7)
　　3　出土地不明(126.6×15.5×6.0)　※スケールは角材と同じ



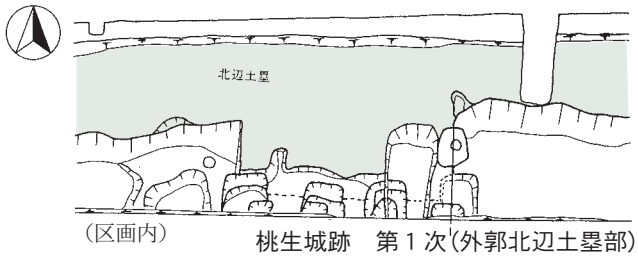
第100図のa材



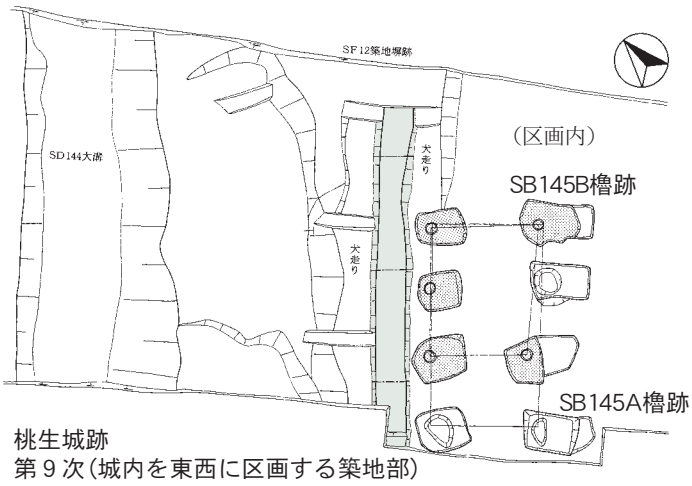
第102図　材木塀に使用された角材と結束用部材



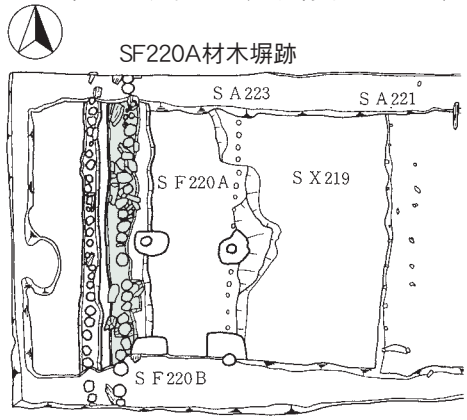
秋田城跡第23次（外郭線東辺北端部）



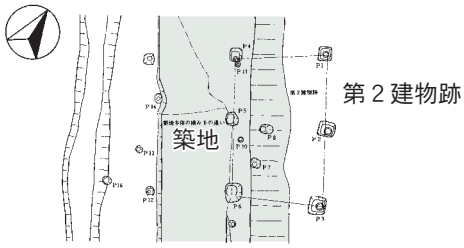
桃生城跡　第１次（外郭北辺土塁部）



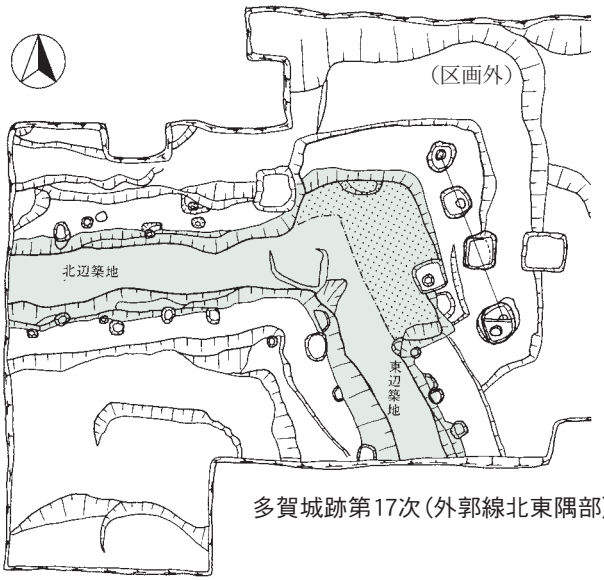
桃生城跡
第９次（城内を東西に区画する築地部）



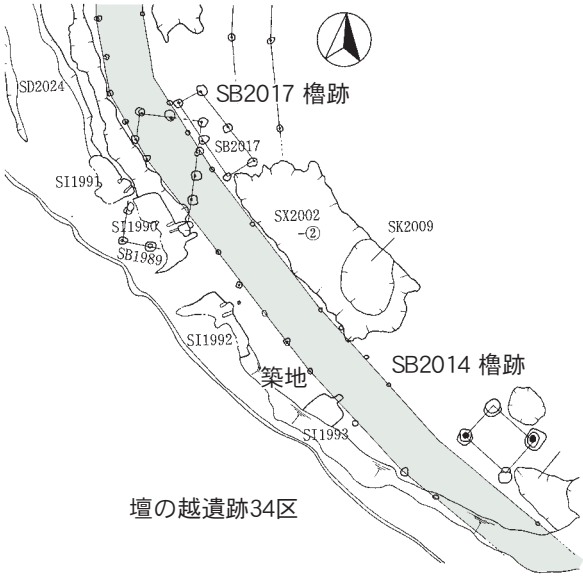
多賀城跡第10次（外郭線西辺中央）



宮沢遺跡愛宕山地区（外郭線西辺）



多賀城跡第17次（外郭線北東隅部）



壇の越遺跡34区

0　（1：200）　8 m

0　（1：500）　20m

第103図　区画施設を跨がないタイプの櫓状建物跡

第６節　長森地区の歴史的変遷

本節では、長森地区内における場の利用状況を旧石器時代から近世・近代に至るまで概括的にまとめる。

１　旧石器時代

旧石器時代の資料は、長森東方地区(第105次)の地山面から石刃が１点出土している。旧石器は、真山丘陵部からも掻器・削器が採集されている[(1)]。

２　縄文時代（第104図）

縄文時代の遺構・遺物は、真山丘陵部を含め柵内のほぼ全域から発見されている。出土遺物から見た時期は、前期後半～末、中期中頃～末、後期後半、晩期にわたる。このうち、遺構・遺物が集中的に認められるのは前期末(大木６式相当)段階である。

(１)政庁地区

板塀で囲まれた政庁区域内からも縄文期の遺構は検出されている(第104図Ａ地区)。第12・35・53次では、土坑６基、溝状を呈する陥し穴(以下、Ｔピットと表記)２基が報告されている。土坑のうちの１基は中期の構築とされる。

(２)政庁域北側及びホイド清水周辺地区

政庁域北側の北向き緩斜面部(第60・75次)でもＴピットが４基検出されている。またホイド清水(SE550)内、及び周辺(第49・104次)から縄文土器(前期・晩期)、石器が出土している(同図Ｂ地区)。量的には前期が主体を占める。SE550に隣接する小土坑(SK564)は、縄文期の構築であることから、古代の井戸に先行する“水場”的な施設との推測も可能であろう。また、第49次調査区の東側に隣接する第130次調査区内からも、前期末段階の土器と、環状石斧が出土している。

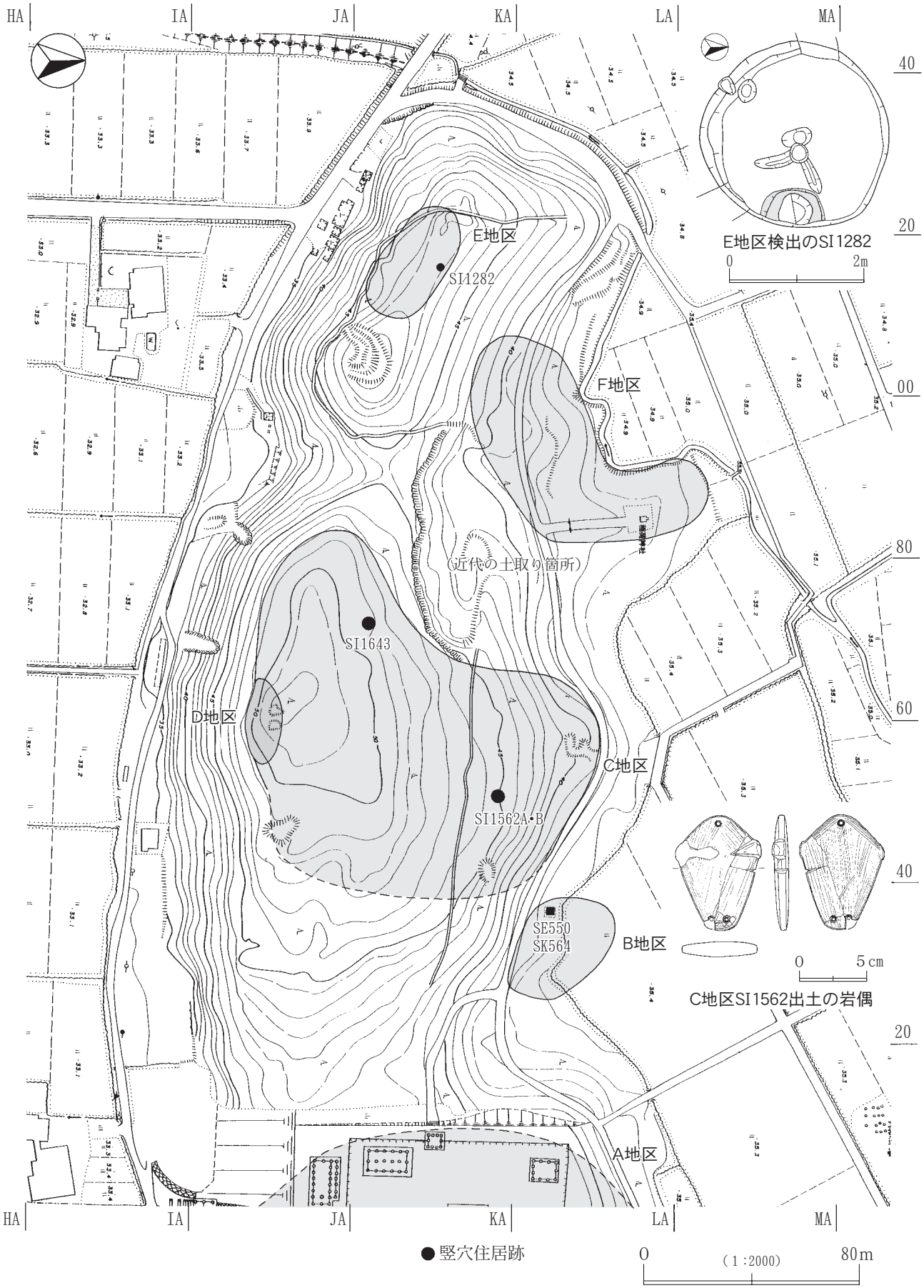
(３)長森東方地区

本地区では４度にわたる調査(第90・95・100・105次)により、土坑12基、Ｔピット10基が検出された。土坑のうち２基は、円形で底面中央に小穴を伴う陥し穴であったと推測された。構築時期は、土坑のうち１基は晩期であり、Ｔピットは、遺構面上部の出土遺物から中期中頃以前の構築である。

(４)政庁西側地区

本地区には縄文期の遺構・遺物が濃厚に認められた。第115・118・120・122・123・126・135・137次調査区内からは、竪穴住居跡４軒、竪穴状遺構２基、土坑29基、焼土遺構３基、柱穴が検出され、前期段階の土器・石器が多量に出土している。第122次で検出された竪穴住居跡は、部分的な調査ながら長軸が10ｍを超す大型住居跡であったことが判明している(同図Ｃ地区SI1562Ａ・Ｂ)。また土坑のうち何基かは、堆積土や遺物の出土状態から“墓”であった可能性がある。さらに、遺物には米代川流域以北に分布の中心をおく“岩偶”が見つかっていることから、当該縄文人の出自が北方の円筒土器文化圏内であったことを推測させる。

一方、同地区の丘陵頂部南端部では基盤の硬質泥岩が帯状に広く露出する状態で検出された(第115次)。このなかには、基盤層に埋もれている大型の泥岩上部に人為的に打ち欠かれた痕跡を残すもの、泥岩の分布が希薄な箇所は土坑状の落ち込みを呈することが確認された。この範囲内では古代の遺物



第104図　長森西方地区における縄文期の遺構・遺物分布状況

は認められず、縄文期の土器(主に前期末段階)・石器が多く出土している。このことから、硬質泥岩露出箇所とは、縄文期における石器石材採掘場(同図Ｄ地区)であった可能性が高い。

(５)外郭西門東側地区

本地区(第67・81・85・117・121次)では、丘陵部に竪穴住居跡４軒、土坑２基(同図Ｅ地区)と北側斜面部～平坦面部でＴピット７基(同図Ｆ地区)が検出され、前期、後期、晩期の遺物が出土している。竪穴住居内には、特殊ピットと呼ばれる周堤をもつ施設が付されており(同図右上網掛け部)、これも前期円筒土器文化圏の集落に主に認められる特徴を備えている。後期の土器片には、いわゆる瘤付の土器も含まれる。

(６)他地区の様相

長森地区以外での縄文期の遺構・遺物は次のとおりである。外郭南門から外柵南門に至る低地部(大路地区、第７・93・94次)では、明瞭な遺構の検出はないものの、前期、中期、後期の土器片が出土している。また、真山丘陵部(第17・125・129・132・136次)でも土坑６基、溝跡・柱穴と前期、晩期の遺物が発見された。

３　古代

縄文時代晩期以降、弥生～奈良時代の明確な遺構・遺物は未発見であり、次なる土地利用は801年頃の払田柵創建直前まで待つことになる。

政庁北側及び長森東方地区で検出の竪穴建物跡２棟は、政庁第Ⅰ期・長森東方地区Ａ期の建物造営に伴う工人等の工房・居住施設と判断される。長森東方地区では、Ａ期造営に先立つ整地により本竪穴が削平されていることも判明している。このことから、竪穴の構築時期は、出土遺物は少量ではあるものの、８世紀最終末期から801年頃の間の極めて短期間と想定される。

創建段階では、政庁域(第Ⅰ期)、長森東方地区(Ａ期)、外郭南門東方官衙域、ホイド清水周辺、外郭線地区(外郭線Ａ期：築地・石塁・材木塀・四門・櫓状建物)が遺構として確認される。その一方で、長森西方地区は遺構・遺物の分布から見ると、空閑地に近い場の利用であった可能性が高い。

長森西方地区が本格的に利用されるのは、外郭線の最初の更新時期である９世紀中頃(外郭線Ｂ期)に下る。そのなかでも、丘陵西端部寄りの外郭西門東側地区が先行し、政庁寄りの政庁西側地区は、９世紀第３四半期以降の利用と推測される。本区域内の主たる遺構は、鍛冶炉や竪穴あるいは掘立柱を上屋とする工房群で占められる。このことからすれば、外郭西門東側地区は外郭線Ｂ期施設群建設に伴う工人集団の招聘を契機とする場の利用開始であり、政庁西側地区は政庁第Ⅱ期中あるいは907年頃に比定される外郭線Ｃ期(政庁第Ⅲ期)の改修に伴う工人集団の工房群敷設を契機としたとも推測される。

終末期の長森地区は、政庁域(第Ⅴ期)、長森東方地区(Ｆ期)、外郭南門南西官衙域、ホイド清水周辺、外郭線地区(外郭線Ｄ期：材木塀・四門・櫓状建物？)で遺構・遺物が確認される。長森西方地区は、10世紀前半代までの場の利用が認められるが、後半・終末期段階までは継続しない。

以上のように整理すると、創建から終末期まで連続して場の利用が図られたのは、中枢施設である政庁域と外郭線を除くと、長森東方地区、ホイド清水周辺域にすぎない。政庁からホイド清水に向かう通路・溝も創建から終末期まで更新され、第130次SD1769溝跡に残されていた土師器坏(第95図６)は、10世紀第４四半期に下る可能性もあり、払田柵跡内では最も新しい時期の遺物である。

なお、真山丘陵部では、10世紀代の火葬墓が２基確認されているが(第125・129次)、創建期９世紀代の遺構・遺物は未確認である。

４　中世(第105図)

10世紀後半に終焉を迎えた払田柵の場が次に利用されるのは、13世紀に入ってからである。この時期の明確な遺構が確認されるのは、長森丘陵西側の外郭西門東側地区と真山丘陵部の２箇所である。その後、真山丘陵には「堀田城」が造られ、整地層の観察から少なくとも２・３度の改修が実施されるが(第125・129・132次)、創建及び終末の時期は不明瞭である。

(１)13世紀代の様相

外郭西門東側地区(第117・119次)には、一辺80～90ｍの不整方形に巡らされた土塁(第105図SF1300・1301)・空堀(同図SD877)の内側に墳墓２基(同図SX1264・1265)、曲物を容器とする火葬墓３基、火葬施設の可能性のある焼土遺構６基等が検出された。墳墓のうちの１基からは、周溝を伴う一辺約５ｍの隅丸方形の墳丘中央に、皿状に打ち欠かれた擂鉢を蓋にした須恵器系陶器壺(正位)が発見された(同図右下)。陶器の製作時期は、13世紀前半代と見られ、隣接する箇所からは中国同安窯系の青磁椀小片も出土している。長森丘陵西端部の墓域は、同時期の真山丘陵部での居住域との関連が想起され、これは古代における払田柵(長森地区)とその墓域(真山丘陵部)との相関、すなわち居住域と墓域の隔離にも通ずるのかもしれない。

その真山丘陵部では、遅くとも15世紀前半代に成立する土塁・空堀や大規模な整地を伴う「堀田城」に先行する集落の一部が第125次調査区で確認されたが、詳細は不明である。

(２)15・16世紀代の様相

15世紀以降の長森丘陵部には、政庁西側地区の東端部(第126次Ｈ区)で土坑墓が２基確認された(第105図SK1666・1672)。その規模から屈葬型の土葬墓と判断される。副葬品には洪武通寶の模鋳銭が認められ、他遺跡での出土例を参照すれば、本土坑墓は15世紀末から16世紀代に構築された可能性が高い。なお、土坑墓の西側隣接部(未調査区)には盛土状の高まりや小さな凹地も認められ、この地区は概期の集団墓地であった可能性もある。

また、「堀田城」に係る時期の遺構・遺物は、第５・15・16・26・27・41・82・125・129・132次調査で確認されている。真山丘陵部縁辺部に認められる土塁・空堀は、第27次調査(昭和54年、南辺部)の成果では、土塁(SF294)の現存幅2.5～3.8ｍ、現存高1.1～1.5ｍであり、構築当時の推定基底幅は４～５ｍか。また、空堀(SD293)の上面幅は約14ｍ、底面幅11.5ｍ、深さ1.5ｍであり、断面形は逆台形の箱堀状を呈する。

(３)遺物の分布状況

その他の地区では、明確な遺構の検出は認められないものの、遺物の出土が報告されている。長森東方地区(第105次)では古代の竪穴建物跡堆積土上面から須恵器系陶器片が、外郭南門地区(第55・74・83次)では、須恵器系陶器(擂鉢等)と中国産染付皿も出土している。また、外柵南門周辺の沖積地や河川跡上部から須恵器系陶器等が見つかっている(第７・91・92・94次)。これら陶器類の多くは、15世紀代もしくは16世紀に帰する。柵外南東域内には、板碑(念仏屋敷板碑)や埋蔵銭出土地(厨川谷地遺跡)が周知されており、低地部で出土した陶器類は、これらの中世遺跡に包括されると理解することができよう。

第105図　長森西方地区における中世の遺構分布状況

５　近世以降

近世期の資料は、遺構外出土遺物として散在的に認められる程度である。外郭南門跡西側(第55次)では、京焼風の陶器皿や伊万里染付皿等が出土しており、これらは17世紀末から18世紀頃とされる。また、外柵南西部(第102次)では、美濃あるいは唐津や肥前産の陶磁器類が少量出土しており、16世紀末から17世紀前半代の資料である。

長森丘陵部には八幡宮が勧進される。文政11年(1828)には菅江真澄がここを訪れ、『月の出羽路』(20巻：払田邑の条)に八幡村八幡宮の図絵や祭日、斎主などの記録を残している[2]。八幡宮は昭和初期まで１間四方の小さなお宮として残されており、その宮跡は政庁域外の南西側にあたる。現在「菅江真澄の道　八幡宮跡」の標柱が立てられている。

一方、近代の遺構は、外郭西門東側地区(第121次調査区東端部)で確認された轍跡(SM1390)が挙げられる。SM1390は、２本一組の溝状遺構である。１本の溝幅は15cm前後で、両者が約1.25mの等間隔を保ち、西北西－東南東方向に約43m延びる。溝は部分的に３～４条となる箇所もあり、少なくとも２系統の組があったことになる。溝は古代の遺構を切り込んで通過しており、溝間が非常に堅く締まっていることから当初は中世以降の道路跡かと考えた。しかし幅が狭いことと、溝の東端が長森丘陵部北側で大きく土取りされている箇所に向かうことから、次の仮説に行き着いた。奥羽三大地主の一つに数えられる池田家[3] は、明治43年に払田・真山丘陵の南麓に分家するが、その邸宅造成時に多量の土(壁土)を長森から採取したと記録が残されている。現在の土取り箇所がその時期の痕跡とすれば、２本の溝は土を運んだ荷車・馬車の轍跡と想定されるのである。

註
1　冨樫泰時2007「真山遺跡」『横手市史資料編　考古』
2　内田武志・宮本常一1979「月の出羽路」『菅江真澄全集』第八巻　未来社
3　鹿股壽美江1972「池田家」『農村の変容と農民像』古今書院

図版16

角材に刻まれた文字部分の拓影図。軸装され個人宅に保管されていた。
本紙の大きさは、縦90.5cm、横28.2cm。
「一三□木二」　三文字目は、「柱」の可能性ありか。
拓影図左下には、「拂田柵木(明治卅五六年頃発掘)
後藤宙外氏蔵
昭和七年九月　同氏寄」

後藤宙外の記録を参照すれば（第２章第１節)、この角材は明治35年秋から翌春にかけて現在の美郷町本堂城回地区の水田から抜き上げられた200本の角材のひとつであり、７本に文字が刻まれていたうちの１本にあたることになる。

第６章　総括と課題

払田柵跡長森地区における調査成果を総括する。

【長森東方地区】創建段階から終末期まで連続して場の利用が計られた官衙ブロックである。

整然と配置される掘立柱建物等で構成され、建物の周囲には板塀による区画が認められる時期もある。人為的に埋められたり整地に伴い削平を受けた竪穴建物跡は、創建時や改築時に仮設的に置かれた工房兼住居跡と判断される。同類の竪穴建物跡は政庁域外北方にも認められる。

ただし、Ｄ期とした９世紀後半段階のみは、多くの竪穴建物で構成され、掘立柱建物は姿を消す。竪穴内から鉄滓や漆紙が出土していることから、鍛冶あるいは漆塗りに係る工人の存在がうかがえるが、官衙ブロックとしての位置づけを規定するためには本期のあり方を再精査する必要があろう。

【政庁西側地区】北側斜面部を中心とした鍛冶工房エリアである。

鍛冶工房域は、北側斜面部のうち標高43～47ｍライン内に限定的に認められ、推定される面積は約2400㎡である。鍛冶工房は斜面の比較的急な箇所では竪穴建物を、斜面のなだらかな箇所では平地式の掘立柱建物をそれぞれ採用していた。緩斜面部に立地する鍛冶工房の一部は、同一箇所での嵩上げという方法で作業面(鍛冶炉の置かれた床面)を更新している。嵩上げされた作業面は第137次Ｏ区で８面認められ、その高さは低位から最高位まで約100㎝に達していた。ここでは当初、竪穴式の鍛冶工房であったが、最終的には平地式(掘立柱建物)の鍛冶工房に転化したと推測される。鍛冶工房域の南限(斜面上位側)には、板塀が建て並べられており、上位面と画されていた。この上位面には整然と配置された掘立柱建物跡が認められることから、鍛冶工房域・工人を管理するエリアであった可能性が想定される。また、本面には鍛冶炉を伴わない竪穴建物跡や祭祀施設とも見られる小竪穴が位置する。後者は鍛冶に伴う祭壇的な施設と類推した。

本地区の遺構群は、９世紀後半から10世紀前半代に限定される。十和田ａ火山灰の堆積状況から、降下後の鍛冶工房も認められるが、工房の主たる操業時期は降下前に求められる。したがって、本地区における創建時および終末期の様相は不明瞭である。

【外郭西門東側地区】北側斜面部を中心にした鍛冶・鋳造エリアである。

鍛冶工房域の分布・立地・構造は政庁西側地区と共通する。それは主に北側斜面中位以下の緩斜面～平坦面の特定箇所に分布すること。斜面上位面との境界には板塀と見られる区画施設が存在すること。鍛冶工房の構造は、斜面上位寄りでは竪穴建物を、下位寄りの緩斜面～平坦面部では掘立柱建物であること。工房域は切土・盛土の整地が繰り返され、結果的に段状の地形を残していることである。一方で政庁西側地区との相違点は、次のようにまとめられる。それは遺構としての確認はできなかったものの、本地区でのみ鋳造に係わる工房が存在していた可能性が高いこと。ただし、鋳造関係の出土資料は非常に少なく、特定の時期あるいは小規模・限定的な操業であろう。政庁西側地区では、竪穴建物構造の工房が多数派を占め、それが重層的に認められるのに対し、本地区では重層・嵩上げタイプは認められず、掘立柱建物構造の工房が主となり、整然と配置されていること。鍛冶作業に直接的に関連を持たない掘立柱建物跡や竪穴建物跡は、政庁西側地区では斜面上位面側に立地するのに対し、本地区では鍛冶工房と同一面上で排他的に配置されていること。鍛冶工人を管理する施設とも想定される柱穴掘形規模の大きな掘立柱建物は、本地区では認められないことである。

本地区工房等の形成時期は、出土遺物から９世紀中頃から10世紀前半代に限定される。したがって鍛冶工房としての操業始期は、政庁西側地区より先行すると見られるが、９世紀後半に入ると両地区が同時に操業していた可能性もある。しかし、鍛冶炉自体の規模は全体的に見て本地区例が大きく、政庁西側地区と異なる生産体制であった可能性も考えられる。

【ホイド清水周辺地区】ホイド清水は古代以降現在に至るまで開口し続けた希有な溜井である。

政庁とホイド清水間を結ぶ通路・排水路が新たに確認され、出土遺物からそれは創建時から終末期まで改修を経て存続していたことも明確となった。ここから出土した土師器の小型坏(第85図１)は、10世紀第４四半期に下る可能性もあり、本遺跡内では最も新しい時期の資料である。

【丘陵北側裾部】火山灰降下後に造られた東西道路が確認された。

遺構の濃密な分布は認められないものの、政庁北門と外郭北門を結ぶ北大路や北側裾部を東西に通る道路跡が確認された。北大路は２時期の変遷があり、当初は盛土による幅員６～７ｍの道路、改築後は盛土あるいは木道となり、幅員は2.5ｍ未満に縮小される。外郭北門は終末期まで存続していたとされるが、２時期目の路面上には十和田ａ火山灰が帯状に堆積しており、火山灰降下時には北門に向かう道路は実質的に機能を果たしていなかったことになる。なお、当初段階の北大路は、遺構としての実態が不明な南大路(外郭南門－外柵南門間)の構造を想定する材料にもなる。東西道路は、断片的な調査ではあるものの、丘陵北側裾部に幅２～３ｍ幅で存在していた。おそらく外郭東門から北大路を交差してホイド清水まで通っていたと類推される。その形成時期は、火山灰降下後であり、盛土あるいは部分的な礫敷きの路面であった。道路脇では各所で地鎮のような祭祀が行われていた。これは火山灰降下という天災に起因するものであり、同様の事例は払田柵に隣接する厨川谷地遺跡でも確認された。東西方向の道路跡は、遺構としては明確にできなかったのの、外郭東門－政庁－外郭西門間を結ぶ丘陵頂部や北側裾部のホイド清水－外郭西門間にも存在していた可能性が高いであろう。

◆

出羽国の内陸部に位置する払田柵跡は、801年頃に創建された城柵官衙遺跡である。独立丘を取り囲む沖積地に立地すること、外柵・外郭ともに楕円形を呈する区画施設は、他の城柵には認められない特徴である。立地・形状に加え、これだけの巨大城柵が文献上のどの城柵に当てはまるのか否かの検証作業も途上にある。

それでも近年の調査や研究・検証により、本書で報告した長森地区以外にも大きな成果が得られている。柵内では、ほ場整備事業に伴う調査により、外柵材木塀が３・４か所で途切れることが明確となり、柵内沖積地部の景観及び場の利用状況について再考の必要が生じたこと。柵外では、隣接する古代遺跡の調査が進み、厨川谷地遺跡では払田柵専用の祭祀場、半在家遺跡では条里制の可能性のある畦畔や水田跡・祭祀場、城方小屋遺跡では外柵外に小さな柵列が巡らされていたこと、などである。払田柵跡の解明に欠かせない“雄勝城”探査に向けた踏査・試掘も開始した。横手市雄物川町の町屋敷遺跡では、稲蔵跡の可能性のある大型の総柱掘立柱建物跡が検出された。ここに紹介した関連遺跡は、厨川谷地遺跡を除き、近年に新発見された遺跡である。

事務所を構え、発掘調査を始動させてから35年という節目の年を迎えた。柵内のみの調査から、柵外の状況を精査することで、柵内外の新たな姿が浮かび上がってくる。関係する市町と協力しながら今後とも払田柵跡の実態解明と辺境と呼ばれた当地の古代社会の実像に迫る試みは今後とも継続していかなければならない。

（平成21年３月）

図版16

上:払田柵跡長森丘陵部全景
(西側上空→)
長森丘陵は北に開く弧状・弓形の
独立丘であることがわかる
右手前の林は、真山丘陵部

右:同上、北側上空より臨む
〔２枚:第119次調査時 20010808 撮影〕

図版17

上:払田柵跡長森丘陵部(南西上空→)
政庁を挟んで奥が長森東方地区
手前の杉林が政庁西側地区
右手前には整備された河川流路

右:長森丘陵部西側(南東上空→)
左奥手前に真山丘陵、背後には一ツ森丘陵が島状に位置、仙北平野内の丘陵は写真に写っている三丘陵のみである

〔2枚:第115次調査時 19990902 撮影〕

図版18
第90次調査区

ＳＢ937掘立柱建物跡
（北→）
〔19910830 撮影〕

ＳＢ941Ａ・Ｂ1・Ｂ2
掘立柱建物跡、SI934
（東→）
〔19910806 撮影〕

ＳＢ941Ａ・Ｂ2
柱穴掘形（西→）
右:Ａ建物Ｐ６
左:Ｂ２建物Ｐ31
（第７図Ｑ-Ｒ間土層図に
対応する）
〔19910827 撮影〕

図版19
第90次調査区

ＳＢ937(写真奥)と
板塀群(東→)
〔19911009 撮影〕

板塀群(西→)
左端はＳＤ988
右奥の山並みは奥羽山脈
〔19911009 撮影〕

土坑群(南東→)
右手前がＳＫ958
〔19910905 撮影〕

図版20
第95次調査区

ＳＩ1073精査後全景
(東→)
〔19930908 撮影〕

ＳＢ1072・1077(西→)
〔19930909 撮影〕

ＳＢ1082Ａ～Ｃ
Ｐ10断ち割り状況
(北→)
柱痕はＣ建物に伴う
奥はＳＢ1072Ｐ14
〔19930910 撮影〕

図版21
第100次調査区

調査区南部の遺構群
(東→)
右手前がＳＩ1008
奥がＳＩ1114
〔19940906 撮影〕

ＳＩ1114全景(西→)
竪穴(手前)と掘立柱
建物(奥)が接続する
〔19941012 撮影〕

ＳＩ1114竪穴部東側壁
の様子(南西→)
柱穴間に板壁の痕跡が
明確に残されている
〔19941018 撮影〕

図版22
第100次調査区

ＳＩ1125完掘(西→)
〔19941007 撮影〕

ＳＩ1125出土の
第５号漆紙文書
〔19940906 撮影〕

ＳＢ1082精査後の
状況(西→)
〔19940906 撮影〕

図版23
第105次調査区

調査区全景(東→)
左手前がＳＫ1154
左端がＳＩ1167
〔19950919 撮影〕

調査区全景(南→)
手前がＳＩ1167
〔19950925 撮影〕

調査区北側の遺構群
(東→)
手前がＳＢ1178Ａ・Ｂ
右奥がＳＩ1148
〔19950922 撮影〕

図版24
第49次調査区

ホイド清水（ＳＥ550）
の現況（南→）
〔20050802 撮影〕

ＳＥ550調査前の
状況（東→）
写真右手（北側）には礫
（硬質泥岩）で覆われた
下に井戸側板材がわず
かに見えていた
〔19821022 撮影〕

第49次調査区調査後
の全景（東→）
右奥の水溜部がＳＥ550
井戸の周囲が切土によ
り整地されていること
が明瞭に観察された
〔19821122 撮影〕

図版25
第49-2次調査区

ＳＥ550及び周辺の
調査中の状況(南→)
〔19830506 撮影〕

ＳＥ550掘形(SK570)
精査後の状況(南→)
〔19830523 撮影〕

遺物出土状況
ＳＥ550掘形内出土の
墨書土器(土師器坏)
「□〔政カ〕所□」
実測図は『払田柵跡Ｉ』
(別編１、p258)に掲載
〔19830419 撮影〕

図版26
第115次調査区

調査区全景(西→)
掘立柱建物跡と板塀列
右奥のＳＤ1231は、
調査前からわずかに窪ん
でいた
写真奥が政庁域
〔19991005 撮影〕

ＳＢ1219Ａ・Ｂ精査後
全景(北→)
写真左奥に払田柵跡調
査事務所(秋田県埋蔵
文化財センター)が写
っている
〔19991005 撮影〕

ＳＩ1229全景(北→)
写真奥は地表面上に露
出している硬質泥岩
南側斜面上位部は利用
空間が限定される
〔19991005 撮影〕

図版27
第122次調査区

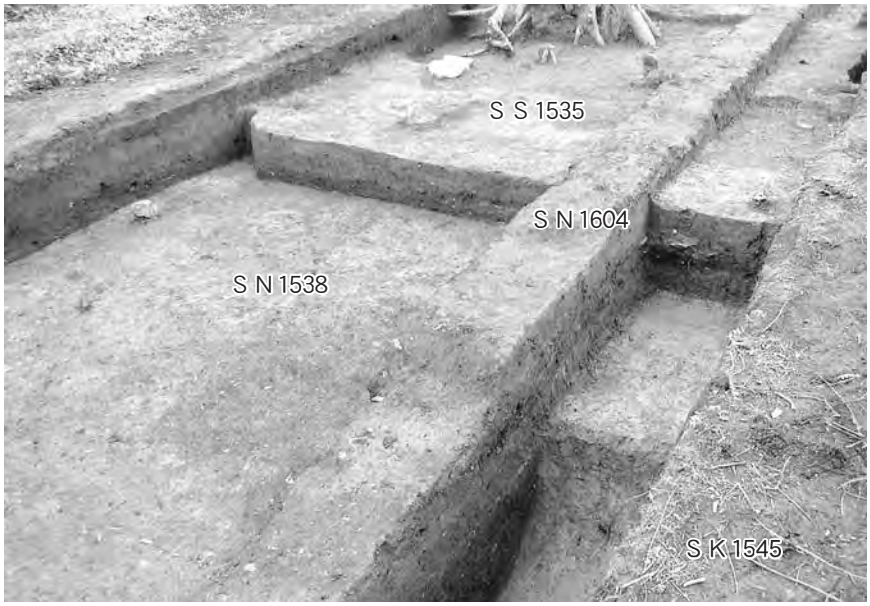
ＳＢ1525Ａ・Ｂ掘立柱
建物跡西側柱列(南東→)
手前からＰ８・９・10
〔20031119 撮影〕

同上Ｐ１柱穴掘形
(北西→)
〔20031113 撮影〕

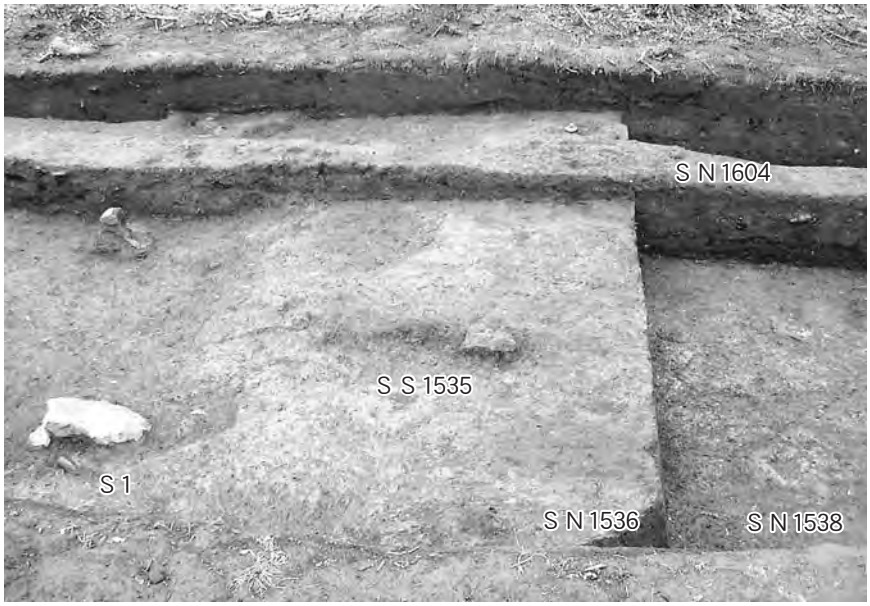
Ｃ区斜面下位斜面部の
調査後の状況(北西→)
土取り穴群を確認
〔20031008 撮影〕

図版28
第122次調査区

Ｂ区における斜面上位面と中位面を区画する溝跡(北西→)
ＳＤ1530・1531など
〔20030912 撮影〕



Ｂ区斜面中位で確認されたＳＫＩ1537Ａ～Ｄ(北西→)
手前の窪みはＣ竪穴構築時に掘られたＳＫ1545
〔20030911 撮影〕



同上(東→)
ＳＮ1604は最上位のＡ竪穴に、ＳＳ1535・ＳＮ1536はＢ竪穴、ＳＮ1538はＤ竪穴に伴う鍛冶炉、Ｓ1はＢ竪穴に伴う金床石であるが、原位置を保っているか否か不明
〔20030911 撮影〕

図版29
第122次調査区

Ｃ区北側斜面上位緩斜面から平坦面部の状況（北西→）
写真左下にＳＫＩ1491の南側壁面
右上にＳＫＩ1490Ａ
両面の境界部にＳＤ1495・1496溝が位置
〔20031105 撮影〕

Ｃ区北側斜面上位緩斜面部ＳＫＩ1491床面検出状況（北→）
〔20030709 撮影〕

Ｃ区北側斜面上位平坦面部ＳＫＩ1490Ａ精査後の状況（北西→）
〔20030703 撮影〕

図版30
第122次調査区

ＳＤ1530遺物出土状況
中央奥:土師器坏が正立状態で６点重ねられ、最上位の坏内部に炭化材が入れられていた。
手前の二組:坏が合口状態で置かれていた
手前右:RP493(第55図５)
手前左:RP491(第55図７)
〔20031119 撮影〕

ＳＫ1574遺物出土状況
土坑底部に堆積した火山灰直上に土師器坏を正立して置いている。底部には火山灰が付着していた
(第34図・地点、第54図１)
〔20030930 撮影〕

ＳＫ1513遺物出土状況
土坑内に粉砕された須恵器長頸壺１個体分が一括投棄の状態で検出された
(第55図１)
〔20030806 撮影〕

図版31
第123次調査区

外郭西門東側地区から
政庁西側地区を臨む
(頂部平坦面、西→)
右側が両地区を分ける
沢部(Ｆ３区)に至る
〔20030519 撮影〕

Ｆ３区ＳＫＩ1651
土層堆積状況(南西→)
〔20031024 撮影〕

Ｄ区ＳＫＩ1631及び周
辺部の精査後の状況
(北西→)
南側斜面上位平坦面部
〔20031113 撮影〕

図版32
第126次調査区

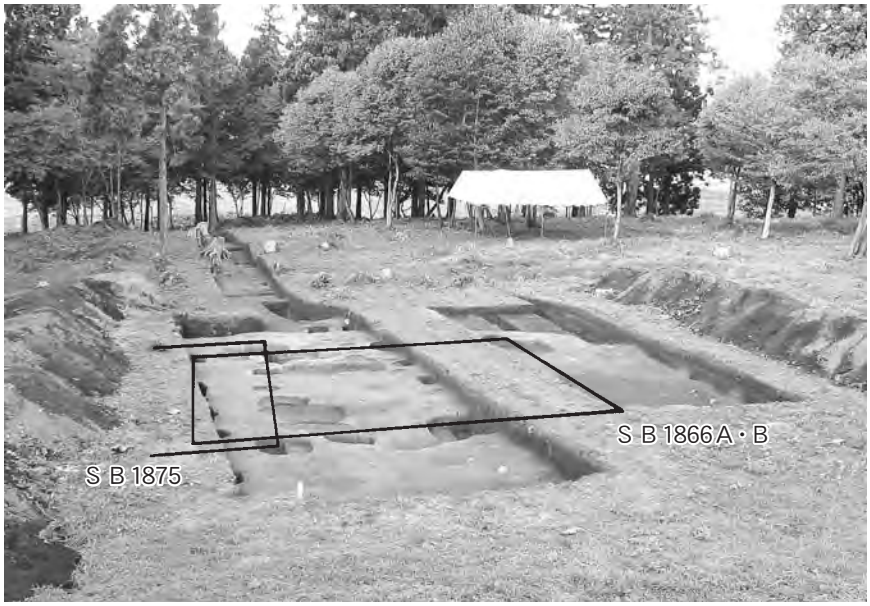
第122次Ｃ区から第126次調査区方向を臨む（西→）
写真中央の凹地は政庁から西方向に延びる旧道（古代以降の構築）
林の奥が政庁域
〔20031104 撮影〕

Ｈ区の北側斜面上位平坦面と緩斜面部を画する板塀跡（ＳＤ1678）（西→）
Ｈ区では古代の遺構はほとんど確認されず、鍛冶関連の遺構もない
〔20040825 撮影〕

Ｈ区北側斜面下位の状況（北西→）
写真の左奥が政庁域
〔20040810 撮影〕

図版33
第135次調査区

斜面上位緩斜面部調査
後の状況(北→)
写真左手前がＳＫ1864
〔20071012 撮影〕

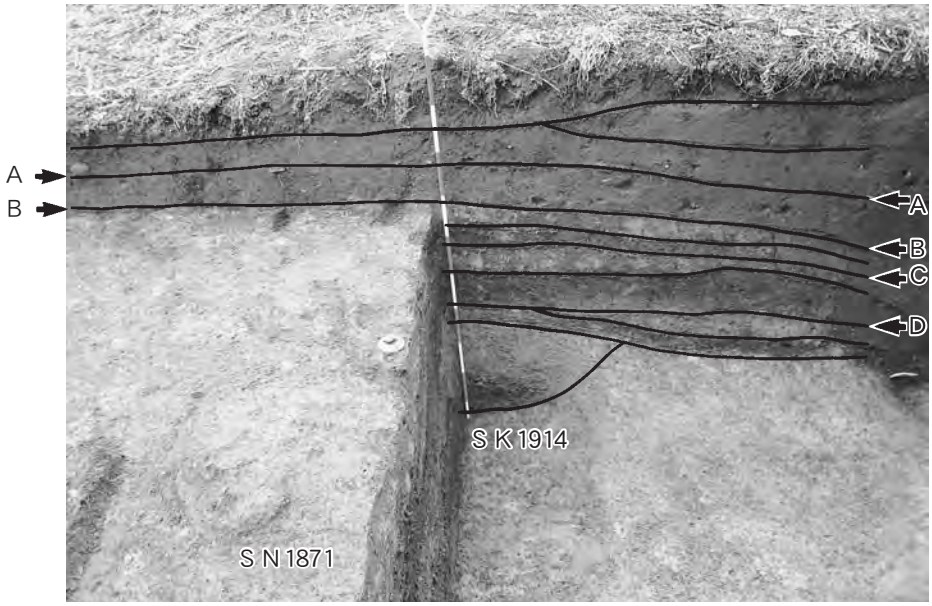


同上(南→)
ＳＢ1866Ａ・Ｂ、
ＳＢ1875が重複して
検出された
〔20071012 撮影〕

ＳＢ1866Ａ・Ｂ
Ｐ４土層堆積状況
(西→)
〔20071002 撮影〕

図版34
第135次調査区

斜面上位緩斜面部
柱穴掘形(西→)
左:ＳＢ1875Ｐ１
右:ＳＫＰ1856
右端のピンポール部は
ＳＢ1866Ｐ９
〔20071012 撮影〕



斜面中位平坦面部
ＳＫＩ1863Ａ～Ｄ
鍛冶工房の床面嵩上げの状況(西→)
最下位のＤ期から上位のＡ期では40㎝嵩上げされている
〔20070912 撮影〕

斜面中位南端部で検出された土坑内遺物出土状況(東→)
ＳＫ1864底面直上から土師器坏31個体が正立(一部倒立)して発見された
〔20070905 撮影〕

図版35
第137次調査区

調査区精査終了後
全景(北→)
手前右がＰ区
〔20080907 撮影〕

Ｏ区ＳＫＩ1924Ａ～Ｆ
精査後全景・東壁面土層
(北西→)
６時期の竪穴が嵩上げに
より床面が100㎝上昇した
〔20080830 撮影〕

Ｍ・Ｎ区ＳＫＩ1922
Ａ・Ｂ全景(東→)
写真撮影時には、Ａ竪
穴を切るＢ竪穴壁溝の
確認はできなかった
〔20080906 撮影〕

図版36
第117次調査区

拡張区（Ｄ～Ｆ区）
全景（東→）
頂部平坦面には縄文と中世のみ、古代の遺構は南側緩斜面部に位置
中央奥に復元された外郭西門の門柱、奥の林が真山丘陵
〔20000922 撮影〕

南側緩斜面部に並列する竪穴群（東→）
手前がＳＫＩ1280
〔20000922 撮影〕

Ｂ・Ｃ区の交点部で検出されたＳＩ1274とＳＤ1303（南→）
地形のうねりは中世の二重の土塁と間の空堀
〔20000922 撮影〕

図版37
第119次調査区

調査開始直後の状況
（東→）
頂部平坦面から北側緩斜面部（Ｈ～Ｊ区）
左端の林が真山丘陵
その奥が独立丘である一ツ森
〔20010530 撮影〕

段状地形現況（北→）
精査の結果、段状地形は古代の整地であることが判明、沖積地面の上に明瞭に３段確認される
〔20010613 撮影〕

同上（東→）
西端部の状況
左から第３・４・５段整地面
〔20010613 撮影〕

図版38
第119次調査区

Ｈ１区ＳＫＩ1321と土層堆積状況(北東→)
手前の溝(ＳＤ1341)が第１段整地面と下位の第２段整地面を画する塀跡か
〔20011025 撮影〕

整地層(Ｈ２区北端)
土層堆積状況(西→)
〔20010925 撮影〕

整地層(Ｉ２区北端)
土層堆積状況(北東→)
〔20010927 撮影〕

図版39
第121次調査区

調査前の状況(東→)
道路の左手が第１・２段整地面、右手側が第３段整地面
調査の結果、第２段面の北側縁辺部を利用して道路が造られていたことが判明
〔20020402 撮影〕

第１・２段整地面の精査後の状況(東→)
左手前の竪穴は、ＳＫＩ1416
斜面下位側の第２段面に鍛冶関係の施設が集中している
〔20021017 撮影〕

Ｍ２区で確認した段状地形(北→)
手前が第６段整地面
最奥が第３段整地面
〔20020619 撮影〕

図版40
第121次調査区

第２段整地面西部の鍛冶工房群(北→)
奥がＳＢ1440・1449
手前がＳＢ1441
軸線を揃えて整然と配置されている
〔20021024 撮影〕

ＳＢ1441鍛冶工房内の鍛冶炉ＳＳ1394
(北西→)
〔20021024 撮影〕

ＳＫ1438Ｂ内出土の金床石(北西→)
鍛冶工房ＳＢ1440・1449内に位置する
左奥には鍛冶炉ＳＳ1448
〔20021018 撮影〕

図版41
第121次調査区

ＳＫＩ1430Ａ～Ｄ
精査後の状況(北東→)
〔20021017 撮影〕

同上、塼出土状況
(北→)
下部には炭化物の広がり(第65図Ｈ部分)が認められた
〔20020930 撮影〕

第２段整地面東部の遺構検出状況(北→)
手前がＰ区、奥がＴ区
数多くの建物跡の柱穴掘形を確認したが、撮影段階ではその組み合わせを明確に示すことができなかった
〔20021017 撮影〕

図版42
第127次調査区

ＳＭ1716・1717検出
(北西→)
手前中央がＳＭ1717
奥の水溜部がＳＭ1716
〔20041208 撮影〕

第130次調査区

政庁からホイド清水
(ポールの奥)に向か
う通路跡確認状況
(南東→)
〔20050708 撮影〕

第133次調査区

ＳＸ1820粘土貼り面
下から検出された
２個体の土師器(東→)
左:正立出土の坏
(第86図20)
右:倒立出土の台付皿
(第86図21)
〔20061020 撮影〕

払田柵跡調査事務所の沿革

年　月	事　項
昭和49.4	「秋田県払田柵跡調査事務所」を仙北町公民館（高梨字田茂木）内に設置。 第１次５年計画調査を開始。
49.8	調査・研究の適正な実施を図るため、顧問２名を委嘱して指導体制を確立。 顧問には秋田大学教授・新野直吉氏（～調査指導委員として現在に至る）と多賀城跡調査研究所長・岡田茂弘氏に委嘱。
50.6	岡田茂弘氏の文化庁転出に伴い、多賀城跡調査研究所長の氏家和典氏に顧問を委嘱。 （～昭和52年度）
50.10	第７次調査区（外柵南門跡北側）で「嘉祥二年」銘の木簡出土。
52.5	第12次調査区で政庁正殿跡を検出。
54.4	事務所を史跡内の払田字館前100番地にある独立した建物内に移設。 第２次５年計画調査を開始。
55.3	第６回古代城柵官衙遺跡検討会を仙北町で開催。
56.10	秋田県埋蔵文化財センター開設に伴い、事務所も同所内に移転、現在に至る。
57.8	常陸宮殿下・同妃殿下　政庁跡を御視察される。
57.11	ホイド清水（第49次調査区ＳＥ550）から「絵馬」や第16号木簡など出土。
58.6	国立歴史民俗博物館教授・岡田茂弘氏に再び顧問を委嘱する（～調査指導委員として現在に至る）。
59.4	第３次５年計画調査を開始。
59.5	第55次調査区で外郭南門跡を検出、４時期であることを確認。
60.3	正報告書第１集『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』を公刊。
61.4	事務所の名称が「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称される。
61.5	第65次調査区で外郭南門跡に接続する石塁を検出、古代東北城柵遺跡では初見。
62.5	第68次調査区で外郭東門跡を検出。
63.6	史跡の追加指定がなされ、指定面積は894,600㎡となる。
平成01.1	第73次調査で検出された外柵材木塀のうち３本の角材を年輪年代測定した結果、最外年輪測定年代が、西暦801年と特定された。このことから、外柵の成立年代すなわち払田柵の創建がこの頃であることが確実となった。
01.4	第４次５年計画調査を開始。
01.8	第81次調査区で外郭西門の柱穴掘形を検出、これで外柵・外郭の８門跡は全て確認。
06.4	第５次５年計画調査を開始。
07.2	第21回古代城柵官衙遺跡検討会を仙北町で開催。特集テーマ『払田柵跡発掘20年の成果から－城柵研究の新たな視点を求めて－』。
07.3	『払田柵を掘る－払田柵跡調査20周年記念誌－』刊行。
08.9	第107次調査区（外郭北門跡東側）では、木道に転用されていた角材が上下端とも残存し全長4.6ｍであったことから、外郭材木塀の高さ（約3.6ｍ）が明確となる。
11.3	正報告書第２集『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』を公刊。
11.4	第６次５年計画調査を開始。長森丘陵部西側を主な調査対象区とした。
13.9	第119次調査区（長森西端部）では緩斜面地を段状・平坦に整地させた面に鍛冶・鋳造関係の工房跡が複数存在することが判明。「出羽」と刻書された土器も出土。
14.4	調査事務所に班制が敷かれ、調査班、総務班となる。
15.10	第122次調査区（長森中央西側）で瓦質土器、第６号漆紙文書が出土。
16.4	第７次５年計画調査を開始、真山地区を調査対象区に組み入れる。 本次計画において初めて「払田柵跡関連遺跡の現況調査」を明文化。
16.9	第125次調査区（真山丘陵部）で古代の火葬墓を検出、古代墓は初出。
17.4	調査研究等の事業を適正に実施するため、「史跡払田柵跡調査指導委員会」を設置し、４名の委員を委嘱。
19.11	関連遺跡の調査として、横手市雄物川町造山地区を試掘。８世紀代の集落遺跡を新発見。十足馬場南遺跡とする。
20.7	関連遺跡の内容確認調査として、横手市町屋敷遺跡において“稲倉跡”とも推測される大型の総柱掘立柱建物跡を検出。時期は９世紀後半。
21.3	正報告書第３集『払田柵跡Ⅲ－長森地区－』を公刊。

付編

払田柵跡第一二二次調査出土の第六号漆紙文書

山形大学人文学部　三上　喜孝

一　形状

漆紙（RW七九四）は、SKI一五五六C竪穴建物跡（鍛冶工房跡）の床面直上から出土した。その大きさは、長さ八・五センチメートル、幅七センチメートルほどであった。まず展開図（第107図）の③のラインにそって展開し、内面を赤外線ビデオカメラで観察したところ、鮮やかな楷書体の文字が浮かび上がった。①のラインについては、現状では展開は難しいと考え、展開作業は行わなかった。

展開作業により、漆紙文書は径一三・八センチメートルの円形に復元された。これは漆容器の内径を示すとみられる。一方、漆紙を遺棄する段階の工程は次のように推測される。

①のラインで山折りにする。次に直交する②のラインで山折りにする。最後に③のラインで谷折りにして遺棄するが、③の工程時にC・D片が脱落し、C片は折り畳まれたA片（ウラ）の上に、D片はB片の下に入り込む形で発見された。なお接合できなかったG～N片はA・B片の直下より出土したものである。I・J片には文字が見られ、I片はオモテ面、J片は漆付着面に対応する文書の一部と判断される。紙の表裏に文字が確認でき、漆付着面の文字は左文字としてオモテ面にみえている。

二　釈文

・（オモテ面）

宮城郷口壹拾陸人　請稲□□貳□□

〔丸カ〕

一保長□子部圓勝保口壹拾陸人　請稲□×

□戸主壬生部益成戸口貳人　請稲□×

□戸主□部子□×

・（漆付着面＝ウラ面）

□□□□

〔下カ〕

□給陸拾伍斛

□斛

□□

三　書式

〔オモテ面〕

現存の一行目の右側には文字が確認できないので、現存の一行目が文書の冒頭と考えられる。

一行目に郷名（宮城郷）と、郷の構成員の人数（郷口壱拾陸人）と「請稲」の文言があり、二行目に保長の名（一保長□子部圓勝）と保の構成員の人数（保口壱拾陸人）と「請稲」があり、三行目に戸主の名（□戸主壬生部益成）と戸口の人数（戸口弐人）と「請稲」の文言がみえる。四行目以降もおそらく戸主の名と戸口の数と「請稲」の文言が書かれていたと考えられる。一行目の「請稲」の下に「貳」の字が確認でき、おそらくは請求する稲の束数が書かれていたとみるのが自然であろう。以上をふまえると、全体として次の書式が想定できるであろう。

○○郷口○○人　請稲○○束
　一保長○○○○保口○○人　請稲○○束
　　戸主○○○○戸口○○人　請稲○○束
　　戸主○○○○戸口○○人　請稲○○束
　　戸主○○○○戸口○○人　請稲○○束
　　…

以上の書式から、この文書は、郷の構成員が稲を請求したことを記録した文書と考えられる。二行目以下は内訳であり、郷内の保長の名と保口の人数と請求した稲の額、さらに保内の戸主の名と戸口の人数と請求した稲の額が書かれているものと思われる。こうした記録は、一郷にかぎらず、郡内の諸郷の記録が書き連ねられていた可能性がある。

書風はきわめて謹厳な楷書であり、数字に大字が使われていることからすると、正式な文書として作成されたものとみることができるであろう。なお、界線は確認できない。

四　内容

〔オモテ面〕

冒頭の郷名は「宮城郷」と読める。出羽国内では置賜郡に「宮城郷」が確認される。

「郷口壱拾陸人」は、一郷の構成員の数としてはあまりに少ない。これは、構成員全体の人数を示しているのではなく、当該郷の中で「請稲」の対象者が十六人である、という意味と考えるべきで、あとにみえる「保口」や「戸口」の場合も同様であろう。ちなみに、ここでは「郷口」と「保口」の人数が十六人で一致しているが、これはあるいは、郷内で、「請稲」の対象者が一つの保の中で完結していることを意味しているのかもしれない。

逆に言えば、本文書は郷、保、戸の記載順の原則を厳密に守りながら書かれた帳簿であると考えられ、この雛形にもとづいて、各郷についても同様の書式の帳簿が作られていたことを示すものと考えられる。

養老律令の戸令9五家条によれば、「凡そ保は、皆五家相ひ保（まも）れ。一人を長とせよ。以て相検察せしめよ。非違造（な）すこと勿れ。」とあり、五

家を保とし、保長を置き、相互に検察させることを定めている。五保の確実な例は大宝二年（七〇二）美濃国戸籍（『正倉院文書』）にみえるが、それ以後の籍帳などにはほとんど実例がみられない。このことから、律令の規定にもとづいた保の実態を疑問視する向きもあるが、本文書は、郷－保－戸という順で記載されており、本文書が作成された九世紀頃の出羽国において、律令にもとづいた保がいちおう想定されていたことを示すものである。なお、「保長」については、石川県津幡町加茂遺跡の過所様木簡に「保長」の語がみえ、九世紀の越前国においてもその存在が確認される。

○石川県津幡町加茂遺跡出土第六号木簡

・「往還人　□□　丸羽咋郷長官
　路□（作カ）□□□　不可召遂　」

・「道公　□□　乙兄羽咋□丸『保長羽咋
　『二月廿四日』　男□丸（伎カ）』」

一八一×二九×四　〇一一型式

（『木簡研究』二三、二〇〇一年）

ところで本文書の「保長」の上には「一」という数字が付されている。これは、あるいは、郷内の保に付せられた番号である可能性がある。

これまで、郷内の「戸」に番号、すなわち「戸番」が付せられていたことの実例として、岩手県水沢市胆沢城跡出土の第四三号漆紙文書が知られている。

○岩手県胆沢城跡出土第四三号漆紙文書

×継年□×
×清成年五×
×□阿伎麿年廿八×
　×部□麿年廿六　、衣前郷□×
　×部国益年卌二　、駒椅郷廿一戸主丈部犬麿戸口
×坐部□□麿年卅六　、潴城郷卅八
　　×年廿三　駒椅郷卅八戸主坐部諸主戸口
　　×□年卅一　、潴城郷五十戸主吉弥侯部黒麿戸口
　　×駒椅郷十七戸主坐部本成戸口

（紙継ぎ目）

　　×□年廿三　、高椅郷廿五戸主刑部人長戸口
　　×、駒椅郷八戸主坐部人永□□×

（『胆沢城跡　昭和五十九年度発掘調査概報』一九八五年）

この文書中の郷名と戸主名との間にみえる数字は、郷内の戸それぞれに付せられた「戸番」であると平川南氏は指摘している（『漆紙文書の研

究』吉川弘文館、一九八九年）。平川氏は、こうした戸番が、兵制の維持がとりわけ重要であった陸奥国の地域的特殊性とみる必要はなく、九世紀において全国的に実施されていた可能性もある、とも指摘しており、出羽国においても、同様の方法がとられていた可能性は十分考えられる。すなわち「保長」の上の「一」は、「戸番」ならぬ「保番」であった可能性が高い。

ちなみに三行目の「戸主」の上にも一字分の文字が確認できるが、現状ではこれが数字かどうかは断定できない。

次に、各行の下にみえる「請稲」に注目すると、稲の出挙（貸付）の申請を意味する表現と考えることができる。

同じ払田柵跡から出土した木簡の中に、

○払田柵跡出土第一七号木簡

×解　申請借稲×

（一一二）×二二×四　○八一型式

（『払田柵跡Ⅰ　政庁跡』一九八五年）

と書かれたものがかつて出土している。稲の貸付を請求した際に作成されたものと考えられ、上記の木簡などを参照すれば、稲の貸付を「請稲」という形で申請していた可能性は十分考えられる。

本文書と類似する漆紙文書として、以前に秋田城から出土した第二号漆紙文書、いわゆる「出挙貸付帳様文書」があげられる。

○秋田城跡出土第二号漆紙文書

□〔佰カ〕漆拾人　□〔稲カ〕□□□拾参束伍把

直忍麻呂戸口　□□□麻呂貳束

□伍束　丸子部□□□〔刀カ〕自売伍束

□貳束　戸主秦連恵尓□

□伍束　戸主磯部小龍戸口

束　□部小刀自売伍束

戸主宍太部道石伍束

（『秋田城出土文字資料集Ⅰ』一九八四年）

二段書きである点や、戸口の個人名が書かれ、その下に束数が書かれている点などは本文書の体裁と異なるが、冒頭に戸口と稲の数量の総計が書かれ、二行目以下に戸主名が書かれている点、数字が大字で書かれている点などは類似しており、両者は近い書式を持っていると評価できる。

また、同じ秋田城から出土した二八号漆紙文書は、表裏の利用の仕方も含めて、本文書ときわめて類似した書式や内容を持っている。

○秋田城跡出土第二八号漆紙文書（第108図）

・A面（オモテ面）

□□　□陸拾束
海直千麻呂陸拾束
海直□　□束
度津　　呂肆拾捌束
出羽郡
合□壱□□〔伍ヵ〕拾伍人

・B面（漆付着面）

□六千□
□長官御料三千
　　四百□〔束ヵ〕
□□□五百八□
□□

（『平成12年度秋田城跡調査概報　秋田城跡』二〇〇一年）

オモテ面は界線をともなった謹厳な楷書体で、数字に大字が使われていることから、正式な帳簿として保管された一次利用の文書であると考えられる。これに対してB面（漆付着面）は、肉太な字で不揃いに書かれていることから、二次利用面であると考えられる。表裏面の文字の雰囲気の違いは、払田柵跡出土の本文書ともきわめてよく類似している。

次に書式についてみてみると、A面（オモテ面）は、人名の下に稲の束数が大字で書かれており、さらに、五行目には「出羽郡」という項目立てのあと、「合□壱□□拾伍人」と、郡内の人数記載が書かれている。『概報』では、「七行目以降は欠失しているので不明であるが、郡の全体の稲束量の合計が記されていた可能性もあり、また郡の下位区分として郷ごとに細分されていた可能性もある」としている。おそらく、郡ごとに、まず対象者の人数の合計（「合□…人」）や稲束量の合計をあげ、その内訳として、郷内の人数や稲束量、さらには戸内の人数や個人名と稲束量を書き上げたものが、この帳簿の全体の書式だったのだろう。もしそのように復元できるとすれば、払田柵跡出土の本文書と、きわめて近い書式を持っていたことになる。

内容については、『概報』では「このような（人名）＋（稲束量）を列記した帳簿は、今までに出土した漆紙文書の例では出挙関係の帳簿と考えられてきたものであり、本二八号文書もその類型に入れることができる」としている。払田柵跡出土の本文書も、同様の内容のものであると想定してよいであろう。

以上のように、今回出土した漆紙文書も、これまで出土したこれらの文字資料と関連させて考えていく必要があると考える。

〔漆付着面〕

オモテ面にくらべて比較的大きな文字で書かれており、オモテ面の謹

厳な書風にくらべて、やや肉太で大雑把に書かれていることから、オモテ面が正式な帳簿として機能し、その機能が終わったのちに、ウラ面にメモ書き風に書かれたものと考えられる。

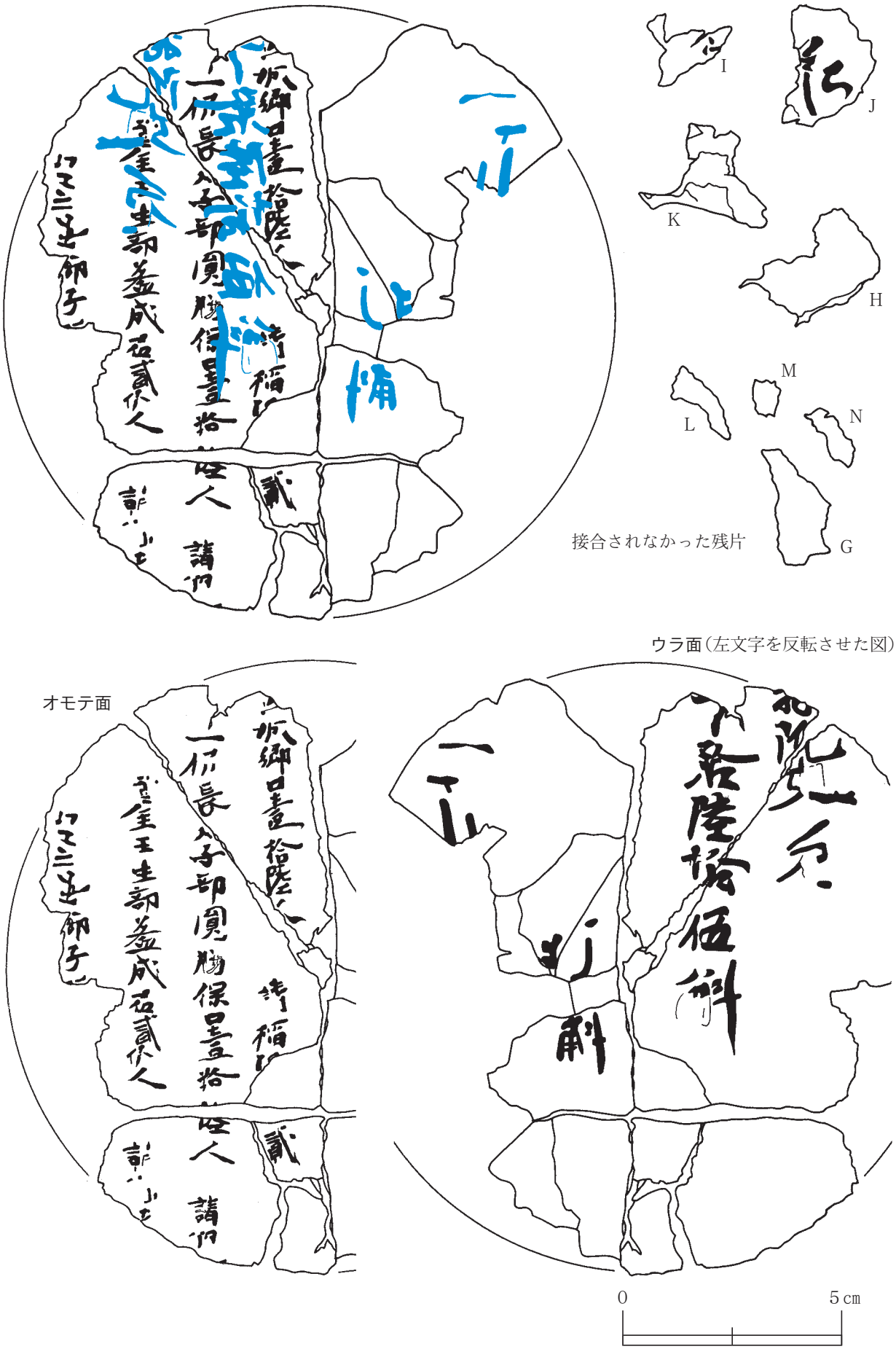
単位に「斛」が使われており、「□給」の語がみえることから、米の支給について記録したものと思われる。

五　まとめと課題

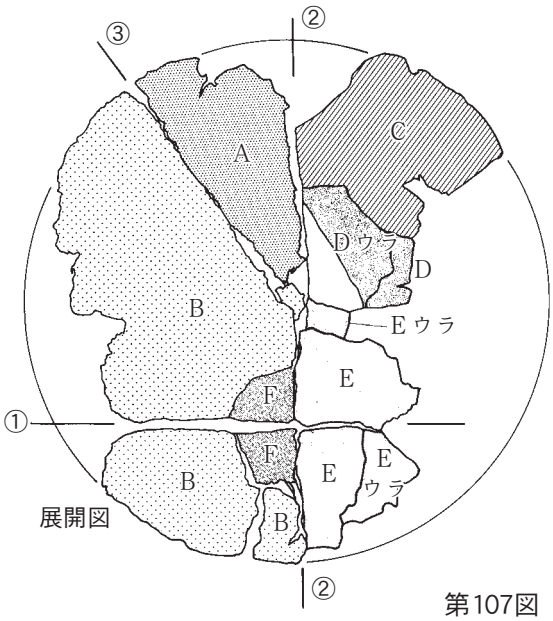
この漆紙文書の一次利用面は、「宮城郷」の「口」（構成員）の、稲の請求額を記録した帳簿であると考えられる。帳簿の記載様式として、保や戸の内訳記載が認められ、郷―保―戸といった把握が九世紀段階の出羽国で行われていたことを示している。これまで、必ずしも明らかではなかった九世紀段階の五保の実態をうかがうことのできる資料として、大きな意味をもつものといえよう。また、本文書の記載から、郷内の各保には、番号が付されていたことが考えられ、これまで知られていた「戸番」に加えて、保を単位とした民衆把握においても同様の方法がとられていた可能性が指摘できる。

文書の内容については、これまで秋田城跡などで出土している、出挙にかかわる帳簿と類似しており、本文書の性格も、同様なものと考えてよいであろう。

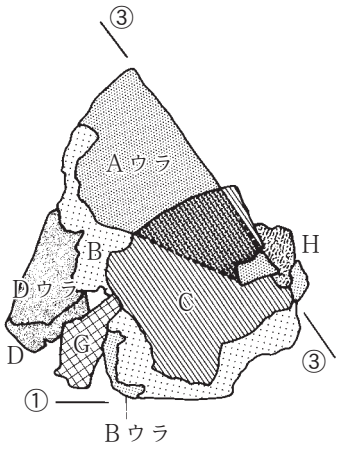
ところで、一次利用面の文書の冒頭にみえる「宮城郷」が、『和名抄』にある置賜郡の郷名を指すとすれば、本文書がどこで作成され、どのような経緯で払田柵にもたらされたのか、また、そのことが何を意味するのか、などが今後の課題となるだろう。先にあげた、秋田城跡出土二八号漆紙文書では、「出羽郡」の出挙に関わる帳簿が発見されており、国レベルの機関において保管された帳簿である可能性が指摘されている。同様に本文書も、郡を越えた記載内容を持っていると考えられることから、やはり国レベルの機関において保管されるべき帳簿であった可能性がある。払田柵の性格を考える上で重要な資料といえよう。



第106図　第122次調査区出土の第６号漆紙文書



展開図

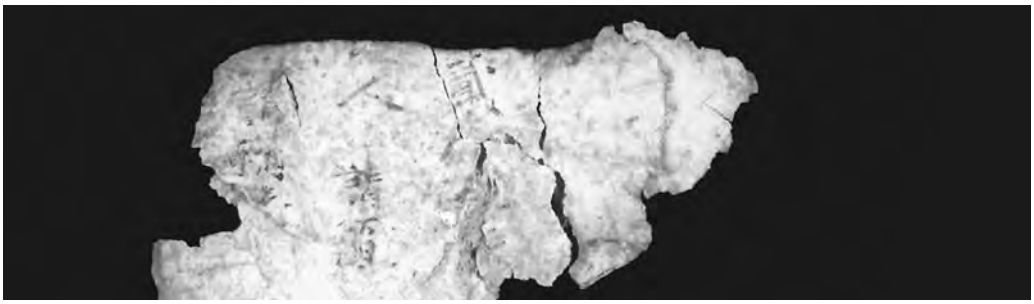


出土状況図

出土状況写真

［20030917 撮影］

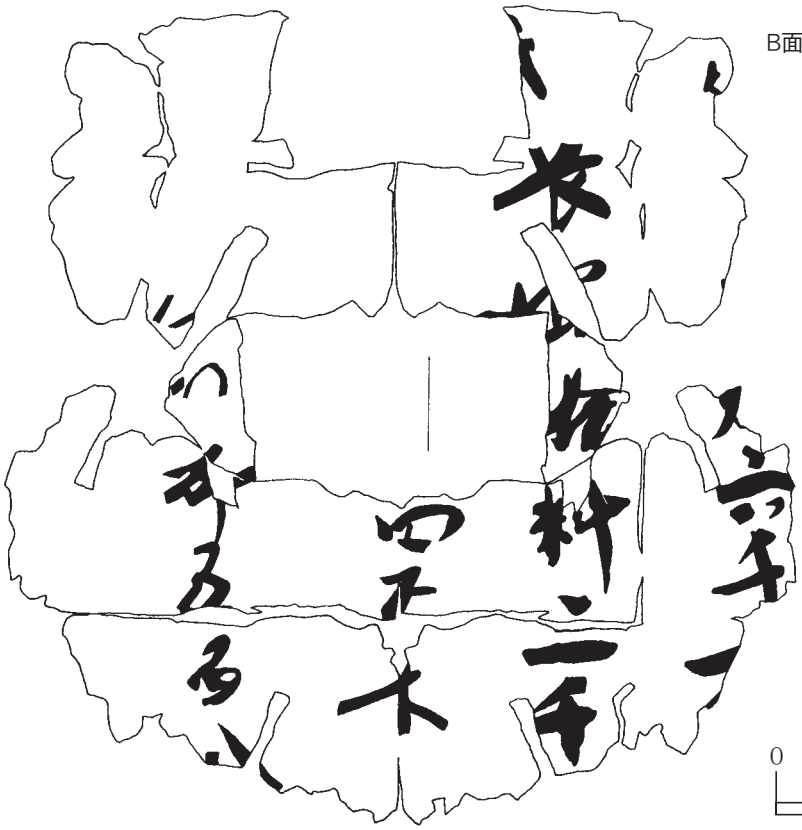
第107図　漆紙出土状況と展開模式図



漆紙文書　赤外線写真（原寸大）

デジタルカメラ（400万画素）で撮影

A面（オモテ面）



B面（漆付着面）

（『平成12年度秋田城跡
調査概報』p71を一部改変）

0　4cm

第108図　秋田城跡出土第28号漆紙文書

払田柵跡調査事務所　要項

1　組織規定

秋田県教育委員会行政組織規則(抄)

第八条　　生涯学習課の分掌事務は、次のとおりとする。

十五　　払田柵跡調査事務所に関すること。

第十三条　　払田柵跡調査事務所の名称及び位置は、次のとおりとする。

名　称	位　置
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所	大仙市

2　払田柵跡調査事務所の分掌事務は、次のとおりとする。

一　史跡払田柵跡の発掘及びこれに伴う出土品の調査研究に関すること。

二　史跡払田柵跡の環境整備に関すること。

2　職　員　　(平成21年３月現在)

職	氏　名	備　考
所　　長	佐藤　了	本務　秋田県埋蔵文化財センター所長
副主幹兼総務班長	石川　清二	本務　秋田県埋蔵文化財センター総務班長
主　　査	千田　喜博	本務　秋田県埋蔵文化財センター総務班
主　　事	高村知恵子	本務　秋田県埋蔵文化財センター総務班
主任学芸主事兼調査班長	高橋　学	兼務　秋田県埋蔵文化財センター南調査班
学芸主事	藤田　賢哉	本務　秋田県埋蔵文化財センター南調査班

3　調査指導委員

国指定史跡払田柵跡の調査研究等の事業を適正に実施するため、史跡払田柵跡調査指導委員会を設置し、４名の委員を委嘱した。

(『史跡払田柵跡調査指導委員会設置要綱』平成17年４月１日実施)

史跡払田柵跡調査指導委員　名簿

	氏　名	現　職　等	専門分野
委員長	新野　直吉	秋田大学名誉教授・秋田県立博物館名誉館長	古代史
副委員長	岡田　茂弘	国立歴史民俗博物館名誉教授	考古学
委　員	黒崎　直	富山大学人文学部教授	考古学
委　員	熊田　亮介	秋田大学学長特別補佐	古代史

報　告　書　抄　録

ふりがな	ほったのさくあとさん　ながもりちく　　ほんぺん　べっぺん
書名	払田柵跡Ⅲ－長森地区－［本編］［別編］
副書名	
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第448集
編著者名	高橋　学・藤田賢哉・三上喜孝
編集機関	秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
所在地	〒014－0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地
発行年月日	2009年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ほったのさくあと 払田柵跡	あきたけんだいせんしほった 秋田県大仙市払田 みさとちょうほんどうしろまわり 美郷町本堂城回	212 434	53-1 54-1	39°28′06″	140°32′57″	（下記）	（下記）	学術調査
				北緯・東経は世界測地系による政庁部での数値				

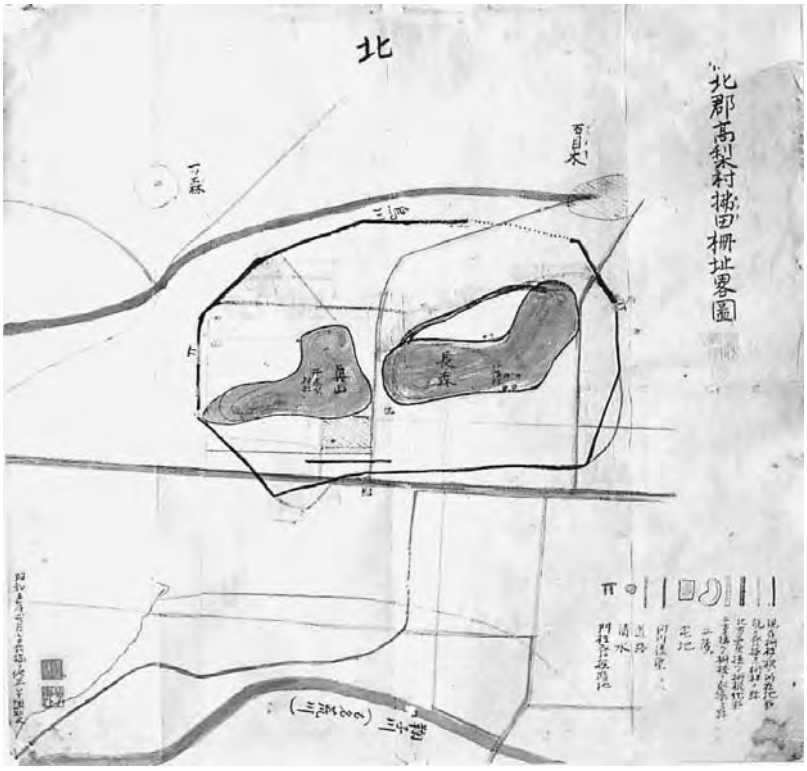
次数ごとの調査期間・面積は次のとおり。①第49次（821012～821211、830411～830525、831003～831104：補足調査含む115㎡）、②第90次（910622～911113：1275㎡）、③第95次（930802～931012：445㎡）、④第100次（940629～941028：936㎡）、⑤第105次（950712～951019：835㎡）、⑥第115次（990419～991022：1221㎡）、⑦第116次（990826～991019：334㎡）、⑧第117次（000419～001110：532㎡）、⑨第118次（000529～001122：153㎡）、⑩第119次（010507～011102：500㎡）、⑪第120次（010928～011102：146㎡）、⑫第121次（020603～021129：854㎡）、⑬第122次（030526～031119：425㎡）、⑭第123次（030826～031119：143㎡）、⑮第126次（040628～041214：146㎡）、⑯第127次（041116～041214：19㎡）、⑰第130次（050620～050810：106㎡）、⑱第133次（060720～061226：262㎡）、⑲第135次（070625～071210：152㎡）、⑳第137次（080527～081110：84㎡）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
払田柵跡 長森地区	城柵	平安時代	掘立柱建物跡、竪穴建物跡、鍛冶工房、土坑、柱列・板塀跡、溝跡、道路状遺構、柱穴など	須恵器、土師器、瓦、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁（越州窯系）、瓦質土器、フイゴ羽口、鉄製品、鉄滓	長森地区を長森東方地区、政庁西側地区、外郭西門東側地区、ホイド清水周辺地区、丘陵北側裾部に分けて報告
	集落跡 石器石材採掘場	縄文時代	竪穴住居跡、土坑、柱穴 Ｔピット	縄文土器、石器石製品（岩偶、玦状耳飾）	前期末の集落跡、集落の成立は石器・石材採掘場であることに関連か。他に、中期～晩期の遺物あり
	墓域	中世	墳墓・火葬墓・焼土遺構（火葬施設か）、土塁・空堀（墓域の区画施設）	須恵器系陶器、青磁（同安窯系）	長森西端部で確認された墓域、13世紀代
			土葬墓	銭貨（洪武通寶→模鋳銭）、木片（棺か副葬品か）	政庁西側地区で確認された墓域、15世紀末から16世紀代か

要約

払田柵跡正報告書の第３冊目。対象は外郭で囲まれた長森地区。同地区の内容は、政庁跡（『払田柵跡Ⅰ』）と区画施設（『払田柵跡Ⅱ』）としても前２冊で報告済み。本報告では、前２者で取り上げられなかった地区の様相を中心に詳細に報告。

長森東方地区は官衙ブロックとその変遷、長森西方地区は、鍛冶関連の工房跡及び管理施設等の発見、長森北方地区では溜井である“ホイド清水”と政庁からの道路跡、丘陵北裾部を東西に走る道路跡等について報告。考察では、外郭区画施設と門・櫓状建物についての再考や、長森地区の歴史的変遷を古代のみならず、旧石器から近代にかけて略述した。



後藤寅之助が昭和５年に作成した『仙北郡高梨村拂田柵址略図』
左下には、「昭和五年四月七日前稿ヲ修正シテ調製」と記されている

秋田県文化財調査報告書第448集

払田柵跡Ⅲ

―― 長 森 地 区 ――

【 本 編 】

印刷・発行　2009年３月

編　　集　秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
〒014－0802　大仙市払田字牛嶋20番地
電話（0187）69－2442　FAX（0187）69－3330

発　　行　秋 田 県 教 育 委 員 会
〒010－8580　秋田市山王三丁目１番１号
電話（018）860－5193

印　　刷　株式会社フロム・エー